生田春月全集

第十巻

評論集

新潮社

白銀の雪上
馳けらんとする狼よ
われらしは〳〵
狼ならんとすることあり

春月

白銀の雪上
駈けらんとする狼よ
われらしは〳〵
狼ならんとすることあり

春月

目次

文學批評の諸問題……一五四

書物の中の人……二一〇

詩話會時代（一九二五—一九二九）

附録

評論集

山家文學論集

處方箋

『山家文學論集』の著者のために著者の中なる批評家によつて

一、泥土も砂金を含む事がある。然し、その偶然は、直ちに凡ての泥土を貴重にする所以ではない。汝がその泥土を持出し得る唯一の口實は、泥土もまた何かの役に立つかも知れないといふ一つの假定である。

一、文學者は、その書く事よりも、その書かない事によつて、自己を語る。

一、思想が單なる思想である間は、多くの意義なし。思想が信念となるに至つて、それははじめて一つの力となり得る。

一、汝が憂世の士である事は敢て妨げぬ。然し、それよりも先づ、汝の膚淺なる知識と、狹隘なる見識とが、憂ふべきものではあるまいか？

一、汝の文學的活動についての、一切外部の事情の不利は、つねに汝の內部の力の不足である。

一、多少の虛名のゆゑに、その虛名なき他の人よりも、自分を一段立勝つた人間と考へるならば、汝は最も憫れむ

べき空虚を暴露するものである。汝の生涯の意義は、むしろかかる「價値の幻影」の打破にあつて存する事を知れ。

一、「調子をつけずに語れ」とは、適切なる警告である。詩人はあまりに調子をつけて語る。あまりに聲高に語る。ニイチエは人の理知よりも、より多くの人の感情に訴へる。汝はむしろモンテエニュに學ばねばならぬ。

一、批評家は言葉の測り手である。一語一語を、精密なる判斷のはかりにかけて出す。汝の激情の鎭靜せざる間、汝は善き批評家ではない。

一、「世間を相手に論爭するのは、面白いかも知れないが、危險な事である」（アミエル）

一、仔猫は靜止したものには少しも關心しない。一本の糸でも、それが動き出すと、喜んで飛びかかる。運動が物に價値を與へるのである。汝も仔猫に似てゐる。

一、平地に波瀾を起すといふ言葉がある。人間の行動も、結局は、すべて平地に波瀾を起す事に外ならないであらう。そして、すべての文學もまた。

一、人間の一生は、るつぼの中に投入れて煮られるやうなものだ。また、その出處進退は、一生續く試驗を受けてゐるやうなものだ。文學者の著作は、その僞り難き答案である。汝の筆にする一語一語もまた。

一、歐羅巴人の問題が、必ずしも我々の問題ではない。

一、我々のところでは、人間が注意されるためには、あまりに自然が美しかつた。人は自然をのみ見て、自己を觀る事を忘れがちであつた。かくて、花鳥風月の詩が生れた。今や、我々は自己を、人間を觀なければならぬ。

一、「受働的な自然享受は、藝術から驅逐されるであらう」（トロツキイ）、日本の文學を根柢的に變革せんとするものは、トロツキイの不敵なる同士である。故鄕なく、自然なき機械人である。

一、流行が現代の王である。現代の最大の叛逆者は、資本主義社會に對する叛逆者ではなく、それらをも籠めて、一切流行王の權威（及びその奴隷）に對する叛逆者である。

一、頭腦と心臟とが、別々にはたらく。頭に胸がついて行かないとき、その生活は虛僞となる。自己の個性よりも、社會的流行性を重しとするものは、不幸なる分裂と、限りなき空虛とに、夜半めざめて悔があるであらう。

一、人間の性格は運命である。社會組織を變更するとも、人間の性格は變更さるる事なし。汝の苦悶の出口は、自由なる藝術の外になきか？

一、アナアキズムが汝を煮きつける？　頭のアナアキイに氣を付けるがいいぞ。

一、虚無思想であると？　思想の虚無のまちがひではないか？

一、座席のない男かな――一つの主義も、立場もないとは！　あらゆる場處でしめ出しをくらふのが、汝の當然の運命である。太陽は一時に地球の兩面を照らす事なきを知れ。

一、汝の諧謔は、著作家としての汝の不幸である。汝が傳家の道化帽一つ、これ虚無と絶望との苦海に於ける汝が唯一の浮袋であるといふ。しかも、汝はその浮袋のゆゑに、公衆の誤解の海に漂はねばならぬ。道化帽をかぶつて、人の笑ひを貪らんよりは、汝はむしろかの情熱の詩人の如く、潔く溺れ死ぬべきではなかつたか？

一、文壇――かかる言葉の、再び汝の筆より流れ落ちざらん事を。汝の孤獨は、汝がしばしばこの語を筆にした事によつて空しくなつた。汝が凡てに對して宥和的であり、寛容であるのはいい。然し、本質的なるものに、汝は今後より一層忠實であらねばならぬ。

一、おなじ日本語である。我々はやすやすと讀む。しかもつひにその眞意を理解しない場合の、いかに多き事ぞ。言葉は靈の影である。魂が違へば言葉も違ふ。魂と魂との結び合ふとき、戀人同士は、無言の眼付によつても、そ

の心を通はす、その世界を異にするものは、千萬言もつひに相互の理解に導かない。流行の言葉はすぐ通ずる、自己の言葉を語れば、大抵は不通である。言語不通は、精神上の異邦人として、止むを得ざる災厄である。

一、「野心を閉塞する。外部的成功を偶然的のものとして見る。視野と思索の範圍を擴大する。日毎に全力を以て前進する。最後まで大なる知識欲を保持する。世界を觀察し、認識し得る事に滿足する。生の勞苦の酬いらるる事を確信する。」（テエヌ）

*　　*　　*　　*

山家文學論とは、奇異なる題名である。それゆゑ、從來しばしばその意味を、私は問はれた。この中には、相矛盾する多くの意義が含まれてゐるから、說明しない方がいいかとも思はれる。

然し、その最も普遍的な意味について、極めて適切な小泉八雲の言を（邦譯全集第十三卷）發見したから、左に摘載する。

「それ（學校教育）が無いと、制作に於て常に依然として、文學上所謂「田舍風（プロヴインシヤリズム）」となり易い。文學上の稱呼として、田舍風といふのは、田舍の調子、考へ方や話し方の野暮な不器用を意味しない。非常に平凡に流るゝ傾向、一般にわかつた事を、新發見でもあるかのやうに、緊說する性癖をいふ。」「獨學の大危險は、たまたま當人が異常の機會、異常の趣味を有し、且つ機會を求めたり、趣味を養成したりする時間が澤山ない以上は、終生田舍風の程度になつて了うことである。」（落合貞三郎氏譯）

これは私のやうな閱歷の人間には、あまりにも適切な批評ではあるまいか。私の題名は又、その意味の自己非難を

も含むものである。然し、それのみには止まらない。田舍風といふ事は、私にとつては、また、文字通りに取る事によつて、その安住の土地でもあり得るのだ。

氣が利くといふ事は、多くの場合、淺薄を意味する。世には單に氣が利いてゐると思はれたいばかりに、自己の靈魂をも賣るものがある。この書の中に、少しでも氣が利く事を念としたかに見られるところあれば、私は自分の未熟を恥ぢなければならない。

過去數年間の論策、最も未熟なるものを捨てて、やや見るべきもの半ばを選び、これに最近の想片の全部と、及び絶版の感想集中の論文をも三四加へたれば、今日迄のこの方面の努力は凡そこの一卷に盡きるであらう。しかも今日なほ、ただ貧しき前奏にすぎないのは、小器の晩成のゆゑと自ら慰藉すべきであらう。

*　　*　　*　　*

原則として、評論集は、いかなる大家のものといへども、讀者を有しないがため、從來我が國の出版書肆の最も悦ばないものであつた。殊に、私のやうなものの評論集が、何程の市價を有し得ようか。それにも拘はらず、今日の如き時期に、こころよくこの出版を引受けてくれた新潮社主佐藤義亮氏の厚意に、私は深く感謝の意を表せずにゐられないものである。

昭和二年七月　　　　牛込辨天町根來橋畔にて

時代と個人との合奏曲

反語、逆說、諧謔、背理、並びに僅少の眞實

山家文學論

知られざる作家

伊太利の頑童パピイニは、最近私の發見した最も愛すべき人物だ。彼は實に創見に富んだ人物だ。然し、彼の創見よりも、そのあらゆるオーソリテイに楯ついて憚らない大膽不敵なむかうみずが、更に自分には氣に入るのだ。

伊太利の殆んど唯一の哲學の大家、ベネデットオ・クロオチェ、また伊太利の殆んど唯一最大の輸出品、ガブリエーレ・ダヌンチョ、これが彼の目の敵である。彼は更に、歐羅巴の人氣者モオリス・メエテルリンクの幻術をも看破する……

この種幸福な、そして高名な方々、お高くとまつたお歴々が、彼は氣に食はぬらしい。その代り、不當に無視されてゐる、虐待されてゐるみじめな男を、彼はその瘦腕の根かぎり胴上げにしようと企てる。この點で、彼は遺憾なく無産階級的批評家だ。より以上に、彼はアナキシストだ。よりより以上に、彼は我が日本の評壇に最も缺如してゐる底の男らしい、キビキビした、嬉しい人物だ。

彼は頻りに哲學を振廻す。然し我々は彼の哲學的教養が、その惡評するクロオチェに匹敵し得るものかどうかを疑ふだけの理由を有してゐる。然し、彼が我々に親しく、且つ愛すべきは、また丁度、その然るが故であるとも云ひ得ら

れる。とは云へ、彼の頭腦と彼の讀書力とは、もとより莫迦にならぬ程度のものである。それは敢てここに一つの空腦の保證を俟つべきでもあるまい。

このパピイニは、少年の時から、おふくろの臍繰りをかすめてまで、あらゆる書物を讀んだ男だ。そして、たうとう彼は、彼の愛するホイットマン、ニイチエ、スティルネル、ウント・ゾオ・ワイテルの背後に屹然として聳え立つてゐる一大天才を發見したのだ、知られざる天才を……

彼れ「行き詰まつた男」は、實は行き詰まつたどころか、まだはじめてさへゐなかつたのだと、最後に告白する、むしろ宣言する。然し、この蟲のいい厚顏な宣言を、我々は彼がこの知られざる作家を發見し、その禮讚を書いた事によつて、はじめて十分に承認するのである。

して、その知られざる作家とは？——

それは「有名」に對する「無名」ではない。有名作家を攻撃する事によつて自ら有名にならうとするやうな、彼等の聲價を貶しめてこれに取つてかはらうとするやうな、物欲しげな無名作家を意味するのではない。また、さうした喧騷がなくとも、いつ有名なお歴々に加はるかも知れないやうな、知られざる作家でもない。それは全然、知られざるものである、曾つて知られず、今後も永久に知られざるものである。世に知られざるが故の「無名」ではなくして、全然的に名の無いものである、無名者である。何たる怪物であらう、この知られざる無名の人間は……しかも、それをパピイニは發見した。これ、實に偉大な發見である。ホメロスの發見よりも、シエクスピアの發見よりも、それは偉大な發見である。なぜなれば、ホメロスやシエクスピアの如きは、この知られざるものの影像に過ぎないからである、形骸に過ぎないからである。むしろ、そのレッテルに過ぎないからである。

眞の天才はインコグニトだ。

古來、自ら天才を標榜したものに眞の天才があつたためしがない——(因に、自分で愚人だと云ふものに、本當に自分を愚人だと信じてゐたものがない。おれはお人よしだよといつも云ふ人は、既にその一事によつて、十分そのお人よしでない事を證明してゐる……)

然しまた、一般的に天才として認められた名前も、果して眞にその天才の眞の名前であつたか？　實は、或る厚顔な男の僞稱ではなかつたらうか？　さもなくとも、それは別にその「本名」を有つてゐるものの「假名」若くは「匿名」に過ぎないのではあるまいか？　彼はインコグニトで遍歷してゐる。世紀から世紀へと……そして、そのインコグニトの本體は——名が無い！　もつとも、この無名者にも何か名が無くてはならぬ。名が無くば何とそれを呼ぶべきか？　私はそれを摸索してみる……それだ、それに違ひない、かつてそれは漠然と「人類」と云つた。今では「民衆」と呼ばれてゐる。

民衆こそ——眞の天才だ。

×

然らば、民衆は何を書いたか、何を作つたか？

パピイニは何だかやかましいものを擧げてゐたやうだ。ニイベルンゲンリイドだつたかしら、エッダだつたかしら？　それとも聖書か、佛典か？

我々はまた我々で、それをいくらでも擧げてみせる。我國の歷代の歌集は、いかに多くの讀人不知の歌に富んでゐる事であらう。萬葉のすぐれた歌人達の多くは、知られざる詩人であつたではないか。古事記は稗田の阿禮が作つたのでもあるまい。竹取物語は？　平家物語は？　梁塵祕抄は？　まだいくらでもある……

第一、民謠といふものがある……民謠とは、知られざる詩人の作品に與へられた名である。そして、民謠ほど眞實

なすぐれた詩は、知られたる詩人の作には、あまりふんだんには見出され得ないであらう。(もつとも、今では知られたる詩人が、民謡と稱して、その小唄の前に自分の名前を署名する。それを嗤ふ者は云ふ、「厚顔でもあり、頭がわるくもある」……)

然し、パピイニから私はもつと進む。

民衆はあらゆる讀人不知、作者不明の作品を書いたばかりではない——彼は『イリヤス』『オデッセウス』を書いた、彼は『神曲』を書いた、『ハムレット』を書いた、『ファウスト』を書いた、『アンナ・カレニナ』を、『カラマゾフ兄弟』を書いた……と云はうとするのである。

すぐれた作品は、常にその時代を全的に現してゐる。そして、その時代の一切の「人間的なるもの」の集大成である。例へば、源氏物語は王朝時代の、近松、西鶴は元祿時代の……

すぐれた詩人は、常にその時代の喇叭である、笛である……

彼等を借りて民衆が語るのだ。民衆がなければ傑作はない。

カアライルは英雄崇拜論を書き、エマスンは代表的偉人論を書く。

人が時代を造るか、時代が人を造るか?

恐らく人は——即ち或る特定の個人は——時代の象徴にすぎないであらう……そして時代とは、結局、ある一つの階段に立つところの民衆の別名に外ならない……

彼等はその名を有つ、然しその名を彼等に與へたのは我々である、民衆である。と云ふより、彼等の名が我々を代表するために作られた……

我々はゲエテを崇拜する。しかもゲエテは、その接觸するあらゆるものの中から、その榮養分を攝つた。自分は自

分の遭遇した一切のものの綜合である、その名はゲエテ……それは彼自身の言葉だ。即ち、ゲエテの名は一つの象徴にすぎない。ゲエテの名のもとに、無數の人がゐるのだ。ゲエテの名に於いて、我々はその多數者を尊んでゐるのだ。ゲエテの名が我々に何の益ぞ。ただゲエテの作を讀め。價値は作品にあるのだ、作者の名にあるのではない。作者の名前なんかどうでもいい――それは人間の作だ、民衆の作だ……

それを讀むものが、その作者だ。讀むのは書くのだ、作るのだ。

我々は虛心平氣に、謙遜に(民衆はナイーヴである)ホメロスを、ダンテを……トルストイを、ドストエフスキイを讀む。讚嘆する、崇拜する、渴仰する。そのとき、我々は、ホメロスを……ドストエフスキイを所有する。「伊作、おまへ僕のトルストイの本をどうした?」「兄さんの本?二階の押入にあるよ」こんなナイーヴな所有ぢや……と笑つてはいけない。そこにはもつと深いものを示す暗示がある。愛讀書は單なる藏書でなく、自分の魂だ。それには自分の生命が書かれてゐる。自分でなくて誰がそれを書かう!そこで萬人の胸に觸れる傑作ほど、民衆のものだ、民衆の作だ。トルストイは我々の作品だ。ドストエフスキイは我々自身の聲だ。

我々はまた、虛心平氣に、謙遜に、武者を、菊池を、芥川を、ウント・ゾオ・ワイテルを讀む。彼等の才能を喜ぶ。我々は彼等を批評しない。この批評しない心が、ナイーヴに受け容れる白紙のやうな心が、彼等を我々の所有とする。即ち、彼等は我々の作品だ。

――よし我々が、民衆が、實際、彼等の作品を自ら書かなかつたのだとしても差支はない。なぜなら、これらの作品に不朽の聲價を、少くとも、我々の生命の期間だけの聲價を與へたものは、我々である、民衆である。我々は、民衆は、彼等をその手中に持つ。彼等は我々の心像である、我々の表象である……

×

すべての藝術品は、その創造されず、世に生まれ出でない以前は、作者のものである。が、一旦それを創造し、世に公けにしてからは、社會のものである、社會の共有物である。

例へば、國木田獨步の作物は——といふより獨步其人が既に——今や全く社會の共有物である。獨步の生きてゐるうちは、まだ彼の個人的意志が、彼の「我」が、それに抵抗した。彼は自分が社會を所有してゐるとも思ひ得たであらう。然し、彼の死は、彼をして完全に社會のものとした、——我々は獨步を所有してゐる。

——然し、事實は、彼の生存時といへども、彼は民衆の、その時代の象徵であつたのに過ぎない……

そこで、生きてゐるうちになほ、我々はその社會に所有されてゐる事を自覺しなければならぬ。我々民衆は、所有し、そして所有されてゐる。

作者はただ器具にすぎない、水を導く管にすぎない。その管を通つて、他のものが行く。しかもその管は自分だ。自れを空しうして…… 自れを生かす。自れを主張しつつ……自れをゆるす。

この未熟な思想、矛盾撞着の語、獨斷、支離滅裂……それは許して貰へるだらう、力が足りないのだから。もつと力さへあつたなら、私はここで藝術家と個性の問題、藝術家はエゴイストなりや？ 非エゴイズムの藝術はあり得るや？——などの問題について書く事が出來たであらう。ところが、思索の力なき、かなり頭の悪い私は、もうヘトヘトになつて、止むを得ず今はそれを避ける。

私は私の思想の死兒を生む、早產の死兒を……いつでもだ。

×

（そして、これらの言葉は、勿論パピイニの言葉ではない。私は今、手もとに書物を持たないし、パピイニの言をこまかに記憶してもゐない。我れパピイニを誤解したか、然らばこれは私のものだ——そして、この「私のものだ」が

最もいけない！　然し、この悪い頭は私のものだ！)

そこで、一體、こんな想片によつて、私はそもそも何を語らうとしてゐるのか？　それは囈語か、(私の思想はいつも氣分だから)でもよろしい。が……

名聲

私は作品の前に置かれた署名が、單なるフヽチヽヤヽウヽにすぎない事を云はうとしたのである。その認識の十分ならぬところから、空名に感激し、虚名に拜跪するの喜劇を生む。事物を事物の眞の相に於いて見る事の出來ない錯誤を生む。

衣裳哲學者を雇つて來ないか。名前といふ衣裳を剝いで、裸一貫で、目方をかけて見ようぢやないか。名前さへ美しければ美人だ、とは誰れも認めまい。しかも、大家の名前さへあれば、頭をさげる。それでも、妻沼(めぬま)の聖天樣、柴又の帝釋天を信仰するもののみが迷信の徒であるのだらうか？

考へて見れば、名前とは奇妙なものである。平吉といふ名をつけると、いかにも平吉らしい。長藏といふ名がつくと、いかにも長藏らしい。猿といふと猿……狸といふと狸……

その名前が、何等かの價値を有つものとして一般に受け容れられると――そこで名聲なるものが生ずる。

名聲！　それこそ不思議なものの極みである。無にして有、有にして無、その本體は何であらう？　光りであるか影であるか？　價値はその物自體にあるか、それを認めるものにあるか？　象徵と象徵されるものとは、一にして二、二にして一。神佛の御利益は、授けられるものか、自分で授かるものか。恐らくは、「鐘が鳴るかよ撞木が鳴るか、鐘と撞木のあひが鳴る。」

×

名士は自ら傲つて、無名者を侮る。しかも彼の名聲をつくるものは、無名者である、民衆である。それは一つの迷信であらうか？　幻影であらうか？　或ひは……

しかも、なぜ人間は名に囚はれ、名に執するのか？　自ら名を得んとし、また他を名に於いて量る。そこには止むを得ない現實的根據がある。彼はただ彼の謙遜なカマドの火を絶たざらんとするのみである。

「名聲が何だ！」それは負け惜しみだ。

ただ、この名によつてのみ、文學者の生活は保證される。名に執するは、彼の頭腦に(名譽心に)あらずして、彼の下腹部であるかも知れない。とすると、彼が自分の名聲を傷つけようとする者に、極力抵抗せざるを得ないのは、同情に値する。然るに、無抵抗主義だなどと言つて、それをしないでゐるものは、いたづら小僧のために、空しく毀傷せられ、さんざんに顔に泥を塗られる、そして……

「名聲我に何するものぞ！」それは時勢後れのえらがりの、一つのポオズにすぎない。文學者はつひに名聲の奴隷である、と、公然それを自認すべきである。書を名山に藏すは、既に今人の趣味ではない。今やアメリカニズムの時である……

パピイニは畢竟痩腕の反抗兒、横紙破りにすぎなかつた……

×

名聲はその功績の當然の收穫であらうか？　原則としては然り。しかもその場合にも、それは常に遲く來る。それが來た時、それに値するものは、既に消滅してゐる場合もある。

かくて、我々は屢々、死人の舞踏を目擊するのである。

見よ、昔日の名聲によつて、今日の地位を維持してゐる、そして、その事によつて、曾つての事業の價値を漸次殺して行きつつある文學者は、いかに多い事であらう。

若し、その光榮ある時代に死んだなら、天才とも云はれ、鬼才ともたたへられた人が、ただ長生きしたばかりに、その空虚と老衰のくり返しによつて、靑年時代の燦たる光彩まで曇らしてしまふのだ。それかと云つて、死ぬわけにも行かない……

かういふのは、丁度、貯金を引出しては、それで食つて行くのに似てゐる。また店屋の居食に似てゐる。坐して喰へば山も盡きる、然し、その盡きた時分に死ぬものは、まだしも幸福だ。中には、蓄へが疾くに盡きてゐるのに、未だかくしやくたるものもある……

それもまたよろしい、民衆は極めて寛大で、親切である。

×

曾つて現れたプロレタリア文學者といふものは、自己撞着から出發した。そして、彼等は彼等の主義のゆゑに、まづ彼等の追求する名聲の否定せらるべき事を說かれた時、怒つた。

今や、「民衆運動と無名禮讃」といふ事が、新聞の論說にすら揭げられる……

ボルシェビキ……そして無名禮讃。かくして、無名者は今や決然として立つた——然し、文學者としてではなく。文學は結局、名のものであるか？

とまれ、尊ぶべき無名者よ！

曾つてツルゲエネフが『處女地』のパクウリンは、「無名の露西亞よ」と呼びかけた、千萬無量の感慨をもつて……

そして、この「無名の露西亞」は、今まさましく「無名者の露西亞」たらうとする——

――然し、我が日本は、敢て赤化を恐るる理由を有たぬ。むしろ米化を……今我が社會は露西亞たらんとするよりも、むしろアメリカたらんとしてゐる……アメリカニズムは今、我が日本を征服しつつある！
おお、アメリカニズムとよ！　これなにものぞ！

アメリカニズム

我が國の知名の文學者の情死した報知が傳はつた時、紐育の人達は云つた、「なぜ自殺などするんだらう、財産を持つてこつそり巴里へでも逃げて行つて、愉快に暮せばいいのに、日本人の氣持は分らない」と。
實にうまい事を云うではないか。簡單明瞭な人生觀ではないか。これがアメリカニズムだ。
金。そして愉快に暮す。それで澤山ではないか。「金があつて、地位があつて、美しい戀人があつて――そのイクォールが何で死なのか？」彼等は合點が行かなくて面喰ふ。
金さへあれば何でも買へる――これが彼等の發見した眞理である。「金は現代の神である」彼等は勇敢にこの事實を承認して、一切の宗教に代ふるにこの宗教を以てする。一切は金に換算して値ぶみされる。戀人の表情や愛撫をすら、金錢に値ぶみしないでは措かない、このキスは幾弗、この微笑は幾何と……これがアメリカニズムだ。
金さへあれば何でも買へる――愛の如きは最も容易な買物だ、信用あるデパアトメントストアでは、特に割引するといふ。家に歸つてみると、既に配達されてゐる、ほど手輕ではなくとも、彼の滿足は、幸福なタオルによつて拭かれる。それが愛だ。
戀愛といふものは、沒理性の盲目的なものと思はれてゐた。今や理性的戀愛なるものが唱へられ出した。理性的戀愛とは？　心臓の鼓動をも、その所得に比例して調節する事の謂である。

結婚は最も重大な取引である。彼等はそれを十分に自覺してゐる。そして、それは少しも恥づべき事ではない。故に公然と標榜し、賣手も買手も共に相手の所有を尊重する。それがアメリカニズムだ。

處女は醫師によつて或種の證明書を受取る。彼女の結婚條件はその有無によつて、格段の差違を生ずるのである。そして、この證明書は、良人の絶大の幸福である。彼女の精神上の證明書は、つひにその問ふところでない。それは無形のもので、從つて無價値であるから。アメリカニズムだ。

結婚する前に、新婦はその新郎の財産の一部を自分の名儀に書き替へさせる。離婚したら自分のものになる。アメリカニズムだ。

財産のある老人が、結婚市場で最も人氣のある新郎候補者だ。若い娘たちは、その禿頭を引つ張り合ふ。彼の禿頭は間もなく消える、然し彼の金庫は殘る。アメリカニズムだ。

×

目に見えないものは、無いのだ。
損の行く事をするものは、莫迦だ。
餘計な事を考へて、陰氣な顏してゐる奴は、變物だ。
愉快に暮さないで、何處に生活がある？
金がなくては、愉快に暮せやしない。
金を儲けろ、タイム・イズ・マネイだ！　走れ、走れ……
無遠慮に、傍若無人に、やりたいだけの事はやつてしまへ、自分がしなけりや人がするぞ！
自家廣告、宣傳……

プッシング・ツウ・ゼ・フロント！　つかへ、張れ、その兩肘を……
それで疲れたら、チャップリンでも見て笑へ……

×

しかも……
アメリカニズムは、現代の最も進歩した精神である。現代に最も適合したる處世法である。否、唯一の可能なる生活信條である。眞にこれこそ、勇敢なる現實の肯定である――生の謳歌である。
これに背馳するものは、現代の社會に於いては、結局、滅亡せざるを得ないであらう。
アメリカニズムは、不可抗力である、科學文明の洗禮を受けた新日本の運命である。
今や、我が國民の間では、アメリカ人の暴狀に對する憤りが蓄積せられてゐる。それは當然で、あの傍若無人のふるまひは、あのミリタリズムは、ショオヴィニズムは、人間の無知と蟲のよさとを想はしめる愚劣事であるから。しかも我が愛國者等は、何たるおめでたき人間であるぞ。
現代の人心は、既にアメリカニズムにかぶれて、精神的に彼に征服せられてゐる。既に精神的に彼に征服せられてゐる以上、その外部的の侵害や侮辱の如きは、もはや問題ではないではないか。
ああ、然し、我々を征服したものは、アメリカではなかつた、況んやアメリカ人ではなかつた。ただ金――近代の科學文明の襲擊であつた……それが今、我々を、資本家制度の社會の眞中に、はふり出した……そしてその社會制度は冷然として語る、金、金、金なくしては、愛も藝術も、道德も宗教も、汝等を救ひ得ずと……
かくて、新時代の聲は起る。

新時代

ハイネはラサアルに於いて、新時代を見た。彼の見た新時代は忌憚なき實行力であつた。「ラサアル君は新時代の子である、彼は我々が多少ともあれ、僞善的に標榜してゐる、かのあきらめだとか謙遜だとかを少しも顧みないのだ。この新人は享受し、また目に見えるところに自己を主張しようとする。我々舊人は目に見えぬものの前に低頭して、影のキスと青い花の香とを捉へようとして、諦念し、祈願する。しかもかの戰ひの死に誇らはしく突進む頑强な戰士よりも多分幸福であらう」と、彼はファルンハアゲンへの紹介狀に書いた。(大體記憶のまま引く、或ひは誤りもあらん)また、彼は別にラサアルを「知識と能力との、タレントとカラクテルとの結合したもの」とも評してゐる。

我々の新時代者もまた、このハイネの見たラサアルの如き勇士であらうか?

ツルゲエネフの『父と子』は、舊時代と新時代との對照を示してゐる。センティメンタルなりベラリスト、パヴェルなにがしや、その類の優雅な、プウシキンの愛讀者、ロマンティケル、それらに對して、新時代を代表するチャムピオンは、即ちバザロフだ。ああバザロフ、この好漢、この粗野な醫學生、科學の狂信者で、何ものの權威をも認めない。直接手に取つて吟味しないうちは何ものをも信じない、このニヒリスト、――これがツルゲエネフの見た新時代であつた。

我々の新時代者もまた、このツルゲエネフの描いたバザロフの如き勇士であらうか?

正に、である……と云ひたい。唯物主義、實利主義、そして科學的精神。それは彼等が全然アモラルであるべき事を證明する。そして、ただ出來るだけ生を享樂せよ、權利は極度に主張せよ、義務は全然忌避せよ。……これらのアモラリズムの實行力は勇士の事である。正に……ただ、ラサアルやバザロフの如き、なほ幼稚な固定觀念に囚はれてゐた舊時代的勇士でないだけである。今や時代は急激に進展した。

時勢は移る、しかも駈足で飛ぶ。

シャンフォールは言へり、

「今や吾人は餘りに駈足の生活をしてゐる、故に良心もこれに追つ付く事を得ず」と。

ひとり良心のみならんや。思索も、反省も、信念も、熱意も、誠實も、凡て追つ付く事は出來ない。それにしては吾人は餘りに駈足の生活をしてゐる！　そして、これに追つ付くもの、ただ辛うじて法律あるのみ、捕吏あるのみ…

…それすらこれをまき、その網をくぐりぬけるべく、吾人は十分の狡智を有してゐる！

忙がしい、忙がしい、あまりに忙がしくなつた、タイム・イズ・マネイ……

何で考へるひまなんかあらうぞ？

「そんなにぼんやりして何をしてるの？」

「仕事をしてゐるのサ」

「どんな仕事を？」

「考へ事をサ」

そんなラスコリニコフ――

朝から晩まで、毎日毎日、十年でも二十年でも、ひとつ寢臺の上に寢ころんで、ぼんやりしてゐるオブロオモフ、――

そんなものは、舊の、舊の、舊時代だ。

ヒョイと突けば、ピンと飛ぶ。全身は神經だ。感覺だ。衝動だけが眞だ。刹那が永遠だ。過去は死だ、現在だけが生だ。何故の論理ぞ？「一昨日の勘定書なんか持つて來てどうする？　おれは一昨日食つたものの金まで拂ふ義務はないんだ、見ろ、もうとつくに消化して外へ出てるぢやないか……」

「考へるなんて事が、第一氣に食はぬ。考へて、考へて、それが何になる？　それで人生問題が解決するか？」

「苦しい事は避ければいいぢやないか。いやな事は忘れてしまへばいいぢやないか。わざわざインチンを嘗めて苦い苦いと云ふには當るまい」

「麻雀をやらう。おれたちは明るく、輕快に生きたいんだ。面白可笑しく、人生を遊びたいんだ。暗い人生問題には飽き飽きした」

これがその新時代の聲だ。

淺薄たらざらんとするも得べけんや。空虛たらざらんとするも得べけんや。輕薄たらざらんとするも得べけんや。

そして、これが新時代の生き方である。

新時代とは――要するに米化である。アメリカニズムの勝利を意味するのに外ならない。何となれば、アメリカニズムは新日本の運命であるから……

輕　薄

果然――

輕薄を現代の唯一の德、新時代の至上命令として、唱道する人が現れた。

彼はこの發見を、カントもヘエゲルも、キンデルバントもリッケルトも、つひに敢て成し得なかつた空前の一大創見と看做し、且つ今後數世紀に亙つて人間社會を支配する新人生觀であらうとなした。

何たる愉快な冗談であらう。何たる痛快なアイロニイであらう。

然し、反省せよ、これを冗談と見なし、アイロニイと見なす如きは、既に新時代の感覺ではないのだ。

輕薄を何か賤しむべきもの、よくないものと考へるのは、憫れむべき先入見だ。そんな先入見を抱くものは、恐るべき時勢後れだ。

輕薄は輕薄なるが故に尊いのである。これなくして、誰か人生を幸福に過ごし得るものぞ！ 希臘の神々は輕薄ではなかつたか。彼等はたしかに空を飛んだ筈だ。長髓天使のガブリエルも輕薄ではなかつたか。見よ、今や人間はつひに空を飛ぶに至つた、そして輕薄はつひに我等の德となつた。何たる愉快！ 別に問題はない、要するに唯、我々は小鳥の如く生きようと思ふのみだ。生を享樂しようと思ふのみだ。何を苦しんで下らない義理立をしたり、一文にもならぬ人の手助けをしたり、餘計な人生問題をひねくり廻して身を苦しめるのだ。明るい氣持で、愉快に、氣持よく生きさへすればいいのだ。さうだ、それだけだ。

何處かの娘が身を投げた、空は青い、たのしい四月、ピイ……これはポオル・フォールの口笛だ。（ポオルちがひのモランとかについては私は全く知らない）

何處かの田舍で地震があつた、澤山死んだ奴がある。今度は東京でなくつてよかつた、空は青い、たのしい五月、ピイ……これは新時代の才子の口笛だ。

輕薄なるかな。

オッチョコチョイ、オッチョコチョイ、オッチョコチョイ……

快適なるリフレエンよ、これを數十遍繰返せよ、我々は我々の新時代の音樂を理解するであらう……

×

（我々は怒ることを止めた。冷靜なる觀察者として、我々はこれを書くのである。）

――而して、以上の如きが現代の我が日本の社會狀態であり、また、來るべき我が文學の趨勢である――これ實に

一大潮流である。(怒るも何の益ぞ。)

――然らば、これを是認すべきか? その外、道なし。ただ生來憂鬱性の人々は――恐らく筆者もまた――幾分危虞の色をもつて、これを目睹(あくと)する……

「汝は何者ぞ」

ノオ・ザイ・セルフ!

我々が何を云はうと、どんな立派な事を云ひ得たらうと、最後に、この一言で粉微塵にやられてしまふ。一息にとどめを刺されるのだ。恐るべき單刀直入、このとつておきの武器……

そして、これから免れる道は? ただ一つ……ノオ・ザイ・セルフ! から、先を越して、まづ自分で自分に云ふ事だ。そこで、私もまたさう云つて、そして、この文を結ぶ。

(これは私の「山家文學論」の一つである。山家とは田舍源氏、田舍莊子などの田舍の謂である。つまり、頭のわるい文學論といふ事である。)

大正十四年五月三十一日、榛名山中旅舍にて(「新潮」七月號所載)

二匹の猩々事件

アメリカといふ國は、不思議な國である。「とてつもない莫迦らしい國だ」と思ふ事さへある。そして、日本がこの莫迦らしい國の一層莫迦らしい猿にまで進化するであらうといふのが、悲しいかな、今や私の確信とならうとしつつ

ある。して、この斷定への材料は、私の十分蓄積してゐるところであるが、今はそれを披瀝するのが目的ではない。

過般、この莫迦らしい國で、また一つ莫迦らしい事件が發生した。もつとも、それは單に莫迦らしいといふ形容詞では片付ける事の出來ない、むしろ嚴肅なる、十分省察に値する、文化史的事件と云ふのが正しいかも知れない。で、それに對する私の一つの落想を記して見たいのである。

アメリカはなにがし州、なにがし市のなにがし大學教授が、（それらの固有名詞は殘念ながら失念した）人間は猿の進化したもので、人間の先祖は猿であるといふ事を新聞に書いたところが、思ひもがけぬ大反對の火の手が上つた。あらゆる教會のあらゆる牧師が、さあ、一大事が始まつた、惡魔の陰謀だと。額に靑筋たてていきり立つと、敬虔な善男善女は、もとより金貨のやうな信仰に光つてゐるのだから、忽ちそれに響應して、まるで神様がおなくなりにでもなつたやうな騷ぎで、全市はさながら、るつぼのやうに沸騰した。そして、不謹愼な教授は、直ちに神聖なる州の法律によつて起訴せられたのである。

丁度、かうしたノアの箱舟の中のやうな喧々囂々の眞最中に、何處から來たとも知れないで、一匹の猩々を引き連れて、その市へと乘り込んで來た男があつた。

猩々など連れて來て何をするつもりかときかれて、件の男は、おれは今度の事件のためにやつて來たのだと答へた。それはまたどういふわけかと、みんなが好奇心を以て訊くと、彼は昻然として、おれは人間が猿の進化したものだといふ事を證明するために、この猩々を連れて來たのだと云つた。すると、市の人々は憤慨した。怪しらん奴だ、不敬な山師めがと云ふので、忽ち、市のあらゆる戸口は、彼の鼻先でぴしやりと閉められてしまつた。彼は宿るに家なく、喰ふに食なく、惡魔よろしくの這々の態で、この市を逃げ出すより道がなかつたのである。

ところが、この男が退散した時分に、また一人の男が、猩々を引き連れて乘り込んで來た。性こりもなくまた戻り

やがつたかと云つて、見ると、前のとは全く違つた男だつたので、おまへは何しに來た。「また下らぬ證人にやつて來たんぢやないかと、市の人が詰問すると、その男はにやにやして、いや違ひますよ、私は我等の創造主なる神様のために證人に來ました。被告の大學教授さんにはお氣の毒ですが、元來、人間は猿から進化したものでなく、猿の方が人間の退化したものなんで、この猩々はそれを證明する立派な證人なんですと云つた。さあ市の人は喜んだ。とりわけ牧師さん達は狂喜した。そして、おれのところへ來てくれ、わしの家へ泊つてくれといふわけで、その男はもう全市の人の引つ張り凧となつたのである。

そこで、愈々裁判があつて、件の猩々も出頭に及んで、被告に不利益な「證言」をして、結局、教授がその無分別な冒瀆行爲を重く償はねばならなかつた事は、豫想するに難くない。が、不幸にして私は、そこまでは知る事が出來なかつた。

ここで特に斷つておかなければならぬのは、この話が、私の揑造や、でたらめでは決してなく、信頼すべき我國の新聞紙上の報道の敷衍にすぎないといふ事である。もつとも、その記事は欄外に六號活字で載つた位の程度であるから、多くの人の目に觸れたかどうかは知らないが、アメリカの事情に細心な注意を拂つてゐる人は、確かに讀み落さなかつたに相違ないと思ふ。殊に、過般物故したかのブライアン氏なども、その反對派の代表的人物の一人だつたといふから、氏の名前に依つても、この事實は十分信頼に値するだらう。ブライアン氏は、大統領選擧に落選した不名譽を償ふに餘りある、この最後の善行によつて、天國に上るや否や、その門口に於て、聖ペテロの厚い讃辭を受けたであらう事は、信ずるに餘りがある。この機會に、私はこの日本のよき友人のために、その冥福を祈りたいと思ふ。

さて、この二四の猩々の話は、近頃はやりのコントにでもなりさうな、頗るおもしろい話ではあるまいか。さう思はれたので、私は友人のコント作家に、こんな話があるが書いてみてはと勸めると、友はそれぢやあんまり話になり

すぎてゐて一寸困ると云つた。猩々の事はそれでよろしいが、この本來の事件そのものは、私にとつて、そんな作家眼でもつて棄てておけるべき事でなかつた。

事件は重大である。何となれば、それは千七百年代や千八百年代のそれではなく、千九百二十五年の出來事だからである！

進化論はチャアルズ・ダアキン以來、我々人類間（ホッテントット人等の未開民族は除く）の常識となつてゐる。それはガリレオ以來の地動說同樣、動かすべからざる眞理と看做されてゐる。しかもかの善良なるアメリカ人等は、その科學的知識に於いて、決してホッテントット人等と同一のレヱルに在らぬ事を信ずべき理由あるに拘はらず、この公定の眞理を拒否して、この周知の學說を單に反覆したに過ぎない一學者を敢て罪したのである。［横紙破りのアメリカ人！相變らずの無茶をやつてゐるナ……と云つてしまへばそれ迄だが、現在のこの文化國に於いて、かかる事件が發生し得たといふ事は、抑も何を意味するであらうか。そして、かくも眞劍に、かの人間の進化を證せんとした猩々を放逐して、その退化を證せんとする猩々を歡迎した程に熱烈であつた彼等の信念に對して、彼等が全然、横暴な横紙破りをやつてゐるとのみ斷定してしまへようか。

總括的に、アメリカ人に眞の信仰があるかどうか、それは疑はしいが、ただ其國に於て、教會の力がいかに强大のものであつて、十分輿論を制し得るかといふ事は、その禁酒法案の通過によつても推察せられるし、また、昔の清教徒傳來の熱烈な信仰が、少くともその一部の社會に儼として存在して、一國の風敎を維持するのに與つて力があるといふ事も、屢々、多くの人の報道によつて聞くところである。そして、かかる信仰が、いかにしてプッシング・ツゥ・ゼ・フロントや、バアス・コントロルや、ラッシュ・アワアや、ラヂオや、何、何、何、何……と調和し得るかは、我々の容易に捕捉し得られない事である。多分、バアス・コントロルや、何、何、何……も、みな天なる父のみこころに外ならぬの

であらうか。多分、さうであらう。然しながら、天地創造說を信奉すべき基督敎徒にとつて、進化論だけは、到底承認し難い事は云ふ迄もないのだ。が、彼等の信仰については措くとせう、ここで私の問題になつたのは、それではなかつたから。

基督敎に對するフリイドリッヒ・ニイチエの壯烈な戰ひすらも、我々にとつては、幾分、風車に對するドン・キホオテのそれを思はせるところがある。もつともこれはニイチエの不名譽ではない。（ニイチエアーネルよ、許したまへ、私は彼を嘲笑すべく、餘りに彼と性格の惱みを等しうしてゐる）單に我々の幸福たるに過ぎない。我々はさうした重石（おもし）の下から免れんがために、生涯を賭さなくともすむ事を喜ぶべきであらう。但、我々にも別個の偶像と先入見との重壓がないのではないけれども。

私の問題は別にある。卽ち、上記の事件によつて暗示されるもの――あらゆる眞理は、決定的のものでないといふ事である。公定の眞理として、我々の間に確認されてゐるものも、若しそれが自己の信念に――むしろ生存意志に牴觸すれば、我々は斷乎として、これを拒否する事が出來るといふ事である。かのアメリカ人は、父祖傳來の信仰によつて、進化論を拒否したのであるが、我々はかかる一個の學說のみならず、我々の生活にとつて、もつと根柢的なるものをも、否定して差支ない。その際に、たとひ全世界がそれを承認しなくとも、我々はこの自分一個の所信を固守して差支ないのである。

それに、元來あらゆる敎義や、學說などといふものは、一向に信憑すべきものではない。世に絕對的眞理といふものはあり得ない。ニウトンの引力說すら、アインスタインの相對性原理によつて打破されたではないか。試みにタレス以來の哲學史を見よ、それはあだかも、五つや六つのみどり兒が一つ積んでは親のためといふ、あのあはれな賽の河原の石積みに似てゐるではないか。然し、その無數の哲學體系は、別に我々の妨げにはならない。我々はその中か

ら自己に都合のよきものを採用する自由を有するからである。之に反して、それが權威を以て我々の上に臨む時は、禍ひなるかな。かのアメリカ人の進化論の否定が、反つて莫迦らしい愚行のやうに思はれるのは、それが或る絶對的權威への盲從に基因するからである。

然し、今はかかる危つかしい推論より、愉快な二匹の猩々に歸らう。實は、この方が私には一層興味があるのである。もつとも、この話は少々おまけがあるかも知れないとも思ふが、またアメリカなら、それ位な事實があつても、格別不思議でないやうな氣もする。とにかく、その中には確かにモラルがある、我々に大きな教訓を與へる何ものかがある。人間が猿から進化したか、猿が人間の退化したものか、それが何で決定しよう。(此際ダアキンの説が、直接に人間と猿とを結び付けるのではなくて、單に人間と猿とはその先祖を等しうしてゐるといふに過ぎないといふやうな事は、敢て問題外としておく)科學的眞實は、全然臆説たるを免れ得ようか。然らば、その不確かな學説よりも、一般的輿論に與して、好き報酬を得るに如かぬ。ここに眞個のアメリカン・ウィズダムがある。そして私の恐れるところは、この第二の猩々が、若しや黄色い顏をしてゐはしなかつたかといふ一事である。

大正十四年九月二十一日、伊香保にて(「信濃毎日新聞」所載)

現代虛無思想論序說

(前置) 退屈なる評論について

――標題だけを見て敬遠せんとする人に。

諸君がまた煙つたい高遠な抽象論かと思ふならば、明らかに諸君は誤解してゐるのである。これは世の所謂評論ではない。のみならず、所謂評論に對する反抗として見らるべきものである。

僕は旣に十分早く、退屈なる評論への禮葬を決議してゐるのだ。現代はあらゆる事物をその實量に於て量らんとする、あらゆる約束を破毀し、あらゆる權威を否定せんとする。現代は案山子への脫帽について、全く何も知らうとは思はぬ。堂々たる評論の形骸を以て、他を威嚇せんとするも無益である。風袋は布袋の腹ほどあつたところで、目方が輕ければ、驚きやしない。

まづ、一般的概論、常識への試問、用語例の規定、わかり切つた說明……それはまあ、順序として、仕方がないと我慢して、さて、それからが聞き物だと思つて、期待してゐると、何んだ、もう、その堂々たる評論は終つてゐるのである。

「莫迦にしてゐる……」と呟かうとも、「退屈だ！」と吐き出さうとも、かかる場合にあつて、それはひとり現代人の怠慢と輕佻との罪にのみ歸すべきであらうか？

より幸福な場合にあつても、その論理的開展はいかに正確であらうとも、彼の直觀の基礎が、彼自身の生活の中に存しなければ、それは要するに生命なき解說に過ぎぬであらう。もつとも、これは現在の概ね哲學的基礎を缺如せる評論家に對してよりも、むしろ我々の尊敬すべき哲學敎授諸氏に對して、より適切なる警告であらうと思ふが、敎授達への僕のより懇ろな挨拶は、これを他日に讓るとする。勿論僕は、精到なる論理、一絲亂れぬ精兵の行進の中に、或る藝術美をすら知覺し得る程に、未だ舊人の域にある。從つて、僕は此種の論文を十分敬重もし、適當に評價する術をも知つてゐる。然し、僕はその自己にあきたりなくなつた事だけは告白させて貰ひたい。

三軍の肅々たる陣容を、僕は殘念ながら、指を啣へて見てゐなければならぬ。然し、戰ひは必ずしも兵の多寡によ

つては決せられぬ。雲霞の如き藁人形は、怯懦なる敵を脅威する事は出來よう。決死の兵に對しては、畢竟、一場の笑柄であらう……

僕は自分の頭を時々通過する半端な思想を、論理的に組立て、弱さうなところは借り物で飾つて、それに少々藁人形をまじへて、一團の軍勢を押立てようとの野望をも抱いた。が、その結果は、もとより惡い。その成功した場合が一層いけない。それはもはや自分の脈搏でなく、うそで、他人で、線香花火で、自分の本來とは、とてつもない別のところへ行つてゐる……

そこで、僕は僕流に行く。僕は彼等堂々たる評論家の総つてゐるところから始めようと云ふのだ。單騎、敵の中堅を衝かうと云ふのだ。

——また、人に憎まれるやうな大法螺を！——いや、どうして、これは僕としては少々謙遜のつもりなのである。

——それにしては、題が少し堂々としすぎるよ。——やられた！

——大思想家の大評論と買ひ被られては困る、とは云はせない、看板が看板た、羊頭を揭げて狗肉を賣るものと非難されても辯解は出來ないよ。——仕方がないナ、だが、かまふものか、題は一時の間に合せだ。種を明してしまへば、これは僕のアイロニイ……と云へば差障りがある、セルフ・アイロニイに過ぎないのだ。

——益々いけない、一々そんな種明しをするイロニケルがあるものか。——それはさうだ、が、現在の文壇は、かかる愚かな種明しをも必要とするほど、それほど退屈だよ。然し、いいよ。僕は誤解には慣れてゐる、罵倒にも慣れてゐる。さあ、撃ちたまへ、今度は僕の方でも撃つつもりだから……

僕は勝手氣儘に彈丸(たま)を撃たうと決心してゐるのだ。僕は縱横無盡に暴れようと思つてゐるのだ。

どんなに背のびをしたところで、身長(せい)が一分でも伸びるわけぢやない。自分だけ三つに折つた座蒲團の上に乘つか

評論は座蒲團の上に立つて身長が高いやうに見せかけても、その場かぎりの效果だ。そして、僕の見解を以てすれば、評論は座蒲團の上に立つべきでない。自分の身長だけで人と並ぶべきである。

弾丸の籠めてある拳銃は恐ろしくない、弾丸の籠めてない拳銃も恐ろしくない、一番恐ろしいのは、弾丸が籠めてあるのかないのか分らない拳銃だ。これは、ヘッベルの言葉だつたと思ふが、僕の拳銃は、確かにこの一番恐ろしい奴だ。僕は、自分でもそれを恐れてゐるのだ、若しこれが、不發だつたなら？……だが、とにかく、僕は撃たうと思ふ……

なほ一言――この標題を正直に取つて、羽織袴の、或ひは、シルクハットにフロックコオトの禮裝を豫想して、この浴衣がけに苦笑する人々には、僕はお氣の毒と云はねばならない。勿論、諸君の正直のためではなく、諸君がこの文章の精神に於ける十分なる禮裝を見出されなかつた事の不幸に對してである。

――だが、もういい、いくら君が力んでも、君の書いたものが、やつぱり退屈な評論だつたらどうする？――それは頗る可能な推定だ。が、それはもとより僕の罪ぢやない。人生は退屈だよ。――蟲のいい男だ。罪は現代のニル・アドミラリにありか！――さうだ、そこに僕の云はんとする主旨がある、そこで現代虚無思想論序說……

（一） 精神的不景氣について

不景氣、不景氣……到る處で、僕等はそのリフレエンを聞く。

大阪人は「お早う」「今日は」の挨拶の代りに、「儲かりまツか」といふ慣用語を以てする。その大阪人すらも今日では、「儲かりまツか」に代ふるに、「えらい不景氣だんナ」を以てするのである。

不景氣、不景氣……到る處で、聞くも哀れな生活悲劇が起る。

信用ある新聞紙は、毎日毎日　その不景氣の恐るべき影響と、悲しむべき打擊とを、我々に報告してくれる。大會社の破產、小商人の閉店　失業者の示威運動、女權擴張論者の復籍願、生活難の夫婦心中・娘の身賣、捨兒、逃亡、詐欺　强盜……

すべては不景氣の罪である。そして、不景氣は誰の罪か？……もう澤山、澤山。

——水商賣の方はどうだね？

かかる不景氣の、最もてきめんに反映する花柳界と、藝術界に於いて——この二つの社會を一列に唱へる事は、或ひは倫を失し、その相互に對して非禮に及ぶ事なきやを僕は恐れる。もつとも、後者に對しては、我々の尊敬すべき文壇の名家によつて、既に屢々、作家を娼婦に見立てる事の愛好されて來た事實がある事によつて、やや安心するところがあるが……。——で、君の觀察を聞かう。

左樣、前者については、僕は、新聞の報道によつて知るのみであるし、その報道をここに反覆することは容易だが、評論の權威を毀損するものとして、非難される危險を冒してまで、說述する興味をも價値をも認めないから、わざと割愛することにして、後者については、既に、さき頃、某紙がこの不景氣問題について、かなり澤山の文學者の意見を徵した時、その人々によつて、十分率直に現狀を說述され、そして、さうした說述からは、大した意義の發生し得ないことが明白になつたから——何となれば、それは概して、困つたものだといふ、慨嘆以上のものではなかつたし、また、文學者からこの種の事柄について、それ以上の意見を期待することの無理なのは云ふまでもないことであるから——

僕自身にしても、經濟學者でない以上、御同樣その原因を推究し、その對應策を提起し、或ひは、その經濟學上の意義を論ずるといふやうなことは出來ぬ。とすると、僕はそれについて、何等云ふに足るものを、有たないわけであ

る。

ラスキンであつたか、若者がその失はれた戀を嘆くとき、それは抒情詩になるが、守錢奴がその失はれた金について訴へるとも詩にはならぬといふやうな事を云つた。僕は必ずしもさうは思はない、金貸が引ツかけられた悲しみを歌つても抒情詩にはなると思ふ。ただ、愚劣なばかりである。そして、僕等が本屋や雜誌社の人達の云ふ言葉を反覆してみる事も、かなり愚劣ではあるまいか？

そこで、僕の云ふべき事は、別にある。

僕の觀るところを以てすれば、この不景氣は、單に經濟的なものに止まらずして、また、精神的のそれである。そして、この精神的不景氣こそ、文學評論家たる僕の論題でなければならぬ。

今は正に depression の時代である。ディプレッシイヴ——この一語をもつて、僕はこの時代全體を蔽うてゐる一般的空氣を、十分に形容し得ると信ずるものである。

沈滯である、萎靡である、銷沈である——時代全體が行き詰まりになつてゐるのである。この各方面の行き詰り、八方塞がりの現狀については、各方面の人々によつて、說きに說かれてゐる。政治上、經濟上の事態については、それ等の人々の言說に俟つとして、僕はここに專ら思想上のディプレッションについて語らうと思ふ。精神的不景氣についてならば、僕はその原因を推究する事も出來、その思想的意義を論ずる事も出來ると妄想し得るから……だが、まづその前に、この精神的不景氣と經濟的不景氣との關係は奈何？

無論、甚大の關係がある。元來、思想は世相の反映にすぎぬ。反映なればこそ意味があるのだ。然し、それは單に當面の不景氣などいふものでなく、一般的に、現代の社會的不合理の重壓に影響されてゐるのだ。然らば、この重壓を排除したなら？　ひどく威勢のいい話だ。精神的不景氣時代に似合はしくない假定だ。が、また今ほどかうした空

想の好ましい時もなからう。
然し、冷靜に觀察して、我々は希望を有ち得るや否や。また一歩を讓つて、その希望を有ち得たとするも……この邊の議論は、一應・曾つてプロ派の人々に多くの罪を得た僕の舊見を反覆する事になるし、その今や幾分變化した見解を後段に掲げるつもりだから、今は簡單に、事態は思考以上に險惡であり、絶望的である事を斷言するに止めておく。

このディプレッションたるや、もつと根強い、もつと重大な根源を有つてゐるのである。それは一時的のもの、偶發的のものではなくして、必然的のものであり、かなり恒久的のものである。かやうに考察するので、從つて僕は、この經濟的不景氣は、早晩恢復する事はあらうとも、この精神的不景氣は、それに伴つて恢復すると云ふ程の皮層なものではなからうと觀測する。

で、先づ、それを論證しよう。

(二)　一般的虛無思想化について

僕はあらゆる論議に際して、常に根本的の困難に遭遇する。
人生の一切の現象は、複雜多樣を極めてゐて、單純に、白とか黑とかはつきり斷言の出來ないものである。しかも、これを確定した上でなければ、推論は成立し得ないのである。そこで、多少さうでもないと考へられるところがあつても、とにかく白とか黑とか、まづ決定して置いて、その斷定に都合のいいやうに議論を進めて行く。
これが普通、評論家の取る道である。また、かやうにしなければ、總じて議論は成立しないから、止むを得ない事でもある、從つて、あらゆる論證には、畢竟一種のコヂツケとも看做される。同一の論者ですらが、その興味さへあれ

ば、全然正反對の論證を企てる事は、易々たるものであらう。頭のいい人は、そんなロマンティック アイロニイを弄してみてはどうです。一寸愉快でせうよ。だが、ここに僕のあらゆる論議に對する氣まづさがあるのだ。

そこで僕はそれから免かれるべき方法を考へた。それはエンシヤク法でもなくキナウ法でもなく、勿論、三段論法でもない。無茶苦茶流の横暴論法といふ奴だ。論理を無視し、矛盾を恐れず、直觀と飛躍のトンボガヘリで暗示する、以心傳心、分ればよし、分らなくともかまふものか、稱して詩的評論……構成派風の評論を求めてゐた人さへある時代ではないか……驚く事はない、あの古いニイチエだつて、もうとつくにやつてゐるのだ。ただ、彼は少々ならず頭がよかつただけだ……

そこで、僕は論證の約束を取消してもいいわけだ。いくら巧妙に論證してみても、現代人はなかなか易々と云ひくるめられはしない。それに總じて、他人を說得せんとする事は、古代の惡き遺風である。

自然主義時代までは、まだ古代に屬してゐる――現代はかくも急速に飛行した――そこで一寸、僕は一つの面白い話を思ひ出した。

名は何と云つたか可愛らしいお孃さん……もつとも、今は三人の坊ちやん、孃ちやんのお母さんで、名前もちやんと分つてゐる、容姿楚々たるマダムであるが……

年は十七か十八位、まだ肩揚げのある、事によると、お下げにもしてゐたかも知れない、可憐な文學少女で――文學少女を直ちに不良少女と見なす一般的意見に對しては、かの夫人の名譽にかけても、僕は憤らざるを得ない。不良少女は文學少女になり得ないと信ずるものである。もつとも、不良少女だつて別にかまふものか……

時の自然主義の某大家のところへ訪ねて行つて、挨拶がすむといきなり、お孃さんは云つたのです、

「ねえ、先生、人生は灰色でございますわね……」

その時の先生の顔は——なんと、これは文學史上に留むべき好個のエピソオドではあるまいか……

僕等には、然し、このお孃さんを笑ふ資格が全く無いのだ。僕等三十代の人間は、その青年時代に於いて——僕はとりわけ不幸にも十六七歳にして——かの奇拔な經驗をすべく惠まれたからである。即ち、明治末の思想界の一大波瀾であつた自然主義運動の、頭から冷水の冷たい洗禮を受けて、

「君、人生は暗いね……」「ウン、實に灰色だ、現實暴露の悲哀だ……」などとやつたからだ。

この何物にも興味を有たず、感激を有つてはならぬといふ教育を受けた僕等は、次いでやや年長じて——僕は今度は幸福にも二十一歲頃に——その反動として現れた人道主義の今度は熱いやつの再浸を受けて、抑壓せられた感激を一遍に爆發させたのだ。そして、今やまた、人道主義に對する反動の中に、熱いのか冷たいのか、得體の知れない泥の中に蠢動してゐるのだ……

然し、僕等自然主義靑年のあの不幸は、決して田山花袋氏の罪ではない。僕等は自分達の親切な教育者であつた田山氏に、感謝こそすれ、氏を怨むべき理由は毫末も有たないのである。が、ただ僕等の年齡が花袋氏とほぼ同一でなかつた事が、僕等の不幸であつたに過ぎぬ。そんな靑二才共が、急に灰色にならうなどとは思ひもよらず、田山さんはその抒情詩を歌つてゐられたのだ……

然し、僕等は果して不幸であつたらうか？　自然主義の灰色よ、現實暴露よ、偶像破壞よ、顧みれば何たる美しい夢だつたらう。そこには信仰があつた、情熱があつた、偶像破壞者の盲目な喜びがあつた。今いかに？　僅か二十年足らずの間に、何といふ時勢の變化だらう。今にしてかの灰色の靑春を顧みると、失はれたる樂園を追想する思ひがする。我々靑年に對する自然主義が、依然、變態のロマンティシズムに過ぎなかつたやうに、當時の中年の大家達のそれすら、同樣の若々しいロマンティシズムではなかつたかとの疑ひすら起る位である。（この邊少々無茶苦茶流か？）

現代の思想的根柢は、一見、自然主義思想の繼承、若くは復興の如く見える。事實は雲泥の相違である。自然主義は、隨分勇敢に舊道德に楯ついた。これは當時の人々が、道德の壓迫のためにいかに苦しんでゐたかを證明するものである。今や、その出征は、我々には三韓征伐ほどにも響かない。現代の社會に於いては、道德は殆んど滅亡にひんしてゐるのだ。この無力なものに、誰か醉狂にも楯つからうと思ひつくか。風車に對するドン・キホオテの戰ひを、誰か戰はうとするものぞ。(自然主義のイズムに對する強い信仰も、現代の進步せる人々にとつては、餘りに幼稚に見える……)

僕は前論に於いて、現代の無道德的傾向を指摘した。(現代の靑年の胸間に流れてゐる一種の虛無的氣分を暗示しておいた。而して、これを誘致した主なる動力は、社會主義思想の普遍化に外ならないと信ずる。そして、これに對して力強く抵抗し得るものは、ひとり宗教心あるのみである。然るに、本來、我々の間には、宗教心といふものは、殆んど缺如してゐる。我々は殆んど無宗教の狀態にあると云つていい。これを文壇について見ても、そこで宗教について語るものが、いかに嘲弄され、排斥され、僞善者とされたか……そして、人々に多少の宗教意識の存するものあらば、かく迄の事はなからう。加ふるに社會主義的思想家が、その恐るべき強敵の、僅かばかりの殘兵をも、殺戮せんとするものあるをや。否、現實こそ更に力強い殺戮者である。衣食足つて禮節を知る。餓ゑたるものに、何の宗教ぞ、何の道德ぞ。しかもその上、現代の人心は、米化又米化、物質的飽滿に飽く事を知らないのだ。

そこに、かの大震災が來た。そして、この打擊が、唯物論者以上の力をもつて、僅かばかり殘つてゐた信仰(らしいもの)をさへ、根本から顚覆してしまつたのだ。

「神も佛もあるものか……」「どうにでもなれ……」そして、最後に、「かまふものか、、、、、、、……」

思想の悪化といふ事が、常に憂慮に堪へぬところの經世家によつて、絕えず繰返されてゐる。また、それは一面正

富でもある。

まことに、數年前までには、誰かあつて、我國にカラコゾフの出現を信じたものがあらう？　カラコゾフの出現は、我が國民道德に於ける、一つの分水嶺を成すものである。（カラコゾフの何者なるやは、玆に敢て說明せず、カラマゾフと取違へてはいけない、その同國人だ）

カラコゾフは極端な例であるが、なほ、現代の人心を貫いてゐるアンダア・カレントが、ニヒリズムである事の、少くとも、ニヒリスティッシュ・シュティンムンクである事の、一つの例證ではあるまいか——。もとより、虛無思想と云つても、その內容に至つては、千差萬別、多種多樣を極めてゐる。その種々相の闡明こそ、各論に於ける僕の好餌なのだ。

（三）　現代心の複雜性について

我々は時代に對する感覺を喪失してはならない。時代の渦卷きに捲き込まれ、溺れ死ぬ危險を警戒するのは妨げぬ。それゆゑに、全然眼を塗ぎ、耳を蔽うて、遁走し去る事は、未だ十分に自信ある態度とは看做し難い。

同時代に對して、常に深甚なる注意を拂ふ事は、我々の義務である。我々は同時代の呪詛者としても、なほその時代に結び付けられねばならぬ。此故に、僕は現代の女性を愛するのである、所謂モダン・ガアルを愛するのである。

天候は逸早く晴雨計に響く。それによつて漁夫が暴風雨を豫知する富士の笠雲などよりも、女性はより正確な時代のバロメエタアである。時代の動搖は逸早く彼女等の肉體に具現する。夢二の繪がはやれば、すぐに夢二式の女が現れる。虹兒の繪が持てれば、虹兒式の女が現れる。機敏なものだ。そこで、アメリカニズムが、まづ女を征服したのも不思議ではない。七三耳隱し、斷髮洋裝は、直ちに新時代を表現した。そして、外形は內容をつくるのである。尤

も、七三耳隱しや、斷髮の下にも、往々、舊式な束髮や、銀杏返しなどが隱れてゐる事もあるが……

不具者が鏡を恐れるやうに、僕等も女を恐れねばなるまい。モダン・ガアルこそ、現代心の鏡面に外ならぬだらうから。僕は敢て云はう、現代心を理解せんとするものは、モダン・ガアルを見なければならぬと……單にその斷髮や耳隱しを見ただけではいけぬ。萬葉の意味でなくも、少くも、新時代の意味で見なければと……然し、駄目だ。女性は鏡である、時代よりも先きに男性の……そこで、モダン・スピリットでなければ、モダン・ガアルを發見する事は出來ないだらう。新人新居格にして、はじめてモダン・ガアルをクリエートし得たのだ。それゆゑ、モダン・ガアルは新居氏に委ねよう。僕等はむしろ新居格その人を見るべきである——。

先きに僕は、所謂新時代なるものを米化と見なした。然し、この一般的、米化的、ラヂオ的、キネマ的……所謂付の新時代以外に、(若くはその內部に)もつと僕等の胸にアッピイルするものはないのか？　なほ一皿の內面性、なほ一杯の徹底味は……實利的新時代に對する哲學的新時代とも云はうか……僕はその二つを全然別個のものであると思つてゐたが、實は一が山麓で、他がその山巓であるかも知れない。いや、山河人生、底を叩けば同じ事だ、君と僕とは……君が僕の外にあつて、僕が君の外にあるだけの相違だ。事によると、僕の中にあるのが君で、君の中にあるのが僕かも知れん。そこで、アメリカニズムは、僕の中にあるものの名だらうかも知れぬ。

然し、それでもアメリカニズムは僕は好まぬ。僕は隨分惡罵を恣まにした。まだあきたらぬ。恐らく僕が生きてゐる限り、罵つて罵つて罵り拔くであらう。だから僕は、アメリカニズムの淺薄な輕快さ、豚のやうな實利主義、硝子のやうな見透しのきく人生觀の外に、むしろ少數ながら、もつと醇化され、教養化された、もつと迂濶な、反事務的な、ロシア的、インド的な新時代を見出す事を好む。そして、その新時代を代表するものが、差當り新居格氏などであると思ふ。それで僕は中央新聞の質問の答にも、僕自身の獨自の意味に適合する新人として、彼の名を擧げた。こ

の小論でも、僕は彼について少しく論じたいと思つてゐたのだが、そして、彼の思想と作品とを論じてみると、多少現代心を浮彫にする事が出來ようかと思ふのだが、今は何分（後段に於ける辻潤と同様に）その著作も手許になし、それは他日の各論に讓つて……

ここでは、一般的に、少々抽象的に、現代心への僕の射的の腕を見せておかう。もつとも、現代心といふものは――前にも云つたやうに、總じて物事は、豆腐のやうに型に入れればそれですむといふものでない。然るに議論は無理な型である事を忘れ給ふな――目の前の吊革にぶら下つてゐる美人の手のやうなものぢやない。默つて車中に立つてゐる彼女の心だ。時代も女と同樣である、莫迦がのぞけば莫迦が顏を出す。僕はただ僕自身の胸を擊つのみだ。これははづれッこがない。ただ問題は、それが適當な標的であつたか否かである。

現代心は――何故に新居格がひとり現代心を代表するものか……岸田國士、村山知義、々々々、々々々、いくらでもある、表現主義、ダダイズム、未來派、構成派、々々々、々々々、そこでヒュルゼンベック、カンディンスキイ、トルラア、ツアラア、マヤコフスキイ……そんな碧眼兒を連れて來てもいい、もつともそこら中碧眼兒だらけだが……で、僕が現代心と呼ぶものは――僕の頭で抽象した現代萬魂の總和の……つまり、僕が喫つたところの葉卷の（實はゴールデン・バットかも知れぬが）一條の紫煙であるといふだけの事。

現代心は――あらゆる抽象と理論とに意義を認めない。實感が一切である。感覺の道を外にして、何處に人生を求むべきぞ。我等はあらゆる感覺が、盲人の指頭であらんことを欲ふ。

現代心は――刹那々々の生を出來るだけ强烈に享受せんことを期す。一切は衝動である。衝動こそ新時代の至上命令である。生の躍進である。生の創造である。

現代心は――生の無限のニュアンスを樂しむ。複雜微妙なる手品を悅ぶ。宇宙人生が旣に一個の手品である、然ら

ば、より退屈ならざる、より面白き手品を求めん。生は手品である。故に泣きも叫びもしない、ただ微笑する。

現代心は——眞面目と不眞面目とのいづれをも知らない。冗談と眞劍とのいづれをも知らない。その愛好は、ナポレオンではなくして、カメレオンである。彼は一にして、全である。

現代心は——あらゆる斷定に對して嫌厭する。感嘆標（エキスクラメエション・マーク）！は、その恰好からして氣に食はぬのだ。疑問標（クエッション・マーク）？か、このまるみは、ややよろしい、が、……の微妙な線の複雑なる暗示には如かぬ。

現代心は——斷乎として一切のものの幻影にすぎぬ事を承認する。故に、一切の既成觀念にアデュウを告げる。況んや、道德をや、善惡をや。人生を測る尺度は失はれた、ただ自我の燃燒を外にしては。

現代心は——論理について、何ものをも知らうとはしない。論理を超えて、論理の彼岸に、そこに生の自由なる開展がある。無論理が彼の世界であり、論理への叛逆が彼の欲求である。

現代心は——あらゆるイズムを嘲笑する。未だこれを信奉するものは、現代心の中に潛む古代心にすぎぬ。かるが故に、彼はニヒリストである。何となれば、ニヒリズムはあらゆるイズムの、あらゆる信條の否定であるから……

（まだ、いくらでも云へる……が、もうこれ位にしておかう。）

かやうに、現代心は複雑多岐、變幻自在の精神である。容易に捕捉し難いのがその特徴でさへもある。故に、何でさう易々と闡明し得られよう——僕自身でさへが、僕に何で闡明し得られよう——ただ、白紙は確かに黒くなつた……事程左樣に、明白なる一事がある、それは何れにしても、これが思想的基調をなすものは、唯、這のニヒリズムに外ならぬといふ事である。

そこへ行けば、かの月給三十圓で（もつと多くても同じ事だ）貴公子然たる服裝をして、晝餐は精養軒でやる丸の内あたりの會社の、ロイド眼鏡の美靑年だつて、無價値の哲學を唱道する文學士村松正俊君だつて、（彼の哲學は確かに

新時代の哲學だ。あはれむべきニイチエは、一切價値の顚倒！　と大呼した。舊價値を顚覆して、新價値を建てようともくろんだ。今や、一切價値の否定が來る。價値は一つの幻影にすぎぬ、既に現實そのものが幻影にすぎぬ。凡ては無價値である。一切價値の彼岸にある。村松正俊その人も勿論、その哲學に何の價値も置かない…… 我等の同時代人が、この痛快なる認識にまで到達した事は、とにかく愉快な事である。本が出たら僕も批評しよう）要するに同じ事だ。

（四）　無論理の根據について

僕は今、現代心が無論理に――若くは沒論理に――その住心地よき新世界を見出した事を言明した。それについて、些か論及して、序に、僕自身の思想的立脚地を明かにしよう。

で、僕は無論理の根據について語らうと思ふ。但、無論理の根據とは、それ自身矛盾した命題であらう。無論理は敢て根據を必要としない。否、それは根據の否定に外ならないであらう。ただ僕自身には、まだその根據が要るのだ。僕はまだ翼が生えない……

曾つて僕等は大なる健全性へ――といふ聲を聞いた。然し、健全とは畢竟常識的といふ事だ。大なる常識へ――（それは普遍妥當性へといふ事かも知れない。が、危つかしい哲學上の術語は急いで引込めよう……）それにも十分意味があると僕は思つてゐた。ところが、それを口にした人は、のちに、詩への逸脫を說いた。卽ち、彼は常識から非常識へ、論理から無論理へ走つたのである。何となれば、彼もまた現代心の所有者であつたから……

確かに、現代人は論理に疲れてゐる、論理からの逸脫を欲求してゐる。ダダの如き、その傾向の代表的なものではないか。そして、例へば、僕自身の如きも、論理の重苦しさに堪へぬものである――もつとも、僕一個について云へ

ば、それは專ら、僕のこのわるい頭の要求なのであるが……然し、いい頭にとつても、論理は幾分退屈ではあるまいかと思ふ。何となれば、常に步行する事は、かなり退屈であるから。我々は時として飛躍しなければならぬ。そして、飛躍によつて、我々の生は突如として開展する。徐々たる進化でなくして、痛快なる突變が來る。

かくして、現文壇に於ても、散文精神に對する詩的精神が、高唱せられはじめたのだ。これ無論理的精神の、論理的精神への叛逆に外ならないと僕は信ずる。散文精神は、常識的精神である、既成觀念への順應を意味する。之に反して、詩的精神はその論理的約束を無視して、直ちに超思量的象徵の世界へ飛び込む。そこで、忽ち、建物が空中で切り結ぶのである、街が無禮なのである、小石のやうに默殺するのである、野菜が刺繡されるのである——もつとも、僕には殘念ながら、まだそれらからは、論理と固定との、無論理と流動への敬禮が、わづかに感得されるだけではあるが……

——そこで、構成派やダダイズムに、君は最敬禮するのだナ？

——まあ、少し待つて……

由來、近代精神は、常識に對する叛逆に外ならない。近代の藝術は、それに就いての有力な證據を無數に提供し得るのだ。

常識は固定を意味する。それは安住である、反覆である。藝術家にとつて、また藝術的生活者にとつて、常識が多くの場合、好ましき伴侶でないのは、一にこれによる。

新奇な創造も、常識となれば老朽する。常識はくりかへしにすぎぬ。それは、休止である、靜止である。くりかへしを忌む現代心にとつては、once for all に生を享受して行かうとする現代心にとつては、正に死である。點だけでは、論理は成立しない、しかも、現代心の燃燒するものは、その一點である。

常識は生活に於ける論理である。故に、常識に依據した生活は、これを論理的生活と呼ぶ事も出來よう。

論理は前後連續を意味する。それは過現未を連結する。故にそれは我々の生活に於いて、當然、責任觀念を引出す。論理なくば、道德は存しないであらう。原因結果の理を全く沒却したところには、何等の義務觀念も、相互的約束の觀念も――一言にして、常識的生活の支柱をなすものは、發生し得ないであらう。

かくて、無論理は、當然、また無道德である。反道德や不道德は、また論理の世界の事件である。例へば、女を弄んで、その結果を回避する場合、論理の世界では不道德となるが、無論理の世界では、かまふものかですむ。無論理の世界は、即ちアナルシイである。

無論理はかくも自由で、愉快である。それはひとりかの戀愛上の勇士にとつてのみではない。僕等詩人――論理の不能者にとつても、これが根據を發見する事は愉快でなければならぬ。……無根據で平然たり得る程、新時代でない限り。

僕等は論理的破綻百出の評論を辯護するために、かうも云ひ得るだらう。本來、人生そのものには、現實そのものには、決して論理的統一を施すことは出來ぬ。既に人生そのものに、何等統一がないとすれば、文字の上で、論理的の統一をつけてみたところで何になるか？　それはただ頭腦の氣やすめになるに過ぎないではないかと。

然し、ここで僕は、不圖次のやうな疑問に逢着した。――

人間の論理は、もとより憑むに足らない。我々はそれを無視し、蹂躙して差支ない。然し、人間の存在そのものが、本來、論理に拘束されてゐる事はないか？　その憫れむべき認識力で測知し得ない、より大なる論理の中に生滅するのではないか？　我々の生命そのものが、その論理の一つの歩ではないか？　世界の進行そのものが、論理に依據しつつあるのではないか？

さあ、これだ……ここへ僕は引つかかつた……と、同時に、僕はここで、初めてその無論理の根據を發見したのだ。……

それは何であるか？　その無論理の根據は……卽ち、宇宙論理の存在の認識である。旣に宇宙論理あり、人間論理は無用である……しかも、何たるフェータルな事實ぞ、それは人間を論理の中に押し込めて、一々の行爲をも、その法則の網より洩らさざらんとする——

そして、その宇宙論理とは、因果律を云ふのに外ならぬ。

佛家の謂ふ三世に亙る因果律は、現代心の最も嘲笑するところであらう。然し、我々の現在を支配するその法則の力は、果して笑ひ棄て得られようか？

暴飮暴食すると、後で、必ず腹痛が生じてくる。因果律である。

原稿を書かないで怠けてゐると、月末に七顚八倒しなければならぬ。因果律である。

常識社會の不道德とする事を行へば、社會から爪彈きされる。因果律である。

押せば押される、田山花袋氏の發見せられたこの眞理、これまた因果律である。

ニヒリストは、その徹底境に於いて、これをもまた嘲笑し得よう。

然るに僕は、あらゆるものを疑ふ事が出來る、否定する事が出來る。が、ただ、この因果の法則だけは疑ふ事が出來ない、否定する事が出來ない。

ここに僕が、徹底的ニヒリストたり得ない理由が存する。ここに僕が十分には、常識を蔑視し得ない理由が存する。僕は世界の支柱として、或る場合には、この普遍的約束を護らん事を欲ふものである。然らずんば——僕の生活は破滅であらう……

もつとも、僕は因果律をかく卑近な、世俗的意味に於いて解するものではない。不昧因果の百丈によつて、僕は一縷の信仰にさへも結びつけられようとする……愈々悪い……

かくして僕が、構成派、ダダイズムなどの、無條件的禮拜者でない所以が首肯けたであらう。

然し、僕は今、少々ダダ的たらん事を望むものである。これ僕のニヒリズムの當然の發展でもあらうか。元來、僕はペシミストである。僕は無論理の根據を求めるとき、僕は自殺を考へたのである。しかも人は容易に死ぬ事を得ない。故に、何とかして、この根強いペシミズムを克服して、オプティミストたらん事を願つたのだ。何とかして、人生に光明を見出さん事を願つたのだ――しかも、つひに絶望……

ペシミズムを克服する……何といふ大法螺だ。それは大ゲエテにして、はじめて成し得る事だ。――それは何であらうと、人生は善いものだ！――口眞似はよせ……である、現代の文壇批評家の口吻を借りて云へば。

だが、我々は、現代人は、ゲエテの道を外にして、ペシミズムを脱却する道を見つけたのだ。我々はこの道を行かう。それは虚無と絶望とのどん底だ、底の落着きだ、これ以上、落ちる事はあるまい……

ダダだ、おん馬どうどう！

どん底へ落ちると、落ち着く。人生はまさか底なしの沼でもなからう。――可憐なるダダイストよ、君等の幸福を感謝したまへ。

また、斷り書き。

煩いけれど、ここで是非一寸注意させて貰ひます。それはここで僕がダダと云ふものは、現代の所謂ダダ詩人等を

(五) ダダ的精神について

意味するのではないと云ふ事である。かつて僕が前論中で、新時代と云つたものが、近時擡頭した文壇の或る一派の人々を意味したのでなく、廣く現代社會の新潮流を意味してゐたやうに、ここにダダといふのも、現代心の一脈の精神を意味するものである。

元來僕はあらゆる主義といふものを認めない。主義は一つの强制である、無理である。人間に在つて意義あるもの、本質的なものは、その主義ではなくして、その性格である。主義はキモノである、衣裳である。［性格は肉體である。肉體がそれにふさはしい着物を着けるといふ限りでの主義だ。髭を立てるのはいい、ツケ髭は滑稽だよ。

主義は時として、その本體を殺す。人間の思想や生活は、一個の主義によつて拘束すべく、餘りに複雜多端である。相反する傾向が同一人の中に併存する事は、極めて普通の事である。（例へばフロオベエルに於ける如く）

また、無邪氣はこれを自覺する時、死んでしまふやうに、主義の體系をつけた爲めに、一切を强制的に整頓して、反つてその本質的意義を謬る事もある。例へば象徵主義を見よ。象徵主義が起つて、象徵の眞精神は滅びたとも云へるではないか。深奥幽玄な象徵感が、主義なんぞの機械でめぐらうや。鳥飛んで鳥の如し、魚行いて魚に似たり、これ以上の象徵はない、鳥は卽ち鳥の象徵、魚は卽ち魚の象徵。ステファンヌ・マラルメに、無門關の一則でも讀ませてやりたかつた。雲門因に僧問ふ樹萎み葉落つる時奈何。門云く、體露金風。

（一體、佛蘭西人ほど、小うるさい人間共はない、後から後からと新しいイズムを製造して、どうするのだ？　僕はそれによつて、佛蘭西文學の疲勞を見る、最後の䑛を出しきつたのだと斷言するが、それでいいか？）

かやうに僕は、取り立てたる象徵詩人といふものを認めない。と同じ意味からして、またダダイストといふものを認め得ないものである。象徵詩人は、單に象徵の殺戮者に過ぎなかつた。ダダイストは、ダダイストと稱して、醉歌橫行、××と××との歌に獨創を誇示するが如き若者は、曾つて人生の灰色を叫んだ自然主義靑年の歪つな變形以上

の何ものであらう。君等の個性は何處へ忘れて來た

そこで僕がダダといふものは、一つのイズムではない。一つの精神である。

唯一死——それがニヒリストの最も徹底した最良の解決だ。然し、それは必ずしも一切の人に可能ではあり得ない。

そこで……ダダが來る。

ダダは、僕にとつて、まづ、一つの解決である。若くは、一つの逃場である、悲劇よりの……

僕はここで、ダダイズムの講義しようとは思はない。瑞西のチュウリッヒのカバレエ・ヴォルテエルで、ドイツ人のリヒアルド・ヒュルゼンベックと、ルウメニア人のトリスタン・ツァラアとが……そんな退屈な事は眞平御免。

ヒュルゼンベックのダダと、トリスタン・ツァラアのそれとは違ふ。辻潤のダダと、高橋新吉のそれとはまた違ふ。違へばこそダダだ。同じければムダだ。

然し、ダダがダダといふ以上は、そこに共通し、一貫したものがある事は云ふまでもない。それをかりにダダ的精神と名づける。

ダダは流動の精神である。ダダ的精神は、まづ何よりも、無論理の精神である。かくてダダは、一切の既成觀念を破壞するのである。

ダダは哲學の解毒劑だ。彼は好んであらゆる統一を失ふ——そこで同時性。

ダダは剝き出しだ。皮膚脱落して、唯だ一眞實ありの自得だ。ダダには美もなく、醜もない。善もなく、惡もない。上もなく、下もない。頭もなく、尻尾もない。

ダダは何物にも囚へられぬ。變幻出沒、自由自在のプロテウスである。ダダの尻尾をつかまへられるものは、ただこれダダのお玉杓子である。

ダダは絶望を知らぬ。轉落を知らぬ、死をさへも知らぬ。その底まで徹したからだ。紫雲たなびくところ、駄々佛在り矣。

ダダは融通念佛だ。思想の共産はおろか、木魚講でもやりかねない。（これは危險……）

そして、結局、かまふものか……否、かまふものかがその端緒かも知れない……

ダダの背後には、恐るべきアナルシイが横はつてゐる。

然し、これらの言葉によつて、諸君は驚いてはいけない。

人間は自ら知覺してゐる以上に、ダダイストである。人間がこの苦惱に充ちた人生に於いて、幸ひに天壽を全うし得るものは、一に彼のダダ的精神による。

諸君が足を拭いた手拭で顏を拭くとき、諸君はダダイストであることを知らぬか？

諸君は日光のさし込まない電車の中では、敢て口を蔽はうとせず、自己の肺臟の存在を絶對に忘れてゐるではないか？

諸君は、自分のハイセツ物が、まだ體内にある間は、汚ないと思はないではないか？

諸君もまた、時々は酒に醉つぱらふではないか。そして、醉漢はダダイストである。千鳥足は生のダダ的表現である。「絶えず醉つぱらつてゐろ」と云つたとき、ボオドレエルはダダイストであつた。

然し、僕自身は、ダダとしても、幾分の論理を保存したく思ふ。これ僕のニヒリズムに徹せられない所以であるが——僕のうちにまだ幻影の、憑き物の存する所以であるが——然し、ダダを底まで行けば、再び、狂氣になるか、首をくるか……その時ダダは、肉の中を這つて行く無形の蚯蚓である。

僕は前に、醉歩蹣跚　蚯蚓のやうに剝き出しするダダイスト詩人を叱つたが、諸子、乞ふ怒りをやめよ。諸子もま

た立派なダダである。ダダに眞僞はないのである。諸子も立派に現代の虚無思想を代表してゐるのである。ただ、首をくくる事だけは止し給へ。

ダダは然し破滅でなく、成佛でありたい……

ダダは人生を寢ころぶ。肩肘張つて息張らうとはしない。眞、行、を超えて、草に到達する時、ダダは光る。僕はここに於いて、ダダに自分の救ひを見出すのである。草鞋を頭にいただいた趙州和尚のダダの無礙自在の境界を仄見したいのである。

辻潤はよく寢ころぶ男だ。彼は或ひは、この駄々佛の融通無礙に到達してゐるかも知れぬ。尤も、學問は悟道の邪魔、彼の學識は、駄々尊者としての不徹底を結果してゐるかも知れない。

僕はこの章で辻潤を論じて、ダダの眞諦を闡明するつもりであつたが、それも前に述べた理由と、今一つ、氣が付いてみると、原稿の枚數が驚くべく超過してゐるのとで、これも割愛して、聞くところによれば、この貧困と達觀との中に淸節を保ち來つた駄々先生のために、近く後援會の企てある由、志ある諸子が奮つて先生のために、自由なる後援せられん事を願ふだけに止めておく。

さて、この現代の精神的不景氣は、レオパルヂ時代の伊太利に想到せしむる、この無氣力なる、希望なき現代の狀態は、ダダに至つてその絕頂に達したであらうか？この絕望と沈下とのどん底から、果して何が生れ出るであらうか？

(六)　絕望的勇氣について

その絕望こそ、ニヒリストの出發點である。

一條の活路は、即ちそこにある、その絶望そのものの中に……これ、死中の活である。僕等の救ひは、ただその外にはない、その絶望の外には……

我々がこの人生の無意義と苦惱とから脫出するためには、一つの絶望的勇氣を必要とする。この絶望的勇氣が、その有り來りの道より、逆に方向を變ふる時、ここに新たなる創造、不斷の破壞による不斷の進展が生ずる。

この生に向ふ絕望的勇氣こそ、現代の虛無思想の積極的出口として、その無氣力の識りを雪ぐべき生々力として、これをこそ、僕は極力論ずるつもりであつたが、そして、加藤一夫氏等の運動に論及するつもりであつたが、今や、枚數が豫定の殆んど二倍近くにもなつてしまつたので、遺憾ながら、此の序說は、ここにひとまづ、これで打切る事とする。

行文亂雜、無茶苦茶流の横暴論法、また尠からず、少々ダダとして許し給へ。少々ダダにならなければ、こんな山の中に這入り込んで、一册の本も手許になしに、現代虛無思想論序說なんかが書けるものか——僕は白紙で行きたいよ、白紙が一番の傑作だ、名論だ。

大正十四年十月十日、山中霧中稿(「新潮」十一月號、十二月號所載)

附記。

この前奏は極めて不完全な「反語、逆說、諧謔、背理」にすぎないであらう。この本論に於いて、私は「多少の眞實」を提起し得たかも知れない。して、それは「江戶末期氣分と現代」「日本に於けるスティルネリアン」「正宗白鳥のニヒリズム」「創造としての破壞」「ニヒリストの神」等の數章より成る豫定であつたが、その斷片的發表を好まなかつたため、適當の發表舞臺を見出し得ずして、今日に及んだものである。今後、この中に摸索した思想を、部分的に開展せしめる日もあるであらうと思ふ。

吾が佛、他の佛

——我が個人主義の一面——

私は時々旅に出かける。そして、名所などを見に行つたとき、そこにお寺や社があると、賽錢をあげる。別に信仰があつてといふわけでは勿論ないが、さればとて、單なる習慣として、無意味にするとも限らない。一面、習慣を尊重して、敢て異を對てる必要をも認めないといふ明確な意識も働いてゐる。たとへその祀神は、狐であらうと狸であらうと、その祀られてゐるといふ事に、かりに一つの意味を見出して、敬意を表するのも惡くはないではないか。かく云へば、アルス・オプの哲學めいてくるが、あながちさうでもない。それほどやかましく云はなくとも、それはそれとして、相當の禮を以て對したいといふ氣持である。さればとて、これを直ちに僞善者だと云ふのは、少し酷ではあるまいか。それに、その氣持は分析してみると、もつと複雜なものでもあるやうだ。私はそれを、謂はば我々自身の神、卽ち我々自身の內部生命の或る力に對する無意識の禮拜の發現であるとも解してみたい。

卽心卽佛といひ、心外無別法といふ禪宗の寺にも、本尊がある。本尊のみならず、時には天部すらも祀られてゐる。あの默雷といふ恐ろしい大宗師のすわつてゐられる東山、建仁寺の中にも、摩利支天(?)が祀られてゐて、祇園の蘇小の信仰を得てゐるのである。本尊の頭から小便をひつかけてみたところで、それで格別えらいといふ事にはなるまい。偶像破壞は、未だ偶像に囚はれた心と云はねばならない。建仁寺の塔頭に火を放つた舜海尼も、その瞬間の心持には、佛祖共に斬るといつた意氣込みがあつたかも知れないが、火の手のあがつたのを見ると、急いで仲好しの雲水のところへ電話をかけたり、湖水の方へ行きながらも、すぐ引返して、またその雲水の處へ行かずにゐられなかつた

ではないか。然し、私はそれを彼女の敗闕として嘲らうとは思はない。その女心を、むしろいぢらしく思ふ。彼女もやつぱり本尊なしにはゐられなかつたのである。歸するところは、その本尊ちがひに過ぎなかつたであらう。そんならば、伽藍佛教の本尊とて、やつぱり本尊として禮拜してゐた方がよかつたではあるまいか。

人間は本尊なしにはゐられぬものだ。卽ち、吾が佛が要る。どんなに神を否定し、宗教を否定する人でも、必ず吾が佛をもつてゐる。それは殆んど例外のない事實である。ただ、その佛が多種多樣、人每に異るまでである。大本教の宗旨によると、人間にはそれぞれ個有の神樣があつて、例の鎭魂歸神の法を行ふと、指先きから、その先生たちが、ぞろぞろ出て行くといふ。そして、それは狸であつたり、狐であつたり、豚であつたり、犬であつたり、人每に違ふといふ。笑つてはいけない。それは眞理だ。よく人間を觀察してゐると、この大本教の教義の莫迦に出來ない事を發見する。

狸や狐や豚などといふ人間侮辱はやめて貰ひたい。それもさうだ。然し、基督教の信ずる神樣といつても、つまりはさうした狸や狐の類ゐではあるまいか。いや、その基督教の神のみならず、我々の抱いてゐるあらゆる想念は……。思ふに、我々は例外なしに、憑かれた人ではあるまいか。人間の信仰とか、主義とか、理想とか、觀念とかいふものは、みな憑き物である。憑き物を落せとスティルネルは云ふ。憑き物は落すがいい。だが、その憑き物が落ちると一緒に、我々の希望も、夢も、生甲斐も、みんな落ちて了ひはしないだらうか？　狐つきの、狐の落ちた時の顏を見た事がありますか？　あつた人は、容易にこの私の危惧に同感するかも知れない。だからこそ、そのスティルネル自身も、また、自我といふ憑き物を後生大事に擔ぎ廻つた。自我こそスティルネルの吾が佛である、彼の神である。

幻影なくして、人は生き得るか？　それはむづかしい問題であらう。私はむしろ斷乎として、あらゆる幻影と、理想と、夢と、(時には虛僞とを)支持したい、ただ、我々が生きてゐるといふこの一事實に

よつて……かう思ふ事がある。我々は生きてゐる。この簡單な事實は、しかも、あらゆるものを覆すだけの權威である。ダンセニイの戯曲に、一群の無頼漢どもが、嚴めしく閉ざされてゐる天國の門をこぢあけて、その中に莊嚴な虚無を見出して、呆然自失するといふガイストライヒな場面がある。私は時々、その喜劇的效果を想起して、微笑むのであるが、我々の凡ての祕佛が開けて口惜しき玉手箱であつたなら、むしろ開けないがよい。信者はただ一念にその神を信ずべきである。

カアル・フォスレルの『レオパルヂ』を讀むと、レオパルヂをヘルデルリンと比較して、二人とも無限を望んだのは同樣だが、後者がその後に無限の充實を見たのに反して、前者はそこに無限の虚無を見たと云つてゐた。無限の充實と無限の虚無！　成程、金貨の一杯つまつた財布と空の財布とでは、第一その重みが違ふのは云ふ迄もない。そこで、無限も革の財布の一種と見なして差支ないであらう。そして、その財布の中につまつてゐるなかみは――もとより、金ではなくて、神である。そこで、神を否定するとき、西洋では、それだけで直ぐに虚無思想と呼ばれるのである。西歐のニヒリズムなるものは、東洋の虚無思想とは、或る場合、むしろ對蹠的なものとすらも私には思はれる。

趙州和尚因ニ僧問フ、狗子ニ還テ佛性有リヤ也タ無シヤ、州云ク無。この無たるや、西歐人には金輪際わけのわからぬ無でなければならぬ。ひとり西歐人のみならず、西歐的教養に育まれた我國の多くのフィロソフアにとつても然りである。されぱその一人の鋭才は、この趙州の無とは、即ち永遠の謂ひである、汎神論者の神の謂ひであると云はれた。寶風居士はそれを聞いて呵々一笑した。明晰緻密なる論理的頭腦を有せる我がフィロソフアが、いかにしてその推論に到達したのであらうか、私は知らない。ただ、かかる思考法が、著しく西歐的のそれである事を知るのみである。要するに、神といふも、はた永遠無限といふも、一つの比喩に過ぎない。要すとは云へ、言葉は所詮言葉である。無といふも、神といふも、はた永遠無限といふも、一つの比喩に過ぎない。要するにそこまで行けば、その人々の個々の自得あるのみ、これ純粹に境界邊の事であるから、他からこれを忖度し、褒

貶する事を許されない。その境界の高下、その思想の深淺に對する直覺的判斷は存する。が、それは口から吐き出すよりも、腹の簞笥に藏つておいた方が常に無事である。そこで、私はただ、賣風居士のたててくれた一盞の茶を傾けただけであつた。

私はそんな難解な話柄よりも、むしろかのハイネの戲謔を好む。彼はかの有名な「物語詩後語」の中で、丁抹の宣敎師に、天國の幸福を說き聽かされて、改宗をすすめられたグレンランド人が、天國にも海豹はゐますかナと訊いてみて、そんなものはゐないといふ返事を聞くと、がつかりして、海豹がをらんぢや、グレンランド人は、天國へ行つても仕樣がないやと云つたと書いてゐる。して、我々もまた、グレンランド人同樣、それぞれの海豹を必要とする。それがないところは、天國もつひに天國ではありえないのだ。そこで我々にも、神も要れば、永遠も要り、主義も要れば、思想も要り、マルクスも要れば、カントも要る。ただ、グレンランド人と我々との相違は、彼等がその海豹を自由自在、意のままに取扱ふに反して、我々にあつては、我々の海豹が、かへつて我々を生かし、殺し、自在に引廻す、ただそれだけの事に過ぎぬ。

然し、いかに客觀的に見て、グレンランド人に如かぬとは云へ、海豹なきよりは、これあるをよしとする。(我々好事も無きには如かずの悟脫以前の人間にとつては)かくて、この所有(正確には被所有)に、我々は誇りを感じて差支ない。人みな吾が佛をもつ、かくて人はよく生くるを得る、各の龕の中に光り輝く本尊を、我々は後生大事にあがめうやまひ、これによりすがる。然るべきところである。然しながら、我々はかうして單に吾が佛の尊き所以を知るのみでは、未だ決して十分でない。我々はまた、他の佛の尊き所以をも知らねばならぬ。否、眞に吾が佛の尊き所以を知るは、他の佛の尊きを知つた後、はじめて可能であるとすら、私には思はれる。その點で、我々は特に寬容の德を學ばねばならぬ。これまでは、人々はあまりに不寬容であつた、自己を主張するに急であつた。それゆゑ多くの無用なる

争論が、人生を息苦しくし、世界を狭隘ならしめた。およそ思想の争ひは宗門の争ひである、吾が佛尊しの一念から發する。宗教を否定する共産主義文學者の如き、特にこの宗論の雄である。我々自身が神をもち、「我が佛をもつてゐる以上、他の神を、佛を嗤ひ、これを折伏せんとするのは、單なる不寛容にすぎない、宗門固執にすぎない。

この世に於ける私達の間の關係は、謂はば、太陽とその惑星との間のそれではなくして、めいめいがそれぞれ一つの太陽なのだ。各自が各自の位置を保ちながら、運行するのだ。それぞれが宇宙の中心なのだ。その外に中心はない。然し、その中心といふのは、自己中心の謂ひではない。自分が自分のゐべきところにゐると云ふだけの事である。そこで、私のテムペラメントからは、それを片隅と云ひたいのである。えらいとか、えらくないとか、何かにつけて争ふのは、あんまり窮屈だ。人と人との間に、それほど價値の差別をしなくてもよからう。みんなおなじ人間ではないか。みんなが同等の人間なのだ。それだけでいいではないか。自己の個性を尊重するものは、また他人の個性を尊重しなければならない。かやうにして、私は自ら尊重せんがために、他を尊重する事を學んだ。

これは個人主義である。然し、それは Das Ich より Die Ich への進轉と云はうか、貴族的個人主義より民主的個人主義への推移であると云はうか、はたニイチエよりスティルネル——その道を歩くものと云はうか。して、これもまた西歐的の、窮屈なる、煩瑣な差別であらう。それはよしとはしがたい。私は自らあらゆる比較と差別との外に立ちたいと願ふからである。とは云へ、私が一人の人間としての自分の分を知るのはいい。して、その分を守るのは更にいい。我々は唯だ一票しか有つ事を許されない。然し、その一票は、いかなる事があらうとも、これを有たなければならぬといふ、確固たる自覺の上に立つに至つた。そして、この一票主義は、實にこの寛容といふ德に、その基礎を置く。かくて今や私は、吾が佛をたふとばんがために、まづ、他の佛をたふとばんとするものである。

大正十五年十二月二十三日（「隨筆」二月號所載）

ブランデスの言

めづらしい雪が降つた。朝、起きてみると、庭は一面に白く、石蕗も藪柑子も、あはれに埋もれて、一樣におしならされては、廣からぬ庭が一層狹く見える。もう三四寸も積つてゐようかと思はれたが、雪はなほその上に降つてゐる。雪景の常として、ふだん何の眺めにもならぬところすら、めづらしいものに裝はれて、すぐ横の小川を挾んで、立木の枝が幾重にも重つて、白く浮き上つてゐるので、ふだん見馴れた景色にも、何となく奧行きが出來たやうな氣がして、私は思はずいい雪だと呟いた。

けれども、思へばこの雪は、つい此の間、北陸で、あんなに人家を壓し倒し、汽車を埋め、その外いろいろの悲慘事をかもし出して、どれほど人間を虐げたか分らない。そんな事を考へると、私達がのんきな氣持で、雪景色を讃へたりする事は、さうした北國の人には、あだかも今のプロレタリアの人々が、ブルジョア階級の人々の抒情詩に對して抱くのと同じやうなフレムトな感情を起させるかも知れないとも思ふ。けれどもまた、一々こんな風に、詩情起る毎に、それと關りなき無數の社會的事實を想起して、自分の感興を否定し去つて行つたならば、最早や純粹な、個人的な文學表現は不可能となるに違ひない。さうした考へが、また、近頃私の考へてゐる（いやでも考へさせられる）文學上の諸問題の方へ私の心を導いて行つた。私は最近共產主義文學者によつて唱道されてゐる、かの文學上の目的意識論なるものを想ひ起してゐたのである。

丁度その折りに、私の偶然手に取つた新聞紙は、八十六歲の老文豪ゲオルク・ブランデスの訃を報じた。ブランデス逝く！　この簡單な報道は、あだかも多年親しく手をとつて敎へ導いてくれた親切な恩師の訃に接したかのやうなシ

ヨックを私の心に與へた。おそらくブランデスは現在思想界の最高峰をなす十九世紀以來の思想家、文豪中でも、最年長者であつたに違ひない。あらゆる後進の批評家によつて、畏敬を以て「老ブランデス」と呼ばれ、また屢々歐羅巴文學界のネストルと呼ばれた。歐羅巴に對するブランデスの使命は、或ひは夙とに終つてゐたかも知れない。けれども私には、尠くとも我が文壇にあつては、ブランデスが眞に我々を敎ふべき時は、むしろ今後にあるとすら考へられるのだ。

ブランデスの述作は、『シェクスピア』や、『ヴォルテエル』や、『ゲエテ』の如き、十八世紀、若くはそれ以前の大精神に就ての大著も、夙に廣く世に聞えるところであるが、然し、ブランデスを私達に最も親しくしたものは、十九世紀の文學と思想とに對するその批判であつた。ひとりテエヌの弟子であり、イプセンの友であり、キエルケゴオルの紹介者であり、ニイチエ、クリンゲルの發見者であり、ヤコブセンの師であつたのに止まらない。ブランデス一代の述作は、十九世紀の精神的肖像畫をなしてゐる。十九世紀の大精神、大思想で、その眼を逸したものは殆んどなからう。しかも私はブランデス自身についての評傳といふものは未だ讀んだ事がない。今後大いに出るであらうとは思ふが、現在のところでは、私の寡聞のせゐか、長く求めてゐるにも拘はらず、一つもそれある事を知らない。わづかにその自傳『少年時代と靑年時代』によつて、その生涯の一時期の輪廓を知り得たのみである。然し、この書は、時代の激動に伴奏する心臓の響について、より廣くより廣い世界を發見しつつ進む一つの大きな精神の發展について、實に多くの事を敎へるものである。

ブランデスは私の恩師である。外國文學の大家(外國文學を研究する大家の謂ひ)の多くを有する我が文壇では、かやうに云ふ事すら僭越であらうとは思ふが、私が文學の人生に於ける眞の意義を知つたのは、ブランデスの『十九世紀文學の主潮』に依つてであつた。この書を讀まないで來たつたならば、私は貧弱なる今の私よりも、なほ數倍貧弱

なものであつたに相違ない。その意味で、私はこの十九世紀のあらゆる精神を抱括した、所謂「デル・ウェニヱルゼルレ・ガイスト」であり、また、サント・ブウヴ以後私の最も尊敬する批評家であつた人の死に對して、その長い間の感謝の意を表するため、一つの悼辭を書きたいと思つた。けれども、世には私よりもどんなにか深くブランデスを知り、且つ尊重せられてゐる、博學なすぐれた人々がある事を思ふと、(故有島武郎氏の如き、そのすぐれた一人であつたと思ふ)私はそんな出過ぎた事は差控へた方がいいといふ事に氣付いた。それゆゑ私はこの丁抹の老文豪について、この上言を費す事を避けようと思ふ。

けれどもただ一つ、私がブランデスの口から聞き得た非常に多くの暗示に富んだ言葉の中で、いつも想起せずにゐられない一つの言葉がある。それを玆に書き記して、それに關聯する私の感想を書きつけて見たいと思ふ念を禁めることができない。それは一八九六年に書かれた『倫敦印象記』中、ピョトル・クラポトキンとの會見を記した條にあるものである。そこでブランデスは、其所謂「パアトス無くエムブレエム無き革命家」、「全十九世紀のあらゆる國のあらゆる自由の戰士と比較しても、これ以上天分あり、これ以上非利己的な人は殆ど一人もない」人として讃嘆してゐる露西亜の革命家について、多くの言を費した後、最後にその『麵麭の略取』を評して、「現在の社會組織の批判に於いては、私はもとより彼と一致すること、彼の用ゐる一つの表白といへども、私には言ひ過ぎとは思はれない位である。然し、彼が建設しようとする時には、私は彼に從はない。建設せんとするものは、花崗石の上に建設しなければならない、そして、人間の天性に於ける花崗石層は、自愛心である。それはクラポトキンの手中に消え去つてしまふ。」と云つてゐる。

はじめてこの言を讀んだとき、私は思はず案を拍つた。クラポトキンの『麵麭の略取』には深くも心を動かされながらも、その未來についての餘りの樂天的、光明的な見解に、漠然たる不滿――と云ふより、むしろ不安を抱いた二

十代の私は、日々又日々の自他に對する省察と觀察との結果、愈々益々、人間の利己心(自愛心)が、いかに根強いものであるか、むしろそれのみが人生の根強い基礎ではあり得ぬかとまで考へるに至つて、今や反つて、ニイチエの如きこの利己心の偉大なる肯定者の言說に惹かれるやうになつてゐたので、このブランデスの言は、疑惑の中に力強い斷定として落ちたのだ。して、これは晩年の老ブランデスの言ではない。今から三十年も前に書かれたものである。一九二二年、獨逸譯で現れた『ゲエテ論』以後、その著作に接してゐない、殊に未だその近著『十九世紀の創造的精神』を繙いてゐない私には、その後のブランデスの意見にいかなる變化が來つたかを知らないが、恐らくあまり著しい變化はなかつたものと想像する。それはどうあつてもよろしい、この十九世紀の末年に書かれたブランデスの言は、世界大戰の後、一般に社會改造の思想が澎湃として起り、我が文壇でも、某氏の、否マルクスの所謂「世界を變更せんとする意志」が、「超個人主義文學」の提言をすら生むに至つた、マルキシズム全盛の今日といへども、私には絕對不變の眞理として、受け容れずにはゐられないのである。

人間性の不變の利己心といふものを勘定に入れないでは、いかなる新社會の理想も、單なるユウトピアにすぎないであらう。あらゆるユウトピアは、この醜いものを蔽ひ隱すこと、丁度この庭前の雪のやうに眺められる。この雪景色を詩情を以て愛するやうに、私はユウトピアを愛する。然し、不變の現實は依然としてその下に存するではないか。他よりもむしろ自分を觀察する事愈々深きにつれて、自分の利己心が、美しい感激や理想主義の底にすらも、その醜い顏をのぞけてゐる事を見出して、私は云ふべからざる厭惡に囚はれた事、それ幾度びであつたらう。もとより私は特別利己的な人間であるかも知れない。そして、世にはかかる利己心の稀らしく微弱な人を見出す事も絕無ではない。現にクラポトキン自身や、また伊太利のマッヂイニなどの如き人は、最も利己心の空しい稀有なる人格であつた。けれども、それゆゑに、あらゆる人間がクラポトキンやマッヂイニであると考へるなら、大いなる誤りであらう。そして、

現在の社會組織を變革しさへすれば、人間の利己心が忽ち消滅して、凡ての人がみなクラポトキンやマッヂイニの如き人になり得ると考へ得られようか？　私にはむしろ、それに達する道は、全く別處に存するといふ信念がある。

私は叛逆を愛する。最大の叛逆を最も愛する。私が社會主義者を嗤ひ得ないのは、彼等が現代資本主義社會の叛逆者だからである。然し、私が彼等を愛するのは、彼等が人間性の叛逆者であるからだ。然し、その叛逆の方法に於いて、私は彼等と道を異にする。人間性の本質は利己主義である。これを中軸として世界は廻轉してゐる。これに對しては、我々は決然としてこれを克服する道を取るか、「又はこの確固たる地盤の上に、その理想を築き上げるか、二つに一つである。然るに、ソシアリストは、ブルジョア階級の利己主義についてしか知らない。若くは、この人間性の不變の本質については全く考へない、そして、ナイーヴなオプティミズムを以て、その最大の叛逆を行はんとするのだ。これはクラポトキンの如きアナルシストのみならず、他のソシアリスト、コンミュニストにも共通の事實である。そして、今やわるい事には、そのオプティミズムに同じないものは、直ちに反動主義者とか、プチ・ブルジョアとか云つて、痛罵し去る、これが今のコンミュニストの不文律のやうである。

およそ思想の爭ひは、宗門の爭ひである。古來、宗門の人は、吾が佛尊しの一念から、常に他宗を排し來つた。基督教、猶太教、回々教等の相互間は云ふまでもなく、その基督教の中にあつても、いかに多くの宗旨爭ひがあつた事ぞ。そして、もとより我が佛教史上にも、かかる宗門爭ひは、おなじく夥しく、且つ顯著なものであつた。が、就中、この排他心の烈しいこと、日蓮宗に如くものはなかつた。日蓮上人自身が他宗を悉く外道天魔として折伏せられた。その未流に至つては、かの不受不施宗の如き極端な宗派をも生むに至つた、が、およそこれ位ゐ激烈な宗門固執、不寛容はなからうと思ふ。そして、私は現代のコンミュニズムの上人達（少くとも文壇の）によつて行はれる議論を讀む毎に、未だ曾つてこの日蓮宗を想起しなかつた事がない。これは決して、その喧囂が御會式のお題目の、團扇太皷の音

を聯想せしめるがゆゑではない。いささかも自說に反對するものは、悉くプチ・ブルジョア、反動主義者、低能、愚劣等の語を以て葬り去らんとする（バクウニンに對するマルクス以來の傳統に據つてアナルシストをも）その激烈な宗門固執のゆゑである。そして、かかる狂信は、これを宗教的現象として見るべきものであるかも知れない。

現代の宗教はマルキシズムである、といふ言葉を、私は何人（なにびと）かの口から聞いた。して、日蓮宗に於いて、日蓮上人がお祖師樣である如く、マルキシズムに於いては、カアル・マルクスがお祖師樣である。我がマルキシズムに於ける救世軍の山室少將とも云ふべき聲望を、有するK氏の祖師信仰を、曾つて、三井甲之氏が指摘せられたことがあつた。果してさうであるか否か、私は知らない。然し、尠くとも、文壇に於ける共產主義文學者のあまりの不寬容、あまりの他宗折伏は、その熱誠を多とするにもかゝはらず、私には屢々南都北嶺の山法師どもを、想はせずには措かないものがある。

社會共產主義の目ざすところは、要するに、人間を幸福にするにある。人間に均等の幸福を招致せんがために、現在の不公平不合理なる社會組織を變革せんとするものであらう。社會共產主義の理想の實現によつて、果して人間が眞に幸福になり得るか、それは疑問である、それが實現しない以上、一つの假定たるに止まる。然も、これを信ぜざるものは、直ちにブルジョアの走狗として痛罵を受けなければならぬのは何故であらうか。また、人間が幸福になりさへすれば、たとひそれが社會共產主義の理想によつてでなくともいい筈である。然るに、自己の思想に從はないものは、直ちに、同胞の苦惱に無關心なる利己主義者であり、反動主義者であるとして排擊されるのは何故であるか。同胞の苦惱を座視するに忍びずといふ感情は、敏感な心の人には必ずある。だが、それがなぜ、直ちにマルキシズムに導かねばならぬか、それ以外に何の道もないのか、私にはそれが理解されない。そのめざすところが同一であるとすれば、異るところは單にその方法に過ぎず、その道程に過ぎないのだ。とすると、それは要するに、ただ見解の相違

ではないか。ハイネはその『物語詩後語』に於いて、自分の神への復歸を難じたその「啓蒙的な友人達」を、「無神論の高僧」、「不信仰の狂信的な僧侶」と呼び、彼等が「その不寛容に於いて一層激烈である」と云つた。率直に告白すれば、私は或る有名な共產主義文學批評家の或る論文を讀んだとき、このハイネの言を想起したのであつた。「狂信的」と云ひたいものを、その語勢の中に感じて、多くの同感を準備してゐたにも拘はらず、結果は强く反撥するものを自己の內部に感じた。かく云へば、直ちに例の慣用語で排擊される事は明白であるが、さうした激情が、即ち私のアンティパシイに値するのである。吾が佛尊しの一念は、即ち是れ主我心である、かりに人我ならずとするも、拗くとも法我たるを免れない。自己の信奉する思想のみが正しくして、他の抱懷する思想は、悉く謬見であり、不都合であり、甚しきに至つては、罪惡であるとなすは、これより大なる我意はない。それは結局一種の個人主義的見解と見なすべきものであつて、決して超個人主義ではあり得ない。そして、私の意味する超個人主義とは、自己の我を絕した寛容の精神を指すのである。自己の主義主張によつて他を壓服せんとするものは、强制である、無理强ひである。强制は反抗を生む。そして、これが理論鬪爭の名を以て呼ばれる。この理論鬪爭たるや、或る見方からすれば、ニイチエの所謂「權力意志」の發現と解する事が出來る。(文學上の社會性の强調と解すべき藤森成吉氏の超個人主義文學論についての疑ひは、また別に書きたいと思ふ。)

一本調子でなければ、議論は出來ない。あらゆる主義主張は、常に人生の一面的眞實の强調であつた。一個の議論は常にその對論を喚び起し、一個の主張は常にその反駁を生む。これが永遠の人生であらう。人間の自愛心は、かうして永遠の鬪爭を反覆して行くのであらう。然し、いつかはその凡ての不和と分裂と衝着との、調和せられる日が來

るであらうか。來るかも知れない、或ひは來ないかも知れない。然し、人間の利己心を肯定せずしては、建設はつひに可能ではあり得ない事を、私は益々信ぜずにはゐられない。叛逆も單なる叛逆に終るならば、感情の滿足たるにすぎない。そこで叛逆を愛する私もまた、この人間性の花崗石層の上に、いかにして建設すべきかを考へてゐる。だが、批評家であるブランデスは、そのいかにを私に敎へてはくれなかつたのであらうか。

昭和二年二月二十四日(「大調和」四月創刊號所載)

時代と個人の迷ひ

人間の一生は、迷ひの連續である。生きてゐる限り、人間は迷はないですます事は出來ないのかも知れない。後になつて考へて見て、どうしてあんな間違つた事をしたのだらう、どうしてあんな失錯をやつたのだらうと、不思議なやうな氣がするが、その當時は、少しもそれに氣が付かないで、さもさも當然の事のやうに、その外に道がないかのやうに、その間違つた道を進んでゐるものだ。

そして、これはひとりの個人の生涯の上のみにはとどまらない。恐らくは人類の歷史も、おなじくこの迷妄と過失との長い連續に外ならないのではあるまいか。

この現在から、しばらく過去の時代に溯つて考へてみるがよい。我々は、どうしてあんな不合理が、公々然と天下の人心を支配してゐたのか、理解するのに苦しむやうな事はないか。

例へば、最も手近な德川期の封建時代のことを回顧してみよ。私たちはこの感がとりわけ深いものであるやうに思ふ。

誰でも知つてゐるやうに、それは士農工商の階級制度が嚴然としてゐて、人は生まれながらに、その身分を定められてゐて、その中から超出するといふ事は、不都合な事でもあり、また、非常な努力をも要した時代である。後になつて、町人社會の金權の勢力が增大して、武士といへども、金のためには、町人の前に頭を屈しなければならなくなつたとしても、當時に於いて、武士の階級に生まれるといふことは、少くとも「物」でない、一個の人間である事であつた。

けれども、その武士階級すら、恐ろしく不自由なものであつた。喜怒哀樂色にあらはさずといふのが、當時の士人の修養であつた。それは實に、彼等が身を保つためには必要缺くべからざる修養であつたのだ。一擧手、一投足、すべて習慣によつて規定され、その規定を破るのは非常な恥辱とされた。

當時にあつては、口を開いてのんきに笑ふことさへ出來なかつたのだ。天眞爛漫に、自分の本當の感情を發表することは出來なかつたのだ。何といふ窮屈さだつたらう。何といふ不合理だつたらう。しかも、當時にあつては、それが當り前であつた。誰も、いや少くとも大多數者は、さうした社會制度を不合理だとは思はなかつたのだ。

もとより一般に考へられてゐるやうに、當時は現在よりもずつとのんきな氣樂な時代であつたかも知れないが、よしいかにのんきで、氣樂であつたにせよ、決して我々の羨むべき眞の自由なる社會ではなかつた。

今、私達は幸ひに、その息苦しいやうな窮屈な時代から解き放された。あの時代と比較してみると、今の時代は、たしかに私達にとつて、事情がよくはなつてゐる。が、それはいかに眞の自由とは遠いものであらう。今の時代には、また今の時代の不合理と不自由とがある。前代の人の知らなかつたやうな新しい束縛が、私達の生活を壓し附けて來た。一面から云へば、人心がその不自由に目ざめたのであるとも云へよう。が、とにかく、新しい文明の輸入されたと共に、文明の徽ともいふべき厭やなものが輸入された事は疑ひない。かうして、近代の資本主義的社會が構成せら

れて、從つてまた、勞資問題がやかましく論ぜられるやうになつた。私達は新しい社會組織の齎らした當然の不合理のために惱まねばならなくなつてゐるのである。

武士は食はねど高楊枝、——即ち日本人風の精神主義は、また、前代の迷妄の一つと認められはじめた。今や人々は、是が非でも、經濟意識に目ざめねばならぬとされてゐる。文人墨客の風流はブルジョアの幇間どもの恥づべき個人主義と享樂主義とを暴露するにすぎないのである。果して然るか？　私は知らない。が、とにかく私達は、文學者も、また一個の勞働者である事の自覺の上に、筆を執らねばならなくなつた。これ、非常なる變化である。

プロレタリア文學運動は、ひとたび挫折したかに見えながら、今や、再びその勢ひを盛りかへしつつある。「ジャアナリズム文學」が、「所謂文壇人の文學」が、依然として文學界の覇權をとつてゐるとは云へ、無產派の論陣はすさまじい活氣を呈してゐる。ジャアナリズム文學の强味が、あだかも今の政界の地盤なるものの、即ち、情實關係と叩頭と戸別訪問との强味に比して、たいして差支ないらしいのに對して、無產派の人々の論議は、あだかも理想選擧なるものの言論戰に似てゐるかとも思はれる。されば、今のところ、我が國狀では、早急の勝利は望まれないとしても、評論界に於いては、旣に勝利を制しつつあるやうに見える。何となれば、今や評論家、批評家は、すべて自己の立場を明かにすべき必要に迫られてゐるからである。そして、無產派に屬しない、未だその立脚地の判然しない人々さへ、無產派の主張に呼應してゐる現狀だからである。今や文學批評家は、その基礎教育として、マルクスの『資本論』をまづ讀み上げてしまはなければならぬ事となつた。

私は恥かしながら、まだ『資本論』を讀まないでゐる。從つて、そのため非難されても申開きは毫も立たない。けれども、私はキリアム・モリスが、『資本論』を讀破しようとして、すつかり頭腦を混亂せしめ、つひにこれを放擲してしまつた事を知つてゐる。しかも、これはモリスが藝術家であつた事を證するのみで、その社會改造の熱誠の薄弱

であつた事の證左では毫もない。ところが、私は未だ『資本論』を手にとつた事すらない、されば藝術家たるの實もなく、熱誠にも缺くるところあるであらう。が、トロツキイや、ルナチャルスキイや、ボグダノフやの文學上の評論は少し讀んだ。そして、幾分啓發せられるところのあつた事を謝してゐる。然し、我國の無產派の人々と同樣、或ひはそれ以上に、これらの人々のオプティミズムの强烈なのに驚いてゐる。このオプティミズム、これ、宗教を拒否する無產派の人々の宗教心である。翻つて思ふに、自分はあまりにペシミストである。また、當然、スケプティックである。他の理由はしばらく云はぬとしても、自分のこのペシミズムが、自分を常に勇ましい行進から引とめる。然らば、汝のペシミズムとは何ぞや、何がゆゑのペシミズムぞ。これは性格の偏癖であらうか、はた、人生の正しき視學(オプティック)であらうか。今、自分はそれがより多く後者であると思つてゐる。然し、決してそれを絕對視して、それに滿足してゐるものではない。自分といへども、その迷妄を一つ〳〵切り破つて行かん事を、常に熱望してゐるのである。

大正十五年五月五日(「文藝行動」六月號所載)

床屋政治論

――政黨政治か獨裁政治か――

Politik なる語は、自分にとつては、厭はしい語の一つである。曾てアルフォンス・ドオデエ作るところの政治を憎む文を讀む。政治が人心を掻き亂し、人々の間に敵意をかもし出し、さまざまの罪惡を構成するを見て、詩人は、政治よ、我汝を憎むと云つた。

曾つて阿部次郎氏が、かの所謂珍品事件なるものの起つた當時の議會の泥仕合を評して、ダンテの『地獄』中の二

人の醜漢のいがみ合ひに比せられた事があるが、既成政黨の泥仕合は、愈々出でて愈々その醜を加へて、朴烈事件といひ、最近の松島事件の僞證問題といひ、何となく地獄の硫黄の臭ひがするやうだ。

かうした我が政界の現狀を見る時、我々が政黨政治そのものに深い疑惑を抱くに至るのは必然である。これは我が國民の政治思想が極めて幼稚で、眞の代議政治の運用を完全ならしめるに至らないための、一時的、變態的の現象にすぎないと云ふ見方からすれば、なほ多くの望みを未來につなぎうるであらうが、然し、我々の先進國たる歐羅巴諸國の現狀は、その希望を裏切る事實を示してはゐないだらうか。勿論、かくばかりの醜狀を暴露はしないとしても、今や歐羅巴全體に、政治上の重大な轉換期に立つてゐるのは、既に多くの人の指摘せらるる如くである。政黨政治が民政黨政治は、或る意味で、既に試驗ずみであるとも云へる。そして、その結果は無論、落第である。政黨政治が一つ意を代表する、といふのは、ひとり、政治思想の幼稚な、今なほ官僚萬能の思想の彌漫せる我國に於いてのみ、一つの錯覺にすぎず、自己欺瞞にすぎぬのであらうか。

今や、おしなべて政黨政治は、それ自ら中途半端なものである事を暴露してゐる。かの英國の自由黨の現在の頽勢は、アスキスとロイド・ジョオジとの勢力爭ひにのみ基づくのでなく、それが保守黨と勞働黨との中間に介在して、中途半端な、存在理由の薄弱なものとなつた事に因するが、元來、政黨政治そのものの現下に於ける意義が、あだかもこの自由黨の窮狀を以て象徵化されてゐる事はないか。

この政黨政治の行詰りとともに、歐洲に於いて、一方、獨裁政治の出現を見た。北はソヴィエート・ロシアのプロレタリア獨裁政治、南は伊太利國粹黨のムッソリイニの獨裁政治。そして、その中間に挾まれた歐洲各國にも、獨裁的傾向が漸次顯著であると云はれる。勞農ロシアの事例はしばらく措く、ムッソリイニの鐵腕政治は、一見アナクロニズムの觀あるも、貧寒國の伊太利が、それによつて、多少面目を明らかにしつつあることは、我々の大いに考へねばならぬ

事だ。

ムッソリイニは、現代の最も痛快なる人物、レニンが生前、伊太利を救ふものは、ムッソリイニの外にないと云つたのは、これ英雄英雄を知るものか。しかも彼のあまりの强引政治は、我國の新聞ではあまり評判がよくない。彼をして日本にあらしめば、山本、大隈、原位の攻擊ではすむまいと思ふ。また、實際、かかる忌憚なき獨裁は、無條件に承認できない事は云ふまでもない。

我が理想とするところは、直ちに無政治である。ポリティックの無き世界である。かの擊壤の歌の「日出でて作し、日入つて憩ふ」無爲にして化する底の生活である。然しながら、堯舜の世は既に遠い。のみならず、政治的動物と云はれる人間は、人二人寄れば、そこに直ちにポリティックを現出するをいかにせん。實際生活といふものが、すでに幾分ポリティックの性質を帶び來る。政治は人間の避け難い運命である。今や政治とは最も緣遠かるべき文學界にすらも政治は入り來つた。かのプロレタリア文學運動は、卽ち、文學の中に政治を、若くは政治の中に文學を導く運動に外ならぬではないか。

政治憎むべしは詩人の感情に過ぎぬ。我々は各々自己のために、よりよき政治を求めねばならぬ。政黨政治によつて、無定見、無氣力なるオッポテュニストのため長く苦しめられてゐる我々の間に、政黨政治か獨裁政治かの疑問の生ずるのもまた必然である。自分の求めるものは、陳套の語ながら哲人政治である。確固たる主義主張ある、卽ち、信念に裏づけられたる政治でなければならぬ。結局は人、ただ人あるのみ。そして、この考へは必然的に、政治上の凡庸主義たる政黨政治よりも、その天才主義たる獨裁政治に傾くであらう。然し、自分は現下の如き醜態は極端とするも、かくなりやすき可能性に富む政黨政治を好まぬとともに、またいかに結果は良好なりとするも、一個の偉人の意志を絕對とするが如き獨裁政治をも輕々に是認し得ないのである。自分の望むところは別にあるが、それはあまりに現實に

遠いと云はれるかもしれぬ。で、それは保留するとして、差當つては、普選の結果に多少の期待をかけて見る位で止むべきものであらう。とにかく、外國の經驗しただけの事は、一應經驗してみてからでなくては、十分の事は云へないであらう。

大正十五年十一月十六日(「日本及日本人」新年號所載)

古典に見出す自己

過去に溯つて觀る現在と、現在より眺める過去と

兼好法師論　（又は「徒然草鑑賞」）

世はさだめなきこそいみじけれ　　兼好

「つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」

この『徒然草』の冒頭は、多くの人の諳記してゐるところであらう。私には、それがよく隨筆家の氣分を現はすとともに、またそのまま、隨筆の文學的性質の說明に代へる事ができると思はれるため、特別の興味がある。

それを取つて直ちに題名としたこの「つれ〴〵」といふ言葉、この王朝時代から慣用せられ來た言葉を、世紀末的なアンニュイの語を思はせると云つた批評家があつた。それは面白い落想ではあるが、兼好の場合には、必ずしも當らぬであらう。それに兼好が王朝時代の思慕者であつたとしても、その事によつて、一層彼の心が王朝人の心でなかつた事を證してゐる。その生活態度と心境とに於いて、彼は既に長明、西行の境界を透過して、遙かに宗易、芭蕉に接してゐる。彼の「つれ〴〵」は彼獨特の氣分の表白である。それは現代語の退屈などとは、もとより遠い。要するに、「つれ〴〵なるままに」と、その言葉のままに味はへばいいのであらうが、これを書き記した人の境界から云へば、そ

れはむしろ今の我々のいふ「淸閑」であり、「閑寂」である。ここに語るものは、旣に老年に近づいた一人の世捨人である。ただ、この終りの「あやしうこそものぐるほしけれ」には、それとは稍や違つた氣分が感受されるといふ人もあるかも知れぬが、我々は反對に、そこに兼好の餘裕綽々たる、洒落な氣持がうかがはれるやうに思ふ。

「隨筆は原則として淸閑の産物である。少くとも、淸閑的精神から生まれねばならぬ。そして、私がここに淸閑精神的といふものは、一つの超脫的精神を意味する。何ものにも囚はれない自由な心である。これ隨筆の不用意であり、無目的であらねばならぬ所以である。」私は以前、隨筆文學を論じて、から書いた事がある。また、「隨筆家は一種の哲學者である。もとより體系立つた論理的哲學の敎授ではない、人生の直接の體驗と錬磨とによる人生哲學を談る人である。」とも書いた。

これは隨筆卽考證といふ一般概念に反抗して、隨筆の文學としての意義を强調せんとしたもので、かやうに斷定する事は、あるひは狹隘なる見解たるを免かれまいが、ただ、これを書いた時、『徒然草』とその著者が、私の腦裡にあつた事は疑ひない。『徒然草』は『枕草子』とともに、我國の隨筆文學の雙璧をなすものであるが、殊に兼好は、私から見ると、理想的な隨筆家だからである。

然し、隨筆家といふ名は、本來、意味をなさない語かも知れない。といふのは、隨筆家といふものは、それが私の偏癖の見でないとすれば、專門家の反對を意味するものだからである。閑餘の筆のすさびであるのが、隨筆の本來であるとすれば、自ら隨筆家を標榜して立つたり、專門的の事業として隨筆の著述に從事したりする時、旣にその隨筆としての意義の大半は失はれるも知れない。專門的精神が勝つとき、或ひは特殊的な研究となり、或ひは考證穿鑿奇談逸話の聞書たるにとどまつて、文學的鑑賞に堪へぬものとなりやすい事は、德川期の隨筆がこれをよく示してゐる。

兼好その人はといふと、どの點から見ても、專門家といふところはなかつたやうである。在家人としても、北面の武士であつた時の功名談のやうなものも傳へられてゐないではないが、武人として格別卓越してゐたといふわけでもないやうであるし、殊にその地位は早く捨ててしまつてゐる。出家遁世したと云つても、もとより『徒然草』中にその逸話の語られてゐる明慧上人や性空上人のやうな聖ではないのみならず、經學の知識はかなり深いものがあつたかも知れないが、學僧といふのでもなく、寺に住持するのでもなく、旅をしたとしても、西行のやうにそれを修行と觀ずるところも見えぬ。文學者として見ても、歌人として當時の四天王と呼ばれてはゐるが、西行のやうに歌道に一身を捧げたといふやうな打込んだところも見えないし、その歌もあまり特色のあるものではない。ただ一卷の『徒然草』が、彼を隨筆家として殘してゐるが、隨筆家とは人が專門家の裃をぬいで、單なる一個の人間となつたものに外ならぬとすれば、結局兼好は何ものでもなかつたわけである。

然しながら、この何ものでもなく、何とも片づけられないところが、兼好の兼好たる所以ではあるまいか。彼はしばしば堪能の非家をおとしめて、たとひ不堪なりといへども、その道の人のたふときいはれを說き、專門家を推重してゐるにも拘はらず、彼自身はどこまでもディレッタントといふ態度が見えてゐる。彼の有職故實の趣味は、かなり專門家で、それが幾分か德川期の隨筆の考證的傾向の根源をなしてゐるやうであるが、それすらより多く、彼一流の生活のこまかな味はひに重きをおくディレッタンティズムの現れのやうに見える。法師とは呼ばれてゐても、彼には「坊主くさい」ところが殆んどない。『徒然草』を『沙石集』や『選集抄』と比較すれば、それがはつきり分るであらう。天台に因緣深い人でありながら、彼には宗門固執が少しもない。兼好は御隨身近友の自讃にならつて、七つの自讃をしてゐるが、さうした折々の瑣事よりも、この寛容の德こそ、彼は十分自讃していいであらう。但、これは同時に、宗門の側から見ると、その缺點となり得るであらう。あらゆる宗門と專門との人の熱誠は、悲しいかな、その不寛容に

現れる。

兼好の寛容は、彼の人間學から出てくる。彼は苦勞人として、何事にも一應その尤もな理由を見出すのである。西行が後徳大寺の寢殿に、鳶を避けるために繩を張られたのを見て、直ちに出入を絶つたといふやうな一徹さに對して、兼好は小坂殿の棟に同樣の例を見ても、徐ろにそのいはれを聞いて、尤もと同ずるほど周到である。何事にも彼は楯の兩面を見る事を忘れない。彼は黨派の人でなく、偏見の人でなく、主張の人でない。彼は常に批評家である。批評家として、あらゆる事物の外側に立つ。即ち、彼は一個の隱者、一個の世捨人に外ならぬ。かうした人をとらへて、或ひは聖者と見、或ひは凡人と見る。或ひは破戒無慚の惡僧と見、或ひは南朝の忠臣と見る。さうした囚はれた見解から、我々はその既に解放されてゐる事を喜ばねばならぬ。兼好自身、さうした囚はれた理義の世界にはゐないのである。彼は最も自由な、拘束されない立場に立つてゐる。彼はある意味で、一個の自由人である。

古來『徒然草』は、その所説の矛盾をとがめられ、また、そのために著者兼好法師の人物が解しがたいとされてゐたといふ事であるが、今の我々には、かへつてさうした見方の方が理解されにくい。我々から見ると、この『徒然草』ほどよく著者の人物性行を現はしえてゐるものは、我國の許多の隨筆中にもさう數多くはないとさへ思はれるのである。兼好は情の上に立つて、情趣をたふとび、風情を愛すると共に、一面的なドクトリンを排した。そのため理に泥んだ眼から見れば、矛盾と思はれもするであらう。然し、それは教訓書、談理書として見るからの事であつて、文學的作品として見る場合、我々はこの矛盾のゆゑに、全人格としての兼好、一個の人間としての兼好に面接し得るのである。

私は『徒然草』を讀む度びに、モンテエニュ、パスカル、ラ・ロシフコオ、ラ・ブリュイエール、シャンフォール等のやうな佛蘭西のモラリストたちを想起せずにはゐられない。たしかに、兼好はモラリストと呼ばるべき種類の文學者で

あると思ふ。但、誤解を虞れて云へば、このモラリストといふのは、所謂道德家といふ意味ではない、もとより道學者でもなく、道德的教訓作者でもない。道德研究家とでも云はうか。要するに、人生批評家、人間學者の謂である。嘗つて、兼好をシャンフォールに比せられた人がある。兩者がともに僧衣をまとうてゐた事なども、その比較を容易ならしめたであらう。けれども、シャンフォールには苦汁が溢れてゐる、言々毒を含む。兼好にはその毒はない。私はむしろモンテエニュなどと比較さるべき點が多いと思ふ。モンテエニュにある長者の風が、兼好にあつては老莊風の超脱氣分である。シャンフォールは革命の渦中に投じて、その過激論のために斥けられた程の人であるが、時代や國情の相違は別としても、兼好は中正の人であり、矯激の語はまづ殆んど見出し難い。彼は冷靜な傍觀者である。

『徒然草』の中からは、一人の哲學者が語つてゐる。もとよりそれは抽象的な、形而上的なそれではない。學問よりも經驗を重んずる人生哲學者である。兼好の學問は、儒佛にまたがり、老莊に及び、決して淺いものであるとは思はれないが、彼を直ちに深い思想家といふ事は出來ない。それに或る點かなり常識的でもある。ある一部の人から、徒然草哲學が平俗な苦勞人哲學であるやうに云はれるのは、そのためであらうと思ふ。が、同時に『徒然草』が活社會に活動せる人々にとつて、しばしばその愛讀の書たりうるのも、またそれあるによる。人間學こそ、このあらゆる專門外の、學ならぬ學こそ、兼好の獨擅場である。その爭ひ難き地盤である。

モラリストは同時にサイコロジスト（それも心理學者と云つたのでは誤解の虞れがある、心理研究家、若くは心理分析家）である。そして、サイコロジストとは、要するに人間學者の意味に外ならない。私はここで、兼好の心理觀察がいかに微細にはたらいたか、彼がいかに人間學に長けてゐたか、いかに人生智に豐かであつたかを、彼自身の言葉によつて證したいと思ふ。まづ、その虛言について語つた二章を引いて見る。

「世にかたり傳ふること、まことはあいなきにや、多くはみな虛言(そらごと)なり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、ま

して年月すぎ、さかひも隔りぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定りぬ。」彼は冒頭まづ世間の虚僞を喝破し去る。今や、新聞紙によつてその生活を支配され、日々自分とは何の關係もない人達の身の上について、多くを聞かねばならぬのみでなく、いつ何どき自身について、どんな誤報を傳へられるか分らぬ危險にのぞんでゐる我々二十世紀人は、特別の同感なくしては、これを讀みえざるべき筈である。「あるにも過ぎて人はものをいひなすに」何等細緻な人間觀察であらう。とかく人の悪い噂だと信じやすい人間は、一段の精讀を要する。「筆にも書きとゞめぬれば、やがて定りぬ」正しくその通りである。世には印刷ぜられたる虚言は、その印刷せられた一事によつて、直ちに眞實として通してしまふ風習があるから一層適切である。ここにはその上また、歴史に對する懷疑すらもある。

「道々のものゝ上手のいみじき事など、かたくななる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人は、さらに信も起さず。音にきくと見る時とは、何事もかはるものなり。」當時には最も多かつた例であらう、今日でもある、人間の輕信と雷同性と。「かつ顯るゝも顧みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又われも誠しからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどをごめきていふは、その人の虚言にはあらず。」かういふ人もある。人のいひしままに鼻のほどをごめきて。人間一人が掌上に躍つてゐる。「げにげにしく所々うちおぼめき、能く知らぬよしして、さりながら、つまづま合せて語る虚言は、恐ろしきことなり。」何等の犀利、これ程の透徹した觀察は容易になし難い、さりながらの一語、勘破了也と云つた力がある。「わがため面目あるやうにいはれぬる虚言は、人いたくあらがはず。」これ宛としてラ・ロシフコオの口吻である。ずばりと云ひ切つたその切れ味を見よ。「皆人の興ずるそらごとは、一人さもなかりしものをといはんも、詮なくて聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとど定りぬべし。」誰しも思ひ當る事があらう、人生戯場の機微を穿つて、社交場裡が虚言の孵卵場たる事を示す。

「とにもかくにも虚言おほき世なり。」と次いで兼好は斷案を下す。「たゞ常にある珍しからぬ事のまゝに心もたらぬ、よろづ違ふべからず。」だから普通のありふれた事通りに取つておけば間違ないといふのは世間智。「下ざまの人のものかたりは、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を懇ろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふもせんなければ、大方はまさしくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず。」ここに兼好の重大なる態度が出てゐる。これを佛者の言として見ると、むしろ奇異であらう。馬洗ふ男が「足々」といふのをも、「阿字々々」と聞いたといふ明慧上人の信仰などに比すれば、何たる微温的の語であらう。だが、この決定的でない事が兼好の特質である。「偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず」とは批評家の態度である。そして、かうした偏らない、中正な見方は、他の個所にも常に現れてゐる。例へば、「人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかなからむ。」の如き、おなじペシミストの言としても、過激なシャンフォール流とちがひ、穩健なモンテエニュ流である。

次ぎに「達人の人を見る眼は、すこしも誤る處あるべからず。」の一段は、初めてそれを讀んだ時、私には一つの驚異であつた。前には虚言を構へ出すものの心理があつたが、茲には虚言を聞く方の心理がある。その人さまざまの心、それをこまかく說き分けた、實に精緻な心理分析と云はねばならぬ。「たとへば、ある人の、世に虚言を構へいだして、人をはかる事あらむに、すなほにまことゝ思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。」世間この類の人最も多し。人間は天性虚言を好む、虚言は眞實よりも常に面白いからである。「あまりに深く信をおこして、なほわづらはしく虚言を心得そふる人あり。」一犬虚に吠えて萬犬實をつたふ。自分の創造力も發揮しなくちや面白くない。「又何としも思はで、心をつけぬ人あり。」虚言の効果も相手次第。「又いさゝかおぼつかなく覺えて、賴むにもあらず、賴まずもあらで、案じ居たる人あり。」おぼつかなく思ふはいいが、囚はれて案じるといふところで、これも落第。「又まことしく

は覺えねども、人のいふことなれば、さもあらむとて、止みぬる人もあり。」これまた多し。「又さま〴〵に推し心得たるよしゝて、かしこげに打ちうなづき、ほゝゑみて居たれど、つやつや知らぬ人あり。」辛辣な觀察、こんなところにも人間の虚榮心は現れる。「又推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと、怪しむ人あり。」こんな用心深い人もなくはない。「又ことなるやうもなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。」こんなのが一番だましやすい。「又心得たれども、知れりともいはず、おぼつかなからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。」このあたりがまづ兼好の最もうけがふところか。「又この虚言の本意を、はじめより心得て、すこしもあざむかず、構へいだしたる人と同じ心になりて、力をあはする人あり。」こんなのが地獄に墮ちて、一番罪が重い。かうして見ると十人十色、よく洞察し得たものと思はれるが、然しこれはさまざまの人の觀察でもありうると共に、また自分自身の心のさまざまのあらはれの觀察であるとも見れば見られよう。

兼好は稀れなる自己觀察家であつた。彼は自分の心の微細な動きをよく見てゐる。「名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見るときは、又かねて思ひつるまゝの顏したる人こそなけれ。」かうした經驗は我々の屢々味はふところであるが、更に、「またいかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かかる事のいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひ出でねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。」と疑ふに至つては、從來の日本文學にはあまり類がない、こまかな自己觀察ではないか。この神祕主義者の一つの根據であり、近代の心理學者の力めて折伏しようとする、この今も人の必ず經驗するところでありながら、またすぐ忘れてしまふ精神狀態を、兼好は既にとらへてゐるのだ。サイコロジストとは、要するに、自己觀察家の謂ひである。

兼好は長明や西行よりも遙かに複雜な人であつただけ、また遙かに客觀性に富んでゐる。彼の人生智は、この客觀

性の賜物(たまもの)である。そして、この人生智が、今なほ彼を實世間の人々の教師とするのである。彼のかうしたプラクティカル・ヰズダムは、『徒然草』の全卷に散らばつてゐるが、今その中から二三を抄出して見る。

「世にしたがはむ人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にもさかひ、心にも違(たが)ひて、その事成らず。」この機嫌は人の機嫌でなく、時機を解する。機を見よと云ふのである。しかも、「かならず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず。」

「一事を必ず成さむとおもはゞ、他の事の破るゝをも痛むべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。」

「おのが分を知りて及ばざる時は、速かにやむを智といふべし。」

「あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。」

「しやせまし、せずやあらましと思ふことは、おほやうはせぬはよきなり。」これは兼好自身の語ではないが、一言芳談の中からこの語を抄出した人は、またよき人生學者でなければならぬ。

兼好が雙六やそれに類する勝負事について、度々云ひ及んでゐるのは面白い事實である。これは彼がこの種の遊びに趣味をもつてゐたからと云ふよりは、それが端的に人間學について敎へ、處世上の敎訓を與へるからではあるまいか。

「雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、勝たむと打つべからず、負けじと打つべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして一目なりとも遲く負くべき手につくべしといふ。」かうした上手の言葉に兼好は常に敬意を拂ふに吝かでない。しかもそれは「物にあらそはず、おのれを枉げて人にしたがひ、わが身を後にして人を先にするには如かず。」と云つて、かうした勝負事の失を說く事を妨げない。それはそれ、これは

これである。

「ばくちのまけ極りて、残りなくうち入れむとせむに、あひては打つべからず。立ちかへり、つゞけて勝つべき時のいたれるを知るべし。その時を知るをよきばくちといふなりと、あるもの申しき。」もまた機を見る事の教へである。そして、これを筆にするのは、敢てかかるわざを肯定するからでなく、「身を修め國を保たむ道」をも考へるからである。故に、「圍碁、雙六このみて、あかし暮す人は四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ」と云つた聖の言葉をいみじく覺えもするのである。かかる練達の尊重はひとり勝負事には限らぬ。「貝をおほふ人の」の段で、「よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかりおほふやうなれど、多くおほふなり。」の事實に感ずる心持は、また、城陸奥守泰盛や吉田とよぶ馬乘の馬に乘る前の周到なる用意に感じ、「高名の木のぼり」の言葉に感ずる心である。

ところで、世捨人の彼が、好んでかうした人生智や、人間學や、處世哲學を說くのは、これまた矛盾であるかも知れない。然し、彼が世捨人となつたのは、一面、またかかる煩はしい、うるさい世の中を、底の底まで知りぬいてゐたからであるとも云へよう。元來、ペシミストと云はれる人が、好んでワアルドリイ・ヰズダムを說くのは面白い現象で、ショオペンハウエル、レオパルヂ、みなさうであるが、しかも彼等ほどその葛藤の渦中に投ずる事を欲しないものはない。思ふに、彼等はそれによつて、此の世界に對する厭惡を、自他に徹せしめようと欲するのか、否、彼等はそれによつて、冷靜な人生哲學者の態度を示さうと欲するのである。そして、それが破るる時、それはスヰフトやフロオベルの如く、辛辣な諷刺——憎惡となつて爆發する。兼好の場合は、絕えてその憂ひがない。彼の願ひは、むしろかの西班牙のゼスイット僧バルタザアル・グラチアンの『處世神託』の最終の、最上の智慧が、「聖者になれ」といふにあるが如く、結局は、諸緣を放下して、一大事を究むるにある。かくて「名利につかはれて、靜かなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。」「智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽も殘さまほしきを、つら〳〵思へば、譽を愛するは人

の聞きを喜ぶなり。」「才能は煩惱の增長せるなり。」といふ時、その人生智は最上の智慧と合一する。茲で兼好の言葉は直ちに老莊の語となる、「まことの人は智もなく、德もなく、功もなく、名もなし。」

兼好の中には明かなペシミズムがある。然し、彼を端的にペシミストとして片付ける事の出來ないのは、老莊風の虛無思想を直ちにペシミズムと斷じ難いのと同樣である。彼は無事を好み、閑寂を愛するが、その範圍では、生活の味はひを樂しむ人である。「命長ければ恥多し、長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。」と云ひながらも、一方、藥草を植ゑんことを思ひ、醫師を友にとねがひ、「醫療を忘るべからず。」と特筆するやうな養生癖を示してゐるのは、ペシミスト特有の矛盾とも云はれようが、一面詩人で、一面達觀の人である兼好にあつては、自然である。彼には何處かエピキュリアン風なところがある。一體、禪宗の坊さんには、肉食僧と云はれる眞宗僧などよりも、反つてエピキュリアン風なところが多いやうに思はれるが、兼好にも禪僧風なところがある。『徒然草』には禪僧との接觸は少しも示されてゐないが、その境界はとにかく、その風流氣など、かなり五山の詩僧などに近いところもあるやうに思はれる。とにかく兼好はデリケエトな、洗練された趣味の人である。よく生活の味はひを解し、また愛した人である。『徒然草』のかなり多くの部分は、さうした生活味の鑑賞に費されてゐる。

「家居のつきぐ〱しくあらまほしきこそ假のやどりとは思へど、興あるものなれ。」と云ひ、「家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑き頃わろき住居は堪へがたきことなり。」と云うなど、世捨人らしくもあらぬ住居のよしあしにまで筆を及ぼす位に、彼は實生活の快適を重んじもする。が、とりわけその心は、およそ物の風情、折にふれてのこまやかな微妙な情趣、自然なり心なりのニュアンスといふやうなものに向ひ、それを深く嚙みしめて味はうとしてゐるやうに見える。さうした好尙は、例へば夜のおもむきを愛して、「人のけしきも、夜の灯影ぞ、よきはよく、物いひたる聲も暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂も、物の音も、たゞ夜ぞひときはめでたき。」

と云つてゐるところなどに、よく現れてゐる。これなどには、かなり『枕草子』などの影響も見えるやうに云はれてゐるし、元來、趣味の人としての兼好は、かなりに王朝時代の趣味の影響を受けてはゐるが、また既にそれとは餘程異つたものともなつてゐると思ふ。閑寂をたふとぶこの世捨人は、ひとへに濃厚を厭うて、淡泊を好む。例へば、いろいろと好める秋草の名を擧げたあとに、「いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に、しげからぬよし。」といひ、「花はひとへなるよし。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。」といひ、「賤しげなるもの」に、すべて物の多すぎる事を擧げて、「居たるあたりに調度のおほき」「前栽に石草木のおほき」などいつてゐるのなど、その好みを端的に現してゐる。それは彼の人生觀から出るもので、一面エピキュリアニズムの知足の智慧を思はせるものであり、さかのぼれば、老莊風の無爲恬澹の哲學に會しよう。

すべてあまれるよりも足らぬを愛し、事の半ばよりもそのあとさきを愛し、華美よりも簡素を愛し、實用よりも風流を愛する。最明寺入道が、土器に少しく殘つてゐた味噌をさかなに、こころよく酒數獻を傾けた風流に感じて、これを書き記したのも、栗栖野を過ぎて、遙かなる苔の細道のおくに、木の葉にうづもるる筧の雫ならでは、つゆおとなふものなき、閑寂な庵を見出して、「かくてもあられけるよと、あはれに」床しみながら、その庭に大きな柑子の木の、實を盜まれまいとて、きびしい圍ひをしたのを見出でて興ざめするのも、そのおなじ心のあらはれである。何事にも、ただあつさりと、物を七分にとどめるのが、まことの風流の道であつて、それを超えると、あやまつて風流の賊ともなり、俗惡ともなる。兼好は最もその沒風流を厭ふ。かの『徒然草』中の風流論ともいふべき、「花はさかりに」の一段で、かたくなな田舍人のしつこさを捉へて、「片田舍こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飮み、連歌して、はては大きなる枝、心なく折りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、よろづの物、よそながら見る事なし。」と云つた靈活な描寫を讀むと、露骨な嘲罵

や齷齪を好まない兼好ながら、その苦々しさがほのかに感ぜられるやうに思ふ。凡てかかる無風流人は、「よからぬ人」であり、「かたくなな人」としておとしめられる。それ反にして、兼好の尊重するのは、「ものわかりのよさ」をもつた人である、その「よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。」といふ風に、「興なき事をいひてもよく笑ふ」よからぬ人とはうらうへに、「をかしき事をいひてもいたく興ぜぬ」人である。そして思ふに、かうしたひかへ目な、溺れず囚はれない人こそ、まことに物の味はひを解しうる人ではあるまいか。丁度、多くの女性から女性へと胡蝶のやうに飛び移る人よりも、一人の女性を愛しつづける人が、より多く女性を知り得るやうに、多くを貪らぬ人こそ、多くを味はひ得る人ではあるまいか。

兼好の風流心は、またわざとらしいたくみを嫌ふ。「あまり興あらむとすることは、必ずあいなきものなり。」と言つて、仁和寺の僧たちが感興をかまへんとして失敗した滑稽な逸話によつて語らうとするところも、資朝卿が、東寺の門に雨やどりして、さまざまの不具者の集りを珍しく見てゐるうち、急に見るのも厭になつて、家に歸つて曲りくねらせた植木を見て、今迄こんなものを愛したのは、丁度あの不具者を珍しがつたと同じやうなものであつたと云つて、それをすつかり捨ててしまつたといふ逸話によつて暗示するところも、またそれである。「今めかしくきらゝかならねど、木だちものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかしく、うちある調度もむかし覺えて、やすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。」といふ風に、しつとりと落着いた、古風で簡素な趣きを愛して、「多くのたくみの心を盡して磨きたて、唐土の日本の、めづらしく、えならぬ調度ども並べおき、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目もくるしくいとわびし。」とて、不自然な仰々しい、見せかけの飾りたてをおとしめる心は、また、人のとりなしについても、「手のわろき人の憚らず文かきちらすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。」といふ風な批判となつて現れてゐる。すべてありのままのつくり飾らぬ自然のおもむきをたふとぶのであ

る。従つて、それは何の他奇もない、ありふれた、平凡なものに落ちつく。「何事もめづらしき事をもとめ、異説を好むは、淺才の人の必ずあることとなりとぞ。」といひ、「大かた何も珍しく、ありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなれ。さやうのものなくてありなむ。」といふ兼好である。

かうした兼好獨特の哲學は、やがて、「花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへを知らぬも、なほあはれになさけふかし。」の情趣主義ともなり、その戀愛觀にあつては、「露霜にしほたれて、所さだめず惑ひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるは獨寢がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。」といひ、「よろづの事も、始め終りこそをかしけれ。男をんなのなさけも、ひとへにあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲ゐを思ひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいはめ。」といふ特殊な態度となつて現れ、それはまた無常觀にあつても、「世はさだめなきこそいみじけれ。」「長くとも四十にたらぬほどにて死なむこそ」となるのである。ここに於いて、兼好は驚くべき手のこんだ享樂主義者であると云はねばならぬ。

然し、これは單純に享樂主義と云ひ切らるべきものではない。風流は必ずしも享樂ではない。兼好は風流人であり、その語は風流のおもむきを深く解した言葉であるが、その風流たるや、既に平安朝の風流ではない。かの風流才子の風流よりも、むしろ、風流佛の風流に近いのである。卽ち、彼は後の宗易、芭蕉らの風流への過渡に立つてゐるのである。宗易の茶道が、人爲より自然にかへり、華美をはなれて簡素につき、草庵一風の茶に、物足らぬおもむきを愛する侘の心法をとなへ出し、芭蕉の俳諧が、談林の浮華をはなれて、正風體をおこして、寂びの風雅をあらはしたその精神は、「不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。」と云つた兼好に於いて、その好き先驅者を見出す

であらう。

かうした侘びの精神は、また、自然の觀察にも現はれてゐる。兼好はまたよき自然詩人である。『枕草子』の自然描寫は、もとより靈活であるが、『徒然草』のそれとても、さまで懸隔のあるものとは思はない。感覺的なあざやかさでは劣るかも知れないが、その自然は一層深い自然である。自然に對する心が、一層微妙になつて來てゐる。「をりふしのうつり變るこそ」の一段、春の叙景はもとより巧妙であるが、「みなづきの頃、あやしき家に、夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。」といふやうなところにも眼を着ければ、「さて冬枯のけしきこそ、秋には劣るまじけれ。」とて、人の閑却してゐる冬枯のけしきを、しかも巧妙なる筆もて、「汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおける朝（あした）遣水より煙のたつこそをかしけれ。」などと描き出したあたりにも、祭のあとの葵のすがたおもむきを愛した兼好の趣味が偲ばれる。この一段のみならず、『徒然草』の多くの頁には、自然の愛が發露してゐる。そして、それは「なにがしとかやいひし世捨人の、この世のほだし持たらぬ身に、ただ空のなごりのみぞ惜しきといひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。」の一段に於いて、その最も切實な表現を得てゐる。そして、かかる自然愛こそ、兼好をかのフレンチ・モラリスツと分つて、彼を我々により好ましくせしめるものである。我々もまた兼好の子孫に外ならない。

して、かうした著者は、もとよりよき詩人でなければならぬ。私は前にサイコロジストとして、批評家として、人生哲學者としての兼好について、あまりに強く語つたから、そのため兼好が詩人でなく、詩人に遠い人のやうな印象を與へはしなかつたかを虞れる。それは大いなる誤りである。元來、サイコロジストは（從つて人間學者は）詩人と兩立しないものではなく、或る場合、詩人なるがゆゑに、よりよくサイコロジストたり得る。詩人がより深くなるとき、自分の心の觀察者であるから。その點は別としても、兼好はまた十分に詩人である。よし犀利な人生批評家であるとは云へ、彼は理智一片の人ではない。あのやうにも情趣をたふとぶ風流の人で、すべてを情のうるほひをもつて見

ようとする。談理と見え、敎訓と見えるものも、情緒の波にうるほされて出でる。矛盾は詩人の特權である。彼ほどラショナリストに遠い人はない。ただし、詩人としても、かつて淸少納言や鴨長明が、その歌よりもその散文に於いて一層詩人であつたやうに、兼好もその家集よりも、『徒然草』に於いて一層詩人である。

「風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、馴れにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我世の外になり行くならひこそ、亡き人の別れよりもまさりて悲しきものなれ。」この最も人口に膾炙した一段の名文は、もとより抒情詩人としての兼好の最もよくあらはれた個所であらう。その武人の時代に、中宮の小辨とよぶ女性に、はかない戀の苦しみを味はつたやうに傳へられる人の、切實な主觀が人を動かす。あまりにポピュラアになりすぎてゐるために、人はフレッシュには感じないかも知れないが、はじめてこれを讀んだなら、そのリズミカルな調子に惹き入れられるであらう。「されば白き糸の云々」の故事を引くところ、批評家、理智の人の兼好がいささか顏をのぞけないでもないが、それは同時に「昔みしいもが垣根はあれにけり」の適切な歌をも引き來らしめて、「さびしき、けしきさること侍りけむ」と哲學者が結ぶ。然し、この名文よりも一層兼好の詩を感ずるのは、「靜かにおもへば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞせむ方なき。人しづまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじとおもふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞその折りの心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなる折り、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手になれし具足なれど、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。」といふ感慨を抒せる一段である。

より長い叙事的な記述には、感想中にも屢々現れた小說家としての手腕の、十分に發揮されたものが隨分ある。有名な仁和寺の法師の足鼎をかぶつて舞ひ出して、後それがぬけないで大騷ぎする滑稽の描寫をはじめ、具覺坊が宇治の男の醉ひしれたるを連れて奈良法師に出あふ一段などもあるが、その最も小說物な興味あるは、「荒れたる宿の人め

なきに」の一段であらう。これは『徒然草』中有數の情景描寫で、しかも華かなシインである。王朝時代の物語の一節を讀むやうな思ひがする。「夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びてたづねおはしたるに、犬のことごとしくとがむれば、げす女のいでて、いづくよりぞといふに、」世間を憚つてゐる女の侘住居が、さながらに目に浮ぶ。「心ぼそげなるありさま、いかで過すらむと、いと心ぐるし。」男の女をいとほしむ、いかにも戀人らしい心の動き。「內のさま、いたくすさまじからず。心にくゝ、火はかなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。」女のゆかしい人がらも偲ばれ、男の好みも思はれる。このデリケエトに描き出された部屋の入口で、男の心のときめきも。「門よくさしてよ、雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人はそこ〲にといへば、今宵ぞやすきいは寢べかめるとうちさゝやくも、忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。」いかにも侘住居、にはかのとりこみ、その下僕どもの姿も心も浮びくる。「さてこの程の事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ふかき鷄も鳴きぬ。こしかた行くすゑかけて、まめやかなる御物語に、この度は鷄も花やかなる聲にうちしきれば、明けはなるゝにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難きことなどいひて、立ち出でたまふに、梢も庭もめづらしく靑みわたりたる、卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしをおぼし出でて、桂の木の大きなるがかくるゝまで、今も見おくり給ふとぞ。」何といふ文章、何といふ描寫、何といふリズムであらう。一番鷄、二番鷄、「隙白くなれば、忘れ難きことなどいひて、」その見交す顏と顏、しかも外はすつきりと靑い、若葉に露のしつとりと、めざむるばかりの卯月の頃のあけぼのである。後朝の纒綿たる情緒は、この簡潔な一章に描き盡されたと云つてよい。兼好が粹法師と呼ばるるを妨げない所以は、「よろづにいみじくとも、色このまざらむ男は、いとさう〲しく、」の哲學のためよりも、むしろこの描寫の上に存するであらう。これ正に一篇の創作、兼好もまた大作家の資ありと云はねばならぬ。

兼好はまことによく戀の情趣を解した人である。ものの風情を愛し、纖細な味はひを喜ぶ風流の人である彼は、男女のなかの心ばえ、心がまへに、それを最も味到する。或ひは、「久しくおとづれぬ頃、いかばかり恨むらむと、我がおこたり思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、仕丁やある、一人、などいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。」の女のさらりとして、氣の利いた、思ひやりある心盡し。或ひは、「朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげにげにしくよき人かなと覺ゆる。」男のひかへ目な、禮儀をよしとする風流な心もち。それは更に、「雪のおもしろう降りたりし朝、用事あつて文をやつた返しに、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが〴〵しからむ人の仰せらるゝこと、聞き入るべきかは。」といひよこした女の心を「をかし」と興ぜしめ、秋の月の夜に、明くるまで月を見て、女を尋ねて入りける人の「よきほどに出で給ひぬ」る後、「なほことざまの優に覺えて、物のかくれより、しばし見居たるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしき」なるを感じて、「やがてかけ籠らましかば、口惜しからまし。」といはしめる。しかも、前のは、「今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。」とあり、後のは、「その人程なくうせにけりと聞き侍りし」とある。戀のうしろには、無常がある。情趣をさらに美はしくするものは、その無常である。無常のゆゑに、人も世もたふとく、なつかしく、あはれ深い。「世はさだめなきこそいみじけれ。」とは、詩人の言葉であり、より多く哲學者の言葉である。そこには彼一流の悟道がある。それは最終の「八つになりし年」の一段で、最高の境界を打出しえてゐる。しかも、「命は人を待つものかは。無常の來たることは、水火の責むるよりも速かに、遁れがたきものを、」「その時悔ゆともかひあらんや。人はたゞ無常の身にせまりぬることを、心にひしとかけて、束のまも忘るまじきなり。」そこに道心者の兼好がある、宗教家として兼好がある。

故藤岡博士の考證によれば、『徒然草』は兼好が五十歳前後（元德二年以後、建武三年以前の間）の述作であるやう

に見える。たしかに、老年の作である。しからば、その年齢だけでも、心境文學たる『徒然草』は鑑賞すべく私にははるかに距離がある。しかも、また遥かに前から、『徒然草』を愛讀してゐた若者を、しばしばユウモリストであるが、サティリストではない、苦勞人の兼好は、微笑だけですましてくれるかも知れない。玆でふと私はなにがなしに、「よき細工は、少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたく立たず。」といふその立派なアフォリズムを思ひ起した。兼好は「少し鈍き刀」ではなかつたやうに思はれるが、然し、「よき細工」であつたといふことも……

大正十五年十月十日（「日本文學講座」第一巻所載）

附記。これはもと鑑賞の題目の下に草したため、本文の細目に徘徊しすぎた觀あるも止むをえない。テキストの引用は、日本文學全書本と、塚本哲三氏の『徒然草解釋』の原文との相互のいづれかに據つた。なほ塚本氏の如上の著書、及び内海弘藏氏の『徒然草詳解』、齋藤清衞氏の『國文學序說』の三書は、執筆前に一讀して、ともに暗示と敎示とを得た事尠少でない。玆に三氏に對して厚く謝意を表しておきたい。

江戸時代の隨筆と柳里恭

一　隨筆のいろいろ

およそすぐれた藝術品は、單に一時の眼を奪ふのみでなく、これと離れること久しくして、愈々その魅力の心に新しくなるが如きものでなければならぬ。これを文學的作品に限定してみても、その價値判斷の標準の一つは、かやうな點に置き得られようと思ふ。例へば、小說にしても、讀過とともに直ちに頭腦から消滅するものほど、その藝術的價値は低いもので、かの講談本の如きに至つては、讀むかたはらから忘れてしまふのが普通である。また、詩歌につ

いて云つても、心に忘れ難く、折りにふれて覺えずくちずさむほどのものは、何等かのすぐれた意義のあるのが普通で、それには韻律が非常に與つて力あり、聲調の妙が詩歌の重大な要素であるのも、この點から云つても首肯せられるであらう。

然るに、これらの小說、詩歌から眼を轉じて、隨筆文學にむかふとき、そこには全く別の世界が展けるやうに思はれる。普通の文學的作品に對するのと同じ標準を以ては、これに對することが出來ないのを感ずる。『枕草子』、『徒然草』等にあつては、感動の持續を値する部分、忘れ難く感銘する部分は決して尠くはないが、その後の隨筆には、かやうな胸奥にまで訴へる要素は殆んど見出し難く、人もまたそれを敢て求めようとはしない。今かりに我々が一人の讀者として、隨筆文學の叢書を（それは『百家說林』でもよく、『燕石十種』でもよいが）讀み漁る心持をかへりみるに、これを純粹に文學的鑑賞であるとは云ひ難い。それは耽奇の心でもあり、散漫な知識欲でもあるが、また一面、新聞記事などを讀むのと相似た氣持もある。文學ではなくして、文學の素材に對する心持である。然らば、隨筆は文學的作品でないと斷じ去るべきものであらうか？

事實、隨筆は從來全く、藝術的作品と見なされる事が尠く、文學史からすらも、殆んど閑却されて、特別に項目を與へられる事なく、わづかにその顯著なものの題目だけが、その筆者の主たる業蹟を記載した他の章に、附隨的に揭げられる位に過ぎない事が多かつた。そして、これには十分至當な理由があつた。本來、隨筆の隨筆たるや、畢世の力作といふが如きものでなく、既に一家を成せる人の緖餘の述作である點で、あだかもショオペンハウエルが、その主著に洩れたものを集めて、パレルガ・ウント・パラリポメナと名づけた、そのパレルガ（副作物）といふにあたる種類の文學だからである。

『枕草子』や『徒然草』の著者は、殆んどその一卷によつて、我が國文學史中に高い地位を占めてゐるが、しかもこ

の二人を隨筆家と呼ぶのは、何となくふさはしくない。元來、この二作は隨筆文學として、その實あつて、未だその名無かつたものである。そして、その事が反つて隨筆文學の本質的意義にかなふと考ふべき理由がある。然るに、室町時代の末期に、一條兼良の『東齋隨筆』が現れるに至つて、隨筆が隨筆の名目を冠すると同時に、文學的といふよりむしろ學問的意義を多く帶びるやうになり、德川期の無數の考證的隨筆の先驅をなした。普通隨筆とさへ云へば、江戸時代のもののやうに考へられる程、この期間は隨筆に富むにも拘はらず、また『枕草子』、『徒然草』に匹敵する文學的作品を有たないのは、概して創造的といふより、むしろ回顧的であつた時代の反映でもあらうが、一には支那傳來の、殊に明淸の隨筆の觀念に支配された點もあらうと思ふ。

『枕草子』の體裁の、その同時代なる唐の李商隱の『雜纂』との類似暗合は、古來國學者間の問題にのぼるところであるが、德川期に入つて、人々のもてはやすものは、主として『五雜俎』の如き書物であつた。この『雜纂』と『五雜俎』との相違が、また『枕草子』と德川期の多くの隨筆との相違とも看做れようと思ふ。(私は支那の隨筆には殆んど全く知識が無いので、この邊の關係については、江湖篤學の士の精緻な考究を俟ちたいと思ふ。)とにかく、その時代に、隨筆とさへ云へば、『五雜俎』の如きものと考へられて、文學的作品として考へられなかつた事は、當時の文學者、曲亭馬琴、山東京傳、柳亭種彥等の人々が、好んで隨筆を書いた動機が、自己の職分を戲作者として卑しみ、學者の職分を尊敬し、羨望するところから、自分も學者らしく見られたいとの欲望の上にあつたと云はれてゐるによつても知られる。かうして我々は、彼等から文學的隨筆を受取ることが出來なかつた。時代の影響とは云ひながら、殘念な事である。彼等がもつと自ら信ずるところあつて、自分の生活を尊重して、その身邊雜事、人生に對する折々の感懷を、書きとめておいてくれたなら、我々はどれだけか彼等の人となりに興趣をおぼえ、一層の親しみをもち得たか知れないと思ふ。殊に、その作品が、概ねその生活と隔離したものであるだけ、その遺憾たるや一層である。あの

一見乾燥無味な馬琴の日記が、そのおなじ人の隨筆以上に、我々の感興を惹く事實は、抑も何を語るであらうか？

然るに、この可憐な戯作者たちは、雜學的な考證を誇りとし、風俗の變遷や、奇談逸事の記錄を、その榮えある事業として、その方面で、それぞれ貢獻するところがあつた。そして、この雜學的努力はひとり彼等にとどまらず、江戸時代の隨筆を通じての大凡の特色であつた。今、當時の多くの隨筆家と稱せられる人々を念頭に浮べてみるに、そこには、伊勢貞丈のやうな有職故實家がある、高田與清、山崎美成のやうな雜學者がある。また、狂歌で聞える蜀山人、大田南畝の如きも、その述作の大部分は隨筆である。これらは隨筆がその生涯の事業となつてゐる人々であるが、しかも、一般的に廣く讀まれるものは、これらの隨筆家の隨筆ではなくして、例へば、室鳩巢の『駿臺雜話』、太宰春臺の『獨語』の如き漢學者のものか、白川樂翁の『花月草紙』の如き政治家、道德家のもので、從つてまたそれらは著しく教訓的意味を有する、謂はば教訓文學であるけれど、なほ、考證的隨筆よりは遙かに文學的である。現に、『駿臺雜話』の如き、漢學者の國文には、たしかに、文章の妙を見せようといふ意識の強く働いたあとが見える。決してかりそめの書き流しであるとは思はれないところ、おのづから文學的意圖を示してゐると思ふ。そして、これはつくり飾らぬかりそめの筆のすさびであるべきが、隨筆の本來であるとすれば、その本來の約束に遠ざかるものとも云ひ得られるが、然し、文學的隨筆は、その性質上、勢ひかくなるべきものであるかも知れない。

玆で、隨筆は本來、文學的作品と見るべきか否かの問題にかへる。元來、隨筆たるや、他のあらゆる文學樣式の範疇に入らぬもの、謂はばその一切の混和と見なすべきほど自由であつて、その範圍が非常に廣く、その限界を定める事がかなり困難であるから、從つて、その定義も容易く下し難い。ただ、それが斷片的記述の不用意な集積である事は、大凡の隨筆に於いて一致してゐる事實であるから、この形式上の自由をその特徴と見なしてもいいであらう。そして、それが、建築的構成の技能に乏しい日本人にとつて、隨筆をその最もふさはしい、アット・ホオムな文學樣式と

する所以である。浴衣がけに素足のとりつくろはぬ日本人の性情には、たしかに隨筆的と呼ぶべきものがある。また、かやうに云ひ得られる程、隨筆なる概念は、說明なしに我々には受容れられるやうに思はれる。もつとも、その本質的意義を闡明する事も無用ではなく、私も曾つて「隨筆文學小見」中に不十分ながら、これを試みたから、その詳細は玆には繰返さぬが、とにかく最も自由であるのがその特色であるとしても、文學の範圍を出る事はない筈である。もとより、いかなる考證的隨筆といへども、廣義の意味の文學（又は文獻）ではあり得るが、それが文學的作品たるがためには、なほ別に重大な要素を必要とするであらう。そして私は、隨筆なる成語の起原や、その一般的概念は兎もあれ、それは文學的作品として見得らるべきものであり、またかく見なければならぬものと考へる。して、文學的作品としての隨筆の主たる意義は、それが純粹に主觀的、個人的、即ち自己中心の文學であり、プライヴェートな記錄である點に存すると思ふ。卽ち、外國に於けるメモワアル、パンセエ、アフォリズム等の一切の要素を含む。故に、ひとり史論や、「批評的感想等のみならず、日記、紀行等をも包括する事は、從來の隨筆叢書編輯上の慣例がこれを示してゐる。

隨筆が個性發揮の文學であり、私的生活の文學であるとき、それはその讀後、讀者の心の中に、その著者の肖像畫を鮮かに描き出すであらう。そして、『枕草子』も、『徒然草』も、共にその力をもつてゐた。淸少納言といふ王朝時代の一女性の奔放な性格と、そのある時期の生活とを色濃く印せしめ、兼好法師といふ、謂はば最も早く中世の夢より醒めた一種の自由思想家の心境をさながらに目睹せしめるのである。卽ち、私の意味する文學的隨筆は、廣義の意味での自傳的文學に外ならない。然るに前述の如く、德川期の隨筆の大半に於いては、一切の個人的要素を沒却した、學者的態度が著しく現れて、つひに雜多な斷片的知識の倉庫（これほど沒個性なものはなからう）たるの意味を有するものとして解せられるに至つた。太田爲三郞氏の『日本隨筆索引』のやうな苦心の好著が現れて、非常に重寶がられ

てゐる事實が、この事を最もよく證明してゐる。して、玆にそれらの隨筆が、常に叢書として刊行せられる事の、眞の理由があつて存する。即ち、それらはこれを綜合して、一種の系統なきエンサイクロペディアとなるべきものであつて、その個々の個性的意義は、敢て重要ではないのである。そして、隨筆文學の實際が、かかる方面に發展したのには、別に一つの重大な理由があつた。

王朝時代と德川時代とは、多くの意味で對蹠的な關係にあるやうに思はれるが、この隨筆文學の實際の相違を考へるとき、それが一層判然するやうに思ふ。ひとり『枕草子』にとどまらず、平安朝の日記類は、一面、隨筆文學と見なすことも出來る。が、むしろ一層明白に、自傳文學と云つた方がより適切である。『更科日記』『蜻蛉日記』の如き、この種の文學中の傑作である。して、『枕草子』もまた、これらの日記類の中に置いて差支へない程に、自傳文學の要素を多分に含んでゐる。しかもこの自傳的傾向、即ち、自己の個人的經驗や、私的生活を叙する傾向は、その後、漸次微弱なものとなつてしまつた。もつとも、これらの文學が女流文學であるのに、その後、社會的狀態の變化のために、女流の文學の世に現れる機會の乏しくなつた事をも考へなければならぬが、それはこの際問題外におく事とする。なぜなれば、鎌倉室町期に於いて、我々は堂々たる男子の筆になる『方丈記』や、『徒然草』を有するからである。そして、その中特に、『徒然草』は、『枕草子』『方丈記』風な自傳的、感想的、小說的要素と、後の德川期の隨筆の教訓的、考證的、雜學的要素とが、相半ばして現れてゐるところ、自ら兩者の過渡に立つてゐる如き觀を成す點で、注意すべきものである。そして、その中には、時として、自己の事をも他人に假託したかのやうに思はれる場合もある事は、この際、我々に、尠からぬ暗示を與へるものである。

元來、自己本位な個人的說述を忌むのは、日本人の美德であるとも云へるが、又、その個人的自意識の稀薄に因するとも解せられる。そして、中世後、我國にすぐれた自叙傳といふものの殆んどないといふ事實は、これが當然の結

果ではあるまいか。それが德川期に入つては、特に甚しく、かの自ら肖像に題して、「五尺小身渾是膽、明時何用畫麒麟」といふが如き、極めてシュトルッな、自尊の詩を書いた新井白石の如き人の『折焚く柴の記』の如き著作が、その僅かな例外であるといふ事は、心理的に頗る興味のある事實ではあるまいか。これに反して、かの明治末に於いて、自然主義運動とともに、好んで自己の生活を描寫する風が興り、その結果として、小說がすべて自傳的傾向を帶びるやうになつて、つひに現在の心境小說、私小說の全盛時代を將來したことは、近く一批評家の云はれたやうに、自然主義運動を個人主義精神の覺醒と解するとき、頗る意味ある事實でなければならぬ。そして、この事を思ふとき、人間の個性が最も無視された時代である德川期の隨筆が、個性の文學たる實を失つて、むしろ沒個性の考證穿鑿を主とするものとなつた事は、或ひは當然の結果であるかも知れない。

かくて、等しく隨筆といふも、その個々の內容意義に於いては、同一でないので、そこで此際、隨筆をその性質に從つて、二つに分類してみる方が便利であると思ふ。卽ち、文學的隨筆と考證的隨筆、或ひは一般的隨筆と特殊的隨筆とに分ける事も出來る。とは云へ、それはかやうに截然と分けられるものではなくて、考證的隨筆にも文學的要素はあり、文學的隨筆にも考證的要素はあるので、それがまた、隨筆の隨筆たる所以であるが、然し、いかに考證的隨筆といへども、それが單なる學問的試みでない以上、自から筆者の性行や心境が判然と現れてゐるに違ひない。それゆゑ、その點の濃淡を以て、その分類の標準にする事も出來よう。そして、かやうに分けてみるとき、はじめて凡てをそれぞれに、その範圍で尊重する事が出來るのである。なほ、私が文學的隨筆といふとき、それは個人的文學であり、心境の文學であるとともに、文學として、またスタイルを重視しなければならぬのである。

かの英語及び佛蘭西語でいふエッセイなるものは、私の意味する個性的な文學のやうに思はれる。その點、隨筆の意義に近いものがあるので、普通、それを隨筆と譯される事が多いのも當然と思はれるが、ただ、その內容意義はかな

り相違するところもあるやうに思ふ。エッセイの語源や定義について、私は深い知識はないが、元來、それは「試み」の意味であつて、獨逸語などでも、これを譯して Versuch といつてゐるところを見ると、單なる知識の羅列や、隨感隨想ではなくして、多少とも哲學的の推究、若くは、文學的構成を意味するかに思はれる。そして、それは直ちにその勞作たるべき事を豫想せしめる。ここが隨筆の一般的解釋と異るところであるが、前にも云つたやうに、私はそれが不用意な漫筆、漫然たる書き流しでないからとて、直ちにそれが隨筆でないとは斷ぜられないと思ふ。そのスタイルの重視せられる場合、なほさらである。

以上は私の隨筆に對する漫想、「あまりに隨筆的な隨筆論」にすぎない。系統立つた隨筆文學の研究、また論評は、これを國學者の方々にお願ひして、その御敎示を乞ひたいものである。私はまた漫然と隨筆文學に親しんで、あだかも學者が多くの考證的隨筆を涉獵して、瓦礫の中に珠玉を求められるやうに、その餘りに文學的隨筆の尠い德川期の隨筆の堆積中に、ひとへに文學的興趣を求めて、これを味ふことを樂しむものにすぎない。そして、特に俳人の隨筆(例へば鬼貫の『ひとりごと』、高井几董の『新雜談集』等の如き)を愛するのも、それが最も文學的であるからである。しかも、俳人のものには、また俳諧上の專門的說示が尠くない。隨筆はその性質上、どうしても各の專門家の專門的知識の披瀝に傾くのは、止むを得ないところであらう。然るにこの間に、柳澤淇園の『獨寢』『雲萍雜志』の二著を見出し得たのは、私にとつては、意外の喜びであつた。これはいかなる意味から云つても、專門的に偏しない、文學的隨筆である。『雲萍雜志』には敎訓的意味も幾分か加つてゐるが、普通の意味の敎訓文學でない事は、著者の人物によつても考へられるし、これを『花月草紙』などに比較すれば、直ちに了解出來ると思ふ。とにかく、『徒然草』以後、これだけの詩趣を隨筆から感受し得たのは、むしろ稀有の事と云つてもいいやうに思ふ。

特に『獨寢』に至つては、その自由な態度と、率直な自己告白とに於いて、德川期の隨筆中類を絕してゐる。かく

云へば、あまりにこれを高く評價するやうに思はれるかも知れない。他にそれに匹敵するものはいくらもあらうといふ說も出るに違ひない。勿論、その識見の高邁なもの、その知識の博大なもの、その敎訓の適切なもの、いくらもあつて、愛讀すべきものも多いが、ただ、著者の姿がかくまでにはつきりと現れてゐて、自ら讀者の心の中に、その肖像畫をゑがき出すやうな作品は、外にさう多くあらうとは思はれないのである。これこそ、私の冀求してゐる藝術的隨筆に外ならない。これほど心境的隨筆、卽ち純粹に個性の文學としての隨筆の意義に合致するものが、德川期にあつたといふ事は、正に驚異すべき現象でなければならぬ。それは例へばかの英吉利近代の文人ジョオジ・ギッシングの『ヘンリイ・ライクロフトの手記』などの境地にも比すべき文學的意義を有つた、藝術的香氣ある、テンペラメントの色糸に織られた藝術品であつて、幾分かわが文壇に勢力ある心境小說、若くは私小說に近い意味さへも有つてゐる。『獨寢』が德川期の無數の隨筆中に、獨特の地位を要求し得る理由は尠くない。まづ、その著者が魅力ある人物であつた事である。(そして、これが隨筆文學に於いて、最も大切な事であるのは云ふ迄もない。) 次ぎに、もともと人に見せるために書かれたものでないとは云へ、眞に驚くほど率直に、自己の內外の生活を描き出した事である。自傳的意味の多い點から云へば、上田秋成の『膽大心小錄』の如き、特筆すべきものであり、且つ、著者の性格の躍如たる事に於いても際立つてゐて、興味津々たるものがあるとは云へ、『雨月物語』『くせものがたり』の著者に似合はず、藝術的氣韻に乏しくして、その率直さも餘りに偏狹な對人意識に囚はれてゐるために、あまり好ましいものではないが、これは人物の相違で止むを得ない事であらう。淇園の率直さは、その脫俗的性格によつて、より廣い世界を示してゐる。しかも、この『獨寢』たるや、わづか二十一歲の靑年の手になつたものである。「ことし廿一の夏、大和の國に住所定めて、九條といふ處の傍、竹の網戶のいと哀れなるに任せて、つい慰の種と殘し」(引用は凡て石川巖氏校訂の新從吾所好本に據る。以下同じ)たものである。これ實に異數な事である。隨筆とさへ云へば、通例、老年の文學の如

く考へられてゐるし、また實際、それが心境的隨筆であると、教訓的隨筆であると、考證的隨筆であるとを問はず、おしなべて老年の成熟を前提とするにも拘はらず、わづか二十一歲の靑年が、これだけの心境と、これだけの知識と、これだけの人生的體驗とを示し得た事は、眞に驚くべき事である。

柳澤淇園の傳記は、私は寡聞にして、伴蒿蹊が『近世畸人傳』以外、詳しいもののある事を知らない。その著書の刊本に載するところも、すべて『畸人傳』中の記事以外に出でたものはないやうである。そして、その記事は、淇園が郡山藩同姓の士で、文學武術をはじめ、人に師たるに足れる藝十六に及び、佛學にさへ精しく、中にも畫に長じた事、爲人曠達不拘、客を好んで、才不才に拘はらずこれを寄宿せしめ、ために夥からぬ家祿も乏しきに至つた事、池大雅を引止めて歸さず、大雅が家臣にたのまれて、淇園が婦人を寵すること深きあまり、身をそこなふなからんを諫め、聞き給はずば速かに還らむと云つたのに對して、諫めにも從はぬ、還しもせぬと云つたといふ逸話、その他二三で盡きてゐる。

淇園の博學多藝であつた事は、これを何家と呼んでいいか分らない事によつても知られる。畫家として最も知られてゐるが、必ずしも畫家ときめるわけにも行かない。一科の專門家として見るためには、餘りに多方面でありすぎる。偉大なるディレッタントであつたとも云へようが、私はそれゆゑに本質的の文學者であつたと云ひたいのである。そして、その隨筆の價値ある所以は茲にある。淇園の畫は、私は不幸にして見るを得ないが、淇園會より刊行せられたその『淇園名蹟』中の復寫で見ても、その技倆は大體窺はれる。その中、春秋山水双幅の如き、その構圖最も見るべきものがあるが、殊に彩色に長じてゐたといへば、その原畫に對したなら、一層、感銘の深きものがあらうと想はれる。かく淇園は畫家であつたにも拘はらず、その自畫像を殘さなかつたやうに思はれる。或ひは存するかも知れないが、不幸にして私は未だ知らない。けれども、私はその事をそれ程遺憾とは思はない。なぜなれば、この『獨寢』は、そ

れ以上に貴重な自畫像だからである。ここには、二十一歳の俊秀な青年の心の肖像が、いみじくも描き出されてゐるのだ。その意味で、この書の存在は、全くユニイクなものと呼んでもいいかも知れない。私はこれと、晩年の『雲萍雜志』との二著によつて描かれた、柳里恭の自畫像を、次ぎに模寫して見ようと思ふ。

二　柳里恭の自畫像

「過し暮あまりに久々何某の太夫の姿を見ぬは、如何のよすがぞや心元なしと思ひ出て、暮かゝる鐘の聲と共に訪ねたりけるに、道より雨降り出て心凄ふ獨り笠傾け、世を忍ぶ身の哀れ深きは、實にや戀路に上越すものあらじ抔道々思ひなどして行くに、歩みつけぬ道に、殊に霜の強ふ莨に置くさへ寒けく苦しきに、まして俄雨の心なきは一入つらし。」（獨寢「秋なすび」の條）

九條から木辻まで、多分二里位はあらう、その道を戀路になぞらへて、忍びやかに行く一人の若侍、やうやう五つ時に、めざす揚屋へと辿り着いて、三味の音も今宵はしめやかに、行燈の火も幽かなるを、貧しい身共には相應はしいと呟いて、見るとその行燈には、いつ誰が書き捨てたか、丸く黑々と女の顏のやうにも見え、團扇のやうにも見えるいたづら書き、これも當座の一興と、手許の硯を引寄せて、それをすぐに茄子に直して、今宵からもうあすの夜の契りの知れてゐる女郎樣とは味なものよと、さる折りに云つた知人の言葉を思ひ出で、また、秋なすびは嫁にやるなといふ言ひ傳へをも思ひ合せて、「あすの夜は誰嫁ならん秋なすび」と、卽興の句を書きつけながら、獨り心の中に微笑んだ。

この洒脫な若侍が、權さまの名に呼ばれる、「郡山の館衆」の一人で、今年の夏、江戸から下つたばかりの柳澤權太夫その人であつた。

「女郎は木辻の鳴川に」と古い唄にもうたはれたこの里は、ひとり奈良の町人衆相手だけで成立つてはゐなかつた。むしろ郡山の館衆が、大切なお客であつた事は、その明治の廢藩後、たちまち衰へたのでも察せられる。しかも、「館衆」はこの里で到底「町人衆」に太刀打する事は出來なかつた。その理由については、『獨寢』中に極めて的確な觀察が下されてゐる。そして、かかる觀察を下し得た人は、もとよりその弊にならふ人ではなかつたであらう。いな、彼は既に十分に通人道を心得てゐたばかりでなく、その眼はまた批判的にもはたらいたやうに見える。然しながら、天明、文化の頃にも、錦戸とか花里とかいふ傾城ばなれのした名妓の出た事を傳へられてゐる（文藝倶樂部增刊『京都と奈良』中の記事に據れば）この里のことゆゑ、それより五十年も以前の享保年間ならば、さだめし江戸の吉原の遊びにも通じてゐる權太夫を滿足せしめるだけの太夫のゐたであらう事も想像せられる。

して、その夜の相手は源氏か、夕霧か、はた江口か、いや、ことによつたら、次ぎの「女郎の眞實」の條で、この穿鑿好きな若侍に、いろいろと打とけた內輪の氣持を話して聞かせる菱屋の東路であつたかも知れない。この女が、彼の相手たるに恥ぢない機智と洒脫とを具へてゐた事は、彼が袴を預けて置いて、後また友達二三人と打連れて出かけて行つたとき、件の袴を自分が穿いて出迎へて、「よふ御ざんした」と言つたといふ一事からしてもうかがはれる。ことによつたら、「過し夜さる太夫に逢ふて、帶をとくにも、早とかんせん正氣散といひし姿かはゆらしさ、首たけ〳〵」（「口合」の條）と云はしめたその女であつたかも知れない。とにかく、この女は「渡し切つた身じやと存じまする故、男にわきがと口中さへ無ければ」と、香道の達人で、にほひの吟味のやかましい濵園ごのみの事を、「どうした事やらあの人はそれほど色も白うはなうて、器量もようはなけれど、そのけはひ移り香どうしても忘られぬ程惚るる客あり」「心だてかはゆらしく、年も二十一二ばかりにして、親父といふものなく」云々といふやうな味ある事をも話してゐる。然し、この遊蕩兒を惹きつけるものは、東路が唯一人ではない、むしろより深く彼の惹かれてゐるのは、敦賀屋

といふ男と心中をした源氏といふ女である。この女の心中は、當時の洪園の心を深く動かした事件であつたに相違ない。「さる人がこの女の姿を繪に書きて、常に壁に張付けられて詠まれけるに贈りぬ」とて、一篇の詩を賦してゐるが、その繪もまた彼自身の筆ではなかつたらうか。心中して死んだ女郎を可愛がられるのは心得ませぬと云ふ人の言葉に、「昔が可愛い」と答へたといふその人は、少くとも洪園ほどの通人でなければならぬであらう。

「昔言ひ交せし女郎、若しも行末衰へ、如何なる賤しき姿に零落（ちらぶ）るゝとも、命にかへて成とも貢て遣るべし」といふ言葉は、當時の通人道德として最高のものであつたらう。一般的に通とか粹とかいふものの意義については、私はこれを論ずるだけの資格のないものであるが、それを遊里の世界に於ける風流道の實踐道德であると解するとき、全く興味のないものではない。少くとも、洪園の場合にあつては、それは後年の風流哲學と互ひに照應して、その人格的完成のあとを示すものである。然し、その道德は何處までも情趣の上に打立てられたもので、儒教の感化に基づくところも多いとしても、決してラショナリズムに立脚するものではない。遊びの上に信をたふとぶのは、それが情趣を完ふせしめるからであり、嘘の中のまことを見るのも、通人特有の寬容主義からもくるが、心の陰影をよりこまやかに味ふからでもある。若き洪園を遊里に誘ふものは、そこに見出される彼の好みであり、味ひであり、風情である。彼の好みのこまやかな事は、ゆぐの結び方にまで及び、「總じて兩方のはしにて結び置く所千金なり。地女は紐を付ること賤し」と云つてゐる。然もこれはその一例にすぎない。そして、彼が地女を斥ける主たる理由である濕熱云々は、或ひはその淡泊な好みを示すものであるかも知れないが、むしろその實用的な不洗練が、かかる纖細な趣味性に滿足を與へる事が尠いからであらう。

遊女と地女。かかる區別が重大な問題となるのは、もとより時代の背景を要するが、今日でも、それは玄人と素人の語によつて、我々に全く耳遠い區別ではない。然し女郎も廓を出れば地女である。されば、「揚屋であまり地女をわ

るく言ひければ、さん太夫の仰せ出されしは、もし權さまわたしもおつ付地女になりますぞへ' と彼に酬いる女もあつたのだ。然し、「玄人あがり」は、づぶの「素人」と同様ではあり得ない。洪園も女郎を女房にした知人の生活ぶりを注意して見て、そのすつかり世帶じみた、華のない暮しぶりに不審をして、そのわけを訊くと、「惣じて色は廓ぎりの物なり、お前の御年若にて色こそあらめと思召は尤の事なれど」云々とその人は答へてゐる。即ち、通人としての洪園の求めるものは、廓といふ社會の中にのみ見出される情趣であり、洪園の色道哲學は、全く遊里の制度の上にのみ成立つものである事を知り得る。この『獨寢』の色道哲學たるや、興味あるものであるが、それについては、曾つて阿部次郎氏が「藝術の社會的地位について」と題する文中、(「改造」大正十五年五月號?) 畠山箕山の『色道大鑑』に關聯して、極めて卓拔周到な批判を下されてゐて、當時私も一讀して推服するところが多かつたので、茲にはその方面には餘り觸れない事としたい。それに私にとつて興味のあるのは、その色道哲學そのものよりも、それが彼の生活にいかに作用したか、また、後年いかやうに發展して行つたかである。つまり、一人の文學者としての柳澤洪園の全き姿であり、その風流の全面である。

遊里は若き洪園が最も心を惹かれ、色道の世界は彼の究むるに最も力を致したところではあるが、彼がそれに囚はれる事のなかつたのは明かである。そして、これは彼の通人たる所以であると共に、彼が藝術家の心を以て對象を眺めてゐた事を示すものである。「遊び」も彼の多方面な「享受」の(彼の言葉によれば「慰み」の)一方面たるにすぎない。彼はまた、靜かにひとり閉ぢこもつて、或ひは若き詩人らしく、或ひは閑雅な學者らしく、また、纖細な藝術家らしい日々を過すのである。そして、そこにより深い彼の心の姿がある。『獨寢』中有數の名文章である『雲夢』の一段は、また近世文學有數の心理的文字である。

「今宵はつゝくりと一人灯に向ひて、交せし人のよすがも聞きたく、其方の鐘の響きたるに、ましてや軒の風鈴の松

に應ずるにつけて、何やかやと心のうちはいろ〳〵さま〴〵、扨も〳〵心の中程をかしきものはなし。思ふ人もあり、憎い人もあり、うらめしいものもあり、悔しい事もあり、筆のこと、墨の事、着物の事、今江戸の事思へば、桑名の七里の渡し場や、石山寺のをかしい石の姿も、はや宇治の川霧など思ひ出れば、源氏が心中して可愛やと思ひ、そしていつともなう、昔馴れし桐といふ伽羅の匂、いやはや東といふうち西と變るも獨寢の樂しみ、雲のたゝずまひも、今迄龍の樣に見えしものをと言ふに任せて、小僧、あの雲は今何に似たぞといへば、火燵の櫓に似ましたといふもをかし。過ぎぬれば火燵のやぐらも龍も消えて、扇の樣なるものあり、煙草入のやうなるもありて、何處ともなく失せぬ。」(下略)

この文章の興味のあるのは、彼の心の隈々が、とりつくろはぬ自然さで、描き出されてゐるところにある。心も雲のやうに變幻自在、捉へどころのないあやしさを、その動くがままに寫し出した、このわづかな線のデッサンによつて、若き淇園の心の肖像は、さながらに現れてゐる。まづ、言ひ交した人の方よりの鐘の響に誘はれる心、思ふ人、憎い人のこと、畫家として筆墨のこと、江戸の思出、旅のさまざま、それから心中をして可愛いと思ふ女も、伽羅の匂ひも、おなじ心のときめきである、心に落ちる影である。そして、かかる思ひを明け暮れに、九條の片ほとり、竹の網戸のうち、「とゝ樣」の下屋敷か、はた、樣子あつての侘住居か、知るに由なけれど、小僧を相手に住む人は、まことに、深くも洗練された趣味性を有つた、すぐれた風流才子でなければならぬ。そこにはまた、幾人となく、友人の姿も現れる。多くは「色友達」であるらしいが、中にはさうでないものもある、即古といふ男は、「即古も最早四十一にて有故」(「即古の名句」の條)とあれば、著者とは殆んど父と子ほどの年齢の相違であるが、その交際は全く對等である。また、身分の相違奈何は判然しないが、淇園はさういふ點には少しも頓着しない人である。雨の日は酒くみ交して女郎のひいき。時には江戸の友達から、「大和の景色はいかゞなど言ひて」女郎の名入れの判じ歌とともに、雲

丹などを贈つてくる。中には俳人もあれば、話すは俳諧の事、藝の事、遊びの事。女の髮の話をして、卽古が「油付る髮は卑しきものなり」と云へば、「さればにや卽古の鬢は、淺草の人形も人形、土にて作りて彩りたる顏がその儘なりといふに腹立たるゝもをかし」と、四十男をからかつてゐる。

彼のあくなき研究癖、穿鑿欲は、さうした交友の間からも、多くの知識を攝取する事を忘れない。その興味はひとり色道の上にとどまらず、極めて多方面に亙る。俳諧にはかなり出精したやうに見えるが、その作品は月並の域をあまり出でない。これは俳壇の沈滯期に際會して、よき師に會はなかつた結果であらうと思ふが、その批評に於いては、一見識を示してゐる。畫家として、甲斐の團子洗ひといふところの土から、特殊の繪の具を發見した彼は、生駒山の行基皿と呼ばれる石の禹餘糧なる事を斷ずるだけの本草學、博物學上の知識もあり、その他くさぐさの知識の披瀝されてゐるのでも知られる如く、かの島原の一文字屋の奥州といふ太夫の艶容を聞いて、わざわざ人を相撲見物に事よせて、京まで見とどけに行かせるほどの熱心は、ひとり女色にのみは止まらぬのであるが、『獨寢』時代の彼にとつて、それが最も力强い興味であつたのは云ふまでもない。かくて、「學問文才も到り〳〵て見れば皆無駄事なり。手を能く書き、伽羅十種香に通じたるも、皆無駄事なり。」と云ひ、つひに「余十三の時に唐學を學び、今二十一の暮迄覺えし學問、惚れし太夫の下帶とつりかへにしたし。」と云ふに至つて、その戀愛至上主義は極致に達してゐる。そして、これはまがふ方なき靑年の心である。その心が、色道の極意と學問の極意とを結び付けることを好むのである。また、時にはこれを禪などにも結び付けて、「靑樓十牛圖」といふ物を仕立てて、その終りに一圓窓を描いて、「夕月や嵯峨のあたりの窓自慢」の句をものしもするのである。

悟つたやうな事は云つても、そのまだ若い事は、言葉のはしはしに現れてゐる。「床などに心をつくること賤しき事なり」と云つて、「それをお前の今から九年か十年も過ぎて御覽なき故の事なり、三十になりてからは」云々と、卽古

に一本參らせられてゐるが、それは淇園が卽古などよりも、遙かに通人の資格を具へてゐた事の反證ともなるが、この場合、卽古が年長者であるだけ、より多くリアリストである事は否定しがたい。殊に、女郎が大凡みな揚屋の男を情人にもつ事を知つて、「人知れずしてまた元の素人に成るならば、揚屋の男か牛かに一年なりてみたしといふも、惜からぬことなり」といふ心持は、必ずしも眞に徹した通人の心ではないのである。

おそらく柳里恭が、眞に通人として出來上つたのは、といふより、通人の制限を脫して、その風流のより高い階段に達し得たのは、『獨寢』以後の時代であつたらうと思ふ。『獨寢』の通人哲學は、二十一歲の靑年のそれとして考へるとき、驚くべく深いものであり、一種凡俗を超出した達觀をも示してはゐるが、まだ何處やらに拔け切らぬ、囚はれた點が見えぬではない。もつとも、これはこの著作を作者二十一歲の若書きとしてまづ受取つてゐるがための先入見の致すところかとも一應反省はしてみたが、やはりそれだけで片付けられぬものがあるやうに思はれる。それはこの『獨寢』を『雲萍雜志』と比較してみるとき、容易に判然とするところであらう。

『獨寢』より『雲萍雜志』までの間に、柳里恭が人格的鍛錬の數十年が橫はつてゐる。「世に文事もなく、藝術をもさまで習ひ得ざる者の書きたることは、感に堪へてなみだを催すほどのことはなきものぞかし。薄命の人の書きたるものは、すべて感淚にたへ難きこと多かり。鴨の長明が方丈記、吉田の兼好がつれづれ草、みなひとたびは零落して、世のありさまを悟りて、身を顧みたる人々なれば、綴りたるものどもあり難くめでたし。書(ふみ)よみたるばかりにては、よろづふかきに通ぜず。」(雲萍雜志、引用は凡て有朋堂文庫本に據る)といふ言葉は、その鍛錬が云はしめるのである。これを石原正明が『年々隨筆』に、『徒然草』を貶して、その有房とあつしげとの問答の條の「鹽といふ文字のさたこそかたはらいたき事なれ。何がしのおとゞも兼好も、才のほど見ゆるよ。」と評せるが如きに比較すれば、淇園が常に學者の位にゐないで、藝術家の見地に立つてゐた事がよくわかる。彼はいかに知識を深く廣く求めようとも、常に知

の世界にゐないで、情の世界にゐる。彼は風流道の體驗者であつて、その一生は風流に終始し、その哲學は歸するところ一個の風流哲學であるが、この風流道たるや、畢竟、藝術家道である。さればその體驗は、單なる享受ではなくして、創造である。然し、創造的たるべき藝術家も、人格的鍛錬を缺くとき、屢々單なる職人となる。彼をそのシャブロオネンメシッヒから救ふものは、かへつてまた、その自己享受である。『獨寢』の中には、「慰みに此春より合せし百韻を取出し見れば」といふやうな言葉が數多くある。淇園にとつては、すべては慰みである。繪も慰み、書も慰み、香も茶も、詩も禪も、遊里の風流はもとより、學問さへも慰みである。ここに完全なるエピキュリアンがあり、ディレッタントがある。元來、江戸時代の多くの隨筆家は、好事家であり、アマトゥルであるが、柳里恭の場合は、それが同時にそのモラルであり、その全生活の意義であるかに見える。

　彼にとつては、凡ては風流韻事である。然し風流が單なる風流であるうちは、未だ風流才子の風流を多く出でない。風流をして客觀的に意義あらしむるものは、その人の人格的背景である、信念である、畢竟まことである。若き柳里恭が嘘の中のまことを說くとき、彼は風流がつひにまことに歸すべき事を考へてゐたかどうかは知らない。『雲萍雜志』に於いて、彼は既にその境地にゐるのである。して、玆に至つては、風流道は直ちに達人道である。達人の風流は、卽ち、超脫の氣分である。これを小にしては俗事の超脫である。そのゆゑに、茶席に俗談を嚴禁するのである。これを大にしては、人生の超脫である。悟道である。天地一杯の妙用に至つて、風流もはじめて全しと云はねばならぬ。とまれ、いづれにしても、風流は卽ち風塵の外にある。それゆゑ、それは名利の超脫であり、實利と全く反し、利慾の心、寸分だに交らば、玆に風流は全く沒却せられる。「遊樂は費なるにあり。費をはぶけば樂みなし。慰みは無益なるものにあり。無益をいとふときは慰みなし。おもしろきは危きところにあり。あやふきを避くればおもしろきことなし。」（雲萍雜志）といふとき、淇園は最もよく風流を解したる人である。

他の多くの事物と同様に、風流にも多くの階段がある。我國の文學は、この階段を實に明白に示してゐる。王朝時代の風流は、未だ風流才子の風流であつた。それがより深化されたのは、室町時代に入つてからで、利休より芭蕉に至つて、殆んどその究極まで開展し得たかの觀がある。そして、兼好がこの風流の內面化の先驅者である事は前にも云つたが、私が柳里恭に於いて特に興味を有するのは、『獨寢』と『雲萍雜志』との二著によつて、彼がその一身を以て、この諸階段を示してゐる點である。曾つて「世に風雅を知らぬ人は、如何にして世を過すぞと合點の行かぬも一通り尤なる事也。」「風雅なきものはこの情を知らず、風雅なる人はころり〱と成る事、色といふ曲物」（獨寢「風流なき人心」）と云ひ、「茶の湯することを叱りて書きし」堪忍記とよぶ假名草紙の著者の治亂を知らぬ文盲をわらひし人が、今は「理に明かなりとて、人を俗物と見下すべからず。その俗物の目より見れば、また高慢なる者は、角立ちて至つて無益に見ゆるなり。君子は時としておしうつりて、よく俗と交はる。かゝるが故に、俗物に入れられざれば、やはり俗物なり。」（雲萍雜志）といひ、江戸葛飾の農夫の伊勢參宮して茶の饗應を受けて當惑し、のち致を乞ひに來たのに、「そのもとは日ごろに似げなき不見識の人なり。農夫は農家に人となりて、農業のことにさへくはしければ恥かしきことなかるべし。其許もし茶を學ばゞ、一村みなこれにならひて、農事を怠りなば、田畠は悉く不作なるべし」とて訓戒してゐる。

曾つて遊びの極意に分け入つて、それを修行とした人は、今や淀の川舟に勘忍の稽古をする人である。そして、乘合舟の窮屈をおもへば、いか程の不自由も忍び得られる事を說く。更に、河內の田舍に一年ほどゐて、日每の麥飯に閉口して歸り去らんとして、古聖賢の行跡を偲んでは、自らその心術の至らざることを反省する。曾つてあんなにも地女を罵倒した人が、後にその妻にむかへた女の、物縫ふことの人にすぐれて、小袖など一日に一重づつ縫うて、專門の職人をも驚かすほど上手であつたといふを見れば、極くあたりまへの結婚をしたものと見える。その上、「予ある

時もの縫ふをひたぶるに愛で賞」してゐるのを見れば、今や彼はよく物の分つた善良な夫である。彼ももはや色戀の世界にはゐないのである。曾つて『獨寢』に於いて、あのやうにも女性の美色に多くの言葉を費し、時には「如何なるよき身に成ても、吾等は其樣な顏を向いて見る事も厭なり」とさへ云つた人が、今や、「女は見めの美しきが寵せられて、心の正しきを愛する人はまれに、物は形のめでたきを好みて、意(こゝろばえ)のおもしろきを取る人は少し」と云つてゐるのは、何たる變化であらう。もとよりこれは、自由奔放な殆んど「らくがき」に類するかとも思はれる『獨寢』とは異つて、『雲萍雜志』の文章の十分彫琢されてゐるところからして、これをおもてむきの隨筆としての用意であると見れば見られぬ事もあるまいが、然し、蒹葭堂の序によれば、『雲萍雜志』も作者手澤の稿本を彼が所藏してゐたのを、後に中井某によつて刊行されたのであると云へば、必ずしもおもてむきの教訓的著述とのみは見なしがたい、また淇園には別にその必要もなかつた筈である。やはり年齡の相違、心境の進展として考へる方が、より正しいのではあるまいか。即ち、淇園の風流心は、年とともに愈々淨化せられて、愈々進境して、愈々内面化されたのである。これを平凡化し、常識化して、道學的になつたと斷ずるのは早計であらう。彼の道德は此處でも依然として理の上に立たず、情の上に立つてゐるからである。

　彼の道學もまたその風流の究極であつた。「六憎とて憎むべきもの六つあり。その詞に、金持ちて高ぶるほど憎きはなく、書を見ずして物識顏するほど憎きはなく、人に物をやつて恩にきせるほど憎きはなく、吝(しは)きほど憎きはなく、欲ふかきほど憎きはなく、人をそねむほど憎きはなし。」要するに、これみな沒風流だからである。「天下は一人の天下にあらず、萬民持合の天下なり。身帶は一人の身帶にあらず、家内持合の身帶なり。了俊は獨味を制し、正成は二栄を戒しむ。」獨善は風流の小乘であり、世に獨味にまさる殺風景があらうか。またその畫讃、「おもしろの世の中や、恩をわすれぬほどあそべ。おもしろの春雨や、花のちらぬほどふれ。おもしろの酒もりや、こころみだれぬほど斟め」

この自制と程合ひとは、通人と風流人とを相通じ、「酒數獻にいたるときは、味ひなく、肴數種におよぶときは甘みなく、煙草數ふくに及ぶときは、にがみを生じ、茶數碗におよぶときは、香ばしからず。」この過不及なきのところ、まことに風流の奥儀が存するであらう。「世に言行に飾りあるものを見え坊とて譏れども、見えは先づ禮の端なり。見えなきは大かたは不禮なるもの多し。」に、嘘のおくのまことが光り、色の意義が明かにされる。「年若くして色なければ無骨にしてしとやかならず、老いて色なければ慳貪にして邪見なり」「人倫の交りの戀の心より出でざるときは、仁忠、慈孝、柔和、愛敬、その信悉く人情なし。親の子をおもふ心、死なんと覺悟したる心、この他は誠なし。（中略）古歌に、戀せずば人は心のなからまし物のあはれはこれよりぞしる」玆に至つて、『獨寢』の色道哲學は完成せられた。人情なき風流は憎むべく、風流も歸するところ人格的完成であり、心のまことである。そして、『雲萍雜志』は『獨寢』の完成に外ならない。柳里恭の生涯はかくて首尾一貫し得た。

平秩東作が『辛野茗談』中にも、「士にも柳原（sic）權太夫などは人の知りたる放蕩人なれども、學才風流名士と稱すべし」（石川巖氏の引用による。）とあるのを見れば、淇園の放蕩人として、並びに風流人としての名は、その歿後もなほ長く喧傳されてゐたと見える。然し、單なる放蕩人としてのみ彼を見る人は、もとより未だ眞に彼を知つてゐる人ではない。彼は世の遊蕩兒のやうに、ひたすらに女色をのみ漁るものではなく、その遊びの中に風情を愛し、その色の奥にまことを求める人であつた。微妙な風情とともに嘘の中のまことを味ふ客觀的餘裕は、常にこれを保持してゐた。これ彼の通人たる所以である。通人とは色の世界に於ける風流の達人であると見なしてもいいであらう。「掛けられまじと思ふならば、靑樓に遊ぶべからず、これ故にかけられに來る所なれば、いか程も掛けられたるがよし」（獨寢「揃の紋所」）といひ、「人の彈く三味線も、人の彈く琴も、人の彈く胡弓も、心にはよしあしはよくなうても、少しばかりも手前やりぬればしるゝ物なれども、口に出して誇るべからず、人の藝に非難をいふこと、藝者の心にて

善き人のすることにあらず、賤かたきにて賤しきことなり。……大臣はいかにも無數なるがよきといふはこの心なり」（獨寢「心のたしなみ」）といふ心掛けは、色道の達人の言葉と云はねばならぬ。然し、この達觀まで到達し得たとしても、通人はなほ未だ無碍自在な境地にはゐないものである。彼の心は愛欲には囚はれないとしても、なほ色の世界を離れ得ないからである。少くとも『獨寢』時代の淇園は、唐招提寺に遊んでも、そこから木辻を望み見て、感興を遣ることを忘れぬ人であつた。そこに自から執着が現はれ、囚はれが見える。彼がその執着より脱したとき、はじめて眞に自由な境地に到達し得たといふべきであらう。

『雲萍雜志』に於いて、我々は眞に自在な境界に遊んでゐる淇園を見る。そこにはもは單なる通人や、風流人ではなくして、「癖を捨てざれば風流の道人にはあらず」といふその風流の道人たる趣きが見える。その眞に枯淡の境地に入つてゐる事は、夏日の七快とて、「湯あみして髮を梳る。掃除して打水したる。枕の紙を新にしたる。雨はれて月のいでたる。水をへだてゝ燈のうつる。淺きながれに魚のうかみたる。月のさし入りたる。」を擧げてゐるのでも窺はれる。風流の徹するところ、哲學は宗教となる。「風情はこなたよりむかふる物か、將たむかふより見するか。さらば、むかふにありて我方になしとおもへば、われにありてまたむかふになし」といふ風情も、神や佛とおなじこと、風情は心のまことであり、まことは心の法である。早く『獨寢』の序に、「遊山觀水は學者の一興、何事か諷とい ひて、法の敎の道に漏れん。」と云つた、それは一生を通じての淇園がマキシムであつた。

柳里恭が私の心にゐがいてくれた自畫像は、これを模寫するに當つて、私のつたない技倆のために、臺なしになつてしまつた觀がある。然し、いつかはその名譽恢復をする日があるであらう。今日は江戸時代の隨筆文學中に於ける柳里恭の獨特の意義を闡明すれば足りる。そして、これに對して餘りに心醉にすぎるとの非難が出たなら、『獨寢』中の言葉を以て、「世に女に限りはあるまじ、幾人も美人あらんといふは拙き心なるべし」と答へようか。とは云へ、最

近、隨筆の新しい叢書が三四種も刊行せられ、これまで埋れてゐたもので、あかるみに出るものが多いやうなのを見ては、或ひはその中にこれ以上の立派な文學的隨筆がありはしないかと、心を唆られてゐることをも告白しなければならぬ。

昭和二年三月——四月(「日本文學講座」第六卷所載)

隨筆文學小見 (附　最近の隨筆家)

枕草子、方丈記、徒然草——これらの隨筆類を一切除外してしまつたなら、我が國文學は、かなり貧弱なものとなりはしないか。

英佛の文學史上にも、エッセイの地位はかなり重要なものであるやうに見える。然し、それは我が國文學史における隨筆のそれ程に重要なものであらうか。

エッセイについては、『明星』に、竹友藻風氏が、精到な研究を發表中で、エッセイと隨筆とのアイディアの異同についても、聽くべき說を述べてゐられたやうに記憶する。

隨筆といへば、普通すぐエッセイを聯想するし、現に、エッセイの語の隨筆と譯される場合もあるから、その差別の研究も意味のある事と思ふが、それは今の私の問題ではない。ここでは純粹に日本文學における隨筆の本質とその意義とについて私見を述べたく思ふ。

隨筆なる成語は、元來、漢文學から來た事はいふまでもない、が、私にはその方面の知識が缺けてゐるから、その本源に溯つて論ずる事は出來ない。また、それが我が國文學中に題名として用ゐられだしたのはいつ頃からか、多分、

室町時代の一條兼良の東齋隨筆などが初めかとも思ふが、それもここに斷定を下すだけの自信がない。然し、我々は敢て隨筆の名に拘泥する必要はない、その實を討究すれば足る。

我が國文學において、何故に隨筆なる一つの文學樣式が重要なのであるか。他なし、枕草子、徒然草の如き傑作が存するからである。そして、これらは元來、隨筆と銘打つて現はれたものではないのである。

隨筆が隨筆の名によつて呼ばれると同時に、非常に豐饒な文學の一區域となつたのは、德川期に入つてからである。そして、學識ある人々の閑餘のすさびに、必ず隨筆をものすやうな風習になるに連れて、いつしか隨筆卽考證といふ概念を生むに至つた。

この隨筆卽考證といふ、德川期以降の概念は、私の最も好まぬところである。私は考證といふものを、文學の範圍外のものと信じてゐる。（それが文學的意義をもつのは、たまたま文學的才能を有する人によつてなされたが爲めの偶然的結果か、若しくは、文學的作品に關聯しての從屬的意義かに過ぎない。）然るに、私は隨筆を文學として見たいと思ふのである。

私は隨筆を最も自由な文學樣式と思ふ。然し、いかに自由であるとはいつても、文學の範圍外を出てはならぬ。學者が隨筆をものする時、その專攻の學に關する豐富な知識の期せずして現はれるのはもとより當然の事で、喜ぶべきでもあるが、一歩進んで、それが依然たる專門的硏究に終始する場合は、既に隨筆の實を失つたものである。私は學者の隨筆からも、專門家といふ裃をぬいだ一個の人間を見出したいのである。そして彼が着衣喫飯他とえらばぬ一個の人間として現はれる時、必ずや一個の文學者であるに違ひない。

一人の人間のつくり飾らぬそのままの姿を見る事の出來るのが、隨筆の尙ぶべき理由である。卽ち隨筆は最も個性に卽した文學樣式である。人間そのままが直ちに文學である。人格としての藝術である。人卽藝術である。その點か

らいふと、隨筆は或る意味で、文學以上の文學であるともいへる。そして、そこに隨筆の最大價値もあり、最大困難もある。

小說は單にその素材だけによつても、人の興味をひく事が出來る。詩はその文學的技巧の修練の生む韻律、調子の圓滑だけでも、人をひきつける事が出來る。隨筆には絕對にその事がない。文章の妙味は、即ち內容のそれである。內容は人それ自身である。

あらゆる文學的意圖なしに、また、世間的顧慮なしに、無目的に、不用意に、つれづれの筆のすさびに、とりとめなきそぞろ言を書きつけて、本來の弱點も、至らぬところもそのままに、きぢのままを、素顏を、謂はば人間の樂屋をさらけ出す……。それは本來人に示すべきものでないかも知れない。そして、これが理想的の隨筆ではあるまいか。そして、思ふに文學の最高の樣式は、畢竟はかくの如きものではあるまいか。

ヒルテイであつたか、何等遠大の抱負なしに、折にふれてかりそめに書かれ集められたものが、永遠のものである事をいつて、ルウテルの『卓上談』その他を例に擧げてゐたやうに覺えるが、この事は我が隨筆について、最も適確にあてはまる事ではあるまいか。

隨筆は原則として、淸閑の產物である。少くとも、淸閑的精神から生れねばならぬ。そして、私がここに淸閑的精神といふものは、一つの超脫的精神を意味する。何ものにも囚はれない、自由な心である。この隨筆の不用意であり、無目的であらねばならぬ所以である。從つて何等かの對他的の意圖あるに於ては、隨筆忽ち不隨筆となる。

隨筆はあくまで隨筆であつて、不隨筆であつてはならぬ。或る一定の主張が主となる場合は、それは忽ち論文となる。專ら個人的利害に關心する場合は、忽ち雜文と墮する。かうした一切の掣肘から超越して、凡てをつき放した超然的態度を要とする。

隨筆は寸毫も他からの强制を俟つべきものでない。そこには何等の拘束もあつてはならぬ。その點からして、これを理想的にいへば、元來、註文に應じて書かるべき性質のものでない。それゆゑ、現代のジヤアナリズムには、最も不向きなものであらう。今かりに題を課せられ、枚數を制限せられ、期日を定められて、隨筆を徵せられたとせよ。全身不隨筆までではなくとも、少くとも、半身不隨筆位には相當しやしまいか。結果の出來榮えは問はず、筆者の不自由感は、隨筆の本來とは隨分遠いものであらう。

最も自由な文學樣式である隨筆は、その執筆するに當つて、何等拘束を受けてならないと同樣に、その內容に於ても自由で、見るがまま、聞くがまま、思ふがまま、小說の要素、詩の要素、評論の要素、雜然混然たるがその特色だが、然し破邪顯正的、論客的態度は、決して隨筆的自由と超脫との心境の投影ではあるまい。稀れには考證あるもまた妨げぬ。私は何も考證を親の仇と思つてゐるのでもないから。ただ純然たる考證は、純然たる學問的硏究として推重するに止めたい。隨筆文學としては『家屋雜考』を捨てて『雲萍雜志』を取りたい。宣長の『玉勝間』はその學問上の意義を除外しても、尠からぬ文學的價値があるが、徂徠の『南留別志』は、これ果して文學歟。

隨筆が博覽强記の小間物店となつては、これその墮落である。德川後期の文學は、その大體に於て、現在の我々には共感しがたいところが多いが、殊に隨筆がその數に於いて夥しきにも拘はらず、その質に於いて低下し、尠くとも變質して、文學の範圍を出た事は、自分の甘心しないところ。『徒然草』の詩趣と達觀とを兼備するもの『雲萍雜志』等十指を屈するに足らぬのは頗る遺憾である。

隨筆家は一種の哲學者である。もとより體系立つた論理的哲學の教授ではない、人生の直接の體驗と鍊磨とによる人生哲學を談る人である。兼好の如きその代表的の人ではないか。そして、元來、推理よりも直觀に長け、體系を厭ひ、系統なき直接の表白を喜ぶ我が國民性は、この隨筆の樣式に於て、特にそのエレメントにあるものではあるまい

か。これ自分が敢て我が國文學史上の隨筆の意義を强調した所以である。

とまれ、我國の如き個性の稀薄な文學の傳統の旺盛な國に、極端に個性的な一つの文學樣式が、脈脈として絕えない傳統を今日に繫いでゐる事を、私は特に興深く覺える。今日世界に比類なき發達を示してゐるとかいはれる所謂心境小說なるものは、小說の隨筆化に非ずして何であらう。

隨筆は徹底的の心境文學である。そして心境には、特に隨筆的心境といふものがある。そのレヴェルまで到達しなければ、到底隨筆は書けない。最近の田山花袋氏の感想の如き、この寂びにまで達してゐる。思想の圓熟、學殖體驗の豐富、見識の高邁、そして特に心境の淸澄——隨筆はどうしても老齡の文學である。年をとらねば書けない。鏡と睨めつくしつつの隨筆は、一つの洒落であらう。

現代の隨筆家として、自分の尊敬してゐるのは、幸田露伴氏と德富蘇峯氏とである。露伴先生は最近あまり隨筆を書かれないやうであるが、その『爛言』などは、私の平素愛讀措く能はぬものである。蘇峯先生はもとより隨筆家を以て呼ぶべき人ではない。それだけ、隨筆の眞意義に合してゐるその隨筆は、國民新聞紙上で、日頃愛讀してゐるのであるが、最近出た『蘇峯隨筆』兩卷は早速購ひ來つて讀破した。かうして纏めて讀む時、とりわけその興味の多方面である事、何事に對しても中正妥當の見を揭げて、後進を敎へらるる事多きを感ぜずにはゐられない。殊に、その文章は暢達の極に達して、座談平語、滋味溢るるものあるを見る、閑窓徒然の筆のすさびではないかも知れないが、しかし隨筆の條件に充つること、かくの如きは尠い。そして、そこには西歐の文化を敢て斥けずして、しかも東洋的、日本的の敎養の眞髓に我等を導く敎育者があると共に、この文章報國の一念篤き老修史家の中に、一個の詩人の隱れてゐる事を喜ばしめる。

內田魯庵氏と戶川秋骨氏とも、自分の愛好する隨筆家である。魯庵氏の博識は驚嘆すべきもの、その『思ひ出す人々』

などは、明治文學の好個の記念碑として、特筆すべき好著である。氏の皮肉は、辛辣を越えて時に惡辣、偶々意地の惡い小姑のそれを思はせるものがあるとて、中には反感を抱く人もないではないが、それだけ個性のはつきりしてゐる事を思はせる。現代屈指の隨筆家であらう。秋骨氏は溫顏をもつて、淡淡たる平凡人の哲學を語る。機智よりもユウモアの人であるが、その人間としての練磨を思はせる平淡の底に、今なほひそかに燃えるものはないか。『至純狂熱の人北村透谷君』によつて、自分に親しくなつた氏の『文鳥』一卷は、氏のテムペラメントに自分を愛着せしめてしまつた。現代の隨筆家には、なほ玉の如き人格者である馬場孤蝶先生はじめ、まだ言及したい人は多いが、それはまた別の機會にゆづらう。

私の直接の先輩知友のものでは、最近、生方敏郎氏の『山椒の粒』と中村武羅夫氏の『文壇隨筆』とを讀んだ。共に一言を費さずにゐられない書物であつた。生方氏はユウモリストとして社會諷刺家として令名高き人であるが、氏の皮肉は頗る溫かい。氏は曾て新しき絲雨の如く云はれた事もあるが、氏には絲雨のやうな毒氣と冷嘲はない。もつと好々人風の和氣と、エピキュリアン風の達觀とがある。それだけまた、微溫的であり、通俗にすぎると思はれるところもある。が、氏について先づ感心する事は、その文と人とが全然一致してゐる事である。氏の洒脫な風貌は、その文章にその儘に現はれてゐる。故に、氏の著書を讀んだ人は、直接氏に會つて、あの輕妙無比な談笑を聞き得たものと自信して毫も差支へない。元來、世間智に疎い人間で、その爲め何かにつけて失敗勝ちである私も、幸ひに氏の知遇を得たため、どれだけ啓發され、裨益されるか知れないのであるが、世の多くの讀者も同じ利益を氏の著書を通じて獲得する事が出來ようと思ふ。

『山椒の粒』は大部分對話の形式で書かれてゐるが、氏の隨筆集同樣、勿論一種の隨筆と見てよい。そして、氏一流の警句の多く收められてゐるのが、特に私を喜ばせた。一つ二つ引いてみる、「戀は男に金の必要を烈しく迫る、そし

て金を得ることを妨げる。」「赤裸々は靑年の美德である。猫を被ることは少女の藝術である。」「戀愛は人間の行ふ奇蹟である。」

中村武羅夫氏の隨筆は珍しい、氏は夙に本格小說によつて顯れ、その本格小說なる語そのものも、たしか氏によつて創出されたやうに思ふ。大作『人生』は未だ完結されないが、『群盲』の如きは、本格小說として堂々たる雄篇たるを失はない。その氏が『心中の身代り』の如き心境小說を書き、更により一層の心境文學たる隨筆の集を出したのは、まづ珍しく思はれるであらうが、私はこの書を一讀してそれよりも、氏のために喜びたいと思つた。

氏は隨分誤解されやすい性格の人である。少くとも、理解され難いところがある。十餘年の辱知である私自身すら、氏を誤解した事は一再でない。だから、氏が一般に大言壯語をする人とか、雄大好みといふ印象を與へてゐるらしい事も、或は無理からぬ事かも知れない。氏の性格は單純の如くにして複雜、複雜の如くにして單純、一面、世間人としての十分の常識と明智とを具へながら、一面其個人的範圍に於いては、理性と感情との間の不平衡を來す一點もある。この矛盾性と複雜性とが、一つの藝術的魅力をもつた性格を形ちづくる。そして、それが氏をして世間から誤解せしめる原因となるのだと思ふ。が、またこれが氏の藝術家としての强味なのではないかと思ふ。然るに、これまで氏がその比類なき性格を、その作品に十分には生かす事を敢てしなかつた事を遺憾としてゐた私は、『心中の身代り』を讀んで、これあるかなと思つた。そして、今度の『文壇隨筆』に、そのきぢの儘の姿を見て、これを氏のよきアポロギアとして喜んだのだ。

卷首の夏目漱石、森鷗外、岩野泡鳴等の亡き文學者の印象記は、明治大正文壇のための重要な文獻の一つとして、それだけでも興味ある讀物であるが、その人々のそれぞれの性格に一つの特異な性格がぶつつかつて火花を散らす樣が、自分には特に面白い。然し、自分に最も强くアッピイルするものは、身邊雜記であつた。雜文帳などには、往々、

極端な論法などもあるが、そこにも一種の面白味がある。何しろ驚くべき正直さである。天眞の率直さである。氏が菊池寛氏との相似を談られるのは、恐らくその點であらうか。思ふに氏は純化された人格ではあるまいが、强烈な人格であらう。そしてそこに私の學ぶべき點がある。

私は元來人物批評を好まぬ。それはしばしば非禮にわたるからである。そして、これが同時代者のポルトレエを描くに當つて、今自分の低徊の一因となつてゐる。しかも思はず人物批評に及んだ。これこの書の隨筆集たるがゆゑか、はた、あまりに鮮かに性格の躍動してゐるがためか。

こんな事を書いてゐるところに、河井醉茗氏の感想集『生ける風景』の寄贈を受けた。しばらく筆を擱いて、二三篇卒讀した。この老詩人の最近の若返りぶりはたのもしい。しかも、これは何たる淡水の味、悠揚迫らぬ隨筆家的の閑寂味であらう。細評はいづれ他日。

大正十五年二月十日(「萬朝報」二月十九日——二十四日所載)

西行雜感

×

二月十五日は西行忌である。今年の舊二月十五日は、新曆の三月二十日にあたる。

ねがはくば花のもとにて春死なんそのきさらぎの望月のころ

と西行は詠んだ。そして丁度そのねがつた日に入寂したと傳へられる。

西行忌に際して、私は日頃私淑してゐる西行上人について、何か書いて見たい氣がする。私は歌の方には今では全く

門外漢であるから、歌の見方なぞも、專門的な歌人から見られたならば、定めし笑止な事も多からうとは思ふが、ただ私は平素の持論として、古來の歌でも俳句でも、廣義の詩（ポエトリイ）として見て、しかもその詩を獨立の存在としては見ないで、何處迄もその作者の人間の反映として見て、鑑賞して行きたいと思つてゐるので、こまかい技巧の穿鑿などは、自分で出來もしないし、又、したくもないと思ふ。

そして、かうした見方は、他の歌人のことはしばらく措いて、西行にあつては、どうしてもとらなければならない一番正しい見方であるやうに私は信じてゐる。古來名だたる歌人で、西行ほど專門の歌學者や歌人から非難された歌人はない。そして、その非難には、それ相當の理由のあるだらうと云ふ事は、私とて敢て否定しようと思はないところだが、然し、その非難は何處までも外に現れた句法や語調などの技巧の末についての非難であつて、さうした缺點は西行といふ一人の人を理解する上には、何の妨げにもならないのみでなく、私達が西行の歌に親しめば親しむほど、さうした枝葉の缺點などは問題にならなくなるのだ。

西行の歌は、よく感傷的であるとか、女性的であるとか云つて非難される。そして、そんな場合、實朝の歌の擧げられることが多いやうである。實朝と西行との比較は、大變興味のある事だが、それは兎に角として、今西行についてのみ云へば、如上の非難は全く理由のない事ではない。實際、西行には女々しいといはれても仕方のないほどに、涙の文字があまりに多い。

涙のみかきくらさるる旅なれやさやかに見よと月はすめども

なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなる我が涙かな

けれども、かうした涙の文字は、字義通りに取るべきものではあるまい。それは西行の心に動いた或る名狀しがたい、深い感情を表現せんがために、借り來つた文字にすぎないのだと私は思ふ。西行はさうした突きつめた感情を表

現するために、他にもつといい表現法を見出し得なかつたのだと思ふ。そして、そのために西行を非難したい人は、いくらでも非難すべき理由を見出しうるであらう。が、私達はさうした言葉に煩はされないで、その底にあるもつと深い心持を味つて見たいのである。

×

まづ、西行を本當に解しようと思ふならば、その時代を念頭に置かなければならない。その時代と引離して、單にその殘された歌だけを見て、勝手な批判を下すといふやうな事は、西行を解する道でないばかりでなく、批評としても正しいものではないと思ふ。

そして、西行の時代は抑もどんな時代であつたらう?

西行の時代ほど、驚くべき轉變の行はれた時代は、それほど多くはないと思ふ。それは長い間一門の榮華を極めた藤原氏の勢力が漸く內面的に解體せんとする時代であつた。そして、新しい武家の勢力が勃興し來つて、源氏と平氏とが藤原氏を中心にして、その權力を競つて、つひに平氏の天下となつて、淸盛といふ一個剛腹な英雄によつて統御された平氏は、平氏にあらずんば人にあらずと云はれた迄の榮華を極めるに至つたが、その平氏も、東國から興つた新しい源氏の勢力に驅逐せられて、つひに一門を擧げて西海の藻屑と消えたといふすさまじい波瀾動搖の時代であつた。そして、西行はまづその因緣の深い崇德院の御配流を見奉り、尙かうして保元、平治の合戰から、治承壽永の動亂に遭つて、多くの人々の樣々の有爲轉變のあとを親しく見たのである。

そしてこれらの驚くべき世相の轉變は、人心をして、現世のたのみがたい事を感じさせ、厭離穢土、欣求淨土の宗敎心に驅つたのにちがひない。もつとも宗敎心の發現は、必ずしもこれ程の外界の動亂を必要としない。ただ一人の人の死も、人をして眞の修道の道に入らしめるであらう。現に西行の遁世したのは、彼が二十三歲の時の事であつた

ではないか。そして彼の發心の動機の一つとしては、彼の親戚であつた同年輩の武士憲康の頓死に深く感じた事が傳へられてゐるではないか。然し西行の歌を見る上からは、この時代を一顧して見ると、それを單に感傷的といふ言葉で、斥け去る事は出來なくなるであらう。當時の人心（西行は最もよくそれを代表する一人である）は現代の人心の考へ得られない程に素朴であると共に、その感動は力强いもので、後世の感傷的な心持とは格段に相違してはゐなかつたか。それに感傷的といふ言葉にも、隨分問題のある事で、少しでも人生の大きな問題、生と死の深い問題に思ひを潛めると、すぐこれを感傷的といふ語で貶し去らうとするやうな（文壇的）評家は、根本に於いて一つの錯誤をもつてゐるのではあるまいか。

×

西行はほとんど月の詩人と云つていい位に、月の歌が多い。夜もすがら月をながめあかして、ながめ飽きなかつた人である。月に思ひをよせて、月をこの世のかたみとも思ひ得た人である。宛かも月を心の鏡としてゐたと云つていい程に、西行は折ふし毎に月をながめて、月を友とし、月に醉うた。

物おもふ心のたけぞ知られぬるよなよな月をながめあかして

波の音を心にかけてあかすかな苦もる月の影を友にて

月を見て遠くの人をおもふだけならば、歐羅巴の詩人にも、その感情を切實に歌つたものはいくらもある。彼等の心はいつも現世に繋がれてゐる。彼等の心は多く有限の世界に繋がれてゐる。煩惱に惑ふ人間の切なる叫びは、そこに痛ましい程に聞き得られるであらう。けれども、それを蟬脱せんとする解脱の氣持は、彼等の中には、そんなには見出し得られないやうに思ふ。心の救ひを思ひ、現世の超脱をねがふ心こそ、東洋の詩人獨特の深い感情の泉でなければならない。おなじく月を友として、よなよな月を眺めあかすにしても、そこに映ずるものは、現世の執着ではな

くして、厭離の心である。

昔、支那の善導大師は、西方淨土にあこがれて、あこがれのあまり、この身厭ふべし、吾將さに西に歸らんとすと言つて、柳樹の上から、西方に向つて身を投げられたと傳へられる。この切なる心、この切なる淨土の欣求、このはげしい西方淨土のあこがれは、又西行の心を充たしてゐたであらう。ひとり西行のみならず、それはその時代の人人に共通のものであつたやうに思はれるが、彼に於いてその情は一層强かつたであらう。彼が月を愛したのは、それが彼岸の象徵として映じたからでもあつた。まことに、月を見れば、すぐに西方の寂光淨土を偲ぶのが西行の心であつた。

見レ月思レ西といふ事を

山の端にかくるる月をながむればわれもこころの西に入るかな

とうたひ、

やみ晴れて心の空にすむ月は西の山べや近くなるらん

とうたひ、

西へ行く月をやよそにおもふらん心に入らぬ人のためには

したはるる心や行くと山の端にしばしばしないりそ秋の夜の月

とうたつた詩人の心は、當時の時代一般に共通してゐた彼岸の思慕、未來世にかけた希望と、現世をはかなみ厭ふ心、即ち厭離穢土の一念のさながらの現れであるやうに思はれる。

來む世には心のうちにあらはさむ飽かでやみぬる月の光を

闇はれてこころのそらにすむ月は西の山邊やちかくなるらむ

おもふに西行は、燃えんばかりの情熱の人であつたであらう。彼の遁世も、その情熱の異なるあらはれであつたかも知れない。彼の自然の愛は、その歌道と全く合一して、それが彼にとつては一すぢのたのみとなつてゐたやうに思はれる。それは後代の花鳥風月の趣味のやうな、餘裕のある鑑賞ではなくて、それによつてわづかに身を支へることの出來た異なるなさけの手であつたやうに思はれる。

自然の愛こそは、世捨人の心の最後の絆である。されば兼好も、「この世のほだしもたらぬ身には、ただ空の名殘のみぞ惜しまるゝ」と云つた或る世捨人の言葉を引いて、――その世捨人は或ひは彼自身に外ならなかつたかも知れない――強い同感を表してゐる。そして、これがまた西行の心であつたらうと思ふ。

花にそむ心のいかで殘りけん捨て果ててきとおもふ我身に

うちつけて又來ん秋のこよひまで月ゆゑをしくなるいのちかな

西行は自然愛の詩人の殆んど最初の人であると云つていい。萬葉の詩人は自然愛を知らなかつたのではない。いな、西行よりもずつと自然の靈に觸れてゐたかも知れない。けれども、それはナイーヴに自然に融合したのであつて、對立的に自然を愛したのではなかつた。西行に至つては、はじめて、塵世を厭ふ心から、自然の中に隱れて行つて、そこから心の慰めを見出さうとしたのであつた。そして、彼の寂しさを好む心は、寂しい自然をその友にゑらんだ。

ひとりすむ片山かげの友なれや嵐にはるる冬の夜の月

わがそのの岡邊に立てるひとつ松を友と見つつも老ひにけるかな

かくて、西行は旅の詩人となつた。旅の詩人として、能因、宗祇、芭蕉、及びその後の自然文學の傳統の鼻祖となつたと思はれる。然し、その最大の弟子であり、その自然主義（近代文學のそれとは異るが）の大成者である芭蕉の

心は、その師にくらべれば、はるかに老成してゐる。西行にあつては、つきつめた「修行」でさへもあつたものが、芭蕉にあつては、一の謂はば意識的な超俗的態度、客觀的な人生觀照の道とさへなつてゐる。芭蕉が西行の像賛に

すて果てて身は無きものと思へども
雪の降る日は寒くこそあれ
花のふる日は浮かれこそすれ

と記した、その最後の一句に、芭蕉の更にすすんだ風狂の心を、遙かに客觀的になり、複雜になつた近代人の心を見出す事が出來るであらうと思ふ。

西行については、他日少しくまとまつた試論を公けにしたいと思つてゐるが、これはほんの不用意な雜感にすぎない。

大正十三年三月(「詩と人生」四月號所載)

附記。藤村作博士の『上方文學と江戸文學』を見ると、その「俳諧生活」と題する一章中に、この芭蕉の西行像賛について、私の言を無用たらしめる極めて適確なる評言がある。「此の添加された芭蕉の一句を得て、此の言葉が西行の原歌以上に深い味はひを持つ樣になつてゐる。世を捨て出家した身にも現實の苦しみはある。西行の歎きは其處にとどまるが、芭蕉はそこに一歩を進め云々」

王朝時代の二女性

この題を見た人は、直ちに紫式部と淸少納言とを聯想するに相違ない。それほどこの二人の女性の投げた影は大き

く、その文學史上の地位も卓越してゐる。また、その生活樣式も豐富で華かである。紫式部にしても、清少納言にしても、また歌人として、それに雁行する才能を示した和泉式部にしても、一條帝の後宮の華かな空氣に接觸した人で、とりわけ紫と和泉とは、御堂關白道長の榮華の生活氣分の反映を、その作品に示してゐる。淸少に至つては、その主君たる皇后定子の父の道隆の死後、その派の權力の失墜の結果として、晩年の零落を傳へられてゐるが、なほその文學生活は――枕草子一卷の書かれた時代は、華々しい女房生活の雰圍氣に浸つてゐた時である。その上、この三人は、その才能から見ても、各その類に於いて、第一流のものであつた。

然るに、これらの才媛とは、やや早く、若くはやや遲れて、丁度爛漫たる櫻花のほとりの白木蓮の花のやうな寂しい二人の女性の姿が私の眼に映ずる。西の國の批評家が、かのあまりにも多くの人の口舌にのぼる時代の流行作家の盛名に疲勞して、しばしばかの所謂 Minor Poet の幽韻に心を惹かれるやうに、私たちもこれ迄比較的閑却されてゐる第二流の詩人文學者の間に、反つて今の我々の生命に親しく響應するものを見出す事はないであらうか。それに元來いくら古典文學だと云つても、そのそれぞれの時代に於ける意義を見るばかりでいいとのみは云はれまいと思ふ。やはり現在の我々の生命に相觸れる點に於いても、特別の意味を見出さなければならぬと思ふ。その點で、私の注意を惹いたのは、『更科日記』の著者である菅原孝標女（すがはらのたかすゑのむすめ）と、家集一卷の著を殘した加茂保憲女（かものやすのりのむすめ）とである。

『更科日記』の著者は、文學史上に相當の地位を與へられてもゐるし、その實生活に於いても、祐子內親王家の女房に上つた事もあつて、受領筋の女としての一通りの經驗は踏み得てゐる。が、加茂保憲女に至つては、今迄、文學史上には全く閑却されてゐるし、その生涯もより寂寥なもので、女房生活――それが當時にあつては、女性の唯一の公人生活である事を注意せられたい――とも、全然何のかかはりもなくて過ぎたと看做すべき理由がある。まづ、彼女について、私は少しく語りたいと思ふ。

『加茂保憲女集』が、これ迄殆んど全く人の眼を逸してゐたのは、理由のない事ではあるまい。より大きな背景を有つてゐる梨壺の五歌仙をはじめ、王朝時代の數多い女流歌人の豐富な作品の中に、彼女の約二百首ほどの寂しい作品が、埋沒されてしまつたのは、或ひは當然であるかも知れない。が、我々の現在の立場から見るときは、從來の價値判斷は全く顚倒するのである　彼女の歌は、その時代の特色とややかけ離れてゐるだけ、それだけ特異の色彩をもつて、我々の注意を惹く。まづ彼女の家集の第一の異色は、その卷首に著者の長々しい述懷の言葉のついてゐる點である。その述懷は『方丈記』とほぼ相敵する長さを持ち、その集の一半を占めてゐるが、私はこの序詞だけでも、その集の意義は十分にあると思ふものである。

「しきしまの世の中、わがみかどの御しぞく　國のうちのつかさ、千々の家門、過ぎにし年過ならへる月日の中に求むれど、我身のごと悲しき人はなかりけり。」と彼女は書き出してゐる。それは「わが身のはかなきこと、世の中の常なきこと」をこまごまと書きつらねた一種の回想錄である。紫式部の如き小說家の觀察と描寫とを缺いで、後の『方丈記』の如き詩人の主觀を叙して、しかもその具體的叙述にも乏しいため、少しく單調に墮してゐるところもあるが、「ある時に、胸に思ひを焚きて、灰に書きつくれば、煙となりて、雲とともに亂るる時には、思ひ流して水に書けば、消波とともに亂るるに」といひ、「冬もさくら、心のうちには亂る。夏の日にも心のうちには、雪かきくらし降りて、えまがひなどすれば」と云ふなど、愛すべき詩趣ある筆もて、「賢きは高き人となり、おさなきは下衆ぎみと定めける。人はみなおなじゆかりなり。されば高き賤しきなぞは、鳥にこそあれ、いづれか高き賤しきあらむ。おなじ類にこそあらめとて、高き女も賤しき男心にかけ、賤しき女も、高き男あるべければ、男女のなかをさだめかねて、すぐせにまかせける」「やがてあるおもしろき櫻、常に散らずば、人にいとはれなむ」などの一種の哲學を述べたところ、當時の女流文學者中にあつては、珍とすべきものがある。そして、かうした思想感情の表白には、彼女の漢文學の素養が

あづかつて力あるやうに思はれる。

そこで、彼女の閲歴を少し考へて見よう。彼女の生涯は、もとより判然しない。けれども、彼女の家が代々天文と暦道とを司る方術家で、父保憲は暦博士として特に聞え、兄光栄は家學を傳へて、安倍晴明と併稱せられてゐた事や、有名な文章博士慶滋保胤がその叔父であるところなどを見ても、彼女の素養はおしはかられるであらう。が、彼女の作品を特色づけるものは、その教養のみでなく、むしろその生活であつたやうに思はれる。

「加茂氏なる女、よろづの人に劣れりけり、さるなかに、ただ面瘡をなむ、すぐれて病みける」とて、我世のつたなさの嘆きを、ただ歌にのみ慰めて來たといふ一節によつて、彼女のおほよその生活は推し量られる。そして、それが、「多なりし時消えにせば、たと(?)かへしする風吹きて、をしむ草木もありなまし、人並ならで人となり」といふ長歌の哀調の眞實を裏づけるものであり、彼女の歌を時流の上に置かしめる背景ともなるものである。

濱千鳥あとにたましひ通ふなりみづから見えぬ息か寄りなん
亂れつつ戀をこそすれ御牧馬の亂れておほす髮ならなくに
わきかへりたぎりて見ゆる山川も冬にはあへず氷すらしも
今日見れば穗にぞ出でにける忍びつつ駒のすさめしいもが麥ぐさ
冬の夜の涙のかかるむば玉の髮は氷にむすぼほれつつ
わかすすき秋の野わけてうち忍び結びやせまし穗にあらずとも
もみぢ葉のつもれるうへにおく霜のなからは消えて物をこそ思へ
池水のかげも絶えせぬはる日すらかげをもともにあそぶ鷗か
人の世にうきにも春はかよふらし上のみくさも色かはりけり

くれなゐの初花染の色ごろもきつつみれどもあかぬ色かな

死ぬといへどなほたましひはほのめきし見ては餞さへなき心地する

ひさかたの日てるかたにも冬の野はしみこそまされ色はみえずて

わだつみを波のまにまに見わたせば果てなく見ゆる世の中の憂さ

いへどいへどさも動きなき心かないはきよりだに出づる思ひを

そむけども天のしたをしはなれねばいづこによるも涙なりけり

一々の批評は敢てしないが、これらの例を見ても、彼女の歌の特色はおほよそ看取せられるであらう。當時の女流の歌の中からこれほどの清新味を見出さうとは、私の豫期しなかつたところである。殊に漢詩の影響は尠からず、彼女の歌を特色づけるもののやうに思はれる。「青柳のいとにやいをはかかるらんおろせるかげの網に似たれば」などその顯著なもので、かへつて概念的に墮したものであるが、前に引例した作の中には、その影響が効果的にはたらいてゐるものがあるやうに思ふ。で、これ以上詳しい事は玆には云はないが、これだけでも、あの華かな平安朝にも、こんな寂しい女性がゐた事が考へ得られるであらうと思ふ。

菅原孝標女は、かなり多産な文學者であつたらしく『更科日記』『みつの濱松』『夜半の寢覺』など幾分不完全な形で今日傳はつてゐるものの外に『みづから悔ゆる』『あさくら』等の作もあつたと云はれる。十二三歳の折から文學に傾倒し、母や姉の噂に出る源氏物語などを讀みたいばかりに都に憧れて、その父の領國なる下總より都に上つて、はじめて物語の巻々に、「后の位も何にかはせむ」とて、心ゆくばかりに讀み耽り、時には、「浮舟の君のやうに」とあこがれわたり、「光源氏などやうにおはせむ人を、年に一度にても通はし奉りて」「めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめとばかり」思ひつづける。彼女も寂しい女性であつた。祐子内親王家の女房に召されて、みやづか

へを侘びしみ、宮にまゐり、寺にこもり、ただ夢想と空想とに心を慰めて、その間に、信濃守橘俊通に嫁して、肥後守仲俊を生み、夫の死後は更に侘しく、阿彌陀佛の御姿をまのあたりに見て、「この夢ばかりぞ後のたのみとしける」と云つてゐる。

かうした自分の生活を書き記したのが『更科日記』である。この作は從來も、「未知世界憧憬文學の嚆矢」（玉井孝助氏說）として注意されてはゐたが、私の一讀した印象では、從來の評價よりも更に高く買はれねばならぬやうに思はれた。源氏物語のリアリズムに對して、私の解する意味でのロマンティシズム文學の權輿として、私の鑑賞の結果は、これを別に書きたいと思つてゐる。

附記。『加茂保憲女集』よりの引用は廣池千九郎氏等校訂の『女流文學叢書』に據る。群書類從本は未だ見るを得ないが、原本は惜しいかな幾分の誤脫がある。

大正十五年一月二十八日（「文章往來」三月號所載、後補正）

古典文學一夕話

一　古　驛　鈴

宣長のことども

この夏、伊勢、志摩に遊んだ時、本居宣長翁遺愛の古鈴に模して作つたといふ薄墨色をした粘土製の風鐸を貰つて來た。それは柄がついてゐるので、平たい瓶子（へいし）のやうな恰好に見える風鈴で、上部に養老年製といふ文字が入つてゐ

るのには、むかしの驛路の鈴をかたどつたからであらう。宣長はこれに類する鈴を三十六、六綴につらねて、座右の柱にかけておいたといふ。また、思ひに屈した時には、鈴を引き鳴してその音を聞いて心を慰めたといふ事で、書齋を鈴の屋と號したのも、またそれに因んだのである。

本居宣長と云へば、むかしかの敷島の大和心を人問はばの歌しか知らなかつた時分には、何だか七むつかしい道學者で、頭巾臭の強い人のやうに思はれて、あまり親しみが湧いて來なかつた。ところが、その人の著書を手にし、その所説をうかがつてみると、それは大變な偏見であつて、實際はその反對である事がわかつた。この人ほどかの儒者特有の頭巾臭を排し、漢學者風の道學觀念を非とした人はないのである。

宣長の學說は、その師眞淵の說を受け繼いで、更にこれを發展せしめたもので、古事記に傳へられた我が祖先の道、天眞生々の古道を顯揚せんとする一種の復古主義であり、また或る意味の宗教思想である。敷島の大和心の歌にもよくあらはれてゐるやうに、彼は神ながらの道を信じて、人間の小智を斥け、人が神から授けられてゐる眞心、即ち感情の自然の發露をたふとんで、所謂仁義道德の人爲的な狹小な道德律を排した。殊に、物のあはれを述ぶるを以て文學の本領となしたところなどは、頗る進步的な意見で、文學的作品をもひとへに倫理的見地から批判せんとする、かの宋儒傳來の理に偏した囚はれた見解に對する痛快な反擊であり、古典批評に於ける一大革新であつた。それだけでも、その功績は偉大と云はねばならぬ。

漢意を去れといふのが、宣長の標語であつた。古道をあらはすためには、上下一般に浸潤してゐる支那思想を排除しなければならぬといふのがその信念であつた。されば、その隨筆『玉かつま』の中でも「學問して道を知らむとならば、まづ漢意をきよくのぞき去るべし」といひ、「漢意とは、漢國のふりを好み、かの國をたふとぶのみをいふにあらず、大方世の人の、よろづの事のよしあしさを論ひ、物のことわりを定めいふたぐひ、すべてみな漢意の趣あるを

いふなり」と云つて、隨所に儒學的合理主義の小智と僞善とを排擊してゐる。

宣長は勤勉の人であつた。その名聲籍甚の日にも、家業の醫も廢せず、門生へも授學をなし、その準備的研究をもしながら、つひにその一生の大事業であつた『古事記傳』四十四卷を完成してゐる。それは三十五の時に稿を起し、六十九の時に脫稿したもので、實に前後三十五年間を費してゐる。ギボンの『羅馬衰亡史』の幾星霜の勞苦に私達は感心してゐるが、我が日本にもかうした意志力があつたのである。しかも、ギボンは生活のために勞する必要のなかつた人であるのに、宣長は家業をも怠らなかつた。宣長がいかに勤勉な人であつたかは、夕暮の本を讀むには暗く、灯をつけるには早いといふ時刻を、歌を詠む時間にあててゐたといふのでも知られるであらう。

今、しばらく筆を擱いて、その宣長遺愛の鈴に模した風鈴を振つてみると、微かに涼しい音が起る。涼しいと云ひ切るにしては、少し重々しいが、何となく古雅なその趣きが、その音にさへ籠つてゐるかとも思はれる。その音をぢつと聞いてゐると、その鈴を振つてゐる勤勉な一人の國學者の面影が、そぞろに偲ばれるのである。私達は今では宣長の說をその儘に受け容れる事は出來ないであらう。けれども、その中には隨分大きい暗示があると思ふ。曾つての支那崇拜の代りに、歐米崇拜の念が、目に見えぬ洪水のやうに、人の心を浸してゐる今日、宣長翁を再び起して、聞きたいと思ふ事が多いのである。

人物斷じ難し

『玉かつま』の中で、宣長はいろいろと儒者のさかしらだてを擧げて、そのあやまりを正してゐるが、中でも、彼等の習癖である恣まな人物論斷の妄を破してゐる條を痛快に思つた。

「人のただ一言(こと)、ただ一行(わざ)によつて、その人のすべての善き惡しきを定めいふは、からぶみの常なれども、これいとあたらぬことなり。すべてよき人といへども、まれにはことわりにかなはぬしわざもまじらざるにあらず。あしき人といへ

ども、よきしわざもまじるものにて、生けるかぎりのしわざ、ことごとに善き惡しき一かたに定まれる人はをさをさなきものなるを、いかでかはただ一言、一行によりては定むべき。」と云つてゐるのは、まことに卓見であると思ふ。

露西亞文學の心醉者であつた私達は、ドストエフスキイによつて、善と惡とが裏おもてである事、善人惡人の區別のない事を敎へられてゐる。が、善惡には限らず、何事につけても、私達は輕々しく他人を論評してはならない。愼むが上にも愼む事である。なぜかといへば、他人は容易に理解出來るものではなく、理解したと思ふ時でも、多くは自分の影を投げたのに過ぎないからである。それに現實といふものは、思ひも及ばぬほど複雜なもので、例へば或る人の或る行ひでも、その表面に現れた結果から直ちに推察せられるものの外に、どれだけ多くの隱れた原因があり、人には知れない理由があつての事かわからないのである。その上、人の噂といふものは常に信じ難く、おなじくその目で見たところの事實でも、十人に聞けば十人十色、人毎に全く異るのである。

今人にして既にさうである。古人に至つては、いかにして正確な史實を知り得られよう。根本史料といふものさへが、人心の不確かさを思ふと、既に信じられないのである。されば橋南翁が『北窻瑣談』中に「東坡抔さばかりの才子なりしかど、兎角に古人を評議する事を好めり。後世より評すれば、いかやうにも議せらるるものなり。あまり世に益有るやうにも覺えられぬものなり。」と云つてゐるのに同じたい。棺を蓋うて名定まると云ふけれど、それにすらも私は疑ひがある。石田三成は德川三百年間奸賊とせられてゐた。醜名を後世に流してゐる人が、その實どんな高貴な人であつたかも分らない。同時に、その反對の事も云へる。歷史に對しては、私は全く懷疑論者である。從つて、そんな不確かな史實によつて古人の人物を論斷するよりも、それを單に藝術として味はふ事を好む。太田錦城の『梧窻漫筆』の如きは、さすがに一世の大家の隨筆だけに、その見識に服するところも多いけれど、恣まな古人の論斷には反感を覺えさせられる事も尠くはない。

近頃は文學者の間にも、勝手氣儘に他人を論つて、人物の高下を定めて喜ぶ風が流行してゐるが、どういふものであらうか。またかの惡罵の風の如きも。江戸末期の文人間にも、匿名で誹謗の書を著して、他人の私行を誣ひ、若くは摘發して快とする氣風があつたが、文化の頽廢した時代には、人心がさういふ方に向くものと見える。

滅びたる文學

『月草』の中に譯載されてゐるドオデエの短篇で『美しき星』といふのがある。それは西班牙の劇詩人ロオペ・デ・ヱガが、或日、友と散歩しながらその友の何も書かない事を非難すると、彼は一生に一度全精力をこめた傑作を書きたいからだと答へる。すると、ロオペが「君もさう思つてゐるのか」と叫ぶので、友は驚いて「百にもあまる作品を書いてゐる君が」と不審をすると、ロオペはそれを制して、實は自分の少年のをりに、伯父のもとで『美しき星』と題する寫本を見付けて、それを讀まうとして果さなかつたため、どんな美しいすぐれたものであらうと思ひやられて、それに劣らぬものを自分でも書きたいと思つてゐるのだが、力が足りないため、まづその下稽古のつもりで書いてゐるうちに、いつか百にあまる作品を書いてしまつたわけだと話す。すると友はうなづいて、その『美しき星』ならば、自分の手許にある。見たければ見せてもいいが、ひどくつまらないものだから、きつと失望するよと云つたので、ロオペはしばらく考へてから、では見るのをよさう、これから書けなくなつては困るからと云つたといふ話である。

その名だけ殘つて、本文の滅びてしまつた文學が、私達に及ぼす魅力も、またこのロオペの『美しき星』のそれとおなじやうなものであらう。今殘つてをれば、それほどのものではないかも知れず、また讀むのを煩はしく思ひさへもするかも知れないのに、つひに見る事が出來ないといふ事によつて、何となくすぐれたもののやうに思はれて、心が惹かれる。人の心とは不思議なものである。

我が國文學史上にも、かうした湮滅に歸した文學はかなり澤山ある。度々の兵亂やら何やらで、隨分多くの文獻が

ほろびたが、中にはすばらしい文學的作品もなかつたとは云へない。例へば、山上憶良が編したといふ『類聚歌林』の如き、上述のやうな想像力の作用からでなしに、重んぜらるべき理由をもつてゐる。『萬葉集』は隨分大きな豐富な歌集だけれど、あの時代の歌の全部ではないのである。『類聚歌林』中の歌は『萬葉集』には一首も採り入れてない事は、學者が斷定されてゐる。幾多の滅びた歌があり、知られずに終つた歌人があるに相違ない。しかもその滅びたのは文學的價値が低かつたからではなく、偶然の事情に基づくにすぎない。ここに於いて、私達は藝術上の正義の上に儼として君臨する運命の力を思はずにはゐられない。文學上の名聲も、いかにしばしば偶然の事情に左右される事であらう。それを思へば、自ら詠み、自ら娯しむ良寛、寒山子の心境の徹底眞をまた更に想望せずにゐられない。

平安朝の物語集も隨分滅びてゐる。『更科日記』中に名の出てゐる『かばねたづぬる宮』『とほぎみ』『せり川』『しらら』『あさうづ』又外に『月待女』、『更科日記』の著者のと云はれる『みつの濱松』『みづから悔ゆる』『あさくら』『夜半の寢覺』、その外にも、『住吉物語』も現在のものは、ずつと後の時代のもので、最初のものその儘ではないと云ふなど、その例は多いのである。

湮滅に歸したものとばかり思はれてゐたのが、零本ながらも、幸ひに發見されたものに、後白河法皇の御選と云はれる『梁塵祕抄』がある。『梁塵祕抄』の名は『徒然草』にも出てゐて、廣く人の知るところで、久しく識者のあこがれの的であつたが、近年その零本が和田英松博士によつて發見され、佐々木信綱博士によつて刊行されたのは、まことに學界の慶事である。殊にそれが人の想像力を嘲るやうなものでなく、まことにすぐれたものであることは、その大正の詩人の作品に多大の影響を與へた事によつても知られるが、試みにその二三を次ぎに引かう。

佛は常にいませども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見え給ふ。

思ひはみちのくに、戀はするがに通ふなり、見そめざりせば中々に、そらに忘れてやみなまし。

ふく風に消息をだにつてばやと思へども、よしなき野邊に落ちもこそすれ。

また、これは湮滅したものではないが、高野辰之博士が續群書類從中に發見して紹介された『閑吟集』といふ室町時代の歌謠集もおなじく捨て難いものである。これは五山あたりの禪僧が聚集したものであらうと云はれてゐるが、なかなか文學的で、愛誦すべきものが多い。

月はやまだの上にあり、舟は明石の沖をこぐ、冴えよ月、霧には夜舟のまよふに。

葛の葉〳〵憂き人は、葛の葉のうらみながら戀しや。

ただ置いて霜にうたせよ、夜ふけて來たがにくい程に。

續群書類從の目錄を見ると、まだ別に『禪林小歌』といふものも載つてゐる。どんなものであらうか、「閑吟集」ほど文學的なものではないかも知れないが、いつか見たいと思つつてゐて、まだその機會を得ないでゐる。

知られざる詩人

秋の夜といふ端唄がある。「秋の夜は長いものとはまんまるな月見ぬ人の心かも、更けて待てども來ぬ人の、おとづるものは鐘ばかり、わしや照らされてゐるわいな」といふ凄絶な歌澤の一曲である。

この歌澤の作者は誰であつたか。それは江戸の通人でもなければ、學者でもなかつた。佐渡の金山この世の地獄に苦役してゐるあはれな流刑人、大定といふ大工であつたのである。彼が何の罪で佐渡へ流されたのかは分らないが、そこで孤島の月を眺めて、ひとり悄然とわが身世をおもひめぐらしてゐた時に、卒然として、この一篇の詞章が彼の心頭にのぼつたのである。彼はそれを手紙に書きつけて、江戸なる歌澤の家元へ送つたので、家元ではそれに感じて、苦心の曲を附して、この哀切な一曲となつたのであるといふ事を、いつであつたか、友に聞いた事がある。

知られざる詩人はいたるところにある。私達は彼をこそ最も愛する。

月見の宴といふこともすたれた。人の心も忙しくなつて、ゆるゆると月を眺める餘裕もなくなつてしまつたのであらう。今、月見などといふ言葉を聞くと、まるで遠い昔の傳説でも聞くやうな氣がするであらう。殊に近代化し、機械化した都會人にとつては。

いつの年であつたか、友の家で仲秋の明月を賞した事がある。座敷の燈を消して、縁から疊の上までさし入る光で、私達は杯を擧げて、古人を談つた。去年の仲秋の月は、伊香保で、若い友と二人で賞した。月下の杉林は莊嚴でもあり、美しくもあつた。私も一生に一つ、自分で氣に入つた月の詩を得たい、と思つてゐるが、果して、得られるかどうか。

私は西行の歌を愛するものだが、その西行の歌の中でも、とりわけ月の歌を愛する。その月の歌の中の一首「心ざすことありて、安藝の一の宮へ詣でけるに、たかとみの浦と申すところに、風に吹とめられてほどへけり。とまふきたる庵より月のもるを見て」といふ詞書のある一首を、なぜとは知らず、いつもしみじみと讀む。

波の音を心にかけてあかすかな苫もる月のかげを友にて

大正十五年九月（「文章俱樂部」十月號所載）

二　旅人の文學

「旅人と我名よばれむ初しぐれ」この有名な句の前に、あるとき、芭蕉はおもしろい詞書をして戯れた。「はやこなたへといふ露の、むぐらの宿はうれたくとも、袖をかたしきて、御とまりあれや旅人」といふ詩句で、それに芭蕉は謡の節付けまでしてゐる。旅中のつれづれのすさびか、在庵の日に旅を思ふ風狂のあらはれか、興ある言葉である。

芭蕉の風狂には及びもつかぬとしても、「旅人と我名よばれむ」といふ氣持は、今日の私達の胸にもある。何のなにがしといふ名も忘れて、ただ一人の旅人となつて、見知らぬ土地をさまようて、誰とも知れぬ旅人として遇せられる心安さ、煩はしい日常生活の桎梏からしばらく脫して、何處もおなじ人の世の營みを、よそ事のやうに眺めやる傍觀者の自由な心持。私はさうした何處か寂しい、それでゐて安らかな心持が好きである。

芭蕉の旅は行脚であつた。今の私達の旅とは、餘程その意味を異にしてゐる。「東海道の一すぢも知らぬ人、風雅に覺束なし」と云つてゐる芭蕉にとつては、行脚は風雅の道であり「此一筋に繫がる」修行でもあつた。その弟子のために書き置いたといふ「行脚の掟」は、（僞作であるとの說もあるが）よくその心構へを現はしてゐる。それは恰かもの宗門の開山の訓誡、例へば夢窓國師の臨川家訓などと同じ意義をもつてゐる。「一宿なすとも、故なきに再宿すべからず」といひ、「他の短を擧て、己が長を顯すことなかれ」といふなど、專ら行脚上の心得であるが、「主ある物は一枝一草たりとも取るべからず」といひ、「山川舊跡したしく尋入るべし、新たに私の名を付ることなかれ」といふなどは、又廣く旅人の箴言とすべきものである。

遺語集を見ると、「行脚何れの日かをかしかりし」との或人の問に「翁、ほほゑみ給ひて、旅せぬ人はさこそ思はめ。行脚は苦樂を翼となす。今日は晴れて笠輕く、今日は時雨れて袖重き、曇子(どんす)の夜着、草の枕、引かはり移り行くも戾りてこそをかしけれ」とて、奥の細道の「笠島はいづこ五月(さつき)のぬかり道」の心細さを語り、「旅は彌生の末つかた、卯月半こそ氣色立ちて覺ゆれ」とて、「草臥れて宿かる頃や藤の花」の一句の心を、旅の榮華としてゐるのを見ても、旅人芭蕉の心意氣は知り得られるであらう。

旅人芭蕉と世に呼ばれる如く、芭蕉ほど旅人といふ言葉の、いかにもぴつたりとあてはまる人はない。が、その旅はかやうに、今の世の所謂旅行の「氣さんじ」ではないのであつた。行脚ならぬ今の世の旅でも、冬の旅は樂しい

ものではない。しかも芭蕉は「冬の日や馬上に氷る影ぼふし」の寒さを身に味つた。また、幾度びとなく、旅で歳を迎へてゐる。「旅寢ながらに年の暮れければ」と前書して、「年暮れぬ笠きて草鞋はきながら」「旅寢よし宿は師走の夕月夜」「旅寢して見しや浮世の煤はらひ」などいふ句を見ると、浮世の外の旅人といふ、寂しいながらも朗かな境界が想ひやられる。「馬をさへ眺むる雪のあしたかな」の句の前に、「旅人を見る」とあるのもおもしろいと思ふ。雪の朝、そんな雪の中をも、馬に乘つて過ぎる旅人がある。それを見てゐる芭蕉の心持を、いろいろに想像してみるのも興味がある。

然し、此旅人芭蕉も、卒然として生まれたのでない。その先驅者として、西行をもち、宗祇をもつてゐる。殊に西行は芭蕉の最も私淑した人である。旅と歌とを修行と觀じた宗教詩人西行は、かつさまよひ、且つ詠じた。もとより旅の歌は、西行に始まつた譯ではない。萬葉の中に既に多くの傑作がある。例へば人口に膾炙してゐる有間皇子の「家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」を始め、人麿の傑作もあれば、名も無き防人の切實な情の籠つた歌も多い。それに、萬葉人の中には、山上憶良のやうに、大唐まで渡つた歌人さへもあるのだ。然もそれでゐて、旅に心を傾けたといふ趣きの見える人はまだ一人もない。

想ふに、萬葉人にとつては、その生活は自然と合一したもので、まだ不幸な分裂や對立の感を知らず、シルレルの所謂ナイーフの境にあつたのだとも考へ得られる。それゆゑ、時に旅といふものが特別の深い意味を有たなかつたのではあるまいか。西行が出て、初めて自然といふものを意識的に愛し求めた。かのポピュラアな富士見西行は、即ちシルレルの謂ふセンチメンタルの意味で自然に對する人の姿に外ならない。そしてそれが宗教家としての修行と合一して、玆に初めて旅といふものが、新しい意義をもつに至つたのであると解したい。但、西行にも必ずしもその先驅者がないのではなかつた。彼の先驅者とは、かの能因法師である。

王朝時代の文學者は、旅とは最も緣の遠い人々であつた。王朝文學は主として宮廷文學であつて、その興味の範圍は、その狹隘な洛中のサアクルに限られてゐた。彼等がそこから足を踏み出すのは、たまたまの貴船詣でとか初瀨詣でとかに限られてゐて、まづ、遠くとも近畿を出でない。勿論、散文の方では、紀貫之の『土佐日記』があり、『更科日記』もその一部は旅の記であり、『伊勢物語』も或る意味では紀行であるが、これらはもとより自然の愛に根ざした能動的な旅ではなかつた。その中で、能因だけは著しい例外である。

能因が「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」といふ歌を得て、それに重みをつけるため一夏家にとぢ籠つて、顏だけ窓から出して日に燒かせてから、實際白河へ行つたものとして、その歌を披露したといふ說は、かなり有名で、そのため彼はしばしば後人から叱られてゐるが、この話は逸話としては滑稽味があつて面白いけれど、どうも信をおき難い。今の世のゴシップの類ひのやうに思はれる。私は能因をもつと高く買つてゐるものである。それにまた事實、その紀行『八十島記』などを擧げて、彼が實際行脚したものとする說も、今ではかなり有力なのであるが、その紀行はとにかく、その歌だけで見ても、彼は確かに西行の先驅者と見なすに足りると思ふ。藤岡博士が「風格やゝ西行に似たるものありて存す」と云はれたのは、まづ、動かし難い斷案であらうと思ふ。

但、かやうに怪しいものである、能因には氣の毒なこの逸話の中にも、全く意味がないわけではない。それは「歌人はゐながらにして名所を知る」などいふ事の云はれてゐた時代にも、都の家で、座臥の中に得た歌よりも、實地について得た歌の方が重きをなしたといふ事實を裏書きしてくれるからである。そして、この點によつて、その後西行が、既にその在世のときから、世に重んぜられた所以が肯かれようと思ふ。

西行はその緣行道の點で、歌壇にとつても一個の革新者であつた。同じ法師と云はれても、攝津の古曾部に住んで、古曾部の入道の名のある能因は、都に執着をもつてゐたやうに思はれるところ、かの逸話に祟られる因緣も全く無く

はなかつたであらう。が、西行に至つては、はじめて强い信念と愛とをもつて、自然に沒入した、最初の旅人であつた。彼の心構へは喜海上人の『栂尾明惠上人傳記』にあるその言葉によつて知られる。そこでは、西行はその後輩である明惠上人に向つて、歌道の極意を語つて一首の歌を示してゐる。その歌、「山深くさこそ心は通ふとも住までかはれは知らんものかは。」これは山家集中にも見えない歌であるが、(異本山家集中にはあり)いかにも西行らしい歌で、自然詩人としての彼の抱負を十分に示してゐるものではあるまいか。

芭蕉が西行と共に中世の二大歌人をもつて許した實朝は、もとより旅の詩人ではなかつた。この不幸な將軍は、滅多に鎌倉から外へ出る事を許されてゐなかつた。その入宋の企てに就ては、種々の說もあるが、それも遂に成就しないで畢つた。然し、その金槐集は、前半の套襲的、題詠的な作よりも、終りの直接自然に就て詠んだものの方が傑れてゐる。萬葉の好き影響であるのはもとよりであらうが、この四人のやうな將軍もたまたま旅人となつた時、歌人としてよく生きた。かの有名な「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ」も「箱根の山をうち出でて見れば」云々とあるのを見れば、多分二所詣での歸りの作であらう。「春雨にうちそぼちつゝあしびきの山路ゆくらむ山人やたれ」もまた二所詣で中の作である。私の好きな歌の一つ「ゆふづく夜さすや川瀨のみなれ棹なれてもうとき波の音かな」にも、「相模川といふ川あり、月さし出でてのち、舟に乘りてわたるとき」といふ詞書がある。

今一人、その「松の葉におなじ世をふる時雨かな」をふまへて、「世に經るは更に宗祇のやどりかな」と吟じたやうに、芭蕉が重んじた人で、而もその直接の先驅者といふべきは、宗祇である。宗祇も亦隨分よく步いた。宗祇の連歌に就ては、私はよく知らないが、その『筑紫日記』の冒頭、「二毛の昔より六十の今に至るまで、愚かなる心一すぢに引かれて、入江の蘆のよしあしに迷ひ、身をうき草の浮き沈むなげき絕えずして、移り行く夢現の中にも、時に隨ふ春秋のあはれ思ひすて難く侍るまゝに、國々の名ある所見まほしく侍るほどに」云々といふのを見れば、彼が旅人と

しての芭蕉の直接の先驅者である所以も肯かれるであらう。

芭蕉の同時代者、近松にも西鶴にも紀行はないが、西鶴の諸作を見ると、直接その土地の風俗などを見た人でなければ書けない所が多い。西鶴について私はよく知らないが、彼も俳諧師としてかなり歩いた方ではあるまいか。けれども自然に親しむ點では、『禁足旅記』などのある同じ俳人の鬼貫などの方が遙かに旅人らしく思はれる。元來が自然文學である俳諧は、後々まで長く一面旅人の文學といふ意味を失はないで來た。例へば後の蕪村などもその歩いた事に於いては、芭蕉よりもむしろ多い位であらう。しかも誰も蕪村がそんな行脚した人とは思はないのは、彼の作品に芭蕉のやうな直接自然によつて悟入したやうな所が尠いからであらう。

芭蕉の散文の大部分は紀行文である。けれども、それは普通の意味の紀行文とは異つてゐる。もとより、紀行文にもいろいろあつて筆者のテムペラメントの違ふやうに、人によつて異るが、今、私達が紀行文に對する氣持をかへりみると、そこに二つの興味のあるのを感ずる。一つはその著者の遊んだ土地なり、自然なりに對する興味であり、一つはその筆者の個性に對する興味である。この前の方の知識的興味に滿足を與へるものは、橘南谿の『東西遊記』をはじめ、現代の旅行家の述作に至るまで隨分多い。が、後の方の、一種の心境文學としての紀行は、芭蕉の『奥の細道』以下を除けば、極めて寥々たるものがある。

元來、隨筆文學のおもしろみは、その人の個性のおもしろみだと私は思つてゐる。そして紀行もまた一種の隨筆である。ところが、普通隨筆といふと、風俗史的、文化史的知識の興味を專らとする考證的隨筆が考へられるやうに、紀行と云ふと、多く道中の見聞記が考へられる。然し、私の興味は、その筆者の個性の、人格の發露してゐる心境的隨筆、心境的紀行の方により多く傾く。もつとも、かうは云つても、この二つの要素が截然と別れて、別々に存するわけではなく、概ね程度の差に過ぎないのは云ふ迄もない。『東西遊記』にも南谿の心境を見るべく、心境的隨筆なる

『徒然草』や『雲萍雜志』にも、全く考證がないのではない。

ただ、紀行文に就ては、芭蕉がその『卯辰紀行』の中で、「抑も道の日記といふものは、紀氏、長明、阿佛の尼の、文を舊ひ情を盡してより、餘は皆おもかげ似通ひて、其糟粕を改むること能はず」とて、「其日は雨降り晝より霽れて、其處に松あり、彼處に何と云ふ川流れたりなど云ふこと、誰も誰も云ふべく覺え侍れども、黄奇蘇新の類ひにあらずば云ふこと莫れ」云々と云つて、自ら戒めてゐる一條が、不變の意義ある立派な訓戒であると思ふ。

紀行文家としては、何と云つても、橘南谿であらう。南谿の文は飾りのない達意の文で、名文といふ概念には當てはまらぬが、あくまで實に卽してゐて、毫も空虚なところがないのを好む。足跡天下にあまねしといふ點では、『日本行脚文集』の著者大淀三千風に指を屈する。それは彼が明治に入るまで人に閑却されてゐた山陰地方にまで行つてゐるのでも知られよう。頗る奇怪な文章を書く、覇氣と衒氣との滿々たる人物ではあつたらしいが、幸田露伴氏は、「芭蕉のすらりとしたるに及ぶべくもあらねど、ひとふしありてをかしき洒落者なりしなるべし」とて、彼を剳りに高く買つてゐられるやうである。二鐘亭半山といふあまり名の聞えない俳諧師の書いた『見た京物語』といふのも、簡潔な文章で、例へば「京は砂糖漬のやうなる所なり。一體雅有て味ひに比せば甘し。然れども嚙みしめてうま味なし。綺麗なれど何處やら淋し。」といふ風にいかにもよく京都の感じを捉へてゐるのにいつも感心する。

一體に、俳人の紀行は、國學者の擬古文の紀行などと違つて、生きた觀察があつて好きである。その代り抒情詩的の詠嘆はない。が、ただ一つかの難波の俳人大江丸の「あがたの三月四月」に、七十八の老俳人が吉原に案內せられて、ひともとといふ全盛のおいらんに對面して、その才色に打たれて「あはれ昔の春ならむには、いかで此のままにやはと、魂亂れたれど、老さらぼへる我姿に恥入て、(手ざはりの糯子我秋を泣かせるか)かくしたゝめて出しぬれば」云々、「誠容儀と申し、手跡といひ、心の器揃ひもそろひし女なりけり。あゝこの女なりけり。」と歎じた一章は、俳

人の文として珍らしくも思ひ、面白くも見た。

明治に入つて、紀行文は盛んになり、特に紀行文家といふ人々が出た。『日本風景論』其他で聞える志賀重昻氏はむしろ地理學者であるが、『日本山水論』の著者小島烏水氏も科學的の特色も多くもち、時の批評家に文學と科學とを調和するものと評せられた。幸田露伴氏、田山花袋氏、遲塚麗水氏、德富蘆花氏等の紀行は著名である。特に紀行文家といふのではないが、德富蘇峰氏の紀行も、私の愛讀する所である。が、就中、少年時代から私の好きであつたのは、故大町桂月翁であつた。一昨年伊香保から澁川へ下りる電車の中で、隣席の客の持つてゐる新聞に翁の訃報が出てゐて、その二三人が頻りにその話をしてゐるので、はじめて翁の逝去を知つて、もうあの飄逸な自在な文章が見られないのかと寂しい思ひをした。一蓑一笠、蓆を被つて山河を跋渉したその人は、今その生前愛した十和田湖の畔りに眠つてゐる。

大正十五年十二月(「文章俱樂部」二月號所載)

三　聖者の文學

從來の日本文學史には、どういふ理由であるか、普通、宗教文學が全く除外せられてゐる。宗教文學を取除けてしまへば、日本の中世文學である鎌倉室町期の文學は、かなり貧弱なものになつてしまふ。それは、例へば佛蘭西文學から、パスカルの『プロヴンシャル』を除き、ボッスエの說教を除き、獨逸文學から、ルテルの諸著を除き、ペエメ、タウレル、ジレジウス等の神祕家を除いたよりも、より一層の打擊でなければならぬ。

もつとも、現代は最も宗教を否定する聲の高い時代である。現代の左傾思想からは、宗教ほど激烈に排除せられるものはない。既に、宗教は鴉片だといふ言葉もある。その言葉を云つたのは、たしかマルクスであると思ふが、今や

そのマルクスは、一つの宗派の祖師、開山とあがめられて、尊崇至らざるなしといふ事實、また勞農露西亞に於けるレエニンの偶像化の如きは、これをどう說明したものであらうか。神を否定したニイチエが、超人說を立てずにはゐられなかつた心理から、この事實をも說明する事が出來るであらうか。

おもふに、凡ての弱い人間にとつては、神なくしてはゐられぬのであらう。信仰なくしてはゐられぬのであらう。かくて、一見宗教を否定するが如き學說も、反つてそれ自ら宗教的意義をもつに至るのではあるまいか。それでなければ、心安んぜぬものが、人間にあるのではあるまいか。少くとも、私自身はさうした人間であつた。かくて、若い私は社會主義に趨つて、そこに宗教を求めようとした。それは私の二十代の日の夢であつた。しかも、私は唯物史觀がよく分りもしなかつたが、またそれに堪へられもしなかつた。今、唯物論的辨證法に立脚した文學でなければならぬといふ說が有力になつたのを見て、ひそかに驚いてゐる。當時かかる說が盛んに唱道せられてゐたならば、弱い私は一も二もなく、その渦卷の中に捲き込まれてしまつたに違ひない。

今では、それらの說の根柢には、かなりの同感もあり、その人々の熱誠を重く見るにも拘はらず、私には多くの疑ひがあり、心中安んじがたい多くのヂレムマがある。それは玆で書くべき事でもあるまいから省く。とにかく、私には、ニヒリズムと宗教的希求とが、絕えず相鬪つて來た。そして、それが現在にもなほ及んでゐるが、私がこの數年前から、與へるものの道を捨てて求めるものとして、好んで古聖賢の遺文に親しみ、宗教的雰圍氣に接近したのは、一つの自己救濟の試みであつた。三四年前の內外の苦惱を考へると、この試みをしなかつたなら、私の身はどうなつてゐたか知れないといふ氣もする位だ。

然し、私は社會主義に行けないと同樣、宗教的捨離の生活にも入つて行けない。さういふ弱さと、迷ひとが、依然として心を重く抑へてゐる。然し、私が好んで宗教上の文書を讀むのは、必ずしも求道でなくとも差支ない。單に文

學として味ふのでも、全然これを讀まないよりはましである。元來、私はあらゆる文學を人格の反映にすぎぬと見る人格本位、個人本位の一つの文學觀を持つてゐる。然るに、聖人の行藏をうかがへば、そこには高大な藝術境が見出される。かかる偉大なる人格と信仰とは、それ自ら一つの立派な藝術と思はれるのである。

私が好んで禪家の祖錄を讀み、法語を讀むのも、そこに詩を見出すからである。詩禪一味といふ語があるが、禪家は最も詩の境地に近いやうに思はれる。五山に多くの詩人僧の現はれたのも、決して偶然ではないやうに思はれる。私は多年、東西古今といふと烏滸がましいが、とにかく相當廣い範圍に亙つて、よりよき詩、より美しき詩、より高き詩を求めたが、つひに、今のところでは、かの寒山子や、禪家の頌の中に、最高の詩を見出してゐる。

×

淨土、眞宗の文學では、まづ源信、法然、それから親鸞、蓮如がある。源信卽ち惠心僧都の『往生要集』の如きは、聖者の文學として見ず、單なる俗人の手になつたものとして見ても、立派な文學的作品であるにも拘らず、長い間、人々に無視せられてゐたのは惜しい事であつたが、近年これをダンテの『神曲』に比する人があつたりして、今では割りに人々の注意が向けられるやうになつたらしい。『地獄物語』『極樂物語』すべて是れ藝術的創作と見ていい。新しい教育を受けたある夫人は、これを讀んで、實際に地獄を恐れる念起り、善根を志すやうになつたといふ。合理主義、科學主義からの批評は、私は玆に敢てしない。法然上人には『和字選擇集』『念佛大意』『元久法語』などあるが、親鸞上人の『歎異鈔』の方が、その新解釋である倉田百三氏の『出家とその弟子』によつてより多く人の知るところであらう。これは上人自身の文ではないが、その信仰の究極を發揚されたもので、『末燈鈔』『御消息集』などと共に、文學的價値また高いものと思ふ。それから、蓮如上人に至つては、その述作また極めて多いやうだが、眞宗方面の文獻には、私はあまり通じないからこれ位にしておく。なほ法然(?)親鸞のみならず、空也上人(?)白隱和尚の作を含

な和讃は、最も文學的意義の多い、宗教詩と云ふべきもので、それが我國の詩人から全く無視されてゐる事も、寂しい事である。

日蓮遺文集は、日本文學の一大偉觀でなければならぬ。實に力のある、雄渾な文章である。日蓮上人の飽くまで破邪顯正的な一大獅子吼には、いささかかの御會式の御題目の太鼓の音を想はせるものもないではなく、何處かすなほについて行けないところもあるが、文學としてはすばらしいものである。上人の御消息に曰く、「新麥一斗、たかむな三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と回向いたし候。」と。日蓮上人がいかに名文家であるかは、この斷翰によつても理解されよう。

西行の著と云はれる『選集抄』は、實は西行のでないといふ説もあるが、無住國師の『沙石集』とともに、鎌倉時代の宗教文學の双璧をなすものである。『沙石集』はあまり知られないが、もとより『徒然草』ほど自由ではないが、なかなか文學的である。無住國師にはなほ『雜談集』『聖財集』『妻鏡』等の著がある。この人は東福寺の聖一國師についた人で、禪家の人である。

×

私には、それはいろいろの理由から來てゐようが、その最も傾倒し得るのは、親鸞でもなく、日蓮でもなく、禪家の祖師方である。その中、最も文學的天分のゆたかであつたのは、永平寺の開山の道元和尚と、天龍寺の開山の夢窓國師とであらう。永平の『正法眼藏』は、その境界の立派さは私などには分らないにしても、單に文學として見ても、禪林の大文學と云はねばならぬ。今、その『四攝法』中から、かの良寛の座右の銘とせられたといふ愛語の條りを抄出して、道元和尚の文章のスタイルを示して見よう。

「愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。……愛語をこのむよりは、やう

やく愛語を増長するなり。しかあれば、ひごろ知られず見えざる愛語も現前するなり。現在の身命の存せらんあひだ、好んで愛語すべし。世々生々にも不退轉ならん。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。むかひて愛語をきくは、面を喜ばしめ、心をたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ魂に銘ず。知るべし、愛語は愛心より起る。愛心は慈心を種子とせり。」

我が友貫風居士は、道元の文章を當時のハイカラ文章だと云つた。彼は濟下の人だが、道元の高德を慕ひ、その『正法眼藏隨聞記』を是非讀めと云つて私に贈つてくれた。この書は後に『光明藏三昧』の著ある道元の弟子懷弉禪師が、師の說示を錄されたもので、實に高い智慧に充ちてゐて、永平初祖の高德が溢れてゐるが、同時に永平の師であつた建仁寺の開山千光國師榮西の高德がうかがはれるのもたふとい。私はこの書のために、いつも友に感謝してゐるのである。僞作も竄入されてゐるかも知れぬとは云ふが、道元の『傘松道詠』の歌も私の愛誦するところである。「水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道は忘れざりけり」「山深み峯にも尾にも聲たてゝ今日もくれぬとひぐらしのなく」

良寬和尙を論ずる人は、決してその祖師道元和尙の文學を閑却してはならないであらう。

五山文學は室町文學の一大光焔である。それは專ら漢詩、漢文であつて、我が德川期の宋學の根元をなすものであるが、時には、一休の『狂雲集』のやうな狂詩をも出し、正徹のやうな歌人も出し、雄長老のやうな狂歌の名人をも出してゐる。五山文學は來朝僧寧一山あたりから興つたものと見るべきであらうが、その大立物である義堂、絕海の二國師は、ともに夢窓國師の嗣であるところから見ても、夢窓國師をその根元と看做すことも大して誤りではなからう。この祖師が足利直義に示されたといふ『夢中問答集』は私の愛讀の書である。今そのスタイルを示すため、山水詩歌について說かれた條りを引く。

「古より今に至るまで山水とて山をつき、石をたて、樹を植ゑ、水を流して嗜愛する人多し。其風情を同じといへ共、

其意趣は各ことなり、或は我が心にはさしも面白しとは思はねども、ただ家のかざりにして、よその人にいしげなる住居かなと云はれんために構ふる人もあり、或はよろづの事に貪著の意ある故に、世間の珍寶をあつめて嗜愛する中に、山水をもまた愛して、奇石珍木をえらび・求めてあつめ置ける人もあり、かやうの人は山水のやさしき事をば愛せず、只是れ俗塵を愛する人なり……。」

「詩歌管絃、其しなことなれども、人の心の邪惡なるを調へて、清雅ならしめんためなり、しかれども今時のやうを見れば、これを能藝として我執を起さるゝ故に、清雅の道はすたれて邪惡の緣とのみなれり」

夢窓國師にはその外、宗門上の語錄なる『夢窓錄』『西山夜話』『夢窓法語』『谷響集』などあり、詩には『夢窓明極唱和編』、別に歌集もある。その歌、「かくせただ道をば柴の落葉にてわがすむ宿と人に知らすな」「吹くたびにはやめづらしき心地して聞きふるされぬ軒の松風」

×

義堂、絕海の詩文は、支那人をも驚かしたといふほど日本人ばなれのした、立派なものであるといふ。義堂の『空華集』は未だ見ず、絕海の『蕉堅稿』を得て讀む。山家の一首に曰く、「年來屋を縛んで山中に住む。路は白雲深き處より通ず。用ゐず世人の世事を傳ふることを。閒懷只だ松風を聽くに慣れたり。」

友の說では、永源寺開山の寂室が、その境界はもとより、詩に於ても五山第一の人ではないかといふ。また、寂室のあとをおそうた一絲文守、佛頂國師をおなじやうに云はれた人もある。語錄は共に知らぬが、一絲和尙の法語『大梅山夜話』また立派な文學である。一體、この『夢中問答』や、『大梅山夜話』の如きは、假名法語と云つて、誰にも讀みやすいやうに書かれたものであるから、『禪門法語集』三卷は人の備へておくべきものと思ふ。有名な白隱和尙の如きは、この方面に最も盡された。『大道ちよぼくれ』『おたふく女郎粉引歌』などいふものさへある。然しさういふもの

では、正眼國師、播磨の盤珪和尚の『芳野歌』を最もおもしろいと思ふ。「生れ来りし古とへば、何も思はぬこの心」「人に敵はもとないものぢや、是非を爭ふ我がなる」「惡ときらふを善じやと思ふ、きらふ心が惡じやもの」「年はよるとも心はよらず、いつも變らぬこの心」

澤庵和尚の『玲瓏隨筆』又の名『東海夜話』といふものは、またすばらしい隨筆である。法語とすれば、最も文學的な法語である。曹洞宗第一の文章家と云はれる指月禪師の『身を知る夢』などは、一休の『骸骨』などと共に、長明を唖涎せしむべき文章であらう。假名法語はまだ多いが、今はすべて略して、ただ一つ、丈艸禪師の法語『寢轉草』について云はう。かう云つただけでは氣の付かぬ人もあらうが、これは芭蕉の弟子の丈艸その人である。蕉門の十哲、人みなそれぞれ好きな人があらう。私は丈艸を最も好む。師の病床に侍して、

「うづくまる藥の下の寒さかな」の句あり。去來曰く、「さまざまの吟ども多く侍りけれど、唯だ此句のみ丈艸出來たりと(師)のたまふ。斯かる時は斯かる情こそ動き侍らめ、興を發し景を探るに豈いとまあらんやと此時にて思ひ知り侍る」と。蕉門文章家多し、しかもこの『寢轉草』にまさるもの、未だ一篇もない。私は其角、嵐雪などよりも、丈艸をその門に得た事に、芭蕉の人格の偉大さを思はずにはゐられない。

明治年間にも、高僧は尠くはない。しかも、增上寺の行誡上人の如き、第一に指折らるべき高德である。何故かその歌は未だ歌壇では一向に注意する人もないけれど、『於知葉集』二卷は、今後明治文學史を書く人には、是非落さぬやうにして頂きたい。常不輕品の心をうたはれた「我袖の玉とひろひてつゝまばや打ちつけられし石も瓦も」はとかく憤りやすい心の私には、日々の戒めである。「老僧に綿子遣はすとて、よこはまの濱のはま風寒ければこの綿子きて埋火によれ」羅漢托鉢の畫に「春霞けさうららとたちいでぬ初音はどこせかどのうぐひす」

先年物故せられた釋宗演禪師にも、『楞伽窟歌集』一卷がある。偶然これを得て讀む。「其奥のなほそのおくにひそめ

るは果しなき世のおのが委か」何等の新調であらう。「病みてあれば日の暮おそき山寺に碧巖を讀む雨いまだやまず」「わが庵は膝を入るるにあまりありいざ宿かさむ峰のしら雲」「生もゆめ死も夢ゆめもやがてゆめたゞ一枝の花をながめて」これは南泉一株の花の商量のこころを歌はれたものであらうか。因に、この一卷は佐々木信綱博士が選ばれたものである。

以上は決して我國の宗教文學の一切を盡したものではなく、眞に九牛の一毛にすぎない。私は人々があまりに宗教文學を無視する事久しきに、その方面の無識にも拘らず、敢へてこの雜談を試みた。宗門上の事は敢て問はぬとしても、とにかく文學としてこの方面に注意を向けるのは、さしてわるい事ではないと思つてゐる。

大正十五年十二月（「文章俱樂部」四月號所載）

附記。この一夕話は、啓蒙的なものとして草した眞の一夕話にすぎないから、そのつもりで讀んで頂きたい。なほ「古驛鈴」の文中「宣長のことども」の中で、宣長翁遺愛の古鈴について記載した部分には、甚しい誤解があつて、伊勢松阪町早川滿三郎氏から懇ろな御示教にあづかつたので、右の一文を本集に採錄するについて、多少訂正を施しておいたけれど、なほ不安心なるまま、左に早川氏の言葉を掲げて、讀者の了解に便ならしめたい。

「古鈴は目下八種？　（貴下の所謂平たい瓶子形のは恐らく人面鈴？　八種中最も珍重なるもの）現存し、三十六鈴とは自ら別種のものなのです。右の圖（六箇づゝ六綴、計三十六鈴）に示したるが如く、六箇の一つ一つは子供の弄ぶ小さき金屬製の鈴を一團としたるもの都合六房として柱掛けにせられたものです。」云々。

文學批評の諸問題

反文壇的言說としての多少の本質的探究

ジャアナリズム治下の文學批評

――文壇解放運動としての新批評の提唱――

批評家逹は、各自勝手な道をゆく。僕も僕流に行かう。パピイニはかう云つた。

パピイニはパピイニ流に行く。僕は僕流に行かう。各の批評家はかく云はねばならぬ。して、この場合の僕流とは、獨立不羈を意味する。權威に盲從せず、時流に迎合せぬ傲岸自尊を意味する。かく解するとき、この語は、批評家にとつての至上命令であらう。

一

近時、文壇の八方から、異口同音に響き來る、この偶然的合唱は何か？

「批評らしい批評が見たい。」

「權威ある批評がほしい。」

「批評界の新人現れよ。」

「新時代の創造的批評出でよ。」

そして、最後に、一つの明確な聲が云ふ——

「内在批評以上のもの……」と。

長い間の文壇の沈滯と無氣力とが、この合唱を喚起したことは正に當然である。弛緩せる文壇を緊縮し、これを更新し、覺醒し、新生面を打開するものは、實に、この批評の一角からのみ期待されるからである。

然し、この際、批評界の振興を庶幾するに當つて、まづ、我々の考慮を要求する根本問題は何であるか？批評の意義の闡明であらうか？新批評の提唱であらうか？いづれも重要である。けれども、より實際的見地に立つて、現下の批評界を觀察するものにとつての先決問題は、なほ別所に存すると思ふ。即ち、一般に日本人の批評的能力に對する考察、及びジャアナリズムと批評との相互的關係の究明、これである。何となれば、我等の批評的活動の意義を決定するものは、その批評的能力に外ならぬからであり、また、その批評的活動の社會的影響を規定し、實際的威力を以て、批評の興衰を、批評家自身の存亡をすらも左右するものは、現代のジャアナリズムだからである。

我々日本人は、果して批評的能力を有するや？これはいささか冒瀆であるよりも、より多く愚劣な疑問であらうかも知れぬ。然し、我々は歐羅巴人に比して、さまでひけめを感じないでもすむ程度の批評的能力を惠まれてゐるだらうか？これは少くとも、自分にとつては、一つの問題となり得る。

元來、我々日本人ほど形式に囚はれ、事物の外觀をその實質と誤認し、事毎に單純なる一律に甘心する人種を、他に自分は知らない。而して、これがその無定見な雷同性となり、流行への絕對的歸依となる。物質文化に於いて、その固有の氣候風土を無視したる歐米の風俗習慣（衣食住）の直譯的模倣として現れたこの無定見、この無批判的盲從が、精神文化の各方面に亙つて、いかに多くの混亂と撞着とを惹起しつつあるか？

嘗つて、自然主義の輸入せらるるや、忽ち一世を風靡して、自然主義ならざるものは文學に非ずとまでの、極端なる一律主義が行はれた。但、これは一種の精神的割禮であつて、時代が是非ともこれを通過しなければならなかつたのであるといふ見解によつて辯護せられる。

だが、かの隨筆文學の流行は奈何。ひとたび隨筆文學の持て囃さるるや、あらゆるものは、塵も埃も隨筆と銘打たれ、猫も杓子も靑二才も隨筆を書いた。隨筆は本來淸閑の産物である。尠くとも淸閑的精神、換言すれば、超絶的精神より生れる。內面的に、狹少なる個人的利害、かの蟲々的私感情を超越するゝ共に、その本來の性質上、あらゆる外部的の拘束からも自由でなければならぬ。（二月下旬萬朝報所載拙論「隨筆文學小見」參照）この意味で、それは現代のジャアナリズムの精神と全く相反するものである。しかも、それは一つの流行として、ジャアナリズムの一つの好餌となつたのである。

また最近、古典復興の聲の高まるや、古典は古典なるがゆゑに絶對視せられ、無選擇に、無批判的に、德川期の低級なる戲作類までも、續々公刊せられつつある。それは文化史的に觀て、必ずしも無意味ではないとしても、近時の古典尊重が著しく骨董趣味に傾いて來た事は、蔽ひ難い事實である。古典は何故に尊きか、それが我が民族の高邁なる精神の發露だからである。墮落頽廢せる時代の、狹隘なる樂屋落的興味中心の文學の珍奇を得たりとして、味噌も糞もごつたくた的に古書を珍重して、その通を誇らんとする好事家的骨董趣味ほど、批評的精神に遠いものがあらうか？　德川期に於いて、隨筆文學を考證穿鑿、及び、單なる衒學誇示に墮落（と云ふべからずんば變質）せしめたものもこの好事家的氣分であるが、近時喧傳せられる文壇好學の風なるものが、かかる好事家的骨董趣味、頽廢的ディレッタンティズムの謂でなければ、甚だ幸ひである。好學の學は、人格的熱意による根本教養であつてこそ意味があるので、珍知識の誇示のための古書漁りは未だ學と云ふべきではあるまい。

以上はほんの一例に過ぎない。が、なほ、批評的精神に缺けるところ多き我が國民性の弱點を暴露するものと看做すべきではあるまいか。これを更に溯つて、我等の祖先がいかなる批評的能力を示してゐるかを、文學史的に、例へば、空海の文鏡祕府論よりはじめて、貫之の古今和歌集序、降つて眞淵、宣長等の尨大な著作にあたつて見るもよからう。が、我々にはその必要はないと思はれる。なぜならば、その結果は、かの排斥すべき好事家的衒學の上には出ないであらうし、國民性は必ずしも個人的天分を規定するものではないからである。そして我等の當來への期待は、寧ろこの一點に懸つてゐると云つていい。で、この問題に對しては、簡單な結論を玆に持出すだけで十分であらう。卽ち、若し我々が批評的精神、並びに能力を缺くとすれば、我々はそれを得なければならない、——これである。

また、事實に於いて、我々が善き批評を求め、批評の興起を翹望しつつあるは、その獲得への努力の第一歩なのではないか? 我々は天成の良批評家の出現を熱望するとは云へ、空しく鶴首すべきでなく、また、我々自身の批評的教育のために、適宜の實際的方法を考慮するを要するであらう。乞ふ隗よりはじめよである。かくて後、はじめて一般に、批評的精神を鼓吹し、普及せしめる事が出來ようと思ふ。

ところで、この一般的批判力の缺乏といふ事は、直ちに、我々の當面の問題たる對ジャアナリズムの問題を提起し來る。ジャアナリズムの壓倒的潮流に對して、我等が一條の藁くづに過ぎない事の、流行と暗示性とに對して、我等が極めて僅少の抵抗力しか有さない事の、最後の理由を證明するものは、云ふまでもなくこの我等の重大なる缺陷ではないか。

二

文學批評が、在來の如き印象批評、內在批評に止まるべきでなく、文學的作品ならびに作家を、社會的背景の中に

置いて、その社會的意義を批判すべき外在批評、若くは社會學的批評の喚起を急務とするといふ說が、片上伸氏の提唱以來、今一般に流布しつつある。それは時宜を得た主張であり、我々にとつても、十分に望ましい事である。

然し、これを實際問題として考へるとき、それはかなりの困難を豫想させる。

我々は內在批評以上のものを望むべく、未だ內在批評の意義あるものをすら、遺憾ながら、確實には所有しないのである。總じて獨立の價値を有する文學批評——卽ち單なる評判以上に出でたるもの、それ自身一つの藝術として讀まるべき創造的批評——を、抑もどれ程所有してゐるか？　印象批評、內在批評にして既にかくの如しとすれば、それ以上に多くの困難を豫期される外在批評、社會學的批評を、抑も何人に期待すべきか？

片上伸氏なりや、千葉龜雄氏なりや、或ひは青野季吉氏なりや、平林初之輔氏なりや、はたまた小宮山明敏氏なりや、伊藤永之介氏なりや。蓋し、諸氏には十分その力量あるに相違ない。遠慮なく、その內在批評以上のものを以て、我等の前に範を垂れてほしいのである。現在批評家として立つてゐない人々が、中村星湖氏の言の如く（文藝行動二月號）「かやうな不滿や希望を抱くだけで、みづから批評家の位置に立つ勇氣を缺く」事は或ひは止むを得ないであらうが、既に公定の批評家として立つてゐる人々には、單に不滿や希望を述べ、これが提言をするのみならず、自らその實例を示すべき義務があらう。然し、諸氏は追々それを示してくれるに違ひないと、自分は樂みにしてゐるのである。

然し、現下の評家の此種の提言は、既にそれだけで十分の意義を有するのであるとも、自分には考へられる。何となればそれは現文壇に對する力强い彈劾に外ならぬからである。そして、この彈劾は、既にそれ自身、痛烈なる一個の批評であり得るからである。近時の新批評提唱こそ、自分には、反文壇的批評の提唱に外ならぬと解せられる。そして、かやうに解するとき、自分はそれに熱烈に贊意を表せずにはゐられない一人である。

反文壇的と自分は云つた――茲に要點がある。社會學的批評の提唱は、必然的に、文學批評を所謂文壇人の手より解放せんとする運動ではあるまいか。何となれば、この種の批評は、從來の文壇人によつては、殆んど不可能の如く考へられる理由が存するからである。然らば、文壇人の手をはなれていかなる人にこれを求むべきか……思ふに、これをかのマルクス學に精通し、近代の資本主義社會の全景に通曉せる、博學多識なる社會學者、經濟學者の間から求めた方が、最捷徑であらう。これは餘りに逆説的であり、意地の惡い皮肉のやうにも聞えようが、正直のところ、或る評家の過般の言説を讀んだとき、自分は、その人がその結論を茲に導かうと企てたのでないにも拘はらず、かの主張を實現せしむる途としては、これ以上良好なものはないと云ふ印象を受けたのである。

然し、自分は決して、學者の間から、文學批評を求めたいとは思はない。文學的作品は、いかにそれを社會現象として取扱ふとしても、統計や調査書等の如き、社會學的理論の組成上の材料と同一に心得べきものではないからである。それはその發生したる地面、卽ち、その社會的事情に關するとともに、一面、また個人性に關し、個人の藝術的表現力に關するからである。

學としての文學批評とは何ぞ。幸にしてか不幸にしてか、我國には、未だこの種の批評は存在しない。が、外國には、甚だその例が多い。例へば、特に近年勢力を得來つたかのモオルトンの文學形態學の如きは、正しくその代表的なものであらう。そして、この種の文學の科學的研究には、もとよりその意義ある事は言ふまでもない。が、我々はそこに、常に一種の不滿と冷索感とを禁じ得ないのは何故であらうか？

「大學敎授達は、文學を論ずる時には、何と滑稽なものだらう」とフロオベルは云つた。自分は決して滑稽とは思ひ得ないものであるが、その代り、哲學者が好んで美學上の問題を取扱はうとするのは文學に對するその羨望に基づく

といふ、確かショオペンハウエルのと覺える言を想起せずにはゐられないのである。そして、文學批評が、文學不能者のエロトマニアの意味を有つ仕事にすぎないならば、聊か興味の索然たるものがある。

文學批評は單一なる學問ではなく、むしろより多く藝術でなければならぬ。即ち、批評家は學者ではなく、藝術家でなければならぬ。この自分がモオルトンよりもサント・ブウヴを愛好し、セインツベリよりもボオル・ブルジエを尊重する所以である。ここにかの堀木克三氏等の如き種類の批評家が、靑野季吉氏、平林初之輔氏等の如き種類の批評家に對して、對抗しうべき唯一の地盤が存しはしないかと考へる。然し、堀木氏の、文學が分る分らぬの論の如きは、「おめえさん方には和田平の鰻の味はわかるめえ」と云つた江戸ッ子の主張以上の根據を感得せしめないから、敵を壓服するに、いささか不十分であると思ふ。それには敢て、藝術的批評の存在理由を主張し、且つ自らその範を示すより、より有効の途はあるまいと信ずる。

然し、批評はそれ自ら一つの藝術的創造でなければならぬとしても、それは創作が藝術品であるが如き意味で、藝術品であるとは云はれまい。サント・ブウヴの如き頗る創作的境地へ接近した批評家の批評といへども、彼の創作である『ジョセフ・デロルム』や『享樂』の如きと同樣の意味で藝術であるとは、自分と雖も斷言し得ない。ここに批評の特定の地盤がある。即ち、批評は藝術と學との兩面に亙るものと見るのを至當としよう。

蓋し、批評の文學に於ける意味は、人生に於ける哲學のそれに相應す。從來乾燥無味の談理と信ぜられてゐた哲學中にも、ショオペンハウエルやニイチエの如き熱想と詩との藝術的哲學があり、近くはトマス・マンが「知的小說の新しきタイプ」と呼んだシュペングレルやカイゼルリンクのそれもある。哲學は藝術に近づき、藝術は哲學に近づく。ここに新文化の創造的開展がある。學問と藝術とを兩極に位するものの如く解するのは、一つの先入見であつて、當來の文化に於いては、この二つは相互に融合すべきものではあるまいか。これは甚だ大膽な提言かも知れないが、創作

と批評との關係に於いて、特にその然るを思はざるを得ない。創作もまた一面批評的精神の生むべきものであり、批評も一面藝術的表現と感受性とに依據すべきものである事は、自分の確信である。

然しながら、かの新批評提唱者の意が、かかる批評の本質論の上にあるのでない事は、もとより云ふ迄もない。それは一に無產階級文學の意義に關聯してゐる。それらの言說者が概ね無產階級的批評家である事によつても知られる如く、その提言の眞意は、根本に於いて、社會的、階級的觀念の誘起にある。換言すれば、山內房吉氏の適確に指示した如く、「無產階級イデオロギイの確立」にあるに外ならぬ。しかも、それは必然的に、反文壇運動であり、從つて、反ジャアナリズム文學運動であると解すべき理由があるのだ。

三

最近、秋田雨雀氏は、有島武郎記念講演會に於いて、現在の文壇の狀態を概括して、ジャアナリズムの文學と、プロレタリア文學と、精神主義の文學との對立であると云つた。これは講演の筆記(『泉』第六號所載)で見たのであるから、氏の所言そのままであるかどうかは分らないが、若し誤りなしとすれば、氏のこの區分は、最も我が意を得たものであつた。從來、この間の區分は頗る曖昧で、プロレタリア文學以外のものは、凡て粗雜且つ不用意に、ブルジョア文學の名で呼ばれたものであるが、その誤謬が、秋田氏によつて訂正されたのを自分は多としたい。

文壇はジャアナリズム文學と、反ジャアナリズム文學とのの對立である。反ジャアナリズム文學にあつては、再び、プロレタリア文學と、精神主義の文學との對立である。かく解する時、刻下の文壇の形勢と分野とは、極めて明確に指示せられるではないか。

從來、自分の如きも、その立場は專ら精神主義のそれにあつた。この精神主義といふのは、それ自身としては極め

て漠然たる稱呼であるが、所謂文壇外の文學を一瞥するならば、その內容を幾分明瞭にする事が出來ようと思ふ。然して、それらの文學者が、文壇意識をその生活の根軸たらしめぬに反して、文壇人とは、その精神に於いて、專らジャアナリズムのそれに附隨して行動する人々に外ならぬ。卽ち、文壇意識によつて判斷する底の人々である。その考へ方も、生き方も、その欲望も要求も、一言にして、その存在全部が、「文壇的、餘りに文壇的」である事、これ文壇人の長所であらうかも知れないが、また明らかに、その致命的の缺陷であらう。

然して、かのプロレタリア文學運動は、一面、これに對する反抗運動ではなかつたか？しかも彼等の運動の挫折したのは、震災後の一般的反動のあふりを食つたためであると云はれるが、事實はより多く、彼等自身が「文壇的、餘りに文壇的」であつた事の、當然のむくいではなかつたであらうか？少くとも、當時自分にはさう見えたのである。

先年、プロレタリア文學運動のはじめて起つたとき、自分は率先して、これに對して若干の苦言を呈した一人であるが、それは主として當時の主張者等の本末顚倒の態度にあきたらなかつたがためである。卽ち、彼等は宛かも普通の文學運動の如く、ブルジョア文學を仆せと叫び、既成作家を目標として、これに取つて代らん事を念願としたかに見えたからである。

然し、プロレタリア文學運動は、文壇的文學運動であつてはならぬ、現下資本主義治下にあつて榮えつつあるジャアナリズムの文學と同一の地盤に形成さるべきものでなく、むしろ反文壇的文學運動として、全然別個の新地盤に立つて、はじめてその本來の使命に庶幾かるべきものと思ふ。最近、同派の人々の顏振れも變化し、その見解も一層徹底して來た事は、無產階級文學運動の重點が、無產階級イデオロギイの確立にあるといふ事が明確に說かれ出した事によつても知られるが、それと同時に自分の階級文學運動に對する理解と共感とも著しく增大した。現在の自分の立場は、

他日機を見て明瞭にしたい。

プロレタリア文學運動は、いろいろの理論的根據はあるであらうが、自分にとつては、まづ、素人文學の提唱として意義を有する。卽ち、專門家の手よりの文學解放運動として興味を有つ。(固よりそれは從來のプチ・ブルジョア社會のアマチュアやディレッタントのそれでないのは云ふ迄もない)何となればプロレタリアは常に專門的文學者ではない筈だからである。少くとも、「文壇的な、餘りに文壇的な」人々ではない筈だからである。

緣日商人とか、演歌者とかの仲間では、一定の繩張りがあつて、他から猥りにその中に割り込んで行く事は出來ない。それにはまづ、一定の順序を踏む必要がある。卽ち、わたりをつけなければならぬ。しかも、これはひとり彼等の仲間に於てのみならず、現代の社會組織の中にあつては、その既得の權利を擁護すべき必要上、到る處で一般的の事實である。そして、文壇にあつても、それは同樣である。否、より以上の明確なる自覺を以て嚴守せられつつあるのだ。思へ、文壇といふ名目そのものが、既に十分に、この特權階級意識を表明してゐることを。

抑も、文壇とは何物ぞ。我々は絕えずこの言葉を口にする。しかも、これ位ゐ、その槪念の漠然たる言葉もめづらしい。何とかこれに確然たる定義を與へたものはないであらうか？　そこで、試みに中村武羅夫氏の『文壇隨筆』を取出してみる。すると果して、その中の「文壇鏖撲殺論」中に、中村氏はこの槪念を分析してゐる。

「文壇とは一體どんなものかと問はれても、やつぱり返事に困る。こゝにあるこんなものだと、指先に摘み上げて見せることも出來ないし、勿論、三越に行つてもないし、銀座通りの店々のショウヰンドウを覗いて見ても並べてはないし、新潮社に行つたつて發賣しては居ない。」と氏は云つてゐる。そして、「文學者の集つたものが直ちに文壇ではない」と云つて、文學者であつて、同時に文壇の人である人々と、文學者でありながら、文壇の人でない人々との名を列擧して文壇人でない文學者の作品はそれがどんなに傑出して居る場合でも、決して批評の對象にはならない。批評

の對象とすることを、却つて恥とするかの如き傾向すら見えてゐる」ことを憤慨した後で、その不合理を、文壇獸とよぶ中樞神經のない、末梢神經ばかりの一つの神祕的惡獸として想像されるものの上に歸してゐる。

前後二十年間、文壇の空氣に浸り、文壇生活の表裏に通曉してゐる中村氏の言は、その方面に於いては、典據とするに足りるであらう。然して、我々は氏の言によつて、文壇といふものが、文學者以外の人々に普通解せられてゐるよりも、遙かに狹小なものである事、宛かもプロレタリア階級に對するブルジョア階級の如き一種の特權階級の名である事が理解せられた。(ここに當時のプロ派の文學者が、當時の文壇文學を、ブルジョア文學と呼んだ事の一つの理由が存してゐたかも知れない。)

實際、文壇の語義には、廣狹二樣の義がある。そして、我々は通常、その場合に應じて、この二義を絶えず混同して用ゐてゐる。文壇といふ言葉の混亂は、そこから發生するのである。そしてこの狹義の文壇——卽ち、文學者中の或る特定の人々によつてのみ占有されてゐる——とは、秋田氏が適確に定義し得た如く、畢竟、ジャアナリズムの文學といふのに外ならぬと思ふ。何となれば、現文壇を支持する地盤は、現下のコンマアシャリズムを代表する新聞雜誌のそれであつて、文壇人の特權階級意識は、ただこの一點に基くのに過ぎないからだ。

加藤一夫氏は「文壇の政黨化」と題して、(原始四月號)「我々は今、はつきりと文藝と文壇とを區別する必要を感ずる。今や藝術はその價値によつて判斷されず、ただジャアナリズムによつて一切が決定される。而してジャアナリズムの決定權は、やがて文壇を一つの政治的鬪爭の壇場と化せしめた。」と云つてゐる。また、相馬泰三氏も、その「廣津君に」(文藝春秋四月號)なる一文中にこの點に觸れて、「文壇的な」「文壇的な餘りに文壇的な」ジャアナリズムと、眞の文學との區分を說いてゐたと思ふ。文學と文壇とを區分しなければならぬ事は、本來不合理にして奇異なる事であるが、かかる不合理を釀し出すものは、かの狹隘なる文壇意識である。その文壇意識を貫くものは、ジャアナリズムの精神そのも

のである。故にこの二者はシノニムと看做していいのだ。
中村武羅夫氏の所謂「文壇獸」とは、畢竟このジャアナリズムの精神、この「文壇的、餘りに文壇的」な空氣そのもののの謂ではなかつたらうか？ ジャアナリズムそのものではなくして、ジャアナリズムに適合する特定の文學者の附屬意識、並びに、ジャアナリズムに支配される無批判的精神そのものの謂ではなかつたらうか？

批評的精神の喚起は、必然的に、文壇意識、並びにジャアナリズム精神からの、文學者並びに一般民衆の解放を齎らさねばならぬ。そして、かの新批評の提唱は、それを無產派の立脚地から企圖せんとするものである。我々の立脚地は、幾分それと異るとは云へ、文壇といふ狹少な埒を撤廢する事、文壇人の特權意識を打破する事、その點に於いては、我々も全く、無產階級文學者と一致するものである。

四

現代の精神文化の實際的活動の河口の過半數を支配するものは、ジャアナリズムである。ジャアアナリズムは、資本主義の時代に於ける精神文化の株式取引所として、殆んど絶對的の勢力を有してゐる。殊に、アメリカニズムの浸潤するに從つて、より一層の威力を加へつつある。而して、ひとへにその上に立脚する文壇人が、無條件にこれに歸趨しつつある事は、無理からぬ事である。ひとり彼等のみならず、我々文壇人以外の文學者といへども、文筆によつて衣食しつつある以上は、ジャアナリズムそのものに對して、徹底的否定と拒否とを口外する事は、幾分無反省の譏りを免かれ得ないであらう。然し、我々が「文壇的、餘りに文壇的」な文壇人の生活法と思考法とから、かけ離れてゐればゐるだけ、それだけジャアナリズムの繫縛から脫出してゐる事は、確かに事實である。そして、この事實の公認を、例へば自分が、曾つてその貧乏のゆゑを以て自分を嘲笑した一派の文壇人の侮辱の代償として、今日に獲得してゐる如

く、反文壇的の人々は、凡て何等かの方法に於いて、何等かの苦き經驗によつて、これを獲得してゐるに違ひないのだ。

もとより今の自分は、その昔日に抱いてゐたやうなジャアナリズムそのものに對する偏狹なる潔癖をよしとするものではない。宛かもかの無產階級運動が、現下の資本主義社會の中にあつてなされなければならぬ如く、我々はジャアナリズム治下にあつて、ジャアナリズム精神よりの解放運動に從はなければならぬ。然し、その際我々の問題は外部になくして內部にある。即ち、我々自身の精神的自主にある。要は我々自身が、ジャアナリズムの精神に支配されない事である、文壇人の文壇意識に心を掠奪されない事である。

我々の新批評の提唱は、まづこの點についての明確なる自覺の上に出發すべきものであらう。人の認める如く、現下の批評界は、あまりにもジャアナリズムの隷屬下に歸して、偏狹なる文壇意識に傾きすぎてゐる。從來、自分が文壇的批評に對して、あきたらなく思つたのは、必ずしもそれがかの「評判々々」的呼號以上に出ないばかりでなく、それが中村武羅夫氏の言の如く、文壇人以外の作品を默殺せんとする明瞭なる意志に附隨されてゐたからである。もとよりジャアナリズム治下にあつて、反ジャアナリズム文學が好遇されるわけはないのであるが、若し批評家さへその差別の上に超然としてゐるならば、幾分その方にも注意を傾けてもいい筈であつた。また、それだけの自由は許されてゐるのである。然し、事のそこに出なかつたのは、批評家自身がジャアナリズム追隨者であり、文壇意識の所有者であつたからである。

然し、罪はひとり批評家にのみあるのではない。それはジャアナリズムの精神の一般的彌漫の上にある。して、この事たるや、現在、文學批評を以て目せられるものが、殆んど新聞雜誌に現はれる月評その他に限られてゐるかの觀がある事によつても、推知せられるのである。

抑も、この月評とは何ぞや。それは全然ジャアナリズムの使命に隷屬したる批評の一樣式である。その第一の存在理

由は、その提灯持的、若くは評判的意義にかかつてゐる。且つ、それはあらゆる意味に於いて、特にその批評の對象に於て、拘束されたる批評の樣式である。そして、特にその性質上、その判斷、その評價その物に於いて、しばしば實際的の文壇的事情に左右されるのである。但、この最後の缺陷に至つては、何も月評のみに限つた事ではなく、總じて、文學批評に伴ふ一つの危險であり、困難である。なほ此外にも、批評上には實際問題としての多くの困難と障碍との伴ふ事を、自分は熟知してゐる。が、それらについては、曾つて『文學批評難』と題して（昨年十月の萬朝報所載）書いたので、茲には改めて繰返さないでおく。

無產階級評論家によつてなされた新批評の提唱も、自分にとつては、專門家よりの批評の解放であるやうにも考へられた事は前に云つた。が、それはまた、より明確なる意識に於けるジァアナリズムの精神よりの解放でなければならぬ。が、この點に力點を置いて論じてゐる人は、遺憾ながらまだ見當らない。外在批評、社會的批評の提言者である片山伸氏が「長篇小說とその批評」（文藝行動四月號）と題して、「雜誌に出る短篇作品は初めから純文學的なものと定まつてをるかのやうに、安心してこれを批評の對象としてゐるやうな形がある。」といつて、そこに「多少の迷信的心理」を指摘し、長篇小說批評に言及した文中には、幾分その點に觸れてゐるものはないであらうかと思つた位のものである。

或ひはかの人々の提唱を、直ちに反文壇運動と見なす事は、自分の獨斷であるのかも知れない。が自分の新批評要望は、ひとへにこの文壇意識撤廢の要求に基づく。ただその際、批評界の不振を叫ぶに當つて、我々はまた別箇の反省を要とする。卽ち、我々自身が知らず識らずジァアナリジムの精神に囚はれてゐるため、文壇批評家が文壇外の作品を無視しつつある如く、ジァアナリズムの範圍外に現れたる一切の批評的述作を全然無視しつつありはしないかといふ事である。我々文壇人ならぬものも、なほその廣義の文壇に囚はれすぎて、無意識の過誤を犯しつつありはしないか

といふ事である。

現に、古典批評の範圍に於いては、（古典批評の如きは、全然問題にされてゐないが、これなども、また「文壇的・餘りに文壇的」な傾向の發露ではあるまいか？）自分の如き寡聞のものといへども、なほ島木赤彥氏の『萬葉集の鑑賞及び其批評』や齋藤淸衞氏の『國文學の序說』等の如き注意すべきものが現れた事を知つてゐる。その外まだ自分の讀書豫定に入つてゐるものは尠くない。そして現代文學の範圍に於いても、このジァアナリズム外の批評的述作は、必ずしも絕無とは斷じ難いであらう。

我々はかの所謂文士氣質なるものを、敢然として振棄てたければならぬ。藝術家的特權意識を全く脫却しなければならぬ。藝術至上的英雄主義の壇を下つて、一個の人間、一個の社會人として、その一票に甘んずると共に、その一票の行使に於いては、十分自己を主張すべきである。かくて、批評家としては、ジァアナリズムの精神、卽ち文壇意識（廣義のそれに於てすらも）を脫却して、敢然として「各自勝手な道をゆく」べきである。自分の意圖する新批評の內容樣式は、その後の問題である。

批評とジァアナリズムとの內面的關係、兩者の限界の一線、並びにその爭鬪の樣式等の幾分興味ある實際的指摘は、別に「藝術評價と價値の幻影」の題下に論述して、玆に殘された問題を闡明する。その小論を俟つて、自分の意志ははじめて判然するであらうと思ふ。

大正十五年四月二十一日、天神町の陋居にて（「新潮」六月號所載）

藝術評價と價値の幻影

――ジァアナリズムとクリティシズムとの對立すべき事を論ず――

「我等いかにして邪路を避け、正路に就くべきか」といふ長い標題の教訓的論文を讀んだ事がある。今若しその主旨を、藝術批評の上に適用した論文が現れるなら、とかく偏見や誤謬に陷りやすい批評家にとつて、さだめし有用な事であらう。然し、それを書くといふ事は容易な事ではない。誰がそれを敢てなし得るだらう。また、それをなし得られる人ならば、その勞力を以て、自らその正しい批評の範を示す方が、より有意義であるといふ抗辯を、無視するわけには行かないであらう。然し、その文學的教訓論文こそ、批評についての一切の論議を「學問」として斥ける或種の批評家のためには、かへつて、最も必要な事なのである。

自分の今企てる事は、勿論かかる大それた事ではない。それに元來、此種の考究は自分の天分でもなく、その興味の中心でもないのであるが、前々から文學批評について論じ來つた行懸り上、前論の不備を補ひたいので、先般來藝術評價に於ける一つの重大な要點について少しく考へ來つたそれらの雜想を茲に集積する。この問題について自分の云ひたい事はこれで盡きたわけではないが、この種の言說はこれを以て打切りとして、今後はより興味のある題目、即ち現代作家並びにその作品の批評に移らうと思ふ。我々の時間的の隣人にカメラを向けるのはより樂しい事であるから。だが、そのカメラを間違なく取扱ふには、なほ十分の修業を必要とするであらう。

何人にまれ、ある藝術品に接する時、何等かの好惡の情を動かす。これ既に無意識の評價である。然し、かかる個人的な好き嫌ひの範圍では、未だ批評とは見なし難く、また未だ普遍妥當性をも有しない。しかも、この個人的の趣味や好惡を能ふ限り脫して、客觀的見地に立つて、公正なる評價を期せんとするや、ここに至難の道がはじまるのである。それゆゑに萬人を首肯せしめるの批評なく、個々の藝術家並びに藝術品の運不運も生ずるのである。まことに、世にはその眞價に比して、遙かに價値尠く見えるものがある。これに反して、その眞價以上に重んぜられるものもある。藝術品の眞價と、その一般的評價との間には、必ずしも常に一致は見出し難いのである。後世、やうやくそ

の評價のたまたま是正せられるに及んで、はじめて久しくそれが誤られてゐた事を悟る場合もないではないが、なほかつそれが不幸なる藝術家の受ける最惡の運命でない事も想像しえられるであらう。

然し、世にはまた、藝術品のその當時にあつての一般的評價は、常にその眞價と相一致すると主張する人もない事はなからう。現在世に尊重せられてゐる藝術並びに藝術家は、必ずそれだけの價値があるのだと云ふ、その說は決して誤りではない。自分も或る意味でそれを肯定する。然し、それは眞價と云ふよりも、時價に於てである。或る時代に或る作品が高い評價を見出すと云ふ事は、その時代の文化現象としての必然性を有するものとして、それだけで十分意味のある事であるし、また後世にも、その文學史的にさまで重要ならぬ場合にも、文化史的に若干の意義を有する。然し、その時價を以て、直ちにその絕對價値と看做すわけには行かない。それは謂はば、審査中に屬するものである。探點の結果が決定しない限り、眞價は未知數である。

勿論、我々は懷疑家として、この藝術品の眞價そのものに對しても疑ひをもつてゐる。然し、若しこれを全然否定するならば、既に論議の餘地は存しないであらう。現在世上で取扱つてゐる方法に從つて評價するの外はない。或る作品が喝采せられてゐる時は、それは傑作なのである。その作品が放棄され、忘れられてしまつた時は、それは駄作なのである。賞讃者が多數ある場合は傑作なのである。非難者の方が多ければ駄作なのである。極めて簡單明瞭である。そして事實、或種の批評家は、この方法に極めて滿足してゐる。そして、その天職をあやまらざらんがために、彼は絕えずきよろきよろと周圍の形勢をうかがつてゐるのである。かくて、批評ははじめて評判の高所に到達するを得、完全に文壇的餘興物たるの地位を獲得し得たと云ふべきであらう。

だが、懷疑家は、この微溫的な解決に滿足し得るであらうか？　彼は眞理の不可得を解するとき、一切の認識を斷念して、むしろ習慣に從つて生活せん事を欲する。眞價の不確實を解するとき、むしろ一切の批評の無用を說かんと

欲するであらう。然し、そこから發生するものは、全的否定のニヒリズムである。ニヒリストにとつては、一切は無價値である。そして、世には批評上の虚無主義といふものもある。

そこで、我々はブレエキをかけたい。批評が作品の評價を意味するものであるとすれば、正しい評價を望みたいではないか。出來るだけ正確に、公正であらうではないか。一時的の氣分に眩惑される事なく、時處によつて變じない、正眞正銘、ぎりぎり結着のところの眞價を判然たらしめたいではないか。テエヌのいはゆる「永續的性質」を信じて、皮相なる一時的性質を表白する流行文學又は藝術の一時的價値と、より深刻なる永續的性質を表白せる藝術の不變的價値との長い階段を駈けのぼり駈け下る事を欲したいではないか？　この眞價の問題については、なほ後段に記載するところあるであらう？

現代の如く慌しき過渡の時代にあつては、藝術の永續性、若くは永遠性といふが如き觀念は、極めて迂遠なるものとして、一般の嘲笑を免かれ得ないかも知れない。現に、一種の急進的文化主義者とも呼ぶべき人々は、既に文學の時代は去つて、映畫の時代の來つた事をすらも確言してゐる。これ正に、藝術の永遠性が、單なるフレエズに過ぎず迂遠なる時代後れの囈語に過ぎない事を、嘲笑し、冷罵するものに外ならぬと思ふ。映畫は朝々、花新たなる朝顏の如き藝術である、謂はば、刹那の印象の象徵である。

藝術の永續性を否定すれば、すべてはその時の用を足すのみなる、一時的、流行的性質を帶びたる映畫と等しきものとなるであらう。藝術もまた婦女子の裝身具、或ひは化粧品と一般のものとなるであらう。新聞紙上の日々の報道、ポスタアに記す宣傳の文句とゑらぶなきに至るであらう。かくて、急激なる好尙の變遷につれて、走馬燈の如く廻轉する流行品として、藝術はその時代の一般的好尙をその唯一の價値判斷の標準となすに至るであらう。あらゆる文學は、凡て一種のはやり唄として、そのはやりはじむるや、街頭の小童に至るまで、これを口にせざるなきも、一定の

期間のすぎるや、再び忘れられて、誰一人これを想起するものすらもないものとなるであらう。まことに、綺麗さつぱりとして、氣持のいい事である。

だが、藝術は、少くとも文學は、かかる一時的性質を表現するのみのものでいいであらうか？　はやり唄と同様でいいものであらうか？　はやり唄の如き藝術品が存在するのは妨げない、然し、作家が當初からかの演歌者の如き心得もて藝術に對すべきものであらうか？　また、批評家も、次ぎ次ぎに現れるはやり唄を、次ぎ次ぎに唄つて行く街頭の小童であつていいものであらうか？　一言にして云へば、作家も批評家も流行の奴隷であつていいものであらうか？

流行とは、奇異なる現象である。ただ以て奇異である。それは理性をもつては判斷し得ない現象の一つに屬する。それは最も多く、あはれむべき人間心理の弱點を暴露するものである。なぜなれば、流行を支持するものは、人間の模倣性であり、雷同性である。自恃心の缺乏であり、内部的の空虚である。流行に於ける唯一の價値は、その事物を他人が採用してゐるからといふ客觀的事實にすぎない。若し人間が相誓つて、自己の趣味性を護持し、自己の判斷を斷乎として固守するならば、かかる奇怪な現象は、瞬間的に消滅し去るに違ひない。

殊に、流行現象の最悪な事は、それが資本家の畫策によつて、よく發生せしめ得るところにある。天下の婦女子は、自ら識らずして、黑幕裡の人の操るところとなつて喜んでゐる。そして、この事は文學上の流行にも適用せられる。それはまたよくジャアナリズムの左右し得るものである。ジャアナリズムは流行に追隨するのみならず、またよくこれを生起せしめる。我々は過般の『新潮』の合評會に於いて、二三の人々によつて、文壇の流行兒が、ジャアナリズムによつて作られもし、斥けられもする事實の承認せられてゐるのを見出した。これはもとよりその所である。然し、自分はその事實を慨嘆しようとするものではない。現在の社會組織にあつては、それは必然性を有するものであつて、

ジャアナリズムを全然否定し得ない限りは、許容さるべきものである。ただ自分がその際考へる事は、批評家のみは、かかる制馭から自由でなければならぬといふ一事である。流行に支配されない事が、批評家の第一の義務でなければならぬ。そして、この事は一見甚だ容易なるが如く見えて、實は極めて至難の事に屬するのである。それは人間性の一つの弱點に對する超克であるからである。

人間は幻影によつて動くものである。一切の誤謬の根源はここに存する。世界を支配しつつあるものは、ザインに非ずしてシャインである。實質ではなくして、外觀である。よくいろいろな人によつて引用せられるチェスタアトンのパラドックス、「看板さへよければ酒はいらぬ」は、ここに於いて、痛烈な諷言として通用するであらう。そこで、我我は到るところで、事物の價値ではなく、價値の幻影に左右される事實を見出すであらう。今、自分はそれについて、二三の權威ある人々の言說を玆に引用する事とする。これまた幻影の威力のためである。

まづ、アナトオル・フランスがある。彼の如き懷疑家は、最もよくこの事を道破し得てゐる。彼のピュウトアは、かかる人間の想像力と模倣性とに對する諷刺である。幻影の力がいかに人間を左右してゐるかを描いたものである。彼はこれらの事を一層明瞭に、その『エピクウルの園』の中に表白してゐる。「我々が趣味の問題として、現代の作品中の或るものに對して示す好尙、他のものに對する嫌惡は、果して眞の自由なる、公平なる判斷であらうか？ それは今、問題となつてゐる著作の內容とは無關係なる、種々の事情によつて決定せられはしないであらうか？」と疑つて、彼は人間の模倣心を說き、曾つて、陸軍の試驗問題に提出されたミシュレの名文が、軍人共の貧弱な頭腦の產物と誤認されたがために、一般のお笑ひ草になつて、ミシュレの熱心なる嘆賞者が、就中最も嘲笑した事、また、クウザンがパスカルの文中、寫字生の誤記したものを、それと知らずして、莊嚴として嘆賞した事、等の例證を擧げて、「何人も或る自己欺瞞なしに、藝術的制作を嘆賞する事はない」と斷言してゐる。おなじ意味の言葉は、また、パスカルの

如き人の口よりも聞く事が出來る。「我等は法律家を見るときでさへ、帽子と長袍を着けてゐれば、彼の能力に就いて有利なる意見を抱かずに、その姿を眺める事が出來ない」と云ひ、「若し又醫者が上袍もなくスリッパもなく、博士に角帽と寛すぎる四部の袍がないならば、彼等は世界を欺く事が出來なかつたであらう」と云つてゐる。おなじ意味の言葉は、ショオペンハウエルや、レオパルヂの如き人の口からは、絶えず述べられてゐる。この點については、哲人の說は殆んど例外なく相一致してゐる。否、あへて哲人の言說を俟つを要せぬ。我々はその周圍を見廻しさへすれば、直ちにこの事實に逢着するであらう。否、周圍を見廻す事すらも要せぬ。我々自身の中を疑視するだけで、既に十分である。

とりわけ、現代は迷信の時代である。成田不動尊、柴又の帝釋天、穴守の稲荷等の、賽錢の增加せりや減少せりやは知らず、かかる流行佛や、淫祠は、未だ以て現代の迷信を立證するに足りない。それは寧ろ前代の迷信の遺物にすぎないであらう。現代の迷信は、實に理性の迷信である。合理化の假面によつて、不合理の信仰が一層强められてゐる。現代は淫祠邪敎の代りに、科學の名によつて醫學博士の學位を迷信する。彼等にして醫家の無力と錯誤とを滿載したるウェレサエフの『一醫師の回想錄』などを見たならば、抑も何と云ふであらうか？　だが、チェスタアトン流に云へば、博士にさへかかれば、病氣は癒らなくてもいいのである。著書の右肩にかかる博士、大學敎授等の肩書は、直ちにその書物の內容の卓拔を信ぜしめ、大家の名はその作品に魅力を與へる。これらは迷信と呼んで毫も差支ないであらう。名に實の伴ふ時、迷信は正しい信仰と變化する。信仰と迷信との關係は、卽ち價値と價値の幻影とのそれである。そして、價値の幻影の威力をふるひつつある時、所謂科學の時代は何を以てか誇りとせんとはする？　かくて、この價値の幻影に立脚するものが、卽ち、ジャアナリズムである。而して、現代はまた、ジャアナリズムの時代である。

藝術評價に於いて、いかにこの價値の幻影が暴威をふるひつつあるか、單に作品それ自體のみならず、それに附隨する各種の外部的條件が、一般の價値判斷に甚大の影響を與へつつあるか、いな、或る場合には作品それ自身よりも、その附帶條件の方が、より多くの力を以て最後の價値判斷を決定しつつあるかを、しばらく現前の世界より觀察して、左に少しく指摘して見よう。

書畫の贋造といふ事は、古くから、廣く行はれてゐるものであるが、最近には隨分大仕掛のものが發見されるようである。先頃も現代名家の作品を贋造して捕縛された一味のものがある。また、中には相當知名の畫家が、遊蕩の揚句、金に窮して、現在畫壇の流行見であるその昔日の同輩の畫を贋作しては賣却してゐたのを發見せられて、欺詐取財を以て起訴せられた事實もある。この書畫の贋造の事實ほど、價値の幻影の意義について端的に語るものはあるまい。贋作を買ふ人々は、藝術品を買はずして、名を買ふのである。元來、書畫骨董の趣味なるものが、その概ねは、この幻影の享樂に外ならないと云つていい。何となれば、骨董の貴重なるは、それが稀有に屬するからである。同一のものが他にも現れた場合には、その價値は暴落する。これに反して、蒐寶の折りなどに、他に熱望者が現れる場合には、その價値は急激に高まる。人が慾しがれば自分も一層欲しくなる。これ人間の心理である。かくて利休自作の茶杓には千金を投ずる富豪がある。缺け茶椀も、その由緒によつては萬金に値するのである。贋造は自然の結果と云はねばならぬ。

ところで、この贋造僞作の事實は、文學の問にも全く無緣の事柄ではない。我國にも、古人に假託した僞書の類は枚擧に遑ない程であるが、歐羅巴の文學史上で最も名高いものは、英國のマクフアスンのオシアンと、チャッタアトンとの例である。十八世紀に於けるオシアンの流行は驚くべきものであつた。それがゲエテの『ウエルテル』の愛讀書として、ホメロスと同時に擧げられてゐたのでも察し得られよう。然るにそれがマクファスンの僞作である事の暴露して

後、一人のこれを顧るもののなくなつた事實は、抑も何を暗示するであらうか？　オシアンの詩は、それが古きゲイル族の王であるオシアン自身の作であらうと、一詩人マクファスンの作であらうと、その內容價値に於いて、何の差異もない筈である。然るに、幻影の破られたとき、その價値もまた破られねばならなかつた。彼等は謂はば幻影のために熱中したのである。また、かのあはれなる少年詩人チャッタアトンの悲慘なる運命は、一層痛切にこの事を思はせる。彼が自ら作れる詩篇を、ブリッスルの城砦の一室より發見したるトマス・ロオリなる一僧侶の詩稿と稱して、當時の學識ある名家の推輓を求めた時、ホレエス・ウォルポオル（であつたと思ふ）は大に首を傾けて、つひに斷然それを斥けた。そして、少年詩人は悲慘な死を遂げたのである。我々より見ると、それが老齡の一僧侶の作でなく、わづか十六七歲の少年の作である事を（たとへこれもまた外的條件の一つであるとは云へ）驚嘆し、一層これを尊重すべきではなかつたかと思はれるのであるが、チャッタアトンはマクファスンの如く、この幻影を作成する事が出來なかつた爲め、滅びなければならなかつたのである。この二つの例は價値の幻影の意味について考へさせるところが多い。

名聲は一つの幻影である。アナトオル・フランスのピュウトアである。しかも、このピュウトアは立派に生きた人間となつて橫行するのである。名聲にももとより眞僞の差別はある。當然の名聲もあれば、不當の名聲もある。そして永續的名聲の確立は、或る意味で、幻影の打破とも云ひ得られる。然し、元來、名聲といふものが、その性質上、容易に迷信を惹起し、骨董趣味の對象となりやすい。傑作は名聲をつくる、が、名聲はまた逆につまらぬものをも價値づけるであらう。「すべての人の嘆賞する著作は、何人も檢査しないものである」とアナトオル・フランスは云つてゐるが、古典に對する我々の態度は、えてしてこの無批評的雷同に陷りやすい。現在我國では、芭蕉の如き、極めて高い尊崇を得てゐる。そして芭蕉の事業は全くそれに値してゐるが、この名聲の確立は再び幻影を發生せしめる。今もし芭蕉の名をとつて、その比較的知られない一句を提出したならば、人は果してこれを芭蕉の句として見る時と同樣に評價

し得るであらうか？　またこれに反して、他の人の句を芭蕉の句として見せるならば、その効果はどうであらう？　これはほんの一例にすぎない。そしてかかる芭蕉の尊崇者にとつては、芭蕉の斷翰零墨といへども貴重である。そして、かかる尊崇は、その眞價を感知しえぬものに對しても、價値の幻影を生ぜしめる。玆に於いてか、かの贋造僞作の事實の發生するのは、極めて當然の結果であらねばならぬ。

ところで、この名聲といふ言葉を人氣といふ言葉に置き代へれば、上記の事實は一層明確になるであらう。人氣とは一時的の名聲に與へられた名である。人氣こそまぎれもなく一つの幻影である。それは內容價値以外の無數の外部的事情が集つて、はじめて成立し得るものである。そして、それらの外部的事情のうち、作家その人の生活背景といふものが、最も強い影響をもつ。殊に、現在の文壇などいふところでは、この背景が殆んど絕對的威力を有する事は、人々の云ふが如くである。學閥、黨閥、其他しかじかの背景を有しない文學者が、そこでいかに名を成す事が困難であるか、また、相當名を成して後も、そのためにいかばかり人知れぬ辛苦を嘗めねばならぬかは、屢々指摘せられる如くである。（八月中旬、國民新聞所載、上司小劍氏の感想「文學青年」參照）そして、文壇といふ狹い埒をつくる事が、その傾向を助成する事尠少ではない。が、よしんばこれを撤廢したとしても、もつと廣い社會的背景の力をいかんともする事は出來ない。手づるといふ言葉があらゆる社會的勢力を代表してゐる。この便宜とか情實とかの力は、社會生活上の不可抗力である。それは人間性の本質に根ざしてゐるからである。ところで、これらの背景の力といふ事は、また、個々の作品についても云ひ得られる。文壇的評判になるものは、常に三四の大雜誌の作品に限られてゐる。そこに現れるといふ事が既に一つの價値である。また、その價値に相當する作もあるのであるが、一面から云ふと、さして價値なき作でも、その舞臺のゆゑに、眞價以上に買ひ被られる場合もない事はないと思ふ。いはゆる月評といふものの如き、從來その批評の對象には、必ずこの三四の大雜誌の作品を限られてゐる傾向があつて、それはあ

だかも新聞の懸賞小説の選者が、新聞社の豫選を經たものを採擇するが如き、奇觀を呈してゐた。かうして小雜誌、同人雜誌の作品は、あだかも帝國劇場、歌舞伎座等の檜舞臺に對する、田舍芝居の如き意味しか有たなかつた。單行本の長篇などに至つては、全然問題外であつた。然し、文學的作品は、これらの不合理に拘はらず、なほ公平な公衆の自由なる評價採擇を恃みとする事が出來るが、美術等に至つては、帝展などの大展覽會の審査に落選したが最後、無價値に等しいのである。そして、その審査には、從來いろいろの情實關係の暴露したものも尠くはなかつた。

そこで、人間性のいろいろな弱點が發揮せられる事となる。此種の事には不確實な傳聞を除いては、自分は殆んど相關知する事がないので、それを指摘する事は出來ないが、一般的事實として、かういふ事は考へ得られる。例へば、茲に或る文學者若くは藝術家があつて、十分の世間智に秀で、各種の術策に長じて、この幻影の作成に努めるならば、自己をその眞價以上に買はしめる事は、蓋し容易であらうと云ふ事である。そして、ドストエフスキイの如き心理學者は、かかる幻術を適確に指摘し得たであらうと思ふ。『惡靈』に於ける大文學者カルマヂノフに對する彼の觀察を見よ。彼は普通云はれてゐるやうに、この人物の描寫によつて、ツルゲエネフその人の戲畫を與へたのではなくして、此の巨大な幻影作用の一端を觀察したのにすぎないと、私一個では信じてゐる。また、かのパピイニの『メエテルリンク論』の如きも、かかる幻術に對する痛快なる指摘に外ならない。メエテルリンクが果してパピイニの見るが如き手品師であるか否かは自分の知り得ないところであるが、かやうな批評もまた時に必要である事は信じ得られる。

價値の幻影の生起には、この作家其人の背景といふが如きものの外、なほ無數の原因がある。例へば作品の多寡といふ事も影響する。寶石と貝殼との價値の莫大なる懸隔は、一が稀有なるに對して、他が無數である事に基づく。寡ければ寡いほど、事物の價値の高まる事は、經濟學上の原則である。また、書物に於ける裝幀と云ふが如きものも、意外に大なる影響をもつ。同一の內容も、これが容具によつて異なる効果をもつ。天金革表紙の美本と、粗雜な假綴

とでは、その人に與へる感銘は著しく異るであらう。しかも、かくの如き書籍の體裁ほど、本質的ならぬものはない。これ全き價値の幻影である。そして、現在の詩人仲間の如き、殊にこの種の幻影に囚はれやすい。言葉を驅使すべき詩人が最も言葉に囚はれ、形式が最上のものとなつて、萬事を形式によつて定めるのは所謂詩人の通弊で、彼等は一時的の趣味の滿足に終始して、何だかいいやうな漠然たる感じによつて動きつつあるのであるから、從つて彼等にはその裝幀が內容よりも重大になつて來る。詩人が競つて美麗尨大なる詩集を出したがるのも不思議ではない。そして、それは詩人が最も批評力を缺く事が多いからである。そして、批評力のないところ、常に價値の幻影が榮えるのは、云ふ迄もない事である。

なほ恐るべき事は、かうした各種の條件が相集つて、一般的評價がきまる事である。定評といふものが出來上る事である。いつの間にか、誰云ひ出すとなく、或る人或る作品について、一般的定說が出來上る。あだかも、海中の岩に自然に海苔などがこびりつくやうに。殊に惡い事は、何人かの發言が、その儘、多くの吟味を經る事なしに、一般的に通用するやうになる事である。そして、一度定評が出來上ると、既に萬事は休す。それを脫却するのは、人間業の及ぶところでない。そして、この定評は正確である場合もないではないが、その然らぬ場合の方が多い。また、たとへ當れりとするも、人間は絕えず變化し、推移するものである。然るに定評は決して變化しない、何となれば定評なるものは元來、一つの偏見、又は先入見である場合が多いから。偏見とは謂はば思考の惰性を意味する。他から注入せられた概念に全然的に服從して、自己の頭腦をもつて、改めて檢討せぬ怠惰より發生する。卽ちそれは思考せぬ事、批判せぬ事である。全然シャインに服從する事である。そして、人間は「概して云へば、人は自分自身で發見した理由に依つて納得するよりも、他人の精神裡に生じた理由によつて改めて納得する方が多い」とパスカルの云へるが如き通有性を有つがゆゑに、容易に偏見の捕虜となりやすい。かの食はず嫌ひといふ感情の如き、その最もティピカルなも

のであらう。かやうな諸點を考へてくると、藝術品の正當なる評價が、いかに困難であるかは自ら明らかであらう。

價値の問題は極めて困難な問題で、自分如き哲學的素養なきものの力を以てしては、十分に推究するを得ないのであるが、今これを普通の常識的意味に解し、また特に藝術品の價値に限定して、自分一個の貧しい考察を述べるならば、元來、藝術品なるものは、その性質上、かの米穀等の食糧品が我々の生活に於ける如き、これなくしては一日も生存し得ないと云ふが如き意味の絶對的價値を具有しない。今かりに我々が今夕の食に窮する場合は、涙をのんでその愛讀書をも賣拂ふのではないか。そのゆゑに、かの露西亜のニヒリスト等の、一片の麵麭はプウシキンの全集よりも尊しといふが如き極端なる揚言は發生したのである。然し、我々はかかる功利主義的見解（それは形を變へて現在にも及んでゐる）には與しない。我々は藝術至上主義者ではないが、藝術が我々の精神生活にとつて高度の文化的意義を有する事を、即ちその精神價値を多くの穩健なる人々と共に信じたいものである。それゆゑ、問題は個々の藝術品の評價上の價値の問題である。そこで、作品の眞價といふ事について說かなければならない。

眞價とは簡單に云へば、永續的價値の謂である。本來、價値は絶對的なものでなく、相對的のものであり、從つて固定的でなく、流動的のものである。人によりて異り、場合によりて異るとも考へ得られる。かくては絶對價値といふものはあり得ないわけである。然し、我々はそれに滿足しえられない。評價上に何等かの普遍妥當性を見出し得ぬとすれば、批評の事業は無意味なゴシップにすぎない事とならう。幸ひにも、我々は價値に二種類ある事を知る。即ち固有價値と作用價値とである。時處による變化を受けないその物本來の價値と、その他に及ぼす影響作用によつてはじめて成立する價値とである。そして、藝術品の眞價とは、前者の一般的性質を意味するに外ならない。即ち、人間性の根本の問題に觸れる事多きだけ、その藝術は意義が加はるべきである。そして、人間性なるものは人間の存する限り、永遠不變である。而して、この固有價値と作用價値との判別が、批評家の任務である。

批評家も神樣ではない。個性の制限を受け、氣分の影響を受けざるを得ないのみならず、その理解にも自ら範圍がある。從つて、いかに卓越した權威ある批評家の評價といへども、絶對のものではありえない。それは他の無數の批評家の反對によつて訂正され、また、次々の時代の吟味を經なければならぬ。眞價の決定は、一朝一夕の事ではなく、それは時のふるひにかけられて、始めて定まるのである。ゆゑに、批評家もただ一票を有するにすぎない。が、その一票の行使には、その良心に聽くところあらねばならぬ。自己の一票の絶對的ならぬ事によつて、これを輕忽に取扱ふものは、自己を侮辱するものである。批評家がある黨派に屬し、ある偏見に囚はれてゐるといふ事は、正にその不信用に値する。然し、彼が單なる幻影の追從者にすぎぬ場合は、その存在理由は全く失はれるであらう。

クリティシズムとジャアナリズムとは、相對立する二つの精神である。我々はジャアナリズムの精神に近づくに從つて、幻影の力を重んずること甚しくなる。これに反して、幻影の力を無視する事強ければ強い程、よき批評家である。ジャアナリズムは、嚴密に時流に附隨せるものである。その欲するところは、常に現在である。現在に於ける社會的價値、即ち作用價値さへあれば即ち足りる。その眞價の如きは問題でない。幻影さへあれば足りる。商品としての價値、即ち市場價値さへあれば足る。そして批評的ならぬ一般讀者が、その幻影に囚はれ、眩惑されるのは妨げぬ。批評的なる事にその存在理由をもつ批評家が、ジャアナリズムの太鼓持にすぎないならば、その精神的自殺に外ならないであらう。批評家は能ふ限りあらゆる權威、迷信、流行、偏見等より自由であらねばならぬ。眞正の固有價値以外の作用價値によつて眩惑されてはならぬ。その最も要望さるべきものは、とりも直さずジャアナリズムの精神よりの超越である。あらゆる價値の幻影よりの脫却である。高山樗牛が「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と云つたのは、この意味に解するとき、批評家の覺悟に對するよき提言であると思ふ。批評家は神樣ではない。然し、彼は神に近き業を敢てせんとするものである。苟くも他人の苦心の作品に對して、勝手に批判の鐵鎚を下さんとする以上は、漫然

たる放言は許されない。一語といへども、且つ虞れ且つ畏れて、輕々には下し得ざるべき筈ではないか。今や、批評壇は一般的蔑視と閑却との中に立つてゐる。その尊嚴を恢復するの道は、批評家自身の自敬の外にないであらう。

大正十五年九月十七日(「新潮」昭和二年五月號所載)

文學批評難

先月中旬頃の東京日日新聞の文藝欄に『文壇の不思議』と題して、豐島與志雄氏の談話が出てゐたが、その中で、氏は今の文壇に批評のない事、雜文が批評として通つてゐる事を指摘して、も少し本當の批評壇といふやうなものが、文壇に現れなければならないと望んでゐられた。その說はすべて僕の同感するところであるし、また、今の多くの人人も等しく同意するところであらうと思ふ。で僕にもそれについて多少の意見があるので(意見といふより、むしろ訴へであるが)それを述べて、廣く文壇、並に新聞雜誌の文藝方面の編輯者諸氏に聞いて頂きたいと思ふ。

現在の批評界の不振は、十目の見るところ、十指の指さすところ、疑ひのない事實である。豐島氏の云はれたやうに、一册の論集に集めて、世に問ふに足るほどの批評が、殆ど無いと云つていい事も、無論事實である。これを今から十年餘り以前の文壇に比較して見ると、どうであらうか？　僕もここで豐島氏同樣、阿部次郎氏、小宮豐隆氏等の名前を想ひ起さずにはゐられないのだ。あのころの阿部次郎氏の批評論文の如き、當時まだ僕が一少年にすぎなかつた爲に、とりわけ感心したのかも知れないが、隨分立派な堂々たるものとして、僕自身それを愛讀した記憶がある。しかも、今あの人々に比較するに足る評家が、果して何處にあるだらう？　どうして批評界は、かうした現在のやうな狀態にまで退化してしまつたであらうか？　果してそれは、現在の批評界の人々ばかりの罪であらうか？　いな、

僕はむしろ、その責は批評家よりも一般の文壇に、と云ふより、現下の社會的事情そのものの中に存すると思ふものである。つまり、それは文學が急激に一般化し、普遍化した爲めの當然の結果であると思ふのだ。

文學が一般化したならば、批評もまた盛になる筈であるが、事實は反對である。なぜならば、そのため特に文藝雜誌といふものの存在が困難となつたからである。そして、創作が一般的雜誌の裝飾として、極めて高價に値ぶみされると同時に、批評は一昨日おいでを食はざるを得なかつたからである。かくして、文藝雜誌は『文藝春秋』とか『不同調』とかいつた賑やかな盛り澤山の、輕いアッサリしたものでなくては賣れなくなつた。其結果として、僅々四五枚から、せいぜい七八枚前後の原稿が歡迎される事となつた。しかも、こんな制限の下に、どうして纏まつた一篇の評論が出來ようか？　作家論が印象記になり、評論が雜文になるのは當然の事である。そしてこの趨勢を誘致したのは、勿論、現代の社會心そのものに外ならぬかも知れない。ただ輕く愉快に「曹達水でも飲まうよ……退屈な評論なんぞは眞平だよ……」

十年以前はすつかり違つてゐた。あの時分は、一般的に文學書なぞは、それ程多くは讀まれなかつた。その讀まれない程度は、小說とて評論とて、それ程懸隔はなかつた。少くとも、現在のやうには。從つて、讀者は今より精選されてゐたやうに思はれる。小說を讀む位の讀者は、評論をも讀んだのである。そこで、雜誌はとにかく、纏まつた評論を掲げた。といふより、評論を掲げる雜誌の多くが存在理由をもつてゐた。文章世界、新小說、新潮、早稻田文學、太陽、ホトトギス、帝國文學、何何、何と僕が今想ひ出すだけでもかなりある。そして、中には評論を呼び物とした雜誌さへあつた。それが今ではどうであるか？　今、評家が四十枚、五十枚の評論を書いて、それを載せてくれさうな雜誌は、わづかに『新潮』一つではないか。『新潮』を除けば、『早稻田文學』位なものだ。僕は今、現代作家論を、少しく詳細に精到に、毎月續けてでもやつてみたいとさへ思つてゐるが、何處にそれを載せてくれる舞臺があるだら

う？

新聞の文藝欄があるではないかと、諸君は云はれるであらう。成程さうだ、僕が前に云つた文學の普遍化は、新聞に最もよく反映せられてゐる。今では新聞といふ新聞で、文藝欄、少くともそれに類似の欄の設けられないものはなくなつて、いろんな評家の月評やら、新聞によつては下らぬゴシップやら漫罵やらを掲載してゐる。そして、創作などと違つて、その欄には、さして素養のない人でも容易に原稿を買つて貰ふ事が出來るので、非常に重寶がられてゐるのも事實である。そして、一般讀者のおもはくは知らず、作家なども、それらの言説を輕蔑してゐながら（作家が批評を蔑視するのは、昔から同じ事だ。そしてそれにも十分理由のある事だ。が、僕は批評家には、こんなパラドックスを教へたいと思ふ、批評家は作家なんぞを相手にするな！）しかも、それらに細心の注意を拂つて、一喜一憂する。それは作家としては無理のない事であると思ふが、更に一般にも、それらの評家を輕んじながらも、やはりそれを讀み、幾分かでも、それによつて評判がきまつて行くといふ事實は、僕には悲しむべきよりも、むしろ莫迦らしい事に思はれるのだ。

若し、左様に、さうした批評に多少ともその意義を認め、それを全然無視し得ない事ならば、文壇でも、なぜ今少しくさうした批評家に敬意を拂はないのであらうか？　またその敬意を拂ひ難いやうな評家ならば、なぜこれを斥け、淘汰して行くやうにしないのか？　もつともこれは文壇にといふよりも、新聞の文藝欄を擔當する方々に望むべき事かも知れない。今や批評壇の地盤は、雜誌より新聞に移動した。文壇を正しく健かに導く事は、今や諸氏のつとめであり、誇りであると思ふ。

然し、かうした見識と抱負とのかなりに現れてゐる立派な文藝欄にも、根本的の缺點は如何ともする事が出來ない。それは新聞そのものの性質上、紙數の制限が特に嚴しい事である。長くも十枚前後位の原稿でないといけない、讀者

の方でも、あまり研究的な評論などは欲しない、これがまた評論が雜文となる一つの理由である。

で、僕はかうした現前の事實から、文壇も社會も、批評や評論を要求してゐないと斷じて憚らないものだ。その要求するものは、單なる評判にすぎない。故に、評判家があれば澤山なのだ、批評家は不必要なのである。そして、可笑しい事には、自ら文學批評を拒否する一般的大雜誌の如きが、とりわけ熱烈に、自分の雜誌にのせた創作の評判を要求する。故に、そのよき顧客のために、新聞の文藝欄の月評は缺くべからざるものとなる。かくて、月評家と輕稱せられる人々が、新聞の必要人物となる。ここ迄云つてくれば、批評の不振など叫ぶのは、むしろ愚かな事と思はれるではないか。そこで求められるのは評判なのだ、そして、誰の口から出たかは大して問題ではないのだ。僕は月評家に同情するものである。

僕も五六年前までは、批評家として立たうといふ志望を抱いてゐた。そして、月評も四、五回はやつてみたし、各種の評論をも隨分書いた。しかも、その結果は草臥儲けの骨折損の一句に盡きるとしか思はれなかつた。勿論、自分に文學批評の天分が缺けてゐる事を悟つたのは當然であるが、また單にはそればかりでなく、また、文學批評が眞に自分を生かす道でない事をも悟つたのである。（現在では必ずしもさう考へてはゐないが。）

元來、人間には常にただ他人の業蹟をのみ批評し、他人の努力のあとをのみ評價し、他人の作品をのみ鑑賞して一生を送るには滿足出來ない感情がある。レオ・シェストフの聊か冷評したブランデスの如き人は、まづ稀有であらう。サント・ブウヴのユウゴオ等に對する感情の變化の底にある、あの恐ろしいものは何だ？ そして、彼もまた詩と小說とを書かずにはゐられなかつたではないか。『トルストイとドストエフスキイ』の著者メレジュコフスキイも、あの有名な三部作を書いたではないか。僕はもとより自ら批評家としての天分もなく、學問も見識もない、精神上の素寒貧であるが、然し昔すぐれた批評を書いてゐた人が、それぞれ筆を收めて、他の方面に向つてしまつたのも、その理由

批評が酬いられる事少き仕事だといふ點にあると思ふ。それは昔も今も變る事はない。が、創作の特別に酬いられる事多き現在では、多少とも創作上の力量ある人にとつては、專ら批評の筆をとる事は、多少奉仕的精神を必要とするであらう。

實際、批評家は、經濟的の苦境と鬪ふ覺悟がなくては、その生活費の大半は、これを他の方面から仰ぐ位の覺悟がなくては、立派な批評は出來るものではないのだ。かうした事を云ふのは、甚だ僕の趣味に反する事であるが、今の場合それを云はなければ、論旨が徹底しないから云ふが、評論の原稿料といふものは、創作の半にも値しないものである。しかも、評論に要する素養と、苦心とその時間とは、創作に要するそれと果していづれであらう！　今、三十枚の作家論のために、その作家の全作品を讀破し、これが觀察と批判と考究と、そして執筆の時間とを、その原稿料と比較せよ。僕の如上の言を奇矯な一時の放言と、誰か看做し得るか。かくても、批評家のみが非難に値するであらうか？

この外に、なほなほ、文學批評には、根本的の困難が思惟されてゐる。野口米次郎氏は、去月の『朝』誌上で、批評の無價値無用を說いてゐられる。「其理由は簡單だ。私は他人が完全に諒解されない。」これまた僕の同感するところである。僕も曾て批評無用論を書かうと思つたことがある、然し、今、僕はまた批評に對して宥和的の見解を有つに至つた。これ僕がまた批評の筆をとるに至つた理由である。我々はもとより他人を完全に理解し得ない、完全どころか、總じて人と人との間にあつて理解と呼ばれるものは、實は誤解に外ならぬかも知れぬとさへ僕は思ふ。しかも、外ならぬその點に、僕は批評の意義と存在理由とを認めようとするものである。我々が完全に他人を理解し得たなら、何で批評なぞを書く必要があらう！　それに元來、他人が我々を惹き付けるのは、そこに自分に十分理解し難い點の

ば幾分またかうした點に存しはしなかつたであらうか？

それに今一つ、評壇に人なきに至つた重大な理由は、

あるためではなからうか？　諒解の困難なるが故に、批評は一つの喜びとなるのだ。批評とは他人の中に自己を見出す喜びである。かやうに僕は批評を定義したいとさへ思ふ。批評は創作とは獨立して意義なかるべからず。これは曾て常に僕の說いたところだ。然らずんば、豐島氏の云はれたやうに、何で批評が書册になり得ようぞ。批評家は、作家並に作品を借りて、自己を語るのでなければならぬ。單なる評判記は——かの江戸時代の役者評の如きは——これを批評の圈内より斥けねばならぬ。批評は評家がこれを書きつつ創作の喜びを味はふ如きものでなければならぬ。又、讀者がこれを讀過しつつ創作の如き興味に惹かれるものでなくてはならぬ。所謂『退屈なる評論』でなく、筆者の生命が躍動してゐるものでなくてはならぬ。かくて僕は創作的批評、又は告白的批評を主張しようとするものである。

更に、創作家と批評家とを、全然別種のものの如く區別して考へるのも、また既に舊時代的の、固定的な見方である。そして批評を單なる頭腦の事件と見なしたのは、舊見であり且つ誤謬である、それは心臟の事件でなければならぬ。が、これらの事については、詳しく書くつもりだから、今はわざと細論しない。

今僕がここで特に云ひたいと思つたのは、文學批評が上記の如き諸種の困難のもとにあるといふ事、それゆゑ、少しでもその困難が輕減せられむ事、また、現在の新聞雜誌の編輯者諸氏が、批評の方面に一層の注意を拂はれて、その紙面の尊嚴のために、無責任な漫罵や喧嘩文などを斷然拒否して、意味ある評論をのみ掲げられたき事、また、一般批評家も、自己の地位の尊嚴を悟つて、無意味なる漫罵やゴシップをやめ、楽屋落の滿悅や、退屈な反覆やを棄て、自己の眞生命の創造に力を注がれむ事等である。これらの事情の改善せられざる限り、批評界の不振と衰頽とは、到底救濟し難いと僕は信ずるものである。

大正十四年十二月二十三日（「萬朝報」十一月十二——三日所載）

批評家の三種の自由

文學批評の本質、使命、方法等についての一切の論究を、無用にして煩雜なりとする聲を聞く。(例へば文道判平なる一匿名氏の言の如き) 自分も一應はさう考へてみる。が、再思するとき、直にその膚淺の見たる事に氣が付く。かの社會學的批評の提唱の如きも、それ自身既に、現文壇に對する一個痛烈なる批評として看做すべきものである事は、別に云つた。が、更に根本的なる一般批評上の原理の考究もまた、批評的活動の基礎的研究として、批評家の絶えざる關心を要求すべきものである。

文學批評の使命は、或る人々の考へるやうに、月々の作品批評にのみあるのではない。否、我々はかかる性急なる作品批評の意義についていては、或る疑惑をもつものである。その事は既に云つたから繰返さぬが、かやうに與へられたる多數の作品に對して、不用意なる印象評を加へる事のみが有意義にして、その批評の原理に關する根本的考究を迂遠となし、無用となすが如き見解に至つては、あまりにもジャアナリズムの精神にすぎるであらう。おもふにかかる人人は、肥料を施さず、不斷の丹精を拂はずして、ただよき收穫をのみ得ようとする農夫の如きものである。

自己の批評の態度に對する何等の反省なしに、漫然と批評の筆を執るべき時代は、もうそろそろ過ぎ去つてもよからうと思ふ。我々は原理なき應用の空虛には、もはや堪へられなくなつてゐる。若し多少の誠意をもつて批評的事業に身を捧げようと欲するものならば、迂遠なる抽象問題としてではなく、當面の實際問題として、これが考慮を强ひられるであらう。即ちかの不用意なる印象評や、偏狹なる獨斷評やから自らいかにして免るべきか、並に、正當なる、拘束せらるる事なき、生命ある批評を企てるためには、いかなる用意を以てすべきか、その方法を考察せざるを得な

いであらう。

レオ・ベルクは、もはや恐れられる事なき批評は、もはや批評ではないと云つて、かくあらんがための條件として、批評家のために三種の自由を要求してゐる。作品を靜かに鑑賞し、これを超克すべきための時間の自由、これを個人的所有として分析するための作品に對する自由、及び、經濟上の自由、これである。そして、おもふに、批評をその使命として感じ、これがために、實際上の不利と制約とに惱める人々は、必ずや、このベルクの要求に進んで連署するであらう。

批評もまた創作と同樣、長い準備を要し、一個の作品に對してもその判斷に成熟の時日を要する。月評が一見容易なるが如く見えて、その實、眞の批評家にとつて、極めて困難なる課業である事は、實にこれあるによる。作家並に作品に對する自由もまた、その言說に責任を負ふ眞摯なる評家にとつては、缺くべからざるものにして、また與へられ難きものである。が、特に經濟上の自由に至つては、時に致命的の制約として、一切を決定し去るの力を有する。

これらの點で、我々が今いかに不利益の立場に置かれてゐるかは、敢て云ふを俟たぬ。批評界の不振も、また依つて來るところ遠いのである。謂はば、批評權の獨立は我々に殆んど與へられてゐないと云つていいのである。然し、この獨立は、外面的事情よりも、より多く內面的の自由にかかはるであらう。ベルクの自由は主として外部的の自由であるが、我々はよき批評のために、より以上に內部の自由を求めなければならぬ。卽ち我々の精神上の自由、特に、あらゆる偏見、迷信、流行、幻影等よりの自由である。

文學批評は一つの主張であり、鬪爭でなければならぬといふ先進の說がある。あまりに主張なき、あまりに妥協的なる氣分の支配せる現在にあつては、かかる說には、一應傾聽すべきものがあつて存するとは思ふ。が、自分はかかる見解の根柢について、かなり深い疑ひをもつ。若し批評が常に主張であり、鬪爭であるべきだとすれば、我々は容

易に偏見の捕虜となり、黨派と傾向との奴隷となつて、その精神的自由を失し、從つてその批評の意義を稀薄ならしめる虞れはないであらうか。例へば、かの自然主義運動當時の同派の評家の批評の如き偏狹と誤謬とを反復するの危險はないであらうか。彼等はその主義に反するものは、凡て無價値、無意義として、一も二もなく排し去り、自派に迎合した作品は、愚劣なるものをも推賞した。その意味で、それは主張であり、闘爭であつた。だが、今我々はかかる批評を正しとして是認し得るであらうか。少くとも、これはおなじ先進の說かれたる懷疑的精神とは、著しく相容れぬ要素を含有するものではあるまいか。

もとより人間は常に己れを以て正しとし、自己の奉ずる信條を唯一無二のものと思惟し、これに反するものを悉く誤謬となすの傾向がある。ためにその眼界は限られ、人生を全的に把握する事を妨げられる。そして、外ならぬ批評的精神こそ、かかる傾向から自己を護持すべき性能でなければならぬ。批評は衝動する働きと云ふより、むしろ抑制する働きである。それは主張や闘志より、むしろ懷疑であり、吟味である。要するに、批評はあらゆる狂信の敵である。

現時の無產派批評家の言說は、自分の常に進んで聽かんとするところである。自分の敬意と同感とは、ブルジョア文壇批評家よりも、より多く無產派批評家の上にある。しかも、自分はかの人々の批評に未だ十分に信賴し得ないのを頗る遺憾とする。その理由は他なし、その主義と闘志とが、批評的見地の自由を禁縛するが故である。

曾てトルストイの『藝術とは何ぞや』は自分の深くも動かされた書物であつた。が、その藝術論として甚しく偏見に囚はれ、多大の誤謬を含む事は、既に周知の事實である。それと云ふのも、それが根本に於いて、一つの主張であつたからである。そしてこれは、トルストイの無類の誠實と熱意との致すところであるが、また、ツルゲエネフの評せるが如き精神上の自由の缺如に根ざしてもゐる事はないか。そして、トルストイがシェクスピア、ゲエテ、ベェトオヴ

エン等をも敢て否定し去つたのと、同一の危險性は、現時の無產派批評の根柢に伏在する事は無きか。同派の敬重せられたる同志トロツキイの文學批評の如き、その銳利なる破邪顯正的論法は、痛快は卽ち痛快、これ正に鬪爭的精神の極度に發揮せられたるものであるが、そのメレジュコフスキイに對する全然的否定の如き、メレジュコフスキイがいかにボルシェギキの敵であるにせよ、またいかに微小であるにせよ、果して正當なる批評かどうかを、我々は疑問とせざるを得ない。

批評は戰鬪の武器に過ぎぬだらうか。文學上の赤衞軍に外ならぬだらうか。自分は斷じて否と答へざるを得ない。「あれかこれか」の決定的態度は痛快である、然しそれは一面的で、世界の半分にしか値しない。我々は批評家として、むしろ「あれもこれも」をより公正とする。我々が現代の批評家より要求するものは、最も公正なる、不偏不黨の精神である。あらゆる狂信と憎惡とよりの自由なる抑制の態度である。その點で、彼の態度は歷史家のそれに似るべきである。

レオ・ベルクの云へる三種の自由も、結局、この公正のための自由である。彼の云へる恐れられる批評とは、卽ち、公正なる批評を意味するに外ならぬ。あらゆる偏見よりの自由、これが凡てである。とは云へ、主張的鬪爭的批評、もとより全然的に斥くべきでない。世界は多岐である。然して人間の心は複雜である。あらゆる事物をしてあらしめよ。

大正十五年八月十九日(「時事新報」八月二十七――八日所載)

俠客と批評家

弱きを助け、強きを挫く――これが俠客道の第一義諦である。この任俠の精神を失つた俠客は、單なる破落戸にすぎないであらう。然るに、大正の俠客は、反つて弱きを挫き、強きを助ける事多しと云はれる。或ひはさうかも知れない。だが、一體、現代に果して俠客なるものが存在してゐるだらうか？　それが第一に疑問である。

俠客といふものは、封建時代の民衆强制の一つの反動として生まれた特殊の産物であつて、大正の聖代には、全く無用のものであるかも知れない。故にその名のみ殘つて、その實が滅びたものであらう。世に此種のものは少くないのである。そして、幸福にも、完全なる警察制度と、司法制度とによつて庇護せられてゐる我々大正の良民は、俠客なるものの滅亡を感謝すべきであらう。

俠客は滅び去つたであらう。然し、かの強きを挫き、弱きを助くる任俠の精神は、今なほ我々の血管の中に流れてゐる。我々が俠客なるものに對して、本能的の共感を有するものは、實にこれあるによる。かくて、大正の良民は好んで講談を讀み、國定忠次、淸水の次郎長等の壯快なる傳說に陶醉するのである。これは封建的感情の遺物であるかも知れないが、より多く我々の正義心、並に反抗的精神の發現として意味あるを思ふ。

文學批評家もまた俠客的精神を有たねばならぬ。かく云へば、奇を衒うて以て快とするものと看做されもしよう、また、樣々の道理ある異論も提出されるであらう。然し、自分の確信は動かない。批評家の重なる任務の一つは、不當なる名聲を引き下ろし、無視し、閑却されたるものの眞價を顯揚するにあると、かく云へば、それがその見掛けほどには、奇警でも滑稽でもない事が、理解されるであらう。

批評家はその本來の性質上、常により多く在野黨的でなければならぬ。若し批評家が現在勢力を得てゐる先進の文學を謳歌し、禮讃して、妥協的なるジャアナリズム文學の提灯持を榮譽とするにすぎぬならば、聲價既に定まれる老大家を賞讃して、その定評を繰返しつつ、新進の作品を强ひて認めざらんとし、その無價値無力を宣言するを以て能事

畢れりとするならば、その存在は單に無意味であるのみならず、或る場合には有害である。

老樹と芽生えとを比較すれば、後者が矮少微弱なる事は言を俟たぬ。然し、我々は既にそれ以上の展開を期し難きそれには勿論危險も伴ふ、そこでは評價に安全なる老大家と違つて、海のものとも山のものとも知れぬ不安心なる未知數を相手にしてゐるのである。從つて、明眼の批評家といへども、多くの錯誤や幻滅は免れ得ないであらう。然し、それにも拘はらず、その危險を避けざるの勇氣は、即ち批評家の誠實の發現に外ならぬのである。そして、これ實にレッシングの批評態度であり、サント・ブウヴの、レオ・ベルクの、パピイニのそれであつた。

人或ひは云はう、文學批評家は傑作を推賞して、駄作を貶黜するを以て任務とす。この意味よりは、反つて强きを助け、弱きを挫くべきではないかと。然し、自分の謂ふ强弱とは、作品の眞價にあらずして、作者に附隨せる世間的勢力を意味する。あだかも俠客の場合に於ける强弱が、相手の人格的價値に非ずして、その社會的地位にかかはると一般である。即ち、玆で問題になるものは、ザインに非ずしてシャインである。地位、名聲、黨派、功績等の文壇的既得權である。これらの外部的條件がいかに作品の眞價をあやまつて判斷せしめるかは、蓋し想像を越えるものがあらう。

もとより玆に要望せらるべきものは、任俠の精神とは異るであらう。批評の動機を義俠心に置く事は、これを功利的打算、若くは情實關係に置くと同樣に、正しとはなし難いかも知れない。然し、批評家が出來る限りの公正と、同情とを期する場合には、文學的評價がしばしば正義を無視して行はれる世にあつては、結果として、その精神が任俠のそれに類するとも見られるであらう。

不公正に對して戰ふのは、常に男らしき事である。そして、公正なる批評家は、結局、常に不公正と戰つてゐるの

だと云ふ事を考へねばならぬ。少くとも自分の共感は、かの大正の俠客的批評よりも、レッシング的、サント・ブウヴ的、パピイニ的批評の方法に傾く。但、この傾向の批評の缺陷については別に說あるも、今は云はず。

大正十五年八月十日（「東京每夕新聞」八月十六日所載）

批評家の敎養

×

「今の批評壇に蔓つてゐるものは、趣味に對する好惡か、人に對する愛憎かである。好惡は或ひは已むを得ぬかも知れぬが、愛憎は嚴に斥くべきや勿論。少しく眼識あるものが、其の文を取つて一閱するときは、直ちに文字の底に橫たはる個人的愛憎の息に觸れて、不快の念禁じがたきもの、數ふるに遑あらず。疑ふらくは此等の筆者が其の筆を舐める時、自己の心內には何ものゝ恥らはしさをも感じなかつたであらうか。」

これは島村抱月の言である。そして、明治三十九年に書かれたものである。それが、今取出して讀むと、今日、現存の人によつて書かれたものと見た方が、一層ふさはしいやうな氣がする。それほど今日では批評の權威といふものが、地に墜ちてしまつた。

×

好惡はまだ恕すべしとしても、愛憎は許し難い、それはもとより云ふ迄もないことである。が、好惡すらも自分ではわからない人には、愛憎の感情を批評の尺度とする外はない。かくて、批評は無制限な禮讚と、非人格的な漫罵放言とに墮するに至る。そして、その結果が、批評の權威の失墜となり、一般的不信用を買ふこととなつたのだ。

一體文學上の作品といふものは、傑作と駄作との二つにしか分類されないものではない筈だ。又、成功と失敗との二つにしか分けられないものでもない。長所の裏に短所あり、短所の中に長所がある。成功、失敗などいふ斷定の如き、これ程曖昧なものはない。一寸見方を變へさへすれば、でんぐりがへるのだ、こんなあやふやな評語で滿足する事が出來る筈はない。

×

批評家の主たる任務は、精緻な鑑賞によつて、讀者の漫然通過するところに意義を發見して、これを一般に敎示するところにあらねばならぬ。卽ち、批評家は審美上の敎育者でなければならぬ。好惡よりも寧ろ愛憎によつて暴言を吐いて憚らぬ人々の決定的、一掃的批評には、何等他人を敎へるものはない、從つて權威の伴はないのも當然である。

×

批評がなぜむづかしいかと云ふと、自分を捨てなければならぬからである。その批評の對象に沒入しなければ、情理到れる批評はなしがたい。批評家の第一の資格は、誠實といふことである。

理解のないところに、批評は成立しない。全く自己と反撥する作品に對しては、批評を避くべきである。

批評は愛憎の情より自由でなければならぬ。然るに憎いからと云つて理不盡に罵詈讒謗を恣にして憚らない如きは、單に人間としての敎養の缺如を示すに止まる。

×

批評家にして敎養を缺く時、多くの弊害をかもし出す。多くの放言批評は學問のない爲の必然的な結果である。例へば論爭の場合にも、學問なく見識なき人の取るべき道は、漫罵の外にないのである。然し、敎養とは單に學問を積む謂でなく、歸するところ人格の深化でなければならぬ。批評家敎育は非常に必要である、批評家自身にとつて必要

である、そして、これが手段を講ずべきものも、又批評家自身でなければならぬ。

大正十三年「現代文學」所載

批評家讀本抄

――その最初の生徒は自分自身であるところの――

一　批評家の遠近法

自分より遠方にあるものほど小さく見える……この事實を、自分は此間はじめて發見した。榛名の山をのぼりながら、吾妻川の谿流が利根に合流するあたりから、ずつと赤城の裾野に添うて伸びてゐる線を眺望してゐた時、突如として、自分はこの重大な發見をして、愕然としたのだ。

「そんな事ぐらゐ子供でも知つてゐる……」

それはさうかも知れない。然し、我々は本當に知つてゐるだらうか？

「それを知らないでどうする？　知つてゐればこそ、畫家は遠近法を學ぶのぢやないか？」

遠近法？　成程――今では遠近法を無視した畫といふものは、日本畫にも見當らないやうだ。だが、この遠近法は、私の發見に何の關係があらう……

自分より遠方にあるものほど小さく見える、さうだ、これは實に平凡な眞理だ、自分も知つてゐた、子供の時から、然し、ただ概念として……

自分には、どうも今の批評家が、この眞理を知つてゐるやうに思へないのだが、どうか？
自分はもう一つ、同じやうな新發見をした、これは少し前の事だが……
高い山はこちらが高く登れば登るほど、高く見えるといふ發見だ。
これは信州の高原へ登る汽車の窓から、富士山を眺めた時の事だつた。
それも分り切つた事だ。前者ほど普遍的ではないとしても……旅行家はみなよく知つてゐる事だ。
だが、この事實も、批評家といふ文壇大學の選科生たちは知つてゐるかどうか？
遠近法を知らない畫家は不都合であらう。然し、批評家もまた、彼自身の遠近法を知らねばならぬ。それは精神的視力の調節に外ならない。遠方のものを擴大し、近接のものを縮小するといふ特殊の眼鏡の謂である。それを彼はその心服にかけなければならぬ……

二　抵抗としての批評

人に肩を押された場合、無意識に、その方へ肩を押し返す。
度々押されると、今度は押されない時でも、今に押すかと、押し返してやる用意をする。
この抵抗性、これが批評の中心的興味となる場合もある……
ギュイヨオ曰く、
「哲學を批評する場合には、之を駁撃せんと意志する丈けでは未だ必ずしも自己の立場の合理的な事を示す事が出來ないけれども、藝術の場合に於ては之に感動されざらんが爲には、單にしかく意志する丈けで既に十分である」と。
しかも、批評的興味は、概ね、しかく意志する事を意味する。感動されざらんとの警戒に發する。

往々、その反對の例證も擧らないではないが……感動せんと意志する場合。しかも、概ね、そのいづれかで、そして、彼の心は曾つて白紙ではない。あり得ない。

批評せんとする意志は――既に、一つの抵抗であるかも知れない。

抵抗――これを端的に具現したものが、所謂「ケチをつける」である。だが批評とは單にケチをつけんとする事であらうか？　何人も直ちにこの疑問に肯定的應答をするほど勇敢ではあるまい。しかも、事實に於て、我々はかかる單なる抵抗としての批評に――所謂ヤッヶ批評に飽食してゐるのだ。

三　醉はざる人

非難をのみ事とする批評家、缺點をのみ指摘する批評家は、最も氣の毒な人間である、何の因果で……常に缺點のみの價値なき作物をのみ讀まなければならぬとは！

藝術の魅力は、云ふも云はれず、説くも説かれず、言語を絶した陶醉感にある。それによつて、作家は創作し、讀者はそれを享受する……しかも何の因果で……常に醒めて、いらいらの狀態で、絶えず心意を警戒しつつあらねばならぬとは！

永遠に醉はざる人――これ批評家か。然らば、汝の運命は、最も望ましからぬものである。

四　批評としての無批評

批評は公平無私なる鑑賞を意味するとすれば、最上の批評は、批評しない事にある、無批評にある。何となれば、無批評こそ、眞の純粹の鑑賞であるから。

その對象に自己を全然的に沒入する――これ我等に許されたる地上の樂園である。その對象が、その沒入に値すると否とは問題ではない。

――かういふ事も考へられる。

批評上の白紙主義は、結局、この批評の不在に歸するかも知れない。

五　神　と　人　間　と

我等は自ら批評し得ざる書物によつてのみ學ぶとは、ゲエテの言である。

あらゆるものを批判し得る批評家は、その完成の頂上に立つものである。もはや進歩を要としないものである。

かかる種類の批評家が、神でなくして人間であるといふ事は、少々合點の行きかねる事實である。

神には神のことを……

我等人間は、人間の批評を求める。卽ち、むしろ自ら學ぶものの批評を唱へんと欲する。

六　批評するものは哲學する

批評とは一定の對象についての自己の考察に對する再度の、三度の、四度の批評である。批評の批評である。判斷の判斷である。卽ち、批評は哲學的の推究であらねばならぬ。

七　藝術としての批評

批評は藝術たらねばならぬと云はれる。然し、いかにして藝術であるか、いかなる意味の藝術であるか？

藝術としての批評とは？

換言すれば、再創造の謂である。創造に對する評價をのみ意味するのではない。

元來、一つの藝術的作品は、それ自身旣に完結してゐるものである。もはや何等附加すべきものの必要を認めないものである。從つて批評は屋上屋を架する謂ではなく、全く別個の働きに屬する。

この事は甚だ自明の事であるけれども、文藝批評が作品に附屬してゐるかに考へられてゐる際には、特に留意しておく必要がある。

八　或る作家の一擊

要するに、批評家とは、御苦勞千萬なものである……

大正十五年六月三日（「不同調」七月號所載）

流行其他の雜談

×

去年は短かい感想を隨分澤山書いた年だ。數へてみたら、十あまりも書いてゐた月さへもあつた。何だか草臥れた氣もするし、斷片的な自分といふものが、一層斷片的になつてしまふやうな氣もする。

元來、感想といふものは、さう澤山書ける筈のものではない、いくら短かいからと云つても、牛肉の一片を剪つてはふり出すやうなものではない氣がする。一片の感想にしても、一つのスタイルをもつた作品として、やはりそれ相

應の渾一味が必要なのではあるまいか。私のやうに感想を一つの詩として見ようとする場合には、殊にその感が深い。感想を詩として見ると、多く書ける時には、いくらでも多く書いていい筈であるが、然し、おなじ詩でも、いつもいつもおなじ境地で、おなじ抒情をくりかへしてゐるのでは意味が薄いのみならず、單に獨樂の如く同一面を廻轉するのみでは、內部生活の要求から云つても、不滿である。然るに、一つの問題に長く停滯しがたい感想では、どうもその弊に陷りやすい。それで、最近私は、單なる感想といふ形式に滿足できなくなつて來た。ある重大な問題にただ上つ面だけ輕く觸れただけですましてしまふのが物足りない。もつと深く考へ、細かく究め、强く沈潛して行きたい。さう思ふと、どうしても、評論の形式によらねばならなくなる。

然るに、都合のわるい事には、私は詩人といふレッテルを張られてしまつてゐるので、感想の名目ならばとにかく、評論となると、場違ひといふ目で見られて、その舞臺を與へて貰ひにくい。一體、近代は分業の時代であるが、文學の方面ですらも、分業的の氣風がどうも除かれず、とかく名目を重んじて、詩人とか、批評家とか、作家とか嚴密に區分する傾向が强いやうである。それにまた、現代の如きジャアナリズムの時代には、自己を明確ならしめるには、とりわけ專門的專攻を必要とする點もある。從つて、私などのやうに、ひとへに自分の興味に執着する我儘者は、他日よきメエトルにならない限り、その我儘を罰するに、旣にその興味の失はれた形式上の作品の提供を以つてせられねばならぬ。

かくて、短かい感想ならば、彼などもよからうと云つた具合で、月に十あまりの二三枚か五六枚の小感想を求められて、いつか萩原朔太郎氏が云はれたやうに、詩人として、餘興的に出現せしめられるといふわけであらうか。(序ゆゑ一言する、萩原氏がいつぞやの不同調で、私のアフォリズム『禁斷の才能』を引いて、私が「文壇の低能」を憤慨してゐるやうに紹介されたが、あれは氏の立入つた主觀的解說で、私の文意ではなかつた。些事ゆゑ別に辯解もしなか

つたが、もし誤解された方もあれば、『文藝市場』昨年四月號にあるから、就いて見られたい。低能などいふ原始語を私は好まないし、また、かかる自己本位な單純粗大な感情の露出は、アフォリズムに最も忌むところである。)

餘興は敢て妨げぬ。ただ、さういふ意味の專門家たる事は、あらゆる他の專門的演出とともに、私は手際よく相勤め得ないのを頗る遺憾とする。私は少しくエッセイを書いてみたいと思つてゐるが、しかもエッセイストにならうと期するのでもない。現に今でも一つの小説に三年越しこびりついてゐるのである。こんなドン・フアニズムのためでもあるか、いつであつたか、私は詩人として小説を書くのは、詩に不忠實であるといふ理由を以て、意外なる非難をさへ受けた。私は自分の棲んでゐる世界のあまりの息苦しさに、せめて一つの窓をほしくなつた。人間は專門家として生れたのではない。彼の專門はその人間としてよりよく生きんがための手段にすぎないのだ。元來、私は人間の天職とか職分とかをすら疑ふものである。少くとも、文學の世界でだけなりとも、自由なる自己開展を是認して貰ひたいではないか。

歐羅巴を重んずる人には、彼地の實例を少しく告げて、文學の各部門の往來に不自由なき事を證したい。現代に於いて、歐羅巴の文學者は、その文學的活動を一つの形式に局限する必要を見ない事を、事實上に證言してゐる。獨逸のトマス・マンや、シュテファン・ツワイクや、エミイル・ルカや、其他更に後進の人々にしても、佛蘭西のロマン・ロオランや、アンドレ・ジイド、其他多くの人にしても、勞農露西亞の、英吉利の多くの文學者にしても、日本の如く、單に小説家であつたり、單に詩人であつたり(詩壇的意味の)、單に評論家であつたりはしない。彼等は凡ての形式に據る。自己を多面的に表現せんと欲する。ショオなどは單なる文學者でさへもあらうとしてゐない。ルカの如きは一面、哲學者でもあるのだ。現代の世界思潮に追隨する日本も、追々さうならねばならぬ事情に迫られてゐると思ふ。これが理由は、別に論ずる折りもあらう、今は略す。

とにかく、私は好きな時に好きなものを好きなやうに書いてゐたい。そのため時に合はず、えたいの知れぬものと思はれ、人々に理解されなくとも、當然の報いとして、これを甘受しなければならない、寂しい事は寂しいけれど。

×

この頃ほど、流行といふものの恐ろしい力を痛感させられてゐる事はない。流行である、一切は流行である。流行に合するものは全、これに反するものは零。なぜラヂオは面白いか、流行だから。なぜ横幅の廣い女までが洋裝するか、流行だから。なぜ……は傑作か、流行だから。なぜ……は書きすぎてヘトヘトになつてゐるか、流行だから。流行だから——流行が萬事を決定する。善いも惡いもない、ただ流行があるのみだ。あの古臭い、しかもかなりナイーヴなテエヌの所謂永續的價値を否定するとき、文學上の作品の價値の最後の決定者として、流行は神である。

『隨筆』十二月號の『文人の運命』といふ文中に、片上伸氏は、ピリニヤクが詩人エセニンの死因を評して、「現實と步調を合はし得なかつたからだ」と云つたと書いてゐられる。また、「詩人が現實と步調を合はし得ない時、彼が誠實であればあるだけ、懷疑と苦惱とは深刻だ」といふ意味の、詩人ブロクの言葉をも擧げて、巧みに「現實に步調を合はし」てゐるピリニヤクのために、一面喜び、一面憂ふると云はれてゐる。この一節は、私にとつては、非常に意味深い暗示として響いた。

現實に步調を合せると云へば、いかにも立派な事のやうに響くが、これを言ひ換へれば、卽ち、流行に追隨する謂ひに外ならぬではないか。大勢に順應する謂ひに外ならぬではないか。かくて、あらゆる無定見と、無節操と、事大主義とは、つひに新しき美德となるのではあるまいか。曾つて賞讚せられたものは、今や非難せられ、曾つて非難せられたものは、賞讚せられるやうになるのではあるまいか。我々は斷乎として自己の個性を保持するを以て、文學者としての、その義務且つ權利であるといふ思考法に慣れて來た。今や我々はこれを恥ぢつつ爲さねばならぬのではな

からうか。最近のコンミュニストや、其他の人々の言說によつて、私は屢々考へしめられてゐる。我々は全永遠（何たる囈語！）を捨てて、現在の一點に立つとき、はじめて現實の、血肉の、全一の人間である。かくて、我々には流行の外の何物もない。一切價値の顚倒の時代が、既に我々にも來たのであらうか。

流行現實家に從ふのは、畢竟時代と步調を合せるものである。それは單にプロレタリア文學論のみでなく、あらゆる現行の勢力への追隨を意味する。そして、ジャアナリズム精神は、かくあらねばならぬものとして、これを我々に强要する事なきか。ジャアナリズムの可否について最近かなり問題が起つたが、可も否もない、現代はジャアナリズムの時代である。我々文學者は凡て（多少の例外はなきにしもあらぬとしても）ジャアナリズム治下の人間である。これ、不可抗的の現實である。かくて、流行の威力は、文學者を支配し、價値の幻影は、卽ち眞の價値である。

この流行、偏見、幻影等の威力とその對策とについては、昨秋、『藝術評價と價値の幻影』と題する一文に詳說して、これを『新潮』に寄せて置いた。あまり長かつたためかまだ出ないが、それは一面、ジャアナリズムとクリティシズムとを相對立する二つの精神と見て、批評家は絕對的にジャアナリズムの精神から獨立しなければならぬ所以を論じたものである。で、それについて誤解の虞れなきよう、その發表にならぬうち前以て斷つて置きたいと思ふのは、その場合のジャアナリズムの精神とは、現今普通に云はれるジャアナリズムその物とは些か異つてゐて、無批評的、雷同的、盲從的、事大主義的のあらゆる精神をさしたのであつて、かの新聞雜誌編輯者を直ちにジャアナリズム精神の代表者と看做したのではないといふ事である。批評家であらうと、作家であらうと、ジャアナリズム精神に囚はれた場合は、ジャアナリストに外ならない。と同時に、普通の意味ではジャアナリストの名を以て呼ばれる編輯者も、批評的に、獨自一個の見識に則つて、その所信に忠なる場合は、同時に立派な批評家である。そして、私の理想から云へば、編輯者が同時に批評家であつてほしいのである。

又、或る意味では、現在といへども多少ともあれ批評家を以て許していいと思ふ。ただ十分によき批評家ではない事が屢々あるのを惜しむ。但、資本家の制肘があり、商品としての制約がある限り、その折角の批評眼も施すに餘地のない場合も多々あらう。今の多くの場合に、我々の不満足の點あるは、それらに基因するかも知れない。それゆゑ、せめてかかる制肘なき獨立自由の批評家に、私はジャアナリズム精神の排除を望んだのであつた。私の所説は文壇常識と、その用語例とに則らないがため、時々誤解があるから、一寸茲に書き添へておきたいと思ふのである。

大正十五年十二月二十一日(「不同調」二月號所載)

大正文學とその評價

明治文學研究が流行の勢ひをなしたと思ふと、既に大正文學すらも、古典の取扱ひを受けるやうになつた。これは慌ただしい我國の現狀から云つて、正にその然るべきところであらうかとも思ふが、聲價未だ定らぬ現代文學を古典扱ひにするのを、出版界の焦り氣味と評した東京日日新聞の批判にも一理あると思ふ。改造社の『現代日本文學全集』について、その人選よろしきを得ないとか、各作家の評價が正鵠を得てゐないといふ聲が、いろいろとあるやうであるが、然し、この種の企ては、何人の手になされても、萬全を期しがたいもので、そこに各作家の間に不平の聲も起れば、局外からの非難の起るのも、また止むを得ないところである。明治文學ですらも、從來一般に行はれてゐる評價のいが、當を失してゐるものの尠くない事を感ずるのに、ましてや、殆んど今日の文學たる大正文學の、正當な評價のいかに困難であるかは、云はずして明かであらう。

既にその眞價の磐石の如く確定せる古典と、評價ほぼ定つてゐる近代文學との、一粒選りの傑作をのみ網羅した新

潮社の『世界文學全集』は、その點極めて穩當であり得た。ダンテの『神曲』より新興文學集まで、まづ大體、あれが動かぬところであらうと思ふ。もつとも、世界の文豪連が地下でこれを知つたなら、やはり苦情を云ふかも知れず、また、我々も「吾が佛」のために、なほ一層も二層も辯ずべきであつたかも知れない。しかも、その各自の「吾が佛」の餘りにも多きをいかにせんや。實際、あれだけに決定する迄に、新潮社樓上、いかに多くの討議が行はれ、その說を徵せられた諸大家の間に、いかに多くの意見の懸隔があつたか分らなかつたのだ。とにかく世界の名作と云はれてゐるものの間にも、その人の立場と趣味と傾向とによつては、いかに多くの異論が出でた事よ。もとより、ダンテやシェクスピア、ゲエテ、トルストイ、ドストエフスキイなどの、大詩人中の大詩人に於いては、誰れも文句はあり得ないとしても、イプセン、ロマン・ロオランなどに至つては、既にその待遇について、いろいろの說が出づるを得たのだ。微力な後進として、私は諸先輩の說を聞くのみであつたが、その際、藝術評價のいかに至難なるか、眞價の確定のいかに長年月を要すべきかを、痛感せずにはゐられなかつたのだ。然るに、改造社の場合は、何しろその眞價の決定してゐない現存の作家たちを相手にしたのだから、愈々以て面倒な話で、自らジャアナリスティックとなつて、主として世間的並びに文壇的人氣に憑據せざるを得なかつたのも、あだかも『改造』に某々の作を載せて、某々の作を載せないのはけしからんと云ふが如きものではあるまいか。要するに、それは『改造』の延長にすぎないのであるから。

これを非とするのは、出版者として當然の次第であつたらうと思ふ。そして、

昨秋、私は『藝術評價の價値の幻影』と題する評論を草したが、其後、かうした問題の續出によつて、自分の捉へた問題が、自分の豫想以上に意味のあるものであつた事を思はずにはゐられない。その論中、私は特に批評家があらゆる幻影を排しなければならぬ所以を力說した。然して、人氣は一つの幻影である。それゆゑ、眞價の人氣に添はぬ場合、批評家がこれを非とするのは、當然の義務であらう。然し、世間的人氣のゆゑに、直ちにその作家を低級とな

すが如きは、これまた排除すべき偏見でなければならぬ。殊に、今の文壇的批評家の或るものは、文壇的人氣に雷同するのみなるに於てをや。元來、世間的人氣と文壇的人氣とは、等しかるべくして大いに異るかに見受けられる。例へば、倉田百三氏や吉田絃二郎氏の如き、世間的人氣を負うた文學者も、文壇的人氣は決してそれに並行するものではない。否、むしろ反比例する。倉田氏の如きは、文壇の氣受けのわるい事に於いて零點に接してゐる。曾つて私は時事の月評中で、氏の『俊寛』を激賞した事によつて、文壇から幼稚と見なされ、文壇的異端者と見なされた位だ。これに反して、志賀直哉氏の如きは、文壇的人氣の最高位にある人であるが、世間的人氣がそれに附隨してゐるかと云へば、頗る覺束なく思はれる。この兩面を兼有する人は、恐らく武者小路實篤氏位のものであらう。

而して、抑もこれは何に基因するであらうか？　自分には、それに對する若干の心理的觀察と、人間性の弱點に關する二三の悲觀的見解とを抱有するも、それはしばらく保留する。その代りとして、一つの疑問を提出してみたい。即ち、世間的人氣が、換言すれば、民衆の評價が、權威なきものであつて、文壇的人氣――即ち、文壇人間の評價――のみが、ひとり信憑すべきものであるか？　若しありとすれば、その論據は果して奈何？　これに對して、我々は大體左の如き回答を得るに相違ない。民衆は畢竟愚衆である。彼等には何等の定見もなく、附和雷同するか、又はその低級な趣味によつて、評價選擇するに過ぎぬと。果して然るか？　否々、自分は民衆のなほ信ずべき無言の批評家である事を思ふものである。が、かりに一歩をゆづつて、民衆の評價を信じがたしとするも、その故に文壇人の評價を無條件に信憑し得られるだらうか？　我々は何等の定見なく、附和雷同する文壇的批評家を有たぬだらうか？　また幸ひに、此種の名批評家なしとするも、我々はそこで大いに戒心すべきものを見出す事はないか。何となれば、我々はそこでは、民衆の如く、全然利害關係を超越した自由な選擇の立場に立たずして、同業者としての利害の上に立つてゐるからである。そこで黨派關係や、其他の文壇的事情を指摘する事は、或ひは當然の用意かも知れぬが、それ

は我々には興味のない事だから省く。

ところで、小説などの場合は、とにかく多くの專門的な批評家もあり、一般に注視せられてもゐるので、これが批判に際して、偏見や、私情や、雷同やは、識者の一顧するところとならぬのであるが、それが一般に閑却せられてゐる詩の方面となると、批評といふものが絶無で、各詩人が各々自己を主張し、結局最も高い聲を出したものが勝つといふ有樣で、詩に拙い代りに恐ろしく理窟つぽい民衆詩人などが、その執拗と頑迷とによつて威勢を張り、彼等の偏見と私情と黨同異伐との横行に一任してゐる現狀だ。もとより、眞の詩人であればある程、かかる喧騷を厭つて沈默するから、結局、かかる狹量なる私心と卑小なる悪意との外に何等の批評的眼光も有せぬ民衆詩人が、盛んに怒號して、蟹の如く横行するのも、又止むを得ぬ所である。彼等程同業者的心理の鋭敏に働くものはない。されば、かかる人々によつて編せられるアンソロジイなどが、いかに不公正で、偏頗で、狂的なものであるかは、今更斷はる迄もない事だ。それ故、日夏耿之介氏なども、その私情を難じて、その評價が何を標準としたものか分らぬのを嘆ぜられた。然るに、その同じ詩人が、日夏氏の詩史に對して、不公平であるとか、偏頗で亂暴であるとか云つて反噬したのは、面白い觀物であつた。詩人はこれ程無反省であつていいといふ事を天下に呼號したのは、實に傍若無人、勇敢な行爲である。

この詩壇の事例は、藝術評價に於ける甚しい酩酊の最も極端なる例であるとするも、それを以て、直ちに文壇的評價の正確優秀を立證する事とはならぬ。たとひ識者は齒ひせずとも、そこには多くのいかがはしい批評があつて、徒らに昏迷を來すのを常としてゐるのである。然し、それは必ずしも評家のみの罪ではない。いかに名批評家といへども、神樣ではない、必ずあやまちはある、(例へばマシュウ・アーノルドが、ジョルジュ・サンドをバルザックよりも長く殘るであらうと云つた如きその實例) 然らずとするも、絶對の評價は、一二の批評家の手によつて定まるべきものではない。これを決定するものは、多數の意見の一致と、歲月の力とあるのみ。

これを要するに、大正文學については、未だ正當な評價を下すべき時期に達してゐないのだ。啻に今日のみならず、明日、明後日もなほそのためには未熟であらう。それは今後十年、二十年、或ひは三十年、五十年の歳月に待たねばならぬであらう。但、かやうな考へ方は、或ひは極めてナイーヴな子供臭いものであるかも知れない。菊池寛氏は藝術の永遠性を否定する人で、曾つて、大正七八年頃であつたか、『藝術と後世』といふ感想を書かれた。當時私もそれを一讀して、かなり共鳴するところあり、その月讀賣に書いた月評中で、それに觸れて、不滅の事業を高唱する人も、その不滅を突きつめて考へれば、メタフィジックの世界に入る、そしてそこでは一切の見方が一變すべきであると云つた事を覺えてゐる。最近芥川龍之介氏は、小說を抒情詩に比して一時的の藝術である理由を述べられた。それもおもしろい見解でない事はない。然し、文學的作品の生命は、個々の作品の永續的價値に關するので、必ずしもその種類によるのではないと私は思ふ。よしんば永遠を求めようとも後世を無視しようとも、作品は作家の意志に關せず、その價値だけの永續性を主張するであらう。そして、我々の間になほ古典を尊重する念慮の失はれぬ限りは、西鶴、秋成が依然として今日も我々の感興を惹く限りは、大正文學も古典となり得るものであり、大正の小說もまた後人の興味を惹くであらう、そして菊池、芥川兩氏の小說も、それに相當するだけの敬意を拂はれるであらう事を私は疑はない。だが、今日、誰が滅び誰が殘るかは、殆んど我々の豫測をゆるさぬものがある。過去の批評家の同時代の作家に對する評價と、その現在の一般的評價との餘りの懸隔は、いかに屢々人を驚かす事ぞ。

後世の問題はとにかくとして、藝術品とその評價との間の微妙な關係は、美學的よりもむしろ心理學的に興味のある問題である。私のそれについての一文は、必ずしも十分に云ひ盡し得たものとは思はれない。私はこの批評上の根本問題に對して、より力量ある批評家のより明晰精到な考察を俟ちたいと思ふ。

（昭和二年二月三日（「文藝公論」三月號所載）

書物の中の人

書物と頭腦とがぶッつかつて、空ッぽな音が出たなら、
その罪は常に書物にあるのだらうか？

リヒテンベルク

個性の勝利

——橋田東聲氏の『自然と韻律』を讀んで——

「友よ。
人はその個性を更改し得るや。僕は思ふ。それは出來ないことだ。そこに悲劇の誕生がある。藝術の出發がある。」
『自然の韻律』の著者は、その自序に代へた「個性の悲哀」の中に、かう書いた。
「あまりに獨善的であるかも知れないが、私は戰つて勝たんよりも退いて「ひとり」の安さにゐたい。卑怯かも知れないがこれが私の本然である。」とも書いた。
「人ひとりを十分に愛する事は容易でない。完全に愛し切る事は殆ど不可能の事だ。多くの人には、そこに油斷がある。愛は努力だ。」とも書いた。
『自然と韻律』の主要の部分を占めてゐるのは、「韻律論」「生命の詩歌」等の詩歌論と、「批評と回顧」中の歌壇評と

である。これらは詩歌の本質を考究してゐる、また、短歌の世界に拘からぬ興味をつないでゐる自分には、さまざまの意味で教へられ、益するところの多かつたものであるが、それらに對しては、私よりも更に適當な評家があるに違ひないと思ふから、ここでは、私自身により適した題目について語りたい。それは主として「愛憎の世界」「幼ない感想」等の項目に收められてゐる著者の個性論であり、愛の本質論である。總じて著者の人生觀である。その人生觀の背後にある著者の人間である、その生き方である。

「個性は運命だ。人力以上のものだ。」と著者は云つてゐる。おなじく個性の問題に惱み、その順逆に惑ふ事の多い私のやうな人間は、この書の中に、宛ら自己衷心の聲を聞くやうに思つた。曾て意力の强靱をもつて知られた一人の英雄は、「人の一生は重き荷を負うて遠き道を行くが如し」と云つたが、我々にとつて、その個性は、おもふに我々の最大の重荷であらう、生を終ふるまで取除かれる事のない重荷であらう。「生れつき、小心な、氣の弱い人間」にとつては、確かに重荷と云ふより外はないであらう。著者が惻々として訴へてゐる、弱氣な、寂しい人間の悲哀を、私もまたあまりに多く知りすぎてゐる。

弱いものは、弱さの故に、强さにあこがれる。そこに自己厭惡が生れ、自己叛逆が行はれる。ニイチエが現れてから、獨逸に於いて、いかに多くの弱い超人の謳歌者が現れたかを、獨逸文學に親しんでゐる人は、よく知つてゐる筈である。否それよりも、私達はあの勇ましいザラツストラ、ニイチエその人の述作の中に、その激しい自己叛逆の叫びを聞くやうに思ふ。ニイチエの哲學を、その超人說を、强者の道德說を、彼のあまりに弱い性格に對する反抗と見る俗說を駁して、ニイチエの決して弱い性格の人でなかつた事を、曾て阿部次郎氏が說かれた事がある。あの甚大の孤獨に堪へたニイチエを單純に弱いといふ言葉で評し去る事は、もとより許されない事であらう。然し、ニイチエが優しい、傷つきやすい魂であつた事、彼が自己叛逆性の人であつた事は、私達の認めざるを得ないところである。ワ

イニンゲルは、ニイチエのワグネル並びに禁慾者流への憎惡と、ビゼエ、ケラアへの愛好の中に、全然的の非牧歌的人間であつた彼自身への憎惡を見た。これは意味深い暗示ではあるまいか。我々はニイチエの一生の行藏を見る時、彼の所謂「克服」が、常にこの自己叛逆である事を認めるのだ。

ニイチエの如き人は、確かに中庸人にあらずして極端人である。この稱呼は、私はこれをエミイル・ルカに負うてゐる。ルカによれば、極端人とは、絶えざる激動と意欲との中に終始する悲劇的人間であり、中庸人とは、調和と平衡とに安住し、平和を愛する牧歌的人間である。もとよりこの分類は、個人の價値問題に關係するものではない。が、「超人の世界よりも、凡人の寂しい片隅の幸福にしみ〴〵と浸りたい。私はその心安さと平和とを喜ぶ。」と云ふ時、橋田氏を中庸人と看做す事は恐らく誤りではあるまい。

ルカの見方も面白いが、私自身は更に、人間の中に荒魂(あらたま)と和魂(にぎたま)とを見たい。(賀茂眞淵の云へるそれと等しきか否かは知らないが)一は進んで戰ひ、主張し、征服しようとする。そこには激烈な意欲があり、愛憎がある。一は退いて自己の狹い世界を守り、調和と共存とに生きようとする。ニイチエはその優しい性情にもかかはらず、荒魂であつた。荒魂はひとり他と戰ふのみならず、また自己とも戰ふ。即ち、自己叛逆である。そして、人間の自己叛逆は超人の理想である。和魂にはいかなる意味の戰ひも堪へられない。他人を侵害する事はもとより、自分の運命にすら反抗する事をしない。彼はその性格に安んずる。靜かなレヂグネエションの心である。そして、私には橋田氏がティピカルな和魂であるやうに思はれるのである。そして、これは中庸人と云ふよりも、一層氏にふさはしく思ふ。

氏は「私は草の刈られ、木の伐られるのにさへ同情し、心を傷ましめます。外光の下に白い伐り口を見せて、伐られた屍骸木なぞの立つてゐるのを私は平氣で見過ごすことが出來ません。」と云つてゐる程の優しい魂である。氏が跪く心を求め、感謝する心を說く時、私達はその和魂をまのあたり見るやうに思ふ。もとより氏もまた、「生きるために

は、人は強くなくてはならぬ。私の如きはもつと強くならなければ到底活きて行かれぬ人間である。私はもつと強くなつて、明るく、はなやかに生まれたい。」と望み、「弱いといふことは、私に運命的な悪である。」と歎ずる事がないのではない。

人間の生活は、善かれ悪かれ不斷の戰ひである。社會は萬人の萬人に對する戰ひの場である。いかなる和魂といへども、その約束から免れる事は出來ない。さればこその個性の悲哀、性格悲劇！

倉田百三氏の『出家とその弟子』の唯圓の父や、有島武郎氏の短篇の『親子』中の父なる人の言葉には、世間に揉まれ、世間を知つた人の悪の肯定と攝取とが現れてゐる。そして、その生活信條には、實際生活によつての權威が附與せられてゐる。

同時に、そこには、多少ともあれ、自己叛逆の叫びが聞かれる。然し、橋田氏は自己叛逆的の人ではない。氏は結局、「人間は自分の個性に逆うて生きることは出來ないものだ。個性は流れだ、それに逆ふ事は出來ない。人は運命の前に素直であることは正しい。」といふ達觀と智慧とに落着くのである。「自己を空しうして自己を生かす道である。自己を他に與へつゝ他を攝る生き方である。下座卽上座の心である。」ところの「智慧の攝理」によつて、氏はあらゆる運命悪を調和の世界に轉移せしめんことを願つてゐる。氏が有島氏の「惜みなく愛は奪ふ」の思想や、倉田氏の「積極道」の思想に直ちに、同じ得られないのは、もとよりそのところである。有島氏の所說は、私から見ればやはり自己叛逆的の思想であると共に、より微妙な解釋を下せば、その愛を與へると見ずして奪ふと見るところに、その自己抑損的な性格のあらはれをも認めるが、それはまた別箇の問題である。

橋田氏にとつては、「我執は悪である、反社會性は罪である。」氏は個人主義的思想の荒凉に堪へられない。氏は社會の共存的精神を重んずる。環境のために自己を殉ぜしむるための努力に非常な意義をおく。この努力を、氏は個性の

社會化と呼んでゐる。それは大きな愛である。そして、「愛は無盡藏の智慧である。」しかも「愛は努力だ」。

　信じ愛する心は、しばしば裏切られ、はづかしめられる。或時には、むしろ信ずるから裏切られ、愛するために憎まれるのではないかと疑ひたい程である。何故のこの不合理であらうか。それは分らない。ただそれが止むを得ない人間の因緣である事を知るばかりである。因緣と知つてもそれは苦い、その苦い經驗を、この著者も屢々、且つ深く味はつた一人である。そして、それに諦め、それに堪へ、且つそれに寛容と愛とで酬いることを願つてゐる。堪へる力は消極的な强さである。人を恕す心は、最も强い心である。弱きに徹して强し。「積極道」の勇士が强者ならば、「捨身道」の行者は、更により强者でなければならぬ。生埋めにされるがままに平然としてゐた良寛は、私にとつては强者である。然し、良寛和尙自身にとつては、弱いとか强いとかいふ事は、無意味な、空な名にすぎないであらう。

　ここに於いて、私は橋田氏の良寛の愛好に、特別の意味を求めずにはゐられぬ。氏は世間人としての生活に於いて弱いかも知れない。然し、それだからとて氏がその內面性に於いて、その魂に於いて弱いと云へようか。氏が超脫への力を持たない人と云へようか。果して、私は氏から次ぎのやうな强い言葉を聞く。

「私は孤獨である。否、人は孤獨なものである。けれどもこの孤獨にたへ自己本然の大道をまつしぐらに進みゆくうちに人生の歡喜はあふれる。他をたのむの要はない。」

　弱氣といふ事が、他に求め、他によりすがるのみであるならば、それは惡である。然し人がその孤獨に堪へ、自己の「個性と環境の間にあきらかに一線を劃しておいて、さて個性に生きること」を得る時、その人は强い。それはもはや個性の悲哀ではない。そして、これを可能ならしむるものは、藝術である。即ち、藝術は單に個性のうめき、個性の悲劇でなくして、個性の勝利であらねばならぬ。

　私にとつては、孤獨は單なる狀態ではなくして、一つの行爲である。眞實の深い意味の孤獨とは、まづ、一切の比

較を超脱することである。聖を超え、凡を超え、善悪を超え、强弱を超え、成敗を超えて、――そこに孤獨なるものにのみ許される廣大な自由の境地がありはしまいか。私はそれを豫感する。もとより、私にとつては、それはまだ知識にすぎない。それが知識にすぎないうちは、無意味である事を自分もよく知つてゐる。けれども、たとへそれが日常生活に於いての、行住坐臥の間に於いての體得とはなつてゐないにしても、私達がその藝術に生きる時、その制作に全心を打込む時、この法悅の境地は、我々にも許されてゐはすまいか。その時、我々の外に世界は存しない。從つて、そこには何等の比較も存しない筈であるから。

私は橋田氏が藝術家であつた事を喜ぶ。そして非エゴイストの藝術が、良寛の藝術があり得た事を喜ぶ。それは孤獨な者の寂寞道である。弱きに徹するところに弱きものの勝利がある。私もこの心持を一篇の詩に託した、「一本の寂しい道が通つてをる。私はゆく。行くのだ。さあ、行かう。」

から著者は叫んだ。新生の序曲――

行け、この寂寞道を！

此の路を行かずば、つひに道を得じ。

大正十四年一月二十二日（「覇王樹」三月號所載）

運命の悲劇

――加藤武雄氏の『審判』を讀む――

世にはさまざまの運命がある。時として、小說よりも奇なる、數奇の運命がある。魂をゆり動かすやうな運命があ

る。さうした一つの運命を捉へて、その藝術化を志したものが、加藤武雄氏の近作『審判』である。この作の素材となつた某氏の手記を私は讀まなかつたので、事實がここにいかやうに創作化されてゐるかを論ずる事は出來ない。また、それは藝術家の世界の自由について了解するところあるものには、批評といふよりも餘談に屬するであらう。とにかく私はただ與へられた儘の作品から受けた感銘を語らうと思ふ。

これは不幸なる母と子との悲劇、兄と妹との悲劇である。何者とも知れぬ闇中の影が、この物語のうしろに潜んでゐる。それゆゑの凡ての受難、この母、この子。人、人を裁き得るや、人の弱きがゆゑの罪と不幸とを、神これを裁き得るや。これは熱烈なる信者にとつても、躓きの石であらねばならぬ。作者の意味する「審判」は、天にか地にか、現在にかはた未來にか。我々は直ちに、そこで我々日本人の心に傳統的に浸潤する宿業の思想に觸れる。人間の力のいかんともしがたい宿命。思ふに、そこにはただ虚無的肯定といふ大磐石が横はるのみであらう。少くとも、表面的な基督教的信仰は、そこでいかに無力であらうか。主人公がその幼時の生活に幸福を想ふのは、はかない慰めにすぎない。

暴力をもつて一人の處女を辱めた獸のやうな一人の男、その男の血を自分の中に見出すとき、何の天分、何の才能ぞ、この惡魔の極印を打消す道德や宗教があり得ようか。少くとも、それはありふれた道德、宗教の範圍を脱してゐる。さればこそ、その母が知死期の叫びは、その子の顏――わが懷に抱かんとしたその子の顏を、一個の不逞人なるその子の父と見たではないか。

母への憎惡は見えざる父への何であらうか。「許せぬ許せぬ」と叫ぶ心、「許したい許したい」と願ふ心、その心の爭ひには深い人間的なものがある。

『審判』の主人公英三の苦惱は、極めて人間的である。そこには何等妥協的なる、卑小なる墮落がない。彼は勇敢に

その苦惱を生きてゐる。その懊惱は、卒然として自分の戀人を肉親の妹として考へなければならぬ衝着によつて、最高度に達する。これが彼の母への憎みの、また、全篇の効果の重力である。辛うじて免れた畜生道、なぜ「よかつた」と思へないのか、理性と感情の齟齬、悲しき母の物語の後にも、病める心の惡夢がある。

英三の約束せられた女は、肉親の妹か、ソドムの女か――そこにはおなじ孤兒院の仲間で、女給となつて頽廢した生活を送つてゐる美代子がある。破船者と破船者との戀。お互ひに不仕合せ同志で……だが、不仕合せが二つ重ればより多くの不幸を生む。不幸はただひとりある事を望むからである。否、ただひとりでしかありえないからである。愛は憎みである、が、憎みよりも愛が呪ひである。主人公の母の母としての愛は、かへつて主人公を破滅の中へと突進めたではないか。しかも、そこには愛の敎に生きるおなじ孤兒仲間の榊詮吉がゐる。二人の昔の仲間が、獸のやうな爭ひに困憊して倒れた中に、ひとり靜かに祈禱してゐる彼の姿には、ある和解の微光がささないではない。だが、基督敎の信仰がこの苦惱を救ひうるかを私はあやぶむ。それゆゑ、主人公が詮吉のもとに辿りつく結末は、私には未だ十分なる解決とは見えない。けれども、その外に生きるものの道はないかも知れない。それを越えたならば、ただ死、彼をそのやはらかな、或は冷かな懷に抱きやすらはせる死のみであらう。あだかも彼の母が、それによつて救はれたやうに。

天も地も灰色の一色に塗りつぶされて、細かな粉雪が煙のやうに渦卷いてゐる曠野のただ中を、のろのろと動いてゆく一つの影――そこに主人公の運命は象徴されてゐる。これは限りなき孤獨の姿である。それぞ、孤獨の悲劇とも呼ぶべきであらう。生れざりしならばは、この地上で曾つて發せられた上なき憐憫の言葉であつた。と同時に、また上なき呪ひの聲でもあつたであらう。明るい光も彼には痛い。その血に、心臓に刺を植ゑつけられて生まれた人は、生まれざりしならば――。

次ぎに、技巧的方面に移らう。作者は藝術小説と通俗小説との渾一境をめざしてゐる人である。その可否は今批評しない。現在の私には、この區分が未だはつきり理解せられてゐないからである。ただこの作について云へば、ここには所謂調子をおろしたといふあとは少しも見えない。作者の心は張り切つてゐる。題材の暗さに對して作品の印象の比較的明るいのは、全篇を通ずる仄かな殉情味のためであらう。これは作者の持味で、またその讀者に對する魅力を證明するものと思はれる。それに對して特にこれ以上心理の切り込み方の深さ、心理解剖の周密さに執するのは、私自身、自分の偏愛に阿るにすぎなからう。

題材がかくもストライキングなものであるに拘らず、その取扱ひ方が至つてデリケエトで、人物の布置などにも、綿密なる考慮が加へられてゐて、描寫の密度のこまかな事は、不用意に讀過する人でも容易に氣付くところであらう。そして、この悠々迫らぬ餘裕は、久しくこの作者の長篇に接しなかつた評者を驚かしめた。彼はこの作を、おなじ作者の出世作である『久遠の像』や『珠を抛つ』に比べて、遙かに高く評價せんとするものである。

大正十五年八月二十七日

溫かき心、小さき者への愛

——木村毅氏の『兎と妓生と』——

現在の我が文壇は、常に非專門的なので、詩人は詩人、小說作家は小說作家、批評家は批評家と、その職分がきつぱりと分れてゐて、おのおのその繩張りうちで、仕事を續けて行かなければ、容易に認められないと云ふ具合である。それにもまた、それだけの理由はあるだらうとは思ふが、多方面な才能と興味とを有する人は、そのために、多

少の不便を忍ばなければならぬやうである。

木村毅氏の初めての創作集『兎と妓生と』を讀んで、私たちのまづ感ずるのはこの事である。氏は今批評家として認められてゐるやうであるが、それがこの集に十分發揮されてゐる氏の作家としての天分を、割引して考へさせるやうな事のなからん事を私は切に望みたい。木村氏の『小說研究十二講』『小說の創作と鑑賞』の二著は、從來我國になかつた有益な研究で、一般の讀者のみならず、小說作家にとつても、一讀を奬めたい好著であるが、この集に現はれたる著者は、決して單なる小說研究家ではないのである。もつとも、氏の生來の研究癖は、玆にかなり濃厚に現はれて、時々微笑ましくなることもあるが。

卷頭の『兎の妓生と』は、著者の二十歲をあまり多く出ない時分の若書であるが、日韓併合後の朝鮮の一地方の衞戍病院と廓とを舞臺にして、叛徒李學士の女の妓生を點出して、最も大きな問題を取扱つた力作で、この著者の後年の作品を通じての特色である、あのすぐれた自然描寫と、小動物に對する愛情と共に、黎明期の若いインテリゲンチャのロマンティシズムが色濃く現れてゐる。

著者は序文中で、文藝固有の健全性を欲すると云つてゐる。その考へは、私の念頭にある人生主義の文藝といふものに、極めて近いやうに思はれる。そして實際、この著者はかつて正しい道から逸出するやうな事はない。その心が極めて健全な心であるからだ。例へば『傾勤兵』の時山に對する著者の見方によつても、それは直ちに看取せられるだらう。然し、それはひとり健全であるばかりでなく、また溫かい心である。それは人道主義の臭味なき人道主義として現れる。そして、その溫かい心が、何よりもこの集の力なのではあるまいか。

著者の溫かい心は、とりわけ兎とか猿とか、尾長鳥とか螟とか、さうした小動物に注がれてゐる。『猿』と『放生會』とが、最もよくその愛を代表してゐるが、『兎と妓生と』のなつかしい伴奏となり、『郊外の家』の魅力となり、『手相』

の詩趣となるものもそれである。著者の觀察癖は、更に木々や草葉に及び、自然の凡てに及ぶ。イワン・ツルゲエネフを自然詩人と呼ぶ意味で、この著者はいみじき自然詩人であると思ふ。

女性に對する著者の心持は非常に純粹で、理想家風である。例へば、『心』の久子にしても、『兎と妓生と』の李村里にしても、そして、彼女等への主人公の戀は同じくツルゲエネフを想はせる、幾分地上の濁りを超えた上にあるやうに思ふ。充たされぬ、はかない、詠嘆に終るそれである。その愛は『兎と妓生』とに於けるやうに、別後の手紙によつて表白されるか、『彫佛三昧』の靜かな彫刻家の戀のやうに、まだその心に祕められてゐるうちに、愛する少女の葬送を見るかする。殊に『心』のひかへ目な悲しい戀の歷史がそれを最もよく示してゐる。『放生會』の若僧了順と春日家の姉妹とのそれに至つては、もとより單純に戀と呼べないだけに、さうした感情の最も純化された深い境地を思はしめる。それは靜物畫を見るが如き印象である。

木村氏はけれど、ツルゲエネフほどペシミスティックではない。その健全な明るさは、幾分ビョルンソンなどを想はせる。ここで私は圖らず氏の故鄕の美作を想ひ浮べる。瀨戶內海沿岸ほど輕快でないと共に、私の山陰道の國々ほど陰鬱でもない、海のない山國、法然の國――そこからこのむしろアポロニエンである氏の生れた事を意味深く思ふ。あまり簡單で、意を盡さない憾みはあるが、詳論は之を他日に期する事として、木村氏の加餐を祈つて筆を擱く。

大正十四年九月十四日、伊香保にて（「國民新聞」十月十二日所載）

北國の自然と生活

――『憂鬱なる河』第一卷を讀む――

それはもう何年前になるだらう、五年、或ひは六年になるであらう。

その日は、とかく引き込み勝ちである僕は、珍らしく何かの會へ出て——さう、何の會であつたらうか、江口渙氏の會であつたやうな氣もする——その夜は遲く、十一時近くになつて、少し醉心地で、おまけに、さつきはげしい雷雨の通つたあとなので、その水たまりを危ふく避けながら、街の灯かげが、金茶色にギラギラと泥土に碎けてゐるのを、ぼんやり眺めやりながら、これからやらうとする文學上の仕事のことなどを、いろいろと考へながら、天神町の陋屋へと歸つて來た。

いつもながらのみじめな、低い家の玄關まで來ると、そこにびしよびしよになつた男持ちの古洋傘が、やはり濡れ放題になつた足駄とともに、立てかけられてあるのに、すんでの事つまづきかけるところであつた。そこへ家のものが、お歸りなさいと云つて迎へに出て、小さな聲で、ぜひ僕に會ひたいといふ靑年が來て、あの雷雨の間、ずつと話相手をして、もうかれこれ三四時間も待たせてゐるといふ事を、僕の耳のところで囁いた。こんな時分まで、はじめての客を待たせておくなんて、例によつて考へのない奴だと、一寸莫迦らしくも思つたが、それよりも、こんな時分まで僕の歸りを待つてゐたといふその靑年が、一寸不思議な人に思はれた。何か特別の用向きでもあるのかしらと、多少見當をつけながら、どんな人かナといくらか好奇心もおこつて、入つて行つて、電燈の光をかげにして、こちらに向いてゐる姿を見ると、さう、年の頃は十八九、ほつそりとしてゐるので、十七八にも思はれる、何かいたいけな若い人で、育ちのよさを思はせる上品なところがあつた。そして、やや憂鬱なものごし、神經質なものの云ひ方の中に、僕はある特別な感じを受けた。それは暗い柔かい寂しさといふやうなものである。そして、かういふ氣分をもつてゐる人は、一言で云へば、僕には好きな方のタイプなのだつた。で、二十分位ではあつたが、話をしてみると、遠慮がちな中にも、何處か毅然（しやん）とした調子で、頭のよさを思はせる話し振りであつた。やがて、その靑年は、黑つぽい

風呂敷包みの中から、かなりかさだかな原稿の一綴りを出して、これを讀んでくれないかと云つた。見ると五百枚位といふ見當はすぐついた。この若さで、すでにこれだけのものを書いてゐるといふ事が、僕にはまづ一つの驚異であつた。

と同時に、僕の頭はすぐ或る種のショックに打たれずにはゐなかつた。といふのは、その當時は丁度、かの「天才」とも「疑問の人物」とも呼ばれる少壯二十何歳の島田淸次郎氏の作品が、世の視聽を動かしてゐた最中であつたから、少壯名を爲すを競ふといふ風で、島田氏の追隨者とも云はるべき新人が輩出しつつあつて、長篇小説の原稿が、新潮社には大きなトランクに一杯たまつてゐるとか、誰のところには、行李に一杯來てゐるとか喧傳されてゐた時なので、この人もさうした一旦の功名に逸る靑少年の一人ではあるまいかと思つたからである。ところが、その原稿をところどころめくつて讀んでみると、僕の豫想は全然違つてゐた。それはかの浮はついた懸聲ばかりの勇ましい、當時の所謂長篇小説なるものとは、すつかり作のタッチが違つてゐて、むしろ地味な、落着いた、やや憂鬱な、淡彩畫の感じのする作風であつた。それがまづ僕の好感を惹いた。

だが僕には、當時、よしこの作品を讀んで、どんなに推服し、嘆賞し得たところで、すぐこれを書肆に推奬して、成功するだけの自信がなかつた。勿論今でもさうだが、僕は自分自身の事さへ覺束ない身分なのだから、それで僕は、まづ何よりもその事を話して、見る事をことわつたのであるが、靑年の方では、ただ讀んでもらへたらいいからといふ事なので、そんな押問答をしてゐるうちに夜も更けるので、例の僕の流儀で、一應敬意を表してあづかつておく事にすると、その靑年は大層喜んで、そして十二時過ぎた頃かとおもふのに、びしよびしよに濡れた傘を持つて、暗い闇の方へ出て行つた。

そのあとを見送つて、書齋にかへると、後から入つて來た家のものが、「いつかあの人が文壇に出られるやうになる

といいのね、出來るだけの事をしてあげて下さいね」と云つた。そこに置き去りにされた五百枚の原稿は、この言葉を感謝するやうに何かもの云ひたげに、こちらを見戍つてゐるやうに、僕には思はれた。勿論、僕にその意志が全くないではなかつた。若しこれを讀んで見て推賞に値する事を見出したならば、たとへ僕自身には何の力はなくとも、僕の周圍には、有力な先輩知友もあるのだから、僕が第二の青年になつて、これを抱へて飛び込んで行くのはわけはないと思つた。

この靑年が、『憂鬱なる河』の著者、佐佐木千之君であつた。かうして僕と佐佐木君との友人關係は結ばれたのである。そして、君はそれから度々、僕の家を訪ねてくれるやうになつた。けれど、その友情は、先輩と後輩とのそれではなかつた。これから共に、文壇に働いて行かうとする同じ「若さ」、同じ「望み」によつて、少壯者の共感によつて結ばれるそれであつたのだ。といふのは、僕自身が、その頃は――今とてもさうであるが――一介の抒情詩人、並びにハイネの飜譯者として認められてゐるのに過ぎなかつたので、僕は僕自身の希望、僕自身の精進の心を、佐佐木君の心の中に見たからであつた。若しさうでなければ、この交りははじまらなかつたであらう、といふより、こんなに深いものとはなり得なかつたであらうと思ふ。

では、どうして、こんな僕のところへなど、佐佐木君がやつて來てくれたのであらうか？ それは長い間、僕の疑問となつてゐた。もつとも、僕は一介の詩人とは云つたものの、當時、讀賣新聞や時事新報の文藝欄に、僕としては十分眞劍な態度で、月評をしたり、評論を書いたりして、批評家としては多少認められてはゐた。そして、小說の方は、長い間の腹案のものを書かうといふ意志もあつて、こつそり書きはじめたり止めたりしてはゐたが、勿論、世間には發表してはゐなかつたと思ふ。が、ただ、その自分の當面の問題から、『自傳と自傳小說』といふ小論を時事に書いた事がある。それを佐佐木君は讀んで切抜きまでしたと云つてゐた。この小論が二人を結んだ因緣の一つであつたに

違ひない、その外多少別の理由もあつたらしいが、それはここに書くまでの事もなからうと思ふ。

こんなわけで、佐佐木君は決して僕の後輩ではなく、むしろ小説に於いては、僕よりもさきに一篇を完成してゐたのである。それのみならず、僕は元來小説作家といふ柄ではなく、あくまで一介の詩人（アイン・ディヒテル）として、自分のぜひとも散文の形で書いておきたいものだけを、生涯の仕事として、せいぜい二つか三つの作品に書き殘せばいいといふ位の氣持なので、またそれ相當の才能しか有たないのに反して、佐佐木君は本來、小説家として生れついてゐると云つてもいいたちの人である。その事は、君が持つて來られた五百枚の原稿――それには「搖籃」といふ題がついてゐた――が、實に雄辯に僕に證明してくれたのである。もつとも、僕はかなり長い間、それを讀まないで、机の上に乘せておいたと思ふ。が、つひに一通り目を通した時、僕は作者の天分を認めずにはゐられなかつたのだ。勿論、そこには年少相應の單純さはあつた。然し、十八九歳の靑年、むしろ少年が、これだけ自分の年齡の力を生かして書いた例は、僕はあまり知らないのである。そこには、全く、少年の驚異そのものがあつた。あの少年時の潑剌たる感受の力が、水補の水の一滴も滯さない趣きがあつた。軟かい海綿のやうな感受性で、凡てのものを吸ひ取らずにはおかないところがあつた。その素直さ、敏感さ、それは爽かな、氣持のいい効果を擧げてゐたのだ――。

然し、これを今この儘、この形で發表するといふ事は、その結果の奈何にかかはらず、果して若い作家にとつて幸福であらうかといふ疑問が、やがて僕の心に起つて來た。あまりに年少にして世に出た人の悲劇は僕のあまりに知りすぎてゐるところであるし、それとは引離して、この作品だけで云つても、これだけで出るよりももつと大きな作品の序曲とする方が、より効果的であると僕は思つたのだ。で、僕はその事を忌憚なく佐佐木君に云つた。ところが、君は僕の意をよく諒してくれた。そして一層の努力をもつて、その仕事を續けて行かうと云つた。僕はそれをどんなに喜んだか知れない。然し、それが果して佐佐木君にとつて利益であつたか否かは、僕のよく斷定し得ないところだ。

が、一時の所謂長篇熱が退いて、文壇が着實にかへり、靜かな作品が顧みられだした時に、君のやうなケレンのない、堅實な作品が世に現れたのは、十分意味もあるし、またつまらぬ誤解に煩はされる虞れもなくてよかつたのではあるまいかとも思ふのだ。

ところで、僕はその後、佐佐木君のために正しい道を拓いてあげたいと思つて、當時僕の敬重してゐる先輩畏友として は、中村武羅夫氏と加藤武雄氏との二氏の外にはなかつたので、僕はとにかく、君をこの二氏に紹介して、二氏の知遇を得させて貰ふ事にした。爾來、君は二氏の許に出入して、加藤氏にはその作品を讀んで、批評して頂けたやうであるし、中村氏には、その助手として湘南の氏のお宅へ通つたりしてゐるうちに、隨分創作上に教を受けた點が多かつたに相違ない。一詩人にすぎない僕のところで、到底得る事の出來ない多くのものを、多才練達の作家である二氏の許で、どれだけ得たか知れないと、僕は信じてゐた。だから、今日佐佐木千之君が、作家として世に出られるやうになつたのは、僕なぞの力では全然なく、(これは云ふ迄もない事だが)全く、中村武羅夫氏、加藤武雄氏の知遇によると云はなければならない。が、また一面から云へば、君のよく忍んで、冷靜に作家道に精進し得た聰明も、また無視してはならないであらう。

そこで、愈々『憂鬱なる河』である——。

第一卷「北國」に次いで間もなく第二卷「苦惱の街」が現れる筈であるが、この「北國」こそ、君がかつて十九歳の折りに僕の許に持ち來つたかの「搖籃」に外ならないのである。もつともこの五六年の間に君はそれを幾度びか書き改め、推敲改竄を施したので、當初のそれとは餘程面目を異にしてゐる事は云ふ迄もない。丁度僕はまた山行を考へてゐた時なので、本が出來るとすぐ、見本を一册新潮社から貰つて、この山に來て、浴後の寄疊の上で一氣に讀了した。その現在の感銘に基いて、簡單に讀後感を記して見る事にする。

この全篇は、もと『若き日の惱み』と題せらるべき筈であつた、藤森成吉氏がその舊作『波』をこの題下に出版せられた爲めに、それを用ふる事が出來なくなつたといふ事情があるので、要するに、若き日の惱みに外ならないのだ。(勿論、まだ年少の佐佐木君に、中年の惱みの書ける筈もないのだが。)そこで問題はその惱みの內容である。その特殊性である。

僕は、この第一卷の舞臺となつてゐる靑森は知らない。然し、秋田までは行つた事があるので、北國の氣分は、幾分理解できると思ふ。憂鬱な自然は、直ちに人間に反映する。そして、その北方の憂鬱は、僕の十分共鳴し得るところのものである。ただ、僕のこの言葉によつて、若しこの「北國」から複雜な心理的葛藤を豫期する人あらば、或ひは、失望するかも知れぬ。然し、これは一つの長篇の序曲にすぎないのだ。一人の敏感な、纖細な、神經質な少年の生ひ立ちを描くに、疲れて、カスカスになつた老人の囘想を以てせずに、少年自身の生々した印象を以てしたのが、この一篇の全價値だ。全く、僕の讀んだかなり多くの幼年、少年期の描寫の中でも、これ位ゐ透明な、印象の鮮明な、感覺的なものを僕は知らない。それは全く、北國の林檎の如く爽かに、サクサクと、齒に碎ける快味をもつてゐる。なつかしい幼い日の夢と驚きとの中へ、僕等を誘ひかへす力がある。この一篇のチャアムは、まづその點にあるだらう。

少年は實に人生に對して敬虔である。僕等があまりに馴れ泥んで、無關心に看過するものの中にも、宇宙的の驚嘆と愛着とを見出す。そのフレッシュな心、白紙のやうな心――それを僕は尊いと思ふ。その尊い心が、この一篇の中にあるのだ。少年は大きな目を開けて周圍を見まはしてゐる。北國の自然と人生との種々相が、次ぎ次ぎに彼の網膜に映射する。そこには殆んど一つの說明もない、みな描寫だ。少年の眼は、正直に見た儘を、その筆に移して行く……そして自然は、何と美しく、彼によつて見られ、語られるであらう。試みにその春の復歸の描寫を見よう。

「暖かい春が、人々の心に、柔かい明るい光を投げて、涙ぐましい感情をそゝつた。空は明るく輝いて、空氣もなま暖かく、長閑な氣分が漲つてゐた。その頃になると、今まで堅く閉された冬籠りの日が遠ざかつて行つた。雪がこひが取りはづされた。今まで洞窟のやうに暗かつた家の中が急に明るくなつて、天井の木目なども、はつきりと見えた。そして、今までは氣のつかなかつたところに面白い形をした汚染を發見したりした。往來の雪路がだん〳〵に低くなつて、やがてもう、土を含むやうになつた。雪と一緒に泥土がこねかへされる。河は水量を増しその赤い泥水の中を雪が溶けながら流れた。さうした北國の春を知らせる泥濘、魚屋の小店に、靑く光る鰊が山をなすと、軒の廂を雪解けの水が打つた。」

然しこれはほんの一例にすぎない。彼と犬との交渉のあの巧みな描寫、恐ろしい大火、烏の糞の迷信の恐怖、少年の淡い戀、島の中での女中、それらは今見ても實によく書かれてゐると感心せずにゐられない。ただ自然から人生に移つてくると、もとより少年はその複雜な暗面を洞察する眼を持たないが、その點は今後の第二、第三卷に期待したいのである。

これは勿論、嚴密な意味で批評などと云はるべきものではないが、僕は長篇小説の一部分を見ただけで、決定的批評を下すだけの勇氣のある男ではないのだし、それに僕には、まだ藤澤淸造氏の『根津權現裏』森本巖夫氏の處女作『喘ぐ』倉田潮氏の『蝕れたる魂』のやうな是非批評してみたいと思ふ作品があるし、その他二三の人の作にも興味を有つてゐるので、いづれそれらと共に、他日詳論する機會もあらうと思ふ。

大正十四年九月十五日香山にて(「新潮」十月號所載)

藝術家の群れ

――『荊棘の路』を讀む――

相馬泰三氏は長い間、短篇作家として認められてゐた。そして短篇作家としては、極めてすぐれてゐる一人である。その『夢』や『六月』の如き諸作は、その當時さして評判には上らなかつたけれども、決してかの一時文壇を騒がした諸家の作品に劣るものではないと私は信じてゐる。其人が今度始めて筆を染めた長篇が此の『荊棘の路』である。私が此作に對して尠からず興味を有つたのは當然の事であらう。ところで此作には、既に廣津和郎(時事)、江口渙(新潮)二氏の批評が現れてゐる。私の批評は徒らに屋上屋を架するものかも知れない。が、また私にも何か二氏の言はれたより以外の事が言へないにも限らないから、相馬氏の一愛讀者として、ここにその讀後感を述べて見たい。

此作は數人の青年作家の生活を取扱つたもので、何等のプロットもない。あの漸層をなして、加速度をもつて進んで行つて、つひに最後のカタストロフに達する長篇の約束が無視されてゐる。これは作者の力が足りなかつた爲めか、それとも何か特別の考へがあつての事か私は知らない。いづれにしても大膽な試みである。そしてその結果は、一個の長篇と言ふよりは、むしろ無數の短篇の連續となつてゐる。長篇特有の壓力と緊張感とを缺いてゐる。然し、その故に私は作者を非難しようとは思はない。作者は全篇の統一よりも個々の生活に對する興味を重んじた、そして或る意味に於て、徹底自然主義に近い態度を示してゐる、その點で此作は特別の面白味をもつてゐるのだから。從つて此作には主人公は當然曾根たるべきであるが、彼は主人公の資格を有しない。されば此作は「無主人公小説」とも言ひ得べく、また主人公はその部分々々にあるとも言へる。曾根は多くの場合傍観者である。彼は自己を主張しない人物

である。一切のものをおとなしく受け容れてゆく人物である。尠くとも、此作に現れてゐる限りでは、讀者はそれ以上彼と相知る事が出來ない。作者は彼をもつと隅へ押しやつてしまふか、又は全體の生活なり思想なりの批評家として、もつとはつきり浮出さすべきであつたらう、例へば、高梨と香川との接觸に於て。然るにこの場合、曾根はあまり關與するところがない。この二人の性格と、思想との相違を前にして、彼は、最もよく自分を發揮すべきであつたのに。

之に反して、香川はより以上に主人公たるべき資格を有してゐる。彼は不幸な境遇の中に成長し、陰氣な臆病な性質を有つてゐる。その結果少年の純潔さを失はないでゐて、聖書を愛讀して、いつも愛の問題について考へてゐる。彼は時代後れの理想家である。理想家の弱味と愚かしさとを有つてゐる、彼はすべての高梨に對して永久の敗北に甘んじなければならぬ。高梨は彼の苦手なのだから。かうした彼が周圍のより力強いものからの壓迫と戰つて行く描寫はすぐれてゐる。が、お時さんの事件があつてから、高梨との格鬪に十年來の愛讀者なる聖書を失つてからの彼には、彼の精神には、もつと力強い、はつきりした變化が來るべきではないかと思はれる。上京後の香川はどうやら傍觀者にされてしまつた傾きがある。兎に角香川は作者が最も愛情をもつて描いた性格で、また最も成功した性格描寫であらう。

高梨は一種の小サアニンである。江口氏の如きは彼を目して「作者は惡德輕薄を代表させようと企てたのかも知れない」と言つてゐるが、私の受けた感銘では、彼はその言葉ほどに惡くはないやうに感じられた。そして作中で一番えらい男のやうに思はれた。然しこれは私のニイチエヤニズムかも知れない。いづれにしても高梨は十分に描かれてゐない。彼は此作に於てもつと重要な地位に置かるべき價値を有つてゐる。が、作者は彼に對してそれだけの興味と愛とをもつてゐないやうである。原口は十人近くの靑年作家中、最も作者の皮肉の的にされてゐる人物である。彼は

最優等生になつて學費を免除して貰ふために猛勉强をし、常に讀者受けを考へては成功してゐる男で、常に材料の蒐集を忘れない。作者は彼によつてこのプラクチカルな、拔目のない、悧巧な現代の靑年の氣風を批評しようとしたものかも知れない。それならば高梨に於て失敗しただけそれだけ成功してゐる。作者の潑剌たる才氣は、辛辣な諷刺とさへもなつて現れてゐる。

園部と、吉村夫婦の描寫は然し更にすぐれてゐる。園部は自分の無氣力からいつまでもその戀人と夫婦になれないでゐる男で、彼にとつてはその父は君主である、絕對の權威者である。かういふ靑年は現代に尠からず存在してゐる。彼の戀人の元子の日蔭者としての苦みは行屆いた書き方がしてある。吉村夫妻は作中の最も苦んでゐる人物である。吉村よりもその妻の兼子が一層はつきりしてゐる。二人が生活難と病弱とに抗して、いたましい藝術家生活を營んで行く樣は、我々には殆んど悲壯の感あらしめる。

兼子が逗子へ出かけて行く前後は特にすぐれた描寫で、思はずほろりとさせるやうなところがある。が、この作者の作風はどんな貧乏や病苦の悲慘な生活を描いても何處か明るく爽かな感じを與へる。北國の人に似合はしくない明るい作風である。金持の水車保科の空廻りは耳の痛い人の多かりさうな皮肉だし、彼の家に集つた連中の會話を見ては、作者もなかなか人が惡いと微笑まずにはゐられない。

吉村と香川とが上京して接觸する人々に於て、作者は現代の社會を端的に批評しようとしたものらしいが、村人を描いたのに比してはずつと落ちる。ブルジョアの代表者として現れた人間の中では、宮原などはやや道化者扱ひにされてゐるがなかなか鮮かな浮彫である。總じて作者が力をこめてかかつた人物よりも、比較的輕視されてゐる人物の方が鮮明に浮上つてゐる。作者は常に不用意な點に於て、その豐富な天分を示してゐる。

私の特に、此作に於て、何よりも感嘆せずにゐられないのは、その自然描寫である。此作には三崎地方の爽かな空

氣が、草木の香が、海の動揺が、その儘に感じられる。人間も自然の一部として取扱はれるとき、とりわけ生彩を帶びて現れて來る。從つて村人の生活の如きは、作者がさまでの努力を費さなかつたやうなのにもかかはらず、鮮明に描き出されてゐて深い印象を殘して行く。例へば落葉かきの老婆や、山芋掘りの爺さんなどがさうである。雜木林で二人の少女が話してゐるあたりの描寫はビョルンソンの『アルネ』などを想ひ出させる。また平三郎さんの生活を初め、村人の話には短篇とすればすぐれた短篇となりさうなものが尠くない。兎に角、自然描寫に於ては、恐らく相馬氏は現文壇有數の人であらう。

なほ私は以前から氏のユウモリストとしての天禀にはひそかに推服してゐた。然るにそれが此作には冒頭から皆氣もなく發揮されてゐるのは嬉しかつた。ユウモアは畢竟溫かい心の產物である。「ツルゲエネフの『獵人日記』を思ひ出した云々」と云ふ廣津氏の言葉は私の同感をもつて讀んだところだ。その自然描寫に長じてゐる點は姑く措くとするも、その心の溫かさに於て、その藝術家の「愛」の廣さに於て、その態度の自由さに於いて、相馬氏は他の何人よりもこの露西亞の大作家に接近してゐる。(兩者の大小はここでは問題ではない。)ツルゲエネフの然るが如く、また凡てのユウモリストの然るが如く相馬氏にも頗る皮肉なところがある。然しその皮肉はかなり辛辣になる事はあつても、決して冷酷にはならない。例へば原口の描寫の如きである。作者は彼等をも、更らにもつと重要ならざる、またもつと劣惡な人間をも愛をもつて描いてゐると思ふ。

若し夫れ全篇に漲つてゐる藝術的な香氣、洗練された筆致に至つては、私はただただ無條件に推服する外はない。此作には藝術化されない、なまなところは一ヶ所だつてない。私はこの氣持のいい老熟した佳作を讀み了つたとき、嘆息してかう言はずにはゐられなかつた。「ああ藝術家だ!」と。

大正七年六月「讀賣新聞」六月二十日所載)

女性の眞實

――鷹野つぎ氏の『悲しき配分』を讀む――

一昨年の秋の頃であつたかと思ふ、ある雜誌のためにその前月の創作の月評をした事があつた。その節、その名を初めて知つた女流作家の『撲たれる女』といふ、かなり長い作品が「新小説」に載つてゐて、それはむしろ地味な、どちらかと云へば寂しい作風であつたにも拘はらず、その細緻な情趣と觀察とは、その月讀んだどの作品よりも私の心を惹き付けて、その後も長いこと心に殘り止まつてゐた。その作者が、この創作集の著者鷹野つぎ子氏であつた。

『撲たれる女』は、郊外に新しい住居をもつたある家の主婦が、その引越した日に、突然怒罵の聲を耳にし、其後激しい打擲の音がピシリピシリと聞えて來た事から筆を起して、隣家の異常な生活を描き、そこの不具の老軍人、その軍人の若い豐滿な細君、不快な女中、泣き騷ぐ子供たち、この一家の周圍にある數軒の主婦達の心持を、かなり深く抉り出すやうに書いたものであつた。かうした新開地の空氣を描いたものは、これ迄も男子の作家のものに、尠くはなかつたやうに憶えるが、ここに見られるやう細かい觀察――例へば近隣の細君たちの間に惹起されるその騷ぎの波動など――は、到底男子の作家からは期待され得ないものである。私は女性の作家が、かうした自分の生活の基礎の上に立つて、その獨特の世界を私たちに示してくれる事は、非常に意味の多い事だと思ふ。

それで、この著者の諸作品が『悲しき配分』と題して、一卷に集められたのに際して、その作品に最初の批評をした一人として、忌憚のない讀後感を書いて見るやうにとのぞまれて、私は喜んで筆を執るのである、そして今、この水色がかつた地に、青く野菊の花をあらはした、いかにもこの人に似つかはしい靜かな裝幀の本を開いて見ると、そ

こには島崎藤村氏の非常に美しい、そして意味の深い序文が讀まれる。その中で島崎氏は、この「むしろ人の注意をひくことを得意として來たかのやうに思はれる」これ迄の跫音とは全く違つた、「細い細い一筋道を脇目もふらずに歩いて來るやうな跫音」、「地を踏みしめ踏みしめして來る人の跫音」に、いかに多くの期待をかけてゐるかを語つてゐられる。

この詩のやうな隱約の語の中に凡ては十分語られてゐるやうに思はれるが、然し、粗野と衒氣と粉飾と、そして徒らな野心的な企圖とが、粗雜な頭腦を征服しつつある時に、この寂しく、そして眞實であるだけに、眩惑的、壓倒的効果に遠い、かうした靜かな作品のために、出來るだけの事を云つて見るのも徒爾ではなからうと思ふ。

『撲たれる女』――それは疑ひなく篇中の最力作であるが――によつて、私が見出した作者の特質は、其他のいづれの作からも見出される。そこには女性特有のセンシビリテイ、一種の微妙な直覺力、すぐれたデリカシイ、一言にして云へば、すべての女らしい良い特質がほそぼそと、しかもみづみづしく底を流れてゐるのを見る。例へば『悲しき配分』には、新しい芽のもえ出し、伸びてゆくために、そのかげにかくれてゐる親木の血もかれ肉も衰へ、自ら受ける配分は非常に乏しく、三人の子供のために身を犧牲にする母親の悲痛な泣き笑ひを見せて、人生の切實さを、かなり深いところまで描き得てゐる。「或る母と兒」には、かよわい、いたづら盛りの男の兒が、いつかはしらず、母に對して愛護の心を能動的に働かせるやうになつて來たのを見出した、母の嬉し淚を見ることが出來る。「鬪いるもの」と「黄昏」とには力强いその夫と、心弱い、苦勞性なやさしい妻との心の交渉、とりわけ遠別の間の感情の動き、二つの自我の衝突と和解、それが些の厭味もなく、しほらしい程に描かれてゐるのを見る。

出産した友だちの家への見舞を題材とした「片翼の飾り」、零落した舊友の荒屋をたづねた事を描いた「燒けあと」、田舍者夫婦を描いた「樂園へ」などには、落着いた客觀の眼をその日常の親しみ深い周圍に注いで、多くの人が事もなく看過するやうな瑣事の中に、多くの意味を見出して、そこで、人間共通の惱みをともに惱み、ともに煩つてゐる

作者の、女らしい心遣ひが見られる。「棄子の姉」には、妹に對する姉の、目にもとまらぬやうな微々たる心の惱み、暗すぎるやうな自己嫌惡の心が見える。「新しい傷痕」には、そのおなじ心が、妹と自分の夫とに對する二重のそれであり、それらの背後に自分が棄て去つて來た老父の不幸な存在があるために、もつと深いものになつてゐる。

そして、老成した高い心境まで到達してゐるこの作者にとつては、幼稚な駄作と云ふべきものが全くないのも、或ひは不思議でないかも知れない。小さければ小さいなりに、それぞれに完成味を示してゐる。そして、これ迄の女流作家によつて取扱はれた、婦人の精神的並に肉體的の苦痛を伴つた各種の事象が、この作者にとつては、少しも生硬な概念的な表白とならないで、讀者の目ざはりになるやうな獨斷や誇張などが全くなく、何處までも柔軟性を失はず、微細のニュアンスを失はないのである。若し、難を云へば、それは「間隔」とか「顏」とかにあらうが、それはこの作者の著しい特質、卽ち、「苦しい詰らない方にばかり自分を考へたがる」といふやうな苦勞性が、あまりに煩はしく讀者の心に映ずるためかも知れない。然し、かうした作者の傾向は、「錘」などに於ては、十分成功してゐると思ふ。「錘」は出產の前後の產婦の心持を、異常な鋭さと深さとをもつて、毛彫のやうにこまかに描き出してある。それは女流の作家に於ても、稀に見るところである。思へば、こんな恐ろしい惱みと苦闘とをもつて、人はこの世に生まれ出るのである。幼兒を抱く若い母親の美しい微笑みを見るとき、人はかうした女性の「ある種の極刑を經て來た囚人のやうな」出產の極苦を考へて見るであらうか。それは或ひは平凡な人生の一事實であるかも知れない。然し、この平凡な事實からして、我々の世界の女性に對する尊敬と感謝とは、更に深くも我々の心に更新されるのである。實にこの我々の閑却し來つた女性の世界に對する、新しい理解と共感とを、我々に示唆する所に、この書の重大な意義のある事を私は信ずる。そしてこの效果は、かの自己の世界を省察する事なく、生硬な概念に驅使されて野心的な大作に、不自然な非人間な筆致を誇らうとするやうな、或種の女流作家などには決して見出され得ないものである事を信ずる。

この作者の作品は、たとへば、その光澤をひそめ、その手ざはりのいかにも撓やかな、かの黒縮緬の感觸を、私に思はせる。けばけばしい處はないが、いつまでも見飽きのしない、寂しいけれど、いつまでも見ごもりする、あの黒縮緬の色が、私に思はれる。

眞實こそ、人を動かす。藝術は眞實と一致する限りに於て、私の伴侶である。かういふ風に考へてゐる此頃の私には、それはいかに小さな世界であらうとも、その世界を眞に確乎と把握してゐる作者には敬意をはらふのに吝ではない。そして筆を擱くにのぞんで、一人でも多くの人が、この書物の價値を見出さん事を望んでおく。

大正十一年十二月十四日(「時事新報」十二月十四日所載)

鄕愁

――加藤武雄氏の『鄕愁』――

『鄕愁』は加藤武雄氏の第一創作集である。氏は我が文壇に於ける唯一の鄕土藝術家だと言はれてゐる。今、我々の眼に觸れる藝術は概ね都會人の藝術である。若くは都會化せる地方人の藝術である。そこには鋭敏な感覺がある、細緻 技巧がある。潑剌たる機智がある、また媚態と柔軟とがある。が、これは、この一卷は何と云ふその反對であらう。かの交際上手な氣の利いた、瀟洒たる、然しながら何處か輕薄才子めいた人に對して、無愛憎な、つきの悪い、堅苦しい、それでゐて内心は善良で親切で物のわかつた人、それが加藤氏の作品の與へる印象である。その信實、その敦厚、そして其の何處となしのぎこちなさ、それが好感を與へる。

藝術は常に Suffering Humanity の叫びでなくてはならない、これが私の信念である。私の藝術觀は甚だしく誤つて

ゐるかも知れぬ。然し、いかなる書物の背後にも常に一個の人間を見出すのが私の所願である。藝術を顯はして藝術家を隱すのが藝術品の目的であると云ふワイルドの言は眞理であるかも知れぬ、藝術の至境は馬上人無く鞍下馬無しといふところにあるのであらう。それは私もよく知つてゐる。それにも拘はらず表現に於て「如何に」よりも「何を」がより多く私の興味を惹く。加藤氏の作品は「如何に」於ては不滿を感ぜしめる場合もあるけれど、「何を」に於ては大抵私の同感を惹く。

巻頭の「嗚咽」はその雜誌に發表された當時(「みじめなる戀の話」よりも先きに)讀んだ、そして從來の氏の作品でこれ程私を感動させたものはなかつた。此作が當時世評の好かつたのも理由の無い事ではなかつた。神經質で癇癪持で肺の惡い村上先生と低能兒の熊吉、これは Suffering Humanity の象徴でなくて何であらう。村上先生は、どうする事も出來ない事の爲めに焦慮してゐる、低能兒を人並にしようとしてゐる。どうする事も出來ない、恐らく人生の眞相はこの一語で盡きてゐるであらう。然らば我々は何をすべきか？ 諦めるべきか？ 飽くまで反抗すべきか？ または冷笑して終るべきか？ 我々は諦めるには執着がありすぎ、反抗するにはあまりに弱く、冷笑し去るにはあまりに信實である。我々はただ嗚咽するの外はない、そして尊い作品は、藝術こそは我々の嗚咽である。作者も村上先生と共に嗚咽してゐるのだ。

然し「嗚咽」よりも一層私に取つて尊い作品は、巻末の「みじめなる戀の話」である。もつとも私はこの作品の適當なる批評家とはなり得ないであらう。なぜかと言へば、この作は冷靜に鑑賞することが出來ないほどに、私には切實な問題を含んでゐるからである。オークワアドな人間のオークワアドな戀がこの作の主題である。これは自分のぶまと醜惡とを考へて、自分自身に唾を吐きかけたいやうな、居ても立つてもゐられないやうな、そんな人間でなければとても理解することは出來ない。さうでない人には「そんな事は嫌ひだ」といふのが口癖になつた、そしてそれが一番適した言葉である此の主人公の心理は誇張としか思はれないであらう。だが、世の中にはこんな性格がある、そし

てこれも亦どうする事も出來ないのだ。かういふ人に取つてはこの世界は確かに適してゐない、彼の世界は別にある、何處か遠い遠い雲の彼方にでもある。そこで私は著者が選んだ題名が、此作の主人公もまたさうであるやうなティピカルな地方人、都會に來つて都會に同化し得ない地方人の郷土に對する不斷の鄉愁のみならず、知られざる故鄕に對するそれであるを思はざるを得ない。そして私は「鄉愁」といふ渾然たる小篇を想起する。鄉土藝術家としての著者の意義と、其の傳統主義と、また「出發」や「土の匂ひ」の如き佳篇についてもまだ言ひ度い事は多いが、それは他日に讓り、終りに著者が此の一卷の爲に十年の歲月を費した事を考へて、敬虔の念に打たれた事を附け加へて置き度い。

大正八年九月二十四日（「讀賣新聞」九月二十六日所載）

嵐と迫り

――加藤武雄氏の『惱ましき春』を讀む――

長篇小說の時代はつひに來つた。近來の長篇小說の刊行せられる數は實に夥しいものである。私はそれ等の作品を殆んど讀んでゐないから、それらの悉くが果して眞の藝術的價値の有るものであるか否かを知らない。けれどもかうした傾向が近時徒なる小慧小巧に流れて、沈滯の極に達した文壇に對する自然の反動に外ならない事を信ずる私は、それを視せずにはゐられない。ただ、かうした場合には兎角判術的良心を缺いだ人々が書肆の批判力の薄弱に乘じて、淸純の水面を混濁せしめて快哉を叫ぶ惡戲者の如き滿悅を味ふ例が往々にしてあるものであるから、評壇の人々が現在の如く單行本に絕對的無視を施す事なく、嚴正の批判を下して、書肆と讀者とを指導する事は甚だ必要の事であらうと思ふ。然しながら、不幸にしてこのかくあらねばならぬ事の可能を信じ得られない私は、苦い微笑を以てこの自

手紙を讀んでの昂奮や、彼が死んだ後、その愛してゐた猫が「肺病猫々々」と言つて皆から追ひ廻されてゐるあたりの言葉をわらふ。

その全生命を傾倒して眞個畢生の力作を著はした作家は、ただその事業の完成に於てのみ幸福を求めよ、尠くとも、今日の如き文壇に於ては、我々はそれだけの自信と勇氣とを有ちたいものである。

加藤武雄氏は藝術的良心の鋭い藝術家である。今氏の第一の長篇『惱ましき春』に對する時、私は先づこの事を感ずる。寧ろ、その爲めに、餘りに小心に過ぎ、大事を取り過ぎて些か堅くなつた觀がないでもないとさへ思はれる。

作者の序に言はれてゐる如く、この作品は「自然主義精神勃興當時の時代思想を背景として、夢想的な一人の青年が、いかにその夢から現實に眼覺めて行つたか」を描かうとしたもので、「最初の意圖から見れば、これはほんの序曲に過ぎない」と謙遜されてゐるが、「私の靑年時代の第一期に於ての夢と惱みとを略こゝに書き盡した」とある如く、單調な月日、空虛な生活に倦み果て、健康の過剩、生命の過剩を持て餘して、

「どんな惱みでもいい、どんな苦しみでもいい！　何でもいいから早くやつて來い！」と叫ばずにはゐられない靑年の心持、靑春時の野心、それから來る焦燥、感傷、それに伴ふ性の惱み、さうした心持の種々相は、相模のすぐれた地方色の描寫を伴ひつつ、此の作者獨特のしつかりした筆で委曲を盡して描かれてゐる。そしてそれは多くの若い讀者の共鳴を喚ぶに違ひない。小說に於て、特にその舞臺を人一倍重んずる性癖のある私は、この作品の地方色の描寫には、とりわけ敬服せずにはゐられなかつた。

大都會に接近してゐて、しかも不便な、荒原の烈しい埃に弄ばれる小さな小學校で、狂氣のやうになつてその埃を拭いたり掃いたり罵つたりしてゐる肺病の老敎師の、陰慘な生活は、二人の性格を異にした田舍女敎師と共に、ヴィヴィッドに描き出されてゐる、特にその老敎師が主人公の友人なる同じく肺を病んでゐる萩野蘆江が自殺を告げて來た

りは、グツと胸に迫つて來る。そしてかうした沈滯した空氣の中で、主人公が英子と云ふ「全身に笑ひの水があつて、一寸さはると溢れるやうに笑ひ出す」快活な若い女教師とお互ひの若さと生活の單調さとからそれ程の愛もなくして自然と關係して行く徑路は、主人公の我意に對する省察に就いては多少の註文があるとしても、極めて自然に無理がなく書けてゐる。然しながら、讀者の興味は、その咏嘆的な手紙によつて、病と惱みと戀と死とを訪れて來る萩野蘆江の方へと更により強く惹き付けられて行く。此の作に於ける萩野蘆江の地位は、宛かも島崎藤村氏の『春』に於ける靑木駿一のそれである。

作者はこの病靑年によつて、自然主義の現實的精神によつて滅ぼされる古いロマンティシズムを象徴しようとしたやうに思はれる。此の夢想的咏嘆的な病靑年の悲劇的な地位に「最後のロマンティシスト」を作者は見出さうとしたのである。多くの點でこの作は『春』を想はせる。私が『春』を讀んで多少物足りないと思つたあの靑木なる人物に對する無味的な取扱ひ方の不滿が、この作にも感じられはしないであらうか。作者の斷つてゐる通り、既に自叙傳でない以上は、この萩野蘆江なる人物をもつと前面に、尠くとも川口なる惡魔主義者と同じ程度にまで近接せしめたならば、この作全體の效果がもつと力强いものとなりはしなかつたかと考へるのは單に私ばかりの管見であらうか。

とは云へ、萩野蘆江の手紙に現れてゐる、死に自分を投げ込んで行かうとする止み難い苦しい心持の進轉は、それだけでも十分人を惹き付けずにはおかない、そこには當時の自然主義者の斷定よりも、もつと深刻なものが有り得ないとはどうして言へよう。惡魔主義者の川口なる靑年は、あの時代にザラにあるタイプの人間である。惡魔主義者と呼ぶ程の深刻味は有しないが、所謂自然主義運動が齎らしたあの淺薄な人生觀、戀愛觀の批評として見る時は、極めて興味のある人物となる。

末段、主人公が東京へ出て「白薔薇の少女」と主人公が自ら名づけた戀人葉子に逢つたり菅野杏村を圍繞する靑年

等の生活に投じてからは、少しく疲勞のあとも見えて、そこに於て惜しい事には、作者は筆を止めてゐる。主人公が愈々眞實に、夢想より現實に醒めて、内面生活に於ても、外面生活に於ても、一個の男子となるその苦鬪。私は作者が筆を改めて、この絶好の題目に就いて、その更に圓熟した筆を揮はれむ日を期待して止まない。そしてその時、作者が部分的の破綻などを恐れる事なく、より大膽なノヴエリストの道を踏まれん事を望む。終りに、約半歳を費してこの力作を文壇に提供した作者に對する私の平素からの敬意を述べ、親愛の情に甘えて此の出過ぎた妄言をなした事を深く謝する。

大正十年六月「時事新報」所載

「批評ではなく」

一 倉田百三氏の『俊寛』

月評に前置きするのは、いやみな事とされてゐる。また實際いやみであらう。けれどもいやみはその事によるのではなく、その人によるのである。世にはその生きてゐる事が既にいやみであるやうな人がある。その一擧一動がわざとらしく、技巧的で、反感を起させるやうな、何事をしても、どんな賞讃すべき善行をしても、いやみに感じさせるやうな人がある。それはなぜか。稚氣と衒氣とを脱却してゐないからである。そしてそれは誠實の缺如から來るとも言へよう、無反省から來るとも言へようが、つまりその人がまだ出來てゐないのである。謂はばその人自身が板についてゐないのだ。そして私自身、卽ちその人間である。私が前置ぬきの月評を書いて見たところでそれが果して何にならう。この事を考へると、私は自己嫌惡の情に堪へられない。どうかこのいやみを脱したい。どんな飛び離れた事をしても、どんな無理をしても、いかにも自然に、いかにも當り前の事のやうに一般に受け容れて貰へるやうな、そん

な人格の力を有つ人になりたい。その爲めには、自分の心に百錬の鐵をも加へよう。今私が何か言へばいやみに聞えるに定つてゐる。が、要するに私の人間の出來上つてゐない以上、私の沈默もまた一つのいやみではないか。結局凡ては試練である、鍛練である。私は自分の愚かしさを發揮して行かう。自分を自分以上のものに見せかけようとするのが一番惡い。その見せかけを無くして行くのが自分を高める第一歩であらう。我々が眞實に生きようとする時、人に笑はれる事を恐れてはならない。

「新小説」には倉田百三氏の戯曲『俊寛』が載つてゐるので最初に讀んだ。今月號のこの雜誌はこれただ一篇である。が、この一篇は是非繰返して讀まれなければならない。今の文壇は「君の今度の××は旨いね、全く感心したよ」とその作家の面前で言はれ得るやうな作品に事缺いてゐるとは思はれない。專門家的巧妙はある、然し眞面目な問題として取扱ふに足りるやうな作品がどれ程あるだらう。が、然しこの一篇は、その作者の前にただ默つて頭を下げたい、それ以上の事をするのは僭越な事に思はせるやうな、そんな作品である。私は二三日前にこの作を讀んでから、すつかり自分の生活をこの作によつて充たされてしまつた。謂はば私は今のこの作者の高貴な魂の光りに照されてゐるのだ。私はどうしてこれを批評し得るだけの力があらう。ただせめてもの事に覺束ない一片の讀後感を記して見ようと思ふだけである。

日本人の氣輕さ、淺薄さ、小悧巧さ、その精神的薄弱は殆んど私を絶望させる。悲壯劇を書く日本人――それは反語としか思はれなかつた。然るにこれは何たる力であらう。ここには悲劇がある。日本人もここ迄行く事が出來たか。ああ、それは限りない慰めである。俊寛は恐ろしい運命の座に置かれた悲劇的の人物である。その運命が作者の心を惹付けたのは言ふ迄もなからう。が、ここには内在する悲劇がある。俊寛の性格は實にすぐれたる發見である、或は創造である。大いなる悲劇を與へられる人は、大いなる悲劇に堪へ得る人でなければならない。若しそれに堪へ得なけ

ればその人には、いかなる悲劇的の運命もつひに悲劇ではない。俊寛の中に作者は非常な根強い生活力を見た。最後まで屈しないで淸盛を呪詛して死んでゐるこの人物、この强さ、それは私が我が新しい文學に殆んどまだ遭遇しなかつた程の力で表現されてゐる。人間の憎惡心、復讐心、絶望と疑惑、最後までの反抗、この救ひのない心の狀態を、作者の澄んだ魂は、靜かに凝視してゐる、凝視する事が出來た。

俊寛は呪はれた人間の象徵である。これ以上の不幸はない。そしてその不幸は俊寛の內部に存する。成經は誇の高い武士に過ぎない。康頼は詩人であり、あの時代の典型的な貴公子に過ぎない、（この後者の人物は殊に生動してゐるが）だが、俊寛は同じ環境に置かれてゐても、最も苦しまなければならない、彼は「不幸になるにきまつてゐる」、選ばれたる人の烙印を帶びてゐるから。康頼は容易に救はれ得る、だが彼の信仰は俊寛をして、「もつと自信を以て」「權威を以て言つて下さい」と言はしめた程微弱だ。俊寛はつひに救はれない、彼は疑ふ、神を疑ひ、自分の正義を疑ひ、自分を無始以來の人間の怨讐のからくりとさへ見る。作者はこの悲劇的性格を生かした。

第二幕は、この一篇の脊髓である。康頼が都の春を慕ひ、昔日の歡樂のあとを偲んで嘆いてゐるところへ、成經と俊寛とが一羽の小鳥を爭ひながら登場する場面(シイン)、更にそれよりも二人のうちのより弱くより善良なる康頼までも誓を破つて乘船し、俊寛が一行に棄て去られるあの致命的な場面(シイン)、それは何たる震撼的なものであらう。人生の最も大きな複雜な問題に、何處でこんなにぴつたりと突きつけられたか。舞臺技巧といふやうな事は、例へば第一幕の動きのない長い對話に俳優が困るやうな事はないかなどといふ點については、私にはよくもわからないし、また大した問題とも思はないから、別に何も言はないが、この場面の舞臺效果はどんなであらう、專門家的作家の小手先の熟練が百年なほ達し得ないところを、眞實は直ちに手につかむ。總じてこの作は凡ての些末事(さまつじ)を問はしめない、凡ての文字や形式を消し去つて、本質にぴつたり面接せしめる、眞に魂の藝術である。

有王には最もよく今の作者の心境が反映してはゐないか。「ああ佛樣。私は此の世を厭ひまする、此恐しい世界から一時も早く脫れたう御座います。私は主人とともに死にまする。私の今することがたとへ間違つてゐやうとも、何卒ゆるして下さいませ」と言つて俊寛の死骸を負つて海に身を投げる有王よ。その俊寛に對する無限の憐憫、それは私には單なる忠實な家僕の心持以上のものである。ここに私は凡てを折伏し得た作者の人類に對する無限の憐憫を見る。

然しその有王の心境に赴く迄には、人は俊寛の絕望と苦鬪とを通過して來なければならない。然らずんば、その信念は康賴のそれに過ぎない。私は倉田氏の過去の眠られぬ夜を想像して、心痛むと共に、この貴い受難者の前に覺えず頭の垂れるのを覺える。然しかく言へばとて、作者は少しも顏をのぞけゐるのではない。それは寧ろ希臘悲劇の沈靜と調和である。

藝術家の魂が純化されると、それは磨かれた鏡のやうになる。私は古屋芳雄氏の『倉田百三論』中にある倉田氏の「自分は手術臺の上に坐してゐる人間だ。だから、世の中の善いものと悪いものとがすぐ分る」といふ言葉を意味深く考へずにはゐられない。けれども倉田氏もそんなに早くここまで到達せられたのではなからう。いつか(多分二三年位以前であつたらう)氏は『文壇への非難』と題する一文を公にされた事があつたが、それは眞摯を極めた警告ではあつたが、そこに我々は眞實に生きんとする人の最後の弱點を見なかつたであらうか。

前に擧げた古屋芳雄氏の『倉田百三論』は『俊寛』の註釋として讀む必要のあるものである。然し勿論單なる註釋ではない。氏がこの中で披瀝せられた藝術觀は尠からず暗示するところが多い。同感すべき點が多い。が、その問題は私はもつと考へて見たいからここでは何も言はない。そして切に今の文壇からこれに對する反響を聞きたいと思ふ。

それからその中で古屋氏の語られてゐる、子供が怪我をした時、ただ一言「大丈夫ですか？　それなら、いいです」

と言つて目を瞑つた『俊寛』の、作者の、運命の本當の姿を見た人の物靜かな諦めの態度に、深い感銘を與へられた事をも記さずにはゐられない。なほ、『俊寛』については、まだ言ひ殘した事も多く、あれから急に讀みたくなつた『出家とその弟子』をも讀んで、まだ言ひたい事も多いけれど、それでなくとも餘り長くなりすぎたやうだから、今はそれを我慢する代り、あの作を讀まないでゐる人々には、その一讀をお勸めして置きたい。

附記。これはもと「批評ではなく」と題した月評の一節である。月評や文壇時評の類は、書册とするだけの價値のない無意味なものと考へるので、一切省く事とした。が、この一節だけは、當時文壇的に問題を惹起し、その後の私の行路に對して決定的影響をもつたもののゆゑ、特に玆に收める事とした。

大正九年二月(「時事新報」所載)

二　『俊寛』と『A夫婦』と

中村武羅夫兄。昨日は失禮しました。あのをり承つた倉田百三氏の『俊寛』についての貴兄の御意見にはいろいろと益すところの多かつたことを感謝します。

お話の客觀批評については、私は、その可能を信じませんから、やつぱり主觀批評、印象批評が唯一の批評の方法だとしか思はれません。然し、私はそれで滿足してゐるのではありません、私も宮島新三郎氏の所謂「合理的批評」や、菊池寛氏の「萬人に共通する物差」を求めることに於て、敢て人後に落ちはしませんが、その可能がどうあつても信じられないのです。ここに何か大きなカンカンのやうなものがあつて、一々の作品をそれに載せると、價値の目方がちやんと出てくれるやうだと結構ですが、どうもそんな重寶なカンカンはなかりさうです。そこで自分の信念に

從ふ外はないのです。が、その信念が、あやふやで、不確かなものです。そこで結局、批評そのものの意義に對して疑ひを抱き、つひに批評の可能に對して絶望する事になります。私は眞實に對する熱愛のために、結局凡てに絶望しなければならない人間でせう。批評に於いて特にさうです。私自身批評家として、何等の自信をも有してゐないことは姑く問題外として、私は當今の文壇に行はれてゐる批評に滿足出來ないものです。そこには客觀批評どころか、私の所謂印象批評の當然有すべき尊嚴をすら有するものがどれだけありませうか。然しここは批評について語るべきところではありません。今は差當つて『俊寛』について少しく書いて見たいと思ひます。

私は『俊寛』を愛します。『俊寛』はそれ程の作でないかも知れません。またいろいろの缺點もありませう。さうした批評には、結局讓歩しなければならないかも知れません。けれども、この近年に、日本人の書いたもので、私の讀んだ限りでは、あの作ほど私の胸に響いたものはないといふ事は事實です。私は正直な自分の心臟の鼓動を信じて言ふのです。私があまい人間でもあることは自分でよく知つてゐます、心臟を信用してばかりゐるとあまくなるに違ひないかも知れません。が、私は自分の心臟を批評の最後の尺度とします。そしてそれを誤りだとは思ひません。が、これについての詳論は他日にゆづりませう。

倉田百三氏の作品を賞めるのは、今の文壇の常識でせうか。たとひさうであるとしましても、私はあの作を讀むまでまだ倉田氏の作品を一つも讀んでゐませんでしたし、むしろ同氏に對しては誤解をしてゐた位です。氏と同姓の倉田啓明氏と混同して、妙な偏見を有つてゐた位です。然し、『俊寛』の一篇は、私を倉田氏の足下に跪かせました。何人の暗示に從つたわけでもなく、自分の前に提出せられた作品に面接して、その力に打たれたのです。それに倉田氏は文壇的の人でありません。その文學雜誌に作品を發表せられたのは、多分今度の『俊寛』が初めてのやうに思はれます。私はむしろ武者小路實篤氏の作品を賞讃することの方が、今の文壇の常識のやうに思ふのです。私は武者小路

氏の人格に對しては、極度の敬意を拂ふのに躊躇しません。が、今の文壇の人々の同氏の藝術に對する無條件的讃辭には、必ずしも直ちに參加することは出來ませぬ。氏の近作『A夫婦』に對する本誌前號の廣津和郞の批評の如きも、詩人風の最上級的言辭に對して皮肉を感じ、くすぐつたく感ずる事に於て、最も敏感であるらしい同氏には珍らしいことにも、最上級の推讃の辭を呈してゐられたやうですし、また、これは『A夫婦』についてではありませんが、某作家の如き、武者小路氏の作品には、常に絶對的の讃辭を惜まれないでゐますが、私にはどうも直ちに首肯する事が出來ませぬ。

貴兄が『A夫婦』を『俊寛』よりも、より本質的な、よりすぐれた作品と言はれましたから、私は今この二作を比較して考へて見たいと思ひます。『A夫婦』は立派な作品には違ひありません。いや武者小路氏の作品は、一個の藝術品以上のものです。これは直ちに同氏の信仰告白です、同氏の精進日錄です、語錄です。私が氏の作品を尊敬を以て讀むのは、常にそのためです。然しながら、『A夫婦』は、不幸にして私の心臟に響きませんでした。私はそこに聖者の心を見ました、聖者の傳記の一章を見ました。私はAのやうな聖者の存在し得る事は信じます、また存在する事を望みます。然しあんな高所まで、私にはやすやすとついては行けませぬ。私のやうなけがれた魂に惱んでゐる凡俗の兒は、あの非常な場合に處したAの態度には、人間を超越した力を見ます、私がAであつたならばどうでせう、私はその靑年を殺して了ひたいとさへ思はないでせうか。勿論殺しはしますまい。のみならず、結局、許してやると言ふかも知れません。が、心の底までも許し得るでせうか。果して許し得るでせうか。然るにAはどれ程惱みましたか。Aはそんな汚れた魂の惱みを知らないのです、Aには凡てを許す事が出來るです、Aは聖者です、いや、より正しく言へばAは强者です、いかなる深淵をも平氣でとび越す事の出來る人です。そして思ふに『A夫婦』の作者武者小路氏は惠まれた人ではないでせうか、純潔な魂を以て生れた人ではないでせうか。そしてさういふ惠まれた人に對しては、私は

極度の敬意を拂ふのに躊躇しませぬ。然しその人の作品は私の心臟には響きませぬ。私はそこに何等の慰めをも見出せませぬ。ゆゑに私はさうした作品を單なる藝術品と見て、藝術の立場から批評する事を好みませぬ。

然るに『俊寛』は？『俊寛』は一個の藝術品です。そこに私は Suffering Humanity ——英語を文中に挿入するのは貴兄にはいやみに思はれるかも知れませんが、この言葉は私の好きな言葉で、また私の藝術觀の綜合ですから敢て用ゐます——人間の全苦惱を見ます。私には俊寛がどうしても概念的人物だとは思はれませぬ。俊寛はAのやうな聖者ではありませぬ。然し聖者には悲劇は成立しない筈です、例へば基督を取扱つたにしても、基督を聖者として見たのでは悲劇になりませぬ。俊寛は一個の弱い人間です、さればこそ淸盛が許してさへくれればその武運を祈つてでもやらうとさへ言ふのです。この弱さがあつて、俊寛の人間らしさがはじめて現はれはしないのでせうか。然しこの弱さは、俊寛の中に「根强い生活力」を見出す妨げとはなりませぬ。反對に、他の二人の流人よりも强い人物である俊寛すら、あれだけ弱くなつたところに、この悲劇の大きさを認めます。人間の强さの裏には弱さがありはしますまいか、最も强い人はまた最も弱い人ではありますまいか、それでこそ俊寛は、私の無限の同感を誘つたのでした。それでこそ「俊寛」はあのカタルシスの作用をおよぼしたのでせう。

貴兄がこの作を島田淸次郎氏や江馬修氏の作品とほぼ同種類のものと目せられたのは（私は今でも不幸にしてその說に贊同出來ませぬが）思ふに貴兄の銳い直觀と烱眼とが、倉田氏の作品に同氏の魂の暗闇を看取せられたからではないでせうか。私はそれを信じます。然し、それでこそ、この作品が私の心を動かしたのではないでせうか。倉田氏は思ふに武者小路氏の如く生れたる淨らかな魂ではないかも知れませぬ。氏はその性格の中に、いろいろな惡いものを有つてゐられたかも知れないが、病床の諦觀が、それを淨めて行つたのではないでせうか。それだからこそ、俊寛の苦悶を、その憎惡心を、復讐心を、反抗心を、あんなにも表現する事が出來たのではないでせうか。私は弱い人間で

す、魂の闇黒に喘いでゐる人間です。私には非常な憎惡心、復讐心、反抗心があります。私がドストエフスキイの作品に傾倒してゐるのは、ドストエフスキイの聖者の如き愛の心に打たれるからではありません。（私は新城和一氏の如くドストエフスキイを聖者だとは思ひませぬ。）その人間の心の暗さを凝視して、しかもその暗さに負けない力によつてです。そして『俊寛』についても、ほゞ同様の事が言へるだらうと思ひます。大分問題が大きくなりましたから、とてもここには書ききれませんから、今日はこれだけでやめておきます。

急いで書きましたので、だいぶん混亂してゐませうが、御寛恕を願ひます。

大正九年三月（「新潮」四月號所載）

通俗小說の問題

――中村武羅夫氏の作品について――

中村武羅夫氏の作品を論ずる場合には、まづ『人生』からはじめねばならぬであらう。然し、未完の作なので、一片をとらへて輕々しく評し去る事を好まない私は、不本意ながらそれを避けねばならなかつた。そして、その完成の日を期待してゐる一人である。

最近、氏には短篇の作がかなりある。そのうちには、例へば『心中の身代り』『母』の如き、氏の美質の十分に現れてゐる作品もある。が然し、氏が現在最も力を注いでゐるのは、通俗小說である。私は通俗小說の問題については、まだ殆んど考へてみた事がないし、また、他の人々の意見も殆んど讀んでゐないが、いつか室伏高信氏であつたか、

小說はみな通俗小說であると云はれた言葉を、一面の眞を穿つた面白い言葉であると思つた。通俗非通俗と云ふのも、結局は程度問題に歸する。哲學書よりも小說の方が通俗である、小說よりも講談の方が通俗である。通俗小說と藝術小說といやうな區別は、或る場合、かなり表面的なものであるかも知れない。ただ通俗小說の難點は、曾つて中村氏も某紙上で、その特有の驚くべき率直さをもつて告白してゐた如く、その性質上、いろいろな制限の下に書かれねばならぬといふ一事であらう。故に、作者としてそれに十分滿足しがたいものあるは察するに難くない。

然し、文學的作品といふものは、實に不思議なものである。それは一旦社會へ送られて後は、作者の意志とは沒交涉にはたらく。それについて私は、昨年、自分が東北の或る溫泉へ行く車中で見た一つの光景を思出さずにゐられぬ。私が窓外の景に心を奪はれてゐたとき、傍らに腰かけてゐた娘がホッと吐息をついたので、ふとその方を見返ると、都ぶりを學んで器用に耳かくしに結つてゐる襟足の白い娘で、その膝の上にひろげられてゐる雜誌の頁の上に目を投げると、それは中村氏のこの『處女』であつた。彼女はその數行の上に目を釘づけにした儘、深い物思ひに沈んで行く樣子であつた……

當時既に中村氏の率直な告白を聞き知つてゐた私は、それを見て、考へ込んでしまつた。民衆教化の道としての通俗小說の意義といふやうな事を私は考へた。そして更に、自分の平生の考――讀者が卽ち作者である。讀者はある著書に於いて、自分自身を讀み出すのであるとの自分の考に、確かに一面の眞理の存する事を思はざるを得なかつた。

今、私は『處女』を讀了して、彼女が、あの耳かくしの田舍娘が、そのどういふところで溜息をついたか、考へ込んでしまつたかが分るやうに思つたのである。

『處女』の主題は別に新しいものではない。千年前の生田川の可憐な處女、蘆屋をとめの惱みである、死である。そして、それは永遠に古くならない、また興味を失はない主題であらう。そして、それが小說の主題となりえない時代

が來たならば、それは恐ろしく散文的な、殺風景な、機械主義、合理主義の時代であらうと思ふ。もとより茲には蘆屋をとめの傳說のそれよりも、遥かに複雜な環境と心理とがあるが、根本に於いて、それは作者の云ふが如く、「淸らかに生れたものが、淸らかなまゝに滅びて行く、悲しいけれども、しかし美しい一篇の物語」たるを失はないのである。

女主人公の葉子は、新劇運動に携はり、女優との戀のために、大學教授の地位を擲つて、今や興行師としての東奔西走の生活を送つてゐる桂邦輔の娘で、父親おもひの可憐な處女である。彼女はその友達のひろ子の兄なる慶一郞と、慶一郞とおなじく彼女の父の生徒であつた章三との二人の靑年の愛の間に立つて、惱み苦しまねばならないのであるが、その二人の靑年の激烈な競爭は、意想外の奇拔な方法をもつて行はれる。それに葉子の兄の淳一とその愛人である孔雀夫人とがからんで、作者一流の巧妙なる事件の組立が出來上るのである。中村氏の近作『瑠璃鳥』の如きは、かうしたプロットの才能がその絕頂に達してゐるのを思はせたが、この作とても間然するところはない。難を云へば、部分的に、いくらか强引の氣味の見えるところであるが、思ふにこれはこの種の作品には止むを得ない制約であらうか。作中の人物や最も鮮かな印象を殘すものは、主要人物ではないが、葉子の父邦輔である。孔雀夫人と呼ばれる女の性格にも、新解釋が施されてゐて、作者の用意を思はせる。かの奇拔な競爭に於ける敗者の方へと惹かれて行く葉子の心理は巧みに描かれて、若き女性の心に深く觸れるものがあらう、恐らくは私が見たかの汽車中の『處女』の愛讀者をもこめて。彼女は「運命の影」より、「父戀し」「臨終」に至るまで、いかに轟く胸で、湧き立つ心で、讀み去り讀み來つたであらうか、私は自分の見なかつた彼女の淚をさへ保證してもいいと思ふものである。批評的にこの作に對する私は、勿論、さうした愉樂を經驗しえないが、それを私は決して自分の幸福とは誇りえないものである。その代り、この作のプロットの上に現れた作者の力量に推服して、それに學ぶところが多かつた事を、あらためて私は自分の幸福だと思ふ。

通俗小説の問題は、今日の如き大衆文藝なるものの流行を見、長篇小説の本道は通俗小説にありとの説すら現れるやうになつた際には、一應考へて見なければならぬ問題であらう。しかも、私には未だその用意が十分でないので、まとまつた事の云へなかつた事を憾みとする。

大正十五年十月二日(「不同調」十二月號所載)

形而上學の白刄

——藤井周藏氏の『狼を斬る』を讀む——

つひに『狼を斬る』を讀み上げた。つひにである、それほど遲々として私は讀んだ。一氣に讀過するのが惜しく、また、そのためにこの作の最高のものに觸れ得ないで畢る事を虞れたためである。しかも、この讀了は私としては未曾有の經驗に屬する。まことに、作者はここに未曾有の事を企ててゐるのである。未だ曾つて試みられなかつた事を試みてゐるのである。

此の作品は、作者が企てた一大長篇、『實在』の第二部に屬する。第一部、卽ち、この作の前篇たる『隷屬』(畏友辻潤君がその面白さを『大菩薩峠』に比したもの)は、不幸にしてまだ讀んでゐないので、總體的の事はもとより云へない。が、この『狼を斬る』だけでも、私はすつかり驚かされ、簡單にこれを評する言葉をも知らない。それほど多くの事を考へさせられ、多くの暗示を與へられたのだ。

謙遜な作者は、他の批評を喜んで傾聽しようと云ふ。小說と形而上學とに多少の關心を有するものとして、私の意見をも聞かんとする。然し、私には形而上學の方面は無論の事、小說的手法に於いても、(共に自らその能力に缺くと

ころあるは別として）この作者に望むべき何物も所持しない事を知る。一度びこの作品を讀んだ後、かやうな作品に對して所謂小說家眼を以て、技巧的方面から、かうしたらいいとか、ああしたらいいとか、註文を出す事の、單に僭越事であるのみに止まらない事を知る。何となれば、この作は全部的にこれを肯定するか、又は全部的にこれを否定するか、二つに一つだと思ふからである。そして、私は敢てこれを全的に肯定すべく傾いてゐる。これは最高の藝術であるか、然らずんば藝術以上である、若くは藝術以外である。

實に、この作はあらゆる技巧を超越してゐる。作者は、藥をオブラアトに包んで與へるといふやうな、姑息な手段を少しも取つてゐない。その意味で、少しも容赦のない、妥協のない、我儘至極な小說である。それだけ普通の小說を讀まうとして、この作にのぞんだ人は、その引入れられた不思議な世界に、しばらくは、啞然として、正にその云ふところを知らぬに違ひないと思ふ。然しそこだ、そこでしやんと立直つて、この深い深い山の中へ、敢然として突進するならば、人はそこに、いかなる未曾有の經驗をなし得るであらうか、いかなる一大驚異に當面し得るであらうか。

この作は從來の小說なる概念を根柢から覆へさんとするものである。從來、小說と云へば、大部分形而下の世界に屬するものとされてゐた、現象界の現象をその儘に取扱ふだけで滿足して來た。つひにありのままの現實といふ、日常茶飯事の如實の描寫を主張する自然主義小說のトリヴィアリズムすら生じた。しかも人間にはそれに滿足しがたい要求がある、その限界から一歩奧へ踏入らうとする。そこではじめて象徵主義（廣義の）が發生する。小說ではないが、ゲエテの『ファウスト』の如き此種の藝術の代表的のものである。それゆゑ　最高の詩であり、藝術であると云はれてゐるのである。

ショオペンハウエルは、小說を論じて、內面的になればなる程、より高級なものであると云つてゐる。が、それは私

にとつて動かし難い斷案に見える。眞に內面的なる小說こそ、私自身の理想的な小說である。私が近代の小說中、心理小說を最も愛好し、スタンダアル、ドストエフスキイに傾倒してゐるのも、また幾分かの理由によるかも知れない。就中、ドストエフスキイの小說が、今のところ、最も私の理想に近いものであるが、それはこの偉大な露西亞人の中にある內面性、むしろ形而上的傾向のためでもあると思ふ。それだけドストエフスキイの作品は、從來の小說の型を破つた、破天荒のものであり、グロテスクのものである。ドストエフスキイに併稱せられるトルストイは、形而上學に缺くるところ多きだけ、それだけより小說らしい小說を書いた。

然も今、私は『狼を斬る』を讀むに及んで、『ファウスト』もなほ餘りに從來の藝術の範圍に制限せられてゐる事を知り、『カラマゾフ兄弟』もなほ餘りに小說的である事を知つた。これはゲエテが、ドストエフスキイが、藝術家の本能を以て、よくその局限を知り得たのに、この作者がその柵をも乘り越えんとする無暴を敢てするものと難ずべきか。又は彼等がそこに踏み止まらざるを得なかつた程なほ習俗的であり、また形而上的要求にも乏しかつたのに、この作者が敢て小說上のコロムブスとして、新世界を發見するの勇氣を示し得たのを賞すべきか。それは各々の見るところによつて異るであらう。とにかく、この作者が稀有のメタフィヂシアンである事は疑ひがない、その上、私は彼が驚くべき想像力をもつた藝術家である事をも認めざるを得ない。特にその世界觀は（これは他にもつと適當の語がありさうに思ふが、今はかりにこれで代へておく）深く、且つ徹してゐる。

曾つて私の一友は、ゲエテほどの廣大な、且つ汎神論的の世界觀を有つた人でも、その世界になほ、何處か歐羅巴人的に、制限せられたところが見えると云つた。私にはその說に直ちに同ずべき準備もないのであるが、飜つてこの『狼を斬る』を見ると、そこにはいかにも東洋人らしい超世間的な、より廣い世界が現れてゐるやうに思ふ。遠山無限碧層々の趣きが感得されるやうに思ふ。然し、それは既に小說の目ざすべきものでないといふ說あらば、それもまた有

力な一說ではあり得よう。

私がこの作によつて驚いたのは、作者が殆んど不可能の事（と云つても差支へないとすら思ふ）を敢てなし遂げんとしてゐる一事だ。この小說の主人公は、謂ひ得べくんば、その總題の示すが如く、正に「實在」そのものである。作者は形而上的實在を、實在の觀念でなく、實在の認識でなく、實在そのものを、實在そのものに成り切る境地を描かんとした。そして、ここに現れた一人の人間（それが具象的の主人公である）は、この恐るべき大經驗に立向ふ形而上學の一大勇士である。

かの世俗の、映畫の、舞臺の、大菩薩峠の、勇士が、劍客が、机龍之助が、斬つて斬つて斬りまくつた如く、この一篇の主人公も山中深きところで、つひに狼を斬る、無數の狼を斬る、斬つて斬つて斬りまくる。その狼を斬る場面は、小說家眼で見ても、全篇のヤマであり、靈活無比の描寫であるが、しかもそれは單に狼を斬るのではない、そこで實在そのものに成り切るのだ。だが、その際、私の感ずる不滿は、實在そのものになり切るために、何故に主人公は敢て山中深きところにまで入らねばならなかつたか、市井の中で、平凡な日常生活の中で、何故に彼は、その體得をなし得なかつたか、何故に、白刄をふるつて狼を斬らねばならなかつたか、といふ一事である。だが、この言は此の作の第一部、第三部を讀んだならば、或ひは撤回しなければならぬのかも知れない。また、私はその然らん事を望んでゐる。

彼が狼を斬り得たか、斬つたのは眞の狼であつたか、彼は眞に實在そのものに成り切つたか、いや少くとも、實在そのものに成り切つた境地を表現し得たか。それは各々讀者の體驗の範圍と、見所の奈何とで決定するであらう。確かに狼は斬つた、見事に斬つて捨てた、大菩薩峠の劍法の描寫は入神のものであるが、この一劍の冴え、また、決してそれに劣るところはない。それだけでもこの作の價値は十分にある。加之、ここに描出された心境は從來の小說に

未だ曾つて見るを得なかつた高峻なものである。だが、この實在そのものに成り切つた境地、その具體的描出たるや、あだかも隻手の聲を描かんとするが如く、正に至難中の至難事に屬する。しかもそれが作者の眼目なのだ。メタフィヂシアンたる作者が、敢て藝術の形を借りんとしたのも、またそのためではあるまいか。ここで作者は最高の詩の境地に相面してゐると思ふ。

作者は一篇があまりに詳密に、あまりに冗漫ではないかと虞れてゐる。若し簡潔を求めるならば、削つて、削つて、削つて、百枚、五十枚、十枚、五枚、三枚、一枚、十行、一行、否、ただ一句にしてしまつてもいい。作者は好んで天山の白羽箭を云ふ。それはまた、庭前の柏樹子でもいい、また趙州の無、雲門の關、ただその一語でも足りる。これ境界邊の事、以心傳心、ただ各人の自得を俟つあるのみとすれば、何ぞ、小説を書くを要せんや。しかも作者は、かかる自得の直觀や、その漠然たる暗示に滿足するものでない。それゆゑ小説の形を借りたのだ。既に小説の形によつてこの大業を志す、千枚、二千枚、なほ決して多しとしないのである。何となれば、作者は、從來の小説家の到り得なかつたところを目ざし、從來何人も敢て一指を觸れ得なかつた、この第一義諦、この實在の一大祕密を闡明しようとしてゐるからである。とにかく彼は、形而上學の白刃をひつさげて、眞向から藝術界に切り込んで來たのだ。その一劍は燦然と鳴つてゐる。多くの平俗な小説に疲勞した私は、その高邁な意氣と、强靭な精神力とに壓倒され、同時に、生氣づけられるのを感ずる。これ、少くとも從來曾つて無かつた、最も獨創的な作品である。大上段の作品である。人生宇宙の一大祕密、一大神祕へ肉迫した作品である。若しこれが藝術の、小説の形式上の制約と、その能力の限度とを越えんとしたがために、藝術として、小説として失敗した、と評せられるならば、それは光榮ある失敗でなければならぬ。これ、正に全か無か、オール・オア・ナッシングの作品である。そしてこれを書いた人は、あらゆる凡俗的意味を除去した一大天才か、然らずんば驚くべき奇骨漢でなければならぬ。私はこれを最高の藝術としてでなけ

れば、世にも稀れなる默示錄として、敢て世に奬める前に、まづ私自身、再三再四、これを心讀せんと欲するものである。

昭和元年十二月二十九日

附記。藤井周藏氏の大長篇『實在』は、その第一部、第二部、第三部とも、未だ出版のはこびに至らないので、率然この批評を讀まれた方は、奇異に感ぜられるかも知れないが、その作品は久しく埋沒してゐるべきものではないから、遠からず諸氏の批判の前に置かれる事と思ふ。それ迄は、私の批評はそれ自身一つの小さな創作として見らるべき偶然の光榮を有するであらう。

炒雜碎又は禁斷の食物

氣が利いたとき、我々は常に淺薄になつてゐる。
出來るだけ氣の利かざらんことを。

或るニヒリストの手記

——「現代虛無思想論序說」の中に論ぜらるべき現代人の一人によつて——

一　空に描く

言葉だ、言葉だ、言葉だ……要するに、言葉だ。

×

カントの深遠だといふ哲學も、トルストイの氣むづかしい說教も、マルクスの莫迦々々しく尨大な資本論も、所詮は言葉だ。

子曰くも、如是我聞も、道德經も、南華眞經も、雲門の倒一說、趙州の無でさへが、やつぱり言葉だ。

どんな智慧でも、眞理でも、あはれな人間を救つてはくれない。思ひは高遠な空のかなたに馳せても、自分はやつぱり元のところにゐる……と氣付くと、まるで憑き物が落ちたやうな氣持だ。

言葉は雲のやうに流れて行つてしまふ。そして、その後には、やつぱり空虚な頭をした、鈍な顔したピエロオが殘る。

觀念は雲だ。

雲がいろいろな形をつくる。夏日の奇峰、入道雲に、うろこ雲……

それが哲學といふものかも知れない。

雲をこねまはして、いろんな形をこしらへるのも、たしかに面白い仕事だらう。奇抜な雲の新粉細工……

だが、それにも天分が要る、頭が雲ではなんにもならぬ。

雲をこねまはさうなんて、大それた事を思ひはしなかつたのだが、とにかく、雲を摑むことは摑んだ。

そこで、詩人といふ名だけは得た……つまり、痴人といふ……

だが、手に摑んだものは、みんな指の間から洩れてしまつた。

昔の自分の書いたものを見ると、索寞たる醉ひざめの氣持だ……空々漠々として……少々胸がつかへて……

雲を摑む男が一人、呆然と立つてゐる。

×

僕はニヒリストだらうか。恐らく辻君も、僕に書いて貰つてはと云はれたといふ大泉氏も、僕をニヒリストと認めてくれてゐるに違ひない。第一、僕自身、ニヒリストを以て任じてゐたのだから、間違ひのない話だ。

だが、辻潤は少々ならず、僕にはあきたりなく思ふところもあるに違ひない。行詰つた男のパピイニも、基督傳を書いたので、どうやら辻潤の前に面目玉を踏みつぶしたらしく思はれるが、僕とくると、戰前のパピイニと戰後のパピイニとを、同樣に愛するのだから、始末にをへないわけだ。

つまり、僕の裏には、イデアリストとニヒリストとが同居してゐるのだと、僕は少し前に書いたが、そんな摑雲談はよしにした方が氣がきいてゐる。どちらにしても、僕は元來、ボオン・ペシミストなのだ。それが、どうかして、オプティミストにならうとしたのが、この數年の努力だつたのだ。そこで、ボオズ、氣取り、アッフェクテエション……惡臭紛々……やつぱり雲を摑んだわけだ。

ペシミズムだとか、オプティミズムだとか、差別するのがいけない。善惡無差別、聖凡不二だ。本來空ならば、雲を摑むな、ただ――共に座す白雲の中でいゝのだ。

イデアリスト、ニヒリスト、若くは二元的傾向などと、いくらおまへが、そんな事を云つても、ちつともえらくは響かない。つまりは、いろんな本を讀んだといふだけの事かも知れないではないか。

それにしても、僕は全く、あんまり雜多の本を讀みすぎた。全然、反對の本を……

後の本の眞理は、前の本の眞理をぶちこわす。本と本とは矛盾する。どつちが本當かわからない。

空虛な頭は、ふらふらと、どつちへでもついて行く。後入齋のみじめさ、滑稽さ。

そこで、支離滅裂――

丁度、支那の昔の極刑に遭はされた男のやうに、二つに引裂かれて、若くは八裂きにされてしまつたやうなものだ……その方が事實に近いだらう。

「多く書を讀めばはてしなし、多く學べば體疲る」とは、正しく名言である。

レオパルヂは「その生活を、ただ哲學と智慧とだけで築かうとするものは、哲人の資格もなく、賢人の資格もない人間だ」と云つたが、互ひに矛盾する書物ばかり讀んで、あッぷあッぷしてゐる人間は、確かに莫迦と云はれる價値がある。

そこで言葉だ、言葉だ、みんな言葉だ……もつとうまいビフテキを食はうぢやないか。

ハムレットの言草ではないが、天と地との間を這ひ廻る……

×

一四悲喜獸――吠えても跳ねても、所詮、地べたを這ふ蟲だ。

一歩も地上から飛上れず、まして自分の頭上には躍び上れず、自分の性格からは逃げられず。いくら理窟をこねても、理窟は理窟、ことに云ふだけ實際にもとるといふ、人生のきたない約束にしばられてゐる……それが人間。

言葉だ、言葉だ、言葉にすぎぬ……と云つても、生きてゐる限りは、やつぱり言葉だ。

とりわけ自分はどうである？

おもへば、自分の一生は、言葉に追はれて來た一生だ。言葉をつかふつもりで、言葉につかはれてゐる――詩人。

悲しい眼付で、僕は人生を見てゐる、自分を見てゐる――それだけだ。

玄沙の白紙はおもしろい。だが、「虛無思想研究」を白紙で發行したら、讀者から、詐欺だと訴へられるだらうし、僕が今玄沙の眞似をして、白紙の原稿を送つたら、荒川畔村君は驚いて、生田春月も見かけによらぬいたづらものだと腹を立てるかも知れない。

そこで、こんな事でも書いて送るとする。この次ぎには、少しは雲をこねかへしてお目にかけたいものだと思ひながら……

大正十四年九月十九日、香山にて（「虛無思想研究」十月號所載）

二　少々ダダだ……

僕の中には、凡てのものの座席がある。
何となれば、そこは空虛であるから。
僕はこの二行をモットオとして、批評を書きたいと思ふ。
然し、このモットオのゆゑに、僕の批評を輕蔑するものがあれば、僕の中には、もうその者の座席だけはなくなる事を承知して貰ひたい。
僕は批評家として、白紙主義で行く。
老獪な政治家は、是々非々主義とか、白紙でのぞむとか、ずるい事を云つた。
僕の白紙主義は、そんなずるい術策ではない。印象批評の究極なのだ。心の鏡の曇りをすつかり拭はうと云ふまでだ。
つまり「偏見なく」といふ事だ。無偏見主義といふ事だ。物を正しく映さうといふ事だ。やはらかに感受して、無私の鑑賞をする。その上で僕一流の告白的批評をやらうと云ふのだ。この告白的批評についてはまた別に書くが。
「批評するといふは明かに見ることである。美しきものに留意する事である。故に公平なる事である。――もつと適切に言へば、私心を棄てることである――尙ほ一層適切に言へば、沒人格となることである。」(木村毅氏譯)とアミエルは僕に代つて云つてくれてゐる。
そこで僕は僕の中が空虛でありたく願つてゐる。折角の珍客が來てくれても、すわる場處もないやうでは困るからね。
そして幸ひ、そこはかなり空虛だ。僕は大抵のものには、相當同感が持てる。が、まあ今の僕には、ナポレオンよりも、カメレオンがいい。人生主義は僕本來の立場だが、それに反對のものでも拒みはしない。ただ、少し下の座席

へついて貰はうか。

×

僕の生活は、疑問標と感嘆標との生活だ。

僕の中には、イデアリストとニヒリストとが同居してゐる。ニエンスウジアストとスケプティックとが雜居してゐる。

ナイーヴな詩人とセンティメンタルなヨリックとが、頭と尻尾をつないでゐる……

僕は或ひは感嘆し、或ひは疑問する。

だが、或る場合には、疑問し、同時に感嘆する!?

僕にとつて、何と結構な活字の存在!?

!?これあるがために、僕は救はれてゐる。

二元は畢竟一元に歸す、そんな事を云つてはいけない、二元は畢竟一元なり……

嚴肅に同時に快活に、眞面目に同時にふざけて、笑ひ同時に泣いて、善く同時に惡く、聖に同時に凡に、空虛で同時に充實して、人生主義で同時にダダで、意地惡で同時に好々爺で、卓上で同時に抑下で……

不二の妙諦はここかしら?

何を云ふのだ! そんな事だから六義だ、地獄に墜ちるぞ、知らずんば天邊の月に問へだ!

が、ダダの同時性とは?

或ひは……スタアンも、ハイネも、少々ダダだ……

×

世の中は相持ちでなければならぬ。人も善かれ、自分も善かれだ。

押せば押されるとは、田山花袋氏の發見された眞理だ、智慧だ。

明治四十何年の自然主義の全盛時代に、文章世界で盛んに押す事をされた前田晁氏は、大正十四年七月に（文藝春秋）小栗風葉氏に押されたためしもある。二十年位たつても油斷はならぬ。

人につらく當れば、人もつらく當つてくる。自分が人につらく當つておきながら、人が自分につらく當つて來たのを不屆きだと憤慨するのは、少々頭がわるすぎる。

詩壇には、この種の人がありはしないか？

詩論研究や、詞華集やで、人を虐待したり、無視したりしておきながら、人が（日夏氏）文藝講座とやらで詩を講じて、自分を惡く云つたと云つて、やたらに憤慨するのは、頭がわるいのだらうか、それとも人がよすぎるのだらうか？

公平といふ事が世に重んぜられるのは、みな他人のためではなくて、結局自分自身のためなのだ。

これが人生の數學の公理だ。

僕は無抵抗主義といふ事を重く見て來た。が、此頃は少し考へが變つて來た事を、ここで一寸披露させて貰はうか。

押せば押される。だが、押された時には押返す――これが結局自然だね。

賣られた喧嘩は買ふかも知れぬ。

僕の中だつて、さうさう空虛でもあるまい。

少くとも、ハイネ的の勇氣は人一倍あるんだ。

などと云つても、よくよくの事でなければ、僕は泥いぢりはしない。

もうすんでしまつた事で、こちらから火蓋を切る事はしないんだ。仕かけて來たらば、應戰もしようが……

六七年前のやうに、眞赤になつて、非議者達に「手套を投ぐ」るにしては、僕は少し年をとりすぎた、好々爺にな

りすぎた——とも云へる。

あの時は、親切な室生犀星君と、福士幸次郎君とが、僕のヒステリイ狀態を心配して、僕の不遇を氣の毒がつて、會まで開いて慰問してくれたツけ。

この二人の詩人の溫情と愛憐とは、僕の肝に銘して終生忘れ得ないところである。

僕は怨はすぐにも忘れたいが、かうした恩は、いつかは酬いたく思つてゐる。

×

スティルネリアン、ニヒリスト、とかく榮えない帽子をかぶつてゐた辻潤も、たうとうダダの開山になつて、此頃はあまり without fame でもなくなつた。

これは僕の敬愛する辻潤のために、僕の大いに喜んでゐるところだ。

實際、僕は彼を敬愛してゐる、よりも恐れてゐる。彼は恐るべき自由人だ。

僕は彼の影響を喰ひとめるべく、どれだけ懸命に努力したか分らない、僕の中のイデアリストが——

だが、僕の中で喧嘩ばかりして來たイデアリストとニヒリストとが、此頃どうやら大分仲善くなつて來た……らしい。

僕は宗教をかつぐといふので、大分文壇からも評判がわるく、親切な先輩にも叱られた。

だが僕の宗教は、基督教でもなければ、眞宗でもない。本來空の禪であつた……

禪と云つても、僕は深い事は知らぬ。知らうにも知られぬのだ。野狐禪にならうにもなれぬのだ。それでいい、些子にも較らぬ生半可の祖錄のセンサク、公案、商量に苦しむよりも、阿三婆の「白隱の隻手の聲を聞くよりは兩手を打つて商ひをせよ」をケンケンフクヨウして、文學大事と勉强するのに如かぬ。文學が僕の禪だから。

だが思想的に禪より得るところは多かつた。禪はもとより哲學でない、思想でない。思惟を超越し、思議をゆるさぬ。擬議すれば白雲萬里だ。かうして、禪とスティルネルとは同じだなどとは云ひかねる。が、野狐もいいナ……スティルネルのエゴイズムとトルストイの人道主義とが、ニヒリストとイデアリストとが、一つ流れに落ち合つて……また、とんでもない夢を見るのか、ピエロオ！　それよりもつと辻潤を學んで、ダダイストの往生をしろ。

さうだつた、ダダは僕の脫走場だ。そんな氣もする。が、僕の中のイデアリストが全滅しない限り、僕は永遠の人生主義、精神主義——ダダ已前である。

だが、僕のやうな苦しい性格のものは、少々ダダになつてもいいナ——ダダ的好々爺になつて、道化帽をかぶつて、もつとハイネ的に、スタアン的に、hindu の踊りをひと踊り……

大正十四年八月四日(「文藝思潮」十一月號所載)

三　雲を摑む男

いろんな事を云つて貰ふ。これまでは、一言挨拶しておくのが禮儀だと思ふ場合でも、ついそれなりになつて、時には意外の失禮をしたかも知れない。これからはなるべく、もつと積極的になれと云ふ一友の勸告に從ひたく思つてゐる。

僕の消極性と、孤獨の抒情詩とも久しいものだ。三四ヶ月前の日々で、三上於菟吉氏が、僕がモデル問題のために孤獨になつたと云つて、氣の毒がつてくれてゐた。が、孤獨は僕の立脚地だ。そこにモデル問題とやらが起るとすれば、(僕はそれを信じないが、その事實の闡明は、後世の好事家の任務である)それは原因結果があべこべといふ事になる。氏とも隨分長いこと會はないでゐるから、多分誰かの齎した風聞を本當にされたものと思ふ。

僕の社交嫌ひは、友人間でも通りもので、僕が會などの義理をかいでも、そのために恕してくれてゐる位だ。辻潤君などは、そこで僕を片隅居士と呼んでゐる位だ。然し、あまりに孤獨を口にしすぎたのは事實だ。今月の「不同調」の文壇放送局とかいふものの中の筆者から、「十年一日の如く孤獨を說いてゐる」と云はれても文句はない。この白馬といふ人の文は、一面よく僕の急所を衝いてゐてくれた點で、また、頗る同情に富んでゐた點で、僕には知己の言として感謝していいと思つた。ただ一つ、その中で僕が「孤獨を謳歌して、他をけなす」が如く書いてあるのは誤解である。三四年前までの僕の書いたものには、或ひはさういふ弱點が出てゐたかも知れない。だが、此頃の僕には、「他をけなす」といつた氣持は少しもない。

從つて僕の書くものにも、そんなところは出てゐない事を信じてゐる。僕は今一小スティルネリアン（と云へる程ではないが）として、それぞれの個性と、その個性の必然的現れである凡てのものとを認めようとしてゐる。自己と異るものを尊重するやうになつてゐる。昨年の春、本誌に書いた「同時代者の尊重」などを讀んで下されば、その傾向は分ると思ふ。他を尊重する代り、自分の存在も、さうさう一掃的に否定されない事を願つてゐる。これは少々蟲がいいかも知れないが。

ところで、この問題の孤獨だが、僕はそれを二通りの意味に使つてゐる。外面的のと內面的のとだ。一つは人間の集りを避けて、人なき自然に逃れる意味の、寧ろ融通のきかない孤獨。一つは必ずしも人を避けず、團欒を樂しみつつも、自己の個性を確保する意味の、和して同ぜぬ好々爺風の孤獨だ。何も世を避けて、一室に閉ぢ籠つてゐるだけが孤獨ではない。だから、よしんば僕がいつどんなに社交を愛するやうになつても、孤獨を口にして差支はない筈だ。

この孤獨論はそのうちに詳しく書きたいと思つてゐるが、とにかく僕の孤獨も、やつとこの方まで進んで來たやうに思はれる。そのためといふわけでもないが、此頃は努めて、長らく御無沙汰してゐる先輩知友をおたづねもし、旅

行でもしてゐない限りは、會にも出かけるやうにしてゐる。それでも華かな社交家には勿論なれないが、それは僕の天性で、それだからとて、僕が社交や交遊を無意味だと思つてゐるのではない。反對に、僕は純理を措いても、友人のためには盡すつもりなのだ。そして、これまで融通がきかなくて、それが十分出來なかつた事を恥ぢてゐる。が、まああれもこれも水に流さう、流して貰ひたい。

此間、報知で日禮といふ人が、僕の七月の新潮に書いた『山家文學論』を賞めてくれてゐた。いつも人に賞められる事の（いや、とかくの批評に上る事すらも）ない僕は、正直のところ、ひどく嬉しかつた。が、その中で、僕がふだん芭蕉や西行を論じたりするものには、「わざとらしいところがあつて興し難い」とあつたのは、頂門の一針だと思つた。このアッフェクテェションについては、僕自身既に十分氣付いてゐるのだ。いつだつたかも、僕を態度の人と評してくれた人があつた。態度の人といふと、何だかえらさうだが、僕は嬉しくなかつた、やられたナと思つたのだ。それは僕のアッフェクテェションを指摘した事になるからだ。態度の意識は既に不自然である、氣取りである、ボオズである。その反省は、既に、ずつと以前、菊池寛氏が、ボオズといふ事について說いて、文壇にもその類の人があると云はれた時からあつたのだ。その時、自分もその一人だと反省した位だから。

文壇にも、僕と共通の缺點をもつた人は、或ひはない事もないかも知れぬ。が、僕のよく知つてゐる中村武羅夫氏や、菊池氏自身の如きは、（菊池氏は直接にはよく知らないが）これが少しもない。氣取りや見せかけがちつともない。ありの儘に振舞つて、思つた事を思つた通りに云ふ、ちつとも無理がない、文と人とが一致してゐる。共に板についた人であると思ふ。だが、これはその人の天分である、性格である、誰でも眞似の出來る事ではない。と同時に、それが缺點となる場合もあらう。態度の人は、多くはより高きものを目ざして、自己完成の難路に行き悩んでゐるものであるから、その理想と現實との懸隔によつて、痛むべき破綻を示す場合多しとは云へ、そこに全然取るべきところ

がないとは云へないであらう。ただ、然し、最も板につかない人間である僕としては、かの確固たる現實的地盤に立つ人々は、羨むべき性格であり、天分である。板につくまで――それは長い困難な修業である。

僕は雲を摑む男である――と僕は自覺した。あらゆるイデアリストは、精神主義者は、畢竟、雲を摑む男である。が、それは別としても、一層わるい意味で、僕は雲を摑む男だ。いつも迷つて、適歸するところを知らない。自己分裂と、矛盾撞着との中にあがいて（それを統一したやうに、でなくも、少くとも一方だけを強調するから、わざとらしくなるのだらうと思ふ）たまたま摑んだものは、しつかりした實體ではなく、雲である、泡である。所詮、空々漠々である。ダダをむしろ排した僕も、かなりダダ的要素に富んでゐる。ことによると、僕のニヒリズムは辻潤まで徹底するかも知れぬ、今迄は懸命に抵抗して來たのだが。然し、ダダは最後の絶望の安心立命だ、僕のめざすその板をとりのけた境地だ。僕の空々漠々主義は、苦悶の回避であつてはならない、板につく修業の回避となつてはならない、と云へば幾分理解して貰へようか。とにかく、白馬君よ、心配しないで下さい、僕も進歩しつつある――。

大正十四年八月四日（「文藝春秋」九月號所載）

四　悲喜獸口上

これはロオレンス・スタアン、イギリス十八世紀の貧乏牧師、あまり榮えた男ではないが、しかもハイネは大體その弟子だ、ところで僕は、世評によるとハイネの弟子だ。してみるとスタアンは、僕には大師匠――孫弟子の逆――に當るわけだ。近來、日本ダダ宗開山の辻潤が、この先生をダダ宗の大開山、イギリスの大本山に祭り上げた。ダダには頭も尻尾もない筈だ。辻潤にも、ちとダダ以前が殘留してゐると見える。尤も、これ彼れ潤のダダの鼠でない、不本意なる悲劇性を暴露するものとして、（ダダは悲劇の脫走なり）僕は人生派（卽ち、悲劇主義の）の立場から、彼を尊

重する事、今尙舊の如しである。

ところで、新潮八月號を見ると、谷崎精二氏が例の謹直の一文中、このスタアンの『センティメンタル・ジャアニイ』の事を擧げてゐられた中に、これを「たど〳〵しい單調な」ものと評してゐられたのは、少々不服である。たどたどしいどころか、スタアンほど融通無礙な文章を書いた男は、あまり知らない。またスタアンほど複雜な發想と、千變萬化の表現とをなし得た男もあまり多くはあるまいと、僕は思つてゐるのである。が、これは多分、谷崎氏があまりに正面すぎ、正道すぎるところから來た評語ではないかと思ふ。もつと砕けた、融通自在の鑑賞家として傑出してゐる三上於菟吉氏などは、夙にスタアンを愛讀してゐられる筈だ。そのうち「當世文事鑑」に、氏一流の「魔才」をもつて、この鬼才を紹介して貰ひたいと思ふ。

尨大な『トリストラム・シャンディ』僅か百頁そこそこの『センティメンタル・ジャアニイ』共に僕の愛好書で、僕をして辻潤の言を條件つきで承認せしめる。まづ試みに、センティメンタル・ヨリック、巴里の一店頭に手袋を購ふの一段を抄出す。ほんの大意だ。それにこれは內證だが、英語は「たどたどしい」ので、僕はドイツ譯で間に合せてゐる。で、誤解が二重でも、ダダに誤正はないと思ひたまへ。「序に手袋を一つ」と私が(ヨリックが)云つた時、美しいその店のおかみさんは物賣卓のむかうへ行つて、一束下して來て束をといた。私はその卓の外側に近よつて、彼女と對ひ合つて、手袋をはめてみる。それはみんな大きすぎた。綺麗なおかみさんは、一つ一つ私の手にはめてはみるが、やつぱりみんな大きすぎる。それで彼女は「この一番小ささうなのをはめてみて下さい」と云つて、ひろげて受けてゐる。私の手はするすると入つてしまつた。「合はないナ」と私は少し頭を振つて云ふ「そんな事はありませんわ」と云ひながら、彼女も同じやうに頭を掉る。

世には氣まぐれと分別臭さと眞面目と冗談との一緒になつてゐる單純なデリケエトな眼付がある、バベルの塔のあ

らゆる言葉を合せても、それを云ひ現はす事は出來ないが――その眼はどちらが本元か云へぬ程、瞬間にそれを告げもし摑みもするのだ。世の饒舌な諸君がそれについて何頁書かうと、それは諸君の勝手だ。今はもう一度繰返すだけで澤山だ、卽ち、手袋は合はなかつたのだ。それで二人は手を拱いて、卓の上に凭れた、卓は二人の間にやつと手袋が置ける程狹かつた。

美しいおかみさんは時々手袋の方を見ては窓の方を見、また手袋を見――それから私を見た。私は沈默を破らうとは思はなかつた。私は彼女の例に倣つた。手袋を見ては窓を見、また手袋を見ては彼女を――いふ風に續けた。私はその攻擊の繰返される度に、自分が苦戰に陷るのを認めた。彼女は生々した、黑い眼をもつてゐた。そして長い柔かな睫毛の下から、私の胸の底まで見通すやうな眼付を投げた……。

まだ續くが、あまり長く書いて、僕の說の方が不利になつて困るからやめよう。ところで、これの何處が面白いのだと訊かれると、僕は一寸困る。そんな人は、去つてこれをゲエテに、於菟吉に、或ひは辻潤に訊き給へ。ゲエテは彼を愛して「ヨリック・スタアンは曾つて働いた最美の精神である。彼を讀めば、直ちに自ら自由と美を感ずる」とさへ云つてゐるのだ。ニイチエも彼の愛讀者だつた。ハイネと來ては、彼をシェクスピアと同格において、禮讚至れり盡せりだが、それは略して、ここに僕の好々爺哲學の一端を披瀝する。

佛陀からピエロオまで、ピエロオから佛陀まで、その中間にあはれな厭世主義の詩人がゐる。彼が淚を流して合掌禮拜してゐる姿は滑稽だが、彼が鈴つき頭巾にダンダラ染で躍り廻る姿は悲慘である。彼の佛陀はドストエフスキイで、彼のピエロオはヨリックだ。そしてヨリックとドストエフスキイとは、一つの環でつながつてゐる。それを兩極だと思ふのは、ドストエフスキイをも知らず、またスタアンをも知らぬ。醉漢マルメラアドフの中に、長老ゾシマを發見するものは幸ひである。ペシミストよりダダ的好々爺へ――それは彼がこの地獄から救はれるための、唯一の靈魂の

メタモルフォジスであらう。

アラス・プウア・ヨリック！

大正十四年八月二日（「不同調」九月號所載）

反語・逆説・諧謔・背理等の數頁

百　雜　碎

不徹底なるニヒリスト

ニヒリストは絶望したイデアリストである。眞に絶望に徹した時、人間はもはやその上生きる事は出來ない。いかなるニヒリストも、その生きてゐる限り、なほ幾分かの希望を有つものと斷じていい。彼の衷のイデアリストを徹底的に殺戮するためには、彼は胸に彈丸を打込まねばならぬ。その勇氣なき間、彼は謂はば、希望と絶望との間の振子である。

好ましき絶望

絶望は——赤ネクタイでも表白できる。

老放浪家の死（坂本紅蓮洞氏を弔す）

彼が最上のディオニシエンだ、その生涯が一篇の醉歌である……

外より内へ

人間は形に支配される。洋服を着れば、思想も洋服を着る。

自分の理解されない事を嘆く勿れ。自分は一體いつ他人を理解し得たか？

人間修養の道場としての文壇

文壇生活ほど、人間修養に資するものはない。禪などに凝つて、野狐禪になるよりも、文壇の奈落に苦闘十年せよ。月々の公案、月評家の一喝、ゴシップの三十棒、コンニャク問答、單刀直入、一として缺くるところはない。かくして圭角は削られ、我慢の鼻は折れる。談笑場裡の虚々實々、裏に裏あり、嘘に實あり、瓢箪からは駒が出る。いかなる下根も、これではいやでも機用を體得せずにはゐられまい。これは決して反語ではない。

貧すりや鈍する

傲慢は最も重く罰せられる。金錢に關して傲慢なるものは、その罪就中重い。彼は一個淸高の士より、いつしか愚痴の鈍物に墮するであらう。人間は弱い！

名利の心を斥ける友へ

君の言葉は凡て正しい。然し、生きんとする意志は、名利の心だと、君も認めるであらう。そして僕が曾つて君と對坐して、等しく名利の心を斥けたとき、僕は自分が生身の人間だといふ事を忘れてゐた！　今僕は、ただ一つの嘆息をもつて、人生を肯定する……

他を殺すものは自ら殺す

あまりに正しきは誤謬である。極端の正義感、嚴格なる理想主義は、人を殺す。それは秋霜烈日の裁判の如し、かの恐るべきドラコン法に似たり。あまりに他に對して嚴しきものは、つひに自らその苦に堪へざらんとす。酷法の制定者は、しばしば自らその法の犧牲となつたではないか。「嘘の效用」によつて、裁判の適宜は期せられるといふ。人

生もまたその力によつて保たれねばならぬ。

或る讀書子の嘆息

書物は賢者の良友にして、愚者の暴君なり。

見せかけなく

自己の知識の極限を人に知らしめない方法は、自らその極限を超えない事にあるとは、レオパルヂの言だ。思へば自分は常にその極限を超えた。なぜ今更に無學の誹りを恥とするか。

藝術論斷片

藝術の效果は、省略にある。詩的創出は、既に人生の省略である。

一つの疑ひ

暴力の否定が、無抵抗主義に導く。然し、暴力はひとり腕力や武力にのみ限られてゐるだらうか。人生を支配してゐる法則は、みなこれ暴力に外ならぬのではないか？

自嘲として

「四十歳を越した才人が悲慘であるやうに、三十歳を越したばかりの風流人は滑稽だよ。」

忘却來時道

古い傷手を、あまたたび繰返し反芻するといふ事は、愚かな事である。返らぬ悔いに心を惱まれ、絶えず舊怨を培うて、復讐の火を燃やしてゐるものは、謂はば自ら滅ぼしつつあるのだ。

我々の自由な生活は、一切の過去の羈絆からの脫却によつてはじまる。我々の救ひは、屢々忘却の中から來る事がある。

思ふに、忘却の術が、新生の祕密ではあるまいか。然し、その術の難さよ。
ただ、かの飄乎として風の如き自由人、寒山子のみが、能く、來時の道を忘却す。

アキレスの踵

人間はみなアキレスの踵を有つてゐる。どんな强靱な人でも、非常にやはらかな一點を有つてゐる。そこに觸れられると、一堪りもない。
その一點を知つてゐる人は、たつた一つの言葉をもつて、少女を泣き出させるよりも、一層容易に、自分に敵意と反感とを抱いてゐる男子をも、自分の友とする。
そして、よき藝術家の觸角は、常にこの一點に觸れる。

死が不幸である事の最大理由

人はそれぞれ一つの言葉を有つ。その言葉こそ、彼がこの世で發すべく授つて來たものだ。
然し、多くの人は、その言葉を出さないで死んでしまふ。

不幸な隱君子

あまりに氣持がえらくなりすぎた人は、それだけ實世間に於いて償はねばならぬ。

長い三行半

ペシミストの述作は、畢竟、人生への三行半だ。ショオペンハウエルの十卷といへども。

人間の悲哀

心を高遠な天に馳せると、足が地から離れる。

一同宗者

最近、舊友がその同郷の友を伴つて來て、この男は、昔は熱烈な人道主義者だつたが、今は盛んなポリッソンになつてゐると云つて紹介した。

人道主義者よりポリッソンへ——それは面白い推移だ。また無理のない自然な推移だ。然し、それは何といふ自然の皮肉な惡戯であらう。思ふに、彼はその事によつて、無意識にその過去に復讐してゐるのであらう。

愛なくば生き難し

市場に愛を語るものは、しばしば嘲笑せられる。それも無理はない。愛は語らるべきではなく、行はるべきものであるから。また、たとへ語る事を許されるとしても、彼はその語るべき場所を誤つたのであるから。

然し、世の老實なる人生の知者——愛なる言葉のいやみを唾棄する人も、愛なくして生きる事が出來るであらうか。現に、生きつつあるであらうか。

世には女を愛するものがある、酒を愛するものがある。金を愛するものがある、名を愛するものがある。皮肉を愛するものがある、愛の否定を愛するものがある。

鉛の腦を有つた男

ドオデエの書いた金の腦を有つた男の運命は悲しい。然し、鉛の腦を有つた男のそれほどに悲しいであらうか。彼はいかにその腦の一片をかぎつつ生きねばならなかつたとは云へ、なほ黄金の腦を有つてゐた。

自分は自分の鉛の腦の一片をかぎ取る每に、二重の苦痛を覺える——金の腦を有つた男の感ずるあらゆる苦痛の外に、それが金ではなくして鉛である事の苦痛を。そして、後者の方が一層ひどい。

ゴシップ問答

「匿名の漫罵が流行する。でたらめなゴシップが流行する。實に、惡い傾向だ。」

「さう、君の憤嘆は尤もだ。僕にもその君の氣持は分る。だが、僕は人間の心の中に、いろんな悪いものがあるのだから、かまはずそれを出して行くのもいいと思ふ。」

「そんな莫迦な事はない。悪いものなら、極力撲滅すべきだ。心の中に考へるだけさへいけない事を、おくめんもなく筆にして、他人を傷けるとは何たる不道德な事だ。」

「然し、まあ君のやうに、さう力む必要もあるまい。ゴシップによつて傷けられるものは、書かれる當人ではなく、書く當人だからね。」

賢い友の一つの矛盾

「人を莫迦だと罵つた時は、自分を莫迦だと罵つてゐるのだ。この理が分らないものは本當に莫迦だ。」

退屈への對症療法

彼は或る日、眼から涙まで出して欠伸して云つた。「君はよくさうして平氣でゐられるね、おれは退屈で堪らない。誰かおれを莫迦だ、卑屈だ、低能だなどと云つて、思ひ切り罵倒してくれるものはないかなア。」

人間的道德

人間はみんなそれぞれ違つた方法で、おなじ人生の苦難を惱んでゐるのだ。我々は他人の苦痛を尊重しなければならぬ。

二樣の利己心

世の中は相持ちで行くところに味ひがある。人も善かれ、自分も善かれだ。人が善くなれば、自分も善くなれる。そこに最も堅實な人生の基礎がある。

かくして、我々は友人の成功を喜び、仲の善い友達の間に、自分もその一人である事を幸福に思ふ。

然るに、世には友の成功を喜ばないで、惡聲を放つたり、友と友との間を離間して、ひそかにほくそゑむやうなたちの人がある。凡そ何が分らぬと云つても、そんな人の心事ほど、わけの分らぬものはない。人間はもとより利己的なものである。然し、善良なる利己心は、常に賢い。

良心地獄

地獄に陥るは、人間の性善なればなり。良心なければ地獄の觀念なし。而して、惡漢は常に、どうせ行先は地獄サと叫ぶ。このゆゑに、「善人なほもて往生を遂ぐ、況んや惡人をや。」（親鸞）

快樂兒の道德

「欲望は時々新たなり、その欲望をして、空しく冷却せしむる勿れ。」

詩人の鑑別法

その人の散文を讀んで、詩を見出し得られない詩人は、本當の詩人ではない。

新人への注意

「二重人格」は「貧しき人々」よりも、ドストエフスキイ的の作品である。しかも、この作に至つて、彼はその先輩知友から否定された。彼等はドストエフスキイの中に、ゴオゴリを見る事を喜んで、ドストエフスキイを見ようと欲しなかつたのだ。

惡口を免かれる道

人を惡く云つたり、人に惡く云はれたり、それがいやになつた。「誰をも惡く云ふまいと思ひ立つてからもうかなりになる。が、時々忘れて、つい人の事を惡く云ふ。だが、まあ人を惡く云ふ事はかうしてだんだんに矯正ができる。けれども、人から惡く云はれる事だけは、自分の意志の儘にならぬから、どうも仕方がない。默つてそれを聞いてゐ

るばかりだ。そして、好意からの非難には感謝して反省の資とし、惡意からの漫罵は、直ぐ忘れようと思ふ。

たのもしい男

少年のとき、私は本を讀まなかつたり、文章を書かない人間は、みなつまらぬ無知な人間のやうな氣がしてゐた。二十歳をすぎた時分には、さうした人を取るに足らぬ俗物だと考へたものだ。けれども、私が困つてゐる時、金を貸してくれたのは、そんな俗物だつた。

中途半端がいつも惡い

「人間が本當に賢くなるのは、はじめからちつとも本を讀まないか、又は讀んだ本をみな忘れてしまふかだ。ちつとも本を讀まなければ、心眼が曇らないから、物の道理がよく分る。うんと讀めば、また、互ひに知識が相殺して、知識の無意味な事が分つてくるから、從つて、正しい事が分つてくる。」

この言葉は智慧の言葉であらうか？　又は一片の皮肉にすぎないのであらうか？　世には皮肉で、同時に智慧でもあり言葉もあり得るであらう。

或る詩人への葉書に

詩は二二ヶ五だ。二二ヶ四の世界では、勘定が合はぬのも當然ではあるまいか。

禁斷の才能

文學者の才能にも、時代に適應するものと、その然らぬものとがある。

その例證を擧げれば多々あるが、かの諧謔と反語と逆說との才能も、またその一つであらう。

現在の我國の文學上の一般的敎養は、シェルツやイロニイが、正當なる理解と鑑賞とを受ける域にまで達してゐない。

従つて、その種の傾向を有する著作家は不幸な誤解や非難に煩はされるか、又は生來の才能をためて、平板無味な表白に屈するかするの外はないであらう。

かくて、彼は不評判な文學者となるか、平凡な文學者として現れるか、二つの不幸の中の一つを選ばねばならない。

自嘲の危險

駄詩百篇――

されど罪問ふ人もあらず、

ヘボ詩人にも何の幸。

といふ詩を、かつて、もう餘程以前だが、ある新聞に發表した事がある。それは、それ自身全く駄詩であつたが、私はこれによつて、自ら嘲るの外、他意はなかつたのである。

ところが、その日の夕方、意外にも一枚の葉書が飛び込んで來て、それには、貴樣自身がヘボ詩人の癖に、恥を知れと云ふやうな激烈な文句が亂暴に書き記されてゐた。

題を『ヘボ詩人』とする代りに、『自嘲』としたなら、こんな誤解もなかつたかも知れない。が、自嘲を常に自嘲と斷はらなければならぬとは、何と氣の利かない、そして窮屈な事だらう。然し、その窮屈を忍ばなかつた罰として、私はその一夕の不快を課せられたのであつた。

不死の先入見

學士時代に、不用意に、未熟な研究を發表した學者は、博士になつても、どんなすぐれた研究を公表しても、依然として學界に信用されないで、輕視せられるといふ事を聞いた。

青年時代に幼稚な作をもつて現れた文學者も、それと同じ目に遭ひはしないだらうか。年少時のセンティメンタルな

詩で名を得た詩人は、いつ迄たつても、センティメンタリストといふ烙印を消す事が出來ない――とすると、彼はどうしたらいいのだらう？

感傷無味

詩集の題に、感傷といふ言葉を用ゐたばつかりに、天下の感傷主義を一手に引受けでもしたかのやうに、私はかなり長い間、詩壇から、眼の敵のやうに、甘いとか、センティメンタルだとか云つて罵倒された。おなじセンティメンタルの譯語でも、殉情と云へば、さもいいやうに思はれてゐるのに。

今ではやうやく、この感傷詩人が、さう甘くはなく、時々はひどく苦いといふ事が分つて來たらしい。然し、恐れるには及ばない。僕はハイネほど甘くなかつた代りに、またハイネほど苦くもないのだから――

自分はやつぱりハイネではなくて、ハイネの譯者にすぎなかつた、かのジェムズ・トムスンと同じやうに。

「殉情」主義者の抗議

「センティメンタルだから惡いッて？　莫迦云つちやいけない。センティメンタリズムといふくつろぎがあるからこそ、人間は生きてゐられるのだ、――『殉情』主義萬歲！」

許されぬもの

あらゆるものが分つて、自分だけが分らぬもの――それが人間だ。

鏡の助けを借らないで、自分の顔が見えるとき、人間ははじめて自分を知るであらう。

蝙蝠の如く

詩人の中に行くと、おまへは散文を書くから、詩壇には用がないと云はれる。

文壇に行くと、詩人なんか來るなと云はれる。

あはれな分業時代の犠牲者よ、僕はただ一個の人間であらうとしたまでなのに。

詩人貧乏

いつだつたか讀んだ或る笑話に、こんなのがあつた。

或る文士が易者に運勢を見てもらふと、「三十歳までは貧乏する」と云つたので、文士は大に喜んで「ぢや、三十歳以後は、樂になれるんだね」と訊くと、易者は答へて曰く、「三十歳以後は、貧乏に馴れる」

だが、それはもう種が舊くなつた。今では文學者——殊に創作家といふと、稅務署と社會主義を標榜する暴力團とに、目星をつけられるやうにさへもなつてゐるのだから。だが、この文士といふのを、詩人と變へさへすれば、不思議に今でも通用する。そこで、詩人の苦情が此頃しきりに雜誌を賑はす。

昔もさうだつたが、やつぱり今でもさうだ。詩人が食はなければならぬと云ふことは、確かに悲しい事だ。それからあらゆる不幸と無理とが生れた。詩人だけは食はないでも生きてゐられないものだらうか？

石川啄木は「食ふべき詩」を主張した。それはたしか、地に足をつけた詩、生活に卽した詩の謂であつたと思ふ。が、しかし、それを文字通りに取るとき、所詮、詩は食ふべからざるものであつた。そして、天才啄木も、またあはれな犧牲者として終つた。

詩は死だ——然り、匪々。

文學者より敎授へ

文學は學に非ず。人生を全一に味はんがための文學なり。これを分析し、解剖して、何をかなす。

科學としての文學研究——恐るべき愚昧、文學不感症患者のエロトマニア。

敎授より文學者へ

その言や善し。我等はそれによつて、文學者の心理を研究する事を喜ぶ。凡て人間の心象は、これを推究するとき、悉く學たらざるはなし。かくて文學は學となる。

人生百般の現象は、すべてこれを分析し解剖し得べし。何故に文學のみ、その除外例たらざるべからざるか。

我等にとつて、卿等の作品も、卿等自身の存在も、ただ一研究材料のみ。あだかも精神病患者が、精神病學者に於けるが如く、犯罪者が、法醫學者に於けるが如し。

文學と文壇と

文學と文壇とは、決して同一ではない。また、全然別種のものでもない。文學者が凡て文壇人でないと同時に、文壇人の中心興味が、必ずしも凡て文學に屬してゐるものでもない。

我々はあまりに文學を重んじ、文壇を輕んじすぎるときは、文壇の外に孤立するの苦を受けなければならない。然しまた、あまりに文壇を重んじて、文學そのものを輕んずるものは、線香花火の如く慌しき消滅の憂目を見なければならない。

賢明なる人々は、その善處の適量を知つてゐるであらう。

二種類の文學者

貧乏を誇るものは幼稚である。貧乏を嘲るものは俗惡である。

レストオランにて

「幸福は金によつて購ふ事はできない。然し、不幸を緩和するものは金である。」

（原稿料を得たる月評家も、コクテルの杯を嘗めつつ、かく呟き得たであらうか？）

默　殺

默殺は最後の武器である。しかも最も威力ある武器である。漫罵、誹謗、毒言を弄して以て快とする人々は、未だこの精鋭なる武器の威力を知らぬ人々である。

漫罵は人を怒らす。然し、默殺は人を殺す。

頭腦の扁平足

土ふまずのない足は扁平足といふ。扁平足の人は、足が全く地についてゐる。耕地と鋪道とを歌ひさへすれば「大地に即した詩」であると思つてゐる詩人の頭は、謂はば頭腦の扁平足であるかも知れない。

推讃の辭

全然無意味の事を書くといふ事は、たしかに一つの立派な天分である。少々莫迦げた事ならば、いくらも書ける人はあらうが、全然無意味の事といふものは、書かうとしてもなかなか書けるものではない。それゆゑ、私はX――君を推讃しようと思ふ。

大正十五年一月―六月「隨筆」「文藝行動」「文藝道」「文藝市場」等に掲載

風塵

――ゴシツプなるものの流行について――

一

社會を足下に踏みつけてゐるやうに思つてゐると、いつのまにか、社會から足下に踏みつけられてゐる。それが所謂名士と呼ばれる人々の運命である。

名士の運命は、決して羨むべきものではない。

二

ゴシップは社會の塵だ。疊をたたけば、埃が立つ。

たたかなければ埃は出ない。しかし人間にはそれをたたかずにゐられない本能がある。それを「ゴシップ本能」と、菊池寛氏は云はれた。

所詮、人間そのものが塵だ、埃だ。人生は卽ちゴシップかもしれない。

三

自分の哲學は、結局、「仕方がない」に落つく。

ニイチエの言葉では、アモオル・ファテイ。ゲエテの言葉では、エントザアグング。自分の言葉では、一番平凡に一番平俗に「仕方がない」のだ。

「ニチエヴオ」と露西亜語ではいふのだ。

四

ニイチエの運命の愛は壯烈である。

ゲエテの諦念は深奥である。

自分の仕方がないにはその悲壯も超脱もない。從つて、その不如意感は、結局不愉快の一語に歸す。

自分はつひに一庸人にすぎなかつた。そして、その上、庸人の幸福をさへ與へられない。

五

日常生活をたのしみ、好々人の達觀に住せんと志す自分も、ともすると、不愉快の濁色をもつて世界を彩らずにゐられない。

人生も、社會も、(また、文壇といふところも)自分には、不愉快といふ鋭い不愉快な音をもつた言葉にしか値しない瞬間がある。

大正十五年五月、「ゴシップ」誌

左傾・名聲

×

高尾平兵衛か、有島武郎か、プロレタリア論客の前には、重大な試問が提出された。テロリストか、ネヅダアノフ(『處女地』の)か。徹底すれば、二つの暗礁の、いづれかに觸れなければならない。これは我々も十分に考へて見なければならない事だ。

もつとも、眞は中道にありで、中庸の美德をとつて、【やつぱり原稿を書いて、新聞雜誌を賑はしてゐた方が本當だらうか。

×

「言葉、言葉だけ、何の行爲もない」といふハイネの詩句がある。

×

「極端と極端とは一致する。極端の左傾は極端の右傾と一致する。極端の無政府主義は、書齋裡の文學者の個人主義と一致する。」これは或る共產主義者の言葉であつた。

「最大の危險人物は最大の安全人物である。」その結論は、然し、その共產主義者にも適用される。

×

今ここに一人の評論家があつて、卒然その左傾を表白したとする。そしてその表白が多くのプロレタリア論客の賞

讃をかち得たとする。しかも、その人の生活たるや、依然舊來のそれと何等の相違もないとすれば、その左傾果して何の意味があるだらうか。

私は今のプロレタリア論客の本意をいかに解すべきかに苦しむ。彼等は酒に醉つて革命歌を高唱しさへすれば、左傾だと心得てゐるとみえる。

×

プロレタリア文學者は、まづ一切の名聲を否定しなければならない。

名聲は資本である。世に名聲以上の特權はない。無名に對する有名は、たしかに無産階級に對する有産階級の關係ではないか。

名聲をたほせ！ 但、その運動によつて、自ら名聲を獲得してはならぬ事はいふまでもない。

もつとも、名聲の否定とは、個々の名聲の排撃ではなくして、元來、名聲そのものの價値を認めない事に外ならぬ。他の名聲を認めない代りに、自ら名聲を求めぬ事である。

「文藝春秋」大正十二年十二月號「片隅から」の一部

文壇的社交と孤獨

——書かでもよかりし社會的閑文學——

文壇生活は、一面、社交的生活を意味する。文學的作品が、本來、孤獨裡の產物であるべき事は、今更云ふ迄もない事であるが、文學者として、その文壇的地位を確立せしめるものはその社交生活である事實も、また否定しがたいであらう。「文壇生活といふものは、原稿を書く事なんかぢやないんだ」と云つた或る文壇大家の說は、この點に關し

て、極めて率直にして明快なる斷案として聽くべき値をもつてゐる。

自分は文壇人の社交生活を、決して否定するものではない。それは人間性の約束に服從した賢明な行爲として、推服すべきものかも知れないとすら思ふ。然し、かかる社交生活には、必ず一つの危險が伴ふことも看過しがたいのである。

然し、かかるその當事者自身にとつての危險については、玆に記すまでもなからう。かの賢明なる人々は、それをばよく知悉してゐるに違ひないと信ずる。

自分の云はんと欲する事は、むしろ、その對他的の意味である。即ち、かかる文壇的社交が、一つの「選ばれたる人々」の世界をかたちづくる事によつて、自ら好んで社會的孤立を企て、一般民衆の思考とは著しくかけはなれたる文壇的思考法によつて、自己の世界を狹く制限するとともに、一種の特權階級意識を以て他にのぞまうとする事である。

例へば、かの「文壇の椅子」といふやうな言葉が、時に、無意識に、小說家の口より洩れる事があるが、さうした小說家の口吻を學んで云へば、「そんな(椅子)なんぞは鬼に食はれてしまへ」である。この「椅子」なる語は、一つの制限を表明してゐる。從つてまた、一つの特權を表明してゐる。何となれば、椅子は無限に存しえないからである。そして、椅子にかけるものは、かけえないものに對して、莫大な優越感を誇りうるからである。しかも、この椅子を支持する地盤が、現下のジャアナリズムの支配權にすぎない事を思へば、その優越感が餘りに文壇的思考法にすぎざる事に驚く。

孤獨なる言葉は、文壇人の最も好まぬところである。それは文壇的思考法に反するからである。故に、直ちに文壇的社交を蔑視し、孤り自ら高しとする意に解して、自己に對する直接の非難を讀みとらうとする。自分の如きが、孤

獨の語を口にしたために、しばしば、文壇の反感を買つたのも、かうした誤解に因する。そして、自分は自己の眞意のそこにあらぬことを文壇人間に徹底せしむるために、數篇の文章を草しなければならなかつたのである。

自分が文壇的社交に疎いのは、上述の如く、決してそれを蔑視してゐるがためでなく、ただ自分の非社交的性格に基づくにすぎない。故に、そこには何等自己を正しとし、これに等しからぬがために、他を非難せんとする意志の存する筈はない。自分の云ふ孤獨は、さうした表面的にでなく、もつと內面的に取つて貰ひたい。そして、この內面的意味から云へば、文壇的社交人といへども、必ずしも孤獨の不感知者ではなからう。殊に、一人がその席を退くや否や、直ちに衆口からその惡口の出るが如き社交の中に、誰か孤獨を感じないでゐられようか。これに反して、孤獨者もまた、その孤獨を深く掘り下げて行くと共に、再びその孤獨の底で萬有に緊がる自己を見出すに違ひない。

社交も孤獨も、文壇的思考法から離れて考へられたい。目下の急務は、文壇といふ一つの埒をとりのけて、文壇意識なくして文學に對したい事である。文壇といふ言葉の內容を、現在の如き文壇的社交界の範圍より擴めて、もつと廣義の、かつ自由なるものとする事である。

即ち、すべて文學的作品を述作する人人を一樣に文學者として認め、これらの文學者の努力の現れる範圍を文壇と見なしたいと、自分は望む。

大正十五年五月八日(「新潮」六月號所載)

人生詩論集

詩人の宣言と告白

（一九二八――一九三〇）

詩は滅びず

――詩人よ、詩の幽靈をふり落せ――

我が唯切に念ふは
我がために最後の詩を與へよ
滅びゆく美を與へよ
いま一度我を呼ぶものに會はしめよ、
寒流に泳がむことを辭せず、
いま一度會はしめよ
老いたる乙女のごとき詩よ立ち還れ。

室生犀星詩集『鶴』の中の詩句

×

詩作二十年、かへりみれば長い年月であつた。然も、その年月、自分は眞實の詩の一篇をだに書き得たか。わが衷心決定の語、わが赤裸々の眞實を打出し得たか。宇宙天地の祕密に肉迫し得たか。詩天の銀山鐵壁を突破し得たか。力足らず、才足らず、文運またつたなくして、最後の一躍に於いて、自分は常に蹉れた、常に躓いた。嗤ふものは嗤ふべし、憫れむものは憫れむべし。自分もまた、慨然として嗤ひ、憮然として自ら憫れむ。

だが、自分も詩人だ。十年、自分は詩に殉じた。あらん限りの戰ひは戰つたつもりだ。第一歩からの誤解、曲解、誹謗、冷視、それとも戰つた。ジヤアナリズムの誘惑、世俗的人氣の魅力、それとも戰つた。最後に辛うじて自らを救ひ得た。それだけはわが慰めだ。

曾つて小曲詩人、感傷詩人の名を冠して、爭つて自分を貶黜せんとした人々が、鬢髮霜を加ふるに至つて、感傷詩人、小曲詩人として、自ら少年少女雜誌に、喜んで出場するのとき、自分はただ驀地に、最後の一飛躍にのぞむ。二十年の敗闕を、自分は一擧にして挽回せんとするのだ。詩天の銀山鐵壁を突破せんとするのだ。禁斷の詩三百、生前の遺稿、敗德の詩篇、そこに恥あり、誇りあり、わが赤裸々の姿がある。そこには無花果の葉すらもない。凡ての形式を破碎して、やや眞に迫り得た。わがなきあとに、人ははじめて自分がいかなる詩人であつたかを知るであらう。

自分はつひに死後の詩人である。生前の名家に非ず。

×

北越の詩人室生犀星俗衆の好惡を睥睨し、冷氷を破碎して、自己を摑まんとす。この安易なる俗曲演歌の時代、何等勇猛の精進ぞ。

彼れ室生犀星と自分とは、正反對の地點から出發した。彼は童眞の感覺から出發し、自分は沈鬱の冥想から出發し

た。我々の道は全く異つてゐた。然し、我等は今、殆んど同一の地點に達したのだ。少くとも、その詩以上の詩の希求に於いて。

自分と室生君とは、相前後して、處女詩集を出した。當時、室生君は『感情』誌上に、自分の『靈魂の秋』の批評を記して、十年共に詩に勵んで來た二人が、今ここにその詩集を交換するを得た事について、詩人らしい愛と感慨に充ちた言葉を書いた。

爾後十年、我等は再び詩集を交換した。蓋し、最後の交換である。何となれば、自分は復た生前に詩集を出さぬからである。

室生君はその贈るところの詩集『鶴』の卷首に、左の言を書して自分に與へた。それを玆に寫し記するものは、自分の心がそれによつて深く動かされ、心底に喜悦を禁じ難いものがあるからである。そして、これを詩友に示さずしてはゐられないからである。恐らく、室生君もまた自分の非禮を深くは咎めぬであらう。

春月詩集ヲ讀ミ我マタ何ヲカ言ハンヤ、カクノ如キ詩人ノ詩ヲナスコト、モハヤ讀ムニ堪エズ、コノ心春月君知リタモウベシ、誠ニ我モマタコノ詩中ノ童子タルコトニ堪エズ、トモニ詩神ヲ射殺スベシ、詩人ノ詩ヲアツメルコト今日ニトリ誠ニ苦痛ナリト思ハザルヤ。

十月二十日　　　　金澤にて　　犀　星

春月大兄叱正

良寛は厭ふべきものとして、詩人の詩、書家の書を擧げた。詩人の詩を作し、詩人の詩を集めること、自分もまた苦痛である。

詩は我が溺愛の女性、彼女のために、わが生命を捧げんと欲するも、詩を求むるとき、その影は逸す。詩を斷念して、自己にかへるとき、詩は既にその衷に微笑む。

詩人は詩を愛する。詩を愛するはよし、詩を愛するのあまり、自己を忘れ、自己を空しくして、ただ詩の形骸を摸索して終る。詩神につかへんと欲して、詩の幽靈に憑かれて、その使役に勞す。心動かずして、言葉躍る。何等の悲しみぞ、

室生犀星、詩神を射殺せよと云ふとき、自分はそれが詩の幽靈を射殺せよの意に外ならぬと思ふ。詩は別處に存せず、わが肉の肉、わが血の血、身肉を離れて文字に就くとき、我等すでに詩の幽靈の捕虜である。わが內奧の詩、わが肉體の氣息、わが靈魂の分泌物、わが血、わが肉、これを商品となすこと、多年、わがひそかなる痛苦であつた。今や、文學の滅亡期、詩の衰滅期、大衆物と流行節の時代、このとき眞の詩は生くべし。ただ一人の詩人あつて詩の幽靈をふり落し、市場に背面して、鮮血淋漓、自己の心肝をつかみ出すとき、詩は滅びず。

×

有島武郎が『詩への逸脫』は、つひに「死への逸脫」であつた。說明的、理智的なる小說戲曲に慊らず、直接なる生の燃燒と象徵を求めて、彼は詩に向ひ、瞳なき眼に當面した。そして、詩は彼を死へと導いた。人類愛の表白は詩に極まり、詩は愛するものとの共同の死によつて完うされた。何等の失敗、何等の完成。

詩は死だ、然り、屢々。自分は曾つてかく云つた。自分は多年、この恐ろしい眞實を凝視して來た。詩人小野十三郎君、また自分のために、詩の死なる所以を說いた。言葉の響に醉うて、生に執する詩人の稚態を、呪はしい甘さとして呪つた。

自分こそ、呪はしい甘さを呪ひ、詩に死を生きんとするものだ。

また嘗て、詩人尾崎喜八君は、自分を詩の製造會社と評した。
自分こそ、詩の製造工たる事の光榮を辭し、世間的人氣を敢て犧牲に供したのだ。
共に好詩人、つひにわが眞の面目を理解するであらう。自分は彼等の（其他多くの自分を非難せる人々の）純情を愛す。彼等つひに我を理解せんことを。

ああ、我いかに屢々、寂寞の中に、ひとり歌ひしことぞ。わが秋の歌を、死の歌を。
我を理解せるものありや。かの松風と、この落葉と。
我を撫愛するものありや。かの海風と、この激浪と。
松風颯々として、秋すでに冬の如し。
海風茫々として、わが薤露の歌に似たり。
海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍。
詩界を泳ぐ二十年、我つひに寒流に凍えんとするか。
よし、凍ゆるも、はた、溺るるも。
ただ、我をして詩を生きしめよ。
詩の幽靈を殺せ、詩を殺せ。
その止み難き聲のみ、詩とはならん。
詩は生くべし、汝生くべし、よしその肉身は滅ぶとも。
我が行く海は果て知れず。
我がなきあとは量り知られず。

されど、詩は滅びざるべし。
詩は生くべし、より若き心臓の至醇なる響の中に。

昭和三年十月二十九日(「詩神」新年號所載)

プロ詩と知識階級

プロレタリアの詩が近頃大分盛んになつた。なか〱面白い詩も眼につく。けれども中には、概念的のものも多いやうである。之れは詩といふものの性質上、論文などと違つて、實感のまま投げ出さないと面白くないのに、勞働の經驗のない知識階級が勞働者の感情を歌ふとしたりする樣なところから來るのではなからうか。勞働者の詩は勞働者の中から生れねばならぬ。知識階級に居てプチブルの生活をして居る人は、その生活の實感を歌はねばならぬ。詩の醱酵は、その詩人自身の生活である。その生活の實感である。隨つて、プロレタリアの詩は、直接筋肉勞働にたづさはつて居る人や直接土を耕して居る人の詩が實感があつて面白い。

その點で思ひ出すのは、有島武郎氏の『宣言一つ』である。あの一文は、當時非常な問題を引起し、色々議論されたが、あの問題は今も決して充分には解決されて居ないと思ふ。我々のなやみも知識階級共通のなやみである。最近都新聞で、知識階級の問題が論ぜられたとき、神近市子氏がこの問題は既に過去に屬すると言つて、社會運動に於ける知識階級の意義を强調された。細田源吉氏も亦この點にふれて居たが、二氏ともその際レエニンの言葉を引用されて居たのは、すこぶる興味があつた。この問題に對する私の意見は、別に委しく書きたいと思つて居るが、今問題にして居るプロレタリアの詩と知識階級との關係について一言すれば、勞働生活をして居ない知識階級のこの方面に於け

る制作は、どこまでもそのものでなく、本統の實感を歌はねばならぬ。隨つてそれは有島氏の晩年に表れたやうな苦悶の表白でなければならぬと思ふ。少くともさういふものが、より價値あるものではなからうか。

レエニンや、又神近市子氏の言葉のやうに、知識階級も社會運動に於て重要な役割をつとめ得る。知識階級の力にまたねばならぬとさへ言ひ得るであらう。けれども、それは、實際運動の上でのことである。否、或意味ではてはそれはその儘通用出來ないと思ふ。何となれば、詩は主觀的な、最も直接的な生活表現であるからである。詩に於ては兎に角、プロレタリアの詩は、實際その衝に當る勞働者の中から生れることが何よりであると思ふのである。（談話）

九月十日（「藝術新報」第二號所載）

行くべき道

現在の詩壇で最も潑剌として生きてゐるのは、プロレタリア詩である。この二三年ぐらゐ前までは只景氣の好い掛聲だけの概念的なものが多く、も少しどうかならないものかと思はれたが、最近ではちよい〳〵素晴らしいものも目につく。殊に勞働者や農民階級の無技巧な、直接的な表白は、インテリゲンチヤの理智的なイデオロギイばかりの際立つた詩には見られない力がある。力強く胸に迫つてくるものがある。

一體今の詩壇は全く行き詰つて了つて、大家と云はれる人達はすつかりその聲を出しつくし、僅かに力弱い繰返しをしてゐるのに過ぎない。中堅とよばれる人達も、一向ふるはないし、それらの人達の詩風を追隨してゐる若い人達も、自分達の個性的な新しい聲を上げ得ない現狀であるが、これらの沈滯した詩界から目を轉じて、無産派の詩を見る時、始めて甦るやうな氣がする。勿論まだ洗練が足りないし、中には殆ど詩の體をなしてゐないのもあるが、さう

るものは、無産階級の詩であらう。おそらく今後の詩壇の上に君臨する、また新しく勃興する階級の力強い叫びが聞きとられる。した作品の中からすらも、

今我々詩人は重大な轉機に立つてゐる。ブルヂョア階級の幇間として頽廢的な何々節だとか、何々小唄だとかをつくつて媚を賣るか、決然として從來の一切の價値の幻影を一擲して、階級鬪爭の詩人となるか、二つに一つだと思ふ。そして私自身はといふと、何としても何々節や何々小唄の作者にならうとは思はない。おそらくハイネなどのやうな少年ドイツ派の詩人の踏んだ道を踏むであらうと思ふ。（談話）

昭和四年三月十二日（「婦人毎日新聞」所載）

烈風風景

今日は何日であらうか。一九二九年の六月十一日である。それは一九二〇年でなく、また、一九四〇年でもない、その一九二九年の六月十一日である。自分はこの年代を、あらためて、自分と人との耳に叫びたいのだ。なぜなれば、詩人はこれまであまりに時間の外に超然として生きて來た。然るに、我々は時代の中に、時代の苦を生きねばならぬ、時代の詩人だからである。

まことに、今日は昨日でない、もとより一昨日でない。詩人が象徴詩や、耽美詩に醉つてゐた間に、芭蕉や西行の閑寂に耽つてゐた間に、時代は激變した。晴朗であつた天候は一變して、暗雲が一天を籠めて、時代の嵐が、今、我々の上に怒號しはじめたのだ。高い樹も、低い樹も、草も、石ころも、その嵐に吹きまくられる、すさまじい日が迫つて來たのだ。

自分は茲に、今の世相を細説しようとは思はない。社會的不安と動搖とを、あらためて說き出さうとは思はない。それは生きとし生けるものの、痛切に感じてゐるところだからである。我等の文學もまた、今やその赤熱の反映を示しつつあるのだ。然るに、ひとり詩人のみは、穴の中の蟹のやうに、暗眠を貪つてゐた。詩人のみは、象牙の塔に立籠つて、清風に嘯いてゐた。然し今、その象牙の塔も烈風に倒壞しようとする。否、我等はこれを押し倒さねばならない。穴の中の蟹は引きずり出さねばならない。

自分自身、今や、その過去十年を葬らんとしてゐるのだ。その三千六百日を、空しく費した事に、臍を嚙むの悔いを覺えてゐるのだ。自分もプロレタリアの詩人であつた。少年にして一個の印刷工であつた。然し、自分の勞働生活は、あまりに早く終つた。そして、年少、ソシアリストのグルウプに接近しながらも、文學と運動との截然とわかたれてゐた個人主義文學の盛時に際會して、いつしか溫和な詩人の一人として、自分を見なければならなくなつたのである。然し、それもまた自分の無氣力のみならず、又、時代の抑壓の結果でもあつた。自分が社會詩人ハインリッヒ・ハイネに傾倒した事すら、戀愛詩人ハイネへの追隨として嘲罵せられた時代が長く續いたからである。

然し、今、風向きは變つた。新しいプロレタリア詩人が輩出した。その人々の詩は、蕪雜なものもあり、概念的なものもあつた。が、從來の高踏詩人の有たない力を有つてゐる。自分はそれを愛した。自分もまた、二十年の詩作の底を流れてゐた、あの赤黑の一線が、波上に浮び上る日に會つた。自分の詩は、既に昔日の詩ではなかつた。然し、悲しいかな、自分は既に多くの餘力をあまさない、中年の詩人であつた。自分は今辛うじて、一本の杖に身を支へてゐるに過ぎない。いつ斃れるかも知れない。然し、悲しむを要しない、時代は既に力乏しい自分を要しない。自分の後には、多くの若い生命がある。潑剌たる靑年の勇氣が、氣力が、新しい鬪ひのために燃え上らうとしてゐる。絕望を知らない自恃と、鬪爭の精神よ。そこに若さのもつ大きな力がある。

自分は數ヶ月前に、これらの思ひを託した一篇の詩を書いた。

戀の苦情をやめにして
書けとはうれし政治の詩。
ポオル・クウリエの檄文語、
かのベランジエの嘲弄詩、
「獨佛年鑑」ハイネの詩、
時代の詩人、かくて生く。

わが空しくも鬚れなば、
あまたの友よ、あとつぎて
われにまされる詩を書けよ。
ジャン・コクトオや、ヷレリイの
伊達のすさびをやめにして
書けよ心の血の叫び。

われも十年は悔ありぬ。
まだうら若き身をもちて

翁さびせし枯淡ぶり。
映畫の筋の長篇詩、
はやり小唄をのこしなば、
人のわらひを何とせん。

このすさまじき嵐の日、
文字の細工に得たりとし
その感覺を誇りなば、
詩人のみかは人ならじ。
われも詩人とたのみなば
嵐の鳥と啼き立てよ。

嵐の鳥と啼き立てよ。これは自分にも呼び、人にも呼ぶ、一切の詩人に呼ぶ自分の聲である。然るに、この微かな聲が、自分の最も近くに、忽ち、一人のすぐれた若い詩人を起たしめた。否、その詩人は、自分の聲によつて起つたのでは勿論ない。常に正しい道を歩いて、人生に對してかつて傍目をしない、眞摯にして敏感な魂であるその詩人は、自分の感じた事を等しく感じたのである。自分は今、その詩人のために、人知れぬ誇りを抱かざるを得ない。その詩人のために、自分のために、また、我が新しい詩の大道のために。そして、その詩人こそ、この一巻の著者、大島庸夫君に外ならない。自分はこの一巻を讀んだ時、自分の如上の詩が、大島君のために書かれたもののやうな思ひさへ

したのである。

然し、大島君は、今日はじめて詩を書いた人ではない。自分が大島君を知つてから、もう十年になる。その十年の間に、人として、詩人としての大島君の苦鬪と、練磨と、成熟とがあつたのである。自分がはじめて知つた頃の大島君は、端正で、純情な靑年、むしろ少年であつた。夢の多い感傷的なロマンティシストであつた。それからずつと、自分はこの若い詩人の歩みを見續けてゐた。そして、自分の豫期しないところに、この人の強い力の現れてくる事に驚いた事も一再ではない。然し、今年になつてから程、驚かされた事は曾てなかつたのだ。

それはこの『烈風々景』の一卷を見たからである。然し、これは單なる詩集ではなかつた。一つの強い生活の聲である、勞働の玉の汗である。事實、自分は大島君の詩よりも先きに、その生活を見たのである。今や、一個の男子となつたこの詩人は、どんな姿で自分の前に立つたであらうか。六十錢で買つたきたない法被を着て、ボロボロの手袋をはめて――これをはめなければ重い鐵材を扱ふ事は出來ないのだ――阿彌陀帽をかぶつた背の高い勞働者の姿。それが勞働詩人の姿であつた。この姿で彼は早朝から薄暮まで赤銅色の逞しい勞働者の間に交つて、現場で働いてゐたのだ。烈風の中に重たいスラヴをかついだのだ。それは生きた詩である。勞働の詩を生きたのだ。然し、大島君は詩人である、その勞働の中から、夜、疲れた身體を橫へるひまに詩を書いた、書いた、むしろ詩をなぐりつけた。

その詩をはじめて見せられたとき、自分は感嘆した。それは生きた勞働の詩であつたからだ。そして、自分には到底書けないものだつたからだ。これはただ、かの都會の喧囂と疾風との中の勞働の渦中からでなくては、到底生れ得ないものである。そこに云ふべからざる力がある。しかも、その裏にある十年の教養と、詩人的成熟とが、その詩を單なる怒號や昂奮に終らしめてゐない。しみじみとした人生の哀感がにじみ出てゐて、單なるイデオロギイの操作に墮さしめてゐない。もとより、この詩人はインテリゲンチヤの出で、生粋の勞働者ではない。この惱みは我々が共通

に持つところで、そこに我々の弱點のある事は云ふ迄もないが、そこにまたこの詩の特別の意義も存すると自分は思ふのである。

今や、就職難の聲は、日本全國に轟き渡つてゐる。否、怒號の聲とはならずに、底に潜んで、絶望となり、自棄となり、險悪な自己嚙咬となりつつある。インテリゲンチヤは最も細い喉と、最も細い神經とに悩んでゐるからである。然し、その中の少數者は、時代の尖端として、新しい闘爭に進出しつつある。我々もまた、進出しなければならない。空しく斃れるか、斃れて後やむかである。この時代の嵐をこの詩集は指示する。玆に一羽の嵐の鳥が、啼き立ててゐる……

大島君はこの勞働詩の第一集を殘して、——自分は更によりすぐれた第二集を期待してゐる——更に新しい勞働の中に飛込んで行くであらう。それがいかなる世界であるか自分は知らない。然し、自分もまた、大島君の後について、新しい世界に進出しなければならぬ事は、自分も知つてゐる。さらば友よ、相共に進まう、前途に何が待つてゐるか、それは分らぬが、何が待つてゐようとも、進まう。それは闘ひか、勞働か、火花か、鐵鎚か——何であらうとやらう。そして、詩を書かう。佛蘭西末流詩人の、温室詩人、空氣銃詩人の伊達のすさびでなしに、かの自由の詩人、熱火の詩人、實彈の詩人の後を繼いで、生活でその詩を書かう。實感と、生命感とで、詩を紙上になぐりつけよう。

この數年間、自分は詩集の序文を書いた事がない。熱烈に需められても、その氣持が動かなかつたのである。然し今日、自分はこの一文を書かずにはゐられなかつた。これは單にこの詩集を推奨する言葉であるばかりでなしに、また自分の今の心持の僞りなき告白でもあるのだ。

一九二九年六月十一日、大島庸夫氏勞働詩集の序

雜　話

漢詩と白話詩のこと

西條八十氏の『東京行進曲』は、今天下の兒女の爭つて傳唱しつつあるところだが、頃日、銀座の某倶樂部の壁上に戲書されてゐたとて、某新聞に掲載されてゐたもの、戲譯東京行進曲とでも云ふべきか、面白いと思つたから、茲に轉載して見よう。

懷古戀想銀座柳
誰識娟艷姥櫻女
連夜連更酒樂裡
迎晨潛潸踊娘涙

なかなかうまい手際である。これは昔の中島棕隱や太田蜀山などのやつた戲詩と同様のものだが、銀座あたりには、今でも、なかなかかうした洒落れた風流人がゐるものと見える。

この戲詩を見て、尠からぬ興味を覺えたのは、自分に漢詩に對する特別の愛着があるからだと思ふ。今の若い詩人には、殆んど見出し難い趣味であらうと思ふが、二十年前の靑年にとつては、漢詩はなほ强い牽引力をもつてゐた。土井晩翠氏の詩が、靑年に愛讀せられたのも、その漢詩的格調のためであつたのだ。が、更に、三十年、四十年前の靑年は、自ら漢詩の作をさへした。より古い森鷗外、夏目漱石の二大家はもとよりだが、田山花袋氏や、永井荷風氏な

どにも、相當の作品がある。永井氏など若氣のあやまちだと云つてはゐられるが。

一體、日本人にとつての漢詩は、一種の自由詩であり、散文詩である。返り點を打つて、一々譯讀するのだから、平仄や押韻など殆んど意味をもたないのだ。が、制作上には、やはり諸種の法則が嚴守されて來た。綠の下の力持ちと云はねばなるまい。そこで、「漢詩を讀まざるは愚、漢詩を作るは更に愚」と云つた人の言葉は、中々うがつた言葉であると思ふ。漢字制限の現在に於て、特にさうである。

日本人が丹念に今日迄、漢詩を保存してゐるとき、一切の偶像破壞を敢てしつつある本國の中華民國人の間には、白話詩の運動がおこされて、現在すでに大なる進歩を見てゐるといふ事だ。白話詩といふのは、平仄その他一切の法則を無視した俗語詩で、舊體の律詩絶句が日本の長歌短歌にあたるとすれば、發生當時の新體詩にあたり、文語詩に對する口語詩にあたるものである。それは從前の漢詩のやうに、我々に親しみはないが、日本の新詩の創建に志す我我としては、同感すべきものである。

自分は『支那艶詩選』といふ本で、現代中華民國詩人の作の若干に接したが、その中にはかなり面白いと思つたものもある。が、何分白話詩は支那語の知識がなくては、十分の了解が出來ないから、自分は附載された譯詩によつて、やうやく意味を捕捉するを得た位のものだ。劉大白氏の如き、かなりいゝ詩人のやうに思はれたが、わりにわかりいい詩として次きに沈玄fiber氏の作『去了』(行つた)といふのを示してみよう。

一

別的沒有東西可寄
只有淚
淚也無從寄

除非夢裏

二

我爲世人生
難道我敢病
去了眞去了
牆邊送我登車影

その譯といふのが次ぎのやうなものだ。

一

別れて、寄せるものはない
有るものとては淚のみ、
淚もまた寄るべ無い
夢に寄せる外は無い。

二

わたしやこの世に生れきて
どうしてわたしは病めようか、
行つた。本當に行つた。
垣根に淋しく影送る
私が車に乘る影送る。

然し、自分が白話詩に接したのは、これが最初ではない。數年前、湖南の人謝位鼎氏が、自分の『感傷の春』中の詩篇を譯して、かの地の文學雜誌に登載したからとて、送つてくれたが、それをはじめて讀んだ時、自分は原詩と對比して、自作の詩を外國語で讀んだ詩人の感を幾分か味はふ事が出來た。これが漢譯ならば、さうは行かなかつたらう。その中の一つ、『從憂愁中』。

鳥聲、樹葉之搖動、
天空之色、花之香氣、
——成了無價值東西了、
如這樣的我已過了幾年。

映照於有憂的胸中的
只有極深的憂愁而已。
美麗的自然色、
也何以能消去那悲嘆呢?

我的青春棄我去了、
我的流淚在眼蓋中乾了、
如比、我生時、
呵! 死就是好過生的。

序にその原詩を掲げてみる，原題は『憂愁の中より』。

鳥の聲も、木の葉のそよぎも、
空の色も、花の匂ひも、
價なきものとなりはて、
幾とせを我はすごしぬ。

憂ひある胸にうつるは
いとふかきその憂ひのみ、
うるはしき自然のいろも
いかでその嘆きを消さん。

我が靑春は我れをすて去り、
我が淚は日蓋のうちに乾けり
かくてなほ我が生くるとき、
ああ、死こそ生にまされる。

正富汪洋氏の近作

『新進詩人』七月號載するところの正富汪洋氏の新作、『庭の靑』ある日、室生犀星氏におくる詩一篇、正富氏近來の

絶唱である。

齢、知命に近く、離脱、老子に遠し、

竹影の岩に顔あて、

しばらくを涙ながしぬ。

の結句、從來の正富氏の春風頰を吹く底の温柔と反して、秋意痛切、人の胸を刺すものあり。

「現代詩人全集」は、詩壇に多くの動搖を與へたやうである。自分ははじめその下相談を受けたとき、嘗て改造社の「現代日本詩集」中で、恐ろしく低位に置かれてゐた石川啄木、三富朽葉、山村暮鳥の三詩人を特に推奬しただけで、現存の人については、決定的の意見を述べないで置いた。それは自分が此の三詩人を尊重するゆゑに止まらず、故人はそれ自身既に一つの古典的存在であるから、此種の企てには特に重視すべきだと信じてゐたからであるが、現存の人については、自分一個確たる判斷を有してゐるとは云へ、自己の判斷を絕對視すべきでないと思ふと同時に、此種の紛糾に投ずるを好まなかつたからでもある。

然し、後で聞くと、各詩人は、同時代者に對して、隨分露骨な價値判斷を下すに憚られなかつたらしい。その詩人としての信念は、尊重すべきである。ただ、詩人特有の感情的判斷さへ加はらなかつたならば。「現代詩人全集」になほ一二册の追加せられる場合には、自分はなほ數人の詩人を推奬したい。詩壇以外にも、故村山槐多あり、中川一政氏あり。詩壇の人、これに贊せられるや否や。

勝敗は時の運であり、詩人は試練によつて珠となる。自分は正富汪洋氏の多年の不遇を、心ひそかに同情するものであるが、同時に、氏が敢然として荊棘の中に立つて、詩人の第一義諦を生きられて、此の絕唱を續々公けにせられん事を望むものである。然らば、眞の決算期に於て、氏の名は燦然と輝き出るであらう。

自分もその覺悟だ。「現代詩人全集」に列するも名譽でなく、「現代日本詩集」に低位に置かるるも、また不名譽ではない。要は、我が一家の詩集、果して人心を動かすや否やである。

昭和四年八月(「愛誦」九月號所載)

人間を示す詩

自分は詩について、自分一個の見解を持して來た。それは詩を詩人の生活の反映と見なし、詩の中に全人を見ようとする見解である。自分は古今の詩人についても、この尺度もて對し、又、自分自身に對してもこれを以てのぞんだ。それゆゑ、詩を磨かんがために、魂を磨かんとした。詩を高めんがために、まづ、生活を高めんとした。この行き方は、謂はば、藝術主義に對して、人生主義とも云ふべきものである。

然し、その藝術觀たるや、詩壇に於ては、未だ曾て是認せられた事がない。自分の最も近接し、且つ尊重する人々すら、自分とは考が違つてゐるやうだ。最近、福士幸次郎氏と、『三富朽葉集』の事で屢々會ふ機會があつたので、その際、その見解の一端をたたいてみたが、福士氏は一篇の詩をそれだけ引離して、その藝術的完成を見ようとする意向のやうであつた。又、室生犀星氏の如きは、人として詩人として、自分の最も推重措く能はぬ人であるが、その氏の如きですら自分の行き方に對しては、さまで興味を有ち得ないかに見える。かへつて、もと千里の遠きにあると思つた萩原朔太郎氏が、最近思想的に非常に相近づいて、より多くの理解を持ち合ひ得るやうになつてゐるが、然し、萩原氏も自分に同じられるかどうかは疑問だ。

かうして、自分は依然として孤獨だ。然し、一人の支持者はなくとも、自分は斷乎として自己の見解を保持する。

その眞實に就て、毫も疑ふ事ないからである。自分はこの信念に一生を賭けるつもりだ。それゆゑ、『生田春月集』の詩篇を選考するに當つても、この標準を以てし、自分の各方面を示し、自己の人間と生き方とを明示する事を主眼として、必ずしも個々の詩篇の技巧的優秀や、獨立的完成を重んじなかつた。自分はそれによつて、最も正しく自分を談れば足る。その自分に何等價値なしとすれば、一生の稿を抱いて、土中に埋沒するあるのみ。

詩人再評價の秋

「現代詩人全集」の出現は詩界にとつて、過去數十年間の總決算の日の到來を約束する。この機會に、各詩人の眞價は嚴密に檢討されねばならない。一人宛て百數十頁の頁數は、全詩人を評價するに不足な頁數ではないからである。そして、この全集の人選も、大體に於て公正を期し得た事も定評のやうだからである。もつとも、自分としては、まだ四五の是非加はるべき人を逸した事を頗る憾みとするが、それらの人々の眞價もまた、この機會に顯揚せらるる方法もありうべきを思ふ。

從來、詩壇には、嚴正の意味の批評がなかつた。詩人中には、個人的感情に囚はれて、不偏不黨の公正な精神に缺くるところある人もかなりあつたが、それでなくとも、自分一個の主觀的好惡、末梢的な趣味好尙に沒入して、全人的な客觀的評價に到達しえぬのは、詩人的素質の免れえぬ缺陷だからである。詩人がいかに惡しき批評家であるかは、曾て『明治大正詩選』が、痛快に暴露したところである。

一體詩人はあまりに外觀にとらはれすぎる。紛飾に目を瞞せられるもの、詩人ほど甚しきはない。美裝の女、必ずしも美人ではない。この無批評のゆゑに、漫然たる文學史的俗見がはびこる。例へば白秋、露風と併稱するが如き、單なる思考の惰性だ。白秋氏と對立すべき高峯は露風氏ではなくて、高村光太郎氏である。年代の尊重から云つても、

高村砕雨が三木露風の後輩でありやうがないのだ。

我々はこの我々の缺陷を十分反省して、新しく、正當な評價を樹立しようではないか。もつとも、これはより年少の、氣鋭の詩人の任務であり、且つそのよくするところであらう。

昭和四年八月二十一日(「愛誦」十月號所載)

新詩人の時來る

圓本は既成作家の總決算であつた。圓本にその功勞を酬はれた作家の大半は、今や、生きながら古典となつて、その席を新進に讓らざるを得なくなつた。これ顯著な事實である。そして、この事は「現代詩人全集」に於てその圓本を得たる詩壇にあつても、また必然の趨勢ではあるまいか。詩壇大家のうち、幾人か新しい詩界に殘るであらうか。全然沈默せる詩人は、いかなる爆發をするか知れないといふ期待がある。詩想の源泉涸れて、ただ機械的、商業的にのみ作品を捻出しつつある詩人は、眞に生ける詩人とは云ひ得られないのである。彼等は既に畢つたのである。

今こそ、詩界は一期を劃するのである。今後は「現代詩人全集」以後の詩人の時代である。新鋭の詩人は、今こそ奮ひ起たねばならぬ。詩はもとより戰爭ではない。外面的事情によつて左右さるべきものではない。內容しうして外威を張る詩政客の徒は、憫れむべきである。自分は常に內面の開展を尙び、外面的な政治的奔命を卑しとした。そのため多年、不當の無視に甘んじなければならなかつた位であるから、自分の奮起といふのは、もとより政客的飛躍の意味ではなく、すぐれた作品を陸續と發表して貰ひたいといふ微意に外ならぬ。評論で舊大家をやつつけるのは、消極的の効果しかない。卓越した詩篇をもつて、空腦空腸の舊人を壓倒せよといふのである。

最近、宮崎孝政氏の『鯉』を獲て、自分はこれある哉を三呼した。詩は必ずしも新奇を以て尊しとしない。要はその詩魂の飛翔である、練心の結晶である、後繼詩壇のあげえた烽火として、新人のために意を強うした事少々でない。新詩人ではないが、佐藤清氏の『雲に鳥』と共に、最近の二大收獲、他日細評の機會を得たい。

勝承夫氏の言

從來、詩壇には、個人的利害の打算によつてのみ、詩と詩人に對する傾きが强かつた。虛心坦懷はその最も缺けたるものであつた。同利相結ぶ徒の外は、無理にもこれを認めざらんとする意志のあらはれが、甚だ露骨を極めた。詩壇が常に陰鬱な政爭場裡の如き觀を成したのは、實にこの弊堪へ難かりしに因る。我々はいい詩はいいとし、惡い詩は惡いとしたい。私情を離れて同時代者を尊重する事を學びたい。

勝承夫氏が『詩集』九月號に掲げた一文、その點に觸れて、頗る我意を得た。勝氏は詩壇の正義派である。その言、個人的利害から出發しないだけに、特に爽快である。氏が詩壇人の功利的打算を難じて、認むべきを認めないのを不可としたのは、人間の弱點を衝いた言で、皆人の心して聽くべき事である。ただ、現存者を無視し、故人は競爭者でないから持上げるといふのに至つては、一應鋭い觀察だが、自分から見ると未だ甘い。詩壇には、現存者はもとより、故人をすら決して喜んで持上げはしないほど卑吝な人も尠くはないのだ。否、故人は故人として、その發言權のないのに乘じて、これを沒却し、踏みつけて行かうとする傾向は、この數年前に自分の屢々目睹したところだ。これは何故か。藝術家のみは肉體の死によつて無力とならず、かへつて往々にして生者を壓迫するからだ。死せる孔明、生ける仲達をはしらすからだ。

だから、若しさしうた度量狹隘の人々が、故人の尊重すべきを知つたとすれば、これ長足の進歩として祝福すべき

ではないか。然し、故人の尊重すべきを知るとも、同輩後輩の中に、美果を敢て認めざらんとするならば、恥づべき成心である。殊に孤立の人を壓迫し、露骨な黨同伐異を行ふ横暴人は、罰せられねばならぬ。人間の行爲は、嚴たる宇宙の因果律に支配せられる。詩話會の覆滅は、かかる無法者に對して、常に無言の警告であれ。

（昭和四年九月「愛誦」十一月號所載）

小曲について

小曲の名は極めて曖昧糢糊としてゐる。未だその概念が判然としてゐない。ただ漠然と、第二義的な詩形として、輕視されてゐるにすぎない。例へば、自分が小曲詩人と評される時は、感傷詩人と云はれる時と同樣に、常に貶黜の意を含んでゐた。もつとも、その汚名は最近拂拭されたが、なほこの偏見を固執する人も相當あるやうだ。此點では、自分は死後の正しい批判に俟つのみで、生前殆んど正解を斷念してゐる狀態である。が、自分が小曲詩人であるか否かは別として、詩壇で考へられてゐるほど、しかく小曲は輕んじらるべきものであらうか。自分はここでも、詩壇があまりに形式に囚はれすぎる事を思ふ。象徴詩でも、自由詩でも、價値のないものはないし、小曲でもすぐれたものはすぐれた詩である。我々は本質的にものを觀たいと思ふ。

小曲の語は、最初、ソネットの譯語として用ゐられた。（上田敏氏、蒲原有明氏によつて）ソネットは西歐の詩形としては、短詩形に屬する。然し、俳句といふ十七字に於ける完成した詩形をすらも有する我々日本人には、十四行はすでに短小とは云ひえられないのだ。ロゼッティの所謂「刹那のしるしぶみ」とはなしえられないのだ。小曲の語が、漸次ソネットの譯語より轉じて、全然別樣の意味をもつに至つたのは、當然の事であらう。そして、この小曲の新し

い意義は、幾分、獨逸のリイド、英吉利のソングに相當する。自分が曾て、ハイネの『ブッフデル・リイデル』を『小曲集』と譯したのは、この第二段の解釋をとつたからであつた。この意義に於ては、小曲はその詩形によらず、その內容によつてきまるのである。數十行を算へても、その內容によつて小曲と呼びえられる詩もあれば、數行を出でずして、小曲と見なしえない詩もある。例へば、室生犀星氏の『鶴』中の詩篇には、十行に足らない作もかなり多いが、それは決して小曲とは見なしがたい。百田宗治氏の『冬花帖』中の詩篇の如きもまたさうである。これに反して、長い詩で小曲風な作も往々目睹する。

然し、小曲は必ずしも、リイドやソングの譯語ではない。それはむしろ、我が國の今樣や、梁塵祕抄の詩篇などに胚胎し、島崎藤村氏に於て大成された詩風の發展したものを見たい。卽ち、それは自由詩に對する純抒情詩を意味すると見た方が最も妥當ではあるまいか。抒情小曲の語が、その事をはつきり示す。純抒情詩は、象徵派以後、甚だしく蔑視されて來た。民衆派の白鳥省吾氏によつて、自分が非難され續けたのも、專らこの點からであつたやうに思ふ。然し、白鳥氏にも、小曲集の著數册に及ぶ今日、氏は必ずしも當年の意見を固執せられてはゐまいと思ふ。小曲がわるいのではない、安易な氣分がわるいのである。小曲を以つて、專ら雜誌向きのセンテイメンタルな、第二義的作品と考へるのは、小曲の作を有する詩人全體に對する侮辱ではあるまいか。眞の詩人はいかなる作品にも、（たとひ卽興的な作にも）心魂を打込まねばならない。

自分は小曲を以て、一つの卽興詩と見たい。刹那の小なる感情曲である。從つて、それは優美な快い韻律をもつ、心・音色である。草のそよぎ、風の響のやうなものである。そして、心から自然に溢れてくるものは、傳統的な諧音に根ざしをおく。小曲が七五調になりやすいのは、專らそのためである。小曲の長も短も、この卽興的といふところにあるやうに思はれる。それゆゑ知的な勞作、思想的、哲學的な思辨に重きをおくもの、（自分が小曲詩人と云はれる

超現實派の作品などは、小曲とは呼び得られない。例へば、

赤い窓女はパラピンである

のを不當と思ふのは、自分が專ら思想の詩人だからである。）また新奇な言語のモザイク、ダダ、未來派、分離派、

こんな風な表現をもつたものは、小曲とは呼びえられない。小曲の最も上乘なものは、その表現に於ても、その内容に於ても、生命の波そのままのあらはれである。歌の表現法ともちがひ、俳句の表現法とはもとより違ふ。言葉は分りやすい日常語であつても、文章語であつても、また自然の勢ひに從つて混交されてをつてもよい、それが今日の我々日本人の理解力を苦しめない程度でなければならぬ。そして重りかかる言葉と言葉との間の波動が、よきリズムとなつて層々として胸に流れ込む如きものでなければならぬ。

現代は詩と音樂とを分離しようとする。詩に於ける音樂的要素は漸次沒却せられてゆく。リズムのない散文を詩として通用させたのは、自由詩の一端に存した弊であつたが、今や、理論的に調子、諧調、韻律が驅逐せられる日が來た。かくて、リズムの濃厚なるほど、より低く評價される日が來るかも知れない。しかも、小曲は最もリズムの強く波打つたものでなければならず、又、それが小曲の魅力であるのだから、つひには、從來の詩は小曲としてはじめてその使命に生きうる事となるかも知れない。若し、さうなつた場合には、音樂的効果に重きを置く詩人は、小曲に身を捧げる事を敢て望むやうになるであらう。

縱の樹が重なり合つてゐる
あの山にわたしはのぼりたい、
あの枝にかかつてゐるものが
月かげか銀かが見てみたい。

これはリカルダ・フウフの作。

あはれ、やさしき甘き息吹よ、
はやも汝れはまた呼びさます
春の歡をばわが胸に
やがて菫も咲きいでん。

これはウーラントの作。

我々は現代に於てもなほかうしたロマンテックな詩を愛する。これらが最も典型的な小曲である（上田敏氏の譯せられたカアル・ブッセの『山のあなた』など、特にさうだが、あまりにポピュラアゆゑわざと玆には擧げない。）小曲の魅力は音樂的であると共に、ロマンティックである事だ。そして、ロマンティシズムは、音樂的精神と切つても切れぬ關係にあるものだ。詩の作法は說いて說き盡されず、人みなその好むところに溺れ、身をもつて詩に浸るとき、いつしかザルツブルクの鹽水の中に投げ込まれた枝のやうに、詩の結晶をおのが作品に見出すだらう。ただ、自分の好むところに從つて、自ら欺かずに詩を書かねばならぬ。自由詩であらうと、小曲であらうと。

昭和四年九月二十日（「現代詩講座」所載）

詩人と自由

詩の本質はアナキズムである。詩人は本來アナキストである筈だ。

そこには、何等の拘束もあつてはならない。何等の虛僞もあつてはならない。小鳥の様に自由でなければならない。

自然のやうに眞實でなければならない。

詩人はいかなる場合にも、自動的に歌ふべきもので、他動的に、强制されて歌ふべきものではない。詩はおのづから溢れる泉である。堰きとめて堰きとめえないと同時に、水脈に會はなければ水は出ない。

詩人は自由の子である。不自由な世界の桎梏の中にあつてすらも、彼がうたふ時、彼は瞬時の自由人である。詩人は解放運動に參加するとも、詩人としての自由を保持しなければならない。詩人は公人であるときにも、つねに私人の眞實を逸してはならない。

詩人は實感と感動から出發する。若し彼が眞實の情熱も實感もなくして、他の功利的打算から、政治的功利主義から、その詩を商業的、又は政治的目的のために行使するならば、その空虛な響は、彼の卓越した才能をも壓殺するであらう。

詩人は我儘者である。一黨一派の統制に服さうとはしない。詩人が小宇宙である所以はそこにある。詩人が或る政黨、或る團體のお雇ひ詩人となつて、その利益のためにのみ歌ふならば、彼は自ら殺すものである。黨の中央執行委員會の指令で作られた詩は、およそくだらないものであらうと思ふ。

元來、政治は一つの瞞着である。政治家の生活は、概ね二重生活である。表の生活と裏の生活とから成り立つ。そ

こには常にいやしむべき黒白の二面がある。然し、さうした表裏のない普通人といへども、すべての公人にとつて、その私生活は云ふべく價のないものである。

そこに普通人と詩人との相違がある。詩人にとつては、その私事がすなはち公事である。その私生活がただちに公生活である。詩人は人間の眞實を自らの上に見出さなければならない。

詩人も亦、二重生活者であるならば、その表の生活だけを飾つて、美しい言葉のモザイクを製造するか、又は鬪爭意識のみを强調して、人間的な弱點を隱蔽するならば、その虚僞はただちに作品によつて罰せられるだらう。そこには恐ろしくつまらない、西洋菓子のやうな詩人か、演說つかひのやうな詩人が生れるであらう。現在、さういふ詩人も少くないのだ。

詩を生かすものは、裏の生活である。卽ち生活の深い底である。その眞實を赤裸々に歌つてこそ、眞の詩人といふべきである。

ゲエテがわが詩はわが懺悔の一片なりと言つたのは、正しい言葉である。ヴェルレエヌが不朽の聲價を保つのも、亦その赤裸々な眞實を歌つたからである。

自分は少年獨逸派の諸詩人を愛するものだが、就中、ハイネを最も重んずる。彼の態度が、詩人として最も中正を得てゐる。彼はすぐれた社會詩人であつたが、つひに詩人の自由を把持して失はなかつた。當時一世を風靡したヘルウェエク等の作品が永續しなかつたのに反して、ハイネの作品が永い生命を有する所以はそこにある。

詩人は自由を愛せよ。然し、自由を愛せんがためには、まづ、自由を獲得しなければならない。すべての自由の壓服者は詩人の敵でなければならない。ここに詩人がすべての自由戰爭、解放運動に對して、特別の情熱を持する根本的の理由があつて存するのである。

昭和四年九月十三日(「未踏地」第六號所載)

詩は叛逆である

——社會詩人と黨派とについて——

藝術は叛逆なりといふ自分の標語は、多くの同感を得たやうである。殊に、中村漁波林氏の如き有力な詩人が、同樣の觀點にあるといふ事は、心强い事である。勿論、中村氏と自分とは、その思索過程と、その實感及び理會を異にするに違ひない。で、玆に自分のそれに對する見解を(藝術を狹く詩の範圍に限定して)簡單に表明すれば、大體次ぎの如くである。

詩は叛逆の精神から生れる。叛逆といふも多樣であるが、何等かの叛逆の精神を失つた時の詩は、形骸に墮し、或ひは僞古典主義の亞流に墮せざるをえない。少くとも、自分の解する詩は、一切の法則に對する叛逆である。束縛を破らんとする力である。詩は絕對自由の子であるべきものだ。詩は人間の生命の響であると同時に、時代の激動の亂打する警鐘でもある。何となれば、詩人は最も自己の個性に忠實であるべきと同樣に、また、時代の波動にも最も敏感であらねばならぬからだ。故に、今や一切の社會的不合理、因襲的束縛、組織的抑壓に對する叛逆の表白として、

必然的にプロレタリアのオプティックに一致すべきものである。と同時に、一切の强制と均一と馴致とに對する個性の叛逆として、ブルジョア社會の强權に反抗すると同樣に、又、ボルシェヴィキ流の强權主義にも屈伏しえない。詩はその本質からして、アナキスティックであるべきものだ。

詩人は自分をイズムの奴隷たらしめる事を好まない。詩人は小宇宙であるべきだ。自己の生活の眞實に即すべきだ。自分はプロレタリア詩人を最も尊重する。然し、彼とても概念ならぬ、實感の詩人でなくば尊重しがたい。彼が誠實であるならば、常に闘爭意識に燃えてはゐないで、時に安息があり、絶望や疑惑すらもある事を隱しはしないであらうと思ふ。もつとも、自分はボル的戰術が、かかる正直な表白を忌む事を知つてゐる。然し、詩を政策の犧牲とする時、悲しいかな、多くはその眼目たるアジテエションの効果なき聲色の詩を殘す。プロレタリア詩人といへども、一鉢の草花を愛してならぬわけはない。と同時に、草花を愛する事を知つて、現在の社會の酸鼻と不正とに盲目なるは、感覺遲鈍の痲痺詩人と云はねばならぬ。要は人間的眞實を僞らざれ、人間的な共感を失はざれといふにある。象牙の塔に鎭座する長髮の神樣になつてもならぬが、同時に、政治家的虚言や、お芝居に墮してもならないのだ。

社會詩人ハイネはよく此事を知つてゐた。彼は主義の詩人ではなくして、自主の詩人であつた。マルキシストといへども、わけのわかつた人は、この態度を是認してゐる。例へば、後藤郁子氏が私への公開狀に引用せられたメエリンクのハイネ評を見よ。否、これはまた、マルクス自身の了解でもあつたのだ。彼はハイネのこの自主的態度を是認して、「詩人といふものは變り者だから、勝手氣儘にぶらづかせて置かねばならぬ」と云つてゐる。(カウツキイに據る)蓋し、詩人の本質をよく理解した言であると思ふ。

自分が昨春以來書いた詩稿中の若干を公表した事によつて、近時、轉向を云々され、賞讃と惡罵とを得た。然し、それらの詩の眞義は、全部として、即ち、個々の詩の聯絡より成る一篇の長篇詩として見られる時に、はじめて判明

するので、今それについては多くを語りたくないが、ただ轉換云々についてだけ云へば、それは一面當り、一面當らない。既に大正初年に、『馬鹿の歌』其他の反抗的な詩篇を公表してゐる自分は、當時既に單なる感傷的な抒情詩人ではなかつた。と同時に、現在ほど確乎たる見地に立つてはゐなかつたからである。然し、現在に於ても、自分はハイネ的意味に於ての社會詩人でありたい。政策によつて、機械的に詩作する事を自分は絶對に避けたい。

自分が黨の中央執行委員會の指令で詩を書きたくないのは、ブルジョア政府の役人や、映畫會社、鐵道會社の資本家の依頼で何々節を書きたくないのと同じ理由による。自分はその自尊心のために通俗な人氣を犧牲にして顧みないと同時に、黨派の擁護によつて名を成さうとも思はないのだ。故に、自分は今何等の黨派にも屬してゐない。また將來も屬さぬであらう。嘗て詩壇的黨派に屬して、利得を圖らなかつたやうに、政治的黨派に附屬するプロレタリア文學の黨派にも屬さうとは思はないのだ。但、自分は今夏、堺利彥氏が大衆黨の牛込支部を設置するについて、助力を求められたので、恩顧を受けた堺氏のために、多少の勞をとつて、現に支部の幹事となつてゐる。從つて、支部が本部の承認をうると共に、自分も大衆黨員となるわけであるから、或ひはその矛盾を指摘されぬとも限らない。が、これは未だ情誼の問題の範圍にあるものだが、自分の非政治主義は、まもなく態度を明かにすべき時期に達してゐるのである。

今、自分の思想的立場は、石川三四郎氏に最も近い。石川氏の人格と思想とに傾倒して、そこに最も自己の性向に合適した正しい道を見出したのである。然し、自らアナキストを以て任ずるものではない。（インディヴィジュアル・アナキズムは嘗て一度び表明したところであるが、玆にアナキストといふのは、勿論、その意味ではないからだ。）とにかく、自分は常に自由な拘束なき詩人でありたい。そのために一切の强權に叛逆する。この故にアナキスティックと見られれば見られてよろしい。自分の思想的立場は自分の作品中に十分現れてゐる筈だ。

詩は思想上の觀念行使ではなく、生活の實感の上に立たねばならぬ。思想も概念としてでなく、實感として現れね

ばならぬ。知識階級は知識階級であつて、筋肉勞働者ではない。筋肉勞働者でないものが、それらしい口吻を模するのは虚僞である。單なるイデオロギイのみで、實感に張り切つた力强い詩は出來ぬ。それはプロレタリア概念詩たるにとどまるだらう。自分は力强い實感の詩を、勞働者、農民の中から期待するものである。概念詩は直輸入でよい、實感詩は直接生活の中から生れねばならぬからだ。序に云ふ、ボルシェヴィズム治下のロシア詩人と我々とは、全然その社會上の條件を異にするものである。彼等は强權と調和する立場にあり、我々は强權に反抗せねばならぬ立場にあるものだ。

最近自分がボルシェヴィキにかぶれ、同志よばりをするやうに罵倒した人があつたが、もつての外のことだ。恐らく自分の作品を讀まないで云つたものであらう。自分はボルシェヴィキ反對の立場にあるものだ。(何故に反對か、その理由は別に書いた)同志よばはりの如き、自分は一度もした事はない。のみならず、口先きだけの同志よばはりに厭味と嘔氣とを感ずる位なものだ。友を陷れて身の安全や榮達を圖つて、何の同志ぞや。

〆切に追はれて、十分意を盡す事が出來なかつたが、その不備は漸次補ふつもりである。なほ、以上の事を明かにすれば、後藤郁子さんの私への公開狀のお答へにもなると思ふ。私が編輯の責任をもつ雜誌には、必然的にこの私の意見が反映されねばならない。但、『愛誦』は元來西條八十氏によつて出來た雜誌であつたのだから、私が今よりもつと立入つた關係に入る入らぬはとにかくとして、それが色彩を變ずるのには、相當の時日を要するに違ひないと思はれるのである。

昭和四年十月九日(「宣言」十一月號所載)

詩人の懺悔

蒲團の墓に病軀を横たへて、一八四八年二月革命に際會したハイネの言葉が、今自分にいかに痛切に思ひ出されるか。「かかる時には、健康であるか、或ひは死んでゐなければならぬ……」

自分はハイネの如くは病んでゐない。が、その內部に於て、おそらくハイネ以上に傷つき痛んでゐるであらう。おそらく自分はひと思ひに胸板を射貫かれないで、小さな傷を無數に背負はされた負傷兵のやうなものであらう。自分が「新詩人の時來る」と書いたとき、自分はパピイニの自傳の標題を自分の上に冠してゐたのである。自分はむしろ自ら進んで舉るべきであるか。「詩は滅びず」といふ感想を書いたのは、昨年の十月であつた。それから丁度一年。自分のこの悲痛な氣持は、弛緩する事なく今日に及んだ。自分の捨身な精進は、自嘲の毒素の中にも、なほ雜草の如く生えた。自分の道德觀は急激に變調した。自分は收拾しがたき內外兩面の生活の亂調の中に、呆然としてイむのだ。

今、自分の痛切な問題は、時代の激動に會しての思想と實踐との問題、社會性と個人性との葛籐、自己と世界との相剋である。亂雲の如き思想の世界に、弱り果てた翼をふるつて天の一方に飛ばんとする。或ひは自分は鐵槌の亂打のもとに粉碎さるべきものであるか。或ひは翼ある如くして、斷崖より飛ぶべきであるか。正しき理解を得ないで來た事は、長い間の自分の苦痛であつた。今、無理解の批評は一苦笑に值するのみ。自分の絕望は、自ら死後の詩人と呼ぶ事に於て救はれた。今自分の苦痛は、詩人としての寂寥でなく、人間としての全生活を擧げての一大飛躍に對する自己の無力の意識に外ならぬのだ。

現下詩壇の二つの勢力は、プロレタリア詩派と、詩と詩論一派の超現實主義とであるやうに見える。この一見相反

する二つの詩派は、然し、現下の資本主義末期の（果して末期か？）表裏の表白であるかも知れない。後者が事實、現代の時代精神に深く根を置くものか否か、その問題は暫く保留するが、その意向に於て自分に興味あるものなる事だけは言明して差支ない。然し、自分の共感は今最も前者の上にある。だが、自分はプロレタリア詩人か。自分は僞る事を欲しない。自分は知識階級の一人だ。そして文筆生活者の一人だ。決して第四階級の一人ではない。自分の社會詩はこの自分の生活の基礎の上に生れる。從つて、純粹の勞働者、農民より生るべきプロレタリアの詩は自分には出來ない。この點の非難は百千といへども悉く甘受する。然し、自分が勞働者の一人として更生の生活をはじめる時は、羸弱な身の破滅する時である。

佐藤一英氏は「現代詩講座」の中で自分を評して、十八世紀の革命詩人だと云つた。即ち、自分はルッソオ、ヴォルテエルの同時代者と見られたのである。然し、これは自分の光榮である。自分は現代ソヴィエート・ロシア詩人の亞流たる事は出來ない。我國の國情はロシアと全然相違する。（×××の誤算を思へ）バイロン、シェリイ、ハイネは我國でなほその使命を䡄つてゐない。我々には未だバスティユは襲擊されてゐないではないか。ナイーヴな社會詩人石川啄木の後、自分は社會詩人の懷疑的、批判的時代を代表する。懷疑と熱狂との混交に於て、より複雜な時代を代表するものだ。この點、自分は社會詩人としてのハイネの意義と照應する。但、これは本質的類似であつて、自分がハイネを模倣したのではない。

ニヒリズムは自分の病氣であると共に、現代日本の病氣でもある。左翼プロレタリア文藝の陣營中に於ける都會的モダニズムの實踐の基礎を成すものは、多分のニヒリズムではないか。それは未だ十分に淸算されてはゐないのだ。このニヒリズムの深化と、その克服とに於て、憂鬱の詩人哲學者萩原朔太郎氏は、今最も自分に近い。萩原氏が自分の詩境に最も共感を寄せられるのは、この本質的の理由からである。又、民衆派は自分を葬らんとて最も努力したが、

ひとり福田正夫氏のみは、そのニヒリズムに於て自分と一致するものをもつてゐる。思ふにこれは我等の時代の徴候ではあるまいか。最近×××事件の犠牲者にその顯著なる例を見る。我等の道は遠い。少壯の熱狂は尊いが、現實は熱狂の眼で見るほど、熟してはゐないのである。それゆゑにこそ、鬪爭は愈々必要なのだ。だが、この息詰まる程の重壓の中で、白き手のインテリが最後までよく耐へ得ようか。まことに、「かかる時には心身共に頑健强壯であるか、或ひは死んでゐなければならぬ……」

昭和四年十月二十日(「愛誦」十二月號所載)

最近の自己を語る

我が一生の夕であるか。將た一生の曙であるか。おそらく夕であらう。刀折れ矢盡き、生涯の夕暮に、愴然として立つ一個の敗兵の姿を、人は何と見るであらうか。嘲笑したいものはするがいい。おれは骨ばかりになつた案山子のやうに、田の畔に茫然と立つて、雀の嗤ふに任せるであらう。

長い、長い年の間、自分は汚辱の中に生きて來た。自分は理解の言語不通なる國に、地獄のやうな寂寥の中に孤坐して來た。がつひに雪辱の日は來た。天の一方に斷雲がとぎれて自分の陰鬱な面上に、碧空が微笑みはじめた。一天なほ重く壓する中に、とにかく一條の日光は落ちた。

然し、そのとき自分の心は重病の床に横はつてゐた。陣痛に悩む產婦であるが、致死期の病人であるか。自分は知らない。が、呻吟の聲は屋を洩れ、苦悶の叫びは行人の耳朶を打つた。人はこの聲を聞いて、轉向を云つた。又、甦生をさへも云つた。それは果して、新生への打開であつたか、新大陸への呼びかけであつたか。自分は知らない、そ

れはダマスコへの途上であるか、將た、地獄への轉落であるか。
甦生の曙は、いかなる雲の間より開け來るか。生きてその曙に會ひ得るか、又は骸をもつて迎へねばならぬか。未だ、それを知らない。自らその運命を知り得ない。
過去は確かに慘敗であつた。百戰、すべて利なく、破碎をすらも宣せられた。破碎、破碎、げにや自分の肉身は破碎しつくしてゐる。素志空しく、思想傾いた。しかも今、自分はふるへよろめきつつ、決然として起ち上つた。慘敗の後、慘敗の勝利。瀕死の後、死中の活。まさにこれ男子の本懷。さらばよし、息絶えるまで、この破れた喉をして歌はしめよ。時代の激浪の間に漂ひつつも陸を陸をと叫ばしめよ。

昭和四年十一月十日（「詩文學」二月創刊號所載）

現代日本の流行歌を如何に見るか

この課せられた題目について、自分の答へたい事は、案外尠い。然し、そこには詩人の全意義を決定するに足る重大な問題がひそんでゐるから、一應考察する價値は十分にある。
まづ、詩人が流行歌を書くのは、いかなる信念からであらうか。單に報酬を得たいためならば、自分は少しもこれを追求しようとは思はない。然し、率直にさう云つた人はまだ無いやうだ。やはり藝術的な要求からなされたやうに云はれてゐる。西條八十氏が『東京行進曲』の歌詞への攻擊に答へて、現代への諷刺であると云はれたなど、その一例である。その理解から考へれば、緊縮節もやはり諷刺と見るべきものであらう。
西條氏は大膽な人である、從來の詩人の敢てなさなかつた事をなした。商品としての詩の販路を擴大した。最も高

踏的な詩人の如く思はれつつ、最も卑俗な世界に敢て飛込んでゐるのは面白い。これも詩人としての勇敢な一つの生き方であると思ふ。ただ、自分がそれをやれと云はれたら、それは辭退したい。

いつであつたか、深尾須磨子氏とお話したときに、自分が絶對に流行歌の歌詞を書きたくない、そのため民謠調の詩をも出す事を欲しないと云ふと、深尾さんは、それはいけませんと云はれた。直接大衆に訴へるものとして、民謠調をもつて、社會詩を書く事を勸められた。それは首肯すべき言である。そして、これは發表こそしないが、自分の書いてゐるところでもある。此種社會民謠こそ、民謠界に自分の最も要望したいものである。だが、社會民謠は決して流行歌とはなり得ないのだ。それは現下の流行歌とは別個の地盤の上に立つものだからである。言ひ換へれば、それは一つの叛逆であつて、權力への迎合でないからである。

茲に至つて、社會の現階段に於ける流行歌の本質的意義が判然してくる。即ち、流行歌は現下資本主義社會の支配階級の意志の反映に外ならない。元來、それは詩人の自發的作品ではなくして、資本家や爲政者の依賴によつて作爲される羈絆藝術であるから、最も不自由な拘束されたものである。從つて、當然叛逆でなくして迎合となる。そして、彼等はただ大衆を魔睡せしめ、陶醉せしめる事のみを欲してゐるから、勢ひ毒にも藥にもならぬナンセンスでなければならないのである。尤も、中には緊縮節の如き、又、これは流行歌ではないが、講談社の雜誌に載る忠君愛國の歌の如き、積極的に或る政策を宣傳し、又、或る思想を表明するものもある。この後者を書いた諸詩人を難じた「日本海詩人」中の評者の言は正當である。但、その詩人が反動主義の見地に立つてゐるならば、また格別であるが。

詩人も食はねばならぬから、自分はリゴリズムを以てこれにのぞみたくない。或る程度までは寬容すべきものと思ふ。が、ものには限度がある。民衆詩人が忠君愛國の歌を書いたならばどうであらう。又、プロレタリア詩人が緊縮節を書いたならばどうであらう。前者はまだ云ひ拔けのみちもあらうが、（民衆詩人はブルジョア・デモクラシイに立

脚してゐるから）後者に至つては、正に自殺的行爲でなければならぬ。

近く、プロレタリア詩人に、廣告詩を以て新聞の全面を埋めよと勸告した人があつたやうだが、これなど自分は心得難い事に思つた。資本家をより富ますために、その商品、無數のプロレタリアを搾取しつつ發賣せられる商品の讃美を書けといふに至つては、何と挨拶していいか分らないのである。プロレタリア詩人も生活のためには官廳にも勤務しなければならぬ。それは生活の手段として止むをえないが、それは飽くまで手段であつて目的ではない筈だ。廣告詩もそれと同樣で、これを書く事を咎めるのは、餘り思ひ遣りがなさすぎるかも知れないが、同時にそれに何等かの積極的意義を附與しようとするのは亂暴である。

流行歌もまた一種の廣告詩である。それはただ生活の手段としてのみ許される。流行歌詩人は、その詩人としての自由を自ら放擲して、資本主義的功利主義に附隨するものであるから、また自ら搾取階級の味方である事を明示する。從つて、何等思想的立場を有しない西條八十氏や、野口雨情氏が、これを作爲する事は當然の事であつて、毫も非難すべき點を見ない。が、然しプロレタリア詩人には、絕體に否定されなければならぬ事である。自分が流行歌に背面するのは專らこの理由からである。自分は公式的なマルクス主義のプロレタリア詩人ではないけれども。金のために自分の自由を賣り得ないのは、自分の道德であると同時に、また趣味でもある。そして、この自主のゆゑに、自分が滅びなければならぬならば、甘んじて滅びたいのだ。

（附記――自分は最近緊縮節を發表するつもりだが、これは上述の如き社會詩であるから、自分が本當の緊縮節を書いたものと誤解しないで欲しい。）

昭和四年十一月十日（「詩神」新年號所載）

或る信條

「自分は死後の詩人だ。生前の名家ではない。」自分は昨年から書いた。或る人々は、自分の虚名のゆゑに、その言を見て奇異の感をなしたであらう。或る人々は、自分の多年の詩壇的孤立のゆゑに、そこに傷けられた自尊心を看て取つて、これを嗤つたであらう。

然し、それはただ一片の客觀的事實を云つたものに過ぎない。一詩人の不可抗的な宿命を語つたのに過ぎなかつたのだ。やがて、人はその事を理解するであらう。一生、自分は他の詩人を理解せん事を努めて來た。然し、他の詩人にとつて、自分は理解されにくい人間であつた。不幸にして、自分は見る人によつて、いかやうにも見られ得るたちの詩人だつたのだ。念の爲めに云ふが、これは何も自ら廬山を以て任ずるのではないのだ、ただ素質の問題たるに過ぎない。

自分は自分の小なる事を、自ら最もよく知る。そのために絶望さへもした。然し、いかに小であらうとも、自ら唯一獨自の詩人で、他の復製ではなかつた。自分はただ一人の自分である。反復しがたき一つの個性である。だが、そこにまた、自分の容易に理解せられない所以があつて存するだらう。

同時代の詩の潮流に逆航して、自分は頑なに自分一個の世界を固守しつゞけた。自分は此の事を今日誇りに思ふものだ。この誇りをもつて、自分はいつでも滅びるつもりだ。たとひいかに弱小であらうとも、なほ幾分の意義を自信してゐる自分は、いかに感傷詩人、小曲詩人の曲解のもとに片付けられようと、それを承認する事は出來ない。自分が實際にさうした無意義な詩人であるとは思へない、自分が詩人間の常識にとつて、理解しがたい詩人だつたからだ

といふ確信を捨て得ない。

此際、自分はかの襲撃については忘れたい。打倒生田春月！ そのスロオガンも既に古い事である。この打倒的叫喚は、自分を反撥せしめた。自分は防禦しなければならなかつた。自分を卑しくしたものは、實にこの突貫の聲であつた。自分は自ら卑しい嗟嘆に墮した事を悲しまねばならない。が、つひにその嵐の狂暴も過ぎた。悲しいかな、自分の心には幾分の傷が残つたのだけれども。

今、自分は同代の詩人の自分に對する批判を從順に受け容れるものである。或ひは、自分は生きる値なき詩人かも知れぬ。然し、それは他人の評價によるのではなく、自己の評價によるのである。萬人の讃嘆の中にあつても、自分は死ぬべき時には死ぬであらう。打倒生田春月の叫びの中でも、自分は生きて來たのだ。

自分が二十年のわが努力の全く空しかつた事を悟つたのは、自分の詩壇的成敗に關するのではない。今、自分は詩壇の同輩に、多くの善友をさへ得た。自分の失望は世間的意味ではない。自分は本質的の意味で、自分の失敗を是認しなければならなくなつたのだ。自分の過去二十年の業績は、今二卷の詩集となつて自分の前に横つてゐる。これを見るとき、自分は云ふべからざる悲しみを覺えるのだ。たつたこれだけか、自分の天分は……

自分は今最も謙虚である。今後、苛酷な批判と抗爭するのは、自分の詩であつて、作者自身ではない。自分は既に白旗を揭げてゐる……自分は今では、かの敵意にすらも抗しない、憎惡と反感の手が自分を散々にふみにじり、こきおろし、粉砕するに任せてゐる……我が詩よ、孤兒よ。汝は獨り生きよ。自分は汝を浮世の荒海の中に遺す。なさけある手が、汝を拾ひ上げ、汝を保育し、汝を愛撫する事を、せめてもの慰めとして。

自分を理解してくれる詩人も出て來るであらう。自分に素質の似た若い詩人も出て來るであらう。ことによると、同時代の詩人も自分を理解してくれるかも知れない。否、現在その人が無いのではない。が、此の道は未だ未だ荊棘

の路である。自分は生きて平坦の大道に出られようとは思はれない。「自分は死後の詩人だ。生前の名家ではない。」これは誇りの言葉であらうか。否、一生の寂寥の總量である、我が悲痛な運命の摘要である。自分は再びこの種の詩人に生れようとは毫末も願はないのだ。

――一九二九年五月二十日、自分はこの數十行の文字を書いた。自分はその中の餘りに赤裸な激情を恥ぢて、これを篋底に祕した。今、自分は自分の一切の弱點と卑小とを天日に晒して生きるつもりだ、また死ぬつもりだ。それで新しい稿を書く代りに、これを發表する事にした。玆には又、自分の詩人としての信條が含まれてもゐるからだ。即ち、自分は世間の毀譽褒貶に拘はらず、自分の個性に從つて、自主自由の詩人として、その操守を全うするつもりだ。最近、自分の道は展けた、從來に例のない程の同感者を得て來た。然し、そのために自分の價値が加はつたとは思へない。自分は依然として失敗せる小詩人にすぎないのだ。自己の價値を增減なく認識して自分はそれに堪へようと思ふ。

昭和四年十一月二十八日(「愛誦」五年新年號所載)

詩集の裝幀

美しい詩が美しい裝幀につつまれて、匂はしく手に置かれるのは、喜ばしいものである。然しまた、さしたる價値のありさうもない詩集が、きらびやかな燦爛たる裝幀をもつて現れるのを見ると、何となく勿體ないやうな氣持もする。

私は昔から、一册も美しい裝幀の詩集を出した事がない。多くは假綴の粗末なものであつた。單に詩集だけでなく、既に五十册の著書をもちながら、未だ一册も氣に入つた裝幀の書をもたない。最も成功した裝幀も、單に嫌ひでない

程度のものに過ぎない。

それは寂しい事であるが、私のやうな貧しい詩人にとつては、思ふにまかせぬ事だから、あきらめてゐるのである。もつとも、私とても、十分ではなくとも、多少は裝幀について意を凝らす自由がないのではない。が、大抵のところで、書肆の意向と折れ合つてしまふ。それはなぜかといふと、上に云つたやうに、つまらぬ詩集を美裝して飾り立てるのを滑稽におもふ氣があるのと、若し自分の詩集に價値あらば、何も自分が懸命にならずとも、後人が十分飾り立ててくれるであらうと思ふからである。

十分自己の價値を信じ、自己の愛兒を盛裝せしめる詩人の詩人らしい纎細な好尙には、敬意を表する。私とてもあくまでそれを拒否しようなどと思ふのではない。が、そのために多くの努力を要するならば、それほどまでにせずともと思ふのだ。

私はその本質だけで價値を見て貰ひたい人間だ。私が粗末な着物をきてゐるから、駄目な奴だと思ふ人には、勝手にさう思はせておく。これは誤つた考へかも知れないとは思ふが、私の本心だから仕方がない。

然し、私とても、詩人として、せめて一册だけは眞に自分の氣に入つた、自分の趣味性を滿足せしめるに足る裝幀の詩集を出したいと思ふ氣が、まだ心の底に動いてゐる。ブルジョア的と云はれても、事實だから仕方がない。ただ、裝幀の外にとりえのないやうな詩集の著者となつたら悲しい事だ。私の趣味からいふと、豪華版もわるくはないが、それほど凝らないで、さつぱりとした、感じのいい裝幀の本が好きだ。

自費出版の詩集で、粗末ながら、何處となく著者の好みの床しさが見えて、氣持よく感ずるものも時々ある。そんな詩集を見るとき、その著者の人知れぬ苦勞を考へて、涙ぐましくなるのである。

二つの誤解

「現代詩人全集」については、もう何も書くまいと思つてゐたのに、「日本海詩人」といふ雜誌で、中山輝君が、その人選の缺陷を指摘した中に、幾分か私を責任者のやうに云つてあるので、私としては二重に苦痛だから、もう一度云はせて貰ひたい。私は中山君の云はれるやうに、新潮社の顧問でも何でもない。はじめ下相談を受けた事は受けたが、あの決定は毫も私の意見を反映するものではないのだ。私は石川啄木、三富朽葉、山村暮鳥三詩人を特に推奬したから、その點の責任は喜んで引受ける。殊に、石川啄木を加へた事について、或る方面に非難があると聞いたから、それに對して自分が何故に啄木を尊重するか、その理由を說明して、天下の輿論に問ひたいとも思つてゐる位だ。然し、私は現存の人に對しては、決定的な意見を述べなかつたのであるから、その點の責任はこれを負ふわけに行かない。この間の事情は、本誌九月號に書いておいた通りである。

今一つの誤解は、私を本誌の主宰者と見なして、いろいろ編輯上の責任を以て問はれる事である。西條八十氏は主宰者であつたとしても、氏が去られてから、本誌に主宰者はない筈だ。私が西條氏に代つたのでない事は、本誌の表紙が示してゐる。私の考へでは、一人の主宰者によつて統べられるよりも、多數の意見を基礎とし、諸方面の希望を聽いて編輯される方が、雜誌として公正な、普遍的なものが出來、從つて詩壇にも益するところが多いと思ふ。或る一傾向によつて統一される事は、同人雜誌ならばとにかく（それすら私には賛成できないが）本誌のやうな一般雜誌では、そのより大なる發展を期する道ではないと思ふ。元來、私は一切の獨裁を極力排する。各人各様の個性の自由なる發展を最も喜ぶものである。私は自分の思想的立脚地からしても、一切、權力の地に立つ事を好まぬものである。その意味で、私は本誌の自由な編輯方針に賛ずるものである。私が本誌のために應分の助力を惜しまないのは、この

理解の上からの事であつて、本誌の力を借りて、詩壇的に威を張らうためではない。近頃一寸感ずるところがあつたから、これだけ書いておく氣になつた。

昭和四年十二月二十八日(「愛誦」二月號所載)

「火山」序

一九三〇年といふ年は、普通の歳とちがつて、非常に意味の深い年だ。それは一八三〇年七月革命の滿百年を記念すべき年だからだ。その上また、アナキズムの大きい先覺の一人であつて、僕の畏敬する石川三四郎氏の最も重んじてゐられる我がエリゼ・ルクリユの生誕百年祭を祝ふべき年だからだ。この意味深い年に、杉原邦太郎君の第一詩集『火山』が世に出るといふ事は、僕にとつて、二重にうれしい事だ。

今、詩壇は全然更新しようとしてゐる。古い詩人は今や概ねその聲を出し盡して、やうやく沈默に入らうとしてゐる。僕自身もまたその古い時期に屬する一人だ。ただ僕は或る運命的な事情からして、最近、自分の全過去を一蹴して、搖籃にめざめた稚兒のやうに、覺束ない聲で啼かねばならなくなつた。そのため時として、新興詩人の中の一人に數へられる幸運に惠まれさへもする。が、僕はそれによつて有頂天になつて喜ぶべく、あまり自ら知るものである。僕はいかに過去二十年とは全く異つた聲を發しえたとしても、なほかつ身についた多くの古い殼を全然ふるひ落し得る自信がない。新鋭の詩人、次ぎの時代を代表する詩人に對する最もよき理解者、共感者たり得たならば、自分の望は足るのである。舊勢力と新勢力との間にあつて、新興の詩人のために、何等かの寄與を爲し得られたならば、以て冥すべしと思つてゐる。時代は今や新しい詩人に屬するのである。その多くの新詩人の中から、眞に新しい時代の聲

を發し得る選ばれた人達が、その巨軀をもたげるのだ。僕はそれを信じて疑はない。一九三〇年は、またこの意味でも、必ず記念すべき年となるだらうと思ふ。それゆゑ、この年に、杉原邦太郎君の『火山』の出る事を、僕はなほさら喜ぶのだ。

『火山』といふこの詩集の題が、既に僕の胸には強く響いてくる。僕は校正刷で、その詩の全部を通覽してみた。そして、前に自分の知つてゐた杉原君とはすつかり違つた新しい杉原君をそこに見出して驚いたのだ。然し、同時に僕はまたかうも思つた。前に自分が知つてゐたと思つたのは、まだ本當の杉原君でなかつたか、又は、僕の知り方がまだ十分至らなかつたのぢやないかとも思つたのだ。とにかく、この中の詩の與へる力は、以前、僕が『烽火』で見た杉原君の詩の記憶から考へられる感觸とは全く異つたものであつた。そして、これは僕にとつては愉快な驚きだつたのだ。

「烽火」の人達が此頃すつかり變つて來たと皆が云ふ。麻生恒太郎君などはその最もめざましく變つた一人だが、杉原君の變り方も、これでみると、またまためざましいものである。佐藤信重君、武井京君なども、それぞれ本當の力を見せて來た。それにつけても、僕は北海道に退耕してゐる加藤愛夫君と、なくなつた西崎滿洲郎との事を思ひ出す。『烽火』は元來、僕が編輯してゐた『詩と人生』の廢刊後、その同人だつた人達が、相寄つて發刊した詩雜誌で、同人の間の仲のいい事と、そのおとなしい事とで聞えてゐた。それが休刊したりきりになつてゐて、僕も時々寂しく思ふ事もある位だつたが、最近になつて、同人が一齊に活氣付いて、力強く歩み出した事は僕の愉快に思ふところだ。「烽火」の人達は變つたといふ。だが、本質は變りはしない筈だ。ただ、前には才能と力量とをもちながら、何がなしにひかへめにしてゐたため、それを十分に發揮しないでゐた傾きがある。それを無遠慮に卒直に發揮しだして來たばかりだと思ふ。杉原君の『火山』は、それをはつきりと僕に證明してくれるのだ。

杉原君。おめでたう、よくここまで來ましたね、かう云つて、僕はこの著者を祝賀せずにゐられない。一々の詩篇に對する批評は、他の人がやつてくれるであらう。僕はただ、友人として、友人といい收穫に對する温かい友情の言葉を贈ればいいのだ。また、贈らずにはゐられないのだ。だが、僕は同時に、この友情の聲を、小鳥の呼びかはしのやうな聲にはしたくない。やはらかな天鵞絨の手ざわりのやうなものにはしたくないのだ。僕等の友情は、もつと熾烈な卒直なものでなくてはならない。そこで僕はあらためて杉原君に云ひたい、この「火山」は過去の君に對比して、君を全く別個の人の如く思はしめたほど、僕にはその開展が驚かれもし、その飛躍が喜ばれもした。よくやつた。よく書いたと思はれもした。が、これは君の出發點にすぎないのだ。君はいま力強く第一歩を踏み出したのだ、この詩境で滿足してはならない。絶對にならない。此事を忘れるならば、君はありふれた靑年詩人の一人として終つてしまふだらう。昔はなかなかいい詩を書いた事もある。と云はれるだけの人になつてしまふだらう。この事を忘れないで、更に更に、上へ上へと登つて貰ひたい。自ら足るところなく、果て知れず、先きへ先きへと進んで貰ひたい。人間の努力には、これでいいと云ふ際限はないのだ。詩人の世界には、何處まで行つても、もうその先きへ行けないといふ最後の限界はないのだ。これは僕が常日頃自分に云ひ聞かしてゐる事で、また眞實だと思つてゐる事だ。それゆゑこの言葉を君にも贈りたいと思ふ。もつともこの一册の詩集の中ですら、或る詩と或る詩との間には、飛躍のあとが見えるのだから、僕のこの言葉が無くても、杉原君は決して一處に停滯して終る詩人ではない。だから僕は、今安んじて、この一卷を愛誦しよう。その中に生きてゐる一人の新詩人の內部光景を愛觀しよう。これは誦するに足る曲目であり、觀るに足る一聯の光景なのだ。今は、それで僕は滿足していいのだ。

僕は今、アナキズムの社會理想に向つて、覺束ない足を擧げてゐる。或點、アナキズムへの途上にあるとも云へよう。杉原君もまた、幾分僕などに近いところにゐるやうに思はれる。然し、この際、僕は僕自身にも杉原君にも云ひ

たい。僕等は主義の形骸に囚はれてはならない。それは死だ。僕等は看板によつて生きてはならない。眞の精神によつて生きねばならぬ。その意味を歌つた詩が僕にある。未發表のものだから、記して君に贈らうとおもふ。

ボルシエヴイキよ、この叛徒を。
この我儘者はぶち殺せ、
詩人はおれの宿命である。
おれが自由を愛するだけ、
おれも詩人か。まだ詩人だ。

プリンツ・フオゲルフライ、
日本なんぞに生れた莫迦め。
日は朗らかだ、日本は春だ、
秋のなかばもやつばり春だ。
屋根の上に啼いてゐろ。

身を律法の外におき、
心を流行の外におく。
時の合言葉は忘るとも、

嵐のときは、嵐とならば、
ツエッペリンよりも高く飛べ。

詩人は四季の中に住む、
詩人は晝夜を詩につなぐ。
南の果てから北へ行け、
地獄から天國へのぼれ。
時代を超えて、なほも飛べ。

マルキシズムのイデオロギイ、
そんなものにはしばられるな。
詩人は絶對自由の子である。
矛盾から矛盾へ躍れ、
極から極へ湧き返れ。

詩人は魂の厠にすむ、
靈屋にとまり、祖に尿する。
女郎屋も殿堂、教會も唹壺だ、

しかも、暮夜ひそかに天に祈るは誰。
神は詩人のペンに棲む。

主義に詩人の靈はなく、
靈ぞあらゆる主義を含む。
畫ける龍に眼なく、
眼は地底も射し通す。
詩人よ、自由を失ふな。

詩人はただッ子、自由人、
浮いた世間の人氣なんぞに
この自由は代へられぬ。
藝人としては落第でも、
阿呆としては大したものだ。

自由、自由、自由のみだ、
詩人を生かす神の恩寵、
これを棄て、魂を賣る

流行節詩人、際物詩人、
死ぬときぞ、生きよ、阿呆詩人！

おれも詩人か。まだ詩人だ。
恥かしくも、おれは詩人だ。
されど、自由のために死なば、
おれも誇りの詩人である。
自由は詩人の靈に棲む、
靈の苦難ぞ、詩人天國。

一九三〇年一月十日

追分の心

江口章子さんをおもふと、私は不思議に、平安朝の才媛を想起する。

章子さんは趣味のこまやかな、洗練された美を愛する人で、またみづから、美にかがやいた人であつた。私は十四五年も前に、はじめて會つた時分の、章子さんのらうたけき若姿を今に忘れる事が出來ない。

當時、九州からはじめて東京へ出て來たこの離婚婦人は、おなじ事情のもとに巴里に出て來たジョルジュ・サンドのやうにも思はれた。然し、ジョルジュ・サンドは理性の勝つた小説作家であつたが、章子さんは趣味と情熱との詩人で

あつた。

その日から、今日までの間に、章子さんは現代の女性の歩まねばならぬ數々の試練のみちを歩いて來た。ある時は遠く、ある時は近く、その歩みを見てゐた私は、今日、紫野の春に空華の香をたきつつ、一碗の侘茶に、煩惱も菩提も一口に飲みほす有髮の尼の心匂やかな、艶女の俤を偲んで、いくつかの秋の詩を心におもふのである。

あなたも坊さんにおなりなさいとは、この年ごろの私の迷ひに寄せられた章子さんの言葉であつた。昔から、章子さんは私にとつては、姉さんであつた。そして、今も依然として姉さんである。私は章子さんに學ぶべきものを持つのみで、敎へるべきものを持ちえない。

章子さんは九州の生れであるが、祖先は京都から來たのだと、いつであつたか、云はれたやうに覺えてゐる。京の女の美と、なまめきとを、そつくり持つてゐる人である。が、その京は、今の京でなく、昔の昔の、京である。平安朝の宮廷の貴婦人であつたならば、その才とそのかたちとは、いかに多くの公達の心を奪つたであらう。そして、後世の我我には、奔放な歌集と、床しい日記とを殘してくれたであらう。そして思ふに、先年出された散文集『女人山居』は、多分、その日記にあたり、今度の詩集『追分の心』こそ、その歌集にあたるものであらう。その點、章子さんは和泉式部などに最も近い人のやうに思はれる。

和泉式部の歌は、王朝文學の華である。當時の女流で、和泉式部以上の歌人はない。紫式部や淸少納言は云ふまでもない、赤染衞門などですらも、歌人としては和泉式部の敵でない。それほど和泉式部の歌はすぐれてゐるが、日記の方は、いくらか餘技といふ氣味がある。章子さんも散文よりは詩の人である。『女人山居』も散文詩としてめづらしい作品ではあつたが、未だ章子さんの眞の才華を示すものではなかつた。今度の『追分の心』で、はじめて章子さんがいかにすぐれた詩人であるかに、世間は驚くであらう。

「白魚のなげき」の如き、私の愛誦措く能はぬ作である。そのころの諸作はすべてすぐれたものであるが、その後の作品は、更に私に多くの事を教へるであらうと思ふ。平安朝に生れなかつたのは、章子さんの不幸であつたかも知れない。然し、そのために、私たちはこのめづらしい詩集を得る事が出來たのである。これはいかにみやびと、もののあはれに滿たされてゐるとはいへ、王朝の婦人にはつひに作りえない作品だからである。

私は坊さんにはなれさうにもない。が、この一卷を讀んで、しばらく自分の心をなだめる事が出來る。このすさまじい世相の中で、しばらく別世界に遊ぶ事が出來る。私は自分の行けないやうな境地に行つてゐる章子さんを羨ましく思ふものである。

心法双忘猶隔忘。
色空不二尙餘塵。
百鳥不來春又過。
不知誰是住庵人。

（昭和五年一月二十五日）

詩集『海鳴』に序す

私の眼の前には、あの寒風山の寂しい姿が浮んでくる。しばらく海に平行して、流れるともなく流れてゐる雄物川の川口の向うに、黑く浮んでゐる砂丘の姿が見えてくる。砂丘のむかうには、物凄い日本海の波がたけつてゐる。その海鳴の音は、夜すがら旅人の枕に響いた。雪どけでみちがわるいから、足駄をはいて來いと云はれて來た旅人は、

行きあふ人の足駄の爪皮に、毛皮のついてゐるのに驚かされた。だが、ここではその足駄もいらなかつた。雪の消えたばかりの街上は黄色く乾いて、ほのかに春のけはひが見えてゐた。

これが、土崎の町だつた。曾て一度、或る年の三月の末、私が踏んだことのある土であつた。その土の中からは、五月にもなると、靑い草が生え、紅い花も咲くのだ。そこからはまた、赤い思想も芽ぐんだといふことだ。土崎と秋田とを、つなぐ電車の車窓から、私は勞農館（？）の赤い屋根をすら眺めたのだつた。だが、竹內君の中には、さうした赤い思想はない。君は過激な心の持主ではない。また、反抗的な心の持主でもない。君のめざすところは、敬虔な人生の創造であつたであらう。この人間世界の不調和の中に、一つの、輝かしい調和を見出すことであつたであらう。そして君は、これを子供の世界に、子供の魂の中に、見出したのだと私には思へる。子供に對する愛の中に見出さうとしたのだと、私には思へる。この一卷の卷頭に置かれた「童帖」は、さうしたユニイクなたふとい作品だと私は信じる。

君の詩の中には、注入的な、外來的な、追隨的な、技巧的な、要するに、一切の形式的なものはない。すべてはうちから生れたものである。生活されたものである。體驗されたものである。獨自なもの、個性的なものである。偶然の所產でなく、必然のしるしを帶びてゐる。十年の間の君の沈潛は、君の內生活を深くして、君に獨自の詩境を與へた。その底に沈鬱な情熱を祕めた、自然な、素朴な、そして莊重な北國人的なリズムは、それ自身全く卓立してゐるものである。自分の個性と、自分の生活とを持つた詩人にして、はじめてこの節奏をかなで得たであらう。君が十年の寂寥は決して徒爾ではなかつた。さう私は信じるものだ。

かへりみれば、もう十年の昔になる。十七歲の竹內君から詩の道に入りたいといふ手紙を得たとき、私は君にむかつて、詩の專門家にならなくとも、詩を愛する人におなりなさいといふ返事を書いたといふ。私はすつかり忘れてゐ

たのであるが、舊臘久しぶりに會ふ事の出來た君の口からその事を聞いた。そして、然るべき事だと思つたのである。私は現に今もそれとおなじ考へをもつてゐる。私自身、詩によつて衣食する人間とならず、詩によつて生きる人間にならうとは、その衷心からの願ひであつた。

人生の事思ふにまかせず、私もまた屢々詩を賣つて食はねばならぬ日があつた。詩壇の毀譽褒貶に介意せずにゐられない時も稀れでなかつた。が、自分としては出來る限りの自制と克己とを以て、心にもない詩作の需めを辭し、金錢や流行的名聲の誘惑をも斥けて來たつもりである。が、自らいかにそのために力を注いだとしても、「詩人」といふ(本質的な意味よりも、むしろ職業的、便宜的な意味での)空しい名もて世に立つた罪過を償ふわけにはゆかない。そのため、餘計な苦痛の中に浸されてしまつたのだ。その事を思ふとき、私が少年の竹內君に與へた言葉は、かへつて自分自身に對する痛切な戒めの言葉であつた事を知るのである。

竹內君は私自身より一層私の言葉に忠實であつた。君は詩を愛しつつ、十年を男鹿半島の波浪を眺めつつ、雪の中で、爐火のほとりですごした。東京は君にふさはしい地でなかつた。否、純粹な多くの詩人にとつてふさはしい地でないかも知れない。故鄕の土の中にしつかり根を置いて、おのが生活を強く護つて來た君の十年は、たしかに君の詩に力を與へた。まじりけのない透徹を附與し、眞實の相(すがた)をあらはしめた。君はよく詩を愛した人と云ふべきである。そして、私達にとつて詩を愛するとは、生活を愛する事の謂ひに外ならない。詩と生活とは二にして一、わかちがたく、離し難いものである。よい生活の中からでなくば、よい詩は生れない。深い生活の中からでなくば、深い詩は生れない。これは私の信念である。單に信念であるばかりでなく、また私の切實な體驗でもある。私の二十五年の詩生活は、尠くとも私自身に、その眞實を立派に證明してゐるのだ。

詩學に則り、理論に從つて詩を書かねばならぬといふ說がある。詩的本能を斥けて、理知の統制による目的意識の

もとに詩を書かねばならぬといふ説がある。かうした自覺のもとに、技術の精練を努めて詩を書かねばならぬといふ説がある。この自覺なくして書かれるものは、すべて無價値な感傷詩にすぎないといふ説がある。私はそれらの藝術上の新しい主張の眞の根據について未だ知るところがない。それはそれとして意味もあり、立派な學説であるかも知れないとは思ふ。恐らくこれを主張する詩人諸氏にとつては、その切實な體驗から出た言葉であるかも知れないとは思ふ。が、一切の「美學」なるものを蔑視して既に十年に及んだ私にとつては、詩學は何等の權威ともなりえぬのである。私にとつて理論は詩の厭殺者にすぎぬのである。一世の風潮が自己の見解を非としようとも、私はこの確固たる信念を棄てるわけにゆかない。ゲエテの如く、ヴェルレエヌの如く、私達はその生活によつて詩を書きたいものだ。

それゆゑ、私は竹內君がその生活をもつて、これらの好詩篇を書いた事を、心から喜ぶものである。

ねがはくば、竹內君がこの一卷によつて、その生涯に一區劃を劃して、更により深い生活、より大きい世界へと進まれん事を。人生に、これで安心だといふ底はない筈だ。詩の道に。これ以上進めないといふ行きどまりはない筈だ。進めば進むほど、みちは遠く、また嶮しく、世界は愈々不可解を增す。解すべからざるがゆゑに人生はたふとく、究むべからざるがゆゑに詩の玄義は戰慄に値するのである。私達は詩と人生に對して、つねに一個の童子にすぎぬのである。私達は理論を以て後進に說く白髯の大詩人にならないで、つねにつねに、無智なる童子でありたいものである。

童心のたふとさよ。「童帖」の詩人のいかにうれしい事よ。

人生詩道の祕義、誰か是れを說き得るものぞ。今、東海の一童子に偈あり。

明星影裡明星發。
圓寂光中絕纖塵。
誰唱一聲無生曲。

大盧大江相映射。

庚午正月末日

麻生恒太郎君に答ふ

（わが第二の宣言として）

麻生恒太郎君。君の最近の元氣はすばらしい。「靜かな人生」で、申分なく完成した詩人として現れた君が、その殼を惜げもなく突破つて、飛躍した事は、瞠目に値する。暮に見せて貰つた「眞冬」など、力に滿ちた恐ろしい作品だつた。君の「敵」は恐らく、白刄を閃めかして、單身敵陣に躍り込むやうな、悲壯な意氣を示すに違ひない。事實、君は一切を敵として鬪はんとする。佛にあへば佛を斬り、祖にあへば祖を斬る。先輩も友人も敢てしんしやくしない。その最初の犧牲に僕が擧がつた事は、當然でもあり、君を愛する人間として、また、僕の本懷とするところでもある。我々の間の交際は、正にこの鐵と鐵との磨擦でなければならぬ。狼と狼との交りでなければならぬ。僕が弱かつたら、君に喰はれてしまふまでだ。

扨て、君は僕を射る第一矢に於て、僕の急所をねらつた。罔星といふところだらう。僕がアナキストでなく、ニヒリストであるといふ論證は、僕の一切の著作を讀破してゐる君の口から出るとき、權威をもつてゐる。僕が十數年前に、既にソシアリストであつた事を、自明の事實として語つたのは、君にしてはじめて可能だ。今頃やつとハイネをプロレタリア詩人として云々しだした詩壇の常識は、尠くとも僕に關する限り、君の指示に從ふ外はないかも知れない。

だが、僕がソシアリストであつたのは、同時に僕がアイデアリストであつた事を示して、ニヒリストであつた事を證しない。實際、僕はそのアイデアリズムのために、辻潤和尚からニヒリストの印可證明を貰へなかつた位だ。ところが、最近、僕が「ニヒル」の同人になつたので、それを聞いた宮島資夫君は、「君はアナキストでニヒリストでない筈だ」と云つて、僕に警告してくれた。然るに、今はまた君から、あべこべにニヒリストの極印を打たれた。さうかと思ふと、萩原朔太郎君は、僕をプラトニスト(それは百パアセントのアイデアリストの謂ひである)とさへ見てくれてゐる。玆に於て、僕は僕の本體がいづれにあるか、自分でも分らないのだ。僕は詩、感想、評論、小說に亙つて、白紙を汚す事既に一萬枚に及んだ。僕のこの罪過は、同時に僕の審判となるだらう。僕は今、自らその立場を明かにするよりも、他の論斷を默して受けたい氣持である。が嘗て本誌に發表した僕の「詩は叛逆である」が、僕の宣言として受取られたので、もう一度、玆に君への回答を以てそれを補足しておきたい。

僕は今、一つの社會理想に向つて進みつつある。アナキズムは僕の社會理想だ。だが、僕は確信あるアナキストではない。ただ、社會詩人として、その立場をアナキズムに求めんとしてゐるのに過ぎない。僕の思想は未だ十分に整理が出來てゐない。他人の思想に盲從して、これを看板とするならば、何の困難もないが、自らこれが體系を立てる事は容易な事ではない。一生の仕事である。

君の指摘するが如く、僕の衷には、多分のニヒリズムがある。僕が根本に於て悲觀主義者(ペシミスト)である事は事實だ。僕は理想の社會が實現する事を信じ得なかつた。これが僕のアナキストたり得なかつた理由である。が、今僕は、たとひそれは可能でないとしても、なほかつその實現に向つて進む、その努力の中に、人間的意義を認めるに至つた。これが僕の所謂絕望的勇氣だ。然らば、この絕望者は(ウナムノの絕望者は又敢行者の義でもある)單なるニヒリストに過ぎぬであらうか。

君はニヒリズムをあまりに消極的な、否定のための否定主義と解しすぎてゐはしまいか。僕は反對にニヒリズムの積極的意義を認めるものだ。そして、この積極的ニヒリズムに、かりに虚無的生命主義の名を與へてゐる。（スティルネルの創造的虚無の説など、僕には大きな暗示だ）そして、大杉榮の社會的個人主義が矛盾でない如く、この虚無的生命主義も矛盾でないと思つてゐる。だが、この虚無的生命主義は、もとより僕の社會理想ではなくして、僕の個人的な生活信條に過ぎない。僕の生きて行く上での規準みたやうなものだ。

有様(ありやう)を云へば、今日、僕にとつての必死の問題は、コンミユニズムとアナキズムとの對立でもなく、また、アナキズムとニヒリズムとの相剋でもない。インテリゲンチアとプロレタリアとの問題だ。無力弱小な一知識階級者として、その無産階級運動に對する立場の問題、その實踐的闘爭に對する能力と資格の問題である。ボルシエヴイキの如く、レエニンの説を奉じて、指導者としての知識階級の立場を肯定する事は僕には出來ない。又、倉田百三氏の如く、實相觀入を説いて、プチ・ブルジヨアの實相肯定をする事も出來ない。僕はこの點で今、苦んでゐるのだ。思想の表明よりも生活の實踐を重んずる僕は、或る主義信念を表明する前に、まづ、自己の生活の上にこれを實現しなければならないのだ。思想卽實踐、實踐卽思想、この信念から云へば、思想的體系などもはや問題ではない。

アナキストでも、ニヒリストでも、何でもいい。僕はただ正直率直でありたい。僕の詩人としての意義はその外にない。だが、そこに僕をアナキストと見なし得ない理由があると君は云つた。さうだ、自己の中に多くの矛盾する傾向を有つた僕は、正直に自己のあらゆる感情を表白するとき、いかなる主義にも忠實であり得ぬのは、當然の事である。しかも、僕は自分を裁斷して、その一片を以て世にまみえる事を好まない。それゆゑ、僕はつひにニヒリストですらも無いのだ。では、僕は何であるか。僕はただ僕である、唯一者である。

昭和五年一月二十七日（「宣言」三月號所載）

詩への尖端語（アフォリスメン）

宦官

詩學者は詩の后宮の宦官である。

音樂

音樂は我が故郷からの音信である。

言葉

言葉は十分ではない。思想の手にそつくりはまる手套ではない。殊に、都合のわるい事は、それを探してゐるうちに、思想が逃げてしまふ事だ。

主義

大きな詩人の中には、いくつもの主義がそつくり入（はひ）る。小さな詩人は、一つの主義の中にそつくり入つて、見えなくなつてしまふ。

白紙への淨化

説明よりも暗示、暗示よりも沈默。
白紙が最上の象徴である――マラルメ。

一流と三流

玄關だけの詩人がある。應接室だけの詩人がある。化粧室だけの詩人がある。寢室だけの詩人がある。臺所だけの詩人がある。便所だけの詩人がある。そして、それらはその持場の範圍内で、それぞれ一流の詩人である。
ところが、或る正直な詩人は云つた、「三流でもいい、おれは家全體の詩人でありたい」

驢馬の黄金時代

およそあり得べき最大のナンセンスを口にするものが、現代の天才である。天才の否定せられ去つた時代の天才である。
今や、ジヤズ的漫談家が最大の文學者であり、無内容の詩を書く詩人ほど大詩人である。文字(もじ)によつて何事かを云はんとするものは、既に古いのだ。そして、古いと云ふ事は現代では致命的欠陷である。
社會の急激な歩みに十年を遲れてゐる詩壇が、ひとりこの點に於いては、十年を先んじてゐる。我々は十年前に、既にナンセンスの天才の一ダアスを所有してゐる。

タレイラン以上

或る種の詩人の作品を見ると、言葉は思想を隠蔽するために存すると云つたタレイランの言を想起せしめられる。タレイランのこの皮肉な言葉は、政治家や外交家が、いかに巧みな虚言者でなければならぬかを道破したものであるが、語るべき事を有たぬがために、言葉の豐富を誇る詩人は、巧みに空とぼけるために苦心を要したタレイランをして、羨望に堪へざらしめるであらう。

そして、此種の詩人が、ポリティシアン、ディプロマティストとし、往々、卓越した手腕を示す事も、その才能の自然の結果として、首肯すべき事である。

詩魂商才

詩人が社會的勢力を得るために、何よりも邪魔になるものがある。それは詩魂である。詩人的氣禀である。それゆゑ、眞の詩人は概ね社會的劣敗者であつた。かのヴィヨン、ヴェルレエヌ、ランボオ、シェリイ、ヘルデルリン、レナウ、レオパルヂ……

然し、世には幸ひにも、詩魂商才を兼備して、社會的勢力と眞詩とを併せ捉ふる大詩人がある。これぞ眞に惠まれた詩人と云ふべきであらう。しかも、奇なるかな、現代に至つてそれが特に多い。

之に反して、詩魂なく、商才なき詩人は悲しむべきかな。彼は死ぬほかに詩人として生きる道はないのだ。

惡人としての詩人

惡人ほどセンティメンタルなものはない。彼は殉情の詩人ですらもあるだらう。詩人がセンティメンタリズムを排斥するとき、彼は惡人を排斥するのかも知れない。

だが、善人と惡人との明白な差別のつかない世には、センティメンタルか否かの判定もまたつかない。詩人はそこで、自分の嫌ひなものは、みなセンティメンタルにし、惡人にしてしまつて安心するのである。

不幸にして、十年前の彼もそんな詩人であつた。惡を排する事によつて、影のやうな存在を續けた。然し、つひに惡子、惡夫、惡親、惡友となつて、彼ははじめて生きた。だが、さうしてはじめて生きるやうな詩人は、果して幸福であらうか。

昭和五年一月二十八日集稿（「愛誦」三月號所載）

靈魂の線（詩への尖端語第二）

ハレルヤ！

基督は驢馬に乘つてエルサレムに入つて行つた。詩人は基督を乘せた驢馬である。

翼ある言葉

翼ある言葉が詩人をはこぶ。匂ひをはこぶものは風である。神をはこぶものは、ただ眞空である。

美しき心臓

この詩人は紫水晶の心臓を有つてゐる。何といふ美しさ。しかも、それに觸れてみると、びつくりして手を引込めずにゐられない。その冷たさ！

靈魂の線

「これは何でせうか？　この頭のまはりにぼんやり見えてゐますのは？」
「これですか、これは靈魂の線です」
その肖像畫の奇異を問はれたコヽシュカは、平然としてから答へた。我々は更に蛇足を加へる事が出來る。
「靈魂の畫家は目に見えぬものを描くのです。そのやうに、靈魂の詩人は、目に見えぬ心の波動を言葉にするのです。」

枝と詩人

自分の果實の重みのもとに折れる枝は、最も美しい死を遂げるものであるとは、ヘッベルの言葉である。
自分の詩の重みのために挫折する詩人は、最も美しく滅びるものである。我々はかやうにして滅びたい。

詩人の死

再びヘッベルは云ふ、彼自身を知るのは人間の死であると。詩を知るのは、詩人の死である。無邪氣を意識するとき、無邪氣は死し、幸福を意識するとき、既に幸福は過ぎてゐる。

詩學は常に詩人のはじめになくして、終りに存する。

人形つかひの芝居

詩學者の詩は、人形芝居を想ひ起させる。しかゝその人形芝居は、人形が覆面して、人形つかひが素顔で、芝居をしてゐるのである。

詩學の勝利

詩人がみんな詩學者になつて、脚註澤山の詩論を書く。詩學せざる詩人は、詩人でなくなつてしまふ。かくて、當然の結果として、詩が枯渇して、さしもの大洪水が忽ち引いてしまふ。

これが詩學の第一の貢献である。正に、見るべし、詩學の勝利は、詩の淨化であることを。

道によつて賢し

桶屋に桶學あり、大工に大工學あり、左官に左官學あり、そして、詩人に詩學がある。

詩人學校

純粹の技術としての詩が唱へられる。そして、純粹の技術としての詩とは？　商品としての詩である、手工としての詩である。かくて、一技術工としての詩人の地位が確立される。今や、工手學校の代りに、詩人學校を設置すべき時である。

詩の科學時代

美學を研究するよりも、文學に耽る方が愉快だ。詩學をしらべるよりも、詩を書いてゐる方が愉快だ。氣儘勝手に歌はうぢやないか。

——時代おくれの非科學的詩人よ、君等は滅ぶべきである。

詩はつひに科學となつた。何等の奇蹟!

詩はつひに飯にさへもなるであらう。何等の平凡事!

ヴレリイ語る

詩とは何であるか? その對象も、その方法も說明され得ない。それを知るものは默し、それを知らないものが語る。

これは生田春月の言葉ではなくして、ポオル・ヴレリイの言葉である。(ルシアン・ファーブルの詩集の序に於ける)それゆゑに、我々にとつても、また、詩學者についてもより重要であらう。

、昭和五年二月二十三日集稿(「愛誦」四月號所載)

詩學的小兒病其他(尖端語(アフオリスメン))

ニイチエ的思惟

我々がより善く生きる道は、我々自身の生活に於ける不斷の叛逆、不斷の革命でなければならぬ。今日の自己は昨日の自己に叛逆し、明日の自己は今日の自己に叛逆する。かくてこの無限の叛逆、無限の革命が、我々を一歩づつ、理想の世界へと近づけて行く。

安住と滿足とは死である。多くの生活と思想とは、その停滯の中に腐敗した。これを大にしては、一國、一民族の文化宗敎團體、文學上の流派より、小は單に一個人の上でも、不斷の革命なく、不斷の叛逆のないところには、何等の進歩もない。これは甚だ平凡な事で、今更云ふに足らぬ事である。が、屢々人に忘られてゐることなのだ。

背後の人

我々の前方を行く人は、常にその背面を見せてゐる。しかも、我々の背面を見るものは、後から來るものである。彼等は我々の背後から一撃をくらはせる事が出來る、我々が先輩に一撃を與へる事が可能であつたやうに。より若い時代に屬するものは、ただそれだけで、我々に立勝つてゐる。後世畏る可しとは、眞に衷心から出た眞理の聲である。

名譽の敗北

本質的に生きんとするものは、挫折する外に途がない。然し、かかる挫折は、必ずしも不名譽ではない。何となれば、それは傳統的な日本人氣質に對する叛逆だからである。

プラナリア

自分で自分を食つてしまふプラナリアといふ蟲がある。まづ、生殖器を食ひ、それから他に及ぼし、わずかに神經系統だけを殘す。最後には、それをもみんな食ひ盡して、つひに影もかたちもなくなつてしまふ。

世にはプラナリアのやうな詩人がある。彼は自分のすべてを食ひ盡して、これを詩に變へてしまふ。彼が詩を殘さなかつたならば、彼は最上のプラナリアであつたらうに。然し、プラナリアは最上の詩人だらうか、それとも最劣の詩人だらうか？

致命の前進

おれの全過去は今遠い昔の風景となつて、頭の中にぼんやり漂つてゐる。それをかへりみる暇があらば、おれはただ一歩でも、前に進みたい。よしその一歩が、深淵への轉落であらうとも。

不敵の希望

おれは人生からいつも最惡のものを期待してゐる。人生はいつもおれを破滅の手前まで押してやる。そして、今一歩といふところで、いつも殘酷に引戻す。人生はいつかはその手をゆるめて、おれを最後のどん底まで突落してくれるだらうか。それ迄はおれは突拔けないのだ。最惡のものに出遭はない間は。

生へのニヒリズム

故高畠素之氏が云つた事がある。ニヒリズムばかりの人間も困り者だが、ニヒリズムのない人間はお話にならぬと。恐らく高畠素之一代の名言であらう。

ニヒリズムは生き且つ働くための彈機である。謂はば、人生を屁とも思はぬ糞落着きの度胸のもとである。腹である。丹田である。思ふに禪家のさとりといふも、畢竟またこれではあるまいか。若しニヒリズムを頭の上に載せたり、鼻の先きにぶらさげたりするものがあらば、それは唯だ虚無への轉落にのみ値する。それこそニヒルの獲物に過ぎない。

詩學的小兒病

詩學よりの出發が說かれる。詩學時代の到來が說かれる。そして、之れに贊じない詩人は、無詩學詩人として葬り去らうとする企圖が目につく。

ボオドレエルにボオドレエルの詩學あり、ヴエルレエヌにヴエルレエヌの詩學あり、西行に西行の詩學あり、芭蕉に芭蕉の詩學あり、ただ彼等は說明解說を欲しなかつたのだ。

外山卯三郎氏が詩學研究に精勵せられるのは、有益なことでもあり、ふさはしい事でもあるが、ヴエレエヌがその「智慧（サアジエス）」の詩を書く代りに、一册の詩學的著作に沒頭するならば、詩史上の不幸これに越すものがあらうか。

詩學を鬼の首でも獲つたやうに振廻すのは、詩人特有の學問恐怖病である。詩學を以て無學の詩人を威嚇するのは、單なる詩學的小兒病にすぎない。我々は詩學に恐怖すべく、餘りに美學の無力を知悉してゐる。

昭和五年二月二十四日集稿（「詩文學」四月號所載）

詩人いろいろ

李白と杜甫

杜甫は李白を推讃してやまなかつた。彼の李白に寄せた多くの詩は、彼の作中の最も眞實な、すぐれたものの中に數へられる。然るに、李白はこれに對して、飯顆山頭逢杜甫、すつかり痩せこけたぢやないか、あんまり詩作に苦勞するからだらうといふ、戲謔の詩を書いたに過ぎない。

かういふところに、この二人の詩人の性格がはつきり現はれてゐて面白い。そして、かういふ點で、自分はそのどちらだらうか。李白は昔から私の愛好の詩人であつた。が、今は杜甫の方が性格的に自分に近いのを知つて來た。私はわが詩友に對しては、常に杜甫でありたいと思ふ。この意味で杜甫たることは、私の喜びだ。今の世に李白があれば、私は終生その嘆美者であるだらう。

山上憶良

萬葉歌人中、最も人氣のあるのは誰であらう。人麿である、赤人である、また家持である。しかし、私は憶良が最も好きだ。若し、これによつて素人の悲しさを暴露しても、それは止むを得ぬ事である。

私は歌も、俳句もわからない。いや、大體、詩がわからないかも知れない。ただ、好きなものを讀むだけであり、好きな事を書くだけである。私は詩人の名を得てゐるが、詩にあつても、一個の素人でありたいと思つてゐる。私に

興味のあるのは、ただ人間だけだ。

憶良は人生詩人だ、道義の詩人だ、思想的詩人だ。その貧窮問答歌に於ては、當時のプロレタリア詩と云ふ事も出來る。人麿は雄大である、赤人は漂渺としてゐる。然し、私は憶良のやうに人生問題に即して行つた詩人を過去にもつ事に喜びを覺えるものだ。

從來、歌壇は最も保守的なところであつた。時代の動きと相關せず、なほ依然として、萬葉の傳統を墨守してゐた。しかも、萬葉といつても、それは憶良の傳統ではなかつた。然し、時勢は移る。今や、その歌壇にすら、マルクス短歌が生れ、プロレタリア歌人が出て、指令が飛び、聲明書が發表される。日本人の形式主義は、茲に再び大なる收穫を見出したのだ。社會主義初期的な單純な概念的な怒號はつまらない。然し、それも今に成長するだらうと思ふ。

パスコリ

伊太利の詩人は多く我國には知られてゐない。レオパルディ、カルドゥッチ、ダンヌンツィヨ、マリネッティ、まづ、そんなものである。それもその詩が讀まれてゐるといふわけではないやうだ。ましてや、パスコリの名など、殆んど誰も知らない。だが、パスコリは伊太利近代の大きい詩人の一人なのだ。

パスコリは内氣な、ひかへめな詩人だ。少年時代より詩作しつつ、三十五歳のときに、やうやく九篇の詩を收めた薄つぺらな小册子を刊行する氣になつた。彼は未完成の詩人だ、あまりに詩に富むがために、既に生れ出たものをかへりみる餘裕がないのだ。彼は未完成の藝術家として、未來の詩人として崇められる。つまり、その藝術は、その後繼者、完成者の手によつて、はじめて完全に實現されるといふのだ。かうした特質には、私は悲しい共感をもたずにゐられない。

パスコリはアナルシストの中にも入つた。然し、當時の伊太利のアナルシストのテロリズムは、彼を驚愕せしめた。四ケ月の拘留は、彼の本質を彼に明らかにした。彼はポムペンのアナルシストではなかつたのだ。トルストイ風の、精神的のアナルシストだつたのだ。義務と法則と强權との代りに、彼は愛をおく。人は裁くべからず、罰すべからず。ただ、愛を喚び起すべし。學校は敎習所ではなくして、一種の敎會である。そして、その最良の僧侶は詩人である、詩人的の人格である。

勿論、今の私の意見はこのパスコリの考へとは少しく異るが、かういふ心持は私の衷にもかなり長いこと續いてゐた。

古田大次郎

古田大次郎氏の遺著「死刑囚の思ひ出」が發禁になつた。殘念な事だ。

「死の懺悔」を讀んで、そのいかにいい詩人であつたかに驚いたが、今度の「死刑囚の思ひ出」を讀んで、ますますこの人を愛せずにゐられなくなつた。

實に朗かな人格、淸純な人格。たしかに、生の詩人であつた。この人の生命は惜しかつた。その遺著の生命もまた惜しい。諸友の努力の空しくなつたのを悲しむ。

詩も人である、思想も人である、主義も人である。人間が無ならば、一生も無だ。詩人とは、詩に生きる人間だ。この死刑囚の遺著は、私にその事をまた深く感ぜしめた。

昭和五年四月二十五日(「愛誦」六月號所載)

明治大正詩人素描

（一九二九——一九三〇）

明治大正詩人概觀

この一篇は、もと新潮社の「現代詩人全集月報」のために、毎月執筆したものを、訂正補足して、能ふ限り公平な詩史槪觀を作らうと期した。が、つひにその所期を果し得なかつたものである。同全集には重要な詩人の洩れた人人も尠くないので、その人々をも出來るだけ補足しようと思ひながら、それもなしえられなかつた。且つ既に同全集の選に入つた人の中にも、筆者の批評眼から是認し得られない人の二三ある事も、玆に斷わつておく。なほ二三回以後、月報上に匿名を用ゐたのは、特に新潮社の依賴によつたので、筆者の希望からでなかつた事をも玆に附記しておく。

昭和五年五月二日

明治初期十二詩人

島崎藤村氏が、『藤村詩集』の序に、「つひに新しき詩歌の時は來りぬ」と書かれた。其後二十年、諸先輩の酬いられる事薄かつた努力も遂に成果を結んで、我等は今豐かな收穫の秋を惠まれたのである。玆に詩界は一期を劃して、更

に新しい詩人の時代は來らうとする。

大正より昭和に入つて、詩はその複雜性と流動性とを獲得し、平板な流麗や、擬古的な典雅を脱却して、直接的な表現によつて、生の核心を抉出し、更にまた社會的な總體性の反映をも示すに至つた。蓋し、異常な飛翔である。詩人雲の如く現れて、詩天は嵐の中に搖動しつゝ、新しい時代を將來せんとしつゝある。此際に、我々の詩界に、最初の礎を置いた人々を回顧して、その功績を知り、その努力のあとを鑑賞するのは、溫故知新の意味から云つても、特別に意義多い事であると思ふ。

湯淺半月の名は、我が明治以降の詩史中に、逸し難い名である。藝術的な詩體に、最初の基礎を置いたのはこの人だからである。『十二の石塚』は、その上に又、日本基督教初期の記念としても忘れ難いものと云はねばならない。

然し、言葉の嚴密な意味での新文學の開拓者は北村透谷である。透谷こそ、新しき詩の祖であり、その最初の受難者である。我等の詩の父とも云ふべき島崎藤村氏も透谷と引離しては考へる事が出來ない。詩人といふ名のもとに考へられる、かの悲劇的な、熱烈な、革命的な人格は、この不幸な未完成の、然し同時に最も眞摯、純情の人であつた人に於て、その無比の代表者を見出し得たのである。まことに藤村氏の云はれたやうに透谷の遺作の中からは、汲めども盡きぬ暗示が見出さるのである。透谷はなほ長く後進の詩人に、多くの感化を及ぼす人であらう。

中西梅花も薄倖の詩人だつた。彼も狂死した詩人であつた。透谷のやうな高い意義は持たないけれども、その俗語を奔放に驅使した作品は、當時に於ける興味多い例外をなすものである。

宮崎湖處子は、一時、日本のワアヅワアスと云はれた詩人、當時の靑年の愛讀措く能はなかつた『歸省』一篇、また無韻の詩であつた。

山田美妙齋は、形式主義者としての日本人の特質を最もよく代表する人で、その詩形に於けるあらゆる試みは、囘

顧の價値がある。現代の超現實派なども、本質的には美妙の精神の繼承者である。

短篇作家として文學史上に動かすべからざる位置を占めてゐる國木田獨步は、作家としても詩人であつたが、その詩に於て、一切の技巧を脫し、純粹の人間の聲を發し得た點で、現代から更にまた新しく見直されなければならない。

武島羽衣、鹽井雨江、大町桂月の三家は、所謂赤門派詩人の三星である。これに對して早稻田派の双星であつたのは、三木天遊、蘖野天來の二家である。これらの諸家は、詩人としてさして特筆すべき意義はないとしても、『抒情詩』の著者の一人であつた太田玉茗と共に、詩道開拓の鍬をとつた人である。

「明治初期詩人集」はこれらの詩人を詩史的に列せしめて、その各個の意義を發揮せしめるのみでなく、別に河井醉茗氏の『詩史概觀』を附載して、詩壇變遷の總體的知識を與へる點で、特別に意義多い一卷であると信ずる。

昭和五年四月日（「現代詩人全集」月報）

透谷と獨步

北村透谷のことを私は斷片的に幾度びか書いた。そして、一貫した北村透谷論を未だ完成するに至らない。茲でもう一度、この痛烈純眞な詩人を敬慕するに當り、風塵の怱忙に憾みなきを得ない。

透谷は何がゆゑに我々に意義があるのか。彼は日本文學史に於ける最初の近代人である。歐羅巴精神の最初の歌ひ手である。日本人は多く一元的調和境に終始する。それは德川期の文人の淺薄な安住に墮する事もあると同時に、たまたま芭蕉の如き深い境地をも現出する。それは無出發である場合もあるが、同時に、また歸着點であり、完成境でもあるのだ。透谷の友島崎藤村氏の芭蕉への味到に、我々はこの自己完成の姿を見る事はないか。

ところが、透谷は未完成の人であつた、途上の人であつた。あまりに早い出發のために、自らのありあまる情熱によつて斃された。その悲劇的運命が、しばしば西歐の浪漫派詩人を想起せしめる。シュテファン・ツワイクの所謂る惡靈（デモン）との戰ひを戰つたのである。そして、かうした詩人は日本文學に殆んど見出されないところだ。

透谷ほど本質的に生きようとした人はない、彼は常に宇宙人生の核心に肉迫しようとした。それは風車に對するドン・キホオテの戰ひであつたかも知れない。然し、彼が決然として唯物主義功利主義に對して抗爭したのは、また壯烈なる時代の記念でなければならぬ。

透谷の詩篇は僅少にすぎず、また、その情思を盛るべき適當の詩形を見出しえずして、空しく出口を求める奔流の如き苦悶を體驗して、完璧の詩篇を殘しえぬ先驅者の悲運を味はつたのである。然し、その瑕瑾少き少數の詩篇は、日本文學に最初の強い悲痛な叫びであつたのだ。劇詩『蓬萊曲』は極めて缺陷の多いものではあるが、しかも我が新詩はじまつて以來唯一の世界觀の劇詩である。蝶の詩三篇に至つては、哀切の調、前になく、後に無數の眞詩人を起たしめるに足る劃時代的の作品で、『髑髏舞』の凄愴なる譚詩（バラッド）と相並んで、透谷の名と共に永く想起せられるものであらうと思ふ。花鳥風月の傳統的詩情は、透谷によつて截斷された。彼に於て我々は最初の世界觀詩人、世界苦の詩人を得たのである。

透谷が全く死後の詩人、ポステュマス・ポエトであつたのに對して、國木田獨歩は長く眞價を認められなかつた末に、つひにその時に會し、その盛名の絶頂で死んだ。その點はより幸福であつたと云はねばならない。獨歩は當時の清新派たる『抒情詩』の著者の一人であるが、その素朴端的なる抒情は、文字の粉飾、技巧の修練を無視して、直ちに胸奧の懷ひを抒べ、眞向に人の胸を衝く。一見、他奇なき詩句の深く心に觸れるものあるは、それが人その儘の聲であるからだ。獨歩吟客は羨むべき無手勝流の詩人と云はねばならない。

新詩草創の三詩人

昭和五年五月二日(「現代詩人全集月報」第十號)

島崎藤村氏——日本の新しい詩は島崎藤村にはじまる。藤村氏こそ我等の詩壇の父である。『若菜集』より『落梅集』まで、四巻の詩集、のち編成されて『藤村詩集』となつて、長く廣く讀まれたもの、この集の如きはない。北村透谷が自ら毀るまでの懊惱と苦悶とを以て、つひに自ら滿足し得なかつた新しい詩形を完成して、これに靑春の奔放なる情熱を盛つたものが、藤村氏の詩である。西行、近松其他の傳統的な我が詩歌の粹を手中にむすびえて、これに歐羅巴の敎養を加味して、玆に流麗なる淸新體を創始して、『おえふ』の情趣、『小諸なる古城のほとり』の幽韻、長く心を去らざらしめる。藤村氏の詩が人を動かすのは、專らその情熱のためである。明治以降詩人多しと雖も、この詩人程の情熱の人はなかつた。しかも氏は自らその情熱を抑へて、フロオベエルの客觀的精神を學び、生活の冷靜な觀察を學んで、長く詩を捨て、散文の世界に入つて了つた。

土井晩翠氏——藤村、晩翠と併稱せられた此の詩人は、日露戰爭を境とする英雄主義、軍國主義の盛時を代表する詩人として、特別の意義をもつてゐる。『天地有情』より『曉鐘』に至つて、當時の靑年の鬱勃たる新興の精神に最も强く投ずる勇壯な格調を示した。諸葛孔明の苦衷を歌つた『星落秋風五丈原』の高調は、彼等の朗吟して最も快としたもの、漢詩の豪宕雄渾な調子は、頗る男性的な響をもつて、藤村氏の女性的な殉情詩と好個の對照をなした。藤村氏が專ら國文學の詩歌の傳統の收穫者であるとすれば、晩翠氏は漢文學の詩歌の傳統の收穫者である。近松や西行の人情味や哀調は藤村に見るべく、唐詩選や李杜の古詩、律詩を訓讀して受ける快感は、晩翠の長大な叙事詩より享受する

事が出來る。朗々誦して、意氣昂らしむるは此の詩人である。

薄田泣菫氏――泣菫、有明と併稱せられるこの詩人は、むしろ藤村、泣菫と併稱すべき點が多い。『暮笛集』『ゆく春』の出發點よりして、その才華燦として輝き、浪漫主義の詩の新境地を示して、藤村の直接の繼位者として立つた。藤村の情熱に代ふるに、感情の複雜性を示し、著しく批評的要素を加味し來つた點で、藤村の次ぎの時代を代表する人は、此の詩人の外にない。一面、社會的關心を示したのも、またその批評的精神の結果である。著しく皮肉な調子を見せてゐるのも、そのためである。ハイネ風の特質が、最初にその片鱗を示したのはこの詩人である。泣菫氏のその後の散文の諸著、『落葉』や『茶話』以下を見るとき、この皮肉な批評的な特質は、一層判然と理解せられるだらう。次いで『二十五絃』を經て、『白羊宮』に至つて、その批評心は語句の彫琢と詩形の典雅な完成とに向ひ、我が詩壇は玆に始めて最も完成した古典主義の詩體を得たのである。然しこれらの優美を極めた短唱と、壯麗の長詩とに、大なる記念標を建てて、泣菫氏も亦その琴を柳の枝にかけ、散文をもつて詩を書く人となつた。

（昭和四年十二月十二日）「現代詩人全集月報」第六號所載

象徵派、人生派の三先達

蒲原有明氏――藤村、泣菫の後を受けて、自然主義の時代に、象徵詩の大旆を高く揭げて、詩壇の王者であつたのは、蒲原有明氏である。日本の象徵詩は氏によつてはじめて確立せられた。日本詩壇でマラルメに相當する人は、正にこの詩人である。句格端正、格調高逸、近代的敏感を佳句に練り、浪漫的情操を象徵に潛めて、雲裡の途を行くことマラルメの如く、その詩を白紙にまで淨化した點もまたマラルメに似てゐる。『春鳥集』出づるや、忽ち、難解の聲、

雲の如くに起つたのも、また當時の狀勢としては無理からぬ事であつた。しかも、氏は更に撓む事なく、一段の精進を以て『有明集』を出して、つひに詩壇のパルナスに君臨するに至つたのである。その思想愈々進み、その研讚益々深まるに至つて、漸次詩作に遠ざかり、內面的要求としては、深遠な佛敎哲學の玄旨に分け入り、表現上の要求の極まるところ、つひに日本語の言語學的研究に沒頭するに至つたのは、その當初の出發から考へても、その傾向の必然的の發展として、極めて自然であると同時に、また極めて意味深き事であると思ふ。三木露風氏の加特力信仰は幾分直譯的臭味がなくもないが、有明氏の木乘佛敎への沈潛には、我々にとつては、日本の象徵詩人の歸着點として一層の信賴と敬意とを抱かせるのである。

岩野泡鳴氏——蒲原氏の象徵詩に對して、別に表象詩を標榜したのは岩野泡鳴氏である。氏出でてはじめて一家の思想を把持した獨創的詩人を我々は得たのだ。然かも、久しく眞價を認められる事なく、現在なほ十分相當の評價を得てゐない事この詩人の如きはない。先づ、神祕的半獸主義を唱へ、新自然主義の異を樹て、日本主義を主張したこの表徵詩人は(氏はサンボリスムを象徵主義と譯せず、表徵主義と譯して、自己を他と區分した)その刹那主義の實感を、心熱を歌ひ、獸性の中の神性を歌つた。『闇の盃盤』は明治の詩集中、特別の地位を占むるに足る獨創的な作品である。氏の自然主義的表象詩たるや、直ちに高揚せられた人生詩である。氏の作品は、獨創人の粗毫と放漫とを示すため、また無理な言葉遣ひを憚らぬがため、屢々、荒削りの未成品の如き觀を與へ、重大の缺陷の如く指摘せられるが、この缺陷の中に、同時にこの詩人獨特の個性的表白と、その魅力ある事を知らねばならぬ。劇詩『海堡技師』の如き、透谷の『蓬萊曲』以外唯一の意味ある劇詩であり、韻律の科學的研究に於て、福士幸次郞、川路柳虹二氏の先蹤となつた點も記憶せられねばならぬ。

野口米次郞氏——詩人としての野口氏は我が日本語の詩界に於るユニイクな存在である。氏が英詩人ヨネ・ノグチと

して英米に知られたのは相當に古いが、日本詩人としての閲歴は比較的新しい。その點からは、蒲原、岩野二氏と併立せしめるは妥當でないかも知れない。が、氏の業績を全體的に見る時は、直ちにこれを至當としなければならぬであらう。殊に、日本詩人としての氏は岩野氏とは非常に密接な關係のもとにある。氏が人生詩に對して表徵詩の名目を立てた如き、單にその用語例を岩野氏と共有するのみに止まらぬのである。二重國籍者としての氏の地位たるやユニイクであるが、思想詩人として見ても、多くの年少詩人に見出し難き大きさと、貫目とを有してゐる。氏の弱點は、日本語の語感に足らざるところあり、日本語のリズム感に乏しく、あのインコンシュアブルな、不可測の生きた言語の妙味を缺くところにある。こゝに二重國籍者の悲哀がある。然しこの點を除けば、まことに、多幸なる兩世界の詩人である。

（五月二日）

文庫派三詩人

河井醉茗氏――文庫派は、所謂文庫調なる一詩風を創始した功績の外に、又、多くの靑年詩人を育成した功績をもつてゐる。その文庫派の代表的詩人が河井醉茗氏である。自然詩人として、無比の境地を示してゐた。が、同輩の詩人みな沈默した後、ひとり詩の愛愈々強くして、精進またさかんなる後半期に至つて、前半期に見出せなかつた靑年のやうな力を示して來た。驚くべき情熱の力をさへ示した。故岩野泡鳴氏を除いて、大正の新詩人中に介在した唯一の詩人として、その詩人的閲歴の長きことに於てその右に出る人のないこの詩人は、中年後の詩人の枯淡超脫の美を最もよく表現すると共に、老いざる詩人の第二の春を以て我々を今も悅ばしめてゐる。

横瀬夜雨氏——筑波根の病詩人として、その哀調を以て當年の青年子女を熱狂せしめたものは夜雨氏である。常人以上の活動力、意志力が傷ついた弱小の肉體に宿つてゐる一例である。この猛烈な活動力が、青年時代情熱の詩篇として現れたのだ。その素朴にして眞卒な聲、切實な叫びは、今なほ清新な響をもつて人に迫る。蓋し、趣味の變化と共に滅びる文字の粉飾でないからである。『やれだいこ』『野に山ありき』の沈痛な實感は、色褪せる日はないであらう。夜雨氏は純抒情詩人である。が、一面また民謠詩人の先蹤としても大なる意義をもつてゐる。『お才』はその代表的作品である。

伊良子清白氏——この謙虚な詩人はまことに稀らしい運命を辿つた。おそらく日夏耿之介氏の『明治大正詩史』中の評價などが、機緣となつたのであらうと思ふが、長く埋れてゐて、俄かに掘り出されめざましく復活した事この詩人の如きはない。清白氏が『孔雀船』一卷を殘して地方に去つてから、二十五年位になるであらう。今や、詩人は日夕詩筆に親しみつゝあるといふ。その新詩篇こそ見たいものである。清白氏の詩境は、全く獨自のものである。清透なる事水晶の如く、その世界は廣からねど氣韻高く、象徵的な匂ひさへも感ぜられる。今度は河井醉茗氏の苦心によつて、散逸した舊作を聚集され、我々は玆に初めて詩人伊良子清白の全貌を窺ふ事が出來る。

昭和四年十月十一日(「現代詩人全集月報」第四號所載)

白秋、露風、柳虹三氏

明治、大正、昭和の三代を通じて、最も豐饒なる詩人は、云ふまでもなく北原白秋氏である。氏が悠然と詩界のパルナスに君臨してより、旣に年久しい。また一代の詩豪、大正、昭和の詩人の連峯中の最高峯、『邪宗門』『思ひ出』よ

り『篁』『月と胡桃』に至る迄、何と驚くべき變幻自在の風景であらう。

古來、我國のいかなる詩人も、北原氏の如く、日本語を自由自在に驅使し得たものはない。日本語を貧弱な國語と蔑視する人も、一度び『北原白秋集』を讀過し去れば、その見解を撤回せざるを得ぬであらう。古語、新語、雅言、俗言、一度び白秋の手に觸れるや否や、燦然たる寶玉となつて落つ。あだかも五彩の蝶が、その觸れるものに、金泥を捺するに似たり。その點、白秋氏は古今獨歩の詩人である。

近時、語脈亂れ、語氣荒れて、日本語の幽美な語感を體得する事なく、日本語の妙（たへ）なる韻律感を把握する事なくして、詩を作論する人尠しとしない。思想高邁の詩人と雖も、此點に缺くるところあらば、不具の詩人たるを免かれない。散文化して、弛緩せるリズムに惱むもの、白秋の靈泉に浴するとき、その睡氣を去つて、はじめて日本語の詩の正格を知るであらう。

白秋氏こそ、最も完全な體格を有する健康の詩である。いはば爛熟せる濃艷の美女の如くである。彼女は黒繻子の襟に、意氣な下町情調をうつし、粋な爪彈きにその心意氣を聞かせもする。長崎の出島の館に、紅毛人の宴樂に列して、チンタの酒をくみ、異國情調に陶醉しもする。しかもこの美女は、忽ち十歳の童兒となつて、草上に嬉戯し、つひにまた枯淡の道人となつて、竹林の閑居に、いささむら竹の風の戰ぎに、幽かな古日本の無絃琴を奏でもする。

まことに、白秋氏の驅使しなかつた詩形はない。白秋氏の踏込まなかつた詩の分野はない。白秋氏の冒さなかつた嶮險の道はない。その長歌は萬葉の古調を新語に生かし、その短章、微韻は、隆達、芭蕉の情と寂（さび）とを甦（かへ）す。童謡は天眞、その愛兒と同化し、民謠はいかなる卑俗の語意を捉へても、曾て下品に墮した事がない。童心無比の詩人、氣稟第一の人、その象徴詩は、今や幽玄の心境詩となつて、その琢磨せられた境涯、凊高の氣韻、また摸すべくもない。

昔日、自分は氏の感覺と語彙に畏伏しつつも、その靈魂の詩人たる事に缺くるなきかを疑つた。今日既に、その疑惑、霧散して痕なし。人妻ゆゑの輪廻の詩は、自分の胸を打つ事あまりにも切なるものがあるからである。我等は甘んじて「大白秋」をその楯に載せて、これを擔いで敢て悔いなきを思ふものである。

北原白秋氏と併稱され來つた三木露風氏は、早熟の詩人、少壯名を成した事氏の如きは稀れだ。二十歳にして、鬱然たる大家であつた。三田文學に毎號詩作を發表した時代の華々しさは、今日人の想像の及ばぬところであらう。『廢園』『寂しき曙』の時代に、氏は既にその天分の絶頂に立つてゐた。

蒲原有明氏の開拓せる象徴詩を大成したのは、氏の功績である。象徴詩人の歸結は、宗教詩人の外にない。蒲原氏が佛教の玄旨に分け入つたのに對して、三木氏がトラピスト修道院に隱れて、カトリック詩人として今日に及んだのは、意味ある對照であると思ふ。

自分は氏の早期の抒情詩を最も愛するものであるが、轉心後の氏の宗教詩に、中世的美感をも、併せ味はふものである。

川路柳虹氏は畫人であつた。自分は二十年近くの以前に、氏の書齋で見た裸女像の習作を今なほ記憶してゐる。この出身は、氏の詩集に著しくその痕跡を印してゐる。然し、氏の詩畫たるや、油繪ではなくして、水彩畫、時にパステル畫のやうに思はれる。エッチングはあまり見た事がないやうに思ふ。

川路氏が最も早く口語詩の試作を發表した事は、既に周知の事實である。この敏感な魂は、近く新律格を提唱し、今またシネ・ポエムを唱へる。そして、その都度、自らこれが試作を發表する事を怠らない。『かなたの空』『路傍の花』よりシネ・ポエムまで、氏の道も長かつた。詩がこの全集で、白秋、露風の二家と鼎座する事も、理由ある事である。しかも氏は永久に新しい企圖をもつて進む詩人である。次で氏は、我等に何を敎へるであらうか。詩人中最も堅實な

氏は理智と考察の人、『歩む人』なる詩集の題名は、最もよく氏の素質を示すものであらう。室生犀星氏の如き、飛躍と直感の人に對して、氏は理論家として、氏は善き詩の指導者である。

昭和四年七月一日（「現代詩人全集月報」第一號所載）

詩人山村暮鳥

いつの時代でも、一つの黨派を率ゐ、一つの運動を指導する華かな詩人があると同時に、中央の詩人のグルウプから離れて、自分一人の寂しい、然し內面的に落着きをもつた靜かな生活の中から歌ふ詩人がある。かのメリケやジヤンムの如き、その後者に屬する詩人である。我が山村暮鳥もまたさうした種類の詩人であつた。そこに特別に我々を惹きつける純粹さがある。

山村暮鳥は廣い意味で、宗敎詩人と云ふ事が出來る。早くクリスティアンとなり、神學校に學び、また牧師ともなつたのは、牧師詩人のメリケやカトリック詩人ジヤンムと似てゐる。我國の宗敎詩人と云へば、直ちに三木露風氏を想起する。氏は特異なカトリック詩人であるが、どちらかといふと、氏は神の嚴めしい言葉を仲介する僧侶のおもむきがある。これに反して山村暮鳥は生活の詩人である。人間の寂しい謙虛な生活の中から、おのづからにじみ出してくる深い宗敎的感情が、或る感動を喚び起す。

殊に、その晚年の家常茶飯詩は、我が大正期の詩史中に特筆せらるべき意義ある作品であると思ふ。殆んど何等文字の粉飾や、技巧のない簡素な表現の中に盛られた、純日本的な生活詩は、極めてヒュウメンなものであり、又、その諦念の美しさによつて、しみじみと心を動かすものが多い。妻子に對する感情の表白の如き、實に人間的で深い。こ

の詩人がドストエフスキイに傾倒したのは意味ある事だと思ふ。暮鳥を宗教詩人と呼ぶのは、さうした意味からだ。然し、ドストエフスキイ的な、神魔相搏つ二元的な深刻な心的葛籐の體驗は見えない。むしろ、芭蕉の寂びに傾き、日本人的な一元的な調和境を示してゐる。暮鳥は日本の土から生れた。土に足を着けた詩人だと思ふ。やや弱々しいところはあるが、純粋な詩人だと思ふ。

昭和四年八月七日(「現代詩人全集月報」第二號所載)

石川啄木、三富朽葉二氏についての批評は書く機會を與へられざりしも、わが感想中に屢々說くところあり、ついて見られたし。

三　詩人覺え書き

高村光太郎氏——石川啄木に、天才と呼ばれてゐる人に會つたら大きな手をしてゐたといふ歌があつた。高村氏の手はその世界のシンボルである。人生の彫刻家。力あつて、粗笨に流れず、纎細にして羸弱でない。白秋、露風と併稱されたのは、旣に昔。今、白秋氏に對立する高峯は、ひとり高村光太郎氏あるのみ。「道程」刊行後二十年、未だ一册の詩集も刊行されない。詩人としての高村氏の偉大を、今日以後、人ははじめて知り得るであらう。

×

室生犀星氏——室生氏については、自分はいくら云つても云ひ盡せないものをもつ。人として、詩人として。室生氏に常に死身だ。拔身をひつさげて、人生と渡り合ふ。その感覺の冴えに、意識下の世界の深さを見よ。金澤は俳人北枝の故鄕。このジヤズとはやり小唄の時代に、敢然として明窓淨几の文人好みを死守する『魚眠洞發句集』の著者

は、古俳人の凛々たる意氣を示す。「鶴」が落寞たる詩界を天魔の如く蒼白の翼もて蔽うたのもまた肯なるかな。

×

萩原朔太郎氏――何といふ獨創的な、魔法づかひであらう。こんな不思議な世界をもつた詩人を同時代者にもちえたこと、しかも、出發當時對蹠的に思うた詩人を、今や善き友として手をとりえたこと、それは自分には深い驚きだ。『月に吠える』『靑猫』は大正の詩界に燦然たる光を放つ眞に天才的な詩集である。然し、『新しき欲情』より出發し、『詩の原理』『虛妄の正義』に及ぶ新しい散文の開展は、詩人として百尺竿頭一歩を進めた一大飛躍。今日の萩原氏は、昔日の自己を裏返して、その知られざる半面を我等に見せるものである。そして、ここに一人の詩人哲學者を我等は見る。半哲學者の稱呼は、我等にとつて謙遜な誇りである。今日、自分は孤高ニイチエの地帶を踏むわが詩友萩原朔太郎の勇ましい冒險を祝福する。

この三詩人は自分の最も尊重してゐる詩人である。この限られた紙數では、奈何ともする能はず。よつて、單なる覺書にとどめた。

昭和四年九月十二日（「現代詩人全集月報」第三號所載）

福士幸次郎其他

（千家元麿、佐藤惣之助、福士幸次郎三氏）

千家元麿氏――「白樺」の出した最大の詩人である。白樺派の頭目である武者小路實篤氏もすぐれた詩人であり、自ら詩集の著もあるけれど、氏の詩は詩の形よりも散文の形でより多く現はれてゐるから、純粹の詩人としては、白樺

派は千家氏に於いてその好個の代表者を見出したと云ふべきである。

千家氏の「自分は見た」は、從來言葉に左右され、言葉の奴隷になり勝の詩を、言葉から解放した。純粹內容によつてのみ、直ちに讀者の胸奧を衝く。その單純な、直線的な、卒直な表白は、天眞なる事小兒の如く、あらゆる技巧上のマヤカシなくして、端的に人生の眞實を歌ふ。武者小路氏が小說に於いてなしたところを、規模は小さくとも詩に於いてなしたところに、千家氏の獨自の意義がある。人道主義の詩人として、千家氏の功績は强く輝いてゐる。また輝くであらう。

佐藤惣之助氏――この詩人ほど變幻自在の詩人はない。あだかもギリシア神話のプロテウスに似てゐる。その出現當時から、その詩風は幾變遷した。『正義の兜』『狂へる歌』(その一つは六號活字二段組でぎつしりつめて、六百枚の量をもつて現れた)より、『トランシット』に至る迄。千家氏が始終一貫、人道主義の一路を進んだのに對して、佐藤氏がその潑剌たる感覺と、繪畫的才能を驅使して、新奇に新奇を重ね、常に時代の尖端を行つたのは、好個の對照である。佐藤氏は豐富な語彙と、多彩な形式の詩人である。內部から人間を歌ふ詩人ではなくして、世界の表皮の爛漫たる開花を、手に任せて摘み取り摘み來つて、その詩華の花籠を充たすのに倦む事がない。琉球に遊んでは、土產としてユニイクな『琉球風物詩集』を齎らし、滿洲からも、日本內地の各地からも、いつも變つた言葉の土產を齎らす。自然を科學的な新しい眼で見ようとしながらも、底に俳人風の雅致をひそめてゐる點で、珍らしい詩人と云はねばならぬ。

福士幸次郎氏――自由詩の興ると同時に、その巨軀を動かして、新人の先頭に立つたのは福士幸次郎氏である。氏の作品は、量としては甚だ尠い。が、質から云へば、大正の詩人中最上席の一つを占むるに足るのである。『太陽の子』は萩原朔太郎氏の『月に吠える』が驚異であつたのと違つた意味で、一つの驚異であつた。『月に吠える』が天才的な新し

い創造であるとすれば、『太陽の子』は一つの顯著な性格の時代に呼びかける聲として、消し難い意義をもつた。福士氏の步いた道は、思想的にも、多くの意味があり、多くの事を暗示する。その最後の階程が、傳統主義、地方主義の主張である。又、韻律の研究にも多くの發見と創見を示した。が、詩人としての福士氏は、その僅少な詩篇に於いて、最も輝いてゐる。云はば强い性格の星の發する强い光と云つてよい。

昭和四年十一月七日(「現代詩人全集月報」第五號所載)

早稻田の三詩人

(日夏耿之介、西條八十、加藤介春三氏)

日夏耿之介氏――傲岸一世を睥睨し、同時代者をすべて群小詩人として蔑視し、自ら高く標榜する痛快なる高踏詩人である。その思想にも、趣味にも、態度にも、中世紀の講學僧と云つた趣がある。純眞謙虛な信者の聲を有たないから、特に宗教詩人と見做す事は出來ないにしても、その加特力的情感を託した詩には、三木露風氏とは又異つた莊嚴な味ひがある。謂ふところのゴティック・ロマン詩體の創始者として、前に日夏なく、後にもまた耿之介無かるべき、全く特異卓立の詩人と云はねばならぬ。好んで難解の漢語をつらねて、句々、古代的語感の金玉を積み、尖角鋭端の字々、累々として、蒼古奇聳の趣致を出す。この特色に加ふるに、矜驕苛竦の質を以てし、久しく民衆派と係爭して、この民主々義の時代に、象牙の高塔、更に高く築かうとする意圖を示しつつあるは、また壯としなければならぬ。『轉身の頌』『黑衣聖母』の大卷を出し、のち自ら定本詩集を編む。その『明治大正詩史』の明治期の卓拔、大正期の暴烈、詩壇を震撼した事は、世人の耳目になほ新たなるところである。

西條八十氏——日夏氏とは全く相反する道を進んでゐる詩人。纖細鮮麗な象徵詩人として出發しその精練された『砂金』一卷に於て、既に詩人としての最高頂を示し得た。その詩の感觸は蠟人形の如く冷艶に、白孔雀の如く端麗である。典型的の都會詩人として、近代資本主義治下の頽唐詩人の美と、香氣と自己陶醉とをつたへ、その作るところ頗る尠少であるに拘はらず、氷菓淸爽、糖菓玲瓏、巧みに理智と感覺とを統べて、その融通自在の才氣は正に類を絕してゐる。童謠、小曲、少女詩に人氣を博し、更に銀座節、東京行進曲等の流行歌、ジヤズ・ソングに、驚くべきポピュラリティを得た。然して、その道を益々勇敢に進まうとしてゐる。その點で、この詩人は藤原義江、鈴木傳明等の人々と相伍し得る時代の英雄であり、狹小な詩人の觀念を轉置し、擴大したその時代的意義は、頗る大なるものがある。

加藤介春氏——早稻田詩社、自由詩社の昔より、實感に卽し、眞實に根ざして、人生詩の一路を辿つたのはこの詩人である。その意味で、自然主義の發生地たる早稻田に於て、日夏、西條二氏が寧ろ鬼子であるのに對して、加藤介春氏は正に正系の人であり、早稻田の生んだ最大の詩人と呼んでも敢て不當ではなからう。悲痛なる戀愛事件より生れたる處女詩集『獄中哀歌』は、この詩人の眞率にして熾烈なる美質を、早くも發露せしめたが、氏の精進は今日に至つて、更に見るべきものが多い。しかも長く九州の一端にあつて、中央詩壇と絕緣せるがため、久しくその眞價を認められるに至らなかつたが、今や、この正道の詩人の眞價を顯揚し、その隱忍刻苦の詩生活の成果、世に布くべき日は來つた。加藤氏は、新らたに見直されなければならぬ好詩人の一人である。

昭和五年一月十日(「現代詩人全集月報」第七號所載)

民衆、民謠の三詩人

（福田正夫、白鳥省吾、野口雨情三氏）

福田正夫氏――『農民の言葉』を出して、民衆派の名を以て呼ばれる詩派の先頭に立つた詩人で、白鳥省吾氏と屢々倂稱せられるが、福田氏は白鳥氏の有しない多くの要素を有ち、民衆派の概念の與へるよりも、もつと廣い詩境の中にゐる。より多くの才能と、より自由な融通性と、より柔軟な感受性とを有つてゐる。その性格の必然的發現と思はれる稚醇な飄逸は、その野性的な情熱、並びに多分の感傷主義と相俟つて、その作品にロマンティックな色彩と、或る甘味とを賦與して、所謂民衆詩の乾燥無味を脫却して、玆に一家の風格をもつた愛すべき詩人をつくり上げてゐる。その情熱の叫びの中に自然のユウモアあり、その民主々義の蔭に多分のニヒリスティックな氣分を示す。樂天的なニヒリストであり、民主的なロマンティシストである。白鳥氏よりもより愛嬌あり、魅力ある詩人で、且つ、より新しい詩の領域に進展する餘力をも現してゐる。數年前より長篇叙事詩を續々出して、映畫化せられたものも多く、靑春の子女にもてはやされたが、今や散文小說にも力を注いでゐる。

白鳥省吾氏――民衆詩の理論家であり、指導者であり、鬪將であり、また、その最後の一兵卒でもある。詩人として、終始一貫、民衆詩の主張と試作とに殉じたのは感心すべき事で、此點、確かに操守の人と云はねばならない。才能よりも努力の人で、その詩は農民の一年の耕作の勞苦と、收穫の喜びとを倂せ示すものである。氏の民衆詩は槪念詩と、寫生詩若くは見聞詩との二つの種類から成る。此種の詩體を樹立した功は著しいが、プロレタリア詩の勃興するに及んで、その使命は畢り、今や、民謠作家として、龍峽小唄其他の地方小唄に、その才能を傾注してゐる。民衆

詩の當然の發展として有終の美をなすものと云ふべきであらう。詩論に於ける倦む事なき反覆力・他流派への激烈な挑戰力、論戰に於ける執拗な持續力はその最大特色で、日夏耿之介氏との累年の抗爭は、詩壇の一奇觀であつた。

野口雨情氏 —— 野口氏の閲歴は古い、極めて古い。明治三十年代に、既にその最初の民謠詩を發表してゐる。當時から現在まで、民謠の一路を步いて、未だ倦むところを知らない。白鳥氏の民衆詩への執心よりも、更に一段の操守と云はねばならない。普通民謠と呼ばれてゐるが、正確に云へば、民謠調、若くは民謠詩と云ふべきこの詩體に於て、北原白秋氏を除けば、雨情氏の熟練に比肩し得る人はない。文學としては白秋氏がまさり、歌曲としては雨情氏がまさる。民謠の調子を氏の如く把握した人はめづらしい。白秋氏の洗煉された藝術味の代りに、氏は單純素朴な民謠氣分をもつてゐる。作曲せられて、歌はれるとき、氏の作品が俄然その價値を高めるのは一にそのためである。所謂民謠を代表する明治大正期の唯一の詩人であると云つてもいゝ。

昭和五年二月十四日(「現代詩人全集月報」第八號所載)

加藤介春氏の遠望

私が逢ふ機會なくしてなくなつた同時代の詩人に、三富朽葉、山村暮鳥などの人がある。未だ生を同じうしながら、相見るを得ない人に、加藤介春氏がある。加藤氏は早稻田詩社、自由詩社同人として、私達にとつては、詩壇の先輩でありながら、明治四十三年に、既に東京を去つて、福岡へ歸つた。それから四十五年に、そこで一つの大きな事件に遭つて、それを動機に、再び詩に歸つたといふ。從つて、氏はその後の中央の詩壇とは深い交渉もなく、心のままに詩作しつつ今日に及んだ。故山村暮鳥などとおなじく、その點で稀れなる詩人の一人である。

けれども、そのために、私達は氏の個人的な氣質、その人間としてのプロフィールを知る事が出來ない。わづかに自由詩社同人であつた福士幸次郎氏などから、そのひととなりを聞き得たのみである。

けれども、大正三年に出た『獄中哀歌』以來、加藤介春氏は、私には好もしい詩人であつた。心を惹かれる詩人であつた。私は氏の面影を作品の上で捕捉しては、自分の愛する一人の詩人の遠望を恣まにしてゐたのだ。私は加藤氏の私生活を知らない、閲歴をも知らない。また、知らうとも思はない。が、『獄中哀歌』に現れた詩人の體驗と、それを生かした誠實とには、敬意を表せずにゐられないし、又詩人としての共感を覺えずにゐられないのだ。福士君はいつであつたか、實感の語を好んで用ゐ、これを重んずる點で、萩原朔太郎君と加藤介春氏とは似てゐると云ふ事を云つた。私自身も亦、實感の尊重に終始した。或はそこに、私の加藤氏への親近の感情の根源があるのかも知れない。

萩原朔太郎君はその天分とその人柄とが、私には最もたふとくまた、なつかしい人で、誤解されやすい私を理解してくれる善き友人である事を除いても、思想的に最も近い人として惹かれるのであるが、加藤氏に惹き付けられるのは、これに反して、專らその詩の眞實性のためである。氏の詩は光彩ある詩ではない、むしろ灰色の詩だ、燦爛たる才能の閃きは見えぬ。然し、それは人生の詩だ、誠實に人生に當面した人の詩だ。『獄中哀歌』にしても、『女の歌』にしても、自然主義の弱點と共にその長所をもつ。詩に於ける自然主義は、詩のこの一卷に最もよく代表されてゐると思ふ。その後の氏の詩風は大分變りもし、新しい境地をも拓かれたやうだが、その根本の特質、私の好きな本質は變らないと思ふ。誠實な詩人、人生の詩人だと思ふ。人の一生にはいろいろの事件が起つてくる、思はぬ苦痛や激動の中に輾轉する事もあるであらう。だが、その時本當の詩人がめざめるのだ、生の核心に觸れて、その內奧の聲を發し得るのだ。

私は未だ見ぬ加藤介春氏の面影を望見して、何となく心强さを覺えるのだ。九州の果てなる善き詩人を遠望しつつ。

昭和五年二月十四日（「現代詩人全集月報」第八號所載）

民主派と象徴派の出發者

百田宗治氏――同時代詩人中、絶えず轉身し、絶えず若く、より若く、詩界のトップを切つてゐる潑剌たる詩人は、百田宗治氏である。その過去に執せず、過去の功績を一蹴して、常に新しき未來に向つて前進しつつあるは、爽快の感を與へずには措かない。百田氏は所謂民衆派より出た。そして、衆にさきんじてこれを淸算して、いちはやく民主詩派の功罪を論じた。氏が自ら民衆派と云はず、民主派と稱するは、蓋し、所謂民衆詩の低俗な旣成概念にあきたらぬが故であらう。氏の民主詩は、ヴェルアーランに負ふところ多く、そこに自から普通のデモクラットと異る特質が示され、後年の轉向を理由づけるのである。『何もない庭』『冬花帖』に至つて、氏は東洋的閑寂と諦觀の世界に移つた。玆に內觀的深さを試練し、更に一轉して、ヴレリイの純粹知性、純粹ポエジイの道に辿りつき、シュウル・レアリズムへの近接を示すと同時に、詩を散文で書けと主張して、自由詩論に一つの解決を下し、自ら主知的の散文と稱する新樣の詩風を與した。今後氏は更に更に新しい世界に進轉するであらう。氏は永久の新人である。

富田碎花氏――富田氏は百田氏同樣、民主詩人の雄である。然かも、その派の事實上の指導者である加藤一夫氏に次ぐ先進者である。そして、後年の同派の歪曲に遠ざかり、所謂民衆詩派の偏狹を俱にせず、その純粹と自由をのみ保持した。氏がホイットマンと同時にカアペンタアを飜譯紹介したのは、その民主々義へのより深い翹望を想見せしめる一證左である。卽ち、氏の譯出したカアペンタアの『民主々義の方へ』は、カアペンタアの友人石川三四郞氏の說かるる如く、俗惡なるデモクラシイ思想の註解ではなくして、地に卽する土民生活の讚歌であり、廣大なる宇宙觀を披瀝した深邃なアナキストの語錄だからである。『地の子』の詩人のヴァライエティはこの出發の結果であらうと思

ふ。詩壇的に威を張るを好まなかつたから、比較的閑却されてはゐたが、事實は民主派のより深い代表者である。詩人としての誠實と多感性とを以てして、概念詩、寫生詩以外に民主詩あるを知らしめる詩人である。

柳澤健氏——民主詩人と對立して、明朗瀟洒、佛人の面影を存し、頗る貴族的、高踏的態度を示すのは柳澤健氏である。三木露風氏の一派に屬し、象徵詩派の理論家としても多くの仕事をした。大觀して、象徵詩人と稱すべき人であらう。處女詩集『果樹園』にこの特質は最もよく示されてゐる。然かも、氏は人生を享樂するの人、生活の快適を歌ふ事を最も愛する。『海港』は最もよくこれを示す。かうした點で、氏は西條八十氏に最も近接した詩人である。

昭和五年五月二日（「現代詩人全集月報」第十號）

正富汪洋氏に寄す

——正富氏を論ずるに代ふ——

毒ある蛇は人恐るれど
また踏まれ、打たるることあり。
君はしづかにひとり生きて
巷のそとに、詩をば思ふ。
抑へられ、抑へられても、
心善き人、何の幸ぞ、
魂を汚さるるなし。

「庭の靑」に涙そそぎて
「詩神を焼いて」君立つとき、
君が五十年、また徒爾ならじ。
詩匠ありて人を傷つけ、
おのれを汚す名聞地獄。
心汚さず、眸若く、
詩を愛する人、君幸あれ。

昭和五年四月二十二日(「新進詩人」より正富氏についての感想を求められて)

大正年間の詩と詩人とに就て

一 詩人の回想錄

×

大正十五年間の我が新しき詩の變遷を回顧すべき時が來た。その初頭の事柄は、既に幾分か時代がついて、これを偲ぶといふ心持も起るが、その末尾の事は、未だ生々しい昨日の事實である。從つて、未だそれについて語るべき適當な時期ではないかも知れないといふ氣もする。今や、明治文學は、既に古典として研究され、考證されてゐるが、それは必ずしも不當ではあるまい。が、大正の文學すら既に古典の取扱を受けはじめたのに至つては、多少性急の感もし

ないでない。各の作家なり作品なりの價値問題について、物議をかもしてゐるのも、また止むを得ぬところであらう。ところで、これが詩となると、正當な批評、評價といふものが殆んどなく、現在のところでは、好んで詩論を鬪はし、聲を大にして怒號するものほど、すぐれた詩人と見なされると云ふ奇異なる現象を呈してゐる位なものであるから、その一般的評價の決定は、愈々もつて前途遼遠であらう。私たちは泡立つ水の濁りの澄む時期を待たねばならぬであらう。

もとより從來も、詞華集や、詩史といふやうなものも無いではないが、妥當なものはむしろ尠い。殊に、或る團體の名を冠して、二三の人々で編せられた或るアンソロジイの如き、その編纂の全體の上に漲つてゐる私情と黨派的偏頗とのために、當時いろいろの非難が生じたものであるが、（日夏耿之介氏が當時私に寄せられた私信にも、その點を難ぜられてゐた）殊に、その附錄の詩壇年表といふものなどは、その不公正に於いて、驚くべきもので、その派に屬する詩人ならば、二三枚の小論の題目をも悉く擧げながら、他派の人々の活動は、殆んど無視閑却してゐるなど、私などから見ても、合點の行かない點が多い。今後、詞華集を編み、詩史を編する詩人には、あらかじめ注意しておきたいが、一黨一派の爲めにする事なく、出來るだけ公平無私にやつて貰ひたい、狹小な私感情によつて、或る人々のものは强ひて駄作を選ぶといふやうな、編者自身の詩人的天稟と鑑識眼とを疑はせる、詩人としての自殺的行爲に墮するの愚をばなさざらん事を望む。

大正の詩は、明治の詩の引繼きである。して、その明治の詩は、明治元年に生れた北村透谷に起つて、明治四十五年に逝いた石川啄木に終つた。かう私は見たいと思ふ。もとより外山博士等の『新體詩抄』などの功績を沒せんとするのではないが、すべてを內面的の必然性から判斷しようとする平常の見解からして、私は單なる形式上の試みよりも、詩人の內生命の發現を重んずるからである。透谷は生れたる詩人として、その詩心を表現せんがために、それに

透谷の意義は、その悲劇的な未完成に存する。彼はパイオニイヤアでもあれば、マアタアでもあつた。そして、その遺業を繼いで、これを完成に導いたのが、島崎藤村氏である。藤村氏に於いて新しい詩は、その「曙」を見たと云ふよりは、むしろその「正午」を見たのだと私は信じてゐる。この透谷對藤村といふ文學的關係は、私の最も意味深く思ふところである。(これらについては、別に「北村透谷研究」に詳說する。)

ところで、明治末に至つて、上田敏氏、蒲原有明氏、岩野泡鳴氏等の先唱によつて、象徵詩派が興り、更に自然主義運動の一支流として(かう私は觀察する)口語詩運動が興り、この二流が合して自由詩運動となつた。そして、藤村氏の完成せられた詩形は玆に打破されて、詩壇はしばらくそれに替るものを有たなかつた。かくて、詩人は再び透谷の苦を苦しまねばならなくなつた。そして、まづ、それに殉じたものが、石川啄木である。『呼子と口笛』八篇は、その苦鬪の記念でもあり、その努力の成果でもあつた。その中、『はてしなき議論の後』の如き、革命思想を歌つたものとして、無產派文學者の重んずるところであるが、私はそれよりも『家』の一篇を愛重する。この作の後、民衆詩人などが、散文の行を切つて、これを自由詩と稱し、定形律の詩を『抒情詩』として非難し續けて來たのは、むしろ皮肉な現象ではあるまいか。然し、啄木が眞に詩形上の透谷的意義を示すのは、その僅少の詩よりも、短歌の方面に於いてであつた事は云ふ迄もない。

明治の詩が透谷に始まり、啄木に終つたとすれば、大正の詩は誰れに始まり、誰れに終つたか。そこでは最早や個人を以て劃する事は出來ない。若し謂ひ得べくんば、永井荷風氏の『珊瑚集』にはじまり、詩話會の解散に終つた(詩壇的外面尊重に從つて)とも云はうか。上田敏氏の『海潮音』は、藤村以後の新詩を培うた土壤であつたが、荷風氏の『珊瑚集』はそれ以後の開花のための新しい土壤であつた。また一方、外形尊重主義から云へば、自由詩運動にはじま

り、川路柳虹氏の內容律否定、新律格提唱に終つたとも見てもよからう。然らば、この十五年間は、自由詩の完全なる敗北の歷史ではないか。然し、私にとつては、さうした詩の形態學はどうでもいい、この十五年間に、私たちを感動せしめるいかなる詩が生れたかが、第一の、そして唯一の問題である。

×

大正年間を完全に詩に終始した詩人の一人として、私は少しく自分の個人的な回顧をしてみたい。これは勿論我儘勝手な事であるが、私などのゐた方面の事が、從來の詩史に全然的に無視されてゐたから、多少その缺陷を補ひたいからでもある。まづ、順序として、明治より大正に移る時分の詩壇の狀況を一寸かいつまんで書いてみる。

私が朝鮮から大阪を經て、上京したのは、明治四十二年で、丁度私が十七歲の年であつた。顧みればもう早くも二十年の昔になつたが、其年は丁度北原白秋氏の『邪宗門』と、三木露風氏の『廢園』とが出版された年だ。また、三富朽葉、加藤介春、人見東明氏等の自由詩社の月刊詩集『自然と印象』の發刊された年だ。自然主義運動によつて、從來の明星派などのロマンティシズムが粉碎され、ひいては詩が衰頽の極に陷つたのが幾分か復興の機運を見せた年であつた。その前年に、「早稻田文學」誌上に、相馬御風氏が口語詩の試作『痩犬』を、三木露風氏がおなじく『暗い扉』を發表して、口語詩についての贊否が問題になつてゐた。近年になつてこの口語詩の試作の先後について、一寸論爭があつたやうであるが、それは川路柳虹氏が主張せられる如く、氏の方が何ヶ月か先んじてゐた事は事實であるから、川路氏が玆で玄武門の原田重吉たる光榮を擔つて差支なからう。相馬氏等の作は、私は大阪で讀んだが、當時私はなほ獨自性なき一少年に過ぎなかつたので、感服して讀んだ事は讀んだが、あまり深い感銘は受けなかつた。かかる形式から出發した試みには免かれない、實感の不在と、概念的構成とによつて、それは現在から見れば、さしたる藝術的價値をも要求し得ない程度のものである。しかも、これらが當時の詩人をいかに動かしたかは、『醉茗詩集』中の醉

若年表の四十二年の條に、「散文詩に行かうか、口語詩に行かうかと迷つてゐた歳」であつたと云つてあるのを見ても知られよう。

當時の詩壇なるものについて、私は知らない。が、その數年間、今ではあまり人を訪問しない私も、かなり大家を訪問した。蒲原有明氏、岩野泡鳴氏、河井醉茗氏、相馬御風氏、北原白秋氏、三木露風氏（氏は私より二三年の年長たるに過ぎぬにも拘はらず、當時既に鬱然たる大家であつた）そして、その中の數氏にはいろいろ敎へを受け、また、自分の作を諸雜誌に紹介して頂いた。「帝國文學」の小林愛雄氏には、特に多くを負うてゐる。私の詩作は、主として「新潮」「帝國文學」「東亞の光」に現れた。最初私の詩を批評してくれたのは服部嘉香氏で、しかもかなりの賞讃を得た。氏は當時詩評家として重んぜられてゐたのである。大正に入つてから、新しい詩人の努力が目立つて來た。百田宗治氏が大阪で雜誌「表現」を出し、室生犀星氏等がおなじく「感情」を刊行した大正三四年頃から、私は「新潮」誌上で、しばしば詩壇の批評を試み、また、北原白秋氏より萩原朔太郎氏までの新興の詩人の批評を數回に亙つて揭げた。私と福士幸次郎氏との交情は、この批評が因となつて結ばれたのである。何でも私はその中で、氏を詩壇革命のカミイユ・デムウランとして賞讃したやうに覺えてゐる。然し、私は詩集を刊行する資力がなかつたので、詩集を出したのはそれよりも遲く、大正六年であつた。その私の『靈魂の秋』の出た前後、大正五六年から六七年に亙つては、實に多數の詩集が現れ、今の先進の詩人は概ねその間に第一詩集を出した。福士幸次郎、室生犀星、西條八十、日夏耿之介、萩原朔太郎氏等、其他多數。詩壇はやうやく活氣づきこれに加ふるに、民衆詩人現れて、盛んに論じ立てて、現在の喧騷の端をひらいたのも、或る意味の功績でなければならぬ。とは云へ、象徵詩運動によつて、自ら雲中に沒了した詩は、當時全く社會的勢力を有たず、詩人は自費出版の外に途がなかつた。新しい詩人の詩集が、新潮社のやうな有力な書肆から出版されたのは、私の集が最初であつた。然し、それも友人の中村武羅夫氏と加藤武雄氏との斡旋

により、また、社主佐藤義亮氏の特別の厚意によつて、やうやく出版されたのに過ぎない。それまでは同社でも詩集の出版など思ひも寄らなかつたのである。それほど詩は認められてゐなかつたのだ。然るに、意外にも私の詩集が、出版として失敗でなかつた事は、私自身はとにかく、詩壇にとつて、どれだけ好影響を與へたか知れない。新潮社が多く詩集を刊行するやうになつたのも、この事例がどれだけ與つて力があつたか知れないのだ。

然るに、私は其後この偶然の事情のために、詩壇の或る人々から陰に陽に迫害を受けたかわからない。民衆詩人などからは、目の敵のやうに非難攻撃された。私の詩集の特徴たるや、宗教的、人道主義的な感激に續く、それを裏切るむしろニヒリスティックな反抗の聲であつたにも拘はらず、私に與へられた當時の狂的な「抒情詩」攻撃や、「甘い小曲詩人」なる罵稱を想起すると、多少今昔の感に堪へないものがある。しかも、この無鐵砲な鐵砲は、後に西條八十氏などにも向けられた。昨年西條氏に會つた時、氏の口からもそれについて聞いた。氏は當時自分たちを非難攻撃した人が、自ら掛け言葉を用ゐた小曲を發表してゐるのに苦笑してゐると語られた。ところで、當時なほ年若く感情の平靜を得ず、とかく激昂しやすかつた私は、その餘りの漫罵に激して、「手套を投ぐ」と題して、私の非議者等への激烈な應酬文を草して、「サンエス」といふ雜誌に發表した。ところが、それがまた意外の効果を奏したのだ。それは、その文を見た室生犀星氏と福士幸次郎氏とが、ひどく同情してくれて、この大詩人に相當する程に攻撃せられた小詩人のために、慰撫の會を開いてくれた事である。今から考へると、可笑しい事ではあるが、かの二詩人の詩人らしい思ひ遣りは、今も涙ぐましく思出でられる。

×

詩話會が成立したのは、大正六年の秋頃、丁度私が『靈魂の秋』を出す一二ヶ月前であつたと記憶する。私がはじめて出席したのは、その何回目の會合の折りであつたか、今はつきり記憶しないが、當時の詩話會は、頗る氣持のい

い自由な會で、未だ何等の黨派的色彩も加はらず、後に鋭く現れた政治的意味も生ぜず、各方面の詩人の懇談會にすぎなかつた。從つて、特に幹部といふやうなものもなく、誰れが實際的勢力をもつと云ふのでもなく、極めて恬淡な會合であつた。それが後年あんなみにくいスカンダルによつて終らうとは、當時何人が豫想したであらう。萬世橋驛樓上のミカドが會場で、會費も安かつた。が、なにしろ貧弱な食事で、食後のコオゼリがその不足を補ふのを常とした。

私は元來、多人數の會合の好きな人であるし、面倒な事をいとはぬたちであるから、氏の顏が見えないといふ事は殆んどなかつたやうだ。室生犀星氏と初めて會つたのも、詩話會の席上であつたと思ふ。佐藤惣之助氏が、ヤコブ・ベエメの『黎明』の譯本を買つて來てゐるのを見て、佐藤君はこんなものも讀むのかと驚いた事もあつた。永遠の靑年であつた岩野泡鳴氏が、あのすばらしい元氣で、少しも先輩ぶらず、學生服の靑年詩人をつかまへて、快談してゐる姿も、今なほ目に浮ぶ。大正七年頃であつたが、私がたまたま出席したとき、氏はその席上の漫談の中心になつてゐたが、ふと一隅にゐた私に目をつけると、自分のところへ呼んで、例のざつくばらんな調子で、『詩集が賣れるといふぢやないか、いい事だ、いろいろ苦しんで來たんだから、それ位な事はあつてもいい』と云はれたのを、今に忘れ得ない。こんな情に充ちた言葉は、私はそれまで、聞いた事がなかつたのだ。その泡鳴氏も、大正九年の五月になくなられた。岩野泡鳴氏の死は、大正詩史の重大な事件である。もとよりその頃の氏は、旣に單なる詩壇詩人ではなく、小說作家として、やうやく一般に認められてゐたが、氏はなほ常に詩から離れる事はなかつたし、殊に、詩人的思想家としての氏の意義は、年々重きを加へる事を私は信ずるからであるが、また、泡鳴氏が在世であつたならば、詩話會もあれまでみにくい終結を取らなかつたらうと思ふからである。

大正十年二月に催された島崎藤村氏の五十年誕辰祝賀會も、また大正年間の記念すべき出來事であつた。この「藤

村以後」といふ一つのエポックを劃した老大家のために、詩話會が發起になつて、上野の精養軒で盛大な祝賀會を開いたのは、詩話會の一番大きい仕事であつたかも知れない。然し、これはもと全文壇で祝はるべき筈のものであつたのだ。この祝賀會の記念として、詩話會は「現代詩人選集」を編して島崎氏に捧げた。けれども、不幸にも、この選集が動機となつて、(その詳しい事情は私は知らない)北原白秋、西條八十、日夏耿之介、竹友藻風諸氏が脫會して、別に新詩會をつくる事となり、茲に詩話會は分裂して、當初の詩壇全體の自由平等なる交友團體といふ意義を失つて、後年の政治化となり、寡頭政治組識となり、その不評判、ひいてはその解散、それに續いての不幸なるスカンダルの因を作つたと思ふ。

「日本詩人」や年刊詩集を出すやうになつて、詩話會はまづ餘程政治的意味を多くもつやうになつたが、それでも、福士幸次郎、百田宗治氏等があつた間はなほ公平であつた。其後非常に黨派的になつて、漸次一般の非難を招くやうになつたのは、殘念な事である。「日本詩人」の編輯が佐藤惣之助氏等の手に渡つた時分には、既に禍根が深く根ざして、幹部諸氏自身もかゝる政治的行爲を煩はしく想ひ出したに相違ない。幹部の解散斷行に抗議した尾崎喜八氏等の所謂「有名無實の委員」として、富田碎花氏と私とは、詩話會の內部には、平會員以上にも交渉をもたなかつたので、私は內實の事情は少しも知らなかつたし、また知るを欲しなかつた。が、第三者として見て、感心しない事もままあるにはあつた。が、詩人も人間の事ゆゑ、それも仕方のない事であらう。昨年の春であつたか、靑森から上京した福士幸次郎氏が、私の家をたづねてくれたとき、歸り際に靴を穿きながら、ふと何を想ひ出したか福士君は、あのおだやかな調子で、「君はまだ詩話會にゐるんですか?」と云つて、一寸微笑した。その言葉の意味は、私にもほゞ分つた。そして、福士君の方が自分などよりも、一層本當の詩人だといふ事を、この時位ゐ痛切に感じた事はない。然し、私としては、あの際自分のとつた超越的態度が、自分として最善のものであつた事は、今でも確信してゐるとこ

ろだ。

然し、詩話會はなくなつた。斷然解散したのは、幹部の人々なほ明あるを思ふ。その後の騷動は悲しむべき至りであるが、これも原因結果の法則上、止むを得まい。この解散問題について、私は諸方から屢々感想を求められながら、今日迄はわざと沈默してゐたのであるが、とにかく、詩人の行動が政治的意味をもつ事は好ましからぬ事であるから、さういふ意味で、詩話會などといふものの無くなつた事を私は喜ぶものである。詩人は純粹に自己の詩によつてのみ立たねばならぬ。若し詩人が詩作よりも、政治的努力に全力を傾けなければならぬとするならば、むしろ、潔く筆を折つて鍬を取らんのみ。

×

私の本題とするところに入る前に、私の筆は多くの些事のために、餘りに費されてしまつた。詩話會の事はもとより、或種の詩人の大問題とする各詩人の詩集出版の前後や、雜誌刊行の度數はもとより、詩壇的論爭といへども（北原白秋氏對福田正夫氏等の、民衆詩人の作は詩か散文かについての論爭は、北原氏の見識のゆゑに記憶せらるべきではあるが）すべて一小些事にすぎない――大正年間にすぐれた詩が書かれたか、人の魂を搏つ眞實の詩がいくばく生れたか、言葉も形式も凡て忘れて、ただこれに感動するのみなる、眞に生活の深みから生れた人生的の詩は誰れが書いたか、卽ち、誰れが内面的の、眞の意味での詩人であつたか、これらの重大な問題に比較したならば。

その詩、その人はもとよりある、玆で私は大正年間に現れた一々の詩人に對する私の批評、評價を書かねばならぬのであるが、それを爲すには、なほ若干の準備を要するので、玆には私の記憶にある重要な詩集の名だけを揭げるに止めておく。しかもこれ本稿の眼目である。卽ち、高村光太郎氏の『道程』、千家元麿氏の『自分は見た』、室生犀星氏の『忘春詩集』、福士幸次郎氏の『展望』、岡田哲藏氏の『我が斷片』、武者小路實篤氏の『雜三百六十五』、野口米次

郎氏の『林檎一つ落つ』、中川一政氏の『見なれざる人』、佐藤春夫氏の『殉情詩集』、西條八十氏の『砂金』、山村暮鳥氏の『雲』、吉原重雄氏の『難濟』、三石勝五郎氏の『散華樂』、竹友藻風氏の『時の流に』、日夏耿之介氏の『轉身の頌』、佐藤惣之助氏の『琉球風物詩集』、萩原朔太郎氏の『月に吠える』、加藤介春氏の『獄中哀歌』、古村達氏の『美しき墓標』、京谷淳二氏の『試練の日に』、高橋元吉氏の『遠望』、堀口大學氏の『月光とピエロ』川路柳虹氏の『曙の聲』、富田碎花氏の『地の子』、福田正夫氏の『農民の言葉』世禮國男氏の『阿旦のかげ』、村山槐多氏の『槐多の歌へる』、北村初雄氏の『吾歳と春』、勝田香月氏の『旅と涙』、尾崎喜八氏の『空と樹木』、中西梧堂氏の『武藏野』、赤松月船氏の『秋冷』、橋爪健氏の『合掌の春』、前田鐵之助の『韻律と獨語』、宮崎丈二氏の『爽かな空』、大木篤夫氏の『風・光・木の葉』、宮崎孝政氏の『風』、福原淸氏の『ボエミアン歌』麻生恒太郎氏の『大國と地獄』、佐々木秀光氏の『一人凝る』、詩集外では有島武郎氏の『泉』中の詩篇、百田宗治氏の最近の詩（近く詩集となつて出る筈）、生田長江氏、加藤一夫氏、秋田雨雀氏の詩篇、及び窪田空穗氏の長歌、——その外まだ思出せば大分あるやうだが、それは別に他の機會に詳說するつもりだから、今はこれ位にしておく、但、茲にあげた程のものは、何等かの意味で、私の詩人として愛好し、批評家として推重してゐるものである。中には、實にすばらしいものがある。（特に圈點を附したのは、未だ詩壇的に認められぬ重要な詩集である）この外明治年間の詩人の全集の刊行されたものに、『有明詩集』、『泣菫詩集』あり、明治から大正にかけての詩人では『藤村詩集』、『白秋詩集』、三木露風氏の『象徵詩集』がある。『上田敏詩集』も上田博士の譯詩と創作との全集であり、最近出た『三富朽葉詩集』も、また大正年間の最も重要な詩集の一つである。

云ふべき事はなほ多いが、紙數が盡きたゆゑ、餘は左に極く簡單に列擧しておく。詩形、韻律の硏究は、岩野泡鳴氏についで、福士幸次郎氏が數年に亙つて獻身し、現在、川路柳虹氏と伊福部隆輝氏とがこれに盡してゐる事、伊福部

氏等の「詩文學」は詩論詩作に注目すべきものを多く出して、芳賀融、三瀬雄二郎、今井武治氏等の有望な新人のある事、長篇叙事詩が福田正夫氏によつて書かれ、通俗文學として廣く行はれたが、最近佐々木秀光氏が、通俗文學ならぬ叙事詩に努めてゐる事、正富汪洋、井上康文、多田不二、勝承夫氏等のどちらかといふと不遇な詩人達の努力も無視しがたい事、最近には、角田竹夫、陶山篤太郎、大鹿卓、渡邊渡、岡村二一氏等其他新しい詩人が漸次地歩を占めつゝある事、特に、コンミユニズム、アナアキズムの詩人が現れて、ために當初からその意義の薄弱であつた民衆詩人の主張の無意味であつた事を暴露した事、この無産派詩人には、松本淳三、三好十郎、萩原恭次郎、野村吉哉、小野十三郎氏等ある事、大正に入つて物故した詩人には、銚子の海に水死した三富朽葉、今井白楊の二氏、すぐれた孤獨の詩人山村暮鳥氏、「忘れた顔」の著者大藤次郎氏などであつた。

更に、大正年間には、童謠がおこつて、北原白秋、西條八十、野口雨情の三氏がその方面に最もすぐれ、新進ではサトウ・ハチロー、佐々木高明、大島庸夫の諸氏ある事、民謠も相當盛んになつて、その方に努力する詩人もかなり多かつた事、譯詩は大正に入つて最も多く現はれ、有島武郎氏のホイットマンの譯の如き、すぐれたものも出でたが、その外この方面に最も力を盡したのは堀口大學、竹友藻風氏等であつたこと、女流詩人はあまり振はないが、なほ深尾須磨子、中田信子、澤ゆき子、林芙美子、友谷靜榮、英美子等のある事、その他氏多く書き洩らしたところは、他日補足しようと思ふ。終りに私は昭和の新詩人のために、自由な天地を視し、且つその人間的完成に深く期待するものである。

昭和二年一月三十一日(「文章倶樂部」三月號所載)

詩人とその著書

白秋の『海豹と雲』

（一九二八――一九二九）

曾て白秋、露風と併稱するのは、露風氏に對する冒瀆であると云つた人があつた。十數年後の今日、それは一場の暴言の如く聞える。それの錯覺たることは、當時旣に自明の事ではあつたが、今に至つては、いかに露風びゐきの人でも、これを再說する勇氣はあるまい。これ露風氏の小なる故でなく、白秋氏のあまりに大なるが故である。白秋氏の天分、愈々光り輝き、白秋氏の世界、愈々廣大となつて、そのとどまるところを知らないが故である。

『水墨集』以後、八年間の所產を收めた『海豹と雲』の一卷、古日本の雅致を極めた美裝の大册に盛られた累々たる珠玉は、秋果熟して愈々大に、その味滋にして最も甘きもの、その淡素と豐麗とを倂せ得た詩態は、篇中『白牡丹』のふたつなき姿に象徵されてゐるとも見たい位だ。

白秋氏を宗敎詩人と云はば、奇異の感をなす人が多いかも知れない。しかも、氏の境涯詩の基調を成すものは、外ならぬ宗敎的精神である。それは美の宗敎であり、生命力の宗敎である。それは頹廢したペガニズムでなしに、雄健生動の古神道である。言靈の幸はふ詩人白秋にして、はじめて古代の月夜に、靑水沫わき立つ水上に、古代神と共に遊び得るのだ。水上こそ神々の故鄕である。白秋氏こそ、自然の中に神を觀る人だ。鋼鐵と、モオタアと、ダイナモ

と、ツエッペリンの雄姿と、この近代科學の風景の中にも、神を感ずる人だ。古神道こそ、一切の概念を排して、溌剌たる感覺によつて捉へ得る生きながらの神の道だ。

『古代新頌』の諸篇、これぞこの白秋氏の思想的背景を示すもの、蒼古にして鮮新、近代感覺の觸手の道を通つて、古日本人の生々の道に冥合するもの、「水上」の幽邈、「獨神」の雄大、本居宣長の宣揚した大精神を、現代の流動の精神もて甦生し、具現化する。この力動「生きの喜び」は、全卷に漲り、脈打つてゐる。生ける動き、動きの美、力の美、それは、『老鷄』や『鷹匠』に最もよく表現されてゐる。この奔逸はまた『海豹と雲』の篇中の、アイヌを歌つた『汐首岬』『老いしアイヌの歌』にも相連なつてゐる。古代の敗者の末裔の中にも、生々の力を見出さうとするのである。私はこの古代人的の童心の無垢によつて、生氣を奪還する。傷恨の詩人なるがゆゑに、私は愈々白秋詩を愛するのだ。影の光を愛するやうに。

詩は氣息であるといふ言葉は、多くの眞を含んだ言葉である。詩人の全靈に動くもの、まづ、幽かな動きである。あるかなきかの匂ひであり、影である。白秋氏はその幽韻をすばやく捉へる。「素手」に捉へる、「生々躍動した古代感情のリズム」を。匂ひを捉へ、影を拾ふ。『春の蚊』『月夜孟宗の岡』『花椿』諸篇は、私の最も好きなものだ。抑も、「匂ひの秋」の美を何にたぐへやう。また『朝顏』、また『竹に交りて』。

　竹に交りて幾秋ぞ
　竹のはやしにまとゐして

幽居する詩人は、陽のちらちらのゆゑに竹を愛し「あてのない消息」に、とりとめのない秋を愛する。『秋立つ濱』の風俗畫は、唐畫賛の氣韻にゆづらず『ぢいさまばあさま』の老境の自適は、『父と母』の孝心につながる。又「おだやかな冬」の閑寂味は、詩人さながらの姿である。白い花鳥圖の美は、王摩詰が山水の素畫に、なほ艶なる淡彩を加

ふ。南國人の豐饒な素質は、抑ふべくして抑へ得ない天禀である。

　　採銀の消ししつやゆゑ
　　墨のいろよくうつるらし
　　時雨月、かかるひと夜は
　　草假名に心ゆくなり。

この『草假名』の境地は、然し、眞個寂人たるこの詩人の最高の一端、遊びが行となる風流三昧の白銀の滴り、私のかつ羨み、かつ愛惜するところだ。思ふに、小規模な制限せられた境地の中に、淸高に近づく詩人は、必ずしも稀ではない。然し、これだけの世界を把握して、しかもその世界のひろがると共に、淸高の氣韻愈々高きを致すもの、白秋氏を措いて他にいづくにか在らう。

ゲエテが西東詩集を成すや、手に任せ、湧出にまかせて、そこに意圖なく、主題なく、つひに大詩篇を堆積した。白秋氏の横溢力には、老ゲエテの趣きがある。勿論、ゲエテとはそのダイメンションを異にし、その基礎を異にするから、全部的の比較は不可能であるが、少くとも、その豐饒性にはゲエテ的の幾分かがある。故に、萩原朔太郎氏が白秋氏をゲエテに比したのは、この視點よりすれば、必ずしも溢美の言ではなからう。シルレルの所謂センティメンタル型に對するナイーヴ型の詩人として、シルレルに對するゲエテ型、杜甫に對する李白型、憶良に對する人麿型の大詩人である。否、白秋は白秋である。前に白秋なく、後に白秋なし。古往今來、獨歩の詩人、日本の詩のあらゆる美と韻とは、白秋氏によつて綜合統一せられるであらう。全集完成後の白秋氏の展開こそ、めざましいものがあらう。神ながらの道は、この言靈の詩人によつて、一大エポスを織り成すであらう。そして、この『海豹と雲』一卷は、前半生の詩の最高頂を示すと共に、後半生の光輝を豫告する點に於て、白秋氏の多くの詩集中、「最も意味深き、劃期的の

一大記念塔であると信ずるものだ。

昭和四年九月十六日(讀賣新聞十月一日——二日所載)

『白秋全集』の歌謠篇

『白秋全集が』愈々出た。明治以降の新詩人で、故人は別として、まづ全集を編まるべき人は白秋氏である。『白秋全集』は日本の詩の意義のために、萬丈の氣を吐くに足るものである。白秋氏の作品の眞價については、禮讃の辭雷の如くなる今日、今更贅言を費す必要はないが、この全集が詩をポピユラアにするために、いか程の貢献をするかを思ふとき、我等も喜びに堪へないのである。

第一囘配本を手にして、まづその裝幀に驚異する。普及版も豪華版と云ひたいほどの光をもつてゐるが、紅天鵞絨の豪華版に至つては、燦として眼を眩する。

第一囘配本は、歌謠集第一である。私は先般「海豹と雲」を評して、白秋氏の本格詩について些か語るところがあつたから、今度はこれを機會に、民謠調(白秋氏が適切に「歌謠」の名を以て呼んだ)の詩について語りたいと思ふ。そして、特にその事に興味を覺えるのは、白秋氏が比類なき民謠詩人であるがゆゑである。古神道の精神を旨とする國民詩人白秋氏は、宗易、芭蕉の侘と寂との宗教的境界に參じ、その幽玄體に長ずると共に、更に、室町以降の歌謠の精神に則り、俚俗の天眞の聲、その純眞なる鄙歌ぶりに、民衆の心をさながらに表現する、これもとより自然の事でなければならぬ。

この歌謠集第一に收められたのは、鄕土的色彩最も豐富なる「日本の笛」第一、第二である。日本の笛なる題名が、

既に作者の抱負を語る。その獨特の意義を示す。

民謠調の詩の旨とすべきは、文法や標準語に拘束される死物としての國語でなく、奔放自在、俗語方言、ピチピチ跳ねまはる生物としての言葉を縱橫に驅使するのにある。そして、これは白秋氏の手を俟つて、はじめて光彩陸離たるべき事業である。

今、民謠詩人として、白秋氏のほかに野口雨情氏がある。二氏ともそれぞれ特色があるが、雨情氏の作はその一篇が作曲されて唄はれるのを聞いて、はじめて生彩を發するので、まとめて讀むとその單調に苦しむ。氏の全作は、すべて一つの主題のヷリエーションのやうに思はれる。私などのやうな內容主義の詩人にとつては、特にその感が深い。雨情氏の作は唄はるべきもので、讀まるべきものではない。白秋氏の作に至つては然らず。唄はれてももとよりいいが、讀まれるとき更によく、讀んで感興の深いこと云ふべくもない。これは白秋氏の世界が廣大で、且つ、その表現が藝術としての至上の域に至つてゐるからである。詩としての含蓄に富むからである。

今、その藝術的表現の特別な例を擧げれば、小笠原島の情景を歌つた『月のパパヤ』中の一首『鄕愁』である。

月の夜ぶかに
空飛ぶものは
夢の影鳥
秋の聲

宛として、象徵詩である。象徵的の幽美がある。又この藝術味は有名な『城ケ島の雨』などに、最もよくあらはれてゐる。『雨は眞珠か夜明の霧か、それともわたしの忍び泣き』の佳調は忘れんとして忘れえないものである。

また、この集中には、白秋氏の所謂境涯的な小唄風な作品も相當に介在してゐる。『秋の鄙歌』中には、その種の傑作

がある『芭蕉』の如き、その代表的なもの。私は『垣の壞れ』を最も好む。

垣の壞れはそのまゝしとけ、
秋は稻穗が垂れかかる。
捨てたわたしはそのまましとけ
泣けば胸すく、氣も晴れる。

然し、この集の大部分を占めるものは、純粹な民謠風の作品で、これこそ白秋氏の歌謠詩人としての大を示すもの。私は前に日本の詩のあらゆる美と韻とは、白秋氏によつて綜合統一せられるであらうと書いたが、この一卷を見て、歌謠の範圍でのその具現を見る。

たまの機嫌と
朝立つ虹は
時化やせぬかと
氣にかかる。

の如き、日本民謠の精髓を捉へてゐる。

『日本の笛』は、南方民謠集、北方民謠集の二卷に分たれる。前者の方がよりすぐれてゐるは作者が南方人たるに由る。民謠は鄕土の土に根ざしをもつからである。然し、雨情氏が茨城地方の情景を歌つて最も見るべきもののあるに拘はらず、そのエレメントにゐない土地、例へば京阪の情調などを主題としたものが宛かも別人の手になる如き感あるに比すれば、白秋氏が『北方民謠集』に於て、依然として馬上ゆたかに奔馳する槪あるはさすがに一代の詩豪、天分の相違として止むを得ないところであらう。

以上は第一回配本の讀後評であるが、次いで出る童謠集また白秋氏の本領、詩集は勿論氏の事業の中樞を成すものであるし、歌集もまたその創始と、境涯的の表現によつて重要である。これらを通觀しなければ、この巨木の參差たる枝にたわわなる美果を味はひ得たとは云へない。全集完結後、機會もあれば、私は全白秋について一家言を成したい希望をもつてゐる。それは或る意味から云つて、白秋氏の詩を語る事は、日本の詩の長短を語る事だからである。が、今はこの全集の眞價について、一個の連判を押すにとどめておかう。

昭和四年十月十八日(「讀賣新聞」十月二十六日七日所載)

『天馬の脚』

室生犀星、あらはすところの隨筆集『天馬の脚』は、おなじ詩人の最近の詩集『鶴』が、蒼白の翼をひろげて天空を飛翔した如く、鐵筋の脚をあげて、空を蹴らんとするのだ。

室生君は現代にその人の乏しからぬかの頭腦明快の士ではない。反對に、古俳人に見るやうな直感と鍛錬の人である。所詮、詩人である、言葉の最も本質的の意味での詩人である。その評論は往々理路の荊棘に迷ふも、しかも常に以心傳心の閃電、古俳人の頓悟に近く、一作苟くもせぬ金澤の陶工八十吉の氣禀、今この一集に、『天馬の脚』の尖端を胸三寸に感ずるものだ。

就中、「作家の死後について」の一文の如き、自分は身ぶるひを以て讀んだ。詩人室生犀星の心魂の聲を聞き得たばかりでない、あらゆる筆劍の戰士の悲壯なる意氣、籠めて斯中(このなか)にあり。

「吾々の生きてゐる間にすら、不幸な貧しい生活が、吾々の死後において安らかであることは絶對にない。吾々の遺

族は我々と生活を共にしたゝめ、あらゆる貧と戰ふくらゐの心の用意は既に覺悟しなければならない。吾々の生きてゐる間にピアノを習つてゐた娘らもあるひはマッチの箱張りをしなければならないかも知れない。」「敢然として一文人の妻としてあらゆる賤業につくことは、錢あまりて飽食するよりどれだけ文人風であるかも知れぬ。我々が吾々の遺言を敢てすることは用意はもうできてゐるかとたゞ一言で濟むだけである。」

室生君は『天馬の脚』と相前後して、その二十五年間の句作を嚴選して、『魚眠洞發句集』を刊行した。自分は俳諧に暗い。しかし前記の凛烈たる覺悟と對比して愴然として讀んだ一句がある。

きりぎりす己が脛喰ふ夜寒かな

昭和四年五月十三日（「報知新聞」六月三日――七日所載）

『侯爵の服』

深尾須磨子氏の新著を『侯爵の服』といふ。赤地に金ぴかぴかの、著者を笑はせ憐ませた、假裝會の服。それがこの女詩人の巴里土産である。著者の服はその侯爵の服ではなかつたやうだが、その胸に挿された一輪の花、それを自分は愛した。が、その花には芳香もあり色彩もあつたが、花を支へてゐる小枝には、刺がなかつた。どうも薔薇のやうに思つたのだが……

著者はいろんなものを土産にもつて來てくれた。が、著者は溫和な女性なので、辛子をその中に加へる事を好まなかつたのだらう。あのフランスのエスプリの中に潜んでゐて、人の鼻を刺す辛子を。

「フランス製らしい花甕に、日本字で消毒割箸」もおもしろい。

「彼は若手だがなかなかしつかりしたものを書くと褒められてゐる。この若手といふのは、五十と一つ」。日本では二十五六で大家、三十七八でくたばるのだ。「わたしは搖籃に引返さう」と著者はいふ。搖籃に引返すまでもない、今日から赤ん坊だ。詩人は自分で産湯をつかふ事さへ知つてゐたなら、いつでも赤ん坊になれる。著者も巴里で産湯をつかつたのだらう。最近の詩は生毛ばかりだ。

「生きてあればこそ巴里にも來てゐる。生きてあればこそ笛も吹いてゐる」著者よ。もつともつと生きて、もつともつと美しく笛を吹いて下さい。フリユウトと一緒に、言葉の歌をも。著者も明星風の完成美から、コレツト風の潑剌たる流動美に入り得たら、すばらしい詩人だらう。そして、著者は既にその第一歩を擧げたのである、この人の未來に祝福あれ。

昭和四年五月十三日(「報知新聞」六月七日所載)

彼女の見た蒼馬

――林芙美子の『蒼馬を見たり』――

ヨハネの見た蒼馬は死であつた。

あの自殺したニヒリスト、ロオプシンの『蒼ざめた馬』は、失敗せる革命の記念、謂はば死のボムベンであつた。

彼女の見た蒼馬は何であらうか？　林芙美子といふオリヂナルな一人の女性の見たものは？

それは失はれた生である。過去の夢である。おそらくは、死でもあつたであらう。この一卷の詩集の中には、女性にはめづらしい不敵なものがある。突拔いたものがある。生死の境まで行つた不敵の詩人にして、はじめて見出し得る生

の鋭音がある。どん底の落着き、貧乏に徹した糞度胸といつたものがある。虐げられた女性の反抗と絶望的勇氣とがある。メレジコフスキイの所謂「浮浪人の形而上學」がある。

此の不敵な徹底眞の境地。これがなかなか至り難い境地だ。大抵の詩人は、その手前で、美しい詩をかく。奇拔な詩をかく。大家でも、そこまで行つてゐる人は、なかなか尠い。私なども、正直に云つて、最近まで、そこまで突拔き得なかつたと思つてゐる。だが、詩をかく以上は、そこまで突拔かなくてはつまらない。これが詩を生きるといふ境地だ。そこから生れたのがこの『蒼馬を見たり』だ。女で、そこまで行つてゐるのだから、立派なものだと云はねばならない。

林芙美子さんにはじめて會つたのは、もう隨分古いことだ。そのとき、彼女はまだロマンティックな夢をもつた、紅い帶をしめた少女であつた。そのとき旣に、彼女の背後には、貧乏と放浪との過去が横つてゐたのだ。が、そのとき私にはそこまでは分らなかつた。貧乏と放浪との中から出て來た少年であつた私は、最近、彼女の過去の記錄を讀んで、目がしらの熱くなるほどの同感に打たれたが、そのおなじ眞實はこの一卷の中にも、なみなみと湛へられてゐるのだ。

彼女は私が知合ひになつてまもなく、俳優の某君と同棲し、また詩人の某君とも同棲した。その時分から、彼女の詩人としての本質的な生活がはじまつたものであらう。彼女は出會ふたびに、進步してゐた。より高い階程に立つてゐた。今や、彼女はユニイクな世界を把持してゐる、有數な女詩人である。

『お釋迦樣』は作者得意の詩だ。彼女はいつもこれを歌つては、ポロポロ涙を流して泣くのだ。彼女は眞實、男にまゐる女だ。だが、それは幻の男であつて、現實の男ではない。現實の男は、「阿呆」である、「野獸」である。そこで、裏切られ、裏切られた女は、お釋迦樣にすがりつかずに居られぬのだ。

お釋迦様
ナムアミダブツの無情を悟すのが
能でもありますまいに
その男ぶりで炎の様な私の胸に
飛びこんで下さりませ
俗世に汚れた
この女の首を
死ぬ程抱き締めて下さりませ

だが、お釋迦様は彼女のところへ下りて來ない。彼女を死ぬほど抱き締めるのは、やつぱり醜い、野獸のやうな阿呆な男なのだ。

眞實と眞實の火花を散らさない男と女は
パンパンとまつぷたつに割れつちまへ!

「戀は胸三寸のうち」のこの叫び。それは、「生膽取り」の中で、

一刀兩斷にたちわつた
男の腸に
メダカがピンピン泳いでゐる。

その眞實を見た女の強い叫びなのだ。この貧乏な女王様は、キング・オヴ・キングスを十杯のんでも、おなかがすいて、職がなくつても、故郷の美しさを忘れない、人生の愛を失はない。留置場でも遠い故郷の厩の匂ひをかぎ、「ガラ

スのやうに固い空氣なんて突き破つて行から」といふ。ふみにじられても、ふみにじられても、へこたれない、不屈な力が、あるひは強い反抗となり、あるひは自己への嘲笑となり、潮のやうに氾濫するのだ。

眞實生る樂しみは
　噓を言はないで毎日白い御飯が食べられることだ

といふ言葉は、何といふ眞實の言葉であらう。この言葉があるから、「醉ひどれ女」の叫びが一層強く響くのだ。

嘲笑したヨワミソの男や女達よ！
この醉ひどれ女の棺箱でもかつがして
林立した街の街の帆柱の下を
スツトトン
　スツトトンでにぎはせてあげませう。

男の突拔いた境地はいくらもある。ヴィヨン、ボオドレエル、ヴェルレエヌ、またニイチエ。だが、女には一寸見當らない。僕はヴィヨンにおい兄弟と呼びかけるやうに、芙美子さんにも、おい姐御と呼びかけたい。

昭和四年九月二十九日（「詩神」十二月號所載）

薄田泣菫の散文

薄田泣菫氏は、島崎藤村氏と相並んで、多年、私の尊敬する詩界の大先輩である。そして、藤村氏が專ら小說作家として、生の深みを探つて、詩人が詩を潛める事によつて、いかに深く生きうるかを示されたやうに、泣菫氏は隨筆

家として、詩人の眼と心とが、いかに自然と人生とを微細に味はひうるかを示されてゐる。

泣菫氏の散文は、その詩にもまして、長い前から私を惹き付けたものである。朽葉色の表紙をした氏の最初の散文集『落葉』を愛讀したのは、もう十何年もの以前である。最初の『茶話』が、菊半截型の小册子としてはじめて現れた時に貪るやうに讀んだ記憶も未だ新である。

そして、それらの散文によつて、私を魅惑したものは何であつたらうか。長い文化を背景とした近畿の自然に對する傾倒と人間に對する犀利な皮肉、好諧諷刺であつた。それは私の日本的情感に訴へると共に、又、あたかもハイネの散文を讀むが如き、すツと胸のすくやうな爽快味を覺えさせた。特に、その警拔な比喩の才は、覺えず人をアツと云はせるところがある。詩趣と奇警とを兼ね備へるハイネの散文の妙趣を髣髴たらしめるものは、泣菫氏の文を措いて他に無いとは、多年心ひそかに私の思つてゐたところである。

今日、泣菫氏の近著、『艸木蟲魚』を讀んで、私の愛着は新たにされた。新たにされたばかりではない。氏の並々ならぬ東洋的教養と、西歐的教養とが、玆に渾然と融合せられて、この豐富な心の背景のもとに、自然と人生とを觀る眼が、ますます冴えて、一木一草一禽一魚に及ぶその顧愛が乾いた心をもしみじみと濕ほすのを見て氏の心境が、その愛好せられる靑磁色の秋空の透徹を偲ばせる程に深まつて來たのを知り、嘗て茶話に於てあまりに輝いてゐた才氣がむしろ底に潛められて來たのを見て、驚嘆に近い感情を覺えたのである。

詩人は死なない。詩筆を絶つ事によつて、抒情詩の天馬が夭死すると思ふのは、俗人の淺見である。私がこの一卷に於て、まづ受感するのは、限り無き詩味である。より深い詩の世界である。玆に私は泣菫氏の詩人としての完成を見るのである。嘗て形によつて詩を書いた詩人が（『落葉』の時代には、文章にも未だ幾分の不自由さがあつた）玆では實に自由に、のびのびと心を動かしてゐる。より廣く、よりこまやかな詩の境地がいみじくも打出せられてゐるの

これはまことにすぐれた心境隨筆である。隨筆及び隨筆家の意義については、曾て自分の論集中に詳說して置いたので、玆では繰返さないが、とにかく、詩人の眼と心と、豐かな學殖と、人生哲學の用意との相關を以てなされるとき、隨筆はその最も完全な姿を示すであらう。その點、この著者は隨筆家としての申分のない資格を備へてゐる。然し、在來の意味の隨筆の範圍には留まつてゐない。むしろ、歐羅巴的のエッセイストの風格が多分にある。其兩面が相融合して、渾然たる一家のスタイルを成し得てゐるのが、泣菫氏の隨筆のユニイクな所以であると思ふ。

著者は最近二年間、宿痾のため、家から僅か五六丁の間を往復するに過ぎないといふ。さうした閑居の中から、これだけ深い美しい自然を汲み出し得た事を思へば、詩人の內面生活のたふとさを思はずにはゐられない。

柚子、たうがらし、蜜柑、松茸、糸瓜、これらの植物に、何といふ親しみの眼が注がれてゐるだらう。その背後に、何といふ深い人生が見せられてゐるだらう。蟹、海老、小鳥、櫻鯛、蓑蟲、これらの小動物に、何といふ愛が注がれてゐるだらう。そして、そのなつかしい自然の相のうしろには、必ず人間の生活が置かれ、そこから歸納される一つの人生哲學によつて、我々は著者のモラルをはじめて知るのである。

『かまきり』や『蟹』に見出される人間性の反抗と鬪爭癖の反省の如き、心の焦點にぴつたり合つてくるが、より美しいのは、歌はざる詩人『蓑蟲』についての言葉であり『さすらひ蟹』よりして、『人生の旅人』と名のつた夭折の詩人を思ひ出すパッセイヂである。殊に、『影』の一篇の幽かな美には、嘆美の情を抑へ得られない。散文詩としてみても、エッセイとしてみても、世界的な逸品であると思ふ。

『わび』や『さび』の境地も、心にくいまでに、巧みに解き出されてゐる。總じて物の味ひについてのこまかい見方は無類で、それが『松茸』のやうな名文を書き得させたのであらう。松村呉春や日根對山の如き人々のおもしろい逸話

に添へられた氏獨特の解釋もおもしろい。『雲萍雜志』の柳里恭が、現代に生れ變つて來たのを見るやうに思はれるところさへある。

あの豊かな歐羅巴的教養も、この日本的な心の動きを抑へ得ぬのを見るのは、甚だ感興がある。然し、氏をして通り一遍の通人や枯淡人たらしめないのも一つはこの教養のためでもあるやうに思はれる。そして『暮笛集』の詩人は、今もともするとその笛を吹き出さうとするのだ。

私は泣菫氏が小說の筆を暫時にして絶たれた事を惜しいと思つたものであるが、この一巻を讀むとき、其あやまつてゐた事を思ふ。冗長煩瑣な小說の形を要しない。この隨筆の中に、詩や哲學のほかに、十分の小說がある。この中の或る物は、直に小說と呼んでいいが、然し、特に意識的に、これを小說的の形に直さうとするとき、この云ひ難い妙味は恐ろしく減殺されるであらうと思ふ。

昭和四年三月二十三日――二十四日（「讀賣新聞」所載）

日夏耿之介氏の
『明治大正詩史』巻上

詩人によつて詩史の成される事は、それが學者的良心を伴ふとき、文學史上の一つの僥倖である。極めて稀有なる好運である。そして、その僥倖、その好運を、今我々は得たのである。

日夏耿之介氏の『明治大正詩史』は、その梓に上る日を既に久しく自分の期待してゐたものである。今、その上巻

を通讀するを得て、自分の喜びは、その豫期に數倍した。

『從來の我國の一般文學史に對して、自分は少からぬ不滿を持つものである。それゆゑ、日本文學の再評價、再吟味を要求したい氣持が强かつた。その不滿が、本書に於いて、非常に多く償はれてゐるのを自分は見出した。若しこの明治大正 詩史』の如き見識と誠實とを以て、日本文學全體に對する史的評價が完うされる日あらば、自分ははじめて心からの滿足を表明するであらう。

『明治大正詩史』の著者は、獨自の世界を把握する詩人である。同時に、博識にして見識ある學徒である。この喜ぶべき融合が、今日の業蹟を結果したものに違ひない。

自己の趣味好惡にとらはれやすい詩人の通弊は、その學的精神によつて救はれ、學究的乾燥と詩魂の死解とは、詩人の情操を以て救はれてゐる。詩の鑑賞理解に於てすぐれてゐるのみならず、史的事實の探求に於て實によく行屆いてゐる。

第一篇「草創時代」の「長篇詩の淵源」に於て、我々は既に著者の見識を認めざるを得ない。自分が從來の文學史に對して抱いてゐた不滿が、一部分玆に滿たされてゐる。從來無視せられてゐた俳體詩の意義に說き及ぼしたところなどその一例であるが、「草創後期」の「古詩型の新詩才」に於て、中野逍遙に一節をさかしめたものも、即ちこのよき精神である。この一節の如き、舊來の文學史家の偏見を打破すると共に、詩の外形よりも內容、形式上の穿鑿よりも內面的醱酵の重要なるを暗示した點で、自分には特に感銘すべきものがあつた。

個人詩集の權輿たる「十二の石塚」の湯淺半月の史的意義を發揚して、「新約聖書」の譯出と共に基督教の發した藝術的第一聲と見たのは、落合直文の隱れた意義を顯現せしめたのと共に、自分の敬服したところであるが、かうした見解の卓越は、ひとりこれに止まらない。本書の隨所に見出し得られるものである。

個々詩人の評價に於ては、もとより自分は或る點、著者と一致し得ないところを持つてゐる。例へば「抒情詩」(「野邊のゆきき」)の松岡(柳田)國男の詩人的天禀には、自分はより多く傾倒するものであるし、「社會主義詩集」の兒玉花外は、よし幼稚粗雜の點ありとするも、自分には更に遙に重視しなければならぬ切實な理由が存する如きである。が、大體に於て、妥當を得てゐる。著者の豫期以上によき批評家たる事には、自分はむしろ驚異をすら感じた。

本書の下卷は「新自由詩創剏、過程の研究」で、明治末より大正に至る詩史として、我々にとつてより重要であり、より興味あるものであるが、その下卷の出來ばえがこの上卷にそん色なきものであるならば、著者の貢獻やまた偉りとしなければならぬであらう。兩卷全部完成した日に、自分はあらためて詳細なる批評を發表したいと思つてゐるが、今日は、この上卷が自分の豫期にもまして立派なすぐれた出來であつたと驚嘆を表するにとどめておく。

(昭和三年二月八日(「國民新聞」二月十八日所載)

日夏耿之介氏の『明治大正詩史』卷下

一讀者としての希望

『明治大正詩史』の下卷は、果然、激烈な論爭を惹起した、讀賣紙上で、川路柳虹氏の著者との間に行はれた應酬を機として、更に二氏の論駁中に引合ひに出された堀口大學氏の文章も現はれ、尙それ以外にも、福士幸次郎氏其他の論難もまさに現れようとしてゐるといふ。

自分は昨春、本紙上で本書の前卷を推奬した文中に、兩卷完成の際には詳細なる批評を公けにしようと約束したが、下卷を見るに及んで、かかる批評はこれを發表しない方が穩當であらうと思ふに至つた。然るに本紙のS氏より前回の約束を果すやう懇望せられるに會ひ、簡單に自分の所思を記す事とする。

下卷の大部分を占めるのは依然明治期であるが、自分は問題の大正期の批判について述べたい。明治期の史筆に於て、あれだけの公正と精到とを示し、あれだけの見識を示した著者が、その同時代者の批判に於て、同樣の成功を收め得たならば、我々は文學史家としての著者の爲に、大杯を擧げて祝したいと思つた。が、それは人間以上の力を著者に期待した事であつたのを、自分は悟らねばならなかつたのを殘念に思ふ。

上下二卷、併せて千頁の大册に於て、大正期が僅々二百頁にすぎぬといふ事は、まづ、自分をして驚愕せしめた。しかも、大正諸詩人の事業は、「群小詩壇」の名のもとに一括せられ、明治詩人中の凡庸なる人々すら、巨大な意義を附せられてゐるに拘らず、大正期の最も獨創的な詩人すら、常に「小」の字を冠せられて、辛うじてその文學史上の存立を許されてゐる有樣である。これ果して公正であるか。

自分の私見を以てすれば、我が新詩は大正期に入つて、はじめて顯著なる個性の發揮を見、世界觀の深化を見たのである。自分が若し『明治大正詩史』を書くならば、明治期に上卷の四百頁をささげ、大正期に下卷六百頁を與へるであらう。大正詩人は決して明治詩人のエピゴオネンではない。もとよりその眞價、その聲望に値しない詩人もあるであらう。然し、その卓越した詩人は、先人未發の聲を出し得たのである。確かに、出し得たのだ。これを認め得ないならば、その評家は大正詩壇に興味のない人であるから、明治期に於てその史筆を折るべきであつた。

萩原朔太郞、室生犀星に、あれだけ賞讃を吝まねばならぬのは何故であらうか。千家、佐藤、百田を、よくよくの凡才とまで極言するのは何故であらうか。其他、同時代の諸詩人の價値評價には、著者の成心の歷々指摘せられるも

のがある。曾て白鳥省吾氏の「現代詩の研究」が、その偏頗不公正のゆゑに、八方の非難を買つた事は、さう古い事ではない。極力、白鳥氏の不公正を排撃する日夏氏が、同様の弱點を示した事は惜みても餘りある事である。日夏氏の蔑視せられる流俗の間に、詩人とは凡て感情に驅られて、濟輩を認めるの雅量なきものといふ先入見を作る事を自分は非常に恐れずにゐられない。流俗は最後に於て、公正な評價を決定する權威であるからである。いかなる高踏詩人も、その作品を發表して世に問ふ以上、つひに流俗を蔑視し盡してはゐないのである。

日夏氏に對して自分が敬意を拂つてゐる事は、本書中に明記されてゐる。それゆゑ、自分は敢て直言して差支ないと思ふ。日夏氏は同時代者に對して、今少しく寬大であるべきであつた。たとへ氏がいかに客觀的公正を期せられるとも、それは決して氏をしてその同時代者に劣る詩人とはなさず、反對に、氏の眞の自信を證明したであらう。少くとも、自分がやつたならば、必ずさうしたのだ。自分はそれだけの自信ある詩人だからだ。サント・ブウヴは、その競爭者バルザツク、スタンダアル、ユウゴオを敢て認めざらんとした。日夏氏もサント・ブウヴであつたかも知れない。氏がサント・ブウヴたらず、詩界のバルザツク、スタンダアル、ユウゴオたるを欲したらば、むしろ此種の史筆を執るべきではなかつたのだ。但、自分がかくいふのは、我々の間にバルザツク、ユウゴオの大名に比肩する大詩人ありと信ずるが故ではない。大正詩人は凡て小詩人にすぎぬかも知れぬ。然し、日夏氏の推奬を得てゐる明治詩人に決して劣るものではないのだ。しかも、著者が埋沒した詩人をのみ尊重して、詩壇に雄飛する詩人を貶黜してなほ足らずとなす傾向が、自分をしてサント・ブウヴを想起せしめたのにすぎぬ。然し、批評家もサント・ブウヴに比較せられたならば、決して恥辱ではあるまい。

自分は史家としての日夏氏に敬意を失ひたくないから、大正、昭和初頭に亙つて、なほこの兩卷千頁に相當する大册を公けにされん事を期待する。そして、申譯的の概括評でなしに、明治期に於て示されたやうな、精到と公正と、

大なる見識とを示されるとき、我等は氏をはじめて大正詩の史家として正しく見直す事が出來るであらう。自分は詩人特有の感情的なポレミックを好まない。それゆゑ今は虚心坦懷、單に一讀者としての希望を述べて、日夏氏の新しい事業に期待を寄せるにとどめておく。

（昭和四年十二月八日「國民新聞」十二月十一日所載）

『現代日本詩集』

改造社の『現代日本文學全集』中の『現代日本詩集』刊行を機會に、十數人の詩人相集つて、川路柳虹、福士幸次郎の二氏を招いて、一夕の宴を開いた席上で、白鳥省吾氏がこの詞華集の不公正を難じた。氏の說にも勿論一理あつたのであるが、室生犀星氏はそれに答へて、新潮社の『明治大正詩選』よりも公正だといふ意味の事を云つた。それは白鳥氏がかの集の編者の一人だつたからである。事實、此れは彼れにまさる事數等である。かの不公正はここに大いに除去せられてゐる。「宗派的狹心」は確かに捨てられたと思ふ。少くとも、これを捨てんとする努力は著しいと思ふ。これは詩人協會の手の加はつた爲めであらうと思はれるが、感謝しなければならぬ事である。

然し、かく云へばとて、その詮考なり評價なりが、完全無缺だと云ふのではない。否、意に滿たぬところはかなりある。一體、此種アンソロヂイに於ける指定の頁數は、編者の各詩人に對する評價を示すものであるが、その評價が、明治の詩人についてはしばらく措くとして、大正期の詩人、殊に現詩壇の人々に於いて、自分の腑に落ちない點も往往にしてある。一列を擧げれば、白鳥省吾氏は不遇を訴へたとは云へ、なほ五頁を與へられてゐるのに、三富朽葉、山村暮鳥、及び加藤介春氏は三頁を與へられてゐるに過ぎぬのである。これは何の故か。後者はそれほど前者より劣

位にある詩人であらうか。輿論がそれを肯定しようとは、自分には思はれない。

若し、朽葉、暮鳥が共に故人であり、介春氏は地方に在住して、詩壇社交の圏外にあるから閑却しやすかつたのだといふならば、此の編者は愛すべき好人物であるに相違ない。然し、同時に、不信用な審判官であるだらう。我々は一朝息が絶えてしまふや否や、忽ちにして小詩人になつてしまふのであるか。そんなら、詩人はせゐぜゐ長生きして、出來るだけ出しやばつて、自己を主張する外はないといふ事になる。そして、死ぬもの損の俗諺は、藝術評價上にも適用される事となる。頗る愉快である。同時に頗る人道的でもある。なぜならば、死人はどんな虐待を受けたところで、毫も痛痒を感じないからだ。これは皮肉であるが、然し、悪意あつて云ふのではない。自分の卒直な希望を云へば、故人にはかへつて頁數を多く與へて欲しかつたのである。なぜならば、現在者はなほ未來の開展を有するが、故人は既にその事業を終へて、一個の完結した古典的存在となつてゐるからである。

次ぎに、自分自身について云へば、曾て『明治大正詩選』であれだけの打倒的待遇を受けてゐるのだから、今回、自分が山村暮鳥や、三富朽葉以上の詩人になつてゐるのに赤面した位なものである。異存のありやうがない。若し異存があるなら、それは自分の死んだ後で、自分の詩が叫べばいいのだ。現に、朽葉、暮鳥の詩は、今それを叫んでゐるのである。それから、この集で自分の特に有難いと思ふのは、詩人協會の努力によつて、現存詩人だけは自選にする事になつた事である。かの「明治大正詩選」のやうに、「寂しい私」といふやうな自作中の最駄作を選ばれたら、首でも縊る外はないだらう。

とまれ、この種の事業は、誰がやつても萬全は期し難い。現代の詩人の價値など、いつどうでんぐり返るやら知れたものでない。よくやつてくれたと勞をねきらふべぎものと思ふ。ただ、あの白鳥氏の非難のあつた折りにも云つた事であるが、この集は既に公刊せられたのであるから、それでよしとして、次いで出るべき春陽堂の「明治大正文學

全集」中の詩集は、より完全なものにして貰ひたいものだ。それについて最も妥當な方法は、現存の詩人だけは、同數の頁を分つて、敢てその間へ價値の輕重を附さずに置く事である。が、これも云ふべくして行ひ難い事であらう。一代の詩豪北原白秋氏と平詩人（ひらしじん）の我々とが同頁の待遇を受けるとなれば、これまた不公正の譏りを免がれまい。その點の斟酌は甚だ難しい。所詮は神樣に編纂をたのむ外はない事になりさうだ。神樣がやつてくれなければ、不公正や不完全を我慢して、低位に置かれた詩人は、知己を百年に俟つも宜しからう。

（昭和四年五月十五日）未發表原稿

信濃の二詩人

この一文の一茶並びに俳諧論の個所には、今多少の疑惑があるが、しばらくそのままにしておく。識者の御示教を賜はれば幸甚である。

數年前、たしか長野の信濃毎日新聞からだつたとおもふ。信州についての感想を求められた時、私はそれにはつきりした返事をするのに苦しんだ。そして、その時に、私が想ひ浮べたのは、三石勝五郎君のことであつた。三石君とは、そのをりから既に知り合ひであつたので、君から聞いた淺間山や、野尻湖の景は、恰かもそれを自分の庭園ででもあるかのやうに、十分の誇りと愛とをもつて話した同君の力のためであらう、私はまるで自分自身の眼で見たやうにはつきりと思ひ浮べることが出來たので、私はその機會に、まだ見ぬ信州の風光に對する思慕の情を抒したのであるが、私のその感情を助けたものが、三石君其人の風格から受けた著しい感銘であつたのは言ふ迄もない。其後、私は再度かの高原の國に遊び、今やまた多くの信濃人士を知つてゐる。そして、私の眼に映つたかの山かの水は、私の

想像力を遙かに越えてゐたが、私の親しくなかつた恐らく最初の信州人である三石君のやうなめづらしい人には、まだ出逢ふ機會を見出さなかつたのである。

多分、長いこと三石君は、鄕黨の間に風變りな畸人として通つてゐたことであらう。最近同君は、「畸人は詩人とならなければならない」と言つて、その獨特な說を聞かせてくれた。「詩人は痴人、世界の微塵」といふ詩を書いた私は、また私一流の解釋を附してそれに同感したのだが、とまれこの畸人は、今まさしく詩人となつて、鄕黨の誇りとならうとしてゐる。もとより同君が急にえらくなつて、詩人の衣を着けたわけではなく、昔ながらの一個の自然人、一個天眞の山男にすぎないのであるが、世間といふものは、つまりさうしたものなのだ。

ところで、この信州の山男、彼が愛してゐる淺間山の精のやうなこの山男こそ――十年の都會生活、早稻田大學五ヶ年の學程も、彼を所謂文化人に馴致することは出來なかつた、彼はこの山男の名を榮譽とするであらう――私にとつては、單なる詩人としてでなく、眞實の生活者として、惠まれた人、選ばれた人として、生きた敎訓となつてゐる。彼は生れたる詩人ではあらう。然し、決して詩人といふ專門家ではない。この人が、三石勝五郎君が、詩壇の表面に現はれた事は、現在の餘りに專門化し、所謂詩人風に窮屈に型づけられてゐる詩壇に對する自然それ自身の示した一つの反動、一つのプロテストであるとさへ思はれるのだ。現在の詩壇に、詩の幽靈にとつつかれて、人間性の純な表白を無視して、詩形の小問題に齷齪してゐる人の多い時、『散華樂』の一卷が、詩壇に投ぜられたのは、その事實だけで、かなり手きびしい自然の皮肉ではなからうか。三石君の詩壇に於ける地位といふものを考へてみる時、私は文化文政の俳壇に於ける一茶の地位を想はずにはゐられない。

信濃の國は、今までに三人の意義ある詩人を生んだ。德川末期に於いて、柏原に一茶を、明治になつて木曾に島崎藤村を、そして今、佐久に三石勝五郎を。(島崎氏に對しては別に詳しく述べたいと思つてゐるし、又歌壇にも二三の

すぐれた人があるやうに思はれるが、その方面には暗いから、わざとこゝでは觸れない事にする。」しかも、この德川末期の俳人と、現代の詩人とは、極めて近い血緣をもつてゐるやうに思はれる。「人々は、彼の詩の表現のなかに、一生を北國の寒驛で送り、深酷な人生批評をしてゐた俳人一茶との一味の共通を見出すであらう。それは二人に通ずる鄕土性かも知れぬ。」と吉江喬松氏は言つてゐられる。三石君の作品を見ると、不思議に一茶を聯想せずにはゐられぬのは、正に事實である。それは吉江氏の言はれるやうに、共通の鄕土性の然らしめるところもあらう、自然のユウモア、一種重厚な滑稽味も、(その本質は違ふけれど)二者に共通してゐるのも事實である。それに、總じて三石君の詩は、著しく俳味を帶びてゐる。一々例證はしないが、中にはそのまま俳句の形をなしてゐるのさへある。その上、書齋の冥想的な詩人でなくして、質朴な卽興詩人であるこの詩人は、詩が頭に閃けば、勞働の最中でも、矢立の筆をもつて卽座に書きつける習癖になつてゐる。從つて、その詩は槪して短い。そして、その簡潔をたふとぶ事は、時に說明を聞いてからでなければ、その眞意を捕捉しがたい位である。しかも、かくまで俳句と共通したものをもちながら、三石君がつひに俳人とならなかつたといふ事實を、私は非常に面白いことに思ふ。

元來、俳句は非人情的なものである。主觀よりも客觀、情緖よりも觀照をたふとぶ。これは曾て寫生文や非人情小說などといふものが、俳人の間から生れて來た事實によつても、よく證明せられるであらう。風雅と呼び寂びといふ、みな人情外の境地に外ならぬ。俳句には詩の重大な要素である感情のリズムがない、またそれを要しない、俳句は或る意味で散文である。そして、俳味が禪味に相通ずるものがあるやうに云はれるのは、この非人情的な、突き放した境地のためであらう。この點で、喜怒哀樂の情をむしろ端的に表白したと見える一茶などは、俳人としては異數に屬するかも知れぬ。ところで、一茶よりも更に熱情の人である三石君が、かの非人情の世界に入らなかつたのは、極めて自然の事である。三石君のありあまる愛と涙が、冷索たる自然の觀照で滿足するの俳境に、堪へることが出來よう

とは思はれないからである。

芭蕉は「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」と吟じて、捨子に握り飯を投げ與へて過ぎた。そこに私は芭蕉の悟りの境地を見る。三石君はおそらくそれは出來ないだらう。三石君ならばその捨兒を拾ひ上げて、いい兒だいい兒だと泣く兒をすかさずにはゐられないであらう。曾つて神樂坂の通りで、錢龜賣の老爺に代つて、その龜をみんな賣つてやつたといふ三石君であるから。もとより、芭蕉の突き放した氣持は、俳人の境地として全く到れるもので、それは立派な心境であるとは思ふが、私は錢龜を賣つてやつた三石君の、思ひ切つて對象に即いた境地にも心を惹かされずにはゐない。

「寢がへりをするぞ脇よれきりぎりす」と云ひ、「蚤どももまめ息才ぞ草の庵」と吟じた一茶は、芭蕉とはすつかり違つた人物であつた一氣に對象を突き放すことが出來なかつた。が、彼もつひに俳人であつた。彼は深刻な諧謔に於いて、人生の對岸を見出したのだ。

彼は蟲などにむかつて情愛を示した、然しそれには人間に對する痛烈な冷嘲が著しく響く。三石君には、さうした冷嘲の氣は全くない。彼は對岸に立つて人生を眺めようとはしない。彼は人間の中に飛び込むのだ。對象の中に全く身を沒する彼の奉仕生活が、何等不自然のあとをとどめぬことが成程と肯かれるであらう。

どんなに三石君の詩が、その表現に於いて、一茶を聯想させるところがあつても、また、二人の間にいかに少からぬ類似點があるにしても、一茶は一茶、勝五郎は勝五郎である。二人の血緣は、(恐らく信濃の山によつてか、)或點で繫がれてゐるところのある事は認めながらも、私には一茶と勝五郎とが、その本質に於いて、對蹠人であるやうにさへ思はれるのである。

一茶の著しい特徵として映ずるものは、何處迄も狷介孤峭な、世の拗ね者といふ感じである。その點は、かの冷眼の

市隱上田秋成などに似たところがあるやうに思はれる。然るに、我が三石勝五郎君には、全くその狷介性がない。この人をつゝむ空氣は、常に和氣靄々たる溫かい感情に濕うてゐる。例へば、『顏と顏』である――

お湯に入つて
知人の如く聲かける
顏と顏……
人逢ひでも
なつかしく
それをご緣に
背をながしあつた

これなど作者の人柄を最も鮮かに語つてゐるもので、この情愛、このたくまざる人間愛の表現は、一茶に見出されるそれとは、少しく類を異にしてはゐないだらうか。そしてそれだけ一茶のやうな深刻味は見られないかも知れない。

一茶は不幸な人であつた。殘酷な繼母に育てられて、「われと來て遊べや親のない雀」と吟じた六歲の彌太郎時代から、「ふるさとやよるもさはるも茨の花」と吟じて鄕里を見棄てた後年に至るまで、何處迄も、「まゝ子一茶」であつた。「我身ながらもあはれなりけり」と嗟歎せずにはゐられなかつた彼の生ひ立ちは、世間に對しても、また彼をまゝ子とした。一茶には、一種の悟りをひらいた後年に至るまでも、その繼子根性は離れなかつたやうである。そして、それが、一茶の藝術にあの不幸なもの弱いもの哀れなものに對する不幸な人特有の溫情の底に、痛烈な霜氣を附與してはゐまいか。一茶をおもふと、私は歐羅巴の繼子たる猶太人として生れたハイネを聯想せずにはゐられない。正直な、直情徑行の人として、辛辣な嘲罵家として、特に赤裸の人として。三石君もまた赤裸の人である。が、この人は何處迄も

ひねくれないで、眞直に育つた人である。その生立ちに於て、一茶と同じやうな家族關係のもとにありながら、この人は不思議にも、その心性に於いては決して、繼子ではない。繼子根性は、この人にはつひに理解しがたい性情であるに相違ない。

一茶は煩惱の人であつた。一生、愛憎に苦しんだ。その點で、彼はいかにも平凡人である、飽くまで人間的で、近代的でさへもある。これを良寛のやうな身心脫落の至境に達した童心の人とくらべれば、何たる著しいコントラストだらう。私が昔から一茶を愛し、一茶に共感して來たのは、まづ何よりも、この煩惱の人であつた點である。私自身がさうした業の深い人間だからである。然るに、三石君は、その點で、一茶よりもむしろ良寛に近い。かういふ言ひ方にして許されるならば、三石君は、神の方に面を向けて生れて來た人である。この神の字は佛の字に代へてもいいが、とにかく、君は働かうが怠けやうが、たとへいかに迷ひ、いかに汚れた道に立つことがあらうとも、依然神に向つて歩いてゐるのである。佛樣を背中に背負つてゐるのである。三石君位ゐ人にだまされやすい人はなからう。君が郷里に於て某文學者のにせものを引廻したなど、その最も著しい例であらう。私は君によつて、だまされる人の有難さを、切に感じるのである。人にだまされて、つひには、だまされる事を恐れるやうになつた私は、君を見て恥があ る。

人が求道者のみちに立つと、直ちに、世間から僞善者といふやうな誹りを受ける。けれどもひとり三石君に對してだけは、恐らくどんな卑しい惡意ある人間でも、僞善者呼ばはりがなし得られないであらう。それほど君は純眞無垢の人である。それだけ君は賢い世間の人からは、愚かしく見える。どんなに長いこと、君は賢い人たちから馬鹿にされて來たことだらう。思ふに、吉江氏の云はれたやうに、君こそは、まさにグリアスンの所謂るアンダアマンの權化に逹ひない。君こそ、今私の抱懷する「負けたる人」の理想を、さながらに示してくれる人である。曾つてニイチエの

超人を憧憬した私は、今アンダアマンの思想に耳を傾け、この生れたる「負けたる人」の前に首を垂れて、敢て負けるための修業に立出でんことをねがつてゐる。

私もまた、『散華樂』の著者とともに、かやうに言ひ得られんことをねがつてゐる——

一心稱佛

花咲く淨土——

この身このまゝ救はせ給へ

大正十二年六月、（「詩と人生」七月號所載）

詩壇及び詩人

（一九一七――二三）

新進の詩人を論ず

露風と白秋――より古き一對

新しいいいものを認めることが出來ないのは批評家の恥辱である。しかし新しいものを敢て認めないのは批評家の健全なしるしであるかも知れない。批評家は全然その偏見を脱することは至難の業（わざ）であらう、しかし偏見の無からんことを努めるのはその義務である。我が詩壇はとりわけ此の新しいものと偏見とに充滿してゐるやうであるから、此のあまり一般の人の訪れることのない花園――其處には餘りに奇怪な花が多くある――に一歩を踏み入れるに先だつては、これだけの事を云つて置く必要がある。自分は藝術の首座を先づそれに與へたい位に抒情詩を尊重する。それだけまた今の詩壇には不滿が多い。それ故、自分の言は或は詩人諸氏の怒を買はないとも限らないが、たゞ自分がいづれの黨派の肩をも持つものではない事、三四の詩人に面接した事はあるが、いかなる詩人にも親交はなく、從つて私情や黨派的偏見からは自由である事を述べて置くのもあながち無用ではあるまい。

曾て三木露風派の戰士柳澤健氏によつて北原白秋派の詩を葬れとの叫びが擧げられた。今や白秋派の少壯詩人萩原

朔太郎氏によつて露風派の詩を葬れとの宣言が下された。現詩壇に對立せる二大詩派はこゝに戰鬪場裡に旗鼓堂々と相まみゆるに至つたのである。

三木露風氏と北原白秋氏。かつて天下を兩分したこの二詩人は果して何事をなしたか、まづ少しくこれを論じて置かねばならぬ。二氏の功罪は相半ばしてゐる。前者は靈に生きる人である、彼が象徴詩の理論に動かされて、芭蕉の幽玄に到達せんとしたのは甚だ自然の事である。後者は肉に生きる人である、彼が美しい感覺の世界に目醒め、異國情調に心醉し、新しい小唄の製作者となつたことは、これ亦自然の事である。前者の弊は朦朧たる情調の中に蠢動して幽玄だと思ひ込むにあり、後者の弊は徒らに精巧なおもちやを製つて能事終れりとなすにある。前者はあまり自由でない靈魂をもち、後者は靈魂を持つてゐないのではないかと疑はせる。

露風氏の象徴詩は今のところむしろ失敗である。芭蕉が一句もて盡した心境に數節の長詩をもつてなほ至り得ず焦慮する彼を見るのは氣の毒である。彼はむしろ纖細なソングの作者となるべきではなかつたか。『廢園』の本路にかへるべきではなかつたか。詩の努力して得らるべきでないのは彼のよく說くところである、しかも努力して「象徴詩」を作らうとするのは何の意であるか。自分は彼にマラルメたるより、ヹルレエヌになつて欲しいのである。象徴詩論は彼に取つては恐るべき毒婦ではなかつたか。とは云へ、彼が本質に――靈魂の奧底へ肉迫せんとする勇氣は自分の推賞せざるを得ぬところである。三木露風氏が天分ある人の失敗の一例であるならば北原白秋氏は巧妙なる技巧家の勝利の好例である。白秋氏は技巧家の外の何ものでもない、彼はおほよそ「人生の技巧家」である、彼は人生を常に外部からタッチしてゐる、形式からのみ見てゐる『邪宗門』の憧憬から、葛飾に紫煙草舍を設けるに至るまで、彼は常に外形をのみ追うた。幸福なる小唄「雨は降る降る城ヶ島の磯に」が我々に與へる快感は決して技巧以外のものではない。彼ぐらゐ日本語を巧妙に驅使した詩人は曾て無かつたであらう、しかし彼は曾て一たびでも人の靈魂を捉へる

ことが出來たであらうか。彼は巧みに民謠の形式を自家藥籠中のものとした、然し民謠の精神に彼は少しでも觸れる事が出來たらうか。かの象徵詩人がより多く情調を持つてゐるのに反し、彼はより多く言葉と感覺とを持つてゐる。彼が靈魂の詩人ならざるを證する著しい例としては、自分は殆んど相似た異常な經驗が、素朴で無技巧な加藤介春氏に『獄中哀歌』のやうな眞情の詩、純眞な哀歌を與へたのに、彼がたゞ僅かに壁上の黴の花を歌ひ得たのみだと云ふ事實を擧げたいのである。これを要するに、二氏共アリストクラチックである。露風氏が靈魂の狩獵をする「白き手の獵人」であるならば、(氏の獵があまり成功しないのは、氏の銃の惡いためではない、氏の眼が惑はされやすいためである) 白秋氏は邪宗門の異國情調に耽溺し渴仰する「白秋尊者」である。

然し新時代は來つた。國王と國王との戰爭の最中に、これ迄輕んじられ、或は認められなかつた强烈な力は勃然として頭をもたげて來た。それはデモクラチックな力である――赤旗を揭げた露西亞の民衆である、羅馬を滅ぼした北方の野蠻人である。福士幸次郎、福田正夫、白鳥省吾氏等の如きむしろ粗野なる人々である。

福士幸次郎――性格の人

新しいゼネレエションの先頭に立つてゐるものは、この長大なるカミイユ・デムウランの姿である。彼の『太陽の子』は新時代の第一の呼聲であつた。然し『太陽の子』は彼としては一つの大いなる失敗にすぎなかつたかも知れぬ、自分はたゞその指示する大いなる未來によつてこの詩集を非常に意義あるものと認める。「この殘酷は何處から來る」は曾て詩壇の一勢力を代表して發表されたものであるが、一ドストエフスキイ通がドストエフスキイの一部分の模倣だと評したにもかゝはらず、その詩に含まれた精神は、新興文壇の意氣込みを代表するに足るものであつた。あまりに纖細な感覺と、あまりに朦朧たる情調とに疲れた我々にとつては、彼の詩は一つの救濟である。月光の世界から日光

の國へ出たやうな眩しさをさへ、彼の詩は覺えさせる。

彼は石川啄木逝いてより、はじめて靈魂に食ひ入る詩人を迎へたやうに思はしめるが、然し啄木が否定と懷疑とに終つたのに反して、福士氏は肯定と戰鬪との詩人である。しからば彼は安價なる所謂人道家であらうか、否。彼は牛の如く重々しい。彼は根柢から動く。彼はいかなる場合にもその全人格をもつて行動する。彼の詩は彼のこの人格を形づくつた過去の幾苦鬪を幾分か暗示してゐる。彼の詩は忌憚なく云へば技巧が至つてまづい。しかもなぜ彼を重んぜねばならぬか。細工人のうまい詩に疲れた時に、眞實のまづい詩を與へるからと云つてもその答にはならう。がもつとわかるやうに云ひたい。ロオド・チヤザムの談話を聞いた者は、この人物の中には彼の言ふあらゆる事よりも、より貴いもの、より善いものが存することを感じた。またシルレルの名前の有するオーソリチイは、彼の著作に取つては餘りに偉大であるとも云はれる。然らばそれは何故か。エマアスンは云ふ、それは我々が「性格」と呼んでゐる、抑制せられたる力のためであると。丁度同じ事が、福士氏に向つても云はれないものであらうか。彼はたしかに性格を有する人物である。その點では彼はホイツトマンやヹルハアレンの如き人々の弟子たるに恥ぢない。これに反し、詩作に於ては異才を示し、人間に於てはやくざ者であると云ふやうな人は性格を缺いでゐると云はねばならぬ。そして今の詩人は多く之を缺いでゐるのである。自分は彼のリズムの研究には多くの望をかけない。たゞその性格から生れる强烈な叫びには多くの聞くべきものがあらうと信ずる。彼にむかつては、此の樹は美しい花はつけまいが、美しい實を結ぶに違ひないと思はずにはゐられぬ。よしまた美しい實を結ばずとも、此の魁偉なる樹は既にそれだけで美しいものである。恐らく彼はより大いなる著作をするであらう。然しその著書よりも、彼は常により美しくより偉大で止まるかも知れぬ。兎に角、彼は今の詩壇に取つては、あまりに眞實で——またそれ故あまりに過大である。彼の性格を認める事の出來ない人にとつては、彼は常に大きな未知數であらう。

「最も庶民的なる、平明純一の言葉がこの一卷に集められる。そして、そこに農民生活の眞實な告白がある。鮮かな民族の使命がある」云々の宣言をもつて、『農民の言葉』と云ふ一册の詩集が文壇に現はれた。かうした宣言だけでも既にその詩人に意義あるべきを思はせる。然し自分の期待はやゝ失望に終つた。

かつて筑波山下の病詩人横瀨夜雨氏は屢々田園詩人と呼ばれたが、彼は農民の詩人ではなかつた。今や神奈川縣の一村夫子は農民の代言者となつて現はれた。これ我が詩壇にはじめての農民の聲である。自分は必ずや其處に危機に瀕せる農村の悲慘な叫が聞かれることゝ期待してゐた。けれども作者は多く農民の喜びを歌ふことに傾いてゐる。農村の悲みはたゞ皮相にしか觸れられてゐない。（或はこの期待は自分の過失であつたかも知れぬ。）『四十男の縊死』『偉大なる農民』等の如きは頗る注目すべき作品である。自分はこれに賞讃の言葉を吝むものではない、前者の死人の素描は卓越してゐる、が「自分は泣いて笑つて默つて朝の空を見た」と云ふ作者の主觀はそれに比しては餘りに力が弱い。『低能兒』などに至るとその缺點は更に目立つてゐる。要するに彼は純朴なリアリストである、農村の活畫を鮮かに描き得る彼は、正にツルゲエネフの『獵人の日記』の如き行き方をすべきであらう。彼の飜譯するトラウベルの詩の然るが如く彼の詩もまた冗漫すぎる。この冗漫なことだけでも彼の散文に赴くべき人たるを思はせる。二個の長篇詩はとりわけこの感が深い。然しこの中には口語の詩の根本問題が含まれてゐるから、それに關してはこゝには沈默する。

なほ自分は作者に忠告する、作者は一個の幸福な農民であつてはならぬ。成程、日本の農民は作者と同樣に樂天的であらう、然し作者も彼等と同じ程度に粗雜であつてはならぬ、淺薄皮相であつてはならぬ、然らずんば折角の民族

主義も價値なきものとなるであらう。――かやうな非難はしたけれども、それでもこの一册は貴重な贈物である、作者は黑い土を持つて來た――アスファルトの敷きつめられた都會の街頭へ。ラアル・プウル・ラアルの論議の戰はされるその街頭のカフエの卓上に、泥のついた野菜を持つて來たのである。

福田氏がホレエス・トラウベルを紹介するやうに、大阪にあつて、佛語よりホイットマンを飜譯してゐる百田宗治氏も注目すべき詩人であるが、自分は彼の作は一二篇讀んだばかりであるし、彼のやうな未來ある人については他日論ずべき好機會あるを信ずるから、こゝでは彼を閑却したのではないだけを斷つて置かう。

萩原朔太郎――悲しき遊戲者

福田氏のいかにも農民的な粗末な詩集より萩原氏の贅澤な、貴族的な、大部の詩集に轉ずる時、我々は明かに全然別の違つた世界に出たことを感ずる。そこにはかの不幸な縊死した男もゐなければ、偉大なる農民もゐない、そこには唯病氣の朔太郎がゐる、否むしろ竹のやうな朔太郎の竹のやうな神經がゐる。この奇怪な『月に吠える』を見たならば、ボオドレルの『惡の華』を見た時のやうな驚きを感じたであらう、我々が奇怪なものに馴れ切つてさへゐなかつたならば。然し、これには『惡の華』のやうな惡魔的の力は缺けてゐる。『惡の華』のうしろに光つてゐる物の底の底まで見透すやうな鋭い眼光の代りに、この書には作者の甘い涙のにほひがする。外形はいかばかり奇怪で强烈らしくあらうとも、やはりセンチメンタリズムから生え出した弱々しい草にすぎない。野口米次郎氏は『天上の縊死』以下これらの詩を賞讃した、氏の「ノンセンスの文學」と云ふ曾ての紹介を思ひ合せたとき自分は微笑した。然しこれらの詩をノンセンスだと一槪に片付けてしまふのは理解のない批評である。歸するところ空虛なものはある。『内部に居る人が畸形な病人に見える理由』と云ふ奇妙な題をもつてゐる詩などがそれだ。が、かうした戲れをも彼は戲れと

は思つてゐないに違ひない。またその戯れには面白味がないことはない。一體に短い偶成的のものはすぐれてゐる、『苗』『山居』『天上縊死』の如きがそれである。より長いものは、彼のものゝ如き感覺的の詩の性質としてはやゝ無理であつて、爲めに缺點を暴露するやうである。その缺點とはつまらぬ興味——感覺が文字の戯れに轉じたもの——に引きずられて、奇を弄する事である。然しそれにも拘はらず、純粹で無垢な作者の性質は愛すべきものに思はせる。萩原氏と双生兒の如くである室生犀星氏は「詩人の狂氣」を有するグロテスクな人物としても興味があるが、その最近の妻子を歌つた(?)詩の如きは頗るいゝ傾向を示してゐる。

白鳥省吾其他——閑却しがたき人々

與へられた紙數は盡きた。ざつと書く。白鳥省吾氏は正しい路を踏みはづすまいとしてゐる詩人である、やはり現在よりも未來を思はせる人である。富田碎花氏のカアペンタアやモリスの研究がその素質を變へるかどうかを危ぶむとき、自分は、白鳥氏の素質に多くの望みを囑したい。碎花氏は覇氣ある人であるが、そのトラピスト訪問の如き失敗は恕することが出來ない。自分が失敗と云ふのは、その訪問が失敗だと云ふのではない、その訪問の動機が失敗だつたと云ふのである。詩人は好奇心に富んだ人々である。北原白秋氏が好奇心を滿足させんが爲めに小笠原島や天草に遊ぶのは少しも咎むべきことではない。然しトラピストはそれとは少し事が違ふ。アベ・ランセの名と結び付いてゐるこの宗教團は一片の好奇心の對象たるべく餘りに深刻である。その本質たる宗教的精神に對しては少しの理解も要求もなしにたゞその外形たる無言の行やはげしき勞働にのみ興味を寄せて一訪問者たる事は新時代の詩人に取つては一の恥辱ではあるまいか。彼の詩は遺憾ながらかゝる感を抱かしめる。彼の詩が好奇心以外のものを示す日に於て自分は此の言を喜んで取消さう。日夏耿之介氏はやゝペダンチックで唯美派的傾向を示してゐるが、彼が言葉の魅力か

ら釋放される時は見るべきものがある。西條八十、柳澤健の二氏は申分のない美しいリイドを時として與へてくれる。詩人ではないが、五十嵐力氏は「植久を悼む」の如き庶民的な詩をもつてその溫情を詩壇に注いでくれる。高村光太郎氏はその大いなる手を思はせる力ある詩を作る。其他まだ自分の紹介したい人は尠くない。これら白鳥氏以下の人人の中には前にやゝ詳しく論じた人よりもより高い評價を與へたい人もあるが餘白がないから、今はこれを他日に期するの外はない。

大正六年六月（「新潮」所載）

現歌壇の人々

一　現歌壇の風潮について

此前詩壇の人々の批評をした時、餘程公平にと心がけてゐたのだけれどはたから見れば隨分不公平にも見えたらしい。例へば、福士幸次郎君をあまり持上げすぎてゐると云ふやうな非難も耳に入つた。具體的に實例を擧げて說明するだけの餘裕が紙面の上にも時間の上にも無いのだから人をして首肯せしむるに足りなかつたのは止むを得ない次第である。今度はまた歌壇の人々の批評をすることになつたが、歌壇は詩壇とはまた一層窮屈なやかましいところらしいから、その批評となると隨分骨の折れる事だと思はれる。うまく行くかどうかは知らぬがやつて見る事にする。ただ一つ困つたのは材料が十分集らなかつた事である。何しろ今の歌壇にはいろいろの黨派（と云つては語弊があるかも知れないが）いろいろの團體があつて、皆それぞれ機關雜誌をもつてゐるのだから、とてもその全體に目を通すこと

は不可能である。で、その手に入れる事の出來なかつた雜誌に執筆してゐる人については、一般的雜誌に現れたものがあればそれによつて批評し、またつひにその歌を見る事が出來なかつた場合には、止むを得ず他日十分の準備をととのへてから批評する事にした。それ故若し重要な歌人で全然ここに閑却された人があれば、それは故意に默殺したわけではなく、右のやうな次第だとお含みおきを願ひたい。

さて、現歌壇をざつと見渡したところまづ目に付くのは齋藤茂吉、島木赤彦等の諸氏を中心とするらしいアララギ派の勢力が歌壇を壓してゐるらしい事である。北原白秋氏の如きも此派に入れていいやうである。之に對立して、若山牧水氏の一團と前田夕暮氏の一團とがある。それから土岐哀果氏、西村陽吉氏等の石川啄木の系統を引いた一派がある。そして一方には、吉井勇氏の如き歌壇の幹彥とも云ふべき人があり、更に與謝野晶子、金子薰園、窪田空穗諸氏の如き舊來の大家の各團體がある。以上がまづ概觀であるが、大體のところ諸派ともアララギ派的傾向を有し來つたやうで、これに對して特に顯著な對照をなすものは殆んどないやうである。强ひて擧げれば土岐哀果氏等でもあらうか。アララギ派の主唱になるらしい萬葉調の復興、相馬御風氏の良寬研究、引いては一般的の古歌研究、これがかの傳說主義の運動を相結んで、若くは多少の關聯をもつて、その主潮をなしてゐるものが今の歌壇である。石川啄木がその導火線となつた革新運動、破壞運動が、その功果を擧げると共に、ここにその反動を來し、今やその兩面がうまく融和せんとしてゐるのが歌壇の現勢である。卽ち、大體に於て、歌壇が順調の進步を遂げんとしてゐるのは疑ひを容れない。

二　釋迢空――齋藤茂吉――島木赤彥

釋迢空の名は近時各種の雜誌上に散見するところである。彼はアララギ派の一人であるらしい。その萬葉の研究は

餘程深いものがあるやうで彼のやうに萬葉調を自家薬籠中のものとなし得た者は蓋し稀に見るところだらう。きくならく近時萬葉の口語譯を出した折口信夫は彼の本名であると。自分は不幸にして未だ彼の口語譯を見ないけれども、彼の蘊蓄はその作品が最もよく示してゐると信ずる。今八月の「文章世界」に現れた作中から二三を引いて見よう。

十方の蟲こぞり來る聲きこゆ野にひとつ火を瞻るはくるしゐ

長き日の默の久しさ堪へ來つゝこのさ夜なかに一人もの言ふ

これらはその調よりするもその想よりするも近來の名歌と云つてよからう。

齋藤茂吉氏は殆んど現歌壇の中心人物たるの觀がある『童馬漫筆』と題して盛なる論爭を事とするので聞え、また萬葉の學者としても一般に認められてゐるやうだ。然しながら、その作歌がその盛名に相かなうてゐるか否かは尙ほ多少の疑問無きを得ない。ただ、その歌壇の重鎭たるの貫目を有してゐる事は何人も否み得ないところと思ふ。

島木赤彥氏は齋藤氏に次いで盛名ある人であるが、自分はむしろ齋藤氏よりも島木氏の方が藝術的天分が豐富なのではないかと思つてゐる。無論學殖の點から云へば齋藤氏が上であらうけれど。

三　北原白秋——吉井勇

近時歌壇の人として大に活躍してゐる北原白秋氏は新境地の開拓に非常なる努力をしてゐるやうである。今六月の「早稻田文學」に現れた『貧者の糧』を見るとその努力のあとがよくわかる。

父母の前に坐ればおのづから頭垂れ來て笑ふすべなし

掌を合せ淚こぼるる神よこの貧しきどちに糧を得せしめ

これらの歌の示す如く、彼は近時著しく人道主義的傾向を呈し來つたやうである。兎に角いい事である。然し、彼

は今新境地に達しようとする中途にあるのだから、ここではかれこれ云ふ事をさしひかへて置かう。白秋氏が人道主義的傾向を示してゐるのに反し、吉井勇氏は依然として情話的短歌に盛名を恣にしてゐる。ああした行き方も面白いには面白いが、せめて永井荷風氏位の深刻な心境に達して貰ひたい、あれではまづ歌壇の長田幹彦であるが、それが彼の獨特の世界だとすればはたから註文を持出しても仕方がない。彼が永井荷風氏位の年齢になれば、また何とか變化を示して來るであらうから、靜かにそれを待つ外はない。

四　前田夕暮——若山牧水——及び其一團

「詩歌」に據つてゐる前田夕暮氏の一派では三谷敬六氏が注目すべき歌人である。

ふるさとの物置の隅の石臼の下にこもらひなけるこほろぎ
兩國の丘の上なる停車場のぷらつとほうむふく秋の風

聞く彼は勞働者であると。「あせみどろになりて働く我が上に青くも澄める秋の大空」の歌に眞實味の含まれてゐる所以である。然し彼の生活の重荷を歌つた作は反つて叙景の歌などよりも劣つてゐるやうである。「詩歌」には此外まだ批評すべき人があるし、又若山牧水氏の「創作」誌上にも名を擧ぐべき人は多いが、どうも一體に顯著な特色を示してゐる人は尠いやうである。もつともこれはこの二派に限らず、歌壇全體を通じてさうなのである。今や短歌の流行は非常なものであるらしいが、その外面的の盛觀に比して特にすぐれたといふ人の尠いのは殘念である。しかしこれは一面から云へば、粒が揃つてゐるわけでもある。もつとも短歌の性質上、餘程飛びはなれた、又特殊の才能を有する人でないと注目を惹き得ないといふ事情もあるが、前田夕暮、若山牧水二氏の近業についても云ひ度い事は多いが、長くなるを恐れて、二氏の近況を概略すれば、歌壇の理智派として重んぜられた前田氏の方は些かも老いてゐな

いと云ふだけで近時あまり制作に耽つてゐないのに對して、若山氏は大に若返つて盛んに活動してゐると云ふ相違を示してゐる。

五　金子薫園——與謝野晶子

與謝野晶子女史が依然として舊來の面目を保つて敢て動搖をも見せないでゐるあの自ら信ずるところある態度は喜ばしいところである。八月の「新潮」に現れた『萱の葉』中の

萱のびて尺に尺添ふ草ならでくろ髪ならばをかしからまし

の如きは自分があらたに雲誦の歌中に加へたものの一つである。

金子薫園氏は十年一日の如く進歩もせず退歩もしない。これ實に彼の强味である、同時にその弱味であることは云ふまでもない。然し亡妹を弔ふ歌は、あの感情の淡々たる温藉なる君子人たる彼としては異常に强い力を持つてゐる。例へば

秋風に寺の樹木の鳴る中を戀ひ歩けども妹に逢はず

の如き彼の作として正に推奬すべき作だと思ふ。それと同時に、彼が自然詩人としての舊來の面目を保つて更に退歩のあとすらも見せない事はまた勿論云ふまでもないところである。

六　土岐哀果——西村陽吉

土岐哀果氏は近時作歌に遠ざかつてゐるらしい。自分は石川啄木の後繼者として、特に彼を尊敬し、且つその今後に深く望を屬してゐるものだから、特に之を悲む。彼の『街上不平』や、『不平なく』やの諸集は實に啄木の歌集に次

いでの貴重な新時代の產物である。自分は彼がアララギ派等の感化の下に屈する如き事なくして、益々自ら信ずるところに進まん事を切にすすめたい。他の諸氏の中には、隨分、いかにも歌人々々とした、まるで霞を食つて生きてゐるやうな歌のみ作り、歌と云へばあらたまつたよそゆきの口上でなくては間に合はぬやうに思つてゐる人もあるらしいのに、彼は常に生々しい現實の中からその歌を手づかみにして來る。前者の面白味も捨てがたいものとは思ふが、やはり自分の同情は後者にある。西村陽吉氏の『都會居住者』もまた此意味で重んずべき歌集である。

七　共他諸歌人——女流歌人

「水甕」に發表してゐる人で、珍しく主觀を直接に歌つてゐる大川傷春氏はここに名を擧げて置く必要がある。それから窪田空穗氏の「國民文學」には、十月會の古參たる松村英一氏、半田良平氏等のすぐれた人を初め見るべきものが多いが、やはり窪田空穗氏の作が最も貫目あるは止むを得ない。なほ近時雜誌「黑瞳」を發刊して、歌壇に新運動を起さうとしてゐる安成二郎氏もある。彼が純抒情、純主觀を唱道してゐるのは、近時の歌壇に對する警鐘と云ふべきである。まだ此外、尾山篤次郎氏、尾張穗草氏等の如く忘るべからざる人もある。

さて、今度は女流歌人である。この方には隨分見るべき人が多いやうだ、原阿佐緒、岡本かの子、茅野雅子、山田邦子、若山喜志子等の諸氏はいづれも定評のある人で、一流に位する人であらう。岡本氏は奔放な熱情の歌人としてユニイクである。遠藤琴子氏がその境地に近づいてゐたやうであるが、遠藤氏のは岡本氏ほど上品に行かなかつたやうである。山田氏は感情の平板で常識的なのを憾みとする。彼女に尊ぶべきは、その美貌にあるとは人々の常に談るところである。原氏と若山氏との歌は自分の特に愛好するところ、若山氏の作は人妻の眞の愛を最も純潔に歌ひ、原氏の作は時に哀調を帶び、沈痛の一味に觸れる事がある。また近時あまり制作を發表しないやうだが、三ヶ島葭子氏は美

しく哀れな歌を多く作つた。しかも十分の才情を有しながら不遇にして世に認められる事尠さを彼女のために悲しまざるを得ない。茅野雅子氏は今尚昔日の幽婉な調を失つてゐない。尚ほ一般歌壇には認められてゐないやうだが、「心の花」の女歌人白蓮氏の作と橘糸重氏の舊時の作とは、貴重なる主觀詩である。特に橘氏の作は明治歌壇殆んど唯一の沈痛な作品であつた。

大正六年七月(「新潮」所載)

二人の新しき詩人

人生の曙に於て世に公にせられる靑年詩人の第一集は、春の花のやうなもの、オクスフオオドの牧場のさんざし、若くはカムナアの野の櫻草のやうなものでなければならぬと云ふやうな意味のことをオスカア・ワイルドが言つたと憶えてゐる。おゝ何等の幸福! 美しい才能をもつたら若い詩人が、その靑春の夢を集めて、これを世に出して、私の生の曙はこのやうにして明けたのですと言ふとき、あゝそれは靑春のはじめのはつ戀のごとくに、またと繰り返すことの出來ない貴い美しい經驗でなければならぬ。そして北村初雄氏の「吾歳と春」の如きは、正にその春の花のやうな詩集である、北村氏は今やそのやうな美しい貴い經驗をしたのである。「心の秋」に近づいて、人生に於てただtaedium をのみ感ずるやうになつたものに取つても、此の詩集は興味のないものではなかつた。いとも短かりし靑春が、再び彼に歸つて來たやうにさへ思はれたからである。そんなにもこの詩集は若々しい匂ひに富み、人の心にあざやかな春の花の匂ひを漲らすのである。――人生に疲れた心に、「その失はれたる靑春を――よし暫しにしろ――再び齎したかのやうに思はせる位にも。

まるで老年の詩人のやうに、頑强に詩中に作者の思想を求め、哲學を求めんとする私は、此の詩集に十分の滿足を見出してはならぬ筈である。そして現時最も多作し最も努力してゐる流行性の概念を述べるに急な或種の詩人に拘からず滿足しなければならぬ筈である。が事實は必ずしもさうでなかつた。もとより、私はこの詩集に十分の滿足を見出さない、感激を以てこれを賞讃するのは（柳澤健氏のされたやうに）私としては差しひかへた方がいいと思ふ。然しこれに對して一種本能的の喜びを感じた事はつひに自分の心に隱し得なかつた。此中には殆んど一篇の Gedankenlyrik もないのだけれど。然し此「觀念詩」のない事はむしろ當然の事でなければならぬ、いかなる詩人がその靑春の日に於て疾くも思想を韻律の車で搬ぶ興味と必要とを感じたであらう。私はただ此の若き詩人の才能を愛する、稀れなる（我が詩壇にとつて）才能を持つて生れて來た此の詩人の靑春の夢を愛する。

北村初雄氏は橫濱の人である。此事はここに述べられるだけの價がある。何となれば、此は實に我が詩壇殆んど最初の海の詩人、港の詩人であるから。そして橫濱は海の詩人、港の詩人を出すに最もふさはしい土地なのである。

果實の上に震へる手、
震へる洋燈、動く椅子、
船長の娘かすかに
笑ふ、絲りの笑ひ。

これは「波」の一節である。私は我が詩壇でこんなにあざやかに海人の動搖を歌つた詩を未だ曾て見ない。序に言ふ、此詩集は僅か七十餘頁、二十餘篇の詩を收めてゐるのみであるが、しかもその半ば以上は海の詩、又は海に多少の關聯をもつた詩である。

柳澤健氏の推讃的批評（「時事新報」及び「詩歌」九月號）の或點には多少疑問は無いではないが、まづその「韻律的効

果」の多分に存するといふ言には全然同意せざるを得ない。次ぎに「繪畫的斷想」の豐富、或詩章の「印象派畫家の製作を想ひ起させる」といふ言にも同意する。氏の引用せられた、

「漁夫の娘は友と樂しく網を編む、砂床のあつさ、
口ずさむ小唄にふとも人の名まじりて、あからむ頰にふりかかる手と聲の響、見上ぐる眼に映る沖の帆、斷崖廻りて遞信馬車の喇叭も消ゆる、水際に濡るる陽の脚かるく、はかなく、はた強く飛べる」

の如きたしかに快よい一つの繪畫である。

今や詩壇は喧騷の聲を以て充されてゐる。最も大きな聲を出したものが、最もすぐれた詩人と見做されてゐると云ふ具合である。丁度見世物小屋、又はそれに類似したものが客を呼ぶ聲を思はせる聲もある。また救世軍の大道の說教を思はせる人もある。十字架とか茨の冠とか云ふ「偉大なる言葉」が曾て「やるせない」等の言葉ののべつに用ゐられたやうに安つぽく用ゐられるのをも見受ける。ただそれがその男性的な聲がその人の本質から出るものであればよいがただ私の老婆心は折角の威勢のいい大きな聲が空虛な響を傳へるやうな事がありはしないかを恐れる。ホイットマンが一時に輩出すると云ふ奇異なる現象を生じはしないかを恐れる。その獰猛なる絕叫が、物靜かなおとなしい弱々しい詩人の聲を壓しさつてしまひはせぬかを恐れる。强烈なる人格を背景にして始めて意味ある叫びが、ホイットマンやカアペンタアの氣の利いた「一讀者」によつて擧げられるやうなことがありはしないかを恐れる。私は詩壇のヒュウマニストには深い同情を有つ者であるが、ただ時としてその叫びの中に僞りの調子を見出すやうに思つて不安である。北村氏にはこの不安がない、氏はむしろこの聲に壓せられてしまふ側の人である、このためにばかりでも私は『吾歲と春』を推奬しなければならぬと思ふ。その代り北村氏には他の不安が伴ふ、これは私が三木露風氏に對して抱く種類の不安である。

『吾歳と春』の終には、「本」と題する二章の詩がある。それは童話の試みである。曾て童話を藝術の最高の形式とまで考へたノヴリスの弟子であつた私は、特にこの二章、「寶石の雨」「黒奴の卵」によつて大變喜ばされた。このナイイブな才能は貴い、それが稀れなる才能だからである。此方面に北村氏は美しい前途を望む事が出來よう。要するに此の若い詩人は、たしかな藝術家氣稟を有する、いかにも詩人らしい詩人である。若し少しく藝術上の經驗をより多く有すると云ふ僭越な自信からして、僭越な忠言を呈してもかまはないとすれば、私はこの年若い詩人にかう言はう、「君は美しい才能を有つてゐる、それだから誘惑も多い、それだから常に自分の本質に、自分の內心の要求に從はなければいけない、そしてそれと共に自分の生活を深めて行くやうにしなければいけない」と。

私は今一つ紹介すべき詩集をもつてゐる。それは向井夷希微氏の『胡馬の嘶き』である。曾て「讀賣」紙上で土岐哀果氏は北海道の一林務官詩人として起たんがために、職を辭して出京し詩集を自費出版し、且つそれによつて生活せんとしてゐると云ふ事を、或る驚嘆を以て語つてゐられた。私はそれを讀んで作者の稀れなる勇氣を考へるまへに一種悲痛の感に堪へなかつた。この林務官が卽ち向井氏である。氏は先づ『よみがへり』を著し、次いで今や『胡馬の嘶き』を公にされた。今その詩集が手元にないから、深くは云へないからこの快い感じを與へること、濁つた都會の底から擧げられる絶叫とは全く違つた素朴な聲を聞く事の出來るだけを云つて置きたい。この爲めに拂はれる多くの犧牲を考へるとき、私は冷靜な鑑賞を妨げられる。然し犧牲が拂はれる事多ければ多いほどその藝術は貴くなる、それは一人作者に取つてばかりではない——かう云つたため非難されたらされても關はぬ。

大正七年(「新潮」所載)

詩壇の趨勢とその收穫

我が詩壇は今や第二の曙を迎へようとしてゐる。これは喜ぶべきことである。今や詩人諸氏は非常なる緊張を以て、この美しき時に相面してゐる。然しながら、時として徒らなる焦慮と、無意味なる昂奮とを見るのは私の遺憾に堪へないところである。特に流行に迎合せんとするが如きは忌むべきことである。眞に自ら信ずるところある人は、決して輕卒なる盲動をするものではない。我等は流行の道を顧みず、ただ常に不易の途にのみ就かなければならぬ。近時、詩壇の中心勢力とならうとしてゐるのは、庶民主義の詩である、民衆の叫びである、私はこれを歡迎する。福田正夫氏等によつてこの一月より發刊せられた雜誌「民衆」の如きまことに有意義な事業と云つていい。然しながら、私は民衆派の人々に對して十分滿足するものではない、根本に於て、私は其處に詩作の上に一つの缺點を見、其の主張の上に一つの註文を有してゐる。ただその註文たるや頗る無理なものので、我國に於てはなほ尠からぬ犧牲を要とするものだから敢てこれを持出す事は見合せよう。詩としてのある缺點もここではわざと云ふまい。そしてその人々の勇敢なる樂天主義に敬意を表するに止めよう。ただ然し、その天分を異にしてゐる人にして、民衆派に追隨するが如き不見識を演ずるが如き事あらば眞に殘念である。されば私は或種の人々に豫め警告して置く必要を認めるのである。

さて私は今詩壇の美しい二つの收穫についてここに些か所見を開陳するの光榮を有したい。その一つは

日夏耿之介氏の『轉身の頌』

である。この最美の詩集については私は餘りに言ふべきことを多く有する。さればその詳しい事はこれを別の機會にゆづつて、ここにはただ簡單にこの高踏的なる詩家の特質を紹介するに止めて置かねばならぬ。日夏氏は、「生れたる

な事である。然し氏がその孤高寂寥の中にあつて自己の道を進み、嘗て迷ふ事のなかつた光榮ある歷史は私の同感と敬意とを禁じ得ないところである。現今の詩壇には敎養の缺乏が著しく目に付く。その多くの人には全然フイロソフイッシエ・ジンが缺けてゐる。これはその人々の讀書の範圍を檢察してもわかる事である、そしてこれはその人の世界の狹隘を示すものに外ならぬ。多くの議論がなされても徒らに他人の嗤笑を買ふにすぎぬのもそのためである。然るに、我が日夏氏はこれと異る。氏は敎養の人である、氏のありあまる敎養は(それは偏したものではあるが)或る場合には詩人としての不利益な點とさへもなつてゐる位である。そして時としては、ペダントリイと思はせる位である(然し私はペダントリイに關しては多くの人と異つた見解を有するものである)けれども氏の素質を知る事深くなるにつれて、氏がいかにその獨自一個の世界を開拓して行つたかを詳かに檢するにつれて、氏が閑暇なる讀書子ではなくして、より高き文化に屬する詩人であることを認める。また一面時代の批評家であり、孤高なる思想家であることを知る。

「凡ては眞實である」「凡ては正しい」これが現今のヒユウマニズムの詩人、デモクラシイの詩人の標語である。(それは然し遺憾ながら私の同意し得ないところである。)日夏氏はかかる樂天主義に反對する、氏は詩壇のみか、現代の日本の文化に侮蔑の目を向ける、それは氏にとつては「最大級のあらゆる唾棄に價する」ものである。氏の貴族主義が氏をして此の如く感ぜしめるのはもつとも事である。そしてこれが氏をして「反時代的精神」の見たらしめるのである。

西條八十氏は氏が「ギリシア詩人の風格を有する」といふ意の評語を述べられたやうに思ふ。氏の思想にヘレニズムの存する事は疑ひを容れないが、また氏の詩風にギリシア詩に見える端正と典雅とをも認めるが氏の世界は勿論ギ

リシア詩人のそれよりも複雜で近代的である。氏は「古風なロマンテイツク」を敢て恥としない勇敢なる人である。然し私に取つてはかやうな勇敢ほど近代的なものはない。我々はその反時代的精神に於て旣に時代の子である。形式の典雅と、クラシカルな香氣との故に、日夏氏を我々の時代に屬してゐないと評する者あらば、それは短見者流である、氏はその反時勢的傾向をむしろ誇としてゐる人ではあるけれども。

天才の謳歌者なる氏が「非力は褻瀆なり」の如きニイチエ的思想を抱いてゐるのは當然で、また私に取つて會心の事である。なほ氏があの貴族的なゴビノオの愛好者たる事はここに擧げて置かねばならぬ。神祕主義と一種の法悅の喜びともこの靜かな詩人の靈魂の中に深く巢くひその靈感の主となつてゐる。また――いや、私はあまり思想にのみ專らになりすぎた。私はこの集の有する美しい、然し超俗的な抒情詩的氣息について多くを語らねばならなかつた。けれどもそれは稿をあらためてやや長き評論に於て闡明する事にして、ここには氏の美しく力强き告白を揭げるに止めて置かう。

わが力は把手なき玻璃の手斧にして
わが智は煖爐の上に舞踏する黃臘製傀儡なり
わが肉身は街頭に渦卷く漏電にして
わが業蹟は暴風のあしたの砂丘のやうなり

次ぎに私はいま一個の興味ある詩集

室生犀星氏の『愛の詩集』

を評しなければならぬ。この中には凡てが感激である、すべてが單純である。そして著者の愛すべき人格が赤裸々に躍動してゐる。私が曾て通過し來つたあの(今でもなつかしい)世界がここにはある。それはあのシンプル・ハアトの世

界である。小兒のやうな心で、著者はその世界を喜んでゐる、その中で喜戲してゐる。もちろん、そこには多くの苦痛が存しなければならない、それはかのベエトオヹンの「苦痛を通しての喜び」でなければならない。室生氏はやや無邪氣にすぎるやうである。けれども、實はこの無邪氣さこそ尊いのである。だが、ああいつまで、この詩人はこの陶醉を喜ぶことが出來るであらう！　さう考へるとき、この『愛の詩集』一卷は更に尊いものとなるのである。この詩集は全然野生の人によつて書かれてゐる、その心の世界は剛健な原始人のそれである。決して文化に傷けられまた多樣にされ深められた人のそれではない。ここに不滿があり、また私の驚異がある。氏に對する二つの忠告はすでに北原白秋氏の序文中にある、その一は「今の君の言葉は流れ過ぎる。詩が散文でない限りより一層のリズムの純化を私は君に欲する」で、その一は「ドストイエフスキに對する盲目的感激から、眞の君自身を、君の愛を隔離し、愈君本然の眞の道に立たむ事である」である。私はこの『愛の詩集』に於て一個の愛すべき男としての著者を愛せずにはゐられない。

詩壇の收穫は更に豐富ならんとしてゐる。三木露風、富田砕花、白鳥省吾三氏の集は私の深く期待してゐるところである。

大正七年(「新潮」所載)

詩壇の復活

詩壇の復活といふことを考へる位、私には樂いことはない。そして詩壇は確かに今や第二の曙を迎へたのである、或は迎へようとしてゐるのである。本年の詩壇を回顧するとき、花どきのはじめに、あの樹この樹の梢にちらほらと

綻び初めた花の蕾を數へる漫歩者の喜びを私はひそかに感ぜずにはゐられない。然し、それが未だ公園でないのを、風流な貴族の私邸で止まつてゐるのを、今更に殘念に思はずにゐられない。

詩が一般人の興味と沒交渉になつてから既に久しいものである。私は鄕愁に似た衝動を以て、忘れた昔の夢を追ふやうな痛ましいなつかしさを以て、十數年前、私がまだ植民地に放浪してゐた少年の日——卽ち、雜誌「明星」がその勢力の頂點に立つてゐた輝かしい時代を、あの光榮ある星菫派の——當時この語は嘲笑の意に用ゐられた——ロマンテイシズム時代を追慕せざるを得ない。とはいへ、詩壇が長足の進歩をしたことはもとよりこれを認めるに躊躇しない。のみならず、私は今や詩壇が、涙と嘆息とあこがれとに殆んど窒息せんばかりの感傷的な靑年時代から、快活な生産的な壯年の時代に移つて行つて、その中間の沈滯期の灰色の幕の中から、血色のいい力の充ち溢れた顏を出すに至つたことを敢て祝福するものである。

北原白秋氏と三木露風氏とは詩人としては今年は殆んど全く沈默してゐたのに等しい。北原氏は散文の生活記錄者となり、三木は一種のヒユイスマンスの主人公の如きものとなつた。その間にひとり川路柳虹氏は、その川邊の枝垂柳のやうな纖細巧緻な詩風を以て、その初年よりも更に若く、「勝利」の一卷を我等に贈ることを得た。川路氏の詩風のパツションに乏い點は（もつとも これは單に氏のみに限らないが）遺憾であるが、そのペインタアとしてその刷毛（ブラシ）を用ゐる熟練さには及び難く思はしめる點が多い。

より年長の詩人中にあつては、岩野泡鳴氏が、ひとり語勢論等の論議に於て、川路氏等と爭ひ、氏一流の頭腦を示したが、マラルメよりもヴエルレエヌを重んじて、詩の理論的硏究に多くの興味を有たぬ私は、よしそれが啓蒙に貢獻するところがあらうとも、詩人はただ歌ふべしの敎へを奉じて、詩作以上にこれを重んずるわけに行かない。

福士幸次郎氏もこの種の科學的硏究に最も多く力を致したが、氏の今年の收穫と見なすべき僅少な詩作『感謝』の

如き氏の作品に、その率直と力量と、また生に對する尊い矜持とを得がたいものと思つた。惜むらくは、未だ一集をなすに足りなかつたが、明年、氏がその怠惰を補ふために、生のトリロジイを出す意圖のあることを以て慰めとしよう。

西條八十、日夏耿之介諸氏は惜しいかな怠惰に過ぎたやうである。山村暮鳥氏は『風は草木にさゝやいた』を出した。土田杏村氏の激賞あるに拘はらず、私は氏の藝術に或る疑を挾む。然し獨自的な或物の存在することを敢て否定はしない。

近時詩壇に勢力を得來つたのは百田宗治、福田正夫の二氏である。百田氏は『ぬかるみの街道』を出し、所謂民衆派詩人の最大級の讃辭を受けたが、其餘りにホイットマンであり、又其ホイットマンの腕瘦せて病弱なるは微笑せずにゐられない。氏は抒情の詩人として立つべき人である。

福田氏はその樽に水をまぜるのに忙しかつた、その創出になる二行詩の如き、何の意味を有するか了解に苦しむものがあつた。氏は未だあまりに若い、それゆゑ調子に乘るといふ可愛らしさがある。私は氏を愛するが故に、『農民の言葉』の純粹を失はないようにと警告して置きたい。

富田砕花、白鳥省吾二氏は、本年はさまで活動しなかつた。

室生犀星氏はより古い時代の抒情詩を集めて『抒情小曲集』を出した。稚拙にして純撲愛すべき作が多い。萩原朔太郎氏は全然沈默してゐた。柳澤健氏は、熊田精華、北村初雄二氏と共にポオル・フォルに獻ずる『海港』を出した、それに對する批評は別に書いたが、この東方のクレオル達の鋭敏な感受性と洗練せられた趣味性とは稀れに見る所であるが、かくまで自分たちの獨自性をあへて犧牲に供していとはない諸氏の謙虚は、驚くべきことである。

武者小路實篤氏をして日本で最初の詩人と呼ばしめた千家元麿氏の『自分は見た』を矢張り推奬せずにはゐられないものだ、ただ武者小路氏の如き感嘆符を以てでなしに。私が氏に第一に推服するのは、その所謂詩人臭を有しない

ことである。そして之が何よりだと思ふ。專門家は常に枝葉に走つて、根本を忘れてしまふ。彼等が細路の曲折を知つてゐる事を誇る時、氏は大道を步いて行く。詩人が一般に理解せられる事を恥づる理由のある筈はない。

この外まだ當然擧げなければならぬもので、私の目の及ばぬ爲めに落としたものがあるかも知れない。故意に默殺したわけではない。終りに私は來るべき年にかけてゐる私の期待が裏切られるやうな事がなく、詩壇が更に一般化し、美しい收穫を齎らさん事を切望して止まない。

大正七年（「時事新報」所載）

詩壇について

私はこれ迄詩壇にあまりに沒交渉であり過ぎた。私の詩が今の詩壇に取つて、若し一つのアナクロニズムだと思はれるやうな事があれば、それはみなさうした私の態度に基因するであらう。私はかまどの蔭に啼く蟋蟀のやうに、ひとりで歌つてゐたのであつた。けれどもこれからは詩壇に十分の注意を拂ひたいと思つてゐる。尠くとも詩評家として。ところで私は詩人諸氏の熱中にあづからなかつた爲、比較的に詩壇の弱點を看取し易い地位にあるので、自然詩壇について語る場合、いろいろの不滿を言はなければならないが、それも詩壇に對して、私がなほ尠からぬ愛を有してゐるからこそである。然らずんば私は全く沈默を守つてゐるであらう。

まづ詩の批評について一言すれば、私は詩壇には殆んど批評の存在しないことを殘念ながら認めずにはゐられない。詩壇が一般の文壇から全然閑却され、無視されてゐるのは、いかなる理由によつてであるか私は知らないけれど、我が文壇に於て批評家を以て任ずる人々は、例へばある詩を評し、或る詩人を論ずるといふやうな事は決してしない。

そこで詩壇に於ては、詩人諸氏が自ら詩の批評家として批評の筆をふるはざるを得ない。然るに詩人諸氏の批評なるものは概して感情的であり、偏好的である。特に趣味に偏して、心を虚しうして廣く鑑賞するの餘裕に乏しいのが詩人の常である。よし然らずとするも、(詩壇には優秀なる詩評家を以て許し得べき二三氏のあることも私は認めてゐる)詩人をして相互に批評せしめるだけにとどめておくのはまことに氣の毒である。私は、文壇の批評家諸氏が今少しく詩壇に注意をはらはれんことを望みたい。が、然し飜つて考へると、批評家諸氏(には限らないが)詩壇を閑却してゐるのは、全く理由のない事ではないやうに思はれる、そしてそれは一半は詩壇の罪であるに相違ない。そして私はその理由らしいものをいくらか推測し得たやうに思ふ。然らばそれは何か。それが卽ち私の今の詩壇に對する不滿の一つである。

今の詩壇はあまりに形式に囚はれすぎてゐるやうな事はないか。精神を閑却してゐるやうなことはないか。そしてその結果、あまりに專門的になりすぎてゐるやうなことはないか。詩の形式は勿論詩の肉體である。肉體を離れて我我は生存する事はゆるされない。語勢論や、自由詩の韻律論や、すべてみな結構ならざるはない。が、同時に詩人は單なる詩人でなくして一個の人間であることを考へる必要がある。ホイットマンの重んぜらるる今の詩壇に於て、かやうな事を言ふのは、恐らく徒らなる贅辯のやうに思はれるかも知れない。けれども、私は疑ふ、ホイットマン風の人間主義者の勇敢なる絶叫に於て、一個の人間を見ずして、あはれむべきホイットマンの影法師を見るが如きことはないか。而して、更に惡いことは、その人々はかやうな齶高なる論述にあらずんば何等の價値なしとするが如きことはないか。一方には象徵詩派が象徵詩以外を絶對に排斥し、他方には民衆詩派が民衆詩(かりにかく呼ぶのであるが、これがいかなる種類の詩をさすのか私には未だ判然しない)以外を極力否定するといふやうな偏狹な風がありはしないか。そしてそれがさらでだに專門的になつてゐる詩壇を更に專門的ならしめて、多くの人に門外漢の窺ふべからざるところ

と思はしめるやうなことはないか。詩人ならざる多くの文學者が、今の詩はおれにはわからないと言ふのを私はよく聞く。これは詩壇が一般の文壇より或は進歩してゐるためかも知れないが、私は何だかそこに詩人諸氏の最大の弱點が存してゐるのではないかと思はずにゐられない。

もつとも、現在の日本の詩人が極めて不幸な狀態に置かれてゐるといふ事は疑ひなき事實である。いかなる國、いかなる時代に於ても、今日の日本の詩人ほど無理をさせられてゐるものはない。私はかやうな困難な立場にゐる詩人諸君を一圖に責めることの甚だ殘酷なることを切言せずにはゐられない。音數律斥けられ、文語の廢棄せられると共に、詩人は何の武器をも有せずして戰場に立つ兵士の如きものとなつた。佛蘭西の自由詩の意義を直に我國の所謂自由詩に求むべきではない。國語の相違を無視した直譯論については私は疑ひなきを得ない。我國の所謂自由詩のリズムは散文のリズムといかなる相違を有してゐるか。その相違を文壇具眼の士に滿足する迄に說明し得る詩人あらば私は特に敬意を表したい。私の如きスケプテイツクは我國の詩の前途に對して十分樂觀してはゐられない。

詩壇の一波動に就て

近時、詩話會に多少の動搖起り、新進の詩人間に新しい團體運動の起された事を聞く。いづれも止むを得ざる事情に基づく事と思ふ。私一個の考へからすれば、詩人はひとり立つべし、純潔と孤獨と勤勉とによつて、ただすぐれた詩を書きさへすればいいのだ。一般に今の文壇に團體的勢力を恃んで衆を壓しようといふが如き傾向のあるのは私の取らないところだ。然しながら、その思想、趣味、傾向を等しうするものが自から相集まつて一つのグルウプを形成するといふだけならば、それは甚だ自然の事で寧ろ喜ぶべきであらう。ただ、私としては、從來詩人としていかなる

詩派にも屬しなかつたやうに、今後も文壇のいかなる團體的勢力にもたよらないで　單獨に孤獨に自己の道を進んで行きたいと思ふ。私が詩話會に籍を置くのは、例へば理髪師が理髪組合に加入するといふ以上の意味はない。藝術は個人の仕事だ。强き者はひとり立つべきである。

（大正九年四月）

逝ける詩人のために

——岩野泡鳴氏の死を悼む——

岩野泡鳴氏のなくなられたのは、全く意外であつた。時事の夕刊を見てゐると、岩野泡鳴氏云々といふ記事があつたから、また何か事件でも起つたのかしらと思つて見ると意外にも死去の報である。凡ての事に潔かつた氏は、死に於ても潔かつた。その人の運命もまたその人の性格の如く働らくものと見える。この二三年の間の氏の充實した藝術生活を想起すれば、人はその使命を全うする迄は死ぬものではないといふ平常の信念（それは屢々懷疑の刄に貫かれはするけれど）をまた新らしく强められる。

人生には何一つとして笑つてすませるやうなことはないといふ事を眞に心の底から感じて來た此頃の私には、岩野氏の死去によつて、この世のかくれた祕密を啓示せられるやうに感じる。輕い上滑りな心持で人生をごまかしてゐる殊に中年の大家にも泡鳴氏の死去は脅威のやうに思はれるだらう。

岩野泡鳴氏はいつも私に厚意を有つて下すつてゐた。一體に非社交的で、孤獨の好きな私は、一面には人なづッこい性格でありながら、自然あまり人を訪ねることもないのだが、とりわけ時の文壇に時めく大家の處へは、何だか權

門に出入するのだといふ氣がして、氣がひけて訪ねて行けない。それで氏にお目にかゝつたのも、去年の詩話會が最後であつた。けれども、十七八歳の小僧の時（今でも小僧だが）に、大久保で遠藤清子さんと同棲してゐられた時には、かなり度々お訪ねして、いろいろと詩を雜誌などに紹介して頂いたことも多かつたのみならず、氏の『闇の盃盤』から明かな感化を蒙つてゐる私は、平常尊敬と感謝とを捧げてゐる詩壇の幾人かの先輩の中に氏を數へてゐた。氏の逝去は全く惜しいことに思ふ。けれども一面から言へば、氏はいい時に死なれた。その生の最も高調に達してゐる日に、死の手に奪はれる人こそは、最も幸福な人である。ああ、世にはいかばかりの憫れむべき生存者が多いことだらう！ 滿開とともに散つて行く花の潔さこそ私の愛するところである。

氏は少しも憎げのない人だつた。その無邪氣な傲岸さは微笑に値するものであつた。數年前のことだが、或る書肆で譯詩の叢書を出す計畫のあつた時、私はその相談を受けたので、私は氏のホイットマンの譯を推奬して、その原稿を頂かうと思つてお訪ねしたところ、氏は「それはやらんもんでもない、が、君等のやうなものの話では當てにならん」と言つて、あの特色のある鼻から煙をプーと吹かれた。それはいゝとして、それから暫くして、私は歸るみちみち氏の愛すべき性格をO君に說明した。一緒に行つたO君はすつかり憤慨してしまつたので、私が大杉榮氏を訪ねようと思つて西大久保の通りを步いて居た時、後からいきなり「おい、こら〱」と呼ばれたので、何しろ注意人物を訪ねようといふ時だから、これはてつきり巡査に呼び止められたのだなと思つて、吃驚して振返つて見ると、泡鳴氏であつた。田中王堂氏と二人連れで向うから來られたのを私の方では考へ込んでゐて氣が付かなかつたのだ。その時氏が「おい、この間の話はどうなつた？　うまく行くか？」とやつぱり氣になるやうに訊かれたのは面白い。

詩話會で會つたとき（會合の嫌ひな私はたつた一遍きり出席しないのだが）は隨分久し振りだつたが、片隅にひつこんでゐる事の好きな私を、自分の陣取つてゐられた眞中のその傍らにまねぎ寄せて、「詩集が賣れるといふぢやない

か？　長い間苦しんで來たんだから、そんなこと位あつてもいい」などと言つて下すつた。私はうれしかつた。

（大正九年）

詩壇近事

——附「牧羊神」及「時の流に」を讀む——

詩人は餘りに饒舌である。饒舌はよし、識者の輕侮を買ふに止まる一知半解の絕叫は止めよ。何等の詩才なく、何等の見識なき人々が、ただその聲量が絕叫に堪ふるの一事によつて、より弱き喉を有する詩人を壓服しつつある現狀は、これなほ忍ぶべしとするも、その爲めに詩壇のすべてが低能兒の集團であるかの如く一般に目せらるることは、奈何とも忍ぶ能はざるところである。その時、現に余の知れる一作家は明かにかく斷じた。しかもその時、これを否定することがかなり後めたく感ぜられたのはかやうな勇者の跳梁の余りに顯著なりしによる。私は曾つて、「大きな聲を出したものが勝だといふ有樣だ」と時の詩壇を評した。遺憾ながら此の言は、今に於て一層の眞實を帶び來つた。彼等をしてその喉を誇らしめよ、曾つては私もかう云つて眼を轉ずるを常とした、つひには詩壇の事には今後全く關知しまいと考へた、然し私は詩壇のお祭り騷ぎや、馬鹿ばやしには全然沒交渉でゐたいと思ふけれど、詩壇に跋扈跳梁を恣にしてゐるかの粗雜な散文主義に對しては、最後の一線までも力爭する決心である。

「サンエス」十月號に於て近藤經一氏は外形も內容も共に空虛な現今の似而非詩を非難せられた。恐らく一般の輿論を代表する正論として、私もこれをかの粗雜なる野心家諸氏に奬めて、その反省を求めたいと思ふ。ただ野心の外に、世間的名聲に對する渇望の外に何物も見出し難き無意味の散文を、わづかに行を切ることによつてのみ、麗々しく詩

の名を冠して發表する英雄等よ、諸君は自れが心ある人々の嗤笑と蔑視とのもとに、肥滿せる鈴つき頭巾のクラウンたるに過ぎぬことを未だ悟り得ないのか。諸君の自負は一場の愛嬌として看過しよう、諸君の謙遜なる眞詩人に對する暴言と壓倒とはつひに余の忍び得るところでない。最近余自身に加へられたものに對しては、少しく答へるところがあつたが、余は此上幾度びでも應戰することを辭せない、のならず場合によつては挑戰することさへも辭せない、余の手套は投げられんがために存するのである。然し、余は自身の個人的問題にのみ執するものではない。余は文學的正義のために立たんことを思ふ。あらゆる不當の名聲（そは彼等の同志間に於けるそれが詩壇に無理解なる文壇の水平に反映するにすぎぬ謂はば空米相場の如き名聲であるとしても）を批評し、埋れたる眞詩人を世に紹介することが、余の評家としての當然の任務である。殊に後者に於ては、余は尠からぬ光榮と期待とを禁じ得ないものである。

私はまづ、一人の無名の詩人を想起せずにはゐられぬ。昨年或ひは一昨年であつた、毎月寄贈を受ける多くの華かな詩集の中に、私は一冊の質素な二十頁ほどの小册子を見出した。『世田ヶ谷の野より摘めるなし草』と題して、十數篇の詩を集めたもので著者は中村憲と記されてゐたけれど、その住所もなかつたので、私は私の感謝と感激とをその謙遜な著者に送ることが出來ないで、ひとりその奧床しい心を愛するに止まつてゐた。山羊を歌つた詩、山羊の賣られて行くのを悲しむ詩などの多いところから見ると、その人は世田ヶ谷の野に山羊を飼ふ寂しい牧人であるかも知れない。詩壇の騷音と蠻聲とに耳を蔽はんと欲する私は、この靜かな隱れたる詩人の衷心の聲に耳をすます時、云ひ知れぬ幸福なる陶醉を覺え、反つて自れの喧騷を恥づる心をさへ覺える。

野草刈る路の、かたへにて
我が小き詩(うた)の一節(ふし)
蹴(け)やるとも、

君よ、
我唇は
君が爲めに
祈禱を絶たざらん。

これが卷頭の詩であつた。またから云ふ詩もある――

我心は
新しき酒に躍れど
弱き心、惱む魂
哀愁を嘆ちて
物の音の寂默を驚く、

またから云ふ詩もある――

海ほほづきの
香の、うたを
君が瞳によむ
我が日の旅――

何と云ふ靜かさ、何と云ふしめやかさであらう、私はこの無名の、また敢て名聲を求めようともしない、奧床しい詩人中村憲氏を茲に紹介することを喜ぶ。願はくば世田ヶ谷の隱れたる詩人の健在ならんことを。

上田敏先生の遺著『牧羊神』はつひに私の机上に頂くことが出來た。何といふ尊い贈物であらう。此重厚なる一卷

を前にして、私はまた更めて博士の多年の功績を想起せざるを得ない。詩壇の大家諸氏の作中に、いかに博士の譯詩の摸擬の夥しきかを思へば、詩人の心情の空虚に驚くよりも、博士の事業のいかに絶大なりしかを痛感せざるを得ない。本書中には珍らしくも博士の生涯の詩作の全部とも云ふべき五篇が収められてゐる。殊に卷頭の『牧羊神』の如きは眞個の大作にして、博士の人生觀を寓せられたるものの如きも、譯詩家としての博士に對すれば、創作家としての博士は、やや遜色なきを得まいかと思はれる。若し夫れ譯詩に於ては、粗笨なる散文以下の散文詩人等のまさに三讀して發明すべき作詩の規範たるべきジユウル・ラオルグの自在を極めたる口語譯をはじめ、マアテルリンク、ヹルハアレン、グルモン、私の永く愛し來つたフエルナン・グレエグの『われは生きたり』——

このわが小さき瞳にも
ただ稻妻の束の間に
久遠にわたる光明は映りたらずや、
われも亦聖なる宴に列りて、わが歡樂は飮みほしぬ、
また何の望かあらむ。
われは生きたり。

の莊重、ポオル・フオオルの『別離』——

せめてなごりのくちづけを濱へ出てみて送りませう。
いや、いや、濱風、むかひ風、くちづけなんぞは吹きはらふ。

に始まる有名なる小唄の輕妙をはじめ、一卷すべて嘆美と嘆賞とに値しないものはない。殊に嘗つて雜誌に發表せられたものと比較して、隨所に驚くべき斧鉞のあとを見ては、博士の熾烈なる藝術的良心に打たれざるを得ない。「海

潮音」の功績は既に歴史的事實として動かし難いものとなつてゐるが、その中にはなほいくらか窮屈なあとが見えぬでもなかつた、私はこの『牧羊神』に於て、驚くべき自在の調と、全く創作とも云ふべき獨特の意義とを遺憾なく翫味することを得た。敢てその調を摸擬せよと云ふのではないが、詩人は野郎自大の怒號と紛擾とを止めて、暫くこの尊い詩壇の聖典に沈潜することが最大急務であらう。

『牧羊神』と殆んど時を同じうして、私は竹友藻風氏の『時の流に』を戴いた。これを手にして、私は昔日の兩者の友誼を思ひ、些かの誤解からその友誼を破つた私自身の愚かさを思ひ、暫く感慨無量なるものがあつた。曾つて一九一三年の頃、竹友氏の作が「三田文學」「スバル」等に毎號現れた時、私はその靜かなる調を喜んで、のち私の第一詩集に收めたところの一篇の詩を賦した、

されどかのうるはしきやさしき子は生ひ立ちぬ、
しかして立琴をかなづるいみじき詩人とはなりぬ。
人を厭ふ心にたえず追はれて、
我れは死の蔭の谷にも似たる沼邊にすわり
草苗につきぬ嘆きをこめてぞ吹く。

私は自らを哀れなるフリジアの牧人に比し、竹友氏を美しきアポロオンの立琴の詩人に比した。今日、氏の多年の詩作を集めた此の集に對する時、私はこの昔日の自己の詩句を想起せざるを得なかつた。

竹友氏は反抗否定の詩人ではない。世紀末の呻吟、悲鳴の聲などは玆には見るべくもない。上田博士の序文に「愼ましくしをらしい淸敎徒の少女を憶起させるニウ・イングランドの後園のやうだ」とある評語は、此上一語をも加へる必要もないほどに適確である。一脈の信仰の流れは時に懷疑の芥を浮べつつも洋々として流れ去るところは、英國の

最も英國的な詩人と基調を等しうするとも云へよう。

あはれみたまへ、主の傷手に、
指もて觸れむとするおろかなる心を。
おろかなる懷疑の森をすぎて、
むせびつつ流れゆく祈禱の聲を。

かやうに、むしろ懷疑を楽しむ詩人とは反對に、懷疑を直ちに「おろかなる」ものとして排するこの詩人は、時として

淚はつひに信仰にあらじ。

と嘆くことはあつても、直ちに、

わが靈よ、うれひの心よ、
遣瀨なき冬の夜も寂しきひとりの部屋に、
いつまでも祈りてあれかし。

と云ふことが出來るのである。ここには凡てが調和的で、靜穩で、且つ淸朗である。

わが心傷つくとも、破るとも、
いかに宿命はつらくとも、
人いかにつれなくあらむとも、
わが道はすべて幸なり。

と歌ひ得る詩人はいかに幸福であらう。與謝野先生はその跋の中で「君がbeaux rêves と君が bon coeur とを敬愛して居る」と云つてゐられるが、まことにこの一卷より汲み出づるものは何よりも著者の溫和な善き心である。中には

（例へば『わかれ』の如く）上田博士の影響が著者の本色を沒却してゐるやうなものもあるが、『祈禱』『浮彫』『巡禮』の諸篇は此の冬枯の時に、初春の初花の如く薰じて、我等をして蘇生の思ひあらしめる。私は此のしめやかな畫廊を眺め行く時、騷がしき今日の詩壇の絕叫をはなれて、古人と共に談るの思ひをなした。そして私はまたも詩人はいかなる慟哭と嗚咽とに顫ふとも、常に典雅と沈靜との姿態を失うてはならないとの訓めを更に肝に銘記したのである。

私が日頃敬愛する福士幸次郞氏の『展望』についても所思を披瀝したいと期しつつあつたが、既に增田篤夫氏の周到なる批評も現れて、やや時期を失した觀がある。また井上康文氏の第一詩集『愛する者へ』も私にいろいろなことを考へさせてくれた詩集であつたが、ある惡い影響は見えながらも井上氏の純粹な特質に美を見出し得たことを記すに止めて置く。『惱める森林』の著者多田不二氏、其他の人々についても他日にゆづらねばらぬ。

與謝野先生は『時の流に』の跋に於て、「詩壇には今 prosaïme の暴風が吹いて居る」と云はれた。曾てあんなにも美しかつた花壇も今日はかくも慘憺たる荒廢を呈してしまつたか、いやさうではない、この雜草をさへ除去したなら美しい花も目に着くであらう。空虛なる詩工と、その詩工の巧さへも缺いでゐる野放圖な「若い衆」とが跳梁を逞しうしてゐる今日の詩壇に於ては、詩人と呼ばれる事はむしろ恥辱であらう。かの新進作家をして詩人の痴愚を諷せしめ、蔑視せしめるに委せなければならぬのもまた止むを得ない、眞に詩人と呼び得べき人が反つて詩壇の外に存するといふ奇異なる現象を呈してゐる今日だからである。私が立派な詩人として尊敬してゐる人は、例へば倉田百三氏にしても、吉田絃二郞氏にしても、武者小路實篤氏にしても、詩壇の人ではない。また千家元麿氏や、其他二三氏の如き眞の詩人はむしろ詩壇の繼子扱ひをされてゐて、ひとりかの「若い衆」が横行濶步し、また歡喜雀躍してゐるのである。然しながら「今」は常に斯の如きであらう、私の小さな反抗もまた憫れむべき痴愚であるかも知れぬ。

ただ、いかに寂しくとも苦しくとも靜かに自れの道を踏むもののみが眞に生きる事が出來る、それが直ちにその酬

ゐであり慰めである。不幸なる眞の詩人には、私はこの言葉を慰めに送りたいと思ふ。

大正九年十月十一日(「新潮」十一月號所載)

詩壇一年の回顧

また一年は過ぎた。この一年は、私にとつてはあらゆる不滿と失望との、殆んど無意義な一年であつたが、詩壇にとつては、これ迄に先例のない程の生産的な、豐饒な一年であつた。詩の復興は多くの人によつて叫ばれた。詩集の出版されたものも非常な數に上るであらう。私が寄贈を受けたものだけでも二十册位はあらう。然しながら、詩が、詩壇が、一般文壇に輕蔑せられ閑却せられてゐるのは、なほ依然として遺憾ながら蔽ひ難い事實である。新進作家宇野浩二氏は「現今の詩人と批評家とは小說家より二三段低級だ」と斷言してゐる。詩人が憫れむべき無自覺の狀態にある限り、この酷評は殘念ながら眞實である、餘りに眞實である。ただ我々が言葉の最も正しい意味でのポエトである場合に於て、我々は彼等專門的小說家を「我々より二三段低級だ」と敢て揚言し得るのである。私は詩壇が人間性(ヒユウマニテイ)と餘りに沒交渉にすぎるのを常に殘念に思つてゐる。私が新しい民謠の作者となつた時、私は豫期したことではあるが、詩評家によつて「低調」と呼ばれなければならなかつた。詩壇は狹小な詩人趣味から全然解放されなければならぬ。然らずんば折角の詩壇の復興も無意義であらう。

×

本年現れた詩集で私に忘れ難い印象を殘したものはかなり多い。室生犀星氏は『第二愛の詩集』を與へてくれた。そして氏が人間性の詩人だといふ事を一層確かめさせた。「感情」に現はれた『抒情小曲集補遺』の「斷章三」の如き愛

誦措く能はぬものがある。川路柳虹氏は氏が批評家として詩壇に稀なよくものゝわかつた人である事を示した。が、氏の小曲集『はつ戀』及び今年は現れるに至らなかつたが時局を歌つた『曙の聲』の二集もうれしい贈り物である。部分的に見た印象では後者は日本人の聲よりもより多く佛蘭西人の聲ではないかといふ縣念があるが、前者の女性的なやさしさは氏の特質を最もよく示してゐると思つた。『砂金』の幸福な著者西條八十氏は、長い間の自重の後にこの精選せられた珠玉を以て詩壇を飾つてくれた。氏の童謡のポピユラリテイもまことに道理のある事である。有名な『かなりや』は暫く措いても、『手品』の如き何等の才情ぞ。富田碎花氏の『地の子』と白鳥省吾氏の『大地の愛』とは共に久しく期待した集である。二集ともその概念的になつた作よりも、一瞬の情緒を捉へ得たものを私は愛する。前者の「一九一六年篇」中の佳篇と、後者の田園を歌つた詩の如きは、兩氏の反對者と雖も服せざるを得ないものと信ずる。

×

詩壇の一般的傾向と反するものには、近く藤森秀夫氏の『こけもゝ』があつた。佛蘭西風の纖細と巧緻とに反して、ここに獨逸風の自然詩、即ち民謡直系の天眞を見出したことは、特に私にとつては喜びに堪へないところだ。多くの拙さはありながら、信濃の高原詩人三石ぐわんも氏の詩集『びいどろ』の中の若干と、詩評家の非難は得たが三石勝五郎氏の俳味に富んだ二三の短い詩と、近く現れた勝田香月氏の『旅と涙』とは推賞に値する。この最後の詩集は多少技巧的になつたところはあるが、その自己に忠實なのが何よりである。詩壇には全く閑却されてゐるが大田黒元雄氏の作品と、宗教的情操に貫かれた佐藤淸氏の『愛と音樂』とも注意されなければならない。「水甕」の詩人矢野峰人氏は『默禱』を出したが、未だ認められてゐない、同誌の御手洗堯夫氏にも前述の藤森秀夫氏と同じ意味で特に詩壇の注意を喚起したい。

×

盛名ある詩人では、福士幸次郎氏は長篇詩『展望』を出した。私は日本語で書かれる長篇の詩には疑ひなきを得ないものであるが、氏の才能はいろんな制限を飛越してゐる。が私は氏のより短い作品を嘆賞する。日夏耿之介氏の作品には私は唯一篇しか接することを得なかつたが、堀口大學氏の『流れよるオフイリヤはなきか』とともに忘れ難いものであつた。百田宗治氏、萩原朔太郎氏、山村暮鳥氏等の作品には全く接することを得なかつた。福田正夫氏は詩劇を矢繼早に發表した。日本語で書かれる韻文劇、其は一つのアイロニイとしか聞えないとしても、氏の朗々たる音吐と其聲量とは驚嘆すべきものであらう。「民衆」三月號の『井上康文詩集』は井上氏の折角の才能が平凡な概念のために驅使されてゐるのを惜しませた。

×

雜誌「詩王」は同人の創作の外譯詩と紹介とによつて多くの貢獻をした。柳澤健氏は創作は甚だ少かつたがいい紹介があつた。北村初雄氏、齋藤正雄氏、熊田精華氏等は佛蘭西詩壇の新聲を傳へた。霜田史光氏は別にポオル・フオオルを想はせる田園の詩集『流れの秋』を出した。『月に棹して』の如き絶妙の技巧は、所謂「うますぎる」といふ文壇語を用ゐたい位である。

×

川路氏の「現代詩歌」は其多くの貢獻を措いても、すぐれたる女詩人澤ゆき子氏を出しただけでも特筆すべき値があらう。女詩人にはなほ「詩王」の山口宇多子氏、近く詩集『聖水盤』を出した米澤順子氏などがあつた。後者は西條八十氏の影響の見える作風で、始めて詩を發表した人とも思へぬ程十分の完成を示してゐた。正富汪洋氏の「新進詩人」も二三のいい素質を有する新人を紹介したが、私は正富氏自身の依然たる若さを喜ぶものである。巡禮詩社の「詩篇」は熱心に天才藝術を主張した。岩佐賴太郎氏、矢部季氏をはじめ、いづれもその感覺の鮮新を尊ぶ。

譯詩に於ては川路柳虹氏の『ヴエルレエヌ詩集』富田碎花氏の『草の葉』、白鳥省吾氏の『ホイツトマン詩集』、馬場睦夫氏の『ボオドレエル惡の華』等のいい牧穫があり『日本詩集』、『日本象徵詩集』の如き意義ある年鑑も出たし、まだ言ひ落としたが、千家元麿氏の『虹』や、多く舊作の新集ではあるが北原白秋氏の『白秋小唄集』の如き傑れた集も出てゐる。其他「盜人」の如き名作を含む竹村俊郎氏の『芦茂る』をはじめまだ言及したい人と作品とも多いけれど、與へられた紙數が盡きたから、遺憾ながらこれでこの回顧を終る。

大正九年十二月十四日(「讀賣新聞」所載)

×

詩壇の近業

詩壇の益々一般的となり、益々盛んになつて行くことは、詩を愛する我々に取つて此上もない喜びである。勞働に疲れた時、私は新しい詩集を手にして、ところどころ頁を繙して行くのが樂しみである。かうして極めて稀れな閑暇を、身に新しい魂の世界の漫步に費すをりに、美しい風景が忽然として眼前に展開する時の、その喜びはまた何にたぐへよう。かうした發見は、寂しい心には尠からぬ慰めである。今、さうした私の散策を、思ひ出づるままにここに三四記すことにする。

私の若い友人、勝田香月君は、さきに『旅と淚』の一卷を詩壇に贈り、今また『どん底の微笑』を贈つた。前者が世に迎へられたわりに、詩壇の反響を喚起しなかつた事は、君に取つて誇りともなつたらうが、また寂しい事でもあつたらう。それは君が「私は認められずして旣に忘れられたる詩人である」といふ、寂しい「日本の一詩人」の言葉

を引用した事によつても察せられる。然し嚴密に批評と呼ぶべきものの殆んど存在しない詩壇に於ては、それは多くの若い詩人の運命である。もつとも最近に至つて福士幸次郎氏の月評も「短歌雜誌」に出るようになつたけれども。詩人に對する報償はただ徐々として來る、我々は辛抱強くそれを待たなければならない。しかもその事を全く念頭に置くことなしに。『どん底の微笑』を『旅と涙』に比較する時、そこに疑ひなく生長と開展のあとの見える事は、甚だ喜ばしい事に思ふ。中にはやや乾燥した談理に墮したものもないではないが、「シルレルやマシュウ・アーノルドの詩を尊重する私は、哲理的の詩を愛するものではあるが」「山の中で歌ふ」のやうな淸澄な詩を尠からず見出し得るのを喜ばしい事に思ふ。

この山奧の靜寂の中に
わたしはまつぱだかになつて汗を拭く
嬉しさうに湧いてくる山水
わたしは禮拜してそれを吞む

『つめたい床で』のやうなセンティメンタルな詩には、依然感興の横溢したものが多い。そして前集よりも感じ方に深みが加はつてゐる。後半の小曲には勝田君の才氣を十分うかがふ事が出來る。かうした傾向の作品を出す以上は、勝田君も詩壇のある一派の人々に非議せられる事を覺悟してゐなければなるまい。けれども、それは恐ろしい事ではない。二年、三年の後、五年の後、十年の後、いいものは必ず認められる。功績は必ず酬ゐられる。私はその點だけは安心立命してゐる。

正富汪洋氏は私の長上である、長上に對する禮をもつて私は氏を俟ちたい。氏の『豐麗な花』はこの現詩壇の長老の久しぶりの新集であるが、そこに若い多情多恨の一靑年を見出した時、私は驚かずにはゐられなかつた。氏はその

私淑してゐるゲエテからこの若さの祕術を習得されたのかも知れない。ファウストと一緒に魔女の厨で藥を飮まれたのかも知れない。そこで、多少藥が利きすぎた點も認められる。けれども詩人老い易き今日、それすらなほ慶賀すべきではなからうか。

貴女(あなた)と私と對ひ合ひ
語る一間に月がさす
あなたの膝のさき二寸
そこまで白う月がさす。

かうした作は氏の最も得意とせられる處であらう。「凉夜」の第二聯の如きに於て、私は單に長上としてでなくして氏に對して深い敬意を抱かずにはゐられなかつた。そこにあるあの純化、それは氏に對する、極く僅かではあるが、私のある危慮を安心させる。そこから氏の前に淸澄な深い世界が開かれる事が信じられる。

氏の『戀のゲエテ』も私には感謝すべき勞作であつた。私は氏の詩を讀んで、氏がなほ更に沈思の人としてのゲエテにも目を向けられむ事を望む。

堀口大學氏の『失はれた寶玉』は氏の前著『昨日の花』の愛讀者なる私には尊い贈物であつた。氏はここに佛蘭西の多くの寶玉を集められた。(それはこの謙遜な題にもかかはらず、なほ寶玉である)佛蘭西人は何といふ愉快な人たちであらう、彼等には哀傷でさへも樂しい玩具である。重い獨逸のゲミユウトの海を泳いでゐる魚は、時々この佛蘭西の輕いエスプリの大氣の力に頭を出して息を繼ぐのだ。然しその大氣のあまりに輕く、手答へのないのに戸迷ふこともある。グウルモンの作など、多少私には思考すべき問題を與へる。最も簡單に言へば、彼は私には才人にすぎるやうに思はれた。シヤルル・ゲランの、

冷たい水の中へおどりこむ子供のやうに
　わななき乍ら人生の中へとびこめ

は私には有難い言葉だ。彼の「心」もまた好きである。私は何とはなしに僅かしか知らないこの詩人を愛する。さて、この一卷を通讀してみても、我々が佛蘭西人に學ぶべき多くのものをもつてゐる事を今更に感じないわけには行かない。佛蘭西人によつて、自分の輕佻、輕浮、輕薄さへ辯護しないならば、（ある人々が曾つてなしたやうに）私は佛蘭西人の晴れやかさに學ぶのは、無益な事ではないと思ふ。

大關五郎氏の『愛の風景』には短かいものの中に氏のいい素質を示したものが多い。

　わすれなぐさがさきました
　貧乏な男と女にも
　やさしいしづかな
　空色の花が咲きました

詩壇にはなほ多くのまさに現れようとしつつある詩集がある。川路柳虹氏の詩集や、室生氏、福士氏、百田氏等の共著になる『都會と田園』などそれである。私は子供が明日の遠足を樂しむやうに期待しつつある。それからまた島崎藤村氏の五十年誕辰の祝賀を記念すべく、『現代詩人選集』の現れるのも喜ばしい。私は他の編者諸氏に自己の怠慢を謝さなければならぬのだが、幸ひに諸兄の御盡力によつて、この明治大正詩壇の一大記念碑の建てられた事を喜ぶ點に於ては敢て人後に落ちないのである。

大正十年三月（「新潮」所載）

或る自然詩人

考へて見るともう十六七年にもなる。私がまだ朝鮮を流浪してゐる少年だつた時分、一日釜山の町を散歩してゐた時、長手通のある小さな本屋で、偶然見つけたのが、河井醉茗氏の詩集『塔影』であつた。

『塔影』は、その日から私の愛讀の詩集となつた。詩人としての私に、始めて最も多くの影響を與へたものは、この『塔影』と與謝野先生の『毒草』とである。いつぞや島崎藤村氏の五十年祝賀會のあつた時、その卓上演說で河井氏は、藤村氏の『若菜集』を愛讀して、一個の詩人となるについて、非常な影響を享けたことを言はれたが、私にとつては、一つは偶然の機會から、それが、『若菜集』ではなく、『塔影』と『毒草』とであつたのである。私が藤村氏の詩を知つたのは、ずつと後、東京へ出てからである。

かういふ親しみのある河井醉茗氏が、最近『塔影』以後の詩（氏にはその間に散文詩集『霧』などの著作はあるけれども）を集めて、詩集『彌生集』を出された。この詩集を讀んだとき、私は自分の少年時代の夢を偲び、且つあの親しい『文庫』時代のロマンテイツクムーヴメントを思ひ出さずにはゐられなかつた。

その時分のロマンテイツクな諸詩人が殆んど全く、時代の浪に浚はれた今日、河井醉茗氏が、同じ溫藉な人格、同じ靜かな、ゆるやかな格調を傳へながらも、あの私の愛誦措かない『塔影』中の傑作『都はづれ』の、

　早稻田の稻の自ら
　穗に現はるる才もなく
　詩に瘦（やつ）れては秋の野の

草に捨て行く調のみ

などの詩句に現はれてゐる謙虚な人柄と、懐しい調とを糸曳き乍らも、近年にすさまじい勢で進歩した詩壇の歩調に、敢て後るることなき、健やかな歩みを示されてゐることは私の喜びに堪へないところである。

今の詩壇では、騒がしい絶叫でなければ俗耳に入らない。狂人と愚人とであることが、詩壇に起つ一つの資格であるとさへ憤りたい瞬間すらもある。抒情詩の滅亡時代が來たと思ふことさへもある。こんな時には、河井氏のやうな吟詠は、少し遠くにゐたのでは聽きとれないかも知れない。氏の奏でるものは、

雨にうたれて鳴く聲の
つらさ、かなしさ。
休むこほろぎ
鳴くこほろぎ
忘れてうたふ音色の高さ
わかくしさ。

そのこほろぎのやうなしめやかな靜かな調べだからである。しかし、本當に詩を愛する心の人は、喜んでその聲を聽くであらう。氏の口からは、激しいパッションの叫びは聽くことが出來ない。生々しい生の激動も見出すことは出來ない。

氏の最近の作中には、すでに五十近い(と憶えてゐる)詩人の聲とは思へない元氣のいい、若々しいものもあつて、そんな發現を氏から豫期してゐなかつた私は非常に驚きもし、また動かされもしたのであるが、しかし、その基調は矢張、温雅な、物靜かな、懐しい『塔影』の詩人である。

「人間ばなれ」などの詩に現はれてゐる人生離合の哀歡と、人間に對する本當の愛情とは、如何にも作者の慕はしい人格を示してゐる。波の退いた後の砂に殘つた波の跡に、悠久な自然の間に生滅する人間の運命を暗示した「波のあと」の如きも、深く胸に殘る作品である。「五月」中の

布をしぼればあざやかに
窓は五月の野に對ふ、
わが生活は靜かなれど
生命は今日も新しからむ。

の遠い昔を偲ばせる調べもなつかしいものである。

かうした記憶すべき作品は、この集には可成り多い。ただ中には、感情があまり溫和し過ぎて、私などには、少し物足りないものもないではない。しかし、私の見るところでは、人間の詩人といふよりも、自然の詩人である氏の、自然に對する細やかな感じ、如何にも自然と同化するといつた趣は、特にこの集をして、多くの意義あらしめてゐると思ふ。

河井氏はまづ、何よりも自然詩人として評價されなければならぬ人であらう。眞に氏の如きは、西行、芭蕉などの古日本人の傳統を繼ぐことの出來る一人であらう。とにかく、私はこの「彌生集」一巻によつて、私の敬愛してゐる、この先輩の生活の靜かな歩みと、急ぎなき纒まりとを知り得たのを喜ばしく思ふのである。

大正十年七月(「新潮」所載)

この批評と並べて佐藤春夫氏の『殉情詩集』の批評を發表したるも、その切抜を紛失す。

詩人の言葉

×

この二年ばかり前までは、私はニイチエ――このハアメルンの捕鼠者の魔術にすつかり捕へられてゐた。彼が笛を吹いて、子供達を引きさらつて行く、その子供たちの一番最後に私もついて行つた。

ニイチエは普通詩人哲學者と云はれてゐる。彼の哲學は一時私の全生活を支配しようとさへした。弱蟲の私に取つては、彼の君主道德は一つの驚異であり、天啓であつた。然し、それも今では、私に取つては、單に詩としての意義しか有たないものとなつてしまつた。詩として見る時、ニイチエの述作は、その韻文は勿論であるが、その散文の警語も、また極めて多くの意義を有するのである。ニイチエの思想には反感を感ずる人でも、彼の抒情詩には愛着を禁じ難いには違ひないと私は信じてゐる。

然るに、今の我が詩壇では、ニイチエは殆んど全く閑却せられてゐる傾きがある。これは私の不思議に堪へないところである。それはいい飜譯に乏しい爲めでもあると思ふが、また一面には、詩人の視野の狹小をも意味してはゐないだらうか。

×

私は、特に詩人的教養といふものを認めない。然し、或る種の人々は、私などの行き方に對して反感を有たれるかのやうに感じられる。私は信ずる、詩人は先づ人間でなければならないと。詩を讀むのはもとよりよい、然し詩でなければ讀まない、詩人とレツテルのついた人に關係した書物でなければ讀まないと云ふのは少し偏した行き方のやう

に思はれる。我々は先づ人間として生き、且つ惱むべきである、我々が眞實に生きる上の問題に躓いてゐる時、凡てのものはその救ひである。かうして、私は廣い範圍に亙つて讀書する事を必要な事だと考へる。然し、私は讀書萬能論者ではない、否、反對に、此頃では讀書のつまらない事をしみじみ感じてゐる、知識を增すものは憂ひを增す、學問は反つてその人の目を曇らすに終る事をつくづくと感じてゐる。けれども、されぱとて書物は悉く高閣を束ねてしまふ事は、もはや我々には不可能の事となつてゐる。今の私の考へでは、讀書はなぐさみである、そのなぐさみの中から立派な啓示を得る事が出來たなら、望外の幸福だと思ふのである。

讀書の事は別としても、私は詩人が餘りに專門家風になる事は喜ばしくない事に思ふ。さういふ傾向が兎角、花鳥風月的詩人を養成したり、徒らに外形、形式にのみ囚はれて精神を閑却したり、ただ趣味だけの詩人を輩出せしめるに至るのである。それは詩人と云つても、幾通りもあり得るだらうとは思ふ、またあつて差支ないとも思ふ。然し、いつも下らない形式に囚はれて物を言つたり見たりしてゐると云ふ事は、當人に取つて非常な不幸な事ではなからうか。本當に人を動かすためには、まづ自ら動かされなければならない。心から出たもののみが心に行く。眞に人生の深い惱みに觸れない人の詩は、客間の裝飾品とはならう、暢氣な閑人に「何だかいいやうな」感じは起させるかも知れない。けれども、ただそれだけのものだ。つまり、それでは第一義の詩人とは言へないのである。

私が國木田獨步とか、綱島梁川とか、又は石川啄木とかを、眞の詩人として重んずるのは、彼等が人生の大きな問題に常に相面して、苦しみ惱んで行つたからである。外國の詩人を考へて見ると、一人としてさうした眞劍な苦惱を經なかつた人はないと言つていい。從つて彼等の作品からは、立派な人生觀、徹底した哲學を引き出すことが出來る、決して小綺麗な細工物や、調子のいい世迷言ではないのだ。

×

私は感覺を輕視するものではない。けれども、ただ感覺のみの詩人が果して有意義であるかについては、深く疑ひなきを得ない。私は象徴主義の哲學には多くの親しみを感じ、意想外にこれを尊重するものではあるが、日本の所謂象徴詩といふものから、餘り大した意義を見出し得ないのを悲しむ。中には尊重すべき象徴詩人も無いではないが、象徴詩の美名を借りて、その無思想と無内容とを蔽ひ飾らうとするが如きは恥づべき Charlatanism である。

實際、今或種の詩人の間には、一種尊嚴のヴエールを纏つて仰々しい尊大振りを示し、つまらない事にも勿體をつけて、後進を眩惑させようとするやうな、さうしたさもしい Charlatanism が存在しないであらうか。若し、さういふ事があるとすればそれはその人に取つてまことに惜しむべき錯誤であるばかりでなく、詩壇に取つても多くの損失である。我々は、我れ人ともに嚴に自らいましめて、かやうな空しい外部的な尊大自得に陷る事のないやうにしたいものである。細川幽齋の歌道の奧傳と云つたやうな馬鹿々々しい事は、考へて見ても恥かしい事ではあるまいか。

（大正十年九月）

詩人より詩人へ

伴野君。御約束してゐた原稿が遲くなつて、たうとう一月遲れになりましたが、これは私の目下の事情を御察しになつて御許し下さる事と思ひます。今日は『相寄る魂』の校正も暫く杜切れましたから、久し振りに少し打寛いだ氣持になつて、兎に角思ふままを書き記して見ませう。

今、私の机の上には『曼珠沙華』の七八月號が開かれてゐます。それについて私の感想を先づ述べさせて頂き度い。諸君が短歌より漸次詩の方へ向はれたのは、かねがね私の希望してゐたところですから、外の何人よりも私に取つ

て喜ばしい事です。私は短歌をも愛するものですが、我々の感情なり思想なりが複雑多岐になるにつれて、歌では十分の表白を見出し得なくなると云ふは事實です。優しい可憐な感情の持主である女性に取つては、歌と言ふ形式はまことに恰好の樂器に違ひありません。また、我々とても時とすると此の樂器によつて奏でたいと思ふ時もあるのです。然しいつでもこの纎細な樂器だけにたよらうとするには、最早我々の指端が餘りに力强いものとなつてゐるのではありませんか。

それで、諸君も詩の方へ進んで來られたのでせう。

伴野君。君が八月號に書かれた『バイロンに思ひを送る』の一文は、君の詩を想起しつつ讀んで、感興措く能はぬものがありました。この激情の詩人が、今の詩壇で全く閑却されてゐる事は、私の常に遺憾としてゐたところです。これはハイネも同然です、一般的にハイネは(勿論バイロンも)よく知られてゐる代り、詩壇的には何だか少し輕じられ寧ろ輕蔑せられてゐるやうな氣がしてなりません。殊にバイロンはこれ迄適當の譯者がなかつたので、その名のみ高くして、つひにその風格を本當に知られてゐないのが殘念です。

それ故此の際君がその『カイン』を譯せられると云ふ事は、私には大變喜ばしい。どうか『カイン』のみならず「天と地』も、續いてまた『マンフレッド』も、『タッソオの嘆き』も、殊に『ドン・ファン』をも譯して貰ひたい氣がします。

私はゲエテの『ファウスト』を屢々取出して讀んでゐます、そして常に感心するのですが、然しまだ何だかその間に超え難いギャップがあるやうで、その感心と云ふのが多少後入的に感じられて、恥しく思ひます。それに反して、バイロンの『マンフレッド』は私には直接的に訴へてくれる氣がします、その作の力に溺れてしまひたい氣がします、(この點はレナウの『ファウスト』も同然)これには私の或る意味での反抗的な性格も多少手傳つてゐるのでせうが、

然しこの同感には決して後入的なものが感じられない。つまり、バイロンは私には好きな詩人なのです。

ところでバイロンより君自身の詩作に轉ずると、ここにも、君が無益にバイロンの譯者でない事が窺はれる。勿論、そこにはいろいろな相違もある、また、例へば「同胞よずるい人達がゐる」などに見えるやうな、まだ未完成な、謂はば青く垂れた果實のやうに、來るべき紅熟の日を偲ばせるものもある、けれどもこの精神は私の壯とするところであり、深く同感するところでもある。「花園の主人」などは君の持つてゐるものの豊かさを思はせ「胸を傾けて」の如きは（この作は恐らく君の傑作の一つに數へていいだらうと思ふ）その含蓄に富んでゐる點で惹き付けられました。ただ、君の持つてゐるものが隨分豊富であり複雜である爲めに、それが未だ十分に統一されてゐないやうな點はどの作にも多少感じられるやうに思ひます。然し、これは反つて君の將來の華々しい事を豫想させるもので、私は今からそれを樂しみ、且つ君の不斷の努力を望みたいのです。

中山伸君の諸作中では、私の趣味からすれば『恐ろしき幻影』が最も好きでした。孤獨の王樣、腹心のない王樣、我々は結局、その魂の奧底ではその王樣だ。『そこに我々の誇りもあれば寂寥もある、中山君はよくその悲哀を表現したと思ひます。然し、『白い手の野道』は、その寂寥をもつと違つた、明確なイメエジによつて我々に傳へてくれる、この作も私はすぐれた作だと思ふ。

荒川元君の作では、短い小曲を感心しました。『鶺鴒』もいい。

朝の風吹き、
わが心、旅人となる。

は決して容易には得られない句です。『河原蓬』に至つては、私は深く愛唱せずにゐられない、荒川君は自然の魂に觸れる事をよく知つてゐる人だと私は思ひます。

概して云へば、伴野君、君と中山君とは比較的長い詩に成功し、荒川君は比較的短かい詩に成功する人のやうに感ぜられます。これは或ひは誤つてゐるかも知れませんが別に改つた批評としてでなしに單なる感想として讀んで下さい。

伴野君。君が「私は光榮あるバイロンの頭上に今一つ新らしい民衆詩人の冠を飾らうとする。……方今日本の民衆詩人、ホイツトマンを看板にする貧弱な詩人以て奈何する」と言つた言葉は、全く私の言ひたい事を言つてくれたやうに思つたのです。「おゝ民衆よ！」「おゝ勞働者よ！」と呼號するものが必ずしも眞の民衆詩人ではないのです。然しこの民衆詩人についての私の見解は、他日親しく御話したいと思つてゐます。

終りに君の健康を祈つて、今日はこれで筆を擱きます。

大正十年八月一日（「曼珠沙華」九月號）

詩壇一年間の回顧

福士幸次郎氏は創作は殆ど發表しなかつた。その代り、論爭に於て最も活動した。純理主義をふりかざして、神祕主義の排擊に努めた。これに對して最も熱心に神祕主義（象徵主義）を辯護したのは川路柳虹氏であつた。自分は福士氏の立場に最も同情を有するもので、現時の詩人諸氏のあまりに哲學的修養（言葉は大袈裟だが）を無視してゐるのを、遺憾としてゐるものである。更に之を一層忌憚なく云へば、思想を缺いてゐるのを惜んでゐるものである。この點で福士氏はその誇りに相當してゐる。然し、詩壇が漸次思想的になつて來てゐる事は事實である、そのあまりに直譯的であり、流行性を帶びてゐるのを憾みとするけれども。三木露風氏は最も多く攻擊された。萩原朔太郎氏の激烈な非難はしばらく措くも、福士氏の非難もかなり執拗なものであつた。三木氏はそれらに對しては一切沈默を守つてゐた

が、創作には力のこもつたものを出した。ただ時代の潮流が氏を漸く除外し去らうとしてゐるのは爭はれぬ。氏はもはや詩壇の代表者ではない、傍流としては、氏の詩風はなほ多くの魅力を有してゐると思ふ。北原白秋氏は詩と遠ざかつてゐた。たまたま發表する『一九一五年のノートから』の詩の如き著しく無意味であつた。藝術座の『生ける屍』のために作つた詩の如き、自己の本領に於て遺憾なく失敗してゐる。自分が曾て氏が俗謠の眞精神に觸れる事が出來ないと云つたのは無責任なる放言ではない。併し氏もまた傍流の詩人として尊ぶべき人であるのは言ふ迄もない。白鳥省吾氏は少しく論議も事としたが、その創作に於て大に見るに足るものがあつた。十一月の「文章世界」に現れた『秋』(?)の如き眞個の抒情詩的氣息を有してゐた。

山村暮鳥氏は最も活動した。然し、私は卒直に言へば疑ひの目をもつて氏を見てゐた。學殖の豐富を以て稱せられる新進の一評家がいかに氏を激賞しようとも、私は氏の作によつて少しも滿足させられなかつた。沂時氏の『小さな穀倉より』を卒讀して、私の氏に對する疑ひは氷解した。この集はアフォリズムの形式であるだけに、氏の持つてゐるものがはつきりわかつたのである。詩人がアフォリズムの形式を採用するのは賞讚すべきであらう。『蟻の形は3である』といふやうなことによつて人を驚かす時代は過ぎてゐるが、此集にもところどころ珠玉の存するのは自分と雖も否定しないところである。例へば「詩人は詩を作らなくなるとき最も詩人である」の如き勤勉なる山村氏に於てなほ此の了解あるを喜ぶ。萩原朔太郎氏も活動した。氏の敍事詩的傾向を排する論は同意すべきものであつた。氏の作は其後愈々興味がある、然り興味がある。自分は福士氏の如く時代に對する批評が、ひとり福士氏と萩原氏とにのみあるとは信じない。然し氏が一種の興味ある詩人たるは疑ひない。室生犀星氏も活動した方で、漸く詩集を出さうとしてゐる。序に言ふ、氏の集は『愛の詩集』といふ、白鳥氏の集は『地の子』といふ、(福士氏は數年前『太陽の子『を出した)富田氏の集は『大地の愛』といふ。自分はこの題によつて既に何ものが詩壇を支配してゐるかを知り得る。而して詩

人諸氏が敏感な人々であることに一種の微笑を禁じ得ない。富田氏は十分活動した方ではなかつた。トラピスト訪問の詩によつて自分は氏を攻擊したが、氏に敬意を拂ふ日の一日も早く來らん事を望んでゐる。福田正夫氏は漸く詩壇に勢力を得て來たやうだ。氏の民族主義が、直譯的、直輸入的である事は別として、兎に角かかる主張を有する詩人の出現した事は喜ぶべき事と思ふ。加藤介春氏は人見東明氏の作詩を絕ち、且つ世に忘れられた今日、尙ほ倦まざる努力をしてゐる。氏が詩壇の中心勢力とならなかつたのは、氏の作になほ靑春の力を保留せしめてゐる所以である。川路柳虹氏は論爭にも努め、雜誌の刊行にも努めた。北村初雄氏は「未來」より出た有望な新詩人で、第一詩集を出した。それは曾て自分も世に紹介したところである。「未來」にはなほ川本宇生氏といふ頗る獨創的な詩人がある。八代東村氏は「詩歌」の一隅に隱れてゐるが、大に認められて然るべき人である。氏は曾て都會詩人の假名を以てやつて知られたが、氏は今年もそれに相應する報酬を得なかつたやうである。これ詩壇の文壇に輕んじられてゐる爲で、また此のほゐに詩壇は輕んじられてゐるのである。制作に忙しい、制作を發表するに忙しい勤勉なる詩人はいつしか第一流の詩人と云はれる。最も勤勉なるものが最もすぐれたる詩人とされる。雀のむれでは最も多辯な雀が頭領となるものである。すぐれた批評家を有しない詩壇は禍である。すぐれた詩人の多くが何故に詩壇を見棄てたか？　三木氏は名人と云ふものは一事に沒頭すると言つて、暗にある種の詩人を非難したが、然し自分を以て見れば、專門の詩人たらざる人にすぐれた人があるやうである。また全然詩人（この名は文壇では尊敬を伴はない）ならざる人に、本質的の眞正の詩人（言葉の眞の意味に於ての）を認める。その人々にして始めてかかる詩壇に滿足しなくなるのである。この事に關しては多くの言ふべき事があるが、然し自分にはその興味がない。詩壇には風馬牛であるのが賢い。自分も我が詩壇には絕望した一人である。こんな一年の回顧など書くのが抑も間違つてゐるのだ、まだ擧ぐべき名は多くあるが紙數がないからこれでやめる。（大正十年）

詩壇について

此頃の詩壇の隆興はまことに喜ばしい。多年閑却せられてゐた詩人諸氏の努力が、今や漸く酬いられて來ようとしてゐるのは祝福すべきことである。曾つて柳澤健氏も嘆じてゐられたやうに、小說萬能の文壇は、詩に對しては、何等の市價をも認めなかつた。ただ紙面の餘白をふさぐため、若くは一種の裝飾としてのみ、雜誌は詩を掲載してゐた傾きがある。詩人は物質的に酬いられることは絕對に斷念しなければならなかつた。詩を作るより田をつくれといふ通俗な言葉は、この數年の我が詩壇に於て最も適切な敎訓であつた。それがかうした大勢の誘致につれて、漸く改善されさうな傾向の見えるのは喜ばしいことである。物質的方面のことをかれこれいふのは詩人として恥づべき事のやうに思はれてゐる。然しそれは偏見である。詩人といへども食はなければならない。僕は石川啄木の「食ふべき詩」といふ語を、最も卑近な意味で唱へたいと思ふ。詩がただ一部富裕な人の手にのみゆだねられてゐる場合には、詩壇を擧げてディレッタンティズムに墮する虞れがある。私は詩がもつと一般の民衆に接近することを希望してゐる。詩は元元其性質として、貴族的なものに違ひない。然し民衆の詩を要求してゐるのも事實である。夫故、私は今の民衆派の人々が事實に於ては一般民衆と全く無交涉なことを大變遺憾に思ふ。

近時の詩壇に行はれる、長篇敍事詩や所謂詩劇といふものに對して、私は疑ひなきを得ない。私は一體に長い詩には趣味を有たないのであるが、それを單なる自分一個の偏癖だとは思はない。それには、言ひ得べくんば、十分の科學的根據すらあり得るのである。リズムは呼吸である氣息である、そして我々の呼吸は甚だ短い。現に行はれてゐる長篇の詩に於て詩と詩との間に散文を見出さないことは稀れである。(いな、或る場合には徹頭徹尾の散文すらもある

のだが）抒情詩は短詩形たるべきことを主張したポオの言はさすがに卓見である。いかなる有爲な詩人でも、中途で事務的になることなくして、卽ち單なる詩術の運用を誇ることなくして、長く高いリズムに堪へ得ないのである。行を切りさへすれば詩だと思ふのは大きな間違ひである。

殊に我國に於ては、我が日本語に於ては、私の言は最も有力な後援を得てゐる。三十一字更に進んでは十七字の詩形は、我々に最も適した詩形であることをその發生とその歷史とによつて明示してゐる。この二つの詩形に小規模な謀反を企てた人々は、必ず自己の愚を表明するのに外はなかつた。そして我々詩人は、我々外國文學の渇仰者は更に愚かではないか、この疑問に對しては十分抗辯することが出來る。我々は單に外國の詩形の模擬者であつたのではない。我々は萬葉の長歌の復興者であつた。我々は在來の詩形に戀々として不合理な變革を加へるほど愚ではなかつた。我我はより複雜な、より深奧な感情の世界を示さうとしたのである。然しながら、我々は常に適度の距離に止まるの外はなかつた、そこから引返せば我々の存在の意義は失はれ、そこから進みすぎれば我々は滅亡の外はなかつた。我々の詩形は最も自由であるべく見えて最も不自由なものである。〔卽ち、我々が復興した長歌が萬葉以後滅亡し去つたのが何等の理由なくしてでなかつた以上、そしてその理由がその詩形が我々に適しなかつたといふことの外に見出しがたい以上、我々は全く勝算なき戰ひを戰ふものでないかとの疑問が起る。

然しながら我々の詩形は存在の理由をもつ、いなこれのみが存在の理由をもつ。短歌と俳句とは最も親しむべき形式である、然し我々が今後この詩形に據るのは、不聰明でもあり無意味でもある。なぜなれば、それは旣に完成し盡した形式だからである。我々は愛誦すべきあまりに多くをもつ。俳句は子規（多分私はその方の知識に暗いから斷定は出來ないが）短歌は晶子に於て完成したとも云へよう。その後は我々はあまりに多くのエピゴオンに惱んでゐる。アララギ派が勢力を得、齋藤茂吉氏が一般の敬意を得てゐるのは、悲慘な亞流時代のなさけない窮狀を示すものであ

る。この時に於てなほ意義ある作品を出すためには、非常な才能と眞實とを要する、それは天才石川啄木にして始めてなし得るところである。そこでいろいろな小變更が企圖される。新傾向句や、口語歌などがそれである。が、一體なぜそれ等の人々は俳句とか短歌とかの形式にそれ程執着するのであるか、十七字の制約を失つて何處に俳句があり得るか、三十一字の束縛を棄てて何處に短歌があり得るか、口語歌に至つてはただそれは思ひつきですねと挨拶すれば足りる。要するにこの二つの詩形はどのみち完成してゐるのである、今は新作すべき時でなく鑑賞すべき時である。近時の歌壇が古歌の研究に沒頭するの觀あるは尤ものことである。十の『赤光』よりも一の『金槐集』を、十の何々よりも一の『山家集』をである。いな萬葉の一卷と與謝野晶子夫人の歌集とさへあれば決して寂しきを憂へないとさへ思ふ。そして今の時代に適するものは我々の新しい詩に外ならない、それは未だ完成されてゐない、それだけ隨分混亂もし、亂雜でもあるが、それだけ愈々もつて意義があり得るのである。然しながらそれは決してあまり長大に失してはならない、これは根本的の制約である。

長歌が短歌に壓倒された所以を考へれば、我々はむしろ新しい短歌の形式をつくるぐらゐの考へでゐなければならないかもしれない。一體に近代の詩はすべて短詩形である、敍事詩の如きは小說の勃興した以上全くその存在の意義を有しなくなつた。然し我が國にあつては、その國語の性質上どうあつても短詩形でなくてはならないのである。一體我々の散文が旣にリズムの濃厚なものであるから、特に詩とよぶのは、むしろ詩のエッセンスである。と見ても差支なからう。エッセンスがそれほど豐富な量を有しようとは思はれない。

この點に於て、我々の詩形は一見無制限のやうに見えて、その實嚴密に制限せられてゐるのがわかる。長篇の詩が不可能だといふのではない、價値あるものを産出するのが困難だといふのである。散文の行を切りさへすれば、ホメロス以上の長篇敍事詩といへども容易に出來よう。だが、それが何になる？

詩壇偶感

詩劇と叙事詩とについて

福田正夫氏や井上康文氏の努力によつて、「わが詩壇にも既に數多の詩劇が提供せられたが、福田氏は更に叙事詩の方面をも開拓する意氣込みで、既に「高原の處女」一卷を我々に示された。不幸にして或種の誤解から小曲詩人を以て目せられた自分は、又詩劇や叙事詩の反對者のやうに考へられてゐるが、共に誤つてゐる。日本語で長篇叙事詩を書く事は果して可能であらうか、それは自分の疑問としてゐたところで、その態度が不幸にしてそんな誤解を生んだものらしい。然し事實は、自分は今進んで叙事詩に筆を着けたいと考へてゐる位である。なほこの問題については、他日ゆつくり論じて見たいと思つてゐる。

自分は果して小曲詩人であるか

小曲の詩人と目せられるに至つたのは、自分の受けた最も不幸な誤解の一つである。自分は小曲集の著は一册有するのみである。そして他に既に幾册かの小曲集を有する人はいくらもある。それに自分だけがどうして小曲の詩人なのであるか。自分の制作の大部分を占めるものは、閑雅な小曲ではなくして、むしろ沈鬱な冥想的な詩篇である。それ故從來小曲詩人として非難を受ける毎に、自分はその甚しい偏見に一驚を吃したのである。然しそれも全く理由のない事ではないかも知れない。自作の小曲に藝術的意義を認めないで、これを一つの工藝品の如く見做す傾向の著しい中にあつて、ひとり自分のみはさうした不徹底を排して、小曲の意義を高唱するを恥ぢなかつたからである。詩人

は二重生活を排しなければならない。若し小曲を擯斥すべきものと認めるならば、斷然小曲の作を廢すべきである。それ故自分の小曲を恥としない。のみならず、小曲の意義を非常に尊重するものである。たゞ、その詩人として評價せられる場合に、ひとり自分のみがその小曲によつて批判せられる不公平には堪へられないからこゝに敢て一言した次第である。

「季節の馬車」について

佐藤惣之助氏の詩神の多産には自分は驚いてゐるのであるが、その一集毎に新しい面に於て現れる、宛らプロテウスの如き自在さは更に嘆賞に値する。「素描風なる短章」を集めたこの集は、氏の他の集よりずつと平明で、自分にはとりわけ愛好したいものである。「松の山」や「青根への道」の如きは、自分のやうなものにも十分その美を認める事が出來た。が、中にはやはり詩と自分との間に薄絹の帷を垂れたやうに、適確の理解の困難な作もある。これは常に非感覺的非官能的の故を以て非難せられる自分の罪でもあらうか。

「美しき墓標」について

近くその訃報を傳へられた不幸な病詩人古村達氏の詩集である。自分が曾て推賞せざるをえなかつた京谷涼二氏の『試煉の日に』と比較せらるべき、惱める魂の詩である。著者の若年を思はせる作品もあるけれども、その死生の間に輾轉たる詩人の聲は、直下に我々の心臟を打つ。かくの如き詩人にとつてこそ、詩は始めて救ひと呼ばるべきであらう。曉烏敏氏の序文は、氏の著作を愛する自分にはなつかしいものであつた。この種の詩集についてはもつと書きたいのであるが、他日にゆづらなければならぬのを遺憾とする。

最近の詩集の感想

『上田敏詩集』が愈々出た。今にしては、寧ろその出づること餘りに遲かつたとさへ云ひたい位だ。それほど、この書は、わが詩壇にとつて貴重な文獻である。一卷約六百頁、故博士の生涯の詩的勞作の全集としては、量に於いて必ずしも多いとは云へないが、それだけに、この中には、どれだけの名工の苦心が籠められてゐるか知れないのである。一行一句、一語一字、それがみな幾度びの彫琢、幾度びの熟慮を經てゐるか知れないのだ。洗煉せられた審美家の、倦むことなき琢磨は、殆んど完全の域に達し得たであらう。が、それだけ幾分の窮屈さは免れ得ないやうに思ふ。

そして、それは本書の卷初三分の一を占める『海潮音』に於て特に顯著である。

『海潮音』は明治大正に亙つての吾詩壇の最高の記念塔でもあり、また、現在の諸名家一半の作品の酵母ですらもあつたと云へるであらう。私などのやうに、象徴詩派の運動その他に關係をもたず、ラアル・プウル・ラアルの立脚地にも緣遠くて過ぎた者ですらも、どれだけこの書の魅力にとらへられ、この書の感化を受けて來たか知れない。されば、當時の諸詩人の作品を檢討したならば、『海潮音』の意義と貢獻とは、直ちに看取し得られるであらう。

私の今の嗜好から云へば『海潮音』よりも『海潮音以後』の諸詩篇並びにその譯し振りの方を好む。こゝには、絢爛の美と、華麗の限りとを盡した譯筆が、漸く博士の愛好の語、かの「冷艶素香」の趣きに近づき、殊に口語譯に於いてはそのくだけた譯し振りが、自在の中に放恣に流れぬ節制をもつて、今の自由詩の諸作家に、立派な範を垂れてある。ラフオルグ、グウルモン等の譯は、特に反覆して讀み、その詩作の正法とすべきものである。

さて、此一卷によつて與へられた感銘を記せば、まづ、故博士が己れを空しうしたる美の奉仕者であり、詩に酔へ

る人であつたといふ事である。博士はいかなる種類の美でも認める事ができた、そして、これを異る美の中に移植する事によつて詩を創造した人であると云ひ得られる。卽ち、博士こそは、譯詩家として完全なる資格をもつた唯一者でなくとも隨一の人であつたと斷言し得られるであらう。譯詩も亦創作であるといふ事をこの一卷ほど明確に立證てゐる書はない。と同時に卷末に附せられた『牧羊神』の七篇、卽ち博士の創作の詩を併誦するにあたつて、我々は、詩人はつひに生れるもので、造られるものでないと云ふ眞理を、また新らしく想はずにはゐられない。博士はわが國の新しい詩人の恩人として、卽ち詩人を生んだ人として、その功績は永く感謝の情をもつて想起されなければならない。博士自身が詩人であつたかどうかは問題ではない。

博士の遺業を、殆んど完全に近く蒐集し得た編纂者の勞は、十分に感謝しなければならない。が、たゞ、編者のことわつてゐるベルトランの『月かげ』の外にも、多少の遺漏があるやうに思ふ。上田博士が自ら不滿として保存せられなかつたもので、我々後進にとつて貴重なものがあつたかも知れない。少くとも、その當時の雜誌に掲載されたもので散逸したものがまだあるやうな氣がする。私の知つてゐる限りでも、脫漏したものに、『歌よねがふは「愛」の神さがし求めて』ではじまるダンテのカンツオオネがある。また、ミルトンの『リシダス』の譯も收められてゐるのは大變嬉しいが、これもその一部分をのみ採錄してあるのを遺憾に思ふ。これはたしか森鷗外博士の雜誌(誌名失念)に掲げられたもので、二百〇五行の完譯なのであるから、その冒頭と結尾とをつぎ合せて、その儘採錄してゐるのは、少し不注意だつたと思ふ。再版の時には、これらを是非增補訂正していたゞきたいと思ふ。とは云へ、博士の譯詩とさへいへば、斷簡零墨も剩さじと集めた時代のある私には、この書の編せられたことは大きな喜びである。そして、詩壇の諸名家にとつても、それは同樣に感謝に値ひする事であらねばならぬ。

『醉茗詩集』の現れたことも、私には同樣に喜びでもあり、會心の事でもある。同じく一卷約六百頁、その組方から

すれば、その量は『上田敏詩集』の倍はあらう。そして、これが我々敬愛する詩壇の開拓者の一人である河井醉茗氏の全詩集をなすものである。

河井氏の詩人として、並びに人間としての意義、ならびに功績については、曾つてその『彌生集』の批評に際して書いたが、その時も云つたやうに、氏こそは眞に純乎たる日本的の人である、日本古來の傳統を、完全に純粋に受け繼いだ人であつて、氏の全意義は第一に氏が自然詩人である事に存すると云つていい。氏は激情の人でない。七情の苦に輾轉する底の强烈な意欲をもち、煩惱の苦に痛む人ではない。氏はまた、奔放不羈な空想に醉ふエステート風の人物でもない。氏はまた冷索な理智の人でもない。氏は溫雅な穩和な清澄な心境に生れついた、溫乎たる人格の人であつて、日本人の最後には必ず歸つて行く故鄕であるあの閑寂と枯淡との、調和境こそは、氏が性格的に授つた羨むべき天與であるやうに思ふ。

私はここに、期せずして、河井氏の人格に觸れるといふ不謹愼に陷つた事に氣付いて、恐縮に堪へない。然しこの不謹愼はどうぞ許して頂きたい。河井氏の「溫籍」の語で屢々呼ばれた、あの靜かな溫かい、そして眞實な感銘を與へる詩篇は、實に、この玲瓏たる人格の反映であり、その所産であるからである。私のやうな煩惱五欲の人一倍烈しい、業の深い人間は、とりわけ氏の溫容に接し、氏の悠揚たる詩篇に、敬愛の念を禁じ得ないのである。

芭蕉や西行の到達し得た心境は、いかに我々の心を惹き付けるであらう。然し、私の今の考へからすれば、西行の如きは、決してもともとさうした境界に生れ付いた人でなく、餘りに强烈な意欲と煩惱との反動としての、一種の自己否定からして、そこまで到達した人であるやうに思はれる。芭蕉の事はよく知らないが、或ひはその點西行に近くはなかつたかとも疑はれる。然るに、我が河井氏はさうではなかつた。氏は自ら云つてゐられるやうに、「剛情といへば剛情」なところがあるかも知れない。が、それは氏の詩の愛、生命の愛のわづかに生み得るものであつて、氏こそは

我々反抗、憎悪、我執の人間とは違つて、怨恨を伴はぬ忍從者であり、平靜な人生の肯定者であると思ふ。それだけ、その與へる感銘は弱いといふ事を免れない。これがその數十年のたゆみなき尊敬すべき努力にもかかはらず、氏をして一度びも詩壇の中心人物――例へば一時代の泣菫又は有明の如き――にしなかつた所以であらうと思ふ。氏はむしろ不遇の人と云はねばならぬ。しかもこの不遇の詩人こそ、最後まで詩を愛し詩に殉じた、前代の唯一の人であるといふ事は、何といふ意味のある事實であらう。

ところで、氏のかうした調和的性格こそ、氏をして容易く自己を沒入し、自然に醉ふ事を許したものである。宛かも淡彩の墨繪を見るが如き至醇の印象を與へる氏の諸詩篇は、その出發點よりして、十分に自然の讃美であり、自然の投影であつた。試みに卷初「ちぬの海」の章を見よ。然し「塔影」及び「都はづれ」こそは、氏の初期に於ける最高調を示してゐる。そして、そこに現はれたる自然愛と、人生に對する調和的態度は、氏の生涯を一貫して離れない。氏が昔から一面日常生活の素朴な歌ひ手であつた事も特筆すべきであるが、それもまた氏の受動的な素直に外界を感受する天性の結果であると思ふ。氏にあつては自己の世界も、また自然の一部としてのみ意味をもつてゐるのである。「自然は私の視る神であつた」といふ氏の言葉は、十分に力あり、意義ある言葉であると思ふ。

卷末の「醉茗年表」は、前後三十年に亙る氏の詩神への奉仕の記錄として、私には或る感動なしに讀過する事が出來なかつた。私はこの機會に、この詩壇の溫厚な長者に對して、深い敬愛と感謝の情とを表白しないではゐられない。そしてわが詩壇が、この詩人の十分の一の謙讓を以つてしてでいい『塔影』の詩人に學ぶところあらん事を希望する。

私はまた百田宗治氏の『風車』と萩原朔太郎氏の『靑猫』とについて語らうと思つてゐたが、如上の二書で、與へられた紙數が殆んど盡きようとするので、遺憾ながら極く簡單に要領だけを記す外はない。

百田氏の『風車』は、氏の自信ある集ではないかも知れないが、氏の最近の轉囘を豫知せしめる點で私には特殊の

興が味ある。特にその序文中の「私にはあらゆる一切の詩の形式が疑はれ出した」といふ言葉は、私の現在の惱みに共通する點があるためかも知れないが、非常に意味深く私には響いた。眞に詩に徹し、生に徹しようとする場合には、必然詩形、いな詩そのもの、藝術そのものすらも疑はれ出す。百田氏は今內生活に於て、かなり動搖期に際會してゐられるやうに見える。篇中第三が私には最も感銘深かつた「月」「山の少女」「朝の時間」等である。然し、これは實に至難な道の端緖であるやうに思はれる。或る人はこれを現實的傾向と呼んでゐたやうに思ふ。私はそれを詩と眞實との間の大きな問題に觸れつゝある氏の心の現れと見て、氏の將來に大きな期待をかけずにはゐられない。

萩原氏の『靑猫』に對する批評は、旣に詩壇の多くの人によつてなされてゐるやうだから、私などがこの上になほ附加すべき言葉は何もないかも知れないが、氏の把持してゐられる獨特の世界については、特別の愛着をもつ一人として、言ひたい事もあるから、他日の機會と別の形式によりたいと思つてゐる。

大正十二年三月(「讀賣新聞」十八日――二十二日所載)

詩話會時代

（一九二五——一九二九）

草房雜談

×

また、詩壇も一つ年をとるのだ。

今年は、今年はと思ひながらも、年の暮になると、格別の事もなかつたやうな氣がする。が、實際には、やはり幾分かでも進歩はしてゐるのであらう。強ひてでも、さう思ひたい。とにかく、皆相應熱心にやつてゐる事は確かだ。

僕は昨年は殆んど詩を書かなかつた。せいぜい五六篇位なものであらう。自分でもその少いのに驚いてゐる。然し、これが本當かも知れない。

詩が溢れ出るやうな時代は誰にもある。そんな時には、溢れるがままにまかせるがよい。僕はその多產を祝福しようと思ふ。

然し、心が批評的に傾き、反省的になると、どうしても抒情的高揚は稀れになるやうだ。中には不斷に、しかも年とともに愈々旺盛な詩作力を示す人もあるが、それはまた特別な及び難い才能であらう。

もつとも、さうありえないものにも、詩興が一時的に旺然として湧き上る事はある。それは丁度間歇泉に似てゐる。

そんな場合をつかまへて、濫作すると云つてなじるのは、詩人に對して理解のない人の言葉であらうと思ふ。

僕は理知を勞して鏤心彫骨した作品の(例へばエレディアの作の如き)價値をも十分認めるが、小鳥の歌のやうな無意識に湧き出す詩を、更に重んずるものである。

當分僕の興味は散文に、特に批評的方面に向いてゐる。それで、昨年は少し詩の批評をもするつもりでありながら、一向出來なかつたのを殘念に思つてゐる。

×

昨年は萩原君の『純情小曲集』や中西君の『武藏野』をはじめとして、隨分澤山詩集を寄贈して頂いたが、それもまだ批評の機會を得ない。けれども、拜見することは皆拜見してゐる。そして、それぞれ人としての全體をぢつと見詰めるやうにしてゐる。だから、折りもあらば、全體的に云つて見るつもりである。一體僕は詩人をも、まづ人として見ようとする流儀であるから。それからまた、度々の旅行中などには、詩集を戴いたお禮の挨拶をさへ失禮してしまつた事もあつたかも知れないが、どうぞ惡しからず諒承して下さい。

昨年讀んだ詩の中で、最も深く感銘に殘つてゐるのは、詩神創刊號に出た百田君の『怠惰と來世』二十四章であつた。福士君の『展望』室生君の『忘春詩集』中の詩篇以來の感銘である。民衆詩時代の百田君の制作には、概念的に過ぎて親しみにくいものもあつた、が、ここにはその生の相が、きぢで出てゐる。それが尊い。詩の妙所は畢意これだと思ふ。

川路君の新律格の提唱は、僕の興味をもつて迎へたところだ。成程と思ふところもあつたが、異見を挾みたいところもあつた。つひ批評の機會を失したが、泡鳴氏以來の、福士君や川路君のかうした努力については、なほ精細な注意を拂つてみるつもりだ。

白鳥君は相變らず論爭で活動した。君は昔から詩壇の事には隨分熱心な人で、十年一日の如く詩論を努めてゐる熱心な態度には敬意を表するに吝かではないが、自己の主張に急なあまり、一圖に他を排し、他を否定して憚らぬ風の見えるのは、詩論家としての君に惜むところである。

詩人もその詩の中に於いては、いかに我儘であつてもいい、横暴であつてもいい。が、詩論家として、詩の解說家、研究家として現れる場合には、可及的に公平である事を要する。然らずんば、批評家としての彼の價値はゼロであらう。これは特に白鳥君にだけ云つたわけではなく、僕は自戒としてゐるのである。これについては、いづれまた詳しく云はう。

とにかく、詩壇にはもつと批評が盛んにならなければ駄目だ。その批評も、今あるやうな感情的な、黨派的なものでなしに、公平な鑑賞批評でありたい。

×

詩壇に對する僕の態度の消極的な事を、河井醉茗氏など、齒痒くも思はれまた見かねられてゐるらしく、「抒情詩」の自選詩集號で、最も厚意ある先輩らしい忠告を寄せられてゐた。それは次ぎのやうな親切な言葉であつた。「生田春月氏などは詩話會の人でもあるやうだし、詩集も多く、若い人達にも親切で、コツコツ片隅で働いてゐるにも拘はらず、おしのけてゆく人にはかげにされたり、知らん顏をされたり、片隅にゐるといふことは甚だ損である。生活をしてゐる以上、みんな打算は持つてゐるので、偶々潔癖から打算をそつちのけにしてゐても、敬遠されるくらゐがおちである。遠慮はいらない、何でも彼でも流れのまんなかに出ることだ。傍若無人は他がゆるさない、へこまされるところまでは幾度でも出てみた方が腹の立て甲斐はある。」勿論僕とても、默殺されたり、無視されたり、不當の取扱ひをされたりするのを快く思はぬわけではない。が、さればとて、白鳥省吾君のやうな意味の奮鬪は、私には莫迦々々

しくて出來ない。そんな事は私からみれば結局末の末だと思ふ。

詩話會員でありながら、詩話會員かどうかはつきりしないほど超然的であつた事なども、幾分、かうした狀態を誘致する因となつたかとも思ふ。然し、それはどうでもいい。お互ひに私情を挾まずに、光風霽月に、こだはりなく、そして、第一に詩人らしく、ただ詩の愛によつてのみ結びついて、結局、詩話會も反詩話會も、何もなく、詩に盡して行かう。

僕は大正十五年の劈頭第一に、この事を詩壇全體に提議したいのである。

大正十四年十一月三十日(「日本詩人」一月號所載)

大正十五年の詩壇に望む

僕はこれまでかなり長い間、詩壇の事については緘默を守つて來た。それは自分の興味が他の方面に向つてゐて、詩作以外の詩壇的な事柄を顧る遑がなかつたのと、今一つは、所謂詩壇風の黨同伐異的な感情一點張りの論爭の渦中に投ずる事を好まなかつたのとで、詩壇的な諸問題についても、また自分自身に與へられた理不盡な罵詈や、不公正についても、一切沈默を以てむかへてゐた。今後も自分一個に關する限りでは、なるべくその態度を續けて行きたいと思つてゐる。然し、詩壇の一般的問題や、それに關しての各種の不公正や、謬見や、諸般の言說については、これからは、時々、一家言を發表して行きたいと思ふ。

僕の性分として、十分の考察を費す餘裕のない限り、全然容喙せぬ代り、一旦、眼をその方に向けて、これを問題とする以上、あくまで徹底的になりたい、一般に自說の徹底するまでは、不屈不撓にやりたいのだ。從つて、系統立

つた總觀的の長論文の著述をも敢て辭さないだけの覺悟はもつてゐる。この覺悟を以て、今後僕は詩壇の論評につとめると共に、その結果として、他に異見がある場合、論爭をも敢て辭さないつもりである。公論以て所説の是非曲直を爭ひ、以て詩の正道を闡明するは、これ詩壇を成長せしめる一助ともなり得ると思ふ。

ただ、特に注意しておきたいが、その論爭たるや、あくまで正々堂々たるものでありたい。ショオペンハウエルの所謂認識の戰場での爭ひでありたい。戰場を認識の範圍より意志の範圍に移して、理を以て爭はず、醜い罵詈讒謗を投げつけて、以て自ら快とするが如き、無意味な泥仕合は眞平である。それは詩人にふさはしくない不純である。賤民の喧嘩口論には敢て詩壇風流の士を要しないであらう。

我々は何處までも、ざつくばらんでありたい、卒直でありたい。然しそれは一個の人格としての公明正大であつて、賤情の爆發であつてはならない。みなもつと鷹揚になり、公的になり、理性的になつて、卑小な私感情から、他を傷つけて、內心ほくそゑむが如き賤しい事を避けるならば、詩壇はもつと氣持のいい場處となるであらう。詩論や論爭の場合に丸出しになるその人品を見て、第三者が氣恥しくなるやうな事が從來はあまりに屢々であつた。

虛心坦懷――それを僕は何よりも詩壇の人々に望みたいのである。然るのち、その人の批評も詩論も、傾聽に値するものとならう。

現在の詩壇の第一の缺點は、總體的に批評を缺くところにある。今や詩壇は殆んど無批評の狀態にあると云つても過言ではない、詩論なきに非ず、詩評なきに非ず、しかもそれは概ね、自己の私感情によつて、主觀的な好惡を表白して、檢束なき無責任の放言を快とするに止まる、無根據なものが多い。それは文壇全體にも、幾分その傾向はあるが、詩壇ほど甚しくはなく、また輿論としては許されてゐない、然るに、詩壇にあつては、堂々たる大家と云はれる人で、かゝる無根據な感情的排他言を口外して、それが立派に通用してゐるのである。それは詩壇の面目としても、

甚だ慨かはしい事ではあるまいか。

兎に角、大正十五年は、もつと批評を熾盛にしたい。同時に、批評に對する批評をも興したい。誰の論評にまれ、不服である場合は、何人を問はず、正々堂々とこれに抗論して、颯爽たる論爭の筆を交へる事、決して惡くはないと思ふ。まだ、詩壇に望みたい事は多々あるが、それはまた追々書いて行かう。今日は如上の希望と、覺悟とを言明するに止めておく。以上。

大正十四年十二月七日(「自由詩人」一、二月號所載)

冬日雜談

×

ずつと以前註文して置いたところが、絶版といふことで、もうとても手にはひるまいと諦めてゐたレオパルヂの詩集の獨逸譯を、二三日前、思ひがけなく丸善から屆けて來た。

レオパルヂは、我國にはまだあまり知られてゐないが、私は昔から非常に好きなので、パウル・ハイゼの小說の中に引かれた數篇の詩や、ジエムズ・トムスンの英譯したエッセイやを愛讀してゐたが、今度は、その詩を始めて纏めて讀むことができるので、大變喜んで居る。

この伊太利詩人は、まづ何よりも、ペシミズムの詩人として知られて居る。その厭世觀は、ありふれた詩人の、單なる氣分としてのそれといふよりも、ショオペンハウエルの哲學のそれのやうな、確固たる基礎の上に立つものである。ショオペンハウエル自身も、その點を重んじて、その「意志と現識としての世界」の中に、この詩人の眞價を特筆して

ゐるくらゐである。ペシミズムの詩人と云へば、まだ、フランスのド・ギニイや、ボオドレエルや、ドイツのレナウやハイネや、まだいくらもある。といふより、悲觀厭世の聲をあげなかつた詩人は、寧ろ少ないくらゐである。それらのすぐれた詩人と並べるのは、倫を失するではあらうけれど、私などの詩人としての意味も、まづ、ペシミズムの詩人である點に存しはしないかと、ひそかに思つてゐる。私の詩集『靈魂の秋』などは、詩壇からは、何とも不可解な偏見からして、甘い抒情小曲集のやうに罵しられたりしたが、それは前半のずつと早期の作だけのことで、その主要部分は、ギニイやレオパルヂのそれに近い、むしろ苦い、ニヒリスティックな叫びである。詩壇の或る人々が、それをも認めまいとして、ひとへにセンティメンタルな小曲詩人として、低いレヱルに置かうとした、曾つての或種の努力は、自分には理解できないことであつた。

然し、無理解と曲解とは、何人もこの世の中では免がれ得ないことであらう。私は詩人の傳記を讀む毎に、その孤獨を感ぜずにはゐられない。同時代の正しい理解を得ないことぐらゐ痛切な孤獨を感じさせるものはない。然し、詩人が自己に忠實であるかぎり、正しい理解を、直ちに呼び招くことは、なかなか困難なことの樣な氣がする。人間同士の理解は全く難しい。我々詩人にしても、同時代の他の詩人をどれくらゐ正しく理解し得てゐるかは頗る疑問である。それ故私は、できるだけ偏見や私情を退けて、素直な心になつて、同時代の詩人を理解すべく努めたいと思ふ。自分の我意から、偏狹から、私心から、他の詩人を、一途に惡罵したり、否定したりすることはしたくないと思ふ。

相互に同時代者を尊重しあひ、理解し合ふやうに努めたならば、我々の外部生活も、もつと打寛いだ餘裕のある、樂しいものになるであらうし、我々の内部生活も、もつと豐富な、みのりのあるものになるであらうと思ふ。私が詩壇の人々に望むところは、偏へにこのことである。

この頃、明治文學研究の聲が高い、「早稻田文學」などは、明治文學研究號を數回に亙つて出してゐるが、その外、

いろんな形で、その氣運が現はされてゐるやうである。詩壇には、まだその傾向の波及は見えない樣であるけれど、我々も、新體詩といふ名で蔑視せられてゐた新しい詩を、今の樣に導く爲の基礎を作つてくれた先人に對する謝意からしても、その努力のあとをよく見、よく調べ、よく論じて見る必要がありはしないであらうか。嘗ての島崎藤村氏や河井醉茗氏の誕辰五十年祝賀會なぞは、さうした謝意の、一つの表白ではあつたらうが、今度はもつと內容的な表白の爲に、藤村氏や醉茗氏の作品はもとより、かの國木田獨歩、北村透谷、中西梅花などの人々をはじめ、薄田泣菫、蒲原有明諸氏より現代に至る人々に對する論評や研究が、盛んに出てくればいゝと思ふ。私自身も及ばずながら、それに多少の力を盡して行きたいものだ。

×

レオパルヂはその詩ばかりでなく、散文に於て、批評家の間に重んぜられて來た人であるが、彼はいつも、「すぐれた散文を書くのは、すぐれた詩を書くよりも、ずつと困難だ」と云つてゐたさうである。また、「詩は、きらびやかに着飾つた婦人のやうなものであるが、散文は、衣裳を纏はぬ婦人の姿の樣なものである」とも言つて居る。詩を書いてゐた者が散文を書き始めると、今更に、この言葉の眞實であることを肯かずにはゐられない。

いま、詩と散文とは、全然、別種のもののやうに思はれ、詩人が散文を書くことを、非難するが如き口吻を洩らす人さへあるやうであるけれど、私には、どうもそんな考へは、容易に首肯し難い。

詩と散文との區別は、普通考へられてゐるよりも、もつと判然しないものである。殊に、日本語に於ては、それが甚しい。例へば、昔の俳文だとか、西鶴の文章だとかは、これを、單なる散文とは看做し難い。また、現代の文學にも、散文の形式で書かれてゐても、濃厚な詩的感銘を與へるものは、必ずしも稀有ではない。この詩と散文との限界に就いては、私にも、一個の見解があるから、何時か纏めて書いて見たいと思つて居る。それから、詩人が散文を書

くことを非難するのは、全く、理由のないことであると共に、詩といふものを、あまりに形式的に見る弊を暴露したものと思ふ。

私はそれとは反對に、詩人がどしどし散文を書くことを望むものである。そして、詩人の散文の、もつと重んぜられる日の來ることを望むものである。私の私見では、詩人が散文を書いた時、その人が如何なる詩人であるかが一層判然とするやうに思ふ。ニイチエであつたか「我々は詩に相面してのみ、よき散文を書く」といふことを言つて居るが、よき詩人は、その散文に於て一層その詩を輝やかしめるであらう。これ、私の確信であるとともに、また、現前の事實である。

今の詩壇を見ても、室生君の小說や隨筆、佐藤君の『市井鬼』萩原君の『新しき欲情』千家君の『青き枝』等を見る時、私は、この確信を强めざるを得ない。詩人の散文の尊重すべき所以である。

室生君や佐藤君は、その感覺的の點に就いて、自分の重んずるところだが、そして二人とも、俳句の作にすぐれ、よく俳味を解する人であるが、それらがその散文には、詩よりも却つてよく現れて居るくらゐである。萩原君の『新しき欲情』は、自分の感心したもので、寄贈をうけた當時、何とかいふ(出版タイムスと云つたか)週刊新聞に、その批評を談話筆記させたところが、ひどい間違ひだらけのものになつて、しかもその文章が、その儘でアルスの「詩と音樂」に轉載された爲めに、ひどく閉口したことがある。あれはもう一度讀み返して、改めて批評して見たいと思つてゐるが、あれなどを、詩でなくて散文であるから惡いといふやうな詩人があるならば、私はその人の顏をよく見てあげたいと思ふ。

私も昨年なぞは、殆んど詩は書かず、感想ばかり書いて來たが、自分では少しも詩を書いて居ないやうな氣はせず、自分の詩的表現の抑塞をも、詩的感興の枯渇をも意識しなかつた。と云ふのは、その感想が、その補ひになつてゐた

からである。つまり、私は、感想の形で詩を書いてゐたのである。勿論、感想であつて、詩句ではないであらう、けれども、その中には詩が含まれて居る。これに反して、詩の形で書かれて居るものゝ中にも、感想や小品であつて、詩でないものもあるかも知れない。そんな點で、その二つの區別を判然とさせるといふことは、頗る困難なことである。もつとも、たゞ外形だけを見て、行さへ切つてあれば詩と思ひ、行が續いてをれば、散文だと思ふやうな。ナイーブな考へならば、また別であるが。

大正十四年十二月二十五日(「日本詩人」二月號所載)

靜日座談

『詩壇意識よりの解放』と題して、少し纒つた論を書かうと思つてゐたのだが、此間、少し長い評論を書いた直ぐ後なので、頭が疲れてゐるせゐか、考へが少しも集注しないので、今度はほんの座談のつもりで、最近の雜感を少し書いてみる事にする。

「詩歌時代」の創刊號が昨日着いたので、あらかた讀んで見た。かうして日本の詩のあらゆる種類が綜合編輯されてゐるのを見るのは、すこぶる愉快である。すでに十年前に、文壇の分業的傾向を非難し、詩歌俳壇が、同じ詩でありながら、その相互間に何の交渉もなければ、關心もない狀態を、一つの奇怪事として、注意した覺えのある私にとつては「詩歌時代」の主旨はすこぶる會心の事であつた。

たゞ、創刊號に出た諸家の詩が、他の歌や俳句と比較して、何かかう影のうすい、力のないものであつたのを、私は詩壇の一人として、少しく遺憾に思つた。各詩人とも、もつといゝ作の出來る人と思ふが、加藤介春君外一二氏の

をのぞけば、創刊號の作品は、現詩壇の水準を示すものとして、他の歌壇や俳壇の前に提出して恥かしくないものであつたかどうかは疑問に思ふ。

然し、かうした不振は、ひとり創刊號の作品に限らない、最近諸家の發表せられるものは、一二の例外をのぞくと、概ね二番煎じ三番煎じといふ感じのするものや、氣の拔けた曹達水のやうなふやけたものが多い。詩人は疲れ、詩壇は行きつまつたといふ說は、殘念乍ら事實であるやうに思はれる。

詩人だとて常に詩を書いてゐなければならぬ義務はなからう。詩想も湧かず、感興も乘つて來ないのに、むりにうんうなり乍ら詩を書く必要もあるまい。白鳥省吾君は、何とやらいふ長篇敍事詩の序文の中で「詩人はすべからく詩をもつて一貫すべし」と絕叫されたといふ事だが、詩人が詩をもつて一貫する事はいふまでも無い事であるから、それは、思ふに散文を書く詩人を叱咤されたものであらう。つまり、詩人ならば小說を書かないで、長篇敍事詩を書け、感想を書かないで自由詩を書けといふ意味ではあるまいかと推察した。さう解しなければ、この言葉は全く無意味だからである。

もし白鳥君の意見が實際さうであるとすれば、これは大に問題とするに足る事だと思ふ。同君の意見をただし、私自身の意見も述べして、この問題を明らかにしたら、幾分か詩壇に利益する處があるであらう。

長篇敍事詩に對して、私はまだまとまつた意見を發表した事はないが、かつて、現代の日本語に於いて、長篇詩は果して可能であるか、尠くとも有意義であるかといふ事を疑つた事がある。そのためかどうか知らないが、普通詩壇からは、長篇敍事詩の反對者のやうに思はれてゐるらしいが、それは正當でない。たとひ長篇敍事詩の形式そのものが、散文小說の勃興した近代に於ては、一つのアナクロニズムであり、時代に對する逆行的樣式であるといふ說が眞實であるにもせよ、私は決してさうした形式論に左右される人間ではない。その形式に盛られた內容そのものさへ、

その詩の眞の價値さへ、高く且つ偉れたものであれば、私は喜んで推賞したいと思つてゐる。福田正夫君、白鳥省吾君等の長篇敍事詩も、殘念乍らまだ一つも讀んでゐないので、それに就いては何とも云へないが、幸ひ、福田君に、近著『幻の麗人』を贈られたから、いづれ一讀して、その批評も書き、長篇敍事詩の意味も論じて見たいと思つてゐる。

一體今の詩壇は、餘りに形式に囚はれてゐる處はないか。どんな散文でも、行さへ切つてあれば立派な詩だと思つて安心し切つてゐる。行が續いてをれば、これは散文ぢやないかと云つて投げ出してしまふ。文語がもちひてあると、古臭いと云つて顏をそむけてしまひ、奇妙奇天烈な文字が河童頭を並べてゐると、素晴しい詩だと思つて渇仰する。

かうした、萬事を形で定める空虛な形式主義が、詩を無意味な手品にし、人間の靈魂から絶緣し、嚙むに耐へぬ五色の蠟燭にしてしまふのである。私は蠟燭的詩を拒否し、人生の眞を忘れて、詩の形骸にこびりつく詩人的意識を憎むものである。

いづれこの問題については、他日詳しく書く。これはほんの不用意な座談にすぎない。

大正十五年四月二十二日(「詩歌時代」六月號所載)

自分の事

本誌の前號を見ると、靑年詩人塚本篤夫君が、詩人の二股的態度を難じた中に、僕の事を例證にとつて、「小說を書いて、それが餘りに不評だつたので、また詩壇に逆戻りして」云々と書いてゐる。

詩人だから詩以外のものを書いてはならぬといふ考へは、取るに足らぬ。詩壇大家と云はれる人の中にも、こんな謬見をもつてゐる人があるので、これについては、これ迄も屢々書いたが、元來、僕は詩人とか、小說家とか、評論

家とかいふ表面的區別に執するほど無意味な、形式的な考はないと信じてゐる。文學者はすべて廣義の意味の詩人（デイヒテル）でなければならぬ。その意味での詩人ならば、僕は喜んでさう呼ばれたいと思ふ。然し若しその詩人が、單なる詩壇的詩人といふのにすぎないならば、一日も早く、さうした制限を脱出したいと思つてゐる。

僕は最初、詩集を出して、多少社會的に、（詩壇的に非ず）認められたために、爾來、常に詩人といふ名を冠せられてゐるが、若しそんな名を得たために、一生詩ばかり書いてゐなければならぬと云ふならば、そんな無法な束縛はない。僕は元來、專門家を厭ふものである。人間は何でもやりたい事をやればいいのだ。文學者は何でも書きたいものを書けばいいのだ。どうしてそれがいけないのであるか？　僕は小說も書くし、評論も書く、將來戲曲を書くかも知れず、評傳を書くかも知れぬ。その表現慾に對して、自己を拘束する必要は毫も認めない。また、これが眞に全的に自己を生かす道であらう。

小說の不評云々は、まるで策略的な文壇人の云ひさうな事である。僕の『相寄る魂』は好評も不評もない、文壇的には、てんから默殺せられてしまつたのだ。が、これは何も僕一人の問題でなく、『相寄る魂』だけの事ではない。凡ての單行本で現れた長篇小說の共通の運命である。中村武羅夫君の『人生』だつて、細田源吉君の『罪に立つ』だつて、加藤一夫君の『無明』だつて、本誌の須藤鐘一君の『人間哀史』だつて、讀者の無言の評價以外に、文壇から正當な評價を受けなかつた事は同樣だつたのだ。そして、かかる文壇のジヤアナリズム精神の不合理と、偏狹な文壇意識の害惡とに對しては、僕は終始一貫勇敢に戰つてゐるものである。

また、誰にもあれ、たとへ文壇でいかに惡評しやうとも、惡評されたからとて、その儘引込んでしまふのは意氣地のない話である。僕はそんな意氣地なしより、他の惡意によつて愈々その力の加はるものを愛す。何によつて、僕がそんな意氣地なしだと云ふのであるか。僕は雜誌の短篇などを書かない流儀であるから、每月々々、作品を發表はし

ないが、作品を發表しない事は、創作の筆を絶つた事ではない。またよし、創作の筆を絶つたとしても、詩を書き出したからとて詩ばかり書かなければならぬわけはないのと同樣に、小說を書き出したからとて、小說ばかり書かなければならぬといふ事もない筈だ。一寸作品を發表しなければ、直ちに逆戾りだとか何だとか、梶原の逆艫ではあるまいし、進んだり退いたり、うるさい事である。

僕は今、『相寄る魂』の姉妹篇たるべき長篇小說を、現に執筆中である。千枚二千枚といふ長篇がさう立續けに書上げられるものではない。一作と一作との間に、三年、五年、或ひは十年の年月をおくのは、外國の作家では普通の事である。何も急ぐ事はないのだ。それを無理に急がせるジヤアナリズムは厭ふべく、急がぬ事をわるく解釋して嘲るやうな文壇意識、物事を表面的にしか見得ないジヤアナリズムの精神は避くべきである。

なほ、塚本君によると、詩壇はまるで僕の安全な避難所でもあるやうだが、一體、同君も詩壇漫筆を書く位なら、詩壇が(無論詩話會中心と知るべし)これまで僕に對してどんな待遇をしたか位は知つてゐる筈である。佐藤惣之助君時代の現在はさうでもないが、三四年前の「日本詩人」の空氣が、僕に對してどんなものであつたか、某民衆詩人などが事につけ折りにふれて、いかに僕を默殺し、又は低級の偏見中におかうと努力したか、それは既に二三の研究書や詞華集に於いて、動かすべからざる證據物件を提供してゐるのだ。僕は文壇の偏狹な息苦しい空氣を好まないものであるが、まだしも私心と小惡意とに充ちた詩壇よりは、遙かに氣持よく感じてゐるのだ。

文壇的思考法は、僕の極力斥けたく思ふものであるが、かやうな表面的に物を見て、萬事を偏見、先入見できめてかかつて、無用な事で他を傷つけて喜ぶやうな考へ方も、またその一つである。(それはむしろ詩壇的思考法かも知れない、詩壇の方が一層甚だしいやうだから)そして、老朽した文壇詩壇人が、かかる思考法をとるのは止むを得ないであらうが、これから新しく步み出さうといふ新進の人が、かかる思考法に囚はれて、漫然と不謹愼な言を弄するとい

ふ事は、惜しい事である。自己の將來を愛する人ならば、もつと本質的な物の考へ方をするやうにして、自分の內生活をもつといつくしんで貰ひたいものである。

大正十五年六月三日（「文藝道」七月號所載）

詩人の內面化

これまでの詩人は、とかく本質よりも外觀をたふとび、內容よりも形式を重んずる弊があつた。所謂詩壇といふものの、いろいろの弊害と不合理とは、槪ねそこから發生した。

新しい時代の詩人は、かうした舊時代の謬見から離れて、すべて本質的なるものに目を向け、人間としての眞實な歩みを歩まなければならない。また、漸次さうした傾向のはつきりして來つつある事は、まことに喜ばしい事だ。

舊い詩人が、その所謂詩壇的功績なるものを、旣得の權利として、後進の上に君臨せんとするのは、何の意であらうか。眞の詩人ならば、恥づべき事であると思ふ。私などから見ると、詩人の功績なるものは、ただその詩作の外にはあり得ない。そして、一人の詩人の詩は、それ自らその報酬を得てゐるので、その一日の長のゆゑに、後進の上に特權を持するのいはれは毫もない。

然も、その詩壇的功績なるものは、何かと云ふと、作詩の成績ではなくて、外面的、政治的努方の謂ひなのだ。或種の詩人の眞赤になつて爭ふのは、第一詩集出版の先後であり詩作の多寡であり、雜誌刊行の有無であり、講演の度數であり、黨派的勢力の强弱である。

私などから見ると、殆んど意味を置き得ない、さうした外面的な些末事に必死になる詩人は、何といふ內面的の空

虚を示す事であらう。たとひ少しも詩壇と關知せず、作品の數は尠くとも、すぐれた眞實の詩を書いた人が、最大の功績者である。たとひ生前一篇の詩も發表せず、死後何十年かたつて、それが遺稿として刊行されたとしても、その詩さへすぐれたものであつたなら、その時代の大詩人として、その功績や大である。これに反して、たとひ毎日のやうに詩を發表し、詩論を書き散らさうとも、その詩がつまらぬものならば、何の功績ぞ、何の大家ぞ。そんな人が多年所謂詩壇に絶叫し、詩集を濫發したからとて、少しも敬意を拂ふ必要はない。

私は定家よりも西行を尊重すると同じ意味で、さうした空名の大家よりも、隱れた眞の詩人を尊重する。新しい詩人は、かかる大家の形式主義や、外觀尊重を一蹴して、その內面的必然性に從つて、正しい歩みを歩まれむ事を私は希望する。

昭和二年二月三日(「詩壇消息」三月號所載)

先進詩壇への提言

特に民衆詩人君の一讀を望む

最近、私は大正年間の詩壇と云ふものを回顧する機會を有つたので、いろいろの忘れてゐたことを想ひ出した。そのいろいろの快い、また快からぬ事象について、かなり多くの事を考へさせられた。すべて今は最早自分の心には、かなり遠くなつた事どもではあるが、ただ一事、なほ當面の問題として考へる値ある事があるので、この機會に、それについての所思を述べて、詩壇の人々に、私と同輩の人々に少しく提言したいと思ふのである。

この十五年間、詩と一緒に歩いて來た一人として、既往を回顧するにつけて、私の深く感ずる一事は、既に吾々も

詩壇といふものから、もはや退いてもいい時期が來てはゐないかといふことである。我々は既に十分に詩を書いた。これ以上、なほ書かねばならぬのであるか。私はさういふ叫びが、心の底から起るのを聞く。もつとも、私自身だけについて云へば、既に二三年前から、詩作と遠ざかつて、一昨年に出した『自然の恵み』を以つて、最後の詩集としやうとは、ひそかに心に期してゐた事であつた。その故は、既に詩のわき出る時期が去つた事を自覺したからである。もとより、たまたまノオトに書きつけることはあるが、それすら今はむしろ稀である。然るに、顧つて周圍を見ると、そこには今や、より若い、前途ある詩人が澤山に現はれて來てゐる。その人々は溢れる如く詩を書いてゐる、しかも名の知られないばかりに、十分にこれを發表することが出來ないでゐる。丁度十數年前に、私達が經驗したのと同じ苦を嘗めてゐるのだ。そこに人生社會の不合理があるが、それは或は永遠に續く不合理であるかもしれない。ただせめては、我々だけでもその邪魔をしてはならないと私は思ふのだ。自分達が苦しんで來たのだから、後に來るものも苦しむがいいと云ふのは、苦勞人にあり勝ちなエゴイズムとして私は取らぬ。後進のために道をひらくためだけでも、我々は無意味な反復を差控へたいものだ。

もとより我々にも再び詩が溢れ出す時が來るかも知れない。その場合には、遠慮なく、我々はそれを世に發表して差支へない。それが各個の詩人としての特權である。然しながら、現在では、忌憚なく云つて、私は私の同輩の詩人の間から、その靑年時代に於けるがやうに、止むに止まれぬ衝動から生れ出たといふやうな詩を、それほど多くは見出し得ないのである。それ故私は、詩人は或時期を通過すると、むしろ沈默するの賢なるに如かぬと思ふ。それが何でもかでも、ただ無理やりに、職業的に、技巧的に、詩を作り出すことによつて、依然として詩壇にがん張らうと云ふのは、眞の詩人の取るべき態度として、果して正しい事であらうか。私は深く疑ひなきを得ない。もつとも、彼等弱輩何者ぞ、俺の詩は、彼等の如き幼稚未熟なものではない、俺の詩を聽けといふ意氣込みがあつての事ならば、また

格別である。だが、我々は何事も常に主観的に判断する詩人の通弊を脱して、客觀的に、普遍妥當性に從つて判斷すべき必要がある。そして、その見地からは、藝術品の意義は、その作者の意氣込によらず、その作品の價値にのみかかる事を思ひ得べく、また、詩はつひに强制的に作り出さるべきものでないのに對して、自分が總てを詩の形で表白し得べき時期は過ぎ去つたことを知り得るであらう。

然して、常日頃私の敬意を抱いてゐる詩人は、常にそれを知つて居た。高村光太郎氏の如き、かつて詩壇的ですらあつたことがない。福士幸次郎氏の如きは、詩壇を退いて、また何等關知するところもない。また、室生犀星氏の如き、常に詩のわき出づるをまつて、これを書きつけるに過ぎない。少しも詩壇人的焦燥を示さぬ。眞僞は知らぬが、曾つて、その室生氏が、(これは餘程前の事と思ふが)詩話會幹部集會の席上で、我々は退隱して、後進の道を開いてはどうかと提議されたといふことを聞いた。その當時、それを傳聞して、私も非常に同感した。私がかねがね詩話會幹部に提言したいと思つて居たことも、またそれに外ならなかつたのである。けれども、幹部諸氏は何故かそれに同意せられなかつたとか。然らば、私が再びかの室生氏の提言(若し事實であるとすれば)を繰返さうとも、舊詩話會幹部諸氏の同感賛助を得難いかも知れない。が、其後諸氏が敢て詩話會を解散せられた事實によつて考へれば、諸氏も幾分その點に同感された結果ではないかとも解せられる。人の云ふが如く、詩話會解散の事實を、後進に「日本詩人」をゆだねるのを好まなかつた爲とは、私として解釋したくないのである。

とすると、私は今や再びこの提言をすることの決して無意味でないことを思ふ。そして、私のこの提言の根據は、私の平素の持說の如く、詩は人間の反映にすぎず、詩あつて詩人があるのでなく、詩人あつての詩であるから、我々は先づ何よりも先に、人間としてよりよく生きんことを望まねばならぬ。而して、そのためには、所謂詩壇に戀々として、眞の感興もなきに、單に詩壇意識からのみ、機械的に詩作するの愚をやめて、詩壇の分野を潔く後進にゆずつ

て、中年の我々として、より意義ある仕事に向ふべきで、それこそ詩人としての自己を殺す事でなく、反つて大いにこれを活かす道であるといふのにある。我々が本質的に詩人である以上、詩壇に卽すると卽しないとは問題でないではないか。また、自分を表白するのに、必ずしも詩の形に據らねばならぬ理由もない。島崎藤村氏や岩野泡鳴氏の例は、我々に對する最も立派な模範ではないか。藤村氏が詩作の筆をすてて、小說の筆をとられる樣になつたからとて、我々は氏がもはや詩人でなくなつたものとは毫も思はない。今も我々は氏の筆から常に流れ出る詩を愛するのである。そして、氏の最近の傑作『嵐』の如き、私は詩以上の詩であるといふ感銘を得たのである。もとより我々は島崎氏丈けの大力量はないが、(それある人は愈々多幸である)しかもなほ我々といへども、また散文に於て、よりよき詩を書く可能性を有する。但、我々は何も島崎氏の如く全然詩筆を折るに及ばない。散文に移つた後の岩野泡鳴氏の如く、任意のときに詩を書くはいい。ただかの詩壇意識からの機械的詩作だけは止めようではないか。ひとり島崎氏、岩野氏のみならず、蒲原有明氏、薄田泣菫氏等の我々の大先輩が、その無言の說示によつて、我々に敎へられるところも、またそれに外ならぬと思ふ。

私が曾つて「日本詩人」誌上で、詩人の散文の世界に出て行く事を奬勵したのも、また、若山牧水氏の「詩歌時代」誌上で、白鳥省吾氏の「詩人は詩を以つて一貫すべし」の叫びに關聯して、詩人の散文を書くことを排斥するが如き口吻を洩らす詩壇人の妄見と、その偏狹固陋な氣風とを敢て非としたのも、眞意はここにあつた。然るところ、右の「詩歌時代」の拙文に對して、直ちに白鳥省吾氏は、起つてこれに答へられた。そして、特に私に讀ませたいとの厚意からであらう、常に寄贈されてゐない「地上樂園」のその號だけを特に私に送られたが、多忙な私は、それについて答へるいとまもなく、今日に及んだが、この機會に氏に返禮したいと思ふ。扨てその白鳥省吾氏の言は次の如くであつた。自分の「詩を以つて一貫すべし」は、その意ではあらぬ、而して自分は曾つてそんな事を云つた覺えはない、そ

して自分でも現に小說を書いてゐるのだ、さう云つて氏は生田春月の輕卒をいましめられた。氏が確言せられる處であるから、それは或はさうであるかも知れない。然らば吾々は有力なる反對者を失つたわけであるから、その大いに安心することの出來るのを喜ばねばならぬ。ただ、私の記憶はさういふ點にかけては、不幸にも極めて明確であることを常とする、(それは私の弱點の一つとして常に恥ぢるところであるが) 私は確かに氏の詩論中で、かかる散文反對の言說を讀んだ記憶がある、それ故氏の詩を以つて一貫すべしをも、その意に解釋したのである。が、今その雜誌を調べるいとまもなし、氏の詩論集ももとより手許になし、(また氏がかく云はれる以上、その中に採錄されてゐる筈もなからう) とすれば、その上なほ私が氏にかやうな言があつたと主張するに於ては、結極水掛論に終るわけで、そんな事は厭はしい事だから、私は卒直に自分の輕卒を謝するに躊躇しない。と同時に、私は氏から詩人が散文を書くことは決して惡い事ではない(たとひ氏の嫌ひな北原白秋や、西條八十や、生田春月がそれをしてゐやうとも) と言ふ言質を得た事を欣快に思ふものである。今後氏は斷じて散文を書く詩人への非難は下されるを要としないであらう。また、ひとり、他を非難しないばかりでなく、氏もよろしく曾つて小說を書かれた如く、また小說を書かれんことを望む。詩壇意識から機械的に詩を製造するが如きことは、もとより氏も是認せられぬことを思ふからである。

詩壇意識が詩人の機械化、外面化、政治化の原因である。詩話會が多くの非難を受けたのも、そのためである。それゆゑ私はかの「詩歌時代」に發表した文中に、「詩壇意識よりの解放」と題して、一文を書きたいと豫告したのである。然るところ、おなじく白鳥省吾氏は、かの私に答へられた詩壇時評中の他の部分に、例の氏一流の遣り方を以て、その項目だけ特に私の名を擧げず、「近頃詩壇で詩壇意識よりの解放などといふものがあるが、そんな事をいふのが詩壇意識で、詩壇で虐待されてゐるものの泣言として笑止であると云ふ意味の事を書かれた。(一々の言葉はこの通りではなからうが、大體の意味はさうであつた) その前で生田春月に答へてゐる以上、そこでも對者の名を擧げて反駁され

てよろしいのに、わざわざ名を祕して嘲笑するが如き手段を取られるところ、いかにも氏の性格を躍如たらしめてゐるので、私は小說眼を以て興味深く思つたが、然しながら、氏のその言たるや「詩壇的、餘りに詩壇的」であることを、つくづく情なく思つた。（またなほ、私が散文を書く詩人への氏の反感的言說を擧げたのを輕卒としていましめられた氏が、その表題だけで、本文の一行も書かれてゐないことについて、直ちに嗤笑されたのは、それ以上の輕卒ではあるまいか。殊に、詩壇で虐待云々は、この十數年間、詩論の際に、私の名を故意に默殺し、又は名を擧げずして非難攻擊し續けて來た（氏はこれもまた事實無根といはれるであらうか）氏の言として、むしろその正直に感ずるものであるが、然しかかる特權意識は何が故であるかを私は解するに苦しむ。私は氏にむしろかかる詩壇的特權意識を捨てられんことを期待する。特に、民衆詩人が詩壇を專有するが如き特權的口吻をもらすは、果して正當であらうか。

元來氏ほど强烈な詩壇意識の所有者はないといふことは、今や定說となつてゐる。從つて、氏が私の詩壇意識よりの解放の一句に對して、猛然起つて反噬せられるところあつたのは正に理の當然であらう。が、それだけ、私は他の何人よりも、特に氏に、その詩壇意識を捨てられんことを勸告したい。元來、詩壇意識なるものが、詩作以外の世界を知らぬからの事で、ために狹隘な天地に立籠つて、蝸牛角上の勢力爭ひに狂奔するが如き醜狀の因となる。氏も散文の世界を認める以上、その廣い世界に出てゆかれたい。然らば、ひとり後進の道を開くにとどまらず、あらゆる詩壇的のうるさい事も、忽ちその日から消滅するに違ひないと信ずる。もつとも、韻律も何もない散文の行を切つて、詩と稱した民衆詩人にとつて、この行を詰めることはかなり苦痛でなければならぬ。といふのは、行を切ることをもつて、內容の空疎を或程度までごまかし得るのに、散文を散文の形にして發表するときは、そのごまかしが利かず、純粹に內容價値をもつて問はれるからである。然し、勇猛心をふるひ起してもらひたい。近頃頽勢の極にある民衆詩人君等の復活の道もまた玆にあると思ふから。餘り永くなつたから、今月はこれで切り上げるが、次號に於て愈々本題

に入つて、私の提言の新詩壇に對する眞意義を說明し、且つ、乞ふ槐よりはじめよの言によつて、先づ私自身の今後の態度方針について聊か述べてみやうと思ふ。

昭和二年二月十九日(「詩文學」四月號所載)

眞詩復興

今春から、少しく健康を害して、久しく執筆に遠ざかつてゐたので、本誌に掲げた『詩壇への提言』の續稿をも怠つてしまつた。そのうち、本誌も休刊された爲め、ついその儘になつてゐるうち、今度本誌も華々しく復活されるといふので、その續稿をと考へたが、何分今ではその問題に對する興味が全く失せてゐるので、玆にはただ、あの文中に約束した、詩壇に對する今後の私自身の態度方針だけを書き記すにとどめておきたいと思ふ。

私は今後、詩壇に對しては、專ら批評家として對したいと考へてゐる。批評家として、極めて卒直に、腹藏なく、自己の見解を述べ、主張すべきは主張し、難ずべきは難じ、嚴正なる批判を下さん事を期してゐる。そのため、當り障りがあらうとも、それは止むを得ぬ事として、敢て顧慮しないつもりである。云ふべきことは云はう。そして、かかる直言に對して、憤りを發する人や、異論を有する人あらば、どしどし抗言し、論駁せられたい。堂々旗皷のうちにまみえたいと思ふ。但、民衆詩人的な賤罵は、多少の敎養ある人間として、これを問題とする事を恥づるが、理を以て爭ふべき場合には、これに應ずるだけの準備は、私の十分に整へてゐるところである。

私は詩壇意識を非とし、機械的詩作を非とした。それゆゑ、民衆詩人の中に、私自身、詩壇に對して論議するを以て、これを詩壇意識であるとして難ずるかも知れない。然らば、これその非難の自己に的中せるを自白するものに過

ぎぬ。私が批評の筆を執らうとするものは、かかる詩壇意識を打破せんと欲するがためである。

今や、所謂既成文壇は崩壊期に入つて、文壇人の特權意識は日に日に色害ざめて、空しき倨傲とあはれむべき放恣とは、その當然のむくゐを得つつある。しかも、これ私の最も力說し來つたところで、過去十年の私の努力の一半は、實に、この方面に向けられたのである。努力また甲斐なきに非ずである。そして、この文壇解放は、また詩壇にも及ぼされなければならぬ。否、詩壇こそ一層自由にされ、公明にされなければならぬ。作品の價値にあらずして、ただ外面的努力、政治的術策の力によつてのみ、その地位を保持し、詩壇的特權をたのみ、黨派的勢力を誇りし人々のためには、既に淸算期は來れるを思ふ。否、これが徹底的淸算こそ、我々の義務の一つであらう。

然して、今後はかかる政治的術策や、黨派的狂奔を全く脫却し、ただその詩によつてのみ生き、ただその詩によつてのみ自己を主張する眞詩人の時代でなければならぬ。自分はかかる眞個淸純の詩人のために、その地盤を準備するを以て、今後の自己の使命と考へてゐる。美しき花を滿開せしめんがためには、我々は無用の雜草を除去しなければならぬ。雜草が我がもの顏に蔓るとき、いかなる草花も、その養分をいかにして攝取し得べきぞ。

機械的詩作について云へば、或る詩人の作品を、眞に感興より生れたものか、機械的に作られたものかを判斷するのは、かなり困難な事である。私が某民衆詩人近時の作品を、機械的詩作と疑つたのは、決して理由のない事ではなかつた。が、若し當人が、然らずと否定すれば、その上云ふべき事はないのである。が、若し或る種の詩人が、その眞生命を傾けて、あの空しき收穫を得たにすぎぬとするならば、何といふ才能の不在、感性の遲鈍であらう。私はその種類の詩人が、自ら機械的詩作を肯定してくれる方が、氣の毒さが少くて幸ひに思ふ位である。今少し才能ある敏感なる人々ならば、機械的に詩作するとも、なほ見るべきものを產出するであらう。然し、それは自己に對する不忠實たるをまぬがれない。私自身これを極力避けたいと思ふものは、實はその內面生活に對する徒勞のゆゑである。

私は過去に於いて、機械的詩作を全然なさなかつたとは云はない。が、常にこれを避けるやう努めて來たのは公言してよい。元來、私の詩は常に落想と共にノオトに書き記され、のちに一篇としてまとめられたものであるから、その方法上機械的努力と云ひがたいのである。が、特にこの二三年來、私は詩の發表を好まず、諸雜誌の需めにも出來るだけ應じないやうにしてゐるので(二三特別の關係ある雜誌の場合を除けば)私の詩の雜誌上に現れるのは極めてたまたまの事であるのは、人の知らるる如くである。

今、私は自分の全詩集をまとめてみたいと思つてゐる。從來、私は僅少の例外を除いては、詩人として正しい理解を得た事がない。一つは、小曲詩人とか、センテイメンタルとかいふ民衆詩人の惡宣傳の結果でもあらうと思ふ。が、最近になつて少しづつ自分の世界が正しい理解を得つつある事を喜んでゐる。全詩集は私のために、卑小な惡意のかぶらせた寃を雪いでくれるであらうと思ふ。

今や詩壇もまたその狹小な埒を壞されつつある。少數の所謂大家が、その政治的努力によつて築いた堤も破れた。「日人詩人」の廢刊は、政治的大家の影を朦朧たらしめ、追隨詩人等の影を沒せしめた。今後こそ、眞に詩によつてのみ生き、詩によつてのみ自己を明かならしむる眞の詩人の時代である。眞詩復興の時代は今日、明日、そして明後日へと續くであらう。私はそれを祝するとともに、その機運の促進に對して、自己もその一票を行使しうる事を喜びとするものである。そして私のその應分の努力は、今後本誌の上にも、現れるであらう。

昭和二年八月三十日(「詩文學」十一月號所載)

年表

明治二十五年（辰歳）
三月十二日、鳥取縣西伯郡米子町字道笑町に生る。代代清く正しき血統を傳へし家系に生れし故を以て淸平と命名、父は左太郎、同郡淀江町の人、米子町に出でて酒造業を營む。母はいわ。姉妹各一人ありたれど、何れも朝鮮に於いて歿す。次弟節三は幼少にして廣戸家に養はれたれば、朝鮮には赴かず、末弟博孝と共に破產の家の子として辛苦す。

明治二十七年（三歳）
同じ町の灘町に支店を開ける祖母の許に養はる。祖母は女中を雇ひて煮賣酒屋を營みしかば、その孫は日每に來る酒客等の愛するところとなる。

明治三十一年（七歳）
四月祖母の家より父の家に歸り、明道尋常小學校に入學。

明治三十二年（八歳）
秋の頃、店の酒樽の上に乘りて遊び、あやまちて轉び落ち、出血甚し。醫師によりて數針縫ふ。その三角形の傷痕を永く、右顳顬左上にのこす。なほ右眼の下に稍大なる黑子あり、伊藤博文と同じところにある黑子なりと、いつもいひたり。

明治三十四年（十歳）
小波山人の「日本お伽噺」「世界お伽噺」等に親しみ、「少年世界」の愛讀者となる。同窓の友にして、一歳上なる田中幸太郎氏と親しみ、更に年長の友松下素雨、井上義道氏（白井喬二）等と相知り、文學的交遊を始む。田中氏とともに當時明道校の訓導にして、文學愛好者たりし由良先生を頻りに訪ねて、「明星」派のロマンティシズムを敎へられ、和歌俳句を作り始む。また由良先生の弟にして將來畫家たらん事を期せる由良因政（のち夭折す）と相知り、美的觀念を啓發さる。

明治三十五年（十一歳）
角盤高等小學校に入學。これよりさき父は出雲の各地に支店を設置し、道笑町の町端れに未だ靑き稻を刈らせて堂々たる家を建て、燒酎に於ては鳥取縣下第一の釀造家たるに至る。然れども、生來好人物にして他人

に向つて否を云ふ能はざる性癖と、大膽なる冒險心とのために、漸く家業に破綻を生じ始む。その頽勢を鞔さんとして大阪に上り、相場に手を出して失敗し、遂に破産の宣告を下され、差押處分に遭ふ。爲めに淀江町の親戚中最も有力なりし太田、印南の二家に多大の損害をかくるに至る。

明治三十六年（十二歳）

道笑町の家を失ひてより、一家は鹽町、博勞町、法勝寺町と、漸次小さき家に移り、母はつひに豆腐屋を始む。學校にて朋輩に輕蔑せられ、零落の苦をしみじみと味はふ。父は破産後、鳥取・松江等に奔走して、各種の事を企ててみな成らざりしが、つひに同年秋、中海の一孤島、大根島に赴きて再び酒造業を始む。これ汽船の發着稀れなる孤島の便を借りて密造を企てん魂膽なりき。父に連れられて波入村門脇某の邸内の離れなるその假寓に入り、父と二人の生活を營み、島の小學校に入り、出雲訛りの兒童等の中に交りて、他郷の愁哀を感ず、數ヶ月にして米子に歸る。

明治三十七年（十三歳）

大根島より歸りて、再び角盤校に入りしが、家計困難のため、授業料を納むるを得ず、教師より度々督促を受け、厭氣を生じ遂に七月正式に退學し、專ら小說詩歌類を耽讀し、少年雜誌に投書す。田中氏等と共に回覽雜誌「若草」（のち花籠、天使等と改題）を發行し、由良先生等の感化により「明星」「新聲」「文庫」等に親しむ。當時、親戚間に於て、無口にして學問好きなれば商人に適せずとし、お寺の小僧にやらんとの議起りしかど、實行せずして止む。大根島の事業も失敗に歸し、父は十一月、獨立して商業を營める祖母を殘して、一家を擧げて朝鮮釜山に移住す。

境遇の變化甚しき爲め、暫くは夢の如く暮せしが、釜山に赴きて間もなく、彼地は家賃高きため二階、表の間奧の間それぞれに數家族割居するを普通となせしが二階の細君、自ら奧の家の簞笥より金を盜み置きて、表の家の長男の怪しき振舞するを見たりと言ひふれしため、夜中叩き起されて、警察署の留置場に入れらる。

たまたま佐須土原遊廓より無斷外出せし故を以て拘留せられし藝妓と共にそこに一夜を明かし、二階の細君と對決せしめられしが、翌朝嫌疑晴れて家に歸さる。しかもこの事件は深く腦底に印して、世の不正に對する最初の憤激となれり。

明治三十八年（十四歳）

一家は佐須土原遊廓内に移轉し、母と姉とは藝娼妓等の仕立物を引受けてかぼそき煙を立つ。父は酒を造り、或ひは遊廓間に餅賣り歩きなどせしが、いづれも永續せず、遂には藝娼妓の客に出す呼出狀の使ひなどするに至り、常に書物にのみ讀み耽る子を叱咤する事漸く甚し。一日憤然雪を冒して赤毛布を被りて家を飛出し、釜山日報社の前に「解版工募集」の廣告を見るや、直ちにこれに應募し、種々の困難を嘗む。僅かの月給を書物に替へて母に叱らるる事もありしが、後には社の財政困難に陥り、月給を支拂はれねば、解版小僧を廢めて、長崎縣人内田某の米店に小僧となりて住み込む。これより先き、父はこの內田某の信用を得て小規模の米店

を開きしが、脚氣に罹りて暫く大阪に靜養することとなり、伴はれて汽船にて瀬戸内海を大阪に向ふ。鳥眼にかかりをりし爲め、安治川にて下りくる船の上に積める錨に觸れて、既に一命をおとすべきところを辛うじて免かる。大阪にては父の舊知なる出雲の人菅井藤右衞門の家に寄寓す。大阪郵便局の信使募集に應じ、學力試驗には好成績を示したれど、父の職業を問はれて今相場などを行へる旨を答へしため不合格となる。「新聲」「文庫」等に伯耆男等の名にて詩文を投ず。十一月父と共に再び瀬戸内海を經て釜山に歸る。同郷の知人紙本源三郎の紹介により加徳島なる鎭海灣要塞經理部附傭人となり、給仕を勤む。次いで父も來りて風呂番となる。閑餘、大に歌を作り、「華書文學」その他に投じ、東京の投書家等と盛んに交通を始め、その一友の紹介によつて秋田雨雀氏の羊角社の社友となり、同氏より懇切なる手紙を貰ふ。

明治三十九年（十五歳）

意地悪き料理番に虐められて、給仕の職を辭して釜山

に歸る。その後、鐵道の列車ボオイに世話する人ありしかど、鄕里に於て身を立てんことを主張して、單身淀江町に歸り、酒造を營める叔父太田市太郎の家、及び當時既に米子より歸りてこの家の橫に店を開きゐし祖母の許に寄寓し、叔父の命にて同地の高等小學の農業補習科に入り、農家の子等と共に野菜畠に肥料を擔ひなどし、歸りて叔父の店の手傳ひなどせしが、面白からず、何等の希望なければ、十二月に、その時父一家の引移りをりし富陽の地より暫く淀江に歸鄕しつつありし福田善一に伴はれて再び渡鮮す。

明治四十年（十六歲）

春、福田家に寄寓し居りし一婦人より、木下尙江氏の「良人の自白」を借覽し、大に心を動かさる。東京なる白石武志、三富朽葉、增田篤夫氏等と文通し、また諸國の諸友の原稿を集めて、回覽雜誌「低唱」を出しなどせしも、上京の念愈々止み難く、まづ大阪に出でんとし、再度出奔を企つ。初めは列車に投ぜんとして姉に發見せられて取押へられ、二度目は深夜重き行李を擔ひて徒歩釜山方面に向はんとし、朝鮮人の擔荷夫を叩き起さんとして果さず、泣く泣くまた重き行李を擔うて家に歸る。つひに、田中幸太郎氏のすすめにより、鳥取の補習に入りて小學校教師たらんとし、父母の諒解を得て、鄕里に向ひしが、下關に於て意を決し、敵は本能寺にありと叫んで、日本海に向ふべきところを瀨戶內海に向ひ大阪に上陸。中の島なる大阪郵便局前に舊知の菅井藤右衞門をたより行きしに、最近の火災にてその家跡方もなく、行先判明せず、やむなく一旅館に入り、數日中に旅費の大半を費ひ果し、その旅館の番頭の世話にて、附近の下宿屋に止宿し、朝鮮に手紙を送りて父に事情を明かし月々僅かの仕送りを受くることとなる。半月餘にして北福島なる一西洋菓子店の二階の二疊を間借りし、孤獨暗黒の生活を送り、小說詩歌の耽讀と、「文章世界」等の投書に日を送る。「文章世界」に於て每號の如く入選し、賞品として送られたる圖書切符にて盛んに帝國文庫を買込む。投書家仲間にて漸く交りを求め來る者多し。その頃富家の息な

る竹友藻風氏と相知り、厚き友情を注がれたるも、虐げられし境遇のため心ひがみて、藻風氏の厚意を曲解し、ひそかに侮辱なりと憤りて、同氏を攻撃せる小説を草して、「文庫」に投ぜしが、後年永く悔恨の種となる。當時鎭海灣要塞司令部の三輪曹長よりかなり多額の日給を以て再び傭ひ來れる書狀、父の手紙を附して囘送し來りしも、文學以外に自己の生るべき道なきを自覺し斷り狀を出す。當時最も田山花袋氏を崇拜し、書を送りて返事を受く。中に文學者として立つには最も語學の勉强の必要なるを切言しあり、後年語學に專心せしも、一はこの花袋氏の忠言に基く。

明治四十一年（十七歳）

六月、斷然上京と決心、健康に注意し始め、日々體操を行ふ。川上眉山の自殺並に國木田獨歩の訃を聞き深く感動す。

同月三十日、つひに大阪をいでて、七月一日東京に入る。淀橋町に、祖父の弟の養子にて、市役所の官吏たる生田毅を賴りゆき、いろいろと世話になる。その隣家に同じく當時「文章世界」の投書家中の尤、川浪夕水の兄の家ありて、夕水と相見たるも未だ親しむに至らず。上京の二三日後、前年より出京しゐたる舊友田中氏と日比谷公園にて會はんとしてかけ違ひ、空しく時をすごし、歸途擧動不審のため掏摸の嫌疑をうけて刑事にとらはる。これより愈々世の不正を憤る念烈しくなると共に、臆病なる性癖愈々甚しきを加ふ。田中氏の居所に近く住まんが爲め、櫻田本郷町に貸間を見出し、借りる約束せしも、手付けを置かざりし爲め荷物を搬び行けば既にその室は他人の占領するところとなれり。途方に暮れたるを見かねて、その荷物を託せし運送店の主人高橋秀吉、柏木なるその自宅に殆んど信ずべからざる安き費用にて寄宿せしむ。これより稍心落付き、家を出づる時持ち來りし筒袖のまま東京市内を縱橫に漫歩し、田山花袋氏を訪問せんとして果さず、のち自然主義に慊らず、木下尙江氏の「飢渴」等を愛讀し、凡ての虐げられたるもののために一生を捧げんことを心に誓ふに至る。間もなく田中氏歸鄕する事となり、

心細きこと限りなし。

十一月五日、本郷千駄木町なる生田長江氏の宅に寄宿す。佐藤春夫氏同宿す。

明治四十二年（十八歳）

生田長江氏に全作品を示して問ふところありたれども、顧みられず。長江氏の友人森田草平氏等と知り、やや文壇の裏面に通ずるを得たるにとどまる。——六月、淀江なる太田の叔父より歸鄕を求められ、當時健康を害せしと、文壇に幻滅したるとのために、それに應じて歸鄕し、淀江町の質店なる印南家に入つて養子となり、帳場に坐り、若旦那の生活を始めしも、半歳にしてその生活に堪へ難くなりて、東京に憧れ功名を慕ふ念抑へ難く、女主人なる大叔母（祖母の妹）の死にもかかはらず、また太田の叔父の痛罵にもかかはらず、——十一月、再度上京。長江氏の紹介によつて、文章學院の一員となり、漸く生活の資を得　麹町に下宿す。

明治四十三年（十九歳）

佐藤春夫、奥榮一氏等と相知り、新詩社の歌會に列し、始めて少年時代崇拜せし與謝野寛、晶子兩氏の謦咳に接す。

明治四十四年（二十歳）

小林愛雄氏を知り、詩才を認められて、その主宰せる「帝國文學」に於て殆んど連月作詩を掲げられ、大に優待せらる。また愛雄氏の紹介によつて「東亞の光」の寄稿家となり、年末謝禮として靑木堂の商品券を贈られ、ウヰスキイの大瓶を購ひ、佐藤春夫氏と共に一日にして飲み盡す。これ詩によつて得たる最初の報酬なり。この頃、戀愛のために惱む。王子なる釀造試驗所に來れる從兄と共に暫く王子瀧の川に住む。のち牛込横寺町に移る。

明治四十五年（二十一歳）

一月より獨逸語專修學校の夜學に通ひ、大正元年十二月まで獨逸語を學ぶ。その後は專ら自習に努む。その頃、中村武羅夫氏、加藤武雄氏等と漸く親し。

大正二年（二十二歳）

十一月三日、父の訃報に接せしも、歸鄕する能はず。

父は元治元年の生れなれば五十臺なりしならん。不運なる父の一生を弔つて、善良なるものは何故に不幸ならざるべからざるか、彼等はいかにして酬いらるべきかを疑ふの念抑へがたし。

大正三年（二十三歲）

二月、平塚雷鳥氏主宰の「靑鞜」同人長曾我部菊子（德島縣板野郡松島村の生れ、本名西崎花世）の「戀愛及び生活難について」の感想文をよみて感激し、享樂の爲めで無く、むしろ相互の苦痛によつて相結ばん事を述べたる長文の求婚狀を寄す。二三日後、詩人河井醉茗氏宅にて相知り理解するところあり。のち生田長江氏宅にて再會、なほ話をすすむ。

三月五日、河井醉茗氏を媒介として共同生活を約し、牛込鶴卷町に新居す。中村武羅夫氏、加藤武雄氏、水守龜之助氏等を招きて披露す。翌日、生田長江氏、阿部次郎氏を招く。次いで英語の勉强を始め、生活費は日本文章學院の添削よりこれを得。

四月より中村武羅夫氏に獨逸語を敎ふることとなり、每日一時間同氏來る。中村詳一氏と相知りて、ギッシングの「ヘンリ・ライクロフトの手記」等を敎へらる。

六月一日、同區辨天町十番地に轉居。

八月二日、同區榎町五十九番地に轉居す。

九月飜譯「はつ戀」を新潮社より刊行。

十月、植竹書院の依賴により、ドストイエフスキイの「罪と罰」の飜譯にかかる。二百枚前後執筆、餘は他の人の譯なるも、無斷にて生田春月一人の譯とされしため憤激、この世話を受けし先輩、生田長江氏の態度に不滿をもつ。後日つひに交通を絕つの遠因となる。

大正四年（二十四歲）

五月、飜譯、ゴオリキイの「マルヴ」「强き戀」を新潮社より刊行。

その頃母いわ朝鮮を引上げて上京し來り、同居せしが相互の意志疏通せざる爲め、家庭面白からず。加ふるに生活の困難愈々加はり、自己の才能に對する自信は失せ前途に何等の希望をも認められず、あらゆる事物

に幻滅し、藝術の意義を疑ひ、むしろ實業家たらんと夢想す。九月、牛込天神町五十三番地に移り、母は附近に別居す。

大正五年（二十五歳）

四月、「虚無思想の研究」を天弦堂より刊行。

この頃堺利彦、大杉榮、荒川義英氏等と相知り、利彦氏の賣文社の仕事二三を與へらる。屡々刑事の訪問を受く。されど社會主義の人々と深く接近するに至らずして畢れり。これつひに自己の到底唯物史觀に滿足する能はざるを悟りしと、自己の天分の實行家たるに適せず、結局詩人たり、藝術家たる外なきを痛感し、ラサアルたり、クロポトキンたるよりも、ハイネたりツルゲエネフたるべきが自己の本來の道たるを感じたるとに依る。されど、未だ藝術を信ずるの念出でず。人間の暗面を見るに堪へず。

五月、森田草平氏の門下生山岡田鶴子（假名）、夫人をたよりて、往來すること毎日の如くなる間に、田鶴子を愛するに至り、夫人、田鶴子と深刻なる三角關係を展開す。田鶴子をとほして石原健生氏と相知る。

十一月、長谷川時雨氏、三上於菟吉氏と相知る。

大正六年（二十六歳）

五月、前年秋頃よりはじまりし山岡田鶴子との戀愛のため家庭不和。十五日、夫人離婚の決心をもちて歸國せしが、七日にして歸京す。後戀愛を放擲し、專ら詩作に耽り、又廣く讀書に耽る。孜々として後年大成の準備を爲す。

五月、飜譯、サン・ピエエルの「ポオルとギルジニイ」「海の嘆き」を新潮社より刊行。

六月　飜譯、ツルゲエネフの「散文詩」を新潮社より刊行。

十二月、第一詩集「靈魂の秋」を新潮社より刊行。これ先輩中村武羅夫、加藤武雄兩氏の盡力によりしもの、意想外の歡迎をうけ、詩人として世に認めらるるに至り、漸く前途に光明を見出す。

大正七年（二十七歳）

六月、シヤトオブリアンの「アタラ」「ルネ」の飜譯、

「少女の誓」を新潮社より刊行。
三上於菟吉氏の婦人公論に書ける「戀愛地獄」にモデルとなりし事により交友疎遠となる。
九月、研究「新らしき詩の作り方」を新潮社より刊行。
「靈魂の秋」により宮島資夫氏と親しむ。十月、詩集「感傷の春」を新潮社より刊行。
この頃より詩人としての聲價ほぼ定まる。
十一月、飜譯「初戀」を新潮社より刊行。これ舊版「はつ戀」を改訂し、「ファウスト」「クララ・ミリッチ」の二篇を新たに附したるもの。

大正八年（二十八歳）

一月一日「勤勉と孤獨と純潔と」を標語として大に刻苦精進せんことを決心す。
二月、飜譯「ハイネ詩集」を新潮社より刊行。
三月、「日本近代名詩集」、四月「泰西名詩名譯集」を越山堂より刊行。
五月、飜譯「ゲエテ詩集」を新潮社より、七月、感想「片隅の幸福」、九月、飜譯プラトオンの「饗宴」を越山堂より刊行。
十二月、詩集「春月小曲集」を新潮社より刊行。

大正九年（二十九歳）

六月、飜譯「ハイネ全集第一巻」越山堂より、九月、飜譯「私の花輪」を新潮社より刊行。日常愛誦せる泰西諸詩人の作をあつめたるもの。
十二月、飜譯「ハイネ全集第二巻」越山堂より刊行。
これよりさき漸く一個の作家として新しき途を拓かんとの決心をかため、創作に着手せしが、それに先立ちて詩より散文に移る過程として、前年の感想集より一歩を進めて、更に過去の草稿に基き、小說及び小品の集を編んで、將來の散文の小さき序曲として世に問はんことを思ひ「漂泊と夢想」を編成す。今後は一に生れたるロマンティケルなる自己の個性の根ざすところに從ひて、寂しき獨自の道を進まんと期し、長篇小說「相寄る魂」の執筆にかかる。
十二月、小說小品集「漂泊と夢想」を新潮社より刊行す。

大正十年（三十歳）

「相寄る魂」を引續き執筆。朝夕オキシヘラーをかけ、溫濕布療法をなし健康増進に努む。

二月、飜譯「春の波」を新潮社より刊行。

三月三日、新居格氏はじめて來訪す。

四月、「日本民謠集」を越山堂より刊行。多年愛吟せし中より特に忘れ難き名篇をあつめたるもの。

この頃、野村愛正氏と交際す。

七月三十日、義弟西崎大樹の計畫せる靑年社の機關雜誌「文藝通報」を主宰し編輯す。

八月、「文藝通報」第一巻第一號刊行。此頃、近所に住む若杉鳥子氏と交際す。

八月二十五日、「文藝通報」の讀者神戸の井田笑子（假名）上京し來る。（後年愛人關係を結ぶ。）

九月、長篇小說「相寄る魂」第一巻を、十二月その第二巻を新潮社より刊行す。

大杉榮氏より「相寄る魂」中のモデル料として本をくれとの手紙來る。辻潤氏より感謝の來狀あり。同じくモデルとなりし佐藤春夫氏より、作中人物西尾宏の如く少女を弄びしこと曾てなしとの理由にて絶交狀來る。

大正十一年（三十一歳）

二月十八日夜、加藤武雄、福士幸次郎、池田孝次郎三氏とともに名古屋に於ける文藝講演會に出席す。園かね子（假名、後年第二の愛人となる）花環を捧ぐ。翌十九日岐阜にて講演す。土地の文學愛好者に導かれ、長良川に遊び、舟中にてその風光を賞す。

二月二十一日、鄕里米子に歸省、十三年ぶりなり。それより松江、美保關等を周遊、二十八日歸京す。

五月、詩集「慰めの國」を新潮社より刊行。この頃中村詳一氏と宗教を論ず。

七月、「女性」に長篇小說「火中の花」を執筆し、九月詩集「澄める靑空」を新潮社より刊行。

十月、詩集「麻の葉」を玄文社より刊行。

十一月十日、講演の爲め松本市に赴き、淺間温泉、上田等を經て十五日歸京す。

十二月、改版「虚無思想の研究」を三德社より刊行。
後絕版す。

大正十二年（三十二歳）

一月、飜譯「ロングフエロオ詩集」を越山堂より、二月、感想集「眞實に生きる惱み」を新潮社より、詩集「春の序曲」を交蘭社より刊行す。

三月、靑年社解散と共に「文藝通報」廢刊す。その後を承けて「詩と人生」と改題し再刊、詩と人生社を設く。同月飜譯「バーンス詩集」を聚英閣より、五月、飜譯「純愛詩集」を一元社より、六月、詩集「夢心地」を新潮社より刊行。

六月、有島武郎の輕井澤に於ける情死に就いて、深く心を打たれ、其心情を汲み、理解ある文を草す。

九月一日關東大震災。その夜「相寄る魂」第三卷の稿をかかへて夫人及び義弟とともに、江戸川公園に野宿す。

十二月十四日、「相寄る魂」全部完了の喜びをもちて、作中にとりあつかへる山陰名勝行脚を思ひたち出發。

三週間にして歸京す。

大正十三年（三十三歳）

一月、「相寄る魂」後編を、新潮社より、三月、感想集「智慧に輝く愛」を新詩壇社より刊行。

四月、名古屋、京都、金澤地方を周遊。五月の初めより小說「氣儘鳥」を臺灣日日新聞に執筆。

十月、「詩と人生」廢刊。この前後の勞苦甚し。十一月二日保養の目的にて、宮城縣遠刈田溫泉に赴き、五日間逗留。十二月「相寄る魂」の姉妹篇として「生死相伴」の腹案成る。

大正十四年（三十四歳）

五月、箱根底倉にあそぶ。

同月、詩集「自然の惠み」を新潮社より刊行。

同月、伊香保に「生死相伴」の稿を纒めんため赴き、「山家文學論」を「新潮」に寄す。「生死相伴」の稿、筆すすまずして苦しむ。

七月、飜譯「ハイネ全集第一卷詩の本」を春秋社より、九月、飜譯「ハイネ小曲集」を交蘭社より、九月、感

想集「靜夜詩話」を春秋社より刊行す。

大正十五年（三十五歳）

二月、感想集「旅ゆく一人」を新潮社より、翻譯「ハイネ全集第二卷新詩集」を春秋社より刊行す。

五月、德島縣板野郡松島村西崎謙太郎氏方に夫人とともに赴きて逗留。村居の淸閑をたのしむ。

六月、「詩魂禮讃」を新潮社より、七月、小說「第二の結婚」を交蘭社より刊行す。

十月九日、牛込區辨天町百三十三番地に轉居す。

十一月、感想集「草上靜思」を交蘭社より、翻譯「ハイネ全集第三卷物語詩」を春秋社より刊行。

昭和二年（三十六歳）

六月、全集しきりに出で、文壇人の業蹟の淸算期なるが如きに際し、顧みて自ら不滿とするところ多し。

八月、評論集「山家文學論集」を新潮社より刊行。

「國民新聞」紙上德富蘇峰氏の批評紹介あり。

九月二十六日、快々としてたのしまず、上州伊香保に赴き七日間逗留す。執筆意の如くならず、疲勞はげしく每日茫然と暮し、意氣沮喪甚し。

十二月、永年の友中村詳一氏と反宗教の思想より絕交狀態となる。

昭和三年（三十七歳）

一月十九日義弟西崎滿洲郎心臟痲痺にて逝く。宛も實子を失ひし如く悲嘆す。

三月――この頃より井田笑子との戀愛關係深まる。同五日――九日「悲劇的生命感」を報知新聞に寄す。十日笑子との新生活を求め神戸に赴く。

同月二十三日、夫人病む。義弟西崎粲史郎より、夫人に於いて絕緣の意ある旨の手紙を受け、二十五日歸京す。

四月二日此の頃より自殺の念つよく、密かに遺稿詩「時代人の詩」の執筆を續く。

五月六日、園かね子を訪ねて靜岡に赴く。十五日、笑子の手紙により神戸に赴く。

同月十七日、夫人より船橋町へ別居するとの手紙を受取り即日歸京す。

七月二十四日、芥川龍之介自殺の報に接し沈思感慨深きものあり「やられた！」との語をもらす。
八月五日、望月百合子女史をとほして石川三四郎氏を知る。以後交遊を深め、氏の「ディナミック」に詩を寄す。
九月、飜譯「世界文學全集・北歐三人集」を新潮社より刊行。この頃笑子夫の家を捨て女給となりしことを友人田中幸太郎氏より聞き煩悶す。
十月二日直腸炎を病み、病苦劇し。後日發見されし黒クロース表紙のノート中、夫人宛ての遺書は、此頃認めし形跡あり。
十月二十二日、母いわ病死す。春月死亡とあやまりつたへられ、微苦笑す。

昭和四年（三十八歳）

一月二十二日、武者小路實篤氏を訪問す。
三月十一日、園かね子よりの來書（同棲の相談）問題となり、夫人二日間下宿屋に別居す。
五月、詩集「抒情小曲集」を新潮社より、七月、評傳「メリケとヘルデルリン」を行人社より、九月、「生田春月集」（現代詩人全集第八巻）を新潮社より刊行。
十一月三十日、詩人野長瀬正夫氏の詩集出版祝賀會に臨む。若き時代の好意と關心との我にあるを知る。

昭和五年（三十九歳）

三月一日附近なる辨天町四十四番地に轉居し、世界文學全集に入るべきズーデルマンの「猫橋」の譯にとりかかる。
同月二十八日、夫人の友人、中本たか子女史來訪し一泊す。女史をたづねて二人の來客あり。（後日、田中清玄、佐野博兩氏とわかる）
四月十五日、舟木邦之助氏「相寄る魂」モデル事件のため約十年絶交の佐藤春夫氏との和解會談の勞をとりたき趣にて來訪、承知の旨答へる。（死して遂に會はず）
同月十八日、新宿中村屋に於ける「詩文學」の會に出席、記念撮影、東京にての最後のものとなる。
五月一日、室生犀星氏と共に銀座にあそぶ。
同月三日、石川三四郎氏來訪、宮島資夫氏出家せんとす

る噂を語り、共に同氏を訪問せしが既に出發後なりしため會見し得ず。
同月十三日、愛弟子松尾啓吉氏と會食す。これ東京にての別宴なり。
同月十四日、秋田雨雀、橋浦泰雄、尾崎翠の三氏とともに郷里山陰道の旅をひかへて、「猫橋」脱稿の疲勞甚しければ、夫人、伊豆修善寺温泉へ保養をすすむ。この日晴れ晴れしく出發せしが、修善寺温泉に行かず伊勢の菰野温泉に赴く。途中靜岡より來れる愛人團かね子と會す。翌十五日かね子と共に名古屋の某旅館に一泊、かね子の舊愛人武山三省氏(假名)をよび最後の記念撮影をなす。十六日靜岡に歸るかね子を送りて豐橋に赴きその夜下り列車にて大阪に赴く。
同月十七日、大阪市の郊外に井田笑子を訪ふ。相携へて市内に入り同夜ひとり堂ビルホテルへ投宿。翌日中の島花屋にかはる。
同月十九日、舊友田中幸太郎氏、愛人笑子と三人にて會談、のち、田中氏と今橋の鶴家にて晩餐、自動車にて築港に出で、別府行の菫丸に乘船、深夜播磨灘に投身す。

〔附記〕

五月二十五日牛込多聞院にて寫眞を飾り、告別式を行ふ。文藝家協會は沖野岩三郎氏によりて弔辭をおくり、詩人協會、隨筆評論家協會何れも代表者燒香、加藤武雄氏、石川三四郎氏、中村武羅夫氏、佐藤春夫氏、長谷川時雨女史、其の他の文士、詩人、女流作家、約二百五十名會葬す。同日第一書房より、靈前にささぐる書として、遺稿詩集「象徴の烏賊」刊行。
同月二十六日、第二期世界文學全集第一回の配本として、飜譯、ズーデルマンの「猫橋」を、六月十一日、感想集「生命の道」を新潮社より刊行。
六月十一日、田中幸太郎氏より死體發見の急電あり夫人急行す。翌十二日大阪市郊外岡町の同氏宅にて、米子より來りし實弟廣戸節三と會し、その夜同氏と三人にて三原丸に乘船し、死體漂着の地、小豆島坂手港に向ふ。その翌日三人は坂手村の假埋葬地に赴き發掘、蒼

に生る。幼少郷里を辭して日を放浪に重ね、後東都に出でて苦學力行、詩人として獨自の境地を拓き、獨逸文學者として亦一家をなす。一代の所作極めて多く、詩、小說、評論、隨筆、すべて收めて「春月全集」十卷にあり。いづれも眞情の告白惻々として人の心を動かさざるはなし。その人となり純眞にして誠實、あくまで人生の第一義に生きんとして、個人對社會の相剋に苦み、苦みのきはまるところ、遂に自ら死を選ぶに至り昭和五年五月十九日夜、月明の瀨戶內海を航行中、菫丸船上より身を投じて三十九年の生涯を了れり。遺族友人相はかり、遺骸をここに埋め、作詩の一節を友人加藤武雄揮毫し、刻みてこれが墓碑となす。

衣、頭髮、姿體、當人に相違なきことを確め、隣村、苗羽村眞光寺墓地に於て荼毘に附し、同夜三原丸により大阪を經て十四日歸京。

七月二十五日遺骨をまもりて夫人、弟博孝及び望月百合子氏、門人代表竹內瑛二郎氏山陰道に向ふ。麻生恒太郎氏名古屋まで見送り、同驛にて數人の哀悼を受く。翌日米子市着。同月二十七日法城寺に設けたる詩墓碑の下に、永年愛用の品數點とともに埋骨、會葬者約百名、故人の親友田中幸太郎氏、大阪より來りて墓前に弔辭をよむ。詩墓碑は故人の作詩の一節を加藤武雄氏の揮毫せるものを刻す。

天地の寂にしたしめば、
詩の心はなくもがな。
天地をかぎる我のなくば、
我も葉末の露の玉。

尙、裏面には田中幸太郎氏の碑文を刻む。

春月生田淸平は明治二十五年三月十二日米子道笑町

生田春月全集

第十卷

昭和六年八月廿五日印刷
昭和六年八月三十日發行

編輯者　生田花世
同　　　生田博孝
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込　長八〇五番・八〇六番・八〇七番・八〇八番・八〇九番
振替東京　一七四二番

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者　植木瀧藏

全十巻目次